

島根原子力発電所 2 号炉 審査資料	
資料番号	EP-015 改 76
提出年月日	令和 3 年 6 月 17 日

# 島根原子力発電所 2 号炉

## 重大事故等対策の有効性評価

令和 3 年 6 月

中国電力株式会社

## 目次

1. 重大事故等への対処に係る措置の有効性評価の基本的考え方
  - 1.1 概要
  - 1.2 評価対象の整理及び評価項目の設定
  - 1.3 評価に当たって考慮する事項
  - 1.4 有効性評価に使用する計算プログラム
  - 1.5 有効性評価における解析の条件設定の方針
  - 1.6 解析の実施
  - 1.7 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価方針
  - 1.8 必要な要員及び資源の評価方針付録1 事故シーケンスグループ及び重要事故シーケンス等の選定について  
付録2 原子炉格納容器の温度及び圧力に関する評価
2. 運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故
  - 2.1 高圧・低圧注水機能喪失
  - 2.2 高圧注水・減圧機能喪失
  - 2.3 全交流動力電源喪失
    - 2.3.1 全交流動力電源喪失（長期T B）
    - 2.3.2 全交流動力電源喪失（T B U）
    - 2.3.3 全交流動力電源喪失（T B D）
    - 2.3.4 全交流動力電源喪失（T B P）
  - 2.4 崩壊熱除去機能喪失
    - 2.4.1 取水機能が喪失した場合
    - 2.4.2 残留熱除去系が故障した場合
  - 2.5 原子炉停止機能喪失
  - 2.6 L O C A時注水機能喪失
  - 2.7 格納容器バイパス（インターフェイスシステムL O C A）
3. 運転中の原子炉における重大事故
  - 3.1 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）
    - 3.1.1 格納容器破損モードの特徴，格納容器破損防止対策
    - 3.1.2 残留熱代替除去系を使用する場合
    - 3.1.3 残留熱代替除去系を使用しない場合
  - 3.2 高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱
  - 3.3 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用
  - 3.4 水素燃焼
  - 3.5 溶融炉心・コンクリート相互作用
4. 燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故
  - 4.1 想定事故1
  - 4.2 想定事故2

5. 運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故
  - 5.1 崩壊熱除去機能喪失
  - 5.2 全交流動力電源喪失
  - 5.3 原子炉冷却材の流出
  - 5.4 反応度の誤投入
  
6. 必要な要員及び資源の評価
  - 6.1 必要な要員及び資源の評価条件
  - 6.2 重大事故等対策時に必要な要員の評価結果
  - 6.3 重大事故等対策時に必要な水源，燃料及び電源の評価結果

## 添付資料 目次

- (1. 重大事故等への対処に係る措置の有効性評価の基本的考え方)
  - 添付資料 1.2.1 定期事業者検査工程の概要
  - 添付資料 1.3.1 重大事故等対策の有効性評価における作業ごとの成立性確認結果について
  - 添付資料 1.4.1 有効性評価に使用している解析コード／評価手法の開発に係る当社の関与について
  - 添付資料 1.5.1 島根原子力発電所2号炉の重大事故等対策の有効性評価の一般データ
  - 添付資料 1.5.2 有効性評価におけるLOCA時の破断位置及び口径設定の考え方について
  - 添付資料 1.5.3 有効性評価に用いる崩壊熱について
  - 添付資料 1.5.4 燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故（想定事故1及び2）の有効性評価における共通評価条件について
  - 添付資料 1.7.1 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価フロー
  
- (2. 運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故)
  - (2.1 高圧・低圧注水機能喪失)
    - 添付資料 2.1.1 安定状態について（高圧・低圧注水機能喪失）
    - 添付資料 2.1.2 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（高圧・低圧注水機能喪失）
    - 添付資料 2.1.3 減圧・注水操作が遅れる場合の影響について（高圧・低圧注水機能喪失）
    - 添付資料 2.1.4 7日間における水源の対応について（高圧・低圧注水機能喪失）
    - 添付資料 2.1.5 7日間における燃料の対応について（高圧・低圧注水機能喪失）
    - 添付資料 2.1.6 常設代替交流電源設備の負荷（高圧・低圧注水機能喪失）
  
  - (2.2 高圧注水・減圧機能喪失)
    - 添付資料 2.2.1 残留熱除去系（原子炉停止時冷却モード）の運転実績について
    - 添付資料 2.2.2 安定状態について（高圧注水・減圧機能喪失）
    - 添付資料 2.2.3 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（高圧注水・減圧機能喪失）
    - 添付資料 2.2.4 7日間における燃料の対応について（高圧注水・減圧機能喪失）
  
  - (2.3 全交流動力電源喪失)
    - (2.3.1 全交流動力電源喪失（長期TB）)
      - 添付資料 2.3.1.1 蓄電池による給電時間評価結果について
      - 添付資料 2.3.1.2 全交流動力電源喪失（長期TB）時における原子炉隔離時冷却系の8時間継続運転が可能であることの妥当性について
      - 添付資料 2.3.1.3 逃がし安全弁に係る解析と実態の違い及びその影響について
      - 添付資料 2.3.1.4 安定状態について（全交流動力電源喪失（長期TB））
      - 添付資料 2.3.1.5 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（全交流動力電源喪失（長期TB））
      - 添付資料 2.3.1.6 7日間における水源の対応について（全交流動力電源喪失（長期TB））

添付資料 2.3.1.7 7日間における燃料の対応について(全交流動力電源喪失(長期TB))

添付資料 2.3.1.8 常設代替交流電源設備の負荷(全交流動力電源喪失(長期TB))

(2.3.2 全交流動力電源喪失(TBU))

添付資料 2.3.2.1 全交流動力電源喪失(TBU)時において高圧原子炉代替注水系の8時間運転継続に期待することの妥当性について

添付資料 2.3.2.2 安定状態について(全交流動力電源喪失(TBU))

添付資料 2.3.2.3 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について(全交流動力電源喪失(TBU))

添付資料 2.3.2.4 注水開始操作の時間余裕について

(2.3.4 全交流動力電源喪失(TBP))

添付資料 2.3.4.1 安定状態について(全交流動力電源喪失(TBP))

添付資料 2.3.4.2 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について(全交流動力電源喪失(TBP))

添付資料 2.3.4.3 減圧・注水開始操作の時間余裕について(全交流動力電源喪失(TBP))

添付資料 2.3.4.4 7日間における水源の対応について(全交流動力電源喪失(TBP))

添付資料 2.3.4.5 7日間における燃料の対応について(全交流動力電源喪失(TBP))

添付資料 2.3.4.6 常設代替交流電源設備の負荷(全交流動力電源喪失(TBP))

(2.4 崩壊熱除去機能喪失)

(2.4.1 取水機能が喪失した場合)

添付資料 2.4.1.1 安定状態について(崩壊熱除去機能喪失(取水機能が喪失した場合))

添付資料 2.4.1.2 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について(崩壊熱除去機能喪失(取水機能が喪失した場合))

添付資料 2.4.1.3 7日間における燃料の対応について(崩壊熱除去機能喪失(取水機能が喪失した場合))

添付資料 2.4.1.4 常設代替交流電源設備の負荷(崩壊熱除去機能喪失(取水機能が喪失した場合))

(2.4.2 残留熱除去系が故障した場合)

添付資料 2.4.2.1 安定状態について(崩壊熱除去機能喪失(残留熱除去系が故障した場合))

添付資料 2.4.2.2 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について(崩壊熱除去機能喪失(残留熱除去系が故障した場合))

添付資料 2.4.2.3 7日間における水源の対応について(崩壊熱除去機能喪失(残留熱除去系が故障した場合))

添付資料 2.4.2.4 7日間における燃料の対応について(崩壊熱除去機能喪失(残留熱除去系が故障した場合))

添付資料 2.4.2.5 常設代替交流電源設備の負荷(崩壊熱除去機能喪失(残留熱除去系が故障した場合))

## (2.5 原子炉停止機能喪失)

- 添付資料 2.5.1 評価対象の炉心を平衡炉心サイクル末期とすることの妥当性
- 添付資料 2.5.2 Pu 同位体組成による動的ボイド係数, 動的ドップラ係数への影響
- 添付資料 2.5.3 自動減圧系等の自動起動阻止操作の考慮について
- 添付資料 2.5.4 安定状態について(原子炉停止機能喪失)
- 添付資料 2.5.5 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について(原子炉停止機能喪失)
- 添付資料 2.5.6 リウエットを考慮しない場合の燃料被覆管温度への影響
- 添付資料 2.5.7 外部電源の有無による評価結果への影響
- 添付資料 2.5.8 初期炉心流量の相違による評価結果への影響
- 添付資料 2.5.9 残留熱除去系の起動操作遅れの影響について
- 添付資料 2.5.10 ほう酸水注入系を手動起動としていることについての整理
- 添付資料 2.5.11 原子炉注水に使用する水源とその水温の影響
- 添付資料 2.5.12 高圧炉心スプレイ系及び原子炉隔離時冷却系の運転可能性に関する水源の水温の影響
- 添付資料 2.5.13 7日間における燃料の対応について(原子炉停止機能喪失)

## (2.6 LOCA時注水機能喪失)

- 添付資料 2.6.1 「LOCA時注水機能喪失」の事故条件の設定について
- 添付資料 2.6.2 敷地境界での実効線量評価について
  
- 添付資料 2.6.3 安定状態について(LOCA時注水機能喪失)
- 添付資料 2.6.4 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について(LOCA時注水機能喪失)
- 添付資料 2.6.5 減圧・注水操作の時間余裕について
- 添付資料 2.6.6 7日間における水源の対応について(LOCA時注水機能喪失)
- 添付資料 2.6.7 7日間における燃料の対応について(LOCA時注水機能喪失)
- 添付資料 2.6.8 常設代替交流電源設備の負荷 (LOCA時注水機能喪失)

## (2.7 格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA))

- 添付資料 2.7.1 インターフェイスシステムLOCA発生時の対応操作について
- 添付資料 2.7.2 インターフェイスシステムLOCA発生時の破断面積及び現場環境等について
- 添付資料 2.7.3 安定状態について (格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA))
- 添付資料 2.7.4 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について (格納容器バイパス(インターフェイスシステムLOCA))
- 添付資料 2.7.5 7日間における燃料の対応について (格納容器バイパス(インターフェイスシステムLOCA))

## (3. 運転中の原子炉における重大事故)

### (3.1 雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損))

- 添付資料 3.1.2.1 雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損) における炉心の損傷状態及び損傷炉心の位置について
- 添付資料 3.1.2.2 安定状態について (残留熱代替除去系を使用する場合)
- 添付資料 3.1.2.3 原子炉格納容器内に存在する亜鉛及びアルミニウムの反応により発生する水素ガスの影響について

- 添付資料 3.1.2.4 原子炉建物から大気中への放射性物質の漏えい量について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））
- 添付資料 3.1.2.5 原子炉格納容器漏えい率の設定について
- 添付資料 3.1.2.6 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損（残留熱代替除去系を使用する場合）））
- 添付資料 3.1.2.7 大破断 L O C A を上回る規模の L O C A に対する格納容器破損防止対策の有効性について
- 添付資料 3.1.2.8 7 日間における水源の対応について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））（残留熱代替除去系を使用する場合）
- 添付資料 3.1.2.9 7 日間における燃料の対応について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））（残留熱代替除去系を使用する場合）
- 添付資料 3.1.2.10 常設代替交流電源設備の負荷（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））（残留熱代替除去系を使用する場合）
- 添付資料 3.1.3.1 炉心損傷の判断基準及び炉心損傷判断前後の運転操作の差異について
- 添付資料 3.1.3.2 非凝縮性ガスの影響について
- 添付資料 3.1.3.3 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）時において残留熱代替除去系を使用しない場合における格納容器フィルタベント系からの C s - 137 放出量評価について
- 添付資料 3.1.3.4 原子炉建物から大気中への放射性物質の漏えい量について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））
- 添付資料 3.1.3.5 安定状態について（残留熱代替除去系を使用しない場合）
- 添付資料 3.1.3.6 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損（残留熱代替除去系を使用しない場合）））
- 添付資料 3.1.3.7 注水操作が遅れる場合の影響について
- 添付資料 3.1.3.8 格納容器フィルタベント系による原子炉格納容器除熱操作開始を限界圧力接近時とした場合の影響
- 添付資料 3.1.3.9 7 日間における水源の対応について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））（残留熱代替除去系を使用しない場合）
- 添付資料 3.1.3.10 7 日間における燃料の対応について（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））（残留熱代替除去系を使用しない場合）
- 添付資料 3.1.3.11 常設代替交流電源設備の負荷（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））（残留熱代替除去系を使用しない場合）

### （3.2 高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱）

- 添付資料 3.2.1 高温環境下での逃がし安全弁の開保持機能維持について
- 添付資料 3.2.2 格納容器破損モード「D C H」, 「F C I」及び「M C C I」の評価事故シーケンスの位置づけ
- 添付資料 3.2.3 原子炉建物から大気中への放射性物質の漏えい量について（高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱）

- 添付資料 3.2.4 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱）
- 添付資料 3.2.5 7日間における水源の対応について（高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱）
- 添付資料 3.2.6 7日間における燃料の対応について（高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱）
- 添付資料 3.2.7 常設代替交流電源設備の負荷（高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱）

### （3.3 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用）

- 添付資料 3.3.1 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用に関する知見の整理
- 添付資料 3.3.2 水蒸気爆発の発生を仮定した場合の原子炉格納容器の健全性への影響評価
- 添付資料 3.3.3 原子炉格納容器下部への水張り実施の適切性
- 添付資料 3.3.4 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用）
- 添付資料 3.3.5 プラント損傷状態をLOCAとした場合の圧カスパイクへの影響

### （3.4 水素燃焼）

- 添付資料 3.4.1 G値を設計基準事故ベースとした場合の評価結果への影響
- 添付資料 3.4.2 水の放射線分解の評価について
- 添付資料 3.4.3 安定状態について（水素燃焼）
- 添付資料 3.4.4 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（水素燃焼）
- 添付資料 3.4.5 原子炉注水開始時間の評価結果への影響

### （3.5 溶融炉心・コンクリート相互作用）

- 添付資料 3.5.1 安定状態について（溶融炉心・コンクリート相互作用）
- 添付資料 3.5.2 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（溶融炉心・コンクリート相互作用）
- 添付資料 3.5.3 溶融炉心の崩壊熱及び溶融炉心からプール水への熱流束を保守的に考慮する場合、原子炉格納容器下部床面での溶融炉心の拡がりを抑制した場合のコンクリート侵食量及び溶融炉心・コンクリート相互作用によって発生する非凝縮性ガスの影響評価



#### (4. 燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故)

##### (4.1 想定事故1)

- 添付資料 4.1.1 燃料プールの水位低下と遮蔽水位に関する評価について
- 添付資料 4.1.2 「水遮蔽厚に対する貯蔵中の燃料等からの線量率」の評価について
- 添付資料 4.1.3 安定状態について (想定事故1)
- 添付資料 4.1.4 燃料プール水沸騰・喪失時の未臨界性評価
- 添付資料 4.1.5 評価条件の不確かさの影響評価について(想定事故1)
- 添付資料 4.1.6 7日間における水源の対応について(想定事故1)
- 添付資料 4.1.7 7日間における燃料の対応について(想定事故1)

##### (4.2 想定事故2)

- 添付資料 4.2.1 燃料プールの水位低下と遮蔽水位に関する評価について
- 添付資料 4.2.2 燃料プールのサイフォンブレイク配管について
- 添付資料 4.2.3 安定状態について (想定事故2)
- 添付資料 4.2.4 評価条件の不確かさの影響評価について(想定事故2)
- 添付資料 4.2.5 7日間における水源の対応について(想定事故2)
- 添付資料 4.2.6 7日間における燃料の対応について(想定事故2)

#### (5. 運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故)

##### (5.1 崩壊熱除去機能喪失)

- 添付資料 5.1.1 運転停止中の崩壊熱除去機能喪失及び全交流動力電源喪失における燃料棒有効長頂部又は放射線の遮蔽が維持される目安の水位到達までの時間余裕と必要な注水量の計算方法について
- 添付資料 5.1.2 重要事故シーケンスの選定結果を踏まえた有効性評価の条件設定
- 添付資料 5.1.3 崩壊熱除去機能喪失及び全交流動力電源喪失評価における崩壊熱設定の考え方
- 添付資料 5.1.4 安定状態について (運転停止中 (崩壊熱除去機能喪失))
- 添付資料 5.1.5 原子炉停止中における崩壊熱除去機能喪失及び全交流動力電源喪失時の原子炉格納容器の影響について
- 添付資料 5.1.6 運転停止中 崩壊熱除去機能喪失及び全交流動力電源喪失時における放射線の遮蔽維持について
- 添付資料 5.1.7 評価条件の不確かさの影響評価について(運転停止中(崩壊熱除去機能喪失))
- 添付資料 5.1.8 7日間における燃料の対応について(運転停止中(崩壊熱除去機能喪失))

##### (5.2 全交流動力電源喪失)

- 添付資料 5.2.1 安定状態について (運転停止中 (全交流動力電源喪失))
- 添付資料 5.2.2 評価条件の不確かさの影響評価について(運転停止中(全交流動力電源喪失))
- 添付資料 5.2.3 7日間における水源の対応について(運転停止中(全交流動力電源喪失))
- 添付資料 5.2.4 7日間における燃料の対応について(運転停止中(全交流動力電源喪失))
- 添付資料 5.2.5 常設代替交流電源設備の負荷(運転停止中(全交流動力電源喪失))

### (5.3 原子炉冷却材の流出)

- 添付資料 5.3.1 原子炉冷却材の流出における運転停止中の線量率評価について
- 添付資料 5.3.2 原子炉冷却材流出評価におけるPOS選定の考え方
- 添付資料 5.3.3 安定状態について（運転停止中（原子炉冷却材の流出））
- 添付資料 5.3.4 評価条件の不確かさの影響評価について（運転停止中（原子炉冷却材の流出））
- 添付資料 5.3.5 7日間における燃料の対応について（運転停止中（原子炉冷却材の流出））

### (5.4 反応度の誤投入)

- 添付資料 5.4.1 反応度の誤投入事象の代表性について
- 添付資料 5.4.2 安定状態について（運転停止中（反応度の誤投入））
- 添付資料 5.4.3 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価について（運転停止中（反応度の誤投入））
- 添付資料 5.4.4 反応度誤投入における炉心の状態等の不確かさについて

### (6. 必要な要員及び資源の評価)

- 添付資料 6.1.1 他号炉との同時被災時における必要な要員及び資源について
- 添付資料 6.2.1 重大事故等対策の要員の確保及び所要時間について
- 添付資料 6.2.2 重要事故シーケンス等以外の事故シーケンスの要員の評価について
- 添付資料 6.3.1 水源，燃料，電源負荷評価結果について

## 1. 重大事故等への対処に係る措置の有効性評価の基本的考え方

### 1.1 概要

本原子炉施設において、「運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」、「運転中の原子炉における重大事故」、「燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故」及び「運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」（以下「重大事故等」という。）が発生した場合にも、炉心や燃料の著しい損傷の防止あるいは原子炉格納容器の破損及び敷地外への放射性物質の異常な水準の放出の防止に講じることとしている措置（以下「重大事故等対策」という。）が有効であることを示すため、以下のとおり、評価対象とする事故シーケンスを整理し、対応する評価項目を設定したうえで、計算プログラムを用いた解析等の結果を踏まえて、設備、手順及び体制の有効性を評価する。

#### 1.1.1 評価対象の整理及び評価項目の設定

本原子炉施設を対象とした確率論的リスク評価（以下「PRA」という。）の知見等を踏まえ、重大事故等に対処するための措置が基本的に同じである事故シーケンスのグループ化を行い、措置の有効性を確認するための代表的な事故シーケンス（以下「重要事故シーケンス等」という。）を選定して、対応する措置の有効性評価を行う。

有効性評価に際しては、事故の様相やプラントの特徴を踏まえて有効性を確認するための評価項目を設ける。

具体的には「1.2 評価対象の整理及び評価項目の設定」による。

#### 1.1.2 評価に当たって考慮する事項

有効性評価は、「実用発電用原子炉に係る発電用原子炉設置者の重大事故の発生及び拡大の防止に必要な措置を実施するために必要な技術的能力に係る審査基準」に係る適合性状況説明資料（以下「技術的能力に係る審査基準への適合状況説明資料」という。）で講じることとしている措置のうち、「重大事故等対処設備について」で重大事故等対処設備としている設備を用いたものを対象とするが、手順及び体制としてはその他の措置との関係を含めて必要となる水源、燃料及び電源の資源や要員を整理したうえで、安全機能の喪失に対する仮定、外部電源に対する仮定、単一故障に対する仮定、運転員等（運転員と緊急時対策要員）の操作時間に対する仮定等を考慮して、原則として事故が収束し、「運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」については原子炉が安定停止状態に、「運転中の原子炉における重大事故」については原子炉及び原子炉格納容器が安定状態に、「燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故」については燃料プールの水位が回復し、水位及び温度が安定した状態に、「運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」については原子炉が安定状態（以下「原子炉等が安定停止状態等」という。）に導かれる時点までを対象とする。

具体的には「1.3 評価に当たって考慮する事項」による。

#### 1.1.3 有効性評価に使用する計算プログラム

有効性評価において使用する計算プログラム（以下「解析コード」という。）は、事故シーケンスの特徴に応じて、評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象や運転員等操作に有意な影響を与える現象（以下「重要現象」という。）がモデル化されており、実験等をもとに妥当性が確認され、適用範囲を含めてその不確かさが把握されているものを選定して使用する。

具体的には「1.4 有効性評価に使用する計算プログラム」に示す解析コードを使用する。

#### 1.1.4 有効性評価における解析の条件設定

有効性評価における解析の条件設定については、「1.3 評価に当たって考慮する事項」による仮定等を考慮するとともに、事象進展の不確かさを考慮して、設計値等の現実的な条件を基本としつつ、原則、有効性を確認するための評価項目となるパラメータに対して余裕が小さくなるような設定とする。また、解析コードや解析条件の不確かさが大きい場合には、影響評価において感度解析等を行うことを前提に設定する。

具体的には「1.5 有効性評価における解析の条件設定の方針」による。

#### 1.1.5 解析の実施

有効性評価における解析は、評価項目となるパラメータの推移のほか、事象進展の状況を把握するうえで必要なパラメータの推移について解析を実施し、その結果を明示する。

なお、事象進展の特徴や厳しさ等を踏まえ、解析以外の方法で原子炉等が安定停止状態等に導かれ、評価項目を満足することが合理的に説明できる場合はこの限りではない。

#### 1.1.6 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価

解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価の範囲として、運転員等操作時間に与える影響、評価項目となるパラメータに与える影響及び操作時間余裕を確認し、それらの影響を踏まえても、措置の実現性に問題なく、評価項目を満足することを感度解析等により確認する。

具体的には「1.7 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価方針」による。

#### 1.1.7 必要な要員及び資源の評価

必要な要員及び資源については、発電所内の原子炉施設で重大事故等が同時期に発生することを想定して整備することから、それぞれの観点から最も厳しい重

大事故等を考慮しても、少なくとも外部支援がないものとして所内単独での措置を7日間継続して実施できることを確認する。

具体的には「1.8 必要な要員及び資源の評価方針」による。

## 1.2 評価対象の整理及び評価項目の設定

重大事故等対策の有効性を確認するため、重大事故等のそれぞれについて、以下のとおり、事故シーケンスのグループ化、重要事故シーケンス等の選定及び有効性を確認するための評価項目の設定を行う。

炉心損傷防止対策及び運転停止中の原子炉における燃料損傷防止対策の有効性を確認する事故シーケンスグループ並びに格納容器破損防止対策の有効性を確認する格納容器破損モード（以下「事故シーケンスグループ等」という。）の選定に当たっては、アクシデントマネジメント策や緊急安全対策等を考慮しない仮想的なプラント状態を評価対象として実施したPRAの結果を活用する。

「運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」に対しては、原子炉施設内部の原因によって引き起こされる事象（以下「内部事象」という。）を対象とする内部事象運転時レベル1 PRAに加えて、PRAが適用可能な外部事象として地震及び津波それぞれのレベル1 PRAを活用する。「運転中の原子炉における重大事故」に対しては、内部事象運転時レベル1.5 PRAを活用する。

「運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」に対しては、内部事象停止時レベル1 PRAを活用する。

PRAを実施した結果、本原子炉施設の運転中の炉心損傷頻度は $10^{-5}$ /炉年程度、格納容器破損頻度は $10^{-6}$ /炉年程度、運転停止中の燃料損傷頻度は $10^{-6}$ /定期事業者検査程度である。

また、現状PRAが適用できない地震及び津波以外の外部事象については、当該外部事象により誘発される起因事象について分析を実施した結果、いずれも内部事象レベル1 PRA、地震レベル1 PRA又は津波レベル1 PRAのいずれかで想定する起因事象に包絡されること及び炉心損傷後の原子炉格納容器内の事象進展は内部事象と同等であると考えられることから、新たに追加すべき事故シーケンスグループ等はない。

なお、有効性評価における重要事故シーケンスと「実用発電用原子炉に係る発電用原子炉設置者の重大事故の発生及び拡大の防止に必要な措置を実施するために必要な技術的能力に係る審査基準」（以下「技術的能力審査基準」という。）、「実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則」（以下「設置許可基準規則」という。）及び「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則」（以下「技術基準規則」という。）との関連を第1.2-1表に示す。

ここで記載している事故シーケンスグループ等の選定の考え方については、「付録1 事故シーケンスグループ及び重要事故シーケンス等の選定について」に示す。

## 1.2.1 運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故

### 1.2.1.1 事故シーケンスのグループ化と重要事故シーケンスの選定

「運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」については、運転時の異常な過渡変化及び設計基準事故に対し、原子炉施設の安全性を損なうことがないように設計することが求められる構築物、系統及び機器がその安全機能を喪失した場合であって、炉心の著しい損傷に至る可能性があるとして想定する事故シーケンスを、本原子炉施設を対象としたPRAの結果を踏まえてグループ化し、それぞれに対して重要事故シーケンスを選定し、評価を行う。

#### (1) 事故シーケンスの抽出

内部事象運転時レベル1 PRAにおいては、各起因事象の発生から炉心損傷に至ることを防止するための緩和手段等の成功及び失敗の組合せをイベントツリーを用いて網羅的に分析し、炉心損傷に至る事故シーケンスを抽出する。第1.2-1図に内部事象運転時レベル1 PRAにおけるイベントツリーを示す。

地震レベル1 PRA及び津波レベル1 PRAにおいては、内部事象と同様にイベントツリーを用いた分析を実施し、炉心損傷に至る事故シーケンスを抽出する。第1.2-2図に地震レベル1 PRAの階層イベントツリーを、第1.2-3図に地震レベル1 PRAのイベントツリーを、第1.2-4図に津波レベル1 PRAの階層イベントツリーを示す。

地震や津波の場合、各安全機能の喪失に至るプロセスは異なるものの、喪失する安全機能が内部事象と同じであれば、炉心損傷を防止するための緩和手段も同じであるため、事故シーケンスは内部事象と同じである。また、地震レベル1 PRA及び津波レベル1 PRAでは、複数の安全機能が地震又は津波によって同時に損傷する事象や、建物・構築物等の損傷の発生により直接的に炉心損傷に至る事故シーケンスも取り扱う。

具体的には、地震レベル1 PRAでは、建物の損傷や原子炉压力容器等の大型静的機器の損傷、計装・制御系喪失によって原子炉施設が監視及び制御不能となる事象等、緩和設備への影響範囲や影響程度等を明確にすることが困難な事象を抽出しており、これらは直接、炉心損傷に至る事象として取り扱う。

津波レベル1 PRAでは、浸水高さに応じ、当該高さに設置されている安全機能が機能喪失する評価モデルとしており、建物内の計装・制御系喪失等の広範な緩和設備が機能を喪失する事象は、緩和設備に期待できない直接炉心損傷に至る事象として取り扱う。

なお、原子炉冷却材喪失（以下「LOCA」という。）では、原子炉冷却材圧力バウンダリからの原子炉冷却材の流出規模によりプラント応答、成功基準等が異なるため、流出の規模に応じて以下のとおり分類する。

a. 大破断LOCA

原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する配管の両端破断のように、事象初期に急激な原子炉減圧を伴うもので、自動減圧系の作動なしに低圧注水系によって冷却が可能となる規模のLOCAである。

b. 中破断LOCA

大破断LOCAと比較して破断口径が小さく、原子炉減圧が緩やかなもので、低圧注水系による炉心冷却には自動減圧系の作動が必要となる規模のLOCAである。また、流出量は原子炉隔離時冷却系の容量以上であり、原子炉隔離時冷却系のみでの水位確保は不可能である。

c. 小破断LOCA

中破断LOCAよりも破断口径が小さなもので、原子炉隔離時冷却系のみでの水位確保が可能な規模のLOCAである。また、原子炉減圧が緩やかなため、低圧注水系による炉心冷却には、自動減圧系の作動が必要である。

d. Excessive LOCA

大破断LOCAを上回る規模のLOCAであり、非常用炉心冷却系（以下「ECCS」という。）の注水の成否にかかわらず炉心損傷に至る。

(2) 事故シーケンスのグループ化

PRAの知見を活用して抽出した事故シーケンスを、重大事故等に対処するための措置が基本的に同じとなるよう、炉心損傷に至る主要因の観点から以下の事故シーケンスグループに分類する。なお、PRAではLOCA時の注水機能喪失シーケンスを、破断口径の大きさに応じて大破断LOCA、中破断LOCA及び小破断LOCAに詳細化して抽出しているが、いずれもLOCA時の注水機能喪失を伴う事故シーケンスグループであるため、LOCA時注水機能喪失に該当するものとして整理する。

a. 高圧・低圧注水機能喪失

b. 高圧注水・減圧機能喪失

c. 全交流動力電源喪失

d. 崩壊熱除去機能喪失

e. 原子炉停止機能喪失

f. LOCA時注水機能喪失

g. 格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）

また、地震及び津波特有の事象で、以下に示す9つの事故シーケンスは、事象に応じた詳細な損傷の程度や影響を評価することが困難なことから、上

記の事故シーケンスグループと直接的に対応せず、炉心損傷に直結するものとして抽出している。

- ・ Excessive LOCA
- ・ 計装・制御系喪失
- ・ 格納容器バイパス（地震による配管の格納容器外での破損と隔離弁の閉失敗の重畳）
- ・ 原子炉格納容器損傷
- ・ 原子炉圧力容器損傷
- ・ 原子炉建物損傷
- ・ 制御室建物損傷
- ・ 廃棄物処理建物損傷
- ・ 直接炉心損傷に至る事象

これらの各事故シーケンスによる炉心損傷頻度には、必ずしも炉心損傷に直結する程の損傷に至らない場合も含んでおり、実際には地震又は津波の程度に応じ、機能を維持した設計基準事故対処設備等がある場合、これらを用いた対応に期待することにより、炉心損傷を防止できる可能性もあると考えられる。このため、過度な保守性を排除することで各事故シーケンスの炉心損傷頻度は、現在の値よりも更に小さくなる。また、地震又は津波後に機能を維持した設計基準事故対処設備等に期待したうえで、それらのランダム故障により炉心損傷に至る場合の事故シーケンスは、内部事象運転時レベル1 PRAにより抽出された上記の a. から g. の事故シーケンスグループに包絡されるものと考えられること及びそれらに該当しない深刻な損傷の場合には可搬型のポンプ、電源、放水設備等を駆使した大規模損壊対策による影響緩和を図ることから、これらの各事故シーケンスを有意な頻度又は影響をもたらす事故シーケンスグループとして追加する必要はない。

### (3) 重要事故シーケンスの選定

事故シーケンスグループごとに、有効性評価の対象とする重要事故シーケンスを選定する。同じ事故シーケンスグループに複数の事故シーケンスが含まれる場合には、共通原因故障又は系統間の機能の依存性、炉心損傷防止対策の実施に対する時間余裕、炉心損傷防止に必要な設備容量及び事故シーケンスグループ内の代表性の観点で、より厳しい事故シーケンスを選定する。重要事故シーケンスの選定結果は以下のとおりである。

#### a. 高圧・低圧注水機能喪失

本事故シーケンスグループは、運転時の異常な過渡変化又は設計基準事故（LOCAを除く）の発生後、高圧注水機能が喪失し、原子炉減圧には成功するが、低圧注水機能が喪失し、炉心損傷に至るものである。



本事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスのうち、起因事象発生後の事象進展が早いと考えられる過渡事象（原子炉水位低下の観点で厳しい給水流量の全喪失を選定）を起因とし、逃がし安全弁の再閉失敗を含まない、「過渡事象＋高圧炉心冷却失敗＋低圧炉心冷却失敗」を重要事故シーケンスとして選定する。逃がし安全弁の再閉失敗を含まない事故シーケンスとした理由は、炉心損傷防止のために重大事故等対処設備による低圧注水を実施する状況を想定した場合、事象発生時点から逃がし安全弁の再閉失敗によって原子炉減圧されている場合の方が、原子炉減圧に必要な逃がし安全弁の容量が少なく、低圧注水が可能となるまでの時間が短縮でき、対応が容易になると考えられるためである。

b. 高圧注水・減圧機能喪失

本事故シーケンスグループは、運転時の異常な過渡変化又は設計基準事故（LOCAを除く）の発生後、高圧注水機能が喪失し、かつ、原子炉減圧機能が喪失し、炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスのうち、起因事象発生後の事象進展が早いと考えられる過渡事象（原子炉水位低下の観点で厳しい給水流量の全喪失を選定）を起因とし、代表性の観点からも炉心損傷頻度が最も高い、「過渡事象＋高圧炉心冷却失敗＋原子炉減圧失敗」を重要事故シーケンスとして選定する。

c. 全交流動力電源喪失

本事故シーケンスグループからは、機能喪失の状況が異なる4つの事故シーケンスが抽出されたため、これらを以下の4つの詳細化した事故シーケンスグループとして分類し、重要事故シーケンスとして選定する。

(a) 全交流動力電源喪失（長期TB）

本事故シーケンスグループは、全交流動力電源喪失後、原子炉隔離時冷却系により炉心冷却を継続するが、蓄電池の直流電源供給能力が枯渇して、原子炉隔離時冷却系が機能喪失し炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに係る事故シーケンスは「外部電源喪失＋交流電源（DG-A, B）失敗＋高圧炉心冷却（HPCS）失敗」のみであることから、これを重要事故シーケンスとして選定する。

(b) 全交流動力電源喪失（TBU）

本事故シーケンスグループは、全交流動力電源喪失と同時に原子炉隔離時冷却系が機能喪失し炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに係る事故シーケンスは「外部電源喪失＋交流電源（DG-A, B）失敗＋高圧炉心冷却失敗」のみであることから、これを重要事故シーケンスとして選定する。

(c) 全交流動力電源喪失 (TBD)

本事故シーケンスグループは、全交流動力電源とすべての直流電源が喪失し炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに係る事故シーケンスは「外部電源喪失＋直流電源（区分1，2）失敗＋高圧炉心冷却（HPCS）失敗」のみであることから、これを重要事故シーケンスとして選定する。

なお、すべての直流電源喪失により非常用ディーゼル発電機を起動できなくなることから、「外部電源喪失＋直流電源喪失」により、全交流動力電源喪失となる。

(d) 全交流動力電源喪失 (TBP)

本事故シーケンスグループは、全交流動力電源喪失と同時に逃がし安全弁1個が開状態のまま固着することにより、原子炉隔離時冷却系も機能喪失し炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに係る事故シーケンスは「外部電源喪失＋交流電源（DG-A，B）失敗＋圧力バウンダリ健全性（SRV再閉）失敗＋高圧炉心冷却（HPCS）失敗」のみであることから、これを重要事故シーケンスとして選定する。

d. 崩壊熱除去機能喪失

本事故シーケンスグループは、運転時の異常な過渡変化等の発生後、炉心冷却には成功するが、崩壊熱除去機能が喪失することで、炉心損傷前に原子炉格納容器が破損し、その後、炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスは、いずれも代替除熱手段に係る炉心損傷防止対策の実施に対する時間余裕に有意な差異はないため、炉心冷却に成功する事故シーケンスであるものの、事象発生初期の事象進展に着目する。起因事象発生後の事象進展が早いと考えられる過渡事象（原子炉水位低下の観点で厳しい給水流量の全喪失を選定）を起因とし、逃がし安全弁の再閉失敗を含まず、代表性の観点からも炉心損傷頻度が最も高い「過渡事象＋崩壊熱除去失敗」を選定する。

逃がし安全弁の再閉失敗を含まない事故シーケンスとした理由は、逃がし安全弁の再閉失敗を含まない事故シーケンスと逃がし安全弁の再閉失敗を含む事故シーケンスを比較した場合、逃がし安全弁の再閉失敗を含まない事故シーケンスの方が炉心損傷頻度が高く、当該事故シーケンスグループの特徴を有するためである。

ここで、崩壊熱除去機能喪失については、残留熱除去系の故障時と取水機能喪失時で、炉心損傷防止対策が異なることを踏まえて、「過渡事象＋崩壊熱除去失敗（残留熱除去系故障）」及び「過渡事象＋崩壊熱除去失敗（取水機能喪失）」を重要事故シーケンスとする。

なお、LOCAを起因とする事故シーケンスは、崩壊熱除去機能の代替

手段の有効性も含めて事故シーケンスグループ「f. LOCA時注水機能喪失」で評価することから、本重要事故シーケンスグループにおける重要事故シーケンスの選定対象から除外している。

e. 原子炉停止機能喪失

本事故シーケンスグループは、運転時の異常な過渡変化等の発生後、原子炉停止機能を喪失し、炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスのうち、「冷却材喪失（小破断LOCA）＋原子炉停止失敗」、「冷却材喪失（中破断LOCA）＋原子炉停止失敗」及び「冷却材喪失（大破断LOCA）＋原子炉停止失敗」については、反応度投入の観点では原子炉が減圧されることから「過渡事象＋原子炉停止失敗」よりも事象進展が緩やかな事象である。

重大事故等対処設備である代替制御棒挿入機能に期待する場合、LOCAと原子炉停止機能喪失が重畳する事故シーケンスは、LOCAを伴う事故シーケンスグループに包絡される。また、LOCAと原子炉停止機能喪失が重畳する事故シーケンスの炉心損傷頻度は他の事故シーケンスグループの事故シーケンスの炉心損傷頻度と比較しても極めて小さい。

これらを踏まえ、起因事象発生後の出力変化及び原子炉格納容器に与えられる蒸気負荷の観点で厳しい過渡事象（反応度投入の観点で最も厳しく、格納容器隔離によって炉心からの発生蒸気がすべて原子炉格納容器に流入する主蒸気隔離弁閉止を選定）を起因とする、「過渡事象＋原子炉停止失敗」を重要事故シーケンスとして選定する。

f. LOCA時注水機能喪失

本事故シーケンスグループは、小破断LOCA又は中破断LOCAの発生後、高圧注水機能の喪失に加え、低圧注水機能又は原子炉減圧機能を喪失し、炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスのうち、配管破断規模の大きさによる原子炉冷却材流出流量が多く水位の低下が早いため、原子炉注水開始までの時間余裕が短い中破断LOCAを起因とする。また、重畳する注水機能喪失のうち、低圧注水機能喪失については、原子炉減圧機能喪失による場合と、低圧非常用炉心冷却系そのものが機能喪失する場合が考えられるが、代替となる設備に要求される設備容量の観点では、原子炉減圧機能である逃がし安全弁は十分な台数が備えられている一方、低圧注水の代替となる注水設備の容量は低圧非常用炉心冷却系より少ない点で厳しい事象になると考えられること、さらに原子炉減圧機能が喪失する事故シーケンスよりも低圧非常用炉心冷却系そのものが機能喪失する事故シーケンスの方が炉心損傷頻度が高いことも踏まえ、低圧非常用炉心冷却系そのものの機能喪失が重畳する場合である「冷却材喪失（中破断LOCA

A) 「+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗」を重要事故シーケンスとして選定する。

なお、上記の重要事故シーケンスは、低圧炉心冷却失敗が含まれており、低圧非常用炉心冷却系の機能喪失は残留熱除去系による崩壊熱除去機能にも期待できないこととほぼ同義であることから、事故シーケンスグループ「d. 崩壊熱除去機能喪失」のLOCAを起因とする事故シーケンスを包絡する。

g. 格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）

本事故シーケンスグループは、インターフェイスシステムLOCAの発生後、破断箇所の隔離に失敗し、格納容器貫通配管等からの漏えいが防止できずに炉心損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスは、「インターフェイスシステムLOCA」のみとしていることから、これを重要事故シーケンスとして選定する。なお、格納容器バイパスとしては高圧設計の配管の原子炉格納容器外での破断事象も想定できるが、これはPRAの検討の中で高圧設計の配管の破損頻度が低圧設計の配管の破損頻度に比べて小さい傾向にあることを理由に考慮の対象から除外している。

なお、国内外の先進的な対策を考慮した場合であっても、すべての状況に対応できるような炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスとしては、以下の事故シーケンスが抽出されている。

① 冷却材喪失（大破断LOCA）+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗

② 全交流動力電源喪失（外部電源喪失+交流電源・補機冷却系喪失）+原子炉停止失敗

①については、格納容器破損防止対策により原子炉格納容器の機能に期待できることを確認しており、これを除く事故シーケンスを対象に、重要事故シーケンスの選定を実施している。

②は地震レベル1 PRAから抽出された事故シーケンスであり、炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスであるが、喪失する安全機能が明確であることから炉心損傷に直結する事故シーケンスとはしていない。この事故シーケンスにおける原子炉停止失敗の支配的な要因は地震による炉内構造物の損傷であるが、これは地震の最大加速度が地震発生と同時に加わるという、現状の保守的なPRAのモデルによって評価されるものであり、現実的には、炉内構造物の損傷確率が高くなる加速度に到達する前に、原子炉スクラムに至ると考えられる。

以上のとおり、②の事故シーケンスの炉心損傷頻度は保守的に評価されており、現実的に想定すると、本事故シーケンスによって炉心損傷に至る

頻度は十分に小さいと判断したことから、本事故シーケンスは炉心損傷防止対策又は格納容器破損防止対策の有効性を確認する事故シーケンスから除外している。

各事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンス及び重要事故シーケンスについて整理した結果を第 1.2-2 表に示す。

#### 1.2.1.2 有効性を確認するための評価項目の設定

「1.2.1.1 事故シーケンスのグループ化と重要事故シーケンスの選定」に挙げた事故シーケンスグループについては、炉心の著しい損傷を防止するための対策に対して有効性があることを確認するため、以下の評価項目を設定する。

- (1) 炉心の著しい損傷が発生するおそれがないものであり、かつ、炉心を十分に冷却できるものであること。具体的には、燃料被覆管の最高温度が 1,200℃以下であること及び燃料被覆管の酸化量は酸化反応が著しくなる前の被覆管厚さの 15%以下であること。
- (2) 原子炉冷却材圧力バウンダリにかかる圧力が、最高使用圧力 8.62MPa[gage]の 1.2 倍の圧力 10.34MPa[gage]を下回ること。
- (3) 原子炉格納容器バウンダリにかかる圧力は、限界圧力である最高使用圧力 427kPa[gage]の約 2 倍の圧力 853kPa[gage]を下回ること。
- (4) 原子炉格納容器バウンダリにかかる温度が、限界温度 200℃を下回ること。

また、格納容器フィルタベント系を使用する事故シーケンスグループの有効性評価では、上記の評価項目に加えて、敷地境界での実効線量を評価し、周辺の公衆に対して著しい放射線被ばくのリスクを与えないこととして、発生事故当たりおおむね 5 mSv 以下であることを確認する。

ここで、原子炉格納容器バウンダリの健全性に対する有効性を確認するための評価項目の上限については、漏えい経路になる可能性がある原子炉格納容器バウンダリ構成部に対して、規格計算又は試験にて、島根原子力発電所 2 号炉における仕様を踏まえた構造健全性及びシール部機能維持の確認を行っており、継続的に評価条件を維持していく。

ここで記載している、原子炉格納容器本体、シール部等の原子炉格納容器バウンダリ構成部の健全性については、「付録 2 原子炉格納容器の温度及び圧力に関する評価」に示す。

### 1.2.2 運転中の原子炉における重大事故

#### 1.2.2.1 格納容器破損モードの選定と評価事故シーケンスの選定

「運転中の原子炉における重大事故」については、著しい炉心損傷の発生後、原子炉格納容器が破損に至る可能性があるとして想定する格納容器破損モードを、本原子炉施設を対象とした P R A の結果を踏まえて選定し、格納容器破損モードごとに評価事故シーケンスを選定して評価を行う。

(1) 格納容器破損モードの抽出

内部事象運転時レベル 1.5 P R Aにおいては、事象進展に伴い生じる原子炉格納容器の健全性に影響を与える負荷の分析から、格納容器破損モードの抽出を行う。

具体的には、事象進展を炉心損傷前、原子炉圧力容器破損前、原子炉圧力容器破損直後、原子炉圧力容器破損以降の長期の各プラント状態に分類して、それぞれの状態で発生する負荷を抽出し、事故進展中に実施される緩和手段等から第 1.2-5 図に示す格納容器イベントツリーを作成し、格納容器破損モードを抽出して整理する。

(2) 格納容器破損モードの選定

格納容器イベントツリーにより抽出した格納容器破損モードを、事象進展の類似性から以下の格納容器破損モードに分類する。ここで、水素燃焼については、本原子炉施設では、運転中は原子炉格納容器内の雰囲気窒素を窒素で置換し、酸素濃度を低く管理しているため、P R Aで定量化する格納容器破損モードから除外しているが、有効性評価においては窒素置換の有効性を確認する観点で、格納容器破損モードとして挙げている。

- a. 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）
- b. 高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱
- c. 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用
- d. 水素燃焼
- e. 溶融炉心・コンクリート相互作用

また、上記に分類されない格納容器破損モードとして、以下の格納容器破損モードを抽出している。

- ・ 早期過圧破損（未臨界確保失敗時の過圧）
- ・ 水蒸気（崩壊熱）による過圧破損（炉心損傷前）
- ・ 格納容器バイパス（格納容器隔離失敗）
- ・ 格納容器バイパス（インターフェイスシステム L O C A）
- ・ 原子炉圧力容器内における水蒸気爆発

早期過圧破損（未臨界確保失敗時の過圧）、水蒸気（崩壊熱）による過圧破損（炉心損傷前）及び格納容器バイパス（インターフェイスシステム L O C A）は格納容器先行破損の事故シーケンスである。早期過圧破損（未臨界確保失敗時の過圧）及び水蒸気（崩壊熱）による過圧破損（炉心損傷前）では炉心損傷の前に水蒸気によって原子炉格納容器が過圧破損し、また、格納容器バイパス（インターフェイスシステム L O C A）ではインターフェイスシステム L O C Aによって原子炉格納容器の隔離機能を喪失することで、原子炉格納容器外への原子炉冷却材の流出による原子炉建物内の環境悪化等が

生じ、原子炉注水機能の維持が困難となり、炉心損傷に至るおそれがある。格納容器先行破損の事故シーケンスは、「運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」の評価において、各々重要事故シーケンスを選定し、重大事故等防止対策の有効性を確認していることから、新たな格納容器破損モードとして追加する必要はない。

格納容器バイパス（格納容器隔離失敗）については、炉心損傷頻度の低減を図るとともに、万一の重大事故発生時に原子炉格納容器の隔離に失敗することのないよう、原子炉格納容器の漏えいに対する検知性を向上させることが有効であり、これらについては重大事故等対処設備、日常の原子炉格納容器の圧力監視等で対応すべき事象であることから、有意な頻度又は影響をもたらす格納容器破損モードとして新たに追加する必要はない。

原子炉圧力容器内での水蒸気爆発については、発生する可能性が極めて低いことから、有意な頻度又は影響をもたらす格納容器破損モードとして新たに追加する必要はない。

なお、原子炉格納容器下部床とドライウェル床とが同じレベルに構成されているBWR Mark-I型の原子炉格納容器に特有の事象として格納容器直接接触（シェルアタック）があるが、本原子炉施設はBWR Mark-I改良型の原子炉格納容器であり、溶融炉心が原子炉格納容器バウンダリには直接接触することはない構造であることから、評価対象として想定する格納容器破損モードとはしていない。

### (3) 評価事故シーケンスの選定

格納容器破損モードごとに、有効性評価の対象とする評価事故シーケンスを選定する。具体的には、格納容器破損モードごとに、当該破損モードに至る可能性のある最も厳しいと考えられるプラント損傷状態（以下「PDS」という。）を含む事故シーケンスの中から、当該破損モードの観点で厳しい事故シーケンスを選定する。評価事故シーケンスの選定結果は以下のとおりである。また、PDSの分類結果についての説明を第1.2-3表に示す。なお、第1.2-3表において格納容器破損時期が炉心損傷前に分類されている崩壊熱除去機能喪失、原子炉停止機能喪失、インターフェイスシステムLOCAは、格納容器先行破損の事故シーケンスであり、著しい炉心損傷の発生後、原子炉格納容器が破損に至る可能性があるとして想定する格納容器破損モードには該当しないことから、これらのPDSは評価事故シーケンスの選定においては考慮していない。

なお、PDSとして「運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」の事故シーケンスグループに対して以下の表記を用いる。

高圧・低圧注水機能喪失：TQUV

高圧注水・減圧機能喪失：TQUX

全交流動力電源喪失（長期TB）：長期TB

全交流動力電源喪失 (TBU) : TBU  
全交流動力電源喪失 (TBD) : TBD  
全交流動力電源喪失 (TBP) : TBP  
LOCA時注水機能喪失 (大破断LOCA) : AE  
LOCA時注水機能喪失 (中破断LOCA) : S1E  
LOCA時注水機能喪失 (小破断LOCA) : S2E  
崩壊熱除去機能喪失 : TW  
原子炉停止機能喪失 : TC

a. 雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)

本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち、LOCAは原子炉冷却材の流出を伴うことから水位低下が早く、事象進展の観点で厳しい。また、格納容器圧力が高く推移すること等、環境に放出される放射性物質の観点でも厳しい事故シーケンスとなると考えられる。

対策の観点では過圧破損に対しては原子炉格納容器の除熱が、過温破損に対しては損傷炉心への注水が必要となる。

以上の観点を総合的に考慮すると、LOCAにECCS注水機能喪失及び全交流動力電源喪失を重畳させることで、電源の復旧、注水機能の確保等必要となる対応が多く、格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオになる。

よって、過圧及び過温への対策の有効性を総合的に評価するため、PDSとしてLOCAを選定し、これに全交流動力電源喪失の重畳を考慮するものとする。

LOCAに属する事故シーケンスのうち、破断口径が大きいことから原子炉水位の低下が早く、また、水位回復に必要な流量が多いため、対応時の時間余裕、必要な設備容量の観点で厳しい大破断LOCAを起因とし、炉心損傷防止が困難な事故シーケンスとして「1.2.1.1(3)重要事故シーケンスの選定」にて挙げた事故シーケンスとの包絡関係や、格納容器破損防止対策を講じるための対応時間の厳しさの観点を踏まえて、「冷却材喪失 (大破断LOCA) + ECCS注水機能喪失 + 全交流動力電源喪失」を評価事故シーケンスとして選定する。

b. 高圧熔融物放出／格納容器雰囲気直接加熱

本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち、長期TBは炉心損傷に至る前に原子炉隔離時冷却系による一時的な冷却に成功しており、起因事象発生から原子炉減圧に至るまでの時間余裕の観点ではTQUX、TBD及びTBUが厳しいPDSとなる。高圧状態で炉心損傷に至る点ではTQUX、TBD及びTBUにPDS選定上の有意な違いはないことから、これらのうち、本格納容器破損モードを代表するPDSとして、TQUXを



選定する。また、このPDSに全交流動力電源喪失を重畳させることで、電源の復旧、注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。

TQUXに属する事故シーケンスのうち、事故進展が早く、炉心溶融までの時間の観点で厳しい過渡事象を起因とする、「過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗+炉心損傷後の原子炉減圧失敗+原子炉注水失敗+DCH発生」を評価事故シーケンスとして選定する。

#### c. 原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用

本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち、原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用(FCI)の観点からは、原子炉圧力容器破損後に原子炉格納容器下部へ落下する溶融炉心の割合が多く、原子炉圧力容器破損時の溶融炉心の保有エネルギーが大きいシーケンスが厳しくなる。原子炉圧力容器が高圧で破損に至る場合、原子炉格納容器に放出される溶融炉心が分散され易いと考え、原子炉圧力容器が低圧で破損に至る場合の方が、原子炉格納容器下部へ一体となって落下する溶融炉心の割合が多くなると考えられる。また、本格納容器破損モードに対する事象の厳しさを考慮するうえでは、溶融炉心・コンクリート相互作用の緩和対策である、原子炉格納容器下部への水張りが実施された状態を想定しているが、その一方で、原子炉圧力容器破損が想定される状況では、高圧溶融物放出/格納容器雰囲気直接加熱の発生を防止するため、原子炉圧力容器の減圧が実施されている。これらの状況も考慮し、原子炉圧力容器が低圧状態で破損するPDSを選定するものとし、高圧状態で破損するTQUXは選定対象から除外する。LOCAは、蒸気が急速に原子炉格納容器に流出するため、ジルコニウムの酸化割合が他の低圧破損シーケンスより小さくなり、酸化ジルコニウム質量割合が他の低圧破損シーケンスより小さくなることで溶融炉心の内部エネルギーが小さくなると考えられる。よって、本格納容器破損モードにおいて厳しいPDSとして、原子炉の水位低下が早く、原子炉圧力容器破損までの時間が短いTQUVを選定する。また、このPDSに全交流動力電源喪失を重畳させることで、電源の復旧、注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。

TQUVに属する事故シーケンスのうち、事象進展が早い過渡事象を起因とし、発生頻度の観点で大きいと考えられる逃がし安全弁の再閉失敗を含まない、「過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗+炉心損傷後の原子炉注水失敗+FCI発生」を評価事故シーケンスとして選定する。

#### d. 水素燃焼

本原子炉施設では、原子炉格納容器内が窒素置換され、初期酸素濃度が低く保たれている。炉心損傷に伴い、水素濃度は容易に13vol%を超えるこ

とから、水素燃焼防止の観点からは酸素濃度が重要となるため、炉心損傷により放出される核分裂生成物による水の放射線分解に伴う酸素濃度の上昇に着目する。本格納容器破損モードはPRAから抽出されたものではないが、評価のためにPDSを格納容器先行破損の事故シーケンス以外のPDSから選定する。酸素ガスは水の放射線分解で発生するが、酸素濃度は他の気体の存在量の影響を受けるため、炉心損傷後の原子炉格納容器内の気体組成を考えるうえで影響が大きいと考えられるジルコニウム-水反応による水素ガス発生に着目する。原子炉注水に期待しない場合のジルコニウム-水反応の挙動は事象発生時の原子炉圧力容器外への冷却材の放出経路から、LOCAとその他のPDSに大別できる。LOCAでは事象発生と同時に原子炉圧力容器が大きく減圧され、原子炉冷却材が多量に原子炉圧力容器外に排出されることから、ジルコニウム-水反応に寄与する原子炉冷却材の量が少なくなり、水素濃度は13vol%を上回るものの、その他のPDSに比べて水素ガス発生量が少なくなると考えられる。このため、LOCAでは水の放射線分解によって増加する酸素濃度が他のPDSよりも相対的に高くなる可能性が考えられる。さらに、原子炉圧力容器破損の有無の影響を考えると、原子炉圧力容器が破損する場合には、原子炉格納容器下部での熔融炉心・コンクリート相互作用によって生じる非凝縮性ガスが酸素濃度を低下させる方向に寄与する可能性が考えられることから、同じPDSでも原子炉圧力容器破損に至らない場合を想定することが適切と考える。また、「1.2.1.1(3) 重要事故シーケンスの選定」に示すとおり、炉心損傷を防止できない事故シーケンスのうち、格納容器破損防止対策の有効性を確認する事故シーケンスとしては、大破断LOCAと非常用炉心冷却系注水機能の喪失が重畳する事故シーケンスのみが抽出されている。これらのことから、「a. 雰囲気気圧・温度による静的負荷(格納容器過圧・過温破損)」において選定した「冷却材喪失(大破断LOCA)+ECCS注水機能喪失+全交流動力電源喪失」を本格納容器破損モードの評価事故シーケンスとして選定する。

有効性評価に当たっては、酸素濃度の上昇に着目する観点から、ジルコニウム-水反応による水素ガスの過剰な発生抑制及び水の放射線分解に伴い発生する酸素ガスを原子炉格納容器内に保持することによる酸素濃度の上昇を考慮し、炉心損傷後に原子炉注水に成功し、格納容器ベントを実施しない場合について評価するものとする。

#### e. 熔融炉心・コンクリート相互作用

本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち、熔融炉心・コンクリート相互作用の観点からは、原子炉格納容器下部に落下する熔融炉心の割合が多いシーケンスが厳しくなる。原子炉圧力容器が高压で破損に至る場合、原子炉格納容器に放出される熔融炉心が分散され易く、また、落下速度が

大きくなることで、原子炉格納容器下部に落下した際の粒子化割合が高くなり、落下した溶融炉心が冷却され易いと考え、原子炉圧力容器が低圧で破損に至る場合の方が、原子炉格納容器下部へ一体となって落下する溶融炉心の割合が多くなると考えられる。また、原子炉圧力容器破損が想定される状況では、高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱の発生を防止するため、原子炉圧力容器の減圧が実施されている。これらの状況も考慮し、原子炉圧力容器が低圧状態で破損するPDSを選定するものとし、高圧状態で破損するTQUXは選定対象から除外する。LOCAは原子炉格納容器下部への原子炉冷却材の流入の可能性がある、溶融炉心・コンクリート相互作用の観点で厳しい事象とはならないと考えられるため、選定対象から除外する。よって、本格納容器破損モードにおいて最も厳しいPDSとして、原子炉の水位低下が早く、対策実施までの時間余裕の観点から厳しいTQUVを選定する。また、このPDSに全交流動力電源喪失の重畳を考慮することで、電源の復旧、注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。

TQUVに属する事故シーケンスのうち、事象進展が早く、対応時の時間余裕の観点で厳しい過渡事象を起因とし、発生頻度の観点で大きいと考えられる逃がし安全弁の再閉失敗を含まない、「過渡事象＋高圧炉心冷却失敗＋低圧炉心冷却失敗＋炉心損傷後の原子炉注水失敗＋デブリ冷却失敗」を評価事故シーケンスとして選定する。

格納容器破損モード及び評価事故シーケンスについて整理した結果を第1.2-3表に示す。

#### 1.2.2.2 有効性を確認するための評価項目の設定

「1.2.2.1 格納容器破損モードの選定と評価事故シーケンスの選定」に挙げた格納容器破損モードについては、格納容器破損防止対策に対して有効性があることを確認するため、以下の評価項目を設定する。なお、格納容器直接接触（シェルアタック）については、BWR Mark-I型の原子炉格納容器に特有の格納容器破損モードであり、Mark-I改良型の原子炉格納容器は溶融炉心が原子炉格納容器バウンダリに直接接触する構造ではないため、格納容器直接接触（シェルアタック）に係る評価項目「原子炉格納容器の床上に落下した溶融炉心が床面を拡がり原子炉格納容器バウンダリと直接接触しないこと及び溶融炉心が適切に冷却されること」については、有効性を確認するための評価項目として設定しない。

- (1) 原子炉格納容器バウンダリにかかる圧力が、限界圧力である最高使用圧力427kPa[gage]の約2倍の圧力853kPa[gage]を下回ること。
- (2) 原子炉格納容器バウンダリにかかる温度が、限界温度200℃を下回ること。
- (3) 放射性物質の総放出量は、放射性物質による環境への汚染の視点も含め、環境への影響をできるだけ小さくとどめるものであること。

- (4) 原子炉圧力容器の破損までに原子炉圧力は 2.0MPa[gage]以下に低減されていること。
- (5) 急速な原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用による熱的・機械的荷重によって原子炉格納容器バウンダリの機能が喪失しないこと。
- (6) 原子炉格納容器が破損する可能性のある水素の爆轟を防止すること。具体的には、原子炉格納容器内の酸素濃度が 5 vol%以下であること。
- (7) 可燃性ガスの蓄積、燃焼が生じた場合においても、(1)の要件を満足すること。
- (8) 溶融炉心による侵食によって、原子炉格納容器の構造部材の支持機能が喪失しないこと及び溶融炉心が適切に冷却されること。

このうち、原子炉圧力容器が健全な評価事故シーケンスについては、評価項目のうち(1)から(3)、(6)及び(7)が評価対象となる。原子炉圧力容器の破損を仮定する評価事故シーケンスについては、評価項目のうち(4)、(5)及び(8)が評価対象となるが、原子炉圧力容器が破損した場合においても格納容器破損防止対策の有効性を確認する観点から、評価項目のうち(1)から(3)、(6)及び(7)についても評価を行う。

### 1.2.3 燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故

#### 1.2.3.1 想定事故

「燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故」については、本原子炉施設において、燃料プール内に貯蔵されている燃料の著しい損傷に至る可能性があるとして想定する以下の事故の評価を行う。

##### (1) 想定事故 1

燃料プールの冷却機能又は注水機能が喪失することにより、燃料プール内の水の温度が上昇し、蒸発により水位が低下する事故

##### (2) 想定事故 2

サイフォン現象等により燃料プール内の水の小規模な喪失が発生し、燃料プールの水位が低下する事故

#### 1.2.3.2 有効性を確認するための評価項目の設定

「1.2.3.1 想定事故」に挙げた想定事故については、燃料プールにおける燃料損傷を防止するための対策に対して有効性があることを確認するため、以下の評価項目を設定する。

- (1) 燃料棒有効長頂部が冠水していること。
- (2) 放射線の遮蔽が維持される水位を確保すること。
- (3) 未臨界が維持されていること。

## 1.2.4 運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故

### 1.2.4.1 事故シーケンスのグループ化と重要事故シーケンスの選定

「運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」については、復水器真空破壊から制御棒引抜開始までの期間を評価対象<sup>※</sup>とし、原子炉の水位、温度、圧力等のプラントパラメータの類似性、保守点検状況等に応じた緩和設備の使用可能性、起因事象及び成功基準に関する類似性に応じて、プラントの状態を適切に区分する。また、区分したプラント状態を考慮し、燃料の著しい損傷に至る可能性があるとして想定する事故シーケンスを、本原子炉施設を対象としたPRAの結果を踏まえて、運転停止中事故シーケンスグループにグループ化し、運転停止中事故シーケンスグループごとに、重要事故シーケンスを選定して評価を行う。

※「実用発電用原子炉に係る運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策の有効性評価に関する審査ガイド」の共通解析条件に定められている運転停止中の期間は「主発電機の解列から、原子炉起動の過程における主発電機の併列まで」となり、本評価対象と異なる。ただし、「主発電機の解列から復水器真空破壊まで」及び「制御棒引抜開始から原子炉起動の過程における主発電機の併列まで」における低出力運転時及びプラント停止時の期間においては、復水・給水系を含む緩和設備の待機状態が出力運転時とほぼ同程度であり、かつ発生する起因事象もほぼ同様であることから運転時における内部事象レベル1 PRAの評価範囲と位置付けている。

(添付資料 1.2.1)

#### (1) 運転停止中事故シーケンスの抽出

内部事象停止時レベル1 PRAにおいては、各起因事象の発生から燃料損傷に至ることを防止するための緩和手段の組合せ等を第 1.2-6 図に示すイベントツリーで分析し、燃料損傷に至る事故シーケンスを抽出する。

#### (2) 運転停止中事故シーケンスのグループ化

PRAの結果を踏まえて抽出した事故シーケンスについて、重大事故等に対処するための措置が基本的に同じとなるよう、燃料損傷に至る主要因の観点から事故シーケンスを以下のように分類する。なお、反応度の誤投入については、複数の人的過誤や機器故障が重畳しない限り反応度事故に至る可能性はなく、また万一、反応度事故に至った場合でも、局所的な事象で収束し、燃料の著しい破損又は大規模な炉心損傷に至ることは考え難いことから、内部事象停止時レベル1 PRAの起因事象から除外しているが、本事故事象に対する対策の有効性を確認する観点や「実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則の解釈」にて挙げられる運転停止中事故シーケンスグループとの包含関係も踏まえて追加する。

- a. 崩壊熱除去機能喪失
- b. 全交流動力電源喪失
- c. 原子炉冷却材の流出
- d. 反応度の誤投入

### (3) 重要事故シーケンスの選定

運転停止中事故シーケンスグループごとに、有効性評価の対象とする重要事故シーケンスを選定する。同じ運転停止中事故シーケンスグループに複数の事故シーケンスが含まれる場合には、燃料損傷防止対策の実施に対する時間余裕、燃料損傷回避に必要な設備容量及び運転停止中事故シーケンスグループ内の代表性の観点で、より厳しい事故シーケンスを選定する。重要事故シーケンスの選定結果は以下のとおりである。

#### a. 崩壊熱除去機能喪失

本事故シーケンスグループは、運転中の残留熱除去系の故障等が発生した後、崩壊熱除去・炉心冷却に失敗し、燃料損傷に至るものである。

運転停止中事故シーケンスグループ内の事故シーケンスの代表性の観点から、残留熱除去系機能喪失[フロントライン]を起因事象とする「崩壊熱除去機能喪失(残留熱除去系機能喪失[フロントライン])＋崩壊熱除去・炉心冷却失敗」を重要事故シーケンスとして選定する。なお、原子炉補機冷却系(原子炉補機海水系を含む)の故障によって崩壊熱除去機能が喪失する場合については、事象進展が同様となる全交流動力電源喪失において、燃料損傷防止対策の有効性を確認する。

#### b. 全交流動力電源喪失

本事故シーケンスグループは、外部電源喪失の発生時に非常用交流電源の確保に失敗して全交流動力電源喪失に至り、その後、崩壊熱除去・炉心冷却の失敗によって、燃料損傷に至るものである。

運転停止中事故シーケンスグループ内の事故シーケンスの代表性の観点から、外部電源喪失とともに非常用ディーゼル発電機及び高圧炉心スプレイ系ディーゼル発電機(以下「非常用ディーゼル発電機等」という。)が機能喪失し、全交流動力電源喪失に至る「外部電源喪失＋交流電源喪失」を重要事故シーケンスとして選定する。なお、本重要事故シーケンスは、従属的に発生する「原子炉補機冷却機能喪失」の重畳を考慮したものとなっている。

#### c. 原子炉冷却材の流出

本事故シーケンスグループは、原子炉冷却材圧力バウンダリに接続された系統の誤操作等により原子炉冷却材が系外に流出後、流出隔離・炉心冷

却の失敗によって、燃料損傷に至るものである。

事象認知までに要する時間（点検作業に伴う原子炉冷却材の流出事象は検知が容易）や原子炉冷却材の流出量の観点から、「原子炉冷却材の流出（残留熱除去系切替え時の冷却材流出）＋流出隔離・炉心冷却失敗」を重要事故シーケンスとして選定する。

なお、制御棒駆動機構点検時の原子炉冷却材流出及び局部出力領域モニタ交換時の原子炉冷却材流出については、燃料損傷防止対策となる待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系（常設）の設備容量が流出流量より十分大きいこと及び作業・操作場所と漏えい発生箇所が同一であり認知が容易であることを考慮し重要事故シーケンスとしては選定しない。また、原子炉浄化系ブロー時の原子炉冷却材流出については、原子炉水位を低下させる操作であるため、原子炉水位は適宜監視されており、原子炉冷却材流出発生時には、ブロー水の排水先である機器ドレンタンクの水位高等によっても認知することができるため、認知は容易であることから、重要事故シーケンスとして選定しない。

#### d. 反応度の誤投入

本事故シーケンスグループは、反応度事故により、燃料損傷に至るものである。

本事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスは「反応度の誤投入」のみであることから、これを重要事故シーケンスとして選定する。具体的には、代表性の観点から、「停止中に実施される検査等により、最大反応度価値を有する制御棒1本が全引き抜きされている状態から、他の1本の制御棒が操作量の制限を超える誤った操作によって引き抜かれ、異常な反応度の投入を認知できずに燃料の損傷に至る事故」を想定する。

各運転停止中事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンス及び重要事故シーケンスについて整理した結果を第1.2-4表に示す。

#### 1.2.4.2 有効性を確認するための評価項目の設定

「1.2.4.1 事故シーケンスのグループ化と重要事故シーケンスの選定」に挙げた事故シーケンスグループについては、運転停止中の原子炉における燃料の著しい損傷を防止する対策に対して有効性があることを確認するため、以下の評価項目を設定する。

- (1) 燃料棒有効長頂部が冠水していること。
- (2) 放射線の遮蔽が維持される水位を確保すること。
- (3) 未臨界を確保すること（ただし、通常の運転操作における臨界、又は燃料の健全性に影響を与えない一時的かつわずかな出力上昇を伴う臨界は除く）。

### 1.3 評価に当たって考慮する事項

#### 1.3.1 有効性評価において考慮する措置

グループ化した事故シーケンスごとに、関連する措置を「技術的能力に係る審査基準への適合状況説明資料」及び「重大事故等対処設備について」との関係を含めて整理して評価を行う。評価に当たっては、「技術的能力に係る審査基準への適合状況説明資料」で講じることとした措置のうち、「重大事故等対処設備について」で重大事故等対策として用いたものを対象とするが、手順及び体制としては、その他の措置との関係も含めて必要となる水源、燃料及び電源の資源や要員を整理し、資源及び要員の確保に関する評価を行う。

なお、「運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故」における1つの事故シーケンスグループ等において複数の対策があり、それぞれで重要事故シーケンス等を選定していない場合には、代表性、包絡性を整理し解析を行う。

また、「運転中の原子炉における重大事故」における1つの格納容器破損モードにおいて複数の対策がある場合には各々の対策において解析を行う。

#### 1.3.2 安全機能の喪失に対する仮定

グループ化した事故シーケンスごとに、PRAの結果を踏まえ、起因事象の発生に加えて想定する多重故障、共通原因故障又は系統間の機能依存性を考慮した従属故障等の安全機能の喪失を考慮する。

また、機能喪失の要因として故障又は待機除外を想定した設備の復旧には期待しない。

#### 1.3.3 外部電源に対する仮定

外部電源有無の双方について考慮するが、基本的には常用系機器の機能喪失、工学的安全施設の作動遅れ及び運転員等操作、対策の成立性、燃料評価等の観点を考慮して外部電源がない場合を想定する。ただし、外部電源を考慮した方が有効性を確認するための評価項目に対して評価結果の余裕が小さくなるような場合は、外部電源がある場合を包含する条件を設定する。

なお、島根原子力発電所2号炉は、タービン・バイパス弁は定格蒸気流量の100%の容量を持っており、タービンへ供給される蒸気をバイパスすることにより、所内単独運転させることも期待できるが、有効性評価においては、タービン・バイパス弁の作動を期待しないことから、所内単独運転も期待しない。

#### 1.3.4 単一故障に対する仮定

重大事故等は、設計基準事故対処設備が多重の機能喪失を起こすことを想定しており、さらに、重大事故等対処設備は、設計基準事故対処設備に対して多様性を考慮して設置していることから、重大事故等対処設備の単一故障は仮定しない。



### 1.3.5 運転員等の操作時間に対する仮定

事故に対処するために必要な運転員等の手動操作については、原則として、中央制御室での警報発信又は監視パラメータが操作開始条件に達したことを起点として、確実な実施のための時間余裕を含め、以下に示す時間で実施するものとして考慮する。

- (1) 有効性評価における解析で仮定した運転員等の操作時間余裕は、実際の操作に要する時間の不確定性を考慮し、以下の考え方に基づき設定する。
  - a. 中央制御室で警報発信等を起点として実施する操作については、事象発生後の状況の把握や他のパラメータの確認等を考慮して開始するものとする。
  - b. 上記操作に引き続き中央制御室で実施する操作については、速やかに操作を開始するものとし、個別の運転操作に必要な時間を考慮する。運転員は手順書に従い、各操作条件を満たせば順次操作を実施するものとし、有効性評価における解析の条件設定においては、各操作に必要な時間に基づき設定する。なお、事象発生直後の輻輳している状態においては操作を開始するまでの時間余裕を考慮する。
  - c. 現場で実施する操作については、個別の現場操作に必要な時間を考慮する。なお、有効性評価における解析の条件設定においては、操作場所までのアクセスルート状況、操作場所の作業環境等を踏まえて、現場操作に必要な時間を設定する。
- (2) 有効性評価における操作時間は、「技術的能力に係る審査基準への適合状況説明資料」で示している操作時間と同一若しくは時間余裕を踏まえて設定する。

(添付資料 1.3.1)

### 1.3.6 考慮する範囲

有効性評価を行うに当たっては、異常状態の発生前の状態として、通常運転範囲及び運転期間の全域について考慮し、サイクル期間中の炉心燃焼度変化、燃料交換等による長期的な変動及び運転中予想される運転状態を考慮する。

有効性評価においては、原則として事故が収束し、原子炉等が安定停止状態等に導かれるまでを対象とするが、有効性評価における解析としては、原子炉等が安定停止状態等に導かれることが合理的に推定可能な時点までとし、外部支援がないものとして7日間の対策成立性を評価する。

炉心及び燃料については、本原子炉施設の重大事故等対策（設備、手順等）の

有効性を確認するという重大事故等対策の有効性評価の目的を踏まえて、装荷される燃料である9×9燃料(A型)、9×9燃料(B型)及びMOX燃料のうち、各事故シーケンスの特徴に応じて設定し、評価を行う。

#### 1.4 有効性評価に使用する計算プログラム

有効性評価に使用する解析コードは、事故シーケンスの特徴に応じて、重要現象がモデル化されており、実験等をもとに妥当性が確認され、適用範囲を含めてその不確かさが把握されているものとして、以下に示す解析コードを使用する。また、重要事故シーケンス等に対して適用する解析コードについて、事故シーケンスグループ等との対応を第1.4-1表から第1.4-3表に示す。

(添付資料1.4.1)

##### 1.4.1 SAFER

###### 1.4.1.1 概要

長期間熱水力過渡変化解析コードSAFERは、長期間の原子炉内熱水力過渡変化を解析するコードである。原子炉内を9ノードに分割し、原子炉圧力、各ノードの水位変化等を計算する。原子炉内冷却材量の評価に当たっては、上部タイププレート、炉心入口オリフィス等での気液対向流制限現象(CCF L)及び上部プレナムにおけるサブクール域の局在化により冷却材が下部プレナムに落下する現象(CCF Lブレークダウン)を考慮することができる。

また、本コードでは、平均出力燃料集合体及び高出力燃料集合体に対して燃料ペレット、燃料被覆管、チャンネルボックス等の温度計算を行う。燃料被覆管の温度計算においては、その冷却状態に応じた熱伝達係数、燃料棒間の輻射及び燃料棒とチャンネルボックスの輻射を考慮することができる。

また、燃料被覆管と冷却水又は水蒸気との化学反応(ジルコニウム-水反応)をBaker-Justの式によって計算し、表面の酸化量を求める。さらに、燃料棒内の圧力を計算することによって、燃料被覆管の膨れと破裂の有無を評価し、破裂が起きた場合には、燃料被覆管の内面に対してもジルコニウム-水反応を考慮する。

本コードの入力は、原子炉出力、原子炉圧力等の初期条件、原子炉の幾何学的形状及び水力学的諸量、燃料集合体及び炉心に関するデータ、プラント過渡特性パラメータ、ECCS等の特性、想定破断の位置、破断面積等であり、出力として、原子炉圧力、原子炉水位、燃料被覆管の最高温度、燃料被覆管酸化量等が求められる。

###### 1.4.1.2 重要現象のモデル化

事故シーケンスの特徴に応じて、炉心及び原子炉圧力容器における重要現象がモデル化されている。具体的には以下のとおりである。

#### (1) 炉心

核については、重要現象として、崩壊熱がモデル化されている。

燃料については、重要現象として、燃料棒表面熱伝達、沸騰遷移、燃料被覆管酸化及び燃料被覆管変形がモデル化されている。

熱流動については、重要現象として、沸騰・ボイド率変化、気液分離（水位変化）・対向流、三次元効果及び気液熱非平衡がモデル化されている。

#### (2) 原子炉压力容器

重要現象として、冷却材放出（臨界流・差圧流）、沸騰・凝縮・ボイド率変化、気液分離（水位変化）・対向流及びE C C S注水（給水系・代替注水設備含む）がモデル化されている。

#### 1.4.1.3 妥当性確認及び不確かさの把握

事故シーケンスの特徴に応じた重要現象に対するモデルの妥当性確認を実施している。具体的には、T B L、R O S A - III及びF I S T - A B W Rの実験解析により確認している。また、入力条件により不確かさを考慮しているものを除いて、妥当性確認により、その不確かさを把握している。具体的には、第1.4-4表に示すとおりである。

#### 1.4.2 R E D Y

##### 1.4.2.1 概要

プラント動特性解析コードR E D Yは、炉心、原子炉压力容器、原子炉压力容器内部構造物、原子炉冷却材再循環系、主蒸気管、タービン系、原子炉格納容器等のプラント全体を模擬し、6群の遅発中性子及び反応度フィードバックを含む炉心一点近似動特性、燃料棒の熱的動特性及び冷却材の熱水力挙動を計算する。

本コードの入力は、原子炉出力、炉心流量等の初期条件、原子炉、主蒸気管、原子炉格納容器等のデータ、核データ、燃料棒データ、各種制御系データ等であり、出力として、原子炉出力、原子炉圧力、炉心流量、原子炉水位、格納容器圧力、サブプレッション・プール水温度等の時間変化が求められる。

なお、本コードは、従来の原子炉設置変更許可申請書において適用実績のあるものに、格納容器圧力、サブプレッション・プール水温度の時間変化を求めることができるように、格納容器モデルを追加したものである。

##### 1.4.2.2 重要現象のモデル化

事故シーケンスの特徴に応じて、炉心、原子炉压力容器及び原子炉格納容器における重要現象がモデル化されている。具体的には、以下のとおりである。

#### (1) 炉心

核については、重要現象として核分裂出力、反応度フィードバック効果及

び崩壊熱がモデル化されている。

熱流動については、重要現象として、沸騰・ボイド率変化がモデル化されている。

## (2) 原子炉圧力容器

重要現象として、冷却材流量変化、冷却材放出（臨界流・差圧流）、ECC注水（給水系・代替注水設備含む）及びほう酸水の拡散がモデル化されている。

## (3) 原子炉格納容器

重要現象として、サブプレッション・プール冷却がモデル化されている。

### 1.4.2.3 妥当性確認及び不確かさの把握

事故シーケンスの特徴に応じた重要現象に対するモデルの妥当性確認を実施している。具体的には、ABWR及び従来型BWRの実機試験解析、設計解析での確認等により確認している。また、入力条件により不確かさを考慮しているものを除いて、妥当性確認により、その不確かさを把握している。具体的には、第1.4-5表に示すとおりである。

### 1.4.3 SCAT

#### 1.4.3.1 概要

単チャンネル熱水力解析コードSCATは、単一チャンネルを模擬し、これを軸方向一次元に多ノード分割する。各ノードについて、燃料棒には半径方向にのみ熱伝導方程式を適用して原子炉冷却材への熱伝達を計算し、チャンネル内原子炉冷却材には、質量及びエネルギー保存則を適用して原子炉冷却材の熱水力挙動を計算する。

本コードの入力は、燃料集合体の幾何学的形状、軸方向出力分布等の炉心データ、燃料集合体出力、チャンネル入口流量等の初期条件、REDYコードの出力から得られたチャンネル入口流量等の過渡変化のデータ等であり、出力として、GEXL相関式に基づく限界出力比(CPR)、各ノードでの原子炉冷却材流量、クオリティ等の時間変化が求められる。

なお、本コードは、従来の原子炉設置変更許可申請書において適用実績のあるものに、沸騰遷移後の燃料被覆管温度を求めることができるように、沸騰遷移後の燃料被覆管-冷却材間の熱伝達評価式とリウエット相関式を適用している。

#### 1.4.3.2 重要現象のモデル化

事故シーケンスの特徴に応じて、炉心における重要現象がモデル化されている。具体的には、以下のとおりである。

## (1) 炉心

核については、重要現象として、出力分布変化がモデル化されている。

燃料については、重要現象として、燃料棒内温度変化、燃料棒表面熱伝達及び沸騰遷移がモデル化されている。

熱流動については、重要現象として、気液熱非平衡がモデル化されている。

### 1.4.3.3 妥当性確認及び不確かさの把握

事故シーケンスの特徴に応じた重要現象に対するモデルの妥当性確認を実施している。具体的には、ATLAS試験、NUPEC BWR燃料集合体熱水力試験により確認している。また、入力条件により不確かさを考慮しているものを除いて、妥当性確認により、その不確かさを把握している。具体的には、第1.4-6表に示すとおりである。

## 1.4.4 MAA P

### 1.4.4.1 概要

シビアアクシデント総合解析コードMAAPは、炉心損傷を伴う事故シーケンスについて、炉心損傷、原子炉压力容器破損、原子炉格納容器破損及び放射性物質の環境放出に至るまでのプラント内の熱水力及び放射性物質挙動を解析するコードである。炉心損傷後の原子炉内及び原子炉格納容器内を一次系、ドライウエル、ウェットウエルに分割し、重大事故等時に想定される炉心のヒートアップ、燃料被覆管の酸化・破裂、炉心損傷、溶融炉心移行挙動と冷却性、水素ガスと水蒸気の生成、溶融炉心・コンクリート反応、格納容器圧力・温度、放射性物質の放出と移行／沈着挙動等の諸現象がモデル化され、また、種々の注水設備や冷却設備の特性や制御系がモデル化できるため、自動トリップや運転員操作等によるシステム応答を含む、重大事故等時のプラント挙動の評価が可能である。

本コードの入力は、原子炉出力、原子炉圧力、格納容器圧力、格納容器温度等の初期条件、原子炉の幾何学的形状及び水力学の諸量、燃料集合体及び炉心に関するデータ、格納容器自由空間体積、流路面積及び流路抵抗、注水設備、原子炉減圧設備及び冷却設備の特性、想定破断の位置及び破断面積等であり、出力として、原子炉圧力、原子炉水位、燃料温度、溶融炉心温度、格納容器圧力、格納容器温度、コンクリート侵食量、放射性物質の原子炉格納容器内の分布等が求められる。

### 1.4.4.2 重要現象のモデル化

事故シーケンスの特徴に応じて、炉心、原子炉压力容器、原子炉格納容器、原子炉压力容器（炉心損傷後）及び原子炉格納容器（炉心損傷後）における重要現象がモデル化されている。具体的には、以下のとおりである。

(1) 炉心

核については、重要現象として、崩壊熱がモデル化されている。

燃料については、重要現象として、燃料棒内温度変化、燃料棒表面熱伝達、燃料被覆管変形及び燃料被覆管酸化がモデル化されている。

熱流動については、重要現象として、沸騰・ボイド率変化及び気液分離（水位変化）・対向流がモデル化されている。

(2) 原子炉压力容器

重要現象として、原子炉冷却材流出（臨界流・差圧流）及びE C C S注水（給水系・代替注水設備含む）がモデル化されている。

(3) 原子炉格納容器

重要現象として、格納容器各領域間の流動、構造材との熱伝達及び内部熱伝導、気液界面の熱伝達、スプレイ冷却、放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生並びに格納容器ベント及びサブプレッション・プール冷却がモデル化されている。

(4) 原子炉压力容器（炉心損傷後）

重要現象として、リロケーション、構造材との熱伝達、原子炉压力容器内F C I（熔融炉心細粒化）、原子炉压力容器内F C I（デブリ粒子熱伝達）、下部プレナムでの熔融炉心の熱伝達、原子炉压力容器破損及び原子炉压力容器内F P挙動がモデル化されている。

(5) 原子炉格納容器（炉心損傷後）

重要現象として、原子炉压力容器外F C I（熔融炉心細粒化）、原子炉压力容器外F C I（デブリ粒子熱伝達）、原子炉格納容器下部床面での熔融炉心の拡がり、熔融炉心と原子炉格納容器下部プール水との伝熱、熔融炉心とコンクリートの伝熱、コンクリート分解及び非凝縮性ガス発生並びに原子炉格納容器内F P挙動がモデル化されている。

1.4.4.3 妥当性確認及び不確かさの把握

事故シーケンスの特徴に応じた重要現象に対するモデルの妥当性確認を実施している。具体的には、TMI事故解析、CORA実験解析、HDR実験解析、CSTF実験解析、ACE実験解析、SURC-4実験解析、PHEBUS-FP実験解析、ABCOVE実験解析、感度解析等により確認している。

また、入力条件により不確かさを考慮しているものを除いて、妥当性確認により、その不確かさを把握している。

具体的には、第1.4-7表に示すとおりである。

## 1.4.5 A P E X

### 1.4.5.1 概要

反応度投入事象解析コードA P E Xは、熱的現象を断熱としており、炉心平均出力の過渡変化を炉心一点近似による中性子動特性方程式で表し、出力の炉心空間分布を二次元(R-Z)拡散方程式で表す。炉心各部分のエンタルピの上昇は、出力分布に比例するものとし、炉心平均エンタルピがある程度上昇する間(エンタルピ・ステップ)は、出力分布は一定としている。また、投入反応度としては、制御棒価値、スクラム反応度及びドップラ反応度を考慮するが、このドップラ反応度は、二次元拡散計算による出力分布を考慮して求められる。

A P E Xの入力は、炉心の幾何学的形状、各種中性子断面積、拡散係数、ドップラ係数、炉心動特性パラメータ等の核データ、制御棒反応度の時間変化等であり、出力として、中性子束分布、エンタルピ分布及び炉心平均出力の時間変化が求められる。

A P E Xの出力に基づき、単チャンネル熱水力解析を行う場合には、単チャンネル熱水力解析コードS C A T (R I A用)を用いる。

S C A T (R I A用)は、燃料棒を燃料ペレット、ペレットと燃料被覆管の間の空隙部であるギャップ部、燃料被覆管で構成し、ノードごとに径方向の熱伝達を計算する。燃料ペレット及び燃料被覆管には、径方向一次元の非定常熱伝導方程式を適用して燃料棒内の温度分布を計算し、チャンネル内原子炉冷却材には、質量、運動量及びエネルギー保存則を適用して原子炉冷却材の熱水力挙動を計算する。原子炉冷却材の沸騰状態に応じた熱伝達率相関式を用いることにより、燃料棒の除熱量を求める。

S C A T (R I A用)の入力は、A P E Xの出力から得られた炉心平均出力変化、炉心出力分布に加え、燃料集合体幾何条件、燃料集合体熱水力データ、燃料物性データ、ギャップ熱伝達係数、ペレット径方向出力分布、局所出力ピーキング係数等であり、出力として、非断熱燃料エンタルピの時間変化が求められる。

### 1.4.5.2 重要現象のモデル化

事故シーケンスの特徴に応じて、炉心における重要現象がモデル化されている。具体的には、以下のとおりである。

#### (1) 炉心

核については、重要現象として、核分裂出力、出力分布変化、反応度フィードバック効果及び制御棒反応度効果がモデル化されている。

燃料については、重要現象として、燃料棒内温度変化、燃料棒表面熱伝達及び沸騰遷移がモデル化されている。

### 1.4.5.3 妥当性確認及び不確かさの把握

事故シーケンスの特徴に応じた重要現象に対するモデルの妥当性確認を実施している。具体的には、S P E R T - I I I E炉心実験、実効共鳴積分測定に関わる

Helstrandの実験式, MISTRAL臨界試験及び実機での制御棒価値測定試験により確認している。また, 入力条件により不確かさを考慮しているものを除いて, 妥当性確認により, その不確かさを把握している。具体的には, 第1.4-8表に示すとおりである。

## 1.5 有効性評価における解析の条件設定の方針

### 1.5.1 解析条件設定の考え方

有効性評価における解析の条件設定については, 事象進展の不確かさを考慮して, 設計値等の現実的な条件を基本としつつ, 原則, 有効性を確認するための評価項目となるパラメータに対して余裕が小さくなるような設定とする。この際, 「1.4 有効性評価に使用する計算プログラム」において把握した解析コードの持つ重要現象に対する不確かさや解析条件の不確かさによって, さらに本原子炉施設の有効性評価の評価項目となるパラメータ及び運転員等操作時間に対する余裕が小さくなる可能性がある場合は, 影響評価において感度解析等を行うことを前提に設定する。ただし, 「1.5.2 共通解析条件」に示す解析条件については共通の条件として設定する。

なお, 初期条件とは異常状態が発生する前の原子炉施設の状態, 事故条件とは重大事故等の発生原因となる機器の故障又は安全機能の喪失の状態, 機器条件とは重大事故等を収束させる際に使用する重大事故等対処設備の状態, 操作条件とは運転員等が重大事故等対処設備を操作可能となる状態のことをいう。

(添付資料1.5.1)

### 1.5.2 共通解析条件

操作条件については, 「1.3.5 運転員等の操作時間に対する仮定」に示すとおり個別に解析条件を設定するが, 以下に示す解析条件は, 各重要事故シーケンス等においてその影響が大きく変わらないことから共通の条件として設定する。また, 原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する配管の破断によるLOCAを想定する場合の配管の破断位置については, 原子炉圧力容器内の保有水量, 流出量等の観点から選定する。なお, 解析条件の不確かさの影響については, グループ化した事故シーケンスごとに確認する。

(添付資料 1.5.2)

#### 1.5.2.1 運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故

##### (1) 初期条件

a. 事故シーケンスグループ「原子炉停止機能喪失」を除く事故シーケンスグループにおいて用いる条件

##### (a) 初期運転条件

原子炉熱出力の初期値として, 定格値 (2,436MWt), 原子炉圧力の初期値として, 定格値 (6.93MPa[gage]) を用いるものとする。また, 炉心流量の



初期値として、定格値である 100%流量 ( $35.6 \times 10^3 \text{t/h}$ ) を用いるものとする。

(b) 炉心及び燃料

炉心及び燃料に関する解析条件の設定を以下に示す。なお、炉心に関する条件は  $9 \times 9$  燃料 (A型) を装荷した平衡サイクル等を想定した値、燃料ペレット、燃料被覆管径等の炉心及び燃料形状に関する条件は設計値を用いるものとする。

a) 原子炉停止後の崩壊熱

原子炉停止後の崩壊熱は、「軽水型動力炉の非常用炉心冷却系の性能評価指針」にて使用することが妥当とされた ANSI/ANS-5.1-1979+2 $\sigma$  を最確条件とした ANSI/ANS-5.1-1979 の式に基づく崩壊熱曲線を使用する。また、使用する崩壊熱は燃焼度が高くなるサイクル末期炉心の平均燃焼度に、サイクル末期の燃焼度のばらつきを考慮して 10%の保守性を考慮した燃焼度 33Gwd/t の条件に対応したものとする。崩壊熱曲線を第 1.5-1 図に示す。

(添付資料 1.5.3)

b) 最大線出力密度

燃料棒の最大線出力密度は、通常運転時の熱的制限値として、44.0kW/m を用いるものとする。

(c) 原子炉圧力容器

原子炉水位の初期値は、通常運転水位とする。

(d) 原子炉格納容器

原子炉格納容器に関する解析条件の設定を以下に示す。なお、事故シナリオグループ「格納容器バイパス (インターフェイスシステム LOCA)」では原子炉格納容器に関する解析条件は用いない。

a) 容積

原子炉格納容器容積について、ドライウエル空間部は、内部機器、構造物体積を除く全体積として 7,900 $\text{m}^3$ 、サプレッション・チェンバ空間部は、必要最小空間部体積として 4,700 $\text{m}^3$ 、サプレッション・チェンバ液相部は、必要最小プール水量として 2,800 $\text{m}^3$  を用いるものとする。

b) 初期温度及び初期圧力

原子炉格納容器の初期温度について、ドライウエル空間部温度は 57 $^{\circ}\text{C}$ 、サプレッション・プール水温度は 35 $^{\circ}\text{C}$  を用いるものとする。また、原子炉格納容器の初期圧力は 5 kPa [gage] を用いるものとする。

c) サプレッション・プールの初期水位

サプレッション・プールの初期水位は、通常運転時の水位として 3.61m を用いるものとする。

d) 真空破壊装置

真空破壊装置の作動条件は、設計値 (3.43kPa (ドライウエルーサプレ

ッション・チェンバ間差圧))を用いるものとする。

(e) 外部水源の温度

外部水源の温度は 35°C とする。

(f) 主要機器の形状

原子炉圧力容器，原子炉格納容器等の形状に関する条件は設計値を用いるものとする。

b. 事故シーケンスグループ「原子炉停止機能喪失」において用いる条件

(a) 初期運転条件

原子炉熱出力の初期値として，定格値 (2, 436MWt)，原子炉圧力の初期値として，定格値 (6. 93MPa[gage]) を用いるものとする。また，炉心流量の初期値として，定格値である 100%流量 (35. 6×10<sup>3</sup>t/h)，主蒸気流量の初期値として，定格値 (4. 74×10<sup>3</sup>t/h) を用いるものとする。

(b) 給水温度

給水温度の初期値は 214°C とする。

(c) 燃料及び炉心

炉心及び燃料に関する解析条件の設定を以下に示す。なお，炉心に関する条件は圧力上昇によるボイドの減少により印加される正の反応度を厳しく評価するため，絶対値の大きい 9×9 燃料 (A型) 及び MOX 燃料 228 体を装荷した平衡サイクルを想定した値，燃料ペレット，燃料被覆管径等の炉心及び燃料形状に関する条件は 9×9 燃料 (A型)，9×9 燃料 (B型)，MOX 燃料の熱水力特性はほぼ同等であることから，代表的に 9×9 燃料 (A型) の設計値を用いるものとする。

a) 原子炉停止後の崩壊熱

NUREG-1335 が参照している，11 群のモデルにより計算される値を用いるものとする。

(添付資料 1. 5. 3)

b) 最小限界出力比

燃料の最小限界出力比は，通常運転時の熱的制限値として，1. 25 を用いるものとする。

c) 最大線出力密度

燃料棒の最大線出力密度は，通常運転時の熱的制限値として，44. 0kW/m を用いるものとする。

d) 核データ

動的ボイド係数 (減速材ボイド係数を遅発中性子発生割合で除した値) はサイクル末期の値の 1. 25×1. 02 倍，動的ドップラ係数 (ドップラ係数を遅発中性子割合で除した値) はサイクル末期の値の 0. 9×0. 99 倍を用いるものとする。

(d) 原子炉圧力容器

原子炉水位の初期値は、通常運転水位とする。

(e) 原子炉格納容器

原子炉格納容器に関する解析条件の設定を以下に示す。

a) 容積

原子炉格納容器容積について、ドライウエル空間部は、内部機器及び構造物体積を除く全体積として $7,900\text{m}^3$ 、サプレッション・チェンバ空間部は、必要最小空間部体積として $4,700\text{m}^3$ 、サプレッション・チェンバ液相部は、必要最小プール水量として $2,800\text{m}^3$ を用いるものとする。

b) 初期温度及び初期圧力

原子炉格納容器の初期温度について、サプレッション・プール水温度は $35^\circ\text{C}$ を用いるものとする。また、原子炉格納容器の初期圧力は $5\text{kPa}[\text{gage}]$ を用いるものとする。

(f) 主要機器の形状

原子炉圧力容器、原子炉格納容器等の形状に関する条件は設計値を用いるものとする。

(2) 重大事故等対策に関連する機器条件

a. 安全保護系等の設定点

原子炉保護系のスクラム設定点として、以下の値を用いるものとする。

原子炉水位低 (レベル3)

気水分離器下端から $+16\text{cm}$  (燃料棒有効長頂部から $+443\text{cm}$ ) (遅れ時間 $1.05$ 秒)

工学的安全施設作動回路等の設定点として、以下の値を用いるものとする。

原子炉水位低 (原子炉隔離時冷却系起動, 主蒸気隔離弁閉止) 設定点  
気水分離器下端から $-112\text{cm}$  (燃料棒有効長頂部から $+315\text{cm}$ ) (レベル2)

原子炉水位低 (高圧炉心スプレー系起動) 設定点

気水分離器下端から $-261\text{cm}$  (燃料棒有効長頂部から $+166\text{cm}$ ) (レベル1H)

原子炉水位低 (低圧炉心スプレー系, 残留熱除去系 (低圧注水モード) 起動, 自動減圧系作動) 設定点

気水分離器下端から $-381\text{cm}$  (燃料棒有効長頂部から $+46\text{cm}$ ) (レベル1)

原子炉水位低 (再循環ポンプトリップ) 設定点

気水分離器下端から $-112\text{cm}$  (燃料棒有効長頂部から $+315\text{cm}$ ) (レベル2)

原子炉水位高 (原子炉隔離時冷却系トリップ, 高圧炉心スプレー系注

水弁閉止) 設定点

気水分離器下端から+132cm (燃料棒有効長頂部から+559cm) (レベル8)

格納容器圧力高 (E C C S 起動, 自動減圧系作動) 設定点

格納容器圧力 13.7kPa[gage]

原子炉圧力高 (原子炉再循環ポンプトリップ) 設定点

原子炉圧力 7.41MPa[gage]

#### b. 逃がし安全弁

逃がし安全弁の逃がし弁機能の吹出し圧力及び容量 (吹出し圧力における値) は, 設計値として以下の値を用いるものとする。なお, アクキュムレータ内の窒素を消費した場合には安全弁機能による原子炉圧力制御となるが, 事象初期に作動する逃がし弁機能による原子炉圧力制御にて代表させる。

第1段: 7.58MPa[gage] × 2個, 367t/h/個

第2段: 7.65MPa[gage] × 3個, 370t/h/個

第3段: 7.72MPa[gage] × 3個, 373t/h/個

第4段: 7.79MPa[gage] × 4個, 377t/h/個

### 1.5.2.2 運転中の原子炉における重大事故

#### (1) 初期条件

##### a. 初期運転条件

原子炉熱出力の初期値として, 定格値 (2,436MWt), 原子炉圧力の初期値として, 定格値 (6.93MPa[gage]) を用いるものとする。また, 炉心流量の初期値として, 定格値である 100%流量 (35.6×10<sup>3</sup>t/h) を用いるものとする。

##### b. 炉心及び燃料

炉心及び燃料に関する解析条件の設定を以下に示す。なお, 炉心に関する条件は9×9燃料 (A型) を装荷した平衡サイクルを想定した値, 燃料ペレット, 燃料被覆管径等の炉心及び燃料形状に関する条件は設計値を用いるものとする。

##### (a) 原子炉停止後の崩壊熱

原子炉停止後の崩壊熱は, 「軽水型動力炉の非常用炉心冷却系の性能評価指針」にて使用することが妥当とされたANSI/ANS-5.1-1979+2σを最確条件としたANSI/ANS-5.1-1979の式に基づく崩壊熱曲線を使用する。また, 使用する崩壊熱は燃焼度が高くなるサイクル末期炉心の平均燃焼度に, サイクル末期の燃焼度のばらつきを考慮して10%の保守性を考慮した燃焼度33GWd/tの条件に対応したものと

する。崩壊熱曲線を第 1.5-1 図に示す。

(添付資料 1.5.3)

c. 原子炉圧力容器

原子炉水位の初期値は、通常運転水位とする。

d. 原子炉格納容器

原子炉格納容器に関する解析条件の設定を以下に示す。なお、評価事故シーケンス「雰囲気圧力・温度の静的負荷（格納容器過圧・過温破損）」及び「水素燃焼」では以下のうち (f) から (j) は解析条件として用いない。

(a) 容積

原子炉格納容器容積について、ドライウエル空間部は、内部機器、構造物体積を除く全体積として  $7,900\text{m}^3$ 、サプレッション・チェンバ空間部は、必要最小空間部体積として  $4,700\text{m}^3$ 、サプレッション・チェンバ液相部は、必要最小プール水量として  $2,800\text{m}^3$  を用いるものとする。

(b) 初期温度及び初期圧力

原子炉格納容器の初期温度について、ドライウエル空間部温度は  $57^\circ\text{C}$ 、サプレッション・プール水温度は  $35^\circ\text{C}$  を用いるものとする。また、原子炉格納容器の初期圧力は  $5\text{kPa}$  [gage] を用いるものとする。

(c) サプレッション・プールの初期水位

サプレッション・プールの初期水位は、通常運転時の水位として  $3.61\text{m}$  を用いるものとする。

(d) 真空破壊装置

真空破壊装置の作動条件は、設計値 ( $3.43\text{kPa}$  (ドライウエル-サプレッション・チェンバ間差圧)) を用いるものとする。

(e) 初期酸素濃度

原子炉格納容器内の初期酸素濃度は、 $2.5\text{vol}\%$  (ドライ条件) を用いるものとする。

(f) 熔融炉心からプール水への熱流束

熔融炉心からプール水への熱流束は、 $800\text{kW}/\text{m}^2$  相当 (圧力依存あり) とする。

(g) コンクリートの種類

コンクリートの種類は、玄武岩系コンクリートとする。

(h) コンクリート以外の構造材の扱い

内側鋼板及びリブ鋼板についてはコンクリートよりも融点が高いことから保守的に考慮しないものとする。

(i) 原子炉圧力容器下部の構造物の扱い

原子炉圧力容器下部の構造物は、発熱密度を下げないよう保守的に原

子炉格納容器下部に落下する溶融物とは扱わないものとする。

(j) 原子炉格納容器下部床面積

コリウムシールドを床面に設置するため、その設置面積を用いるものとする。

e. 外部水源の温度

外部水源の温度は 35℃とする。

f. 主要機器の形状

原子炉圧力容器，原子炉格納容器等の形状に関する条件は設計値を用いるものとする。

(2) 重大事故等対策に関連する機器条件

a. 逃がし安全弁

逃がし安全弁の逃がし弁機能の吹出し圧力及び容量（吹出し圧力における値）は，設計値として以下の値を用いるものとする。

第 1 段：7.58MPa[gage]×2 個，367t/h/個

第 2 段：7.65MPa[gage]×3 個，370t/h/個

第 3 段：7.72MPa[gage]×3 個，373t/h/個

第 4 段：7.79MPa[gage]×4 個，377t/h/個

1.5.2.3 燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故

(1) 初期条件

a. 崩壊熱

燃料プールには貯蔵燃料のほかに，原子炉停止後に最短時間（原子炉停止後 10 日）で取り出された全炉心分の燃料が一時保管されていることを想定し，また，原子炉停止 10 日後においては，MOX 燃料の方が 9×9 燃料よりも崩壊熱が大きく，燃料プール水位低下の観点で厳しいため，燃料プールにおける使用済燃料の崩壊熱は，MOX 燃料を考慮した約 7.8MW を用いるものとする。

(添付資料 1.5.3)

b. 燃料プールの初期水位及び初期水温

燃料プールの初期水位は通常水位とし，この時の燃料プール保有水量は，保有水量を厳しく見積もるため燃料プールと隣接する原子炉ウェルの間設置されているプールゲートは閉を仮定し，約 1,599m<sup>3</sup>とする。また，燃料プールの初期水温は，運用上許容される上限の 65℃とする。

c. 主要機器の形状

燃料プール等の主要機器の形状に関する条件は設計値を用いる。

(添付資料 1.5.4)

1.5.2.4 運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故

(1) 初期条件（事故シーケンスグループ「反応度の誤投入」を除く）

a. 崩壊熱

原子炉停止後の崩壊熱は、第 1.5-1 図に示すANSI/ANS-5.1-1979の式に基づく崩壊熱曲線を使用し、崩壊熱を厳しく見積もるために、原子炉停止1日後の崩壊熱として約14.0MWを用いるものとする。

なお、原子炉停止1日後においては、9×9燃料の方がMOX燃料よりも崩壊熱が大きく、原子炉水位低下の観点で厳しいため、MOX燃料の評価は9×9燃料（A型）の評価に包絡されることを考慮し、代表的に9×9燃料（A型）を設定する。

b. 原子炉圧力

原子炉圧力の初期値は大気圧とし、水位低下量を厳しく見積もるために、事象発生後も大気圧が維持されるものとする。

c. 原子炉初期水位及び原子炉初期水温

原子炉初期水位は通常運転水位とする。また、原子炉初期水温は52℃とする。

d. 外部水源の温度

外部水源の温度は35℃とする。

e. 主要機器の形状

原子炉圧力容器等の形状に関する条件は設計値を用いるものとする。

1.6 解析の実施

有効性評価における解析は、評価項目となるパラメータの推移のほか、事象進展の状況を把握するうえで必要なパラメータの推移について解析を実施し、事象進展が適切に解析されていることを確認し、その結果を明示する。

なお、事象進展の特徴、厳しさ等を踏まえ、解析以外の方法で原子炉等が安定停止状態等に導かれ、評価項目を満足することが合理的に説明できる場合はこの限りではない。

1.7 解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価方針

解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価の範囲として、運転員等操作時

間に与える影響、評価項目となるパラメータに与える影響及び操作時間余裕を評価するものとする。

不確かさの影響確認は、評価項目となるパラメータに対する余裕が小さくなる場合に感度解析等を行う。事象推移が緩やかであり、重畳する影響因子がないと考えられる等、影響が容易に把握できる場合は、選定している重要事故シーケンス等の解析結果等を用いて影響を確認する。事象推移が早く、現象が複雑である等、影響が容易に把握できない場合は、事象の特徴に応じて解析条件を変更した感度解析によりその影響を確認する。

(添付資料 1.7.1)

#### 1.7.1 解析コードにおける重要現象の不確かさの影響評価

「1.4 有効性評価に使用する計算プログラム」においては、重要現象として評価指標及び運転操作に対する影響が大きい又は中程度と考えられる物理現象を選定しており、そのうち第 1.7-1 表から第 1.7-3 表に示す物理現象を有効性評価において評価項目となるパラメータに有意な影響を与えると整理している。解析コードの不確かさは、選定している重要事故シーケンス等における上記の物理現象に対する不確かさを考慮し、運転員等操作時間に与える影響及び評価項目となるパラメータに与える影響を確認する。

#### 1.7.2 解析条件の不確かさの影響評価

解析条件のうち、初期条件、事故条件及び機器条件の不確かさについて、運転員等操作時間に与える影響及び評価項目となるパラメータに与える影響を確認する。また、解析条件である操作条件の不確かさとして、操作の不確かさ要因である、「認知」、「要員配置」、「移動」、「操作所要時間」、「他の並列操作有無」及び「操作の確実さ」に起因して生じる運転員等操作の開始時間の変動が、操作開始時間に与える影響及び評価項目となるパラメータに与える影響を確認する。

#### 1.7.3 操作時間余裕の把握

解析上考慮する運転員等操作の各々について、その遅れによる影響度合いを把握する観点から、評価項目となるパラメータに対して、対策の有効性が確認できる範囲内で操作時間余裕を確認する。

### 1.8 必要な要員及び資源の評価方針

#### 1.8.1 必要な要員の評価

発電所内の原子炉施設で重大事故等が同時期に発生することを想定した最も厳しい状態での重大事故等対策時において、夜間及び休日（平日の勤務時間帯以外）における要員の確保の観点から、「技術的能力に係る審査基準への適合状況説明資料」で整備される体制にて、対処可能であることを確認するとともに、必



要な作業が所要時間内に実施できることを確認する。ただし、運転補助要員2名については、故意による大型航空機の衝突その他のテロリズムの発生の場合に活動を期待する要員であることから、要員の評価には含めないものとする。

#### 1.8.2 必要な資源の評価

発電所内の原子炉施設で重大事故等が同時期に発生することを想定した最も厳しい状態での重大事故等対策時において、必要となる水源、燃料及び電源の資源の確保の観点から、必要水量、燃料消費量及び電源負荷を確認するとともに、7日間継続してこれらの資源が供給可能であることを評価する。また、有効性評価において考慮されていない機器についても、使用した場合を想定して、各資源について7日間継続して資源の供給が可能であることを確認する。

第 1.2-1 表 有効性評価における重要事故シーケンスと技術的能力審査基準／設置許可基準規則／技術基準規則との関連（1 / 3）

			技術的能力審査基準	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	1.10	1.11	1.12	1.13	1.14	1.15	1.16			
			設置許可基準規則／技術基準規則	44 条/59 条	45 条/60 条	46 条/61 条	47 条/62 条	48 条/63 条	49 条/64 条	50 条/65 条	51 条/66 条	52 条/67 条	53 条/68 条	54 条/69 条	55 条/70 条	56 条/71 条	57 条/72 条	58 条/73 条	59 条/74 条			
事故シーケンスグループ等			重要事故シーケンス等		緊急停止失敗時に発電用原子炉を 失陥界にするための手順等	原子炉冷却材圧力バウンダリ高圧時に 発電用原子炉を冷却するための手順等	原子炉冷却材圧力バウンダリを 減圧するための手順等	原子炉冷却材圧力バウンダリ低圧時に 発電用原子炉を冷却するための手順等	最終ヒートシンクへ熱を輸送するための手順等	原子炉格納容器内の冷却等のための手順等	原子炉格納容器の過圧破損を 防止するための手順等	原子炉格納容器下部の溶融炉心を 冷却するための手順等	水素爆発による原子炉建屋等の 損傷を防止するための手順等	水素爆発による原子炉建屋等の 損傷を防止するための手順等	使用済燃料貯蔵槽の冷却等のための手順等	工場等外への放射性物質の 拡散を抑制するための手順等	重大事故等の収束に必要な水の供給手順等	電源の確保に関する手順等	事故時の計装に関する手順等	原子炉制御室の居住性等に関する手順等		
運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故	2.1	高圧・低圧注水機能喪失	運転時の異常な過渡変化又は設計基準事故（LOCAを除く）の発生後、高圧注水機能が喪失し、原子炉減圧には成功するが、低圧注水機能が喪失する事故				●	●	●							●	●					
	2.2	高圧注水・減圧機能喪失	運転時の異常な過渡変化又は設計基準事故（LOCAを除く）の発生後、高圧注水機能が喪失し、かつ、原子炉減圧機能（自動減圧機能）が喪失する事故			●	●	●	●								●	●				
	2.3	全交流動力電源喪失（長期TB）	外部電源喪失発生後、非常用ディーゼル発電機等の起動に失敗する事故		●	●	●			●								●	●	●		
		全交流動力電源喪失（TBU）	全交流動力電源喪失と同時に原子炉隔離時冷却系が機能喪失する事故		●	●	●			●								●	●	●		
		全交流動力電源喪失（TBD）	全交流動力電源喪失と同時に直流電源が喪失する事故		●	●	●			●								●	●	●		
	2.4	全交流動力電源喪失（TBP）	全交流動力電源喪失後と同時に逃がし安全弁1個が開状態のまま固着し、蒸気駆動の注水系が動作できない範囲に原子炉圧力が低下することで、原子炉注水機能を喪失する事故		●	●	●			●								●	●	●		
		崩壊熱除去機能喪失（取水機能が喪失した場合）	運転時の異常な過渡変化又は設計基準事故（LOCAを除く）の発生後、炉心冷却には成功するが、取水機能の喪失により崩壊熱除去機能が喪失する事故		●			●	●	●								●	●	●		
		崩壊熱除去機能喪失（残留熱除去系が故障した場合）	運転時の異常な過渡変化又は設計基準事故（LOCAを除く）の発生後、炉心冷却には成功するが、残留熱除去系の故障により崩壊熱除去機能が喪失する事故		●			●	●	●								●	●	●		
2.5	原子炉停止機能喪失	運転時の異常な過渡変化の発生後、原子炉停止機能が喪失する事故	●	●				●	●								●					
2.6	LOCA時注水機能喪失	原子炉の出力運転中に原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する配管の中小破断の発生後、高圧注水機能及び低圧注水機能が喪失する事故					●	●	●								●	●				
2.7	格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）	原子炉冷却材圧力バウンダリと接続された系統で、高圧設計部分と低圧設計部分のインターフェイスとなる配管のうち、隔離弁の隔離失敗等により低圧設計部分が過圧され破断する事故		●	●			●	●								●	●				
運転中の原子炉における重大事故	3.1	雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損） 残留熱代替除去系を使用する場合	発電用原子炉の運転中に運転時の異常な過渡変化、原子炉冷却材喪失事故（LOCA）又は全交流動力電源喪失が発生するとともに、非常用炉心冷却系等の安全機能の喪失する事故であり、残留熱代替除去系を使用する場合				●			●	●	●					●	●	●	●		
		雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損） 残留熱代替除去系を使用しない場合	発電用原子炉の運転中に運転時の異常な過渡変化、原子炉冷却材喪失事故（LOCA）又は全交流動力電源喪失が発生するとともに、非常用炉心冷却系等の安全機能の喪失する事故であり、残留熱代替除去系を使用しない場合				●			●	●	●						●	●	●	●	
	3.2	高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱	発電用原子炉の運転中に運転時の異常な過渡変化又は全交流動力電源喪失が発生するとともに、非常用炉心冷却系等の安全機能が喪失する事故			●				●	●	●						●	●	●	●	
	3.3	原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用	発電用原子炉の運転中に運転時の異常な過渡変化又は全交流動力電源喪失が発生するとともに、非常用炉心冷却系等の安全機能が喪失する事故			●				●	●	●						●	●	●	●	
	3.4	水素燃焼	発電用原子炉の運転中に運転時の異常な過渡変化、原子炉冷却材喪失事故（LOCA）又は全交流動力電源喪失が発生するとともに、非常用炉心冷却系等の安全機能の喪失する事故であり、残留熱代替除去系を使用する場合				●			●	●	●						●	●	●	●	
3.5	溶融炉心・コンクリート相互作用	発電用原子炉の運転中に運転時の異常な過渡変化又は全交流動力電源喪失が発生するとともに、非常用炉心冷却系等の安全機能が喪失する事故			●					●	●	●						●	●	●	●	
おそれがある事故	4.1	想定事故 1	燃料プールの冷却機能又は注水機能が喪失することにより、燃料プール水温が徐々に上昇し、蒸発により燃料プール水位が低下する事故												●		●	●				
	4.2	想定事故 2	サイフォン現象等により燃料プール内の水の小規模な漏えいが発生し、燃料プールの水位が低下する事故												●		●	●				
運転停止中の原子炉における重大事故	5.1	崩壊熱除去機能喪失	原子炉の運転停止中に残留熱除去系の故障により、崩壊熱除去機能が喪失する事故				●	●									●	●				
	5.2	全交流動力電源喪失	原子炉の運転停止中に全交流動力電源が喪失することにより、原子炉の注水機能及び除熱機能が喪失する事故				●	●										●	●	●		
	5.3	原子炉冷却材の流出	原子炉の運転停止中に原子炉冷却材圧力バウンダリに接続された系統から、運転員の誤操作等により系外への冷却材の流出が発生する事故				●	●										●	●			
	5.4	反応度の誤投入	原子炉の運転停止中に制御棒の誤引抜き等によって、燃料に反応度が投入される事故																			





第 1.2-2 表 重要事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故) (1 / 2)

事故シナリオ グループ	重要事故シナリオ	選定した事故シナリオ (重要事故シナリオ)
高圧・低圧注水機能喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> <li>過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> <li>手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> <li>手動停止 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> <li>サポー ト系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> <li>サポー ト系喪失 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> </ul>
高圧注水・減圧機能喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗</li> <li>手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗</li> <li>サポー ト系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 圧失敗</li> </ul>
全交流動力電源喪失 (長期TB)	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗</li> </ul>
全交流動力電源喪失 (TBP)	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗</li> </ul>
全交流動力電源喪失 (TBU)	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 高圧炉心冷却失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 高圧炉心冷却失敗</li> </ul>
全交流動力電源喪失 (TBD)	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 直流電源 (区分 1, 2) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 直流電源 (区分 1, 2) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗</li> </ul>
LOCA時注水機能喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> <li>冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗</li> <li>冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> <li>冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗</li> </ul>

第 1.2-2 表 重要事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故) (2/2)

事故シナリオグループ	事故シナリオ	選定した事故シナリオ (重要事故シナリオ)
崩壊熱除去機能喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 過渡事象 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗</li> <li>• 外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗</li> <li>• 外部電源喪失 + 直流電源 (区分 1, 2) 失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 過渡事象 + 崩壊熱除去失敗</li> </ul>
原子炉停止機能喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 過渡事象 + 原子炉停止失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 原子炉停止失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 原子炉停止失敗</li> <li>• 冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 原子炉停止失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 過渡事象 + 原子炉停止失敗</li> </ul>
格納容器バイパス (インターフェイスシステム LOCA)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 格納容器バイパス (インターフェイスシステム LOCA)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 格納容器バイパス (インターフェイスシステム LOCA)</li> </ul>

第 1.2-3 表 評価事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故) (1 / 7)

格納容器破損モード	該当する PDS	選定した PDS	選定した PDS の考え方
雰囲気圧力・温度による 静的負荷 (格納容器過圧 破損)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TQUV</li> <li>・ TQUX</li> <li>・ 長期 T B</li> <li>・ T B U</li> <li>・ T B P</li> <li>・ T B D</li> <li>・ L O C A</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ L O C A</li> <li>+ S B O</li> </ul>	<p>【事象進展 (過圧・過温) 緩和の時間余裕及び設備容量の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ TQUX, TQUV, 長期 T B, T B U, T B D, T B P の各シナリオと比較し, L O C A は原子炉冷却材の流出を伴うことから水位低下が早く, 事象進展が早い。</li> <li>・ 過圧破損については対策として原子炉格納容器の除熱が必要となる。</li> <li>・ 過温破損については対策として原子炉格納容器 (損傷炉心) への注水が必要となる。</li> <li>・ L O C A に E C C S 注水機能喪失及び全交流動力電源喪失を重畳させることで, 電源の復旧, 注水機能の確保等必要となる事故対処設備が多く, 格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとなる。また, 格納容器への注水・除熱対策の有効性を網羅的に確認可能なシナリオとなる。なお, いずれの PDS を選定しても必要な監視機能は維持される。</li> <li>・ 以上より, L O C A に全交流動力電源喪失 (SBO) を加え, 過圧及び過温への対策の有効性を総合的に評価するための PDS とする。</li> </ul>
雰囲気圧力・温度による 静的負荷 (格納容器過温 破損)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TQUX</li> <li>・ 長期 T B</li> <li>・ T B U</li> <li>・ T B D</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TQUX</li> </ul>	<p>【事象進展緩和 (原子炉減圧) の時間余裕の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 長期 T B は事象初期において原子炉隔離時冷却系による冷却が有効なシナリオであり, 原子炉減圧までの時間余裕の観点では TQUX, T B D, T B U の方が厳しい。</li> <li>・ 高圧状態で炉心損傷に至る点では TQUX, T B D, T B U に PDS 選定上の有意な違いはない。</li> <li>・ 以上より, 最も厳しい PDS から, TQUX を代表として選定した。また, この PDS に全交流動力電源喪失を重畳させることで, 電源の復旧, 注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。なお, いずれの PDS を選定しても必要な監視機能は維持される。</li> </ul>
高圧溶融物放出 / 格納 容器雰囲気直接加熱 (DCH)			

第 1.2-3 表 評価事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故) (2/7)

格納容器破損モード	該当するPDS	選定したPDS	選定したPDSの考え方
原子炉圧力容器外の溶融燃料—冷却材相互作用 (FCI)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• TQUV</li> <li>• TQUX</li> <li>• LOCA</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• TQUV</li> </ul>	<p>【事象 (FCI) における発生エネルギーの大きさ) の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち、原子炉圧力容器外の溶融燃料—冷却材相互作用 (FCI) の観点からは、原子炉格納容器下部へ落下する溶融炉心の割合が多く、原子炉圧力容器破損時の溶融炉心の保有エネルギーが大きいシナリオが厳しくなる。</li> <li>• 原子炉圧力容器が高压で破損に至る場合、格納容器に放出される溶融炉心が分散されやすいと考え、原子炉圧力容器が低圧で破損に至る場合の考えられる。</li> <li>• また、本格納容器破損モードに対する事象の厳しさを考慮するうえでは、溶融炉心・コンクリート相互作用の緩和対策である、原子炉格納容器下部への水張りが実施された状態を想定しているが、その一方で、原子炉圧力容器破損が想定される状況では、高压溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱の発生を防止するため、原子炉圧力容器の減圧が実施されている。</li> <li>• これらの状況も考慮し、原子炉圧力容器が低圧状態で破損するPDSを選定するものとし、高压状態で破損するTQUVは選定対象から除外する。</li> <li>• LOCAは、蒸気が急速に格納容器に流出するため、ジルコニウム質量割合が他の低圧破損シナリオより小さくなり、酸化ジルコニウム質量割合が他の低圧破損シナリオより小さくなることで溶融炉心の内部エネルギーが小さくなくと考えられる。</li> </ul> <p>以上より、本格納容器破損モードにおいて厳しいPDSとして、原子炉の水位低下が早く、原子炉圧力容器破損までの時間が短いTQUVを選定する。また、このPDSに全交流動電源喪失を重量させることで、電源の復旧、注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。なお、いずれのPDSを選定しても必要な監視機能は維持可能である。</p>
溶融炉心・コンクリート相互作用 (MCCI)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• TQUV</li> <li>• TQUX</li> <li>• LOCA</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• TQUV</li> </ul>	<p>【事象 (MCCI) に寄与する溶融炉心のエネルギーの大きさ) の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち、溶融炉心・コンクリート相互作用の観点からは、原子炉格納容器下部に落下する溶融炉心の割合が多いシナリオが厳しくなる。</li> <li>• 原子炉圧力容器が高压で破損に至る場合、原子炉格納容器に放出される溶融炉心が分散され易く、また、落下速度が大きくなることで、原子炉格納容器下部に落下した際の粒子化割合が高く、また、落下した溶融炉心が冷却され易いと考えると、原子炉圧力容器が低圧で破損に至る場合の方が、原子炉格納容器下部へ一体となって落下する溶融炉心の割合が多くなると考えられる。</li> <li>• また、原子炉圧力容器破損が想定される状況では、高压溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱の発生を防止するため、原子炉圧力容器の減圧が実施されている。</li> <li>• これらの状況も考慮し、原子炉圧力容器が低圧状態で破損するPDSを選定するものとし、高压状態で破損するTQUVは選定対象から除外する。</li> <li>• LOCAは、原子炉格納容器下部への冷却材の流入の可能性があり、溶融炉心・コンクリート相互作用の観点で厳しい事象とはならないと考えられるため、選定対象から除外する。</li> </ul> <p>以上より、本格納容器破損モードにおいて最も厳しいTQUVを選定する。また、このPDSに全交流動電源喪失の重量を考慮することで、電源の復旧、注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。なお、いずれのPDSを選定しても必要な監視機能は維持可能である。</p>



第 1.2-3 表 評価事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故) (3 / 7)

格納容器破損モード	該当するPDS	選定したPDS	選定したPDSの考え方
格納容器破損モード 水素燃焼	-	<p>選定したPDS</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• LOCA</li> <li>+ SBO*</li> </ul>	<p>【有効性評価に関する審査ガイド下の選定基準等との整合】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 本発電用原子炉施設では格納容器内を窒素で置換しているため、水素燃焼による格納容器破損シナリオは抽出されない。このため、本発電用原子炉施設において評価することが適切と考えられるシナリオを選定するものとする。</li> </ul> <p>【評価において着目するパラメータ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 本発電用原子炉施設では、原子炉格納容器内が窒素置換され、初期酸素濃度が低く保たれている。また、炉心損傷に伴い、水素濃度は容易に可燃限界を超えることから、水素燃焼防止の観点からは酸素濃度が重要になる。このため、水の放射線分解に伴う酸素濃度の上昇に着目する。</li> </ul> <p>【本発電用原子炉施設において評価する事故シナリオ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 本格納容器破損モードはPRAから抽出されたものではないが、評価のためにPDSを本格納容器先行破損の事故シナリオ以外のPDSから選定する。酸素濃度を高めるため、炉心損傷後の格納容器内の気体組成を考慮し、原子炉注水に期待しない場合のジルコニウム - 水反応による水素ガス発生に着目する。原子炉注水器外への冷却材の放出経路から、LOCAとその他のPDSに大別できる。LOCAでは事象発生と同時に原子炉圧力容器が大きく減圧され、冷却材が多量に原子炉圧力容器外に排出されることから、ジルコニウム - 水反応に着目する。冷却材の量が小さくなり、これに伴う水素ガス発生量が少なくなると考えられる。このため、LOCAでは水の放射線分解によって増加する酸素濃度が他のPDSより相対的に高くなる可能性が考えられる。さらに、原子炉圧力容器破損の有無の影響を考えると、原子炉圧力容器が破損する場合には、原子炉格納容器下部での熔融炉心・コンクリート相互作用によって生じる非凝縮性ガスが酸素濃度を低下させる方向に寄与する可能性が考えられることから、同じPDSでも原子炉圧力容器破損に至らない場合を想定することが適切と考ええる。</li> <li>• 本発電用原子炉施設において、炉心損傷を防止できない事故シナリオであるが、格納容器においてその事象進展を緩和できると考えられる事故シナリオとしては、大破断LOCAとECCS注水機能の喪失が重畳する事故シナリオのみが抽出されている。</li> </ul> <p>以上より、PDSとしてはLOCA (大破断LOCA+ECCS注水機能喪失) を選定することが適切と考えられる。これに加え、「雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)」の評価事故シナリオでは、対応の厳しさの観点でSBOの重畳を設定していることを考慮し、「冷却材喪失 (大破断LOCA)+ECCS注水機能喪失+全交流動力電源喪失」をPDSとして選定する。</p>

※ 格納容器破損モード「水素燃焼」は、島根原子力発電所2号炉が運転中、格納容器内を窒素で置換しているため、酸素濃度が可燃限界に至る可能性が十分に小さいと判断し、内部事象運転時レベル1.5PRAの評価対象から除外している。このため、PRAからはPDS及び事故シナリオは抽出されない。

第 1.2-3 表 評価事故シーケンスの選定（運転中の原子炉における重大事故）  
（4 / 7）補足：PDS の分類結果

PDS	格納容器 破損時期	原子炉 圧力	炉心損傷 時期	プラント損傷時点 での電源有無
TQUV	炉心損傷後	低圧	早期	交流／直流 電源有
TQUX	炉心損傷後	高圧	早期	交流／直流 電源有
長期TB	炉心損傷後	高圧	後期	直流電源無 <sup>※1</sup> 交流電源無
TBU	炉心損傷後	高圧	早期	直流電源有 交流電源無
TBP	炉心損傷後	低圧	早期	直流電源有 交流電源無
TBD	炉心損傷後	高圧	早期	交流／直流 電源無
LOCA (AE, S1E, S2E)	炉心損傷後	低圧 <sup>※2</sup>	早期	交流／直流 電源有
TW	炉心損傷前	—	後期	—
TC	炉心損傷前	—	早期	—
インターフェイス システムLOCA	炉心損傷前	—	早期	—

※1 蓄電池枯渇により事象発生から8時間で原子炉隔離時冷却系が停止し、炉心損傷に至るため、プラント損傷時点では直流電源が機能喪失している。

※2 S1EやS2Eでは、高圧状態で炉心損傷に至る場合が考えられるが、LOCAは速やかな原子炉冷却材流出の影響を確認するPDSとして、大破断LOCAをその代表として扱うこととし、高圧状態かつ早期に炉心損傷に至る事象はTQUXで代表させることとした。

注：網掛けは格納容器先行破損に至る事故シーケンスであることから、解釈1-2(b)に基づき、「炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認」する。このため、格納容器破損防止対策の有効性評価の対象外とするPDSを示す。

第 1.2-3 表 評価事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故) (5 / 7)

格納容器破損モード	選定した PDS	事故シナリオ	選定した事故シナリオ	評価事故シナリオ
雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧破損)	LOCA + SBO	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗</li> <li>冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗</li> <li>冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗</li> <li>冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗</li> <li>冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷却材喪失 (大破断 LOCA) + ECCS 注水機能喪失 + 全交流動力電源喪失</li> </ul> <p>(過圧及び過温の各々において、損傷炉心冷却失敗までは同じ事故シナリオが選定されている。また、対策は損傷炉心への注水 (損傷炉心冷却) の観点で同じとなることから、同様の事故シナリオを選定した。これに加え、過圧及び過温への対策の有効性を総合的に評価するため、全交流動力電源喪失の重畳を考慮する。)</p>
雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過温破損)	LOCA + SBO	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗</li> <li>冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗</li> <li>冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗</li> <li>冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗</li> </ul>	

第 1.2-3 表 評価事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故) (6 / 7)

格納容器破損モード	選定した PDS	事故シナリオ	選定した事故シナリオ	評価事故シナリオ
高压溶融物放出 / 格納容器雰囲気直接加熱 (DCH)	TQUX	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉減圧失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH発生 ・手動停止 + 高压炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉減圧失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH発生 ・サポート系喪失 + 高压炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉減圧失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH発生	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉減圧失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH発生 ・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉減圧失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH発生	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉減圧失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH発生
原子炉圧力容器外の溶融燃料 - 冷却材相互作用 (FCI)	TQUV	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + FCI発生 ・過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高压炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生 ・手動停止 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生 ・サポート系喪失 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生 ・手動停止 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高压炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生 ・サポート系喪失 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生 ・サポート系喪失 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高压炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生 ・過渡事象 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生 ・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI発生
溶融炉心・コンクリート相互作用 (MCCI)	TQUV	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗 ・過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高压炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗 ・手動停止 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗 ・サポート系喪失 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗 ・サポート系喪失 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高压炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗 ・過渡事象 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗	・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗 ・過渡事象 + 高压炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + デブリ冷却失敗

第 1.2-3 表 評価事故シナリオの選定 (運転中の原子炉における重大事故) (7/7)

格納容器破損モード	選定した PDS	事故シナリオ	選定した事故シナリオ	評価事故シナリオ
水素燃焼	LOCA + SBO*	—**	—	<p>・冷却材喪失 (大破断 LOCA) + ECCS 注水機能喪失 + 全交流動力電源喪失 + 損傷炉心冷却成功 + 格納容器ベント無し (可燃限界到達まで維持)</p> <p>(酸素濃度が他のプラント損傷状態よりも相対的に高くなる可能性が考えられ、炉心損傷を防止できない事故シナリオであるが、格納容器においてその事象進展を緩和できると考えられる「冷却材喪失 (大破断 LOCA) + ECCS 機能喪失」に対応の厳しさを鑑みて全交流動力電源喪失 (SBO) を加えた事故シナリオを設定した。さらに、原子炉圧力容器破損の有無の影響を考え、原子炉圧力容器が破損する場合には、原子炉格納容器下部での溶融炉心・コネクタート相互作用によって生じる非凝縮性ガスが酸素濃度を低下させる方向に寄与する可能性が考えられることから、同じ PDS でも原子炉圧力容器破損に至らない場合を想定することが適切と考えた。)</p>

※ 格納容器破損モード「水素燃焼」は、島根原子力発電所 2 号炉が運転中、格納容器内を窒素で置換しており、酸素濃度を低く管理しているため、酸素濃度が可燃限界に至る可能性が十分に小さいと判断し、内部事象運転時レベル 1.5PRA の評価対象から除外している。このため、PRA からは PDS 及び事故シナリオは抽出されない。そのうえでの PDS の選定理由は同表 (3/7) 参照。

第 1.2-4 表 重要事故シナリオの選定（運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故）

運転停止中 事故シナリオ グループ	事故シナリオ	選定した事故シナリオ (重要事故シナリオ)
崩壊熱除去機能喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>崩壊熱除去機能喪失 + 崩壊熱除去・炉心冷却失敗</li> <li>外部電源喪失 + 崩壊熱除去・炉心冷却失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>崩壊熱除去機能喪失 + 崩壊熱除去・炉心冷却失敗</li> </ul>
全交流動力電源喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源喪失</li> <li>外部電源喪失 + 直流電源喪失</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失 + 交流電源喪失</li> </ul>
原子炉冷却材の流出	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉冷却材の流出（残留熱除去系切替え時の冷却材流出） + 流出隔離・炉心冷却失敗</li> <li>原子炉冷却材の流出（原子炉浄化系ブロー時の冷却材流出） + 流出隔離・炉心冷却失敗</li> <li>原子炉冷却材の流出（制御棒駆動機構点検時の冷却材流出） + 流出隔離・炉心冷却失敗</li> <li>原子炉冷却材の流出（局部出力領域モニタ交換時の冷却材流出） + 流出隔離・炉心冷却失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉冷却材の流出（残留熱除去系切替え時の冷却材流出） + 流出隔離・炉心冷却失敗</li> </ul>
反応度の誤投入	<ul style="list-style-type: none"> <li>反応度の誤投入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>反応度の誤投入</li> </ul> <p>(代表性の観点から、停止中に実施される検査等により、最大反応度値を有する制御棒 1 本が全引き抜きされている状態から、他の 1 本の制御棒が操作量の制限を超える誤った操作によって引き抜かれ、異常な反応度の投入を認知できずに燃料の損傷に至る事故を想定する。)</p>

第1.4-1表 有効性評価に使用する解析コード一覧表  
 (運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故)

解 析 項 目	適用コード
高圧・低圧注水機能喪失	SAFER MAAP
高圧注水・減圧機能喪失	SAFER MAAP
全交流動力電源喪失	SAFER MAAP
崩壊熱除去機能喪失	SAFER MAAP
原子炉停止機能喪失	REDY SCAT
LOCA時注水機能喪失	SAFER MAAP
格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)	SAFER

第1.4-2表 有効性評価に使用する解析コード一覧表  
(運転中の原子炉における重大事故)

解 析 項 目	適用コード
雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）	MAAP
高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱	MAAP
原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用	MAAP
水素燃焼	MAAP
溶融炉心・コンクリート相互作用	MAAP

第1.4-3表 有効性評価に使用する解析コード一覧表  
(運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故)

解 析 項 目	適用コード
崩壊熱除去機能喪失	—
全交流動力電源喪失	—
原子炉冷却材の流出	—
反応度の誤投入	APEX SCAT (RIA用)



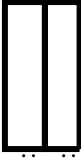

第 1.4-4 表 S A F E R における重要現象の不確かさ等 ( 1 / 2 )

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
炉心 (核)	崩壊熱	崩壊熱モデル	入力値に含まれる。最確条件を包絡できる条件を設定することにより崩壊熱を大きくするよう考慮している。
炉心 (燃料)	燃料棒表面熱伝達、沸騰遷移	燃料棒表面熱伝達モデル	T B L, R O S A - I I I の実験解析において、熱伝達係数を低めに評価する可能性があり、他の解析モデルの不確かさも相まってコード全体として、炉心が露出し、スプレー冷却のない場合には実験結果の燃料被覆管最高温度に比べて +50℃程度高めに評価し、スプレー冷却のある場合には実験結果に比べて 10℃～150℃程度高めに評価する。また、炉心が冠水維持する場合においては、F I S T - A B W R の実験解析において燃料被覆管温度の上昇はないため、不確かさは小さい。また、低圧代替注水系による注水での燃料棒冷却過程における蒸気单相冷却又は噴霧流冷却の不確かさは 20℃～40℃程度である。
炉心 (燃料)	燃料被覆管酸化	ジルコニウム-水反応モデル	酸化量及び酸化反応に伴う発熱量をより大きく見積もる B a k e r - J u s t 式による計算モデルを採用しており、保守的な効果を与える。
炉心 (燃料)	燃料被覆管変形	膨れ・破裂評価モデル	膨れ・破裂は、燃料被覆管温度と円周方向応力に基づいて評価され、燃料被覆管温度は上述のように高めに評価され、円周方向応力は燃焼期間中の変化を考慮して燃料棒内圧を大きく設定し保守的に評価している。従って、ベストフィット曲線を用いる場合も破裂の判定はおおむね保守的となる。
炉心 (熱流動)	沸騰・ボイド率変化、気液分離 (水位変化)・対向流、三次元効果	二相流体の流動モデル	T B L, R O S A - I I I, F I S T - A B W R の実験解析において、二相水位変化は、解析結果に重畳する水位振動成分を除いて、実験結果とおおむね同等の結果が得られている。低圧代替注水系の注水による燃料棒冷却 (蒸気单相冷却又は噴霧流冷却) の不確かさは 20℃～40℃程度である。また、原子炉圧力の評価において、R O S A - I I I では、2 M P a より低い圧力で系統的に圧力低下を早めに予測する傾向を呈しており、解析上、低圧注水系の起動タイミングを早める可能性が示される。しかし、実験で圧力低下が遅れた理由は、水面上に露出した上部支持格子等の構造材の温度が燃料被覆管からの輻射や過熱蒸気により上昇し、L P C S スプレーの液滴で冷却された際に蒸気が発生したためであり、低圧代替注水系を注水手段として用いる事故シナリオでは考慮する必要がある不確かさである。このため、燃料被覆管温度に大きな影響を及ぼす低圧代替注水系の注水タイミングに特段の差異を生じる可能性はないと考えられる。

第1.4-4表 SAFERにおける重要現象の不確かさ等 (2 / 2)

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
炉心 (熱流動)	気液熱非平衡	燃料棒表面熱伝達モデル	TBL, ROSA-IIIの実験解析において、熱伝達係数を低めに評価する可能性があり、他の解析モデルの不確かさも相まってコード全体として、炉心が露出し、スプレイ冷却のない場合には実験結果の燃料被覆管最高温度に比べて+50℃程度高めに評価し、スプレイ冷却のある場合には実験結果に比べて10℃～150℃程度高めに評価する。また、炉心が冠水維持する場合においては、FIST-ABWRの実験解析において燃料被覆管温度の上昇はないため、不確かさは小さい。また、低圧代替注水系による注水での燃料棒冷却過程における蒸気単相冷却又は噴霧流冷却の不確かさは20℃～40℃程度である。
原子炉圧力容器 (逃がし安全弁を含む)	冷却材放出 (臨界流・差圧流)  沸騰・ボイド率変化 気液分離 (水位変化)・対向流	臨界流モデル  二相流体の流動モデル	TBL, ROSA-III, FIST-ABWRの実験解析において、圧力変化は実験結果とおおむね同等の解析結果が得られており、臨界流モデルに関して特段の不確かさを考慮する必要はない。  下部プレナムの二相水位を除き、ダウンカマの二相水位 (シュラウド外水位) に関する不確かさを取り扱う。シュラウド外水位については、燃料被覆管温度及び運転員操作のどちらに対しても二相水位及びこれを決定する二相流動モデルの妥当性の有無は重要でなく、質量及び水頭のバランスだけで定まるコラプス水位が取り扱えれば十分である。このため、特段の不確かさを考慮する必要はない。
	ECS注水 (給水系・代替注水設備含む)	原子炉注水系モデル	入力値に含まれる。各系統の設計条件に基づく原子炉圧力と注水流量の関係を使用しており、実機設備仕様に対して注水流量を少なめに与え、燃料被覆管温度を高めに評価する。

第 1.4-5 表 REDY における重要現象の不確かさ等 (1 / 2)

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
炉心 (核)	核分裂出力	核特性モデル	反応度フィードバック効果の不確かさに含まれる。
	反応度フィードバック効果	反応度モデル (ボイド・ドップラ)	原子炉スクラム失敗を仮定した主蒸気隔離弁の誤閉止の事象に対して、初期の運転状態から炉心流量、原子炉圧力、炉心入口エンタルピー及び軸方向出力分布が変化した場合の、炉心一点近似手法による不確かさに、反応度係数計算及び取替炉心設計段階における不確かさを考慮し、反応度係数の保守因子の変動範囲の検討から、事象進展期間にわたる保守因子の変動範囲として以下を確認した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 動的ボイド係数：</li> <li>・ 動的ドップラ係数：</li> </ul>
		反応度モデル (ボロン)	高温停止に必要なボロン反応度の不確かさは、平衡炉心におけるほう酸水注入系の三次元未臨界性評価における停止余裕基準の-1.5%Δkに、炉心変更等の不確かさとして停止余裕基準と同等の1.5%Δkを考慮して、-3%Δkを不確かさとした。
	崩壊熱	崩壊熱モデル	学会推奨値等と崩壊熱モデル式の比較から、崩壊熱計算の不確かさが-0.1%~+0.8%であることを確認した。
炉心 (熱流動)	沸騰・ボイド率変化	炉心ボイドモデル	設計データとの比較手法から、炉心流量補正の不確かさとして、補正なしを下限、最大補正二次関数を上限として設定した。
	冷却材流量変化 性 自然循環 流量	再循環系モデル	再循環ポンプ慣性時定数の不確かさは、再循環ポンプの設計仕様から-10%~+10%であることを確認した。  モデルの仮定に含まれる。
原子炉圧力容器 (逃がし安全弁含む)	冷却材放出 (臨界流・差圧流)	逃がし安全弁モデル	モデルにおける吹出し容量は、「日本工業規格 J I S B 8210」付属書記載の算出式により計算された値をインプットデータとして用いており、吹出し容量の不確かさは-0%~+16.6%であることを確認した。

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

第 1.4-5 表 R E D Y における重要現象の不確かさ等 ( 2 / 2 )

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
原子炉圧力容器 (逃がし安全弁含む)	E C C S 注水 (給水系・代替注水設備含む)	給水系モデル	実験試験データとの比較から、主蒸気流量ゼロにおける給水エンタルピは、R E D Y コードの方が約 60kJ/kg (約 14°C) 程度高めであり、これを主蒸気流量がゼロの点での給水エンタルピの不確かさとした。また、エンタルピが低下した給水が原子炉圧力容器に到達する遅れ時間は、R E D Y コードでは厳しめに 0 秒としているが、遅れ時間 50 秒を不確かさの下限として設定した。
	ほう酸水の拡散	ほう酸水拡散モデル	設計流量 (安全要求の下限値である 182m <sup>3</sup> /h) と実力値 (250m <sup>3</sup> /h) の比較により、高压非常用炉心冷却系流量の不確かさとして+137%を設定した。 サブレーション・プール水温として保安規定で定めた上限値 35°C を設定しているが、設計仕様の常用温度下限 10°C を考慮して、不確かさを-25°C (-104kJ/kg) を下限として設定した。
原子炉格納容器	サブレーション・プール冷却	格納容器モデル	従来型 B W R 向けの試験結果から、保守的な値を使用していることを確認しており、不確かさは入力値に含まれる。 モデル式の確認により保守的に評価することを確認しており、不確かさはモデルの保守性に含まれる。

第 1.4-6 表 SCA Tにおける重要現象の不確かさ等

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
炉心 (核)	出力分布変化	出力分布モデル	入力値に含まれる。解析コードでは保守的に中央ピークに基づき軸方向出力分布を代表的に入力するため、燃料被覆管温度は高く評価される。
	燃料棒内温度変化	熱伝導モデル、燃料ペレット-被覆管ギャップ熱伝達モデル	入力値に含まれる。解析コードでは燃料ペレットと燃料被覆管間のギャップ熱伝達係数を高めに入力するため、過渡的な遷移沸騰時の燃料被覆管温度は高めに評価される。
炉心 (燃料)	燃料棒表面熱伝達	熱伝達モデル、リウエットモデル	解析コードは燃料棒表面熱伝達をおおむね保守的に評価する相関式（修正D o u g a l l - R o h s e n o w 式）を採用したことに加えて輻射熱伝達を無視しているため燃料棒表面の熱伝達係数はおおむね小さく評価される。
	沸騰遷移	沸騰遷移評価モデル	入力条件に含まれる。解析コードでは沸騰遷移が生じ易い条件として、初期条件を運転制限M C P R となるバンドル出力、バンドル流量とし、S L M C P R を基準に沸騰遷移の発生及び沸騰遷移位置を判定するよう設定しているため、燃料被覆管温度はおおむね高めに評価される。
炉心 (熱流動)	気液熱非平衡	熱伝達モデル、リウエットモデル	解析コードでは沸騰遷移後の熱伝達をおおむね保守的に評価する相関式（修正D o u g a l l - R o h s e n o w 式）を適用し、加えて輻射熱伝達を無視しているため、蒸気温度を飽和として熱伝達を取り扱っても燃料被覆管温度はおおむね高めに評価される。このため、燃料被覆管温度に対する気液の熱的非平衡の影響をおおむね保守的に取り扱っているとしてよい。

第 1.4-7 表 M A A P における重要現象の不確かさ等 ( 1 / 4 )

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
	崩壊熱	炉心モデル (原子炉出力及び崩壊熱)	入力値に含まれる。
炉心	燃料棒内温度変化	炉心モデル (炉心熱水力モデル)	TMI 事故解析における炉心ヒートアップ時の水素ガス発生、炉心領域での溶融進展状態について、TMI 事故解析結果と良く一致することを確認した。
	燃料棒表面熱伝達	溶融炉心の挙動モデル (炉心ヒートアップ)	COR A 実験解析における、燃料被覆管、制御棒及びチャネルボックスの温度変化について、測定データと良く一致することを確認した。
	燃料被覆管酸化		炉心ヒートアップ速度の増加 (被覆管酸化の促進) を想定し、仮想的な厳しい振り幅ではあるが、ジルコニウム-水反応速度の係数を 2 倍とした感度解析により影響を確認した。
	燃料被覆管変形		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ T Q U V, 大破断 L O C A シーケンスともに、炉心溶融の開始時刻への影響は小さい。</li> <li>・ 下部プレナムへの溶融炉心移行の開始時刻は、ほぼ変化しない。</li> </ul>
	沸騰・ボイド率変化	炉心モデル (炉心水位計算モデル)	T Q U X 及び中小破断 L O C A シーケンスに対して、M A A P コードと S A F E R コードの比較を行い、以下の傾向を確認した。
気液分離 (炉心水位)・対向流		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ M A A P コードでは S A F E R コードで考慮している C C F L を取り扱っていないこと等から、水位変化に差異が生じたものの、水位低下幅は M A A P コードの方が保守的であり、その後の注水操作による燃料棒有効長頂部までの水位回復時刻は両コードで同等である。</li> </ul>	
原子炉压力容器 (逃がし安全弁含む)	冷却材放出 (臨界流・差圧流)	原子炉压力容器モデル (破断流モデル)	逃がし安全弁からの流量は、設計値に基づいて計算される。
	E C C S 注水 (給水系・代替注水設備含む)	安全系モデル (非常用炉心冷却系) 安全系モデル (代替注入設備)	入力値に含まれる。

第 1.4-7 表 M A A P における重要現象の不確かさ等 ( 2 / 4 )

分類	重要現象		解析モデル	不確かさ	
	格納容器各領域間の流動	構造材との熱伝達及び内部熱伝導		HDR 実験解析では、格納容器圧力及び温度について、温度成層化を含めて傾向を良く再現でき、格納容器圧力を 1 割程度高めに評価する傾向が確認されたが、実験体系に起因するものと考えられ、実機体系においてはこの種の不確かさは小さくなるものと考えられる。また、非凝縮性ガス濃度の挙動について、解析結果が測定データと良く一致することを確認した。	C S T F 実験解析では、格納容器温度及び非凝縮性ガス濃度の挙動について、解析結果が測定データと良く一致することを確認した。
原子炉格納容器	スプレー冷却	気液界面の熱伝達	安全系モデル (格納容器スプレー) 安全系モデル (代替注水設備)	入力値に含まれる。 スプレーの水滴温度は短時間で雰囲気温度と平衡に至ることから伝熱モデルの不確かさは低い。	
	放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生		格納容器モデル (水素発生)	窒素置換による格納容器雰囲気の不活性化が行われており、酸素ガス発生は水の放射線分解に起因する。	
	格納容器ベント		格納容器モデル (格納容器の熱水力モデル)	入力値に含まれる。 M A A P コードでは格納容器ベントに関しては、設計流量に基づいて流路面積を入力値として与え、格納容器各領域間の流動と同様の計算方法が用いられている。	
	サブプレッション・プールの冷却		安全系モデル (非常用炉心冷却系)	入力値に含まれる。	

第 1.4-7 表 M A A P における重要現象の不確かさ等 (3 / 4)

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
	リロケーション	溶融炉心の挙動モデル (リロケーション)	TMI 事故解析における炉心領域での溶融進展状態について、TMI 事故分析結果と良く一致することを確認した。
	構造材との熱伝達		リロケーションの進展が早まることを想定し、炉心ノード崩壊のパラメータを低下させた感度解析により影響を確認した。 ・ TQUV, 大破断 LOCA シーケンスともに、炉心溶融時刻, 原子炉圧力容器破損時刻への影響が小さいことを確認した。
	原子炉圧力容器内 FCI (溶融炉心細粒化)	溶融炉心の挙動モデル (下部プレナムでの溶融炉心の挙動)	原子炉圧力容器内 FCI に影響する項目として、溶融ジェット径, エントレインメント係数及びデブリ粒子径をパラメータとして感度解析を行い、いずれについても、原子炉圧力容器破損時点での原子炉圧力に対する感度が小さいことを確認した。
	原子炉圧力容器内 FCI (デブリ粒子熱伝達)		
	下部プレナムでの溶融炉心の熱伝達	溶融炉心の挙動モデル (下部プレナムでの溶融炉心挙動)	TMI 事故解析における下部プレナムの温度挙動について、TMI 事故分析結果と良く一致することを確認した。 下部プレナム内の溶融炉心と上面水プールとの間の限界熱流束, 下部プレナムギャップ除熱量に係る係数に対する感度解析を行い、原子炉圧力容器破損時刻等の事象進展に対する影響が小さいことを確認した。
	原子炉圧力容器破損	溶融炉心の挙動モデル (原子炉圧力容器破損モデル)	原子炉圧力容器破損に影響する項目として制御棒駆動機構ハウジング溶接部の破損判定に用いる最大ひずみ (しきい値) をパラメータとした感度解析を行い、原子炉圧力容器破損時刻が約 13 分早まることを確認した。ただし、仮想的な厳しい条件に基づく解析結果であり、実機における影響は十分小さいと判断される。
	放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生	格納容器モデル (水素ガス発生)	炉心内のジルコニウム-水反応による水素ガス発生量は、TMI 事故解析を通じて分析結果と良く一致することを確認した。
	原子炉圧力容器内 FP 挙動	核分裂生成物 (FP) 挙動モデル	PHEBUS-FP 実験解析により、FP 放出の開始時間を良く再現できているもの、燃料被覆管温度を高め評価することにより、急激な FP 放出を示す結果となった。ただし、この原因は実験における小規模な炉心体系の模擬によるものであり、実機の大規模な体系においてこの種の不確かさは小さくなくと考えられる。

原子炉圧力容器 (炉心損傷後)  
(逃がし安全弁含む)



第 1.4-7 表 MAAP における重要現象の不確かさ等 (4 / 4)

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
原子炉格納容器 (炉心損傷後)	原子炉圧力容器外 FCI (溶融炉心細粒化)	溶融炉心の挙動モデル (格納容器下部での溶融炉心の挙動)	原子炉圧力容器外 FCI 現象に影響する項目としてエントレインメント係数及びデブリ粒子径をパラメータとして感度解析を行い、原子炉圧力容器外 FCI によって生じる圧力スパイクへの感度が小さいことを確認した。
	原子炉圧力容器外 FCI (デブリ粒子熱伝達)	溶融炉心の挙動モデル (格納容器下部での溶融炉心の挙動)	溶融炉心の拡がり実験や評価に関する知見に基づき、落下した溶融炉心は床上全体に均一に拡がると想定される。ただし、堆積形状の不確かさが想定されるため、個別プラントのペデスタルの形状や事前水張りの深さを踏まえて、拡がりを抑制した感度解析等の取扱いを行うことが適切と考えられる。
	格納容器下部床面での溶融炉心の拡がり	溶融炉心の挙動モデル (格納容器下部での溶融炉心の挙動)	MCCI 現象に関する不確かさの要因分析より、エントレインメント係数、上面熱流束及び溶融プールからクラストへの熱伝達係数をパラメータとした感度解析を行った。評価の結果、コンクリート浸食量に対して上面熱流束の感度が支配的であることを確認した。また、上面熱流束を下限值とした場合でも、コンクリート浸食量が 22.5cm 程度に収まることを確認した。
	溶融炉心と格納容器下部プールの水の伝熱	溶融炉心とコンクリートの伝熱	ACE 実験解析及び SURC-4 実験解析により、溶融炉心堆積状態が既知である場合の溶融炉心とコンクリートの伝熱及びそれに伴うコンクリート侵食挙動について妥当に評価できるとを確認した。
	溶融炉心とコンクリートの伝熱	核分裂生成物 (FP) 挙動モデル	実験で確認されている侵食の不均一性については、実験における侵食のばらつきが MAAP コードの予測侵食量の ±20% の範囲内に収まっていることから、上面熱流束の感度に比べて影響が小さいことを確認した。
	原子炉格納容器内 FP 挙動	原子炉格納容器内 FP 挙動	PHEBUS-FP 実験解析により、FP 放出の開始時刻を良く再現できているものの、燃料被覆管温度を高め評価することにより、急激な FP 放出を示す結果となった。ただし、この原因は実験における小規模な炉心体系の模擬によるものであり、実機の大規模な体系においてこの種の不確かさは小さくなると考えられる。ABCOVE 実験解析により、格納容器内のエアロゾル沈着挙動を適正に評価できることを確認した。

第 1.4-8 表 A P E X における重要現象の不確かさ等 ( 1 / 2 )

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
炉心 (核)	核分裂出力	一点近似動特性モデル (炉出力) 出力分布は二次元拡散モデル 核定数は三次元体系の炉心を空間効果 を考慮し二次元体系に縮約	ドップラ反応度フィードバック及び制御棒反応度効果の不確かさに含まれる。
	出力分布変化	二次元 (R Z) 拡散モデル エンタルピステップの進行に伴う相 対出力分布変化を考慮	解析では制御棒引抜きに伴う反応度印加曲線を厳しく設定し、さらに局所出力 ピーキング係数は対象領域にある燃料の燃焼寿命を考慮した最大値 (燃焼度 0GWd/t での値) を用いるといった保守的なモデルを適用していることから、出 力分布変化の不確かさは考慮しない。
	反応度フィードバック 効果	ドップラ反応度フィードバック効果 は出力分布依存で考慮 熱的現象は断熱、ボイド反応度フィー ドバック効果は考慮しない	ドップラ反応度フィードバックの不確かさは、H e l l s t r a n d の試験等 との比較から 7 ~ 9 % であることを確認した。 実効遅発中性子割合の不確かさは、M I S T R A L 臨界試験との比較から 4 % であることを確認した。
	制御棒反応度効果	三次元拡散モデル 動特性計算では外部入力	制御棒反応度の不確かさは、起動試験時及び炉物理試験時に行われた制御棒価 値の測定結果と解析結果の比較から 9 % 以下であることを確認した。 実効遅発中性子割合の不確かさは、M I S T R A L 臨界試験との比較から 4 % であることを確認した。

第 1.4-8 表 A P E Xにおける重要現象の不確かさ等 ( 2 / 2 )

分類	重要現象	解析モデル	不確かさ
炉心 (燃料)	燃料棒内温度変化	熱伝導モデル 燃料ペレット一被覆管ギャップ 熱伝達モデル	「反応度投入事象評価指針」において燃料棒内メッシュの「制御棒落下」解析結果への影響は 0%と報告されており，類似の事象である本事故シナシケンスについて，影響はほとんど生じないため，考慮しない。
	燃料棒表面熱伝達	単相強制対流: D i t t u s - B o e l t e r の式 核沸騰状態: J e n s e n - L o t t e s の式 膜沸騰状態 (低温時) : N S R R の実測データに基づいて導出 された熱伝達相関式	「反応度の誤投入」事象は挙動が緩やかであるため出力上昇も小さく，事象発生後はスクラム反応度印加により速やかに収束するため，除熱量に不確かさがあるとしても，燃料エンタルピーの最大値に対する影響はほとんどないため，考慮しない。
	沸騰遷移	低温時 : R o h s e n o w - G r i f f i t h の式及び K u t a t e l a d z e の式	事象を通じての表面熱流束は限界熱流束に対して充分小さくなっていることから，沸騰遷移の判定式の不確かさが燃料エンタルピーの最大値に与える影響はほとんどないため，考慮しない。

第 1.7-1 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故) (1 / 3)

分類	評価事象	高圧・低圧注水機 能喪失	高圧注水・減圧機 能喪失	全交流動力力電源 喪失	崩壊熱除去機能 喪失	原子炉停止機能 喪失	LOCA 時注水 機能喪失	格納容器バイパス (インターフェイ スシステム LOC A)
		燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度
炉心 (核)	物理現象							
	核分裂出力	○	○	○	○	○	○	○
	出力分布変化	○	○	○	○	○	○	○
	反応度フィードバック効果	○	○	○	○	○	○	○
	制御棒反応度効果	○	○	○	○	○	○	○
	崩壊熱	○	○	○	○	○	○	○
	三次元効果	○	○	○	○	○	○	○
	燃料棒内温度変化	○	○	○	○	○	○	○
	燃料棒表面熱伝達	○	○	○	○	○	○	○
	沸騰遷移	○	○	○	○	○	○	○
炉心 (燃料)	燃料被覆管酸化	○	○	○	○	○	○	○
	燃料被覆管変形	○	○	○	○	○	○	○
	三次元効果	○	○	○	○	○	○	○
	沸騰・ポイド率変化	○	○	○	○	○	○	○
炉心 (熱流 動)	気液分離 (水位変化)・対向流	○	○	○	○	○	○	○
	気液熱非平衡	○	○	○	○	○	○	○
	圧力損失	○	○	○	○	○	○	○
	三次元効果	○	○	○	○	○	○	○

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象) ー：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

※1 三次元効果の模擬は、REDY/SCATコード体系では困難であるため、米国において中性子束振動の評価実績のある原子炉過渡解析コード (TRACG) を使用して、参考的に解析して影響を確認している。

第 1.7-1 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故) (2/3)

評価事象	高圧・低圧注水機能喪失	高圧注水・減圧機能喪失	全交流動力電源喪失	崩壊熱除去機能喪失	原子炉停止機能喪失	LOCA 時注水機能喪失	格納容器バイパス (インターフェイスシステム OCA)
評価指標	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力
物理現象							
分類	原子炉圧力容器 (逃がし安全弁含む)						
	冷却材流量変化	○	○	○	○	○	○
	冷却材放出 (臨界流・差圧流)	○	○	○	○	○	○
	沸騰・凝縮・ボイド率変化	○	○	○	○	○	○
	気液分離 (水位変化) ・対向流	○	○	○	○	○	○
	気液熱非平衡	○	○	○	○	○	○
	圧力損失	○	○	○	○	○	○
	構造材との熱伝達	○	○	○	○	○	○
	ECCS 注水 (給水系・代替注水設備含む)	○	○	○	○	○	○
	ほう酸水の拡散	○	○	○	○	○	○
	三次元効果	○	○	○	○	○	○

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象)      -：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

第 1.7-1 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故) (3 / 3)

評価事象	高圧・低圧注水機能喪失	高圧注水・減圧機能喪失	全交流動力電源喪失	崩壊熱除去機能喪失	原子炉停止機能喪失	LOCA 時注水機能喪失	格納容器バイパス (インターフェイスシステム OCA)
評価指標	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力 原子炉格納容器 圧力及び温度	燃料被覆管温度 原子炉圧力
物理現象							
冷却材放出	○	○	○	○	○ <sup>※2</sup>	○	○
格納容器各領域間の流動	○	○	○	○	○	○	○
サブレーション・プールの冷却	○	○	○	○ <sup>※1</sup>	○	○	○
気液界面の熱伝達	○	○	○	○	○	○	○
構造材との熱伝達及び内部熱伝導	○	○	○	○	○	○	○
スプレイ冷却	○	○	○	○	○	○	○
放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生	○	○	○	○	○	○	○
格納容器ベント	○	○	○	○ <sup>※1</sup>	○	○	○

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象) ー：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

※1 評価事象「崩壊熱除去機能喪失」の有効性評価では、「取水機能が喪失した場合」と「残留熱除去系が故障した場合」について有効性を確認しており、取水機能が喪失した場合はサブレーション・プール冷却が、残留熱除去系が故障した場合には格納容器ベントがそれぞれ重要現象となる。

※2 第 1.7-1 表 (2 / 3) の「冷却材放出 (臨界流・差圧流)」と同一の物理現象

第 1.7-2 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故) (1/5)

分類	評価事象	評価指標	雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)	高压溶融物放出/格納容器雰囲気直接加熱	原子炉圧力/原子炉格納容器圧力	原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用	水素燃焼	溶融炉心・コンクリート相互作用
炉心 (核)	物理現象	評価指標	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉圧力	原子炉格納容器圧力		酸素濃度	コンクリート侵食量
	核分裂出力		-	-	-	-	-	-
	出力分布変化		-	-	-	-	-	-
	反応度フィードバック効果		-	-	-	-	-	-
	制御棒反応度効果		-	-	-	-	-	-
	崩壊熱		○	○	○	○	○	○
	三次元効果		-	-	-	-	-	-
	燃料棒内温度変化		○	○	○	○	○	○
	燃料棒表面熱伝達		○	○	○	○	○	○
	沸騰遷移		-	-	-	-	-	-
炉心 (燃料)	燃料被覆管酸化		○	○	○	○	○	○
	燃料被覆管変形		○	○	○	○	○	○
	三次元効果		-	-	-	-	-	-
	沸騰・ボイド率変化		○	○	○	○	○	○
炉心 (熱流動)	気液分離 (水位変化)・対向流		○	○	○	○	○	○
	気液熱非平衡		-	-	-	-	-	-
	圧力損失		-	-	-	-	-	-
	三次元効果		-	-	-	-	-	-

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象)      -：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

第 1.7-2 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故) (2/5)

評価事象	評価指標	票囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)	原子炉格納容器圧力及び温度	高压溶融物放出/格納容器雰囲気直接加熱	原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用	水素燃焼	溶融炉心・コンクリート相互作用
物理現象		原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉圧力		原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
冷却材流量変化		-	-	-	-	-	-
冷却材放出 (臨界流・差圧流)		-	○			-	-
沸騰・凝縮・ボイド率変化		-	-			-	-
気液分離・対向流		-	-			-	-
気液熱非平衡		-	-			-	-
圧力損失		-	-			-	-
構造材との熱伝達		-	-			-	-
ECCS注水 (給水系・代替注水設備含む)		○	-			○	-※1
ほう酸水の拡散		-	-			-	-
三次元効果		-	-			-	-

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象) -：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

※1 評価事象「溶融炉心・コンクリート相互作用」の有効性評価の評価事故シナリオにおいては、ECCS注水 (給水系・代替注水設備含む) を実施せず、その有効性を確認していることから、当該の事故シナリオにおいては、ECCS注水 (給水系・代替注水設備含む) は重要現象とならない。



第 1.7-2 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故) (3/5)

評価事象	評価指標	雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)	高圧溶融物放出/格納容器雰囲気直接加熱	原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用	水素燃焼	溶融炉心・コンクリート相互作用
物理現象	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	原子炉格納容器圧力	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
冷却材放出	○	-	-	-	-	-
格納容器各領域間の流動	○	○	-	○	○	-
サブレーション・プールの冷却	○※1	○	-	-	○	-
気液界面の熱伝達	○	○	-	-	-	-
構造材との熱伝達及び内部熱伝導	○	○	-	-	-	-
スプレイ冷却	○	○	-	-	○	-
放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生	○※2	○※2	-	-	○※2	-
格納容器ベント	○※1	○	-	-	-※3	-

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象) ー：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

※1 評価事象「雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)」の有効性評価においては、「残留熱代替除去系を使用しない場合」の有効性評価はサブレーション・プールの冷却が、残留熱代替除去系を使用しない場合は格納容器ベントがそれぞれ重要現象となる。

※2 物理現象「放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生」の評価指標への影響については、評価事象「水素燃焼」において、解析条件の不確かさとして整理し、評価指標への影響を確認する。

※3 評価事象「水素燃焼」の有効性評価においては、格納容器ベントにおいては、格納容器ベントを実施せず、その有効性を確認していることから、当該の事故シナリオにおいては、格納容器ベントは重要現象とならない。

第 1.7-2 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故) (4/5)

分類	評価事象 物理現象	評価指標	雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)	原子炉格納容器圧力及び温度	高圧溶融物放出/格納容器雰囲気気直接加熱	原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用	水素燃焼	溶融炉心・コンクリート相互作用
			原子炉格納容器圧力	原子炉圧力	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量	
原子炉圧力容器 (炉心損傷後)	リロケーション		○	○	○	○	○	○
	原子炉容器内 FCI (溶融炉心細粒化)		-	○	○	-	-	-
	原子炉容器内 FCI (デブリ粒子熱伝達)		-	○	○	-	-	-
	溶融炉心の再臨界		-	-	-	-	-	-
	構造材との熱伝達		○	○	○	○	○	○
	下部ブレナムでの溶融炉心の熱伝達		○※1	○	○	-	-	○
	原子炉圧力容器破損		○※1	○	○	○	○※1	○
	放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生		○※2	-	-	-	○※2	-
	原子炉圧力容器内FP挙動		○	-	-	-	○	○

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象) ー：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

※1 評価事象「雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)」の有効性評価では、当該物理現象の発生に至らないが、当該物理現象による評価指標への影響については、評価事象「高圧溶融物放出/格納容器雰囲気気直接加熱」の有効性評価の中で確認できる。

※2 物理現象「放射線水分解等による水素ガス・酸素ガス発生」の評価指標への影響については、評価事象「水素燃焼」において、解析条件の不確かさとして整理し、評価指標への影響を確認する。

第 1.7-2 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転中の原子炉における重大事故) (5/5)

分類	評価事象	評価指標		原子炉格納容器外への 溶融燃料-冷却材相 相互作用	水素燃焼	溶融炉心・コンクリート相互作用
		物理現象	評価指標			
原子炉格納容器 (炉心損傷後)	原子炉格納容器破損後の格納容器下部床面での溶融炉心の拡がり	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	格納容器下部床面での溶融炉心の拡がり	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	内部構造物の溶融、破損	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	原子炉格納容器外 F C I (溶融炉心細粒化)	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	原子炉格納容器外 F C I (デブリ粒子熱伝達)	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	格納容器直接接触	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	溶融炉心と格納容器下部プール水との伝熱	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	溶融炉心とコンクリートの伝熱	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	コンクリート分解及び非凝縮性ガス発生	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	溶融炉心の再臨界	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量
	原子炉格納容器内 F P 挙動	原子炉格納容器破損後の格納炉心放出	原子炉格納容器圧力及び温度	原子炉格納容器圧力	酸素濃度	コンクリート侵食量

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象) ー：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

※1 評価事象「雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)」の有効性評価では、当該物理現象の発生に至らないが、当該物理現象による評価指標への影響については、評価事象「原子炉格納容器外への溶融燃料-冷却材相互作用」、「溶融炉心・コンクリート相互作用」の有効性評価の中で確認できるとする。

第 1.7-3 表 評価項目となるパラメータに有意な影響を与える重要現象一覧  
(運転停止中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故)

評価事象		反応度の誤投入
分類	評価指標	燃料エンタルピー
	物理現象	
炉心 (核)	核分裂出力	○
	出力分布変化	○
	反応度フィードバック効果	○
	制御棒反応度効果	○
	崩壊熱	—
	三次元効果	—
炉心 (燃料)	燃料棒内温度変化	○
	燃料棒表面熱伝達	○
	沸騰遷移	○
	燃料被覆管酸化	—
	燃料被覆管変形	—
	三次元効果	—
炉心 (熱流動)	沸騰・ボイド率変化	—
	気液分離 (水位変化)・対向流	—
	気液熱非平衡	—
	圧力損失	—
	三次元効果	—
原子炉圧力容器 (逃がし安全弁含む)	冷却材流量変化	—
	冷却材放出 (臨界流・差圧流)	—
	沸騰・凝縮・ボイド率変化	—
	気液分離 (水位変化)・対向流	—
	気液熱非平衡	—
	圧力損失	—
	構造材との熱伝達	—
	ECCS注水 (給水系・代替注水設備含む)	—
	ほう酸水の拡散	—
	三次元効果	—

○：評価項目となるパラメータに有意な影響を与える現象 (重要現象)

—：評価項目となるパラメータに有意な影響を与えない現象

過渡事象	原子炉停止	圧力バウンダリ健全性	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	事故シナリオ	事故シナリオグループ
							炉心損傷なし	炉心損傷なし
							過渡事象 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
							炉心損傷なし	炉心損傷なし
							過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
							過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失
							過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗	高圧注水・減圧機能喪失
							炉心損傷なし	炉心損傷なし
							過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
							炉心損傷なし	炉心損傷なし
							過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性失敗 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去機能失敗	崩壊熱除去機能喪失
							過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性失敗 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失
							過渡事象 + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失

外部電源喪失	直流電源	交流電源	圧力バウンダリ健全性	高圧炉心冷却	事故シナリオ	事故シナリオグループ
						過渡事象へ
						全交流動力電源喪失*
						崩壊熱除去機能喪失
						全交流動力電源喪失
						崩壊熱除去機能喪失
						全交流動力電源喪失
						崩壊熱除去機能喪失
						全交流動力電源喪失
						崩壊熱除去機能喪失
						全交流動力電源喪失

※ 高圧炉心スプレイス系が成功した事故シナリオを「崩壊熱除去機能喪失」、高圧炉心スプレイス系に失敗し原子炉隔離時冷却系が成功した事故シナリオを「全交流動力電源喪失」に分類

第1.2-1図 内部事象運転時レベル1 PRAイベントツリー (1/3)

手動停止 サポート系喪失	圧力バウンダリ 健全性	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	事故シナリオ	事故シナリオグループ
手動停止 サポート系喪失	圧力バウンダリ 健全性	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	炉心損傷なし	炉心損傷なし
						手動停止/サポート系喪失+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
						炉心損傷なし	炉心損傷なし
						手動停止/サポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
						手動停止/サポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水・減圧機能喪失
						手動停止/サポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	高圧注水・減圧機能喪失
						炉心損傷なし	炉心損傷なし
						手動停止/サポート系喪失+圧力バウンダリ健全性失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
						炉心損傷なし	炉心損傷なし
						手動停止/サポート系喪失+圧力バウンダリ健全性失敗+高圧炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
手動停止/サポート系喪失+圧力バウンダリ健全性失敗+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失						

第 1.2-1 図 内部事象運転時レベル 1 PRA イベントツリー (2/3)

冷却材喪失 (LOCA)	原子炉停止	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	事故シケケンス	事故シケケンスグループ
					崩壊熱除去	炉心損傷なし	炉心損傷なし
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗 冷却材喪失 (中破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗 冷却材喪失 (小破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
						炉心損傷なし	炉心損傷なし
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗 冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗 冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	LOCA時注水機能喪失
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗	LOCA時注水機能喪失
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 原子炉停止失敗 冷却材喪失 (中破断LOCA) + 原子炉停止失敗 冷却材喪失 (小破断LOCA) + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失

インターフェイシステムLOCA	運転員による隔離操作	事故シケケンス	事故シケケンスグループ
		手動停止/サポート系喪失へ 格納容器バイパス (インターフェイシステムLOCA)	手動停止/サポート系喪失へ 格納容器バイパス (インターフェイシステムLOCA)

第 1.2-1 図 内部事象運転時レベル1 PRAイベントツリー (3/3)

地震	外部電源喪失	原子炉建物損傷	原子炉格納容器損傷	原子炉圧力容器損傷	格納容器バイパス	冷却材喪失 (E-LOCA※1)	制御室建物損傷	廃棄物処理建物損傷	計装・制御系喪失	直流電源喪失	交流電源・補機冷却系喪失	事故シナリオケケンス	事故シナリオケケンスグループ
												炉心損傷なし	炉心損傷なし
												外部電源喪失	外部電源喪失へ
												外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失	全交流動力電源喪失へ
												外部電源喪失 + 直流電源喪失	全交流動力電源喪失
												計装・制御系喪失	※2
												廃棄物処理建物損傷	※2
												制御室建物損傷	※2
												Excessive LOCA	※2
												格納容器バイパス	※2
												原子炉圧力容器損傷	※2
												原子炉格納容器損傷	※2
												原子炉建物損傷	※2

※1 Excessive LOCA

※2 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結で整理

第 1.2-2 図 地震レベル 1 PRA 階層イベントツリー



外部電源 喪失	原子炉 停止	S R V 開	S R V 再閉鎖	高压炉心 冷却	原子炉 減圧	低压炉心 冷却	崩壊熱 除去	事故シナリオ	事故シナリオ グループ
外部電源 喪失	原子炉 停止	S R V 開	S R V 再閉鎖	高压炉心 冷却	原子炉 減圧	低压炉心 冷却	崩壊熱 除去	炉心損傷なし	炉心損傷なし
								外部電源喪失+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
								炉心損傷なし	炉心損傷なし
								外部電源喪失+高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
								外部電源喪失+高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	高压・低压注水機能喪失
								外部電源喪失+高压炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	高压注水・減圧機能喪失
								炉心損傷なし	炉心損傷なし
								外部電源喪失+S R V再閉鎖失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
								炉心損傷なし	炉心損傷なし
								外部電源喪失+S R V再閉鎖失敗+高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失
外部電源喪失+S R V再閉鎖失敗+高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	高压・低压注水機能喪失								
Excessive LOCA								※	
外部電源喪失+原子炉停止失敗								原子炉停止機能喪失	

※ 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結で整理

第 1.2-3 図 地震レベル 1 PRA イベントツリー (1 / 2)

全交流動力 電源喪失	原子炉停止	S R V 開	S R V 再閉鎖	高圧炉心冷却	事故シナリオ	事故シナリオ グループ
外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失	外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + 高圧炉心冷却失敗	外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + S R V 再閉鎖	外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + S R V 再閉鎖 + S R V 再閉鎖	外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + S R V 再閉鎖 + S R V 再閉鎖 + S R V 再閉鎖	外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + S R V 再閉鎖 + S R V 再閉鎖 + S R V 再閉鎖 + S R V 再閉鎖	全交流動力電源喪失
						全交流動力電源喪失
						全交流動力電源喪失
Excessive LOCA	Excessive LOCA	Excessive LOCA	Excessive LOCA	Excessive LOCA	Excessive LOCA	※
						原子炉停止機能喪失

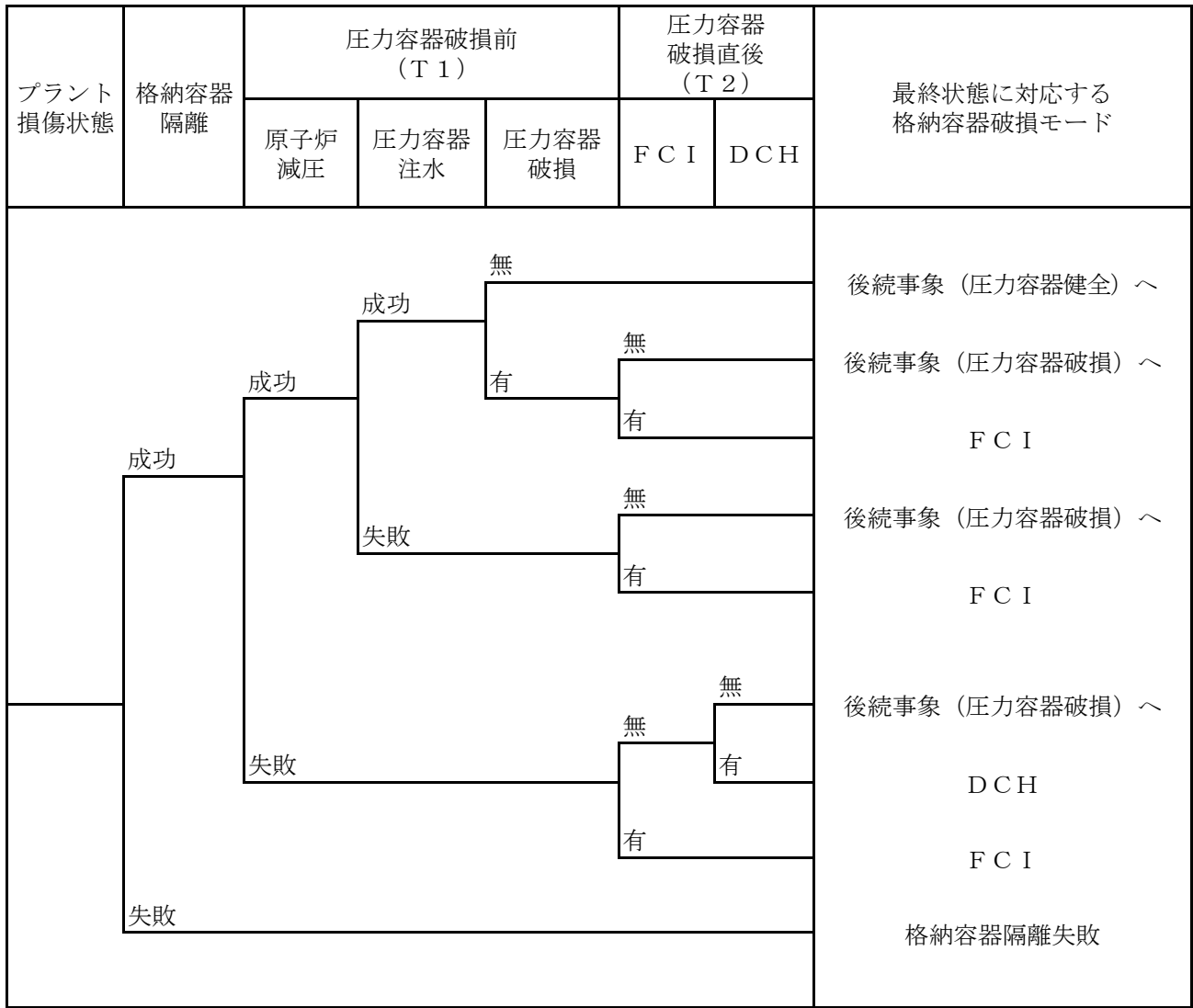
※ 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結で整理

第 1.2-3 図 地震レベル 1 PRA イベントツリー (2 / 2)

津波	直接炉心損傷に至る事象	事故シナリオ	最終状態
	津波高さ EL20m 以下	炉心損傷なし	炉心損傷なし
	津波高さ EL20m 超過	直接炉心損傷に至る事象	※

※ 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結事象として整理

第 1.2-4 図 津波レベル 1 PRA 階層イベントツリー



第1.2-5図 格納容器イベントツリー(1/3)

事故後期 (T3)			最終状態に対応する 格納容器破損モード
後続事象 (圧力容器健全)	格納容器注水	長期冷却	
成功	成功	成功	圧力容器内で事故収束
		失敗	格納容器過圧・過温破損
失敗	失敗	成功	圧力容器内で事故収束
		失敗	格納容器過圧・過温破損

第1.2-5図 格納容器イベントツリー(2 / 3)

事故後期 (T3)					最終状態に対応する 格納容器破損モード
後続事象 (圧力容器破損)	格納容器 注水	F C I	デブリ 冷却	長期冷却	
成功	成功	無	成功	成功	格納容器内で事故収束
				失敗	格納容器過圧・過温破損
失敗	失敗	有	失敗	成功	格納容器過圧・過温破損 M C C I
				失敗	F C I 格納容器過圧・過温破損

第1.2-5図 格納容器イベントツリー(3 / 3)

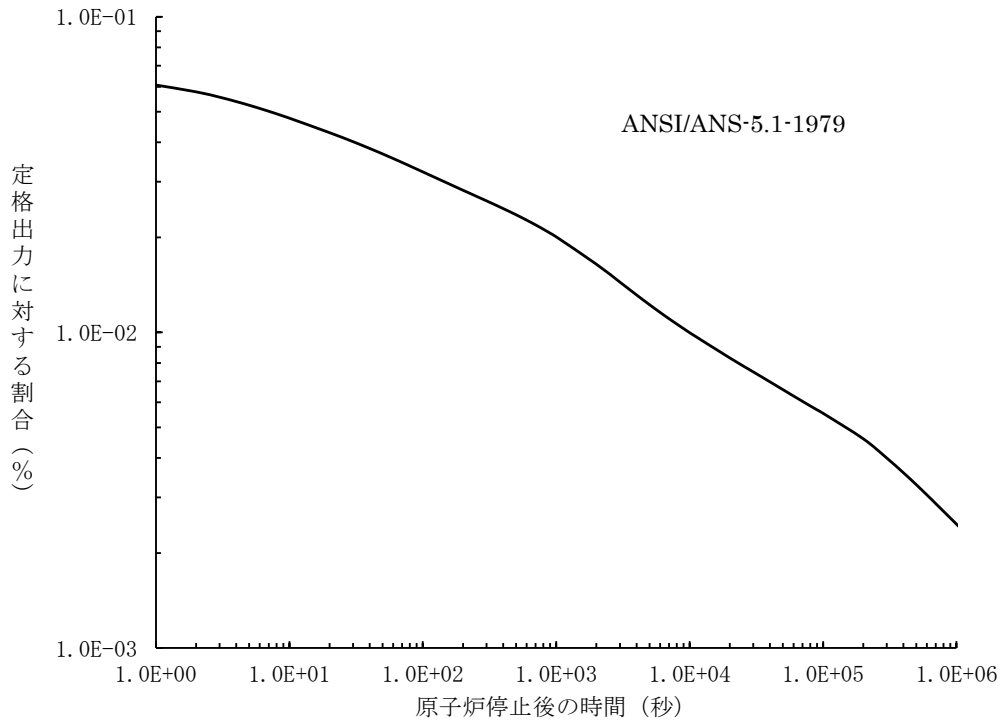
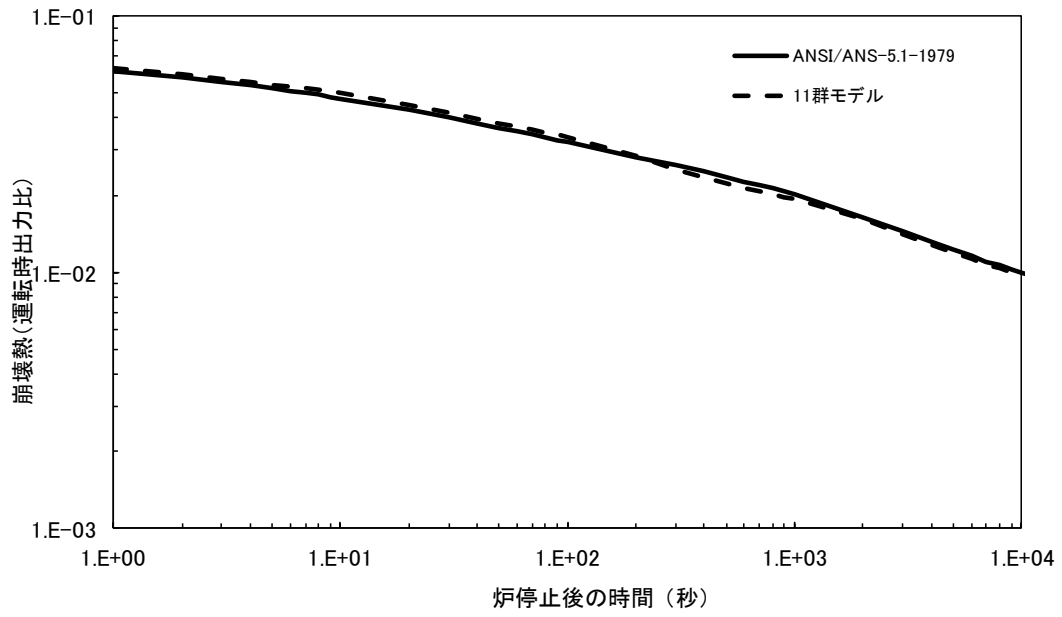
外部電源喪失	直流電源	交流電源※1	崩壊熱除去・炉心冷却※2	事故シーケンス	事故シーケンスグループ
				燃料損傷なし	燃料損傷なし
				外部電源喪失+崩壊熱除去・炉心冷却失敗	崩壊熱除去機能喪失
				外部電源喪失+交流電源喪失	全交流動力電源喪失
				外部電源喪失+直流電源喪失	全交流動力電源喪失

崩壊熱除去機能喪失※3	崩壊熱除去・炉心冷却※2	事故シーケンス	事故シーケンスグループ
		燃料損傷なし	燃料損傷なし
		崩壊熱除去機能喪失+崩壊熱除去・炉心冷却失敗	崩壊熱除去機能喪失

原子炉冷却材の流出※4	流出隔離・炉心冷却※5	事故シーケンス	事故シーケンスグループ
		燃料損傷なし	燃料損傷なし
		原子炉冷却材の流出+流出隔離・炉心冷却失敗	原子炉冷却材の流出

- ※1 非常用ディーゼル発電機全台が機能喪失を示すヘディング
- ※2 崩壊熱除去機能（残留熱除去系）及び注水機能（復水輸送系，燃料プール補給水系）の確保に失敗するかどうかを示すヘディング
- ※3 残留熱除去系機能喪失〔フロントライン〕及び補機冷却系機能喪失
- ※4 残留熱除去系切替・制御棒駆動機構・局部出力領域モニタ，原子炉浄化系ブロー時における操作誤りによる原子炉冷却材流出
- ※5 事象を認知し，注水に成功するかどうかを示すヘディング（崩壊熱除去機能（残留熱除去系）には期待しない，漏えい箇所隔離の成功・失敗により注水機能の成功基準が異なる）

### 第1.2-6図 停止時レベル1 P R A イベントツリー



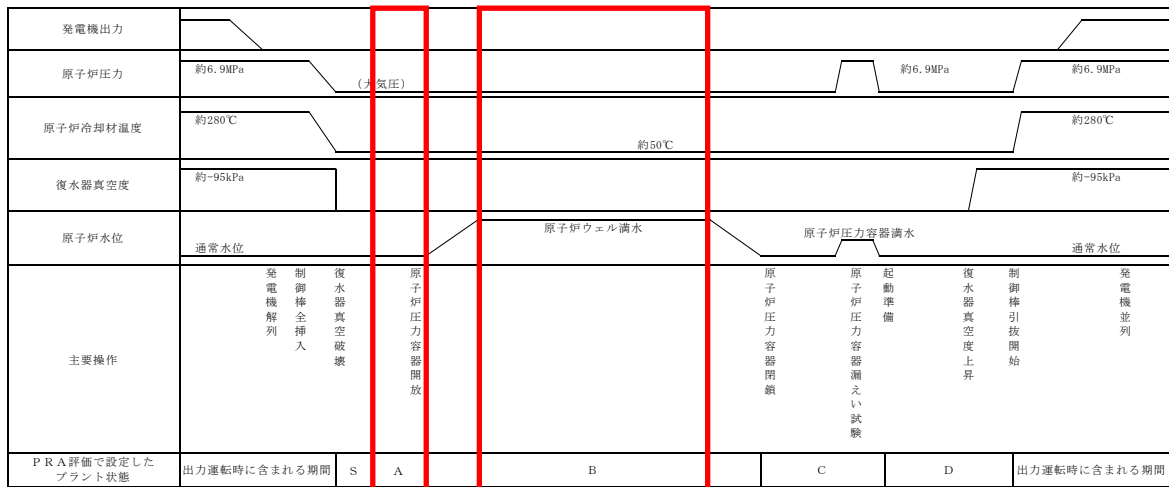
第 1.5-1 図 原子炉停止後の崩壊熱

定期事業者検査工程の概要

反応度誤投入はサイクル初期を想定

崩壊熱除去機能喪失（残留熱除去系の故障による停止時冷却系機能喪失）  
及び全交流動力電源喪失の有効性評価で想定する原子炉の状態

原子炉冷却材の流出の有効性評価で想定する原子炉の状態



保安規定上の設備とS/A対策として新規に要求する設備

原子炉の状態	運転	運転→起動 起動→高温停止	低温停止	燃料交換	燃料交換 (原子炉水位がオーバーフロー水位付近 または 残留熱除去系（原子炉停止時冷却モード） が停止した場合も冷却材温度を65℃ 以下に保てる期間)	燃料交換	低温停止	起動→運転
残留熱除去系 (原子炉停止時冷却モード)	—	2系列動作可能 <sup>※1</sup>	1系列運転, 1系列動作可能 <sup>※1</sup>	1系列運転, 1系列動作可能 <sup>※2</sup>	1系列運転 <sup>※2</sup>	1系列運転, 1系列動作可能 <sup>※2</sup>	1系列運転, 1系列動作可能 <sup>※1</sup>	—
原子炉補機冷却系	2	期待されている残留熱除去系（原子炉停止時冷却モード）を機能する系列				2		
原子炉隔離時冷却系	1 <sup>※3</sup>	—				1 <sup>※3</sup>		
非常用炉心冷却系	高圧炉心スプレイ系 1 低圧炉心スプレイ系 1 低圧注水系 (格納容器冷却系) 3 (2) 自動減圧系 6 <sup>※4</sup>	非常用炉心冷却系（自動減圧系を除く）2系列または非常用炉心冷却系（自動減圧系を除く）1系列および復水輸送系1系列				非常用炉心冷却系（自動減圧系を除く）2系列または非常用炉心冷却系（自動減圧系を除く）1系列および復水輸送系1系列		1 1 3 (2) 6 <sup>※4</sup>
低圧原子炉代替注水系	新規に確保を要定							
燃料プールのスプレイ系	新規に確保を要定							
非常用ディーゼル発電機等	3	2 <sup>※5</sup>				3		
常設代替交流電源設備	新規に確保を要定							

※1 残留熱除去系（原子炉停止時冷却モード）が停止した場合においても、原子炉冷却材温度を100℃未満に保つことができる場合を除く  
 ※2 残留熱除去系（原子炉停止時冷却モード）が停止した場合においても、原子炉冷却材温度を65℃以下に保つことができる場合を除く  
 ※3 原子炉圧力が0.74MPa[gage]以上の場合  
 ※4 原子炉圧力が0.78MPa[gage]以上の場合  
 ※5 自号炉のディーゼル発電機1台を含む

図 1.2.1-1 定期事業者検査工程の概要と保安規定上の要求設備



## 重大事故等対策の有効性評価における作業ごとの成立性確認結果について

重大事故等対策の有効性評価において行われる各作業について，作業（操作）の概要，作業（操作）時間及び操作の成立性について下記の要領で確認した。

個別確認結果とそれに基づく重大事故等対策の成立性確認を「表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認」に示す。

「操作名称」	
1. 作業（操作）概要	: 作業項目，具体的な運転操作・作業内容，対応する事故シーケンスグループ等の番号
2. 操作時間	
(1) 想定時間 (要求時間)	: 移動時間＋操作時間に余裕を見て10分単位で値を設定。ただし，時間余裕が少ない操作については，1分単位で値を設定
(2) 操作時間 (実績又は模擬)	: 現地への移動時間（重大事故等発生時については放射線防護具着用時間は別途確保），訓練による実績時間，模擬による想定時間等を記載
3. 操作の成立性について	
(1) 状況	: 対応者，操作場所を記載
(2) 作業環境	: 現場の作業環境について記載 アクセス性，重大事故等の状況を仮定した環境による影響，放射線防護具を着用する場合の考慮事項，暗闇の場合の考慮事項 他
(3) 連絡手段	: 各所との連絡手段について記載
(4) 操作性	: 現場作業の操作性について記載
(5) その他	: 対応する「実用発電用原子炉に係る発電用原子炉設置者の重大事故の発生及び拡大の防止に必要な措置を実施するために必要な技術的能力に係る審査基準」に係る適合性状況説明資料（以下「技術的能力」という。）の条文番号を記載

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (1/17)

作業項目	作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の想定時間	訓練等からの実績時間	状況	作業環境			連絡手段	操作性	技術的 能力基準 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	照明			
						その他 (アクセサリ等)					
常設代替交流電源 設備起動操作	常設代替交流電源設備起動、受電操作	2.1	10分	4分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常設照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	-	中央制御室での操 作は、通常の運転 操作で実施する操 作と同様であるこ とから、容易に操 作できる	1.14
		2.3.1									
低圧原子炉代替注水 系 (常設) による 原子炉注水	低圧原子炉代替注水系 (常設) 起動/運転 確認/系統構成  低圧原子炉代替注水系 (常設) 注水操作 ・低圧原子炉代替注水系 (常設) 注水弁操作	2.1	10分	8分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常設照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	-	中央制御室での操 作は、通常の運転 操作で実施する操 作と同様であるこ とから、容易に操 作できる	1.4
		2.4.2									
低圧原子炉代替 注水槽への補給	輸送貯水槽 (西1/西2) から低圧原子炉代替 注水槽への補給 ・大電送水車による低圧原子炉代替注水槽への 補給準備 (大電送水車配置、ホース展張・接 続)  輸送貯水槽 (西1/西2) から低圧原子炉代替 注水槽への補給 ・大電送水車による低圧原子炉代替注水槽への 補給	2.1	2時間10分	1時間41分	緊急時対策要員 (現場)	- (屋外での操作)	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	車向の作業用照明・ ヘッドライト及び職 中電灯により、夜間 における作業性を確 保している	衛星電話設備 (固 定型、携帯型)、 無線通信設備 (固 定型、携帯型)、 電力伝送通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	大電送水車からの ホース接続は、汎 用の組合金具であ り、容易に実施可 能である また、作業エリア 周辺には支障とな る設備は無く、十 分な作業スペース を確保している	1.13
		2.4.2									
原子炉急減圧操作	原子炉急減圧操作 ・逃がし安全弁 (自動減圧機能付き) 手動開放操作	2.1	10分	2分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常設照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	-	中央制御室での操 作は、通常の運転 操作で実施する操 作と同様であるこ とから、容易に操 作できる	1.3
		2.3.1									

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (2/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実績時間	状況	温度・湿度	作業環境			照明	その他 (アクセサリート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
							放射線環境	放熱環境	その他					
格納容器代替スプレイ系(可搬型)による格納容器スプレイ操作	格納容器代替スプレイ系(可搬型)系統構成 ・格納容器代替スプレイ系(可搬型)系統構成	2.1	10分	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温については、空調の停止により緩慢に上昇する可能性があるが、作業に支障を及ぼす種の影響はなく、通常運転状態と同程度である	【炉心損傷がない場合】 常運転時と同程度	常用照明消灯時においてLEDライト(三脚タイプ)、LEDライト(ランタンタイプ)及びヘッドライトを配備しているため、操作可能である	周辺には支障となる設備はない	-	中央制御室での操作は、通常の運転操作と同様であることから、容易に操作できる	-	1.6	
		2.4.2												
		2.6												
		3.1.3												
格納容器代替スプレイ系(可搬型)系統構成	格納容器代替スプレイ系(可搬型)系統構成 ・格納容器代替スプレイ系(可搬型)系統構成	2.3.1	40分	18分	運転員 (現場)	中央制御室の室温については、空調の停止により緩慢に上昇する可能性があるが、作業に支障を及ぼす種の影響はなく、通常運転状態と同程度である	【炉心損傷がない場合】 常運転時と同程度	常用照明消灯時においてLEDライト(三脚タイプ)、LEDライト(ランタンタイプ)及びヘッドライトを配備しているため、操作可能である	周辺には支障となる設備はない	-	中央制御室での操作は、通常の運転操作と同様であることから、容易に操作できる	-	1.6	
		2.3.2												
		2.3.3												
		2.3.4												
格納容器代替スプレイ操作	格納容器代替スプレイ系(可搬型)スプレイ操作 ・格納容器代替スプレイ系(可搬型)スプレイ弁操作	2.1	適宜実施	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温については、空調の停止により緩慢に上昇する可能性があるが、作業に支障を及ぼす種の影響はなく、通常運転状態と同程度である	【炉心損傷がない場合】 常運転時と同程度	常用照明消灯時においてLEDライト(三脚タイプ)、LEDライト(ランタンタイプ)及びヘッドライトを配備しているため、操作可能である	周辺には支障となる設備はない	-	中央制御室での操作は、通常の運転操作と同様であることから、容易に操作できる	-	1.6	
		2.4.2												
		2.6												
		3.1.3												
格納容器代替スプレイ操作	格納容器代替スプレイ系(可搬型)スプレイ操作 ・格納容器代替スプレイ系(可搬型)スプレイ弁操作(現物)	2.3.1	適宜実施	-	緊急時対策要員 (現場)	-	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	車内の作業用照明・ヘッドライト及び夜間中継灯により、夜間における作業性を確保している	アクセサリ上に支障となる設備はない	-	作業エリア周辺には支障となる設備は無く、十分な作業スペースを確保している	-	1.6	
		2.3.2												
		2.3.3												
		2.3.4												
格納容器ベント準備操作 ・格納容器ベント準備(第2弁操作)	格納容器ベント準備操作 ・格納容器ベント準備(第2弁操作)	2.1	10分	8分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温については、空調の停止により緩慢に上昇する可能性があるが、作業に支障を及ぼす種の影響はなく、通常運転状態と同程度である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常用照明消灯時においてLEDライト(三脚タイプ)、LEDライト(ランタンタイプ)及びヘッドライトを配備しているため、操作可能である	周辺には支障となる設備はない	-	中央制御室での操作は、通常の運転操作と同様であることから、容易に操作できる	-	1.5 1.7	
		2.4.2												
		2.6												
		3.1.3												
格納容器ベント操作 ・格納容器ベント準備(第1弁操作)	格納容器ベント操作 ・格納容器ベント準備(第1弁操作)	2.1	10分	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温については、空調の停止により緩慢に上昇する可能性があるが、作業に支障を及ぼす種の影響はなく、通常運転状態と同程度である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常用照明消灯時においてLEDライト(三脚タイプ)、LEDライト(ランタンタイプ)及びヘッドライトを配備しているため、操作可能である	周辺には支障となる設備はない	-	中央制御室での操作は、通常の運転操作と同様であることから、容易に操作できる	-	1.5 1.7	
		2.4.2												
2.6														
3.1.3														

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (3/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実績時間	状況	作業環境			照明	その他 (アクセスルート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力基準 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	その他					
格納容器フィルタベ ント系による原子炉 格納容器除熱操作	格納容器ベント準備操作 ・FCVS排気ラインドレン排出弁閉操作	2.1	40分	31分	緊急時対策要員 (現場)	-	-	【炉心損傷がない場合】 常運転時と同程度	ヘッドライト及び機 中電灯により、夜間 における作業性を確 保している	アクセスルート上に 支障となる設備はな い	衛星電話設備(固 定型、携帯型)、 無線通信設備(固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	操作に必要な工具 はなく、通常の弁操 作と同様であるた め、容易に実施可 能である	1.5 1.7
		2.4.2						【炉心損傷がある場合】 約 3mSv 以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設 定した(作業40分+移動30 分=1時間10分)					
燃料補給準備 ・非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンク等 からタンクローリへの補給	燃料補給準備 ・大型送水ポンプ車への給油 ・可搬式重油供給装置への給油	2.1	2時間30分	2時間12分	緊急時対策要員 (現場)	-	-	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	車面の作業用照明・ ヘッドライト及び機 中電灯により、夜間 における作業性を確 保している	アクセスルート上に 支障となる設備はな い	衛星電話設備(固 定型、携帯型)、 無線通信設備(固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	複雑な操作手順は なく、タンクロー リ内の各操作(ハッ チ開放等)も同時 並行して行える作 業が主体であるた め、操作性に支障 はない	1.14
		2.3.1						【炉心損傷がある場合】 給油準備(タンクローリ)： 作業に伴う被ばく線量は 27mSv以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設 定した(作業2時間30分+ 移動30分=3時間)					
各機器への給油	適宜実施 ・大型送水車への給油 ・可搬式重油供給装置への給油	2.1※1	適宜実施	大量送水車 ：12分 大型送水 ポンプ車： 16分 可搬式重油 供給装置 ：8時間(※4) に1回給油	緊急時対策要員 (現場)	-	-	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	車面の作業用照明・ ヘッドライト及び機 中電灯により、夜間 における作業性を確 保している	アクセスルート上に 支障となる設備はな い	衛星電話設備(固 定型、携帯型)、 無線通信設備(固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	複雑な操作手順は なく、タンクロー リ内の各操作(ハッ チ開放等)も同時 並行して行える作 業が主体であるた め、操作性に支障 はない	1.14
		2.3.1※1						【炉心損傷がある場合】 給油準備(タンクローリ)： 作業に伴う被ばく線量は 19mSv以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設 定した(作業69分+移動30 分=1時間39分)					

※1：大量送水車のみ  
※2：大量送水車及び大型送水ポンプ車のみ  
※3：大型送水ポンプ車のみ  
※4：各機器の燃料が枯渇しないために必要な補給時間の間隔(許容時間)

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (4/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実演時間	状況	作業環境				技術的 能力審査 基準 No.		
						温度・湿度	放射線環境	照明	その他 (アクセサリート等)		操作性	
残留熱除去系 (サブプレッジョン・ プール水冷却モー ド) 運転操作	残留熱除去系 (サブプレッジョン・プール水冷却 モード) 運転 ・残留熱除去系起動操作	2.4.1	10分	6分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常運 転操作で実施す ることから、容 易に操作でき る	1.6	
		2.7		3分								
		2.2		3分		運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない		
残留熱除去系 (低圧 注水モード) から残 留熱除去系 (原子和 停止時冷却モード) 切替え	残留熱除去系 (低圧注水モード) から残留熱 除去系 (サブプレッジョン・プール水冷却モー ド) 切替え	2.5	6分	6分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常運 転操作で実施す ることから、容 易に操作でき る	1.4	
		2.2		11分								
		5.1 5.3		20分	14分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない		中央制御室での 操作は、通常運 転操作で実施す ることから、容 易に操作でき る
残留熱除去系 (低圧 注水モード) から残 留熱除去系 (原子和 停止時冷却モード) 切替え	残留熱除去系 (原子和停止時冷却モード) 系統 構成	2.2		5分							1.4	
		5.1 5.2 5.3		20分	7分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	通常運転時と同程度	通常運転時と同程度	通常運転時と同程度		通常運転時と同程度

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (5/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実績時間	状況	作業環境				その他 (アクセサリート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準No.
						温度・湿度	放射線環境	照明	その他				
残留熱除去系(サブ レクション・プール 水冷却モード)から 残留熱除去系(原子 炉停止時冷却モー ド)切替え	残留熱除去系(原子炉停止時冷却モード)系統 構成	2.7	20分	12分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト(ランタン タイプ)及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障とな る設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す ることから、容 易に操作できる	1.3		
						中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト(ランタン タイプ)及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障とな る設備はない					
残留熱除去系(原子 炉停止時冷却モー ド)運転操作	残留熱除去系(原子炉停止時冷却モード)起動 ・残留熱除去系及び低圧原子炉代替注水系 注水弁操作	2.2 2.7 5.1 5.2 5.3	10分 運転継続	5分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリート上に 支障となる設備はな い	—	通常運転時等に 行う予備操作と同 等であり、容易に 作業できる 操作対象弁には、 暗闇でも識別し やすいように反射 テープを施して いる	1.3 1.4		
						中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリート上に 支障となる設備はな い					
低圧原子炉代替注水 系(可搬型)による 原子炉注水	低圧原子炉代替注水系(可搬型)準備操作 ・低圧原子炉代替注水系(可搬型)による原子 炉注水準備 (大量送水車配置、ホース取掛・接続)	2.3.1 2.3.2 2.3.3 2.3.4	2時間10分 運転継続	1時間11分 運転継続	緊急時対策要員 (現場)	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	【炉心損傷がある場合】 作業に伴う振動は 26msv以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設定 した(作業2時間20分+移動 35分=2時間55分)	大量送水車から のホース接続は、 汎用の結合金具 であり、容易に装 設可能である。 また、作業エリア 周辺には支障とな る設備は無く、 十分な作業スベ ールを確保して いる	—	所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備及び 有線式通信設備 のうち、使用可能 な設備により、中 央制御室との連 絡が可能である	1.4		
						【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	【炉心損傷がある場合】 作業に伴う振動は 26msv以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設定 した(作業2時間20分+移動 35分=2時間55分)	大量送水車から のホース接続は、 汎用の結合金具 であり、容易に装 設可能である。 また、作業エリア 周辺には支障とな る設備は無く、 十分な作業スベ ールを確保して いる					

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (6/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実演時間	状況	作業環境				照明	その他 (アークシールド等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準No.
						温度・湿度	放射線環境	放射線環境	放射線環境					
常設代替交流電源設備からの受電操作	D系非常用高圧母線受電準備 ・D系非常用高圧母線受電準備 (中央制御室)	2.3.1	25分	18分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.14			
		2.3.2 2.3.3 2.3.4 2.4.1 3.1.2 3.1.3			5分	1分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約5msv/7日間以下	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある		周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	
	C系非常用高圧母線受電準備 ・C系非常用高圧母線受電準備 (中央制御室)	25分	18分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約5msv/7日間以下	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる					
		5分	1分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約5msv/7日間以下	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる					

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (7/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実績時間	状況	作業履歴			照明	その他 (アクセスルート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準No.
						温度・湿度	放射線履歴	作業履歴					
常設代替交流電源設備からの受電操作	D系非常用高圧母線受電準備 ・D系非常用前高圧母線受電準備 (現場)	2.3.1 2.3.2 2.3.3 2.3.4 2.4.1 3.1.2 3.1.3 3.2 5.2	35分	24分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度		電源内蔵型照明を作り、作業エリアに配線して、明かりを確保している。また、ヘッドライト及び懐中電灯を携行している。	アクセスルート上に支障となる設備はない。	所内通信連絡設備、電力保安通信設備、有線式通信設備のうち、使用可能な設備により、中央制御室との連絡が可能である。	通常運転時等に行う遮断器操作と同じであり、操作性に支障はない。	1.14	
			5分	3分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 作業に伴う被ばく線量は41mSv以下※ ※移動に係る時間、操作時間は技術的能力を参照して設定した (作業1時間10分+移動15分=1時間25分)	電源内蔵型照明を作り、作業エリアに配線して、明かりを確保している。また、ヘッドライト及び懐中電灯を携行している。	アクセスルート上に支障となる設備はない。	所内通信連絡設備、電力保安通信設備、有線式通信設備のうち、使用可能な設備により、中央制御室との連絡が可能である。	通常運転時に行う遮断器操作と同じであり、操作性に支障はない。		
	25分	14分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	ガスタービン発電機の起動機作から非常用高圧母線C系及びD系の受電確認まで約1時間10分で実施できることを確認した	電源内蔵型照明を作り、作業エリアに配線して、明かりを確保している。また、ヘッドライト及び懐中電灯を携行している。	アクセスルート上に支障となる設備はない。	所内通信連絡設備、電力保安通信設備、有線式通信設備のうち、使用可能な設備により、中央制御室との連絡が可能である。	通常運転時に行う遮断器操作と同じであり、操作性に支障はない。				
	5分	3分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度		電源内蔵型照明を作り、作業エリアに配線して、明かりを確保している。また、ヘッドライト及び懐中電灯を携行している。	アクセスルート上に支障となる設備はない。	所内通信連絡設備、電力保安通信設備、有線式通信設備のうち、使用可能な設備により、中央制御室との連絡が可能である。	通常運転時に行う遮断器操作と同じであり、操作性に支障はない。				



表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (8/17)

作業項目	作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の想定時間	訓練等からの実績時間	状況	作業環境			照明	その他 (アクセサリート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	その他					
電源切替え操作	具体的な運転操作・作業内容 低圧原子炉内管注水系 (常設) 起動操作 ・注水弁電源切替え操作	3.1.2	20分	8分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリート上に 支障となる設備はな い	所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備及び 有線式通信設備 のうち、使用可能 な設備により、中 央制御室との連 絡が可能である	通常運転時等に 行う PFB 操作と 同様であり、容易 に操作できる	1.4	
		3.1.3											
		5.2											
		2.3.1											
電源切替え操作 ・計表設備の直流電源切替え操作	電源切替え操作 ・透がし安全弁電源切替え操作	2.3.1	10分	5分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	通常運転時と同程度	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリート上に 支障となる設備はな い	所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備及び 有線式通信設備 のうち、使用可能 な設備により、中 央制御室との連 絡が可能である	通常運転時等に 行う PFB 操作と 同様であり、容易 に操作できる	1.15	
		2.3.2											
		2.3.3											
		2.3.4											
所内用蓄電池切替え 操作	所内用蓄電池切替え操作 ・負荷切り離し/所内用蓄電池切替え操作	2.3.1	30分	25分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	通常運転時と同程度	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリート上に 支障となる設備はな い	所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備及び 有線式通信設備 のうち、使用可能 な設備により、中 央制御室との連 絡が可能である	通常運転時等に 行う PFB 操作と 同様であり、容易 に操作できる	1.3	
		2.3.2											
		2.3.3											
		2.3.4											
原子炉補機冷却系 運転操作	原子炉補機冷却系起動操作 ・原子炉補機冷却系 起動操作	2.3.1	10分	7分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	アクセサリート上に 支障となる設備はな い	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.14		
		2.3.2											
		2.3.3											
		2.3.4											
残留熱除去系 (格納 容器冷却モード) 運転操作	残留熱除去系 (格納 容器冷却モード) 起動操作 ・残留熱除去系 (格納容器冷却モード) 起動 操作	2.3.1	10分	7分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.6		
		2.3.2											
		2.3.3											
		2.3.4											

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (9/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の想定時間	訓練等からの実績時間	状況	作業環境				照明	その他 (アクセスルート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	放熱	振動					
原子炉補機代替冷却系準備操作 ・ 資機材配属及びホース敷設、系統水張り、 起動	原子炉補機代替冷却系運転 ・ 原子炉補機代替冷却系 運転状態監視	2.4.1 3.1.2 3.2 5.2	7時間20分	5時間41分	緊急時対策要員 (現場)	— (屋外での操作)	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度  【炉心損傷がある場合】 作業に伴う被ばく線量は 5mSv以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設 定した(作業7時間30分+ 移動35分=8時間5分)	車両のヘッドライ ト、電源内蔵型照明 及びヘッドライトに より、夜間における 作業性を確保してい る	アクセスルート上に 支障となる設備はな い	無線電話設備(固 定型、携帯型)、 無線通信設備(固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	ホースの接続は 汎用の結合金具 及びフランジ接 続であり、容易 に接続可能であ る  作業エリア周辺 には、支障とな る設備はなく、十分 な作業スペース を確保している	1.5 1.7		
			適宜実施											
原子炉補機代替冷却系準備操作 ・ 電源ケーブル接続	原子炉補機代替冷却系準備操作 ・ 原子炉補機代替冷却系 冷却水流速調整	2.4.1 3.1.2 3.2	1時間40分	1時間11分	緊急時対策要員 (現場)	— (屋外での操作)	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度  【炉心損傷がある場合】 作業に伴う被ばく線量は 1mSv以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設 定した(作業1時間30分+ 移動25分=1時間55分)	車両のヘッドライ ト、電源内蔵型照明 及びヘッドライトに より、夜間における 作業性を確保してい る	アクセスルート上に 支障となる設備はな い	無線電話設備(固 定型、携帯型)、 無線通信設備(固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	電源ケーブル及 びボルトリソク の接続はねじ込 み及び一般工 具を使用したボ ルトナットでの 接続であり、容易 に接続可能であ る	1.5 1.7		
			10分	1分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト(ランタン タイプ)及びヘッド ライトを配用してい るため、操作可能で ある	周辺には支障とな る設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる				
原子炉補機代替冷却系準備操作 ・ 原子炉補機代替冷却系 系統水張り	原子炉補機代替冷却系準備操作 ・ 原子炉補機代替冷却系 系統水張り	2.4.1 3.1.2 3.2	1時間40分	1時間7分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度  【炉心損傷がある場合】 作業に伴う被ばく線量は 16mSv以下※1,2  ※1 移動に係る時間、操作 時間は技術的能力を参照 して設定した。(作業1時 間40分+移動15分=1時 間55分) ※2 炉心損傷時は原子炉建 物(管理区域)内が高線 量となるため、当該区域 内の系統構成は実施しな い	電源内蔵型照明を作 業エリアに配用して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携行している	アクセスルート上に 支障となる設備はな い	有線式通信設備、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う非操作と同 等であり、作業ス ペースもあるこ とから容易に作 業可能である			

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (10/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実績時間	状況	作業環境			照明	その他 (アクセサリート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	その他					
原子炉補機代替冷却系運転操作	原子炉補機代替冷却系準備操作 ・原子炉補機代替冷却系 系統構成	5.2	2時間10分	1時間19分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	通常運転時と同程度	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリート上に支障 となる設備はない	有線式通信設備、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のうち、 使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う非操作と同 等であり、作業ス ペースもあるこ とから容易に作 業可能である	1.5 1.7	
燃料プール冷却系 準備操作	燃料プール冷却系準備操作 ・原子炉補機代替冷却系 系統構成	2.4.1	30分	12分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	通常運転時と同程度	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリート上に支障 となる設備はない	有線式通信設備、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のうち、 使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う非操作と同 等であり、作業ス ペースもあるこ とから容易に作 業可能である	1.5	
残留熱除去系(低圧注 水モード)による原子 炉注水	残留熱除去系(低圧注水モード)運転 ・残留熱除去系(低圧注水モード)起動操作	2.4.1	10分	6分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト(ランタン タイプ)及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.4		
高圧原子炉代替注水 系による原子炉注水	高圧原子炉代替注水系起動操作 ・高圧原子炉代替注水系 起動操作/系統構成  高圧原子炉代替注水 系による原子炉注水 ・高圧原子炉代替注水系 起動/停止操作	2.3.2 2.3.3	10分  適宜実施	5分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト(ランタン タイプ)及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.2		
ほう酸水注入系 起動操作	ほう酸水注入系起動操作 ・ほう酸水注入系起動  ほう酸水注入系起動操作 ・注入状況監視	2.5	3分  適宜実施	2分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト(ランタン タイプ)及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	中央制御室での 操作は、通常運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.1		

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (11/17)

作業項目	作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実績時間	状況	作業環境				連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	照明	その他 (アクセサリ等)			
自動減圧系等の起動 阻止	自動減圧系等の起動阻止 ・ADS 起動阻止 COS「阻止」 ・代替 ADS 起動阻止 COS「阻止」	2.5	1分	40秒	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LE D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	-	中央制御室での 操作は、通常運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.1
						中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LE D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	-	中央制御室での 操作は、通常運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.3
残留熱除去系の破断 箇所隔離	残留熱除去系の破断 ・残留熱除去系 ・注水弁隔離操作 (中央制御室)	2.7	30分	6分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	炉心損傷がないため、高熱量 になることはない	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携行している	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う HPR 操作と同 様であり、容易に 操作できる	1.3	
						通常運転時と同程度	炉心損傷がないため、高熱量 になることはない	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携行している	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う HPR 操作と同 様であり、容易に 操作できる		
残留熱除去系の破断 箇所隔離	残留熱除去系からの漏えい停止操作 (現場 操作) ・保護具装着	2.7	30分	14分	運転員 (現場)	操作現場は約 40℃程度、湿度 は 100%程度となる可能性があ るが、保護具を装着すること から、問題はな い	操作現場の線量は最大でも約 8.0mSv/h であり、作業時間を 保守的に 1 時間と設定しても 作業員の受ける実効線量は最 大で約 8.0mSv となる	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携行している	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う HPR 操作と同 様であり、作業ス ペースもあるこ とから容易に作 業可能である 操作対象弁には、 時間でも識別し やすいように反 射テープを施し ている	1.3	
						操作現場は約 40℃程度、湿度 は 100%程度となる可能性があ るが、保護具を装着すること から、問題はな い	操作現場の線量は最大でも約 8.0mSv/h であり、作業時間を 保守的に 1 時間と設定しても 作業員の受ける実効線量は最 大で約 8.0mSv となる	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携行している	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う HPR 操作と同 様であり、作業ス ペースもあるこ とから容易に作 業可能である 操作対象弁には、 時間でも識別し やすいように反 射テープを施し ている		
残留熱除去系の破断 箇所隔離	残留熱除去系からの漏えい停止操作 (現場 操作) ・保護具装着	2.7	1時間	40分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	炉心損傷がないため、高熱量 になることはない	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携行している	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う HPR 操作と同 様であり、作業ス ペースもあるこ とから容易に作 業可能である 操作対象弁には、 時間でも識別し やすいように反 射テープを施し ている	1.3	
						通常運転時と同程度	炉心損傷がないため、高熱量 になることはない	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携行している	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	通常運転時等に 行う HPR 操作と同 様であり、作業ス ペースもあるこ とから容易に作 業可能である 操作対象弁には、 時間でも識別し やすいように反 射テープを施し ている		

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (12/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実演時間	状況	作業環境				連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	照明	その他 (アタセサール等)			
残留熱代替除去系による格納容器除熱 操作	<ul style="list-style-type: none"> <li>残留熱代替除去系 運転開始</li> <li>残留熱代替除去系 中央制御室系統構成</li> <li>残留熱代替除去系 中央制御室</li> </ul>	3.1.2	20分	8分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常月照消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.7
			10分		運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常月照消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	
	10分	4分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常月照消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる			
	10分	2分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常月照消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる			

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (13/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の想定時間	訓練等からの実績時間	状況	温度・湿度	作業環境		照明	その他 (アクセサリ等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
							放射線環境	放熱環境					
居住性の確保	非常用ガス処理系 運転確認 ・非常用ガス処理系 自動起動確認 ・原子炉建物内圧監視 ・原子炉建屋換気系調整	3.1.2 3.1.3 3.2	適宜実施	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼすほどの影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5msSv/7 日間以下	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LE D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す ることから、容 易に操作できる	1.16	
	中央制御室換気系 ・系統構成 ・中央制御室換気系起動操作	3.1.2 3.1.3 3.2	20分	5分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼすほどの影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5msSv/7 日間以下	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LE D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す ることから、容 易に操作できる		
	中央制御室換気系起動 ・中央制御室換気系 系統構成	3.1.2 3.1.3 3.2	40分	19分	運転員 (現場)	作業に伴う被ばく線量は 12msSv 以下※ ※ 移動に係る時間、操作時 間は技術的能力を参照し て設定した (作業 40 分 + 移動 15 分 = 55 分)	電源内蔵型照明を作 業エリアに配備して おり、建物内常用照 明消灯時における作 業性を確保してい る。また、ヘッドラ イト及び懐中電灯を 携帯している	アクセサリ上に 支障となる設備はな い	通信連絡設備 (研 内通信連絡設備、 電力保安通信用 電話設備、有線式 通話設備) のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	中央制御室換気 系加圧運転設備、 換気系給気開閉 ダンパを開閉操 作するのみであり、 容易に操作実施 可能である			
	中央制御室換気系起動 ・中央制御室換気系 加圧運転操作	3.1.2 3.1.3 3.2	10分	2分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼすほどの影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5msSv/7 日間以下	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LE D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す ることから、容 易に操作できる		
	中央制御室換気系 運転モード切替え ・中央制御室換気系 加圧運転から系統開閉 運転への切替え操作	3.1.3	5分	1分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼすほどの影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5msSv/7 日間以下	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LE D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す ることから、容 易に操作できる		
	中央制御室換気系 運転モード切替え ・中央制御室換気系 系統開閉運転から加圧 運転への切替え操作	3.1.3	5分	1分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼすほどの影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5msSv/7 日間以下	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LE D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す ることから、容 易に操作できる		

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (14/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の想定時間	訓練等からの実績時間	状況	温度・湿度	作業環境			照明	その他 (アクセサリート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
							放射線環境	放熱	振動					
居住性の確保	中央制御室待避準備 ・中央制御室待避システム構成	3.1.2 3.1.3 3.2	30分	10分	運転員 (現場)	通常運転時と同程度	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5mSv/7 日間以下	電源内蔵型照明を作業エリアに配備しており、建物内常用照明前灯時における作業性を確保している。また、ヘッドライトを確保している。	アークセサルト上に支障となる設備はない	通信連絡設備(所内通信連絡設備、電力伝送通信用電話設備、有線式通信設備)のうち、使用可能な設備により、中央制御室との連絡が可能である	中央制御室待避準備作業は、空気ポンプへの操作作業の側へ操作作業のみであり容易に実施可能である	中央制御室待避準備作業は、通常運転時と同程度である	1.16	
														中央制御室待避準備 ・中央制御室待避システム構成
可搬式蒸気供給装置による格納容器内の不活性化	可搬式蒸気供給装置による格納容器内蒸気供給準備 ・可搬式蒸気供給装置準備	3.1.2 3.2	2時間	1時間 42分	緊急時対策要員 (現場)	- (屋外での操作)	作業に伴う被ばく線量は 16mSv 以下※ ※ 移動に係る時間、操作時間は技術的能力を参照して設定した(作業 2 時間 + 移動 25 分 = 2 時間 25 分)	車内の作業用照明・ヘッドライト及び夜間中電灯により、夜間における作業性を確保している	アークセサルト上に支障となる設備はない	衛星電話設備(固定型、携帯型)、無線通信設備(固定型、携帯型)、電力伝送通信用電話設備、所内通信連絡設備のうち、使用可能な設備により、緊急時対策本部との連絡が可能である	ホースの接続は差し込み式での接続であり、容易に接続可能である	1.9		
													可搬式蒸気供給装置による格納容器内蒸気供給 ・可搬式蒸気供給装置起動	可搬式蒸気供給装置による格納容器内蒸気供給準備
残留熱代替除去系による格納容器除熱	残留熱代替除去系 準備操作 ・残留熱代替除去系 中央制御室系統構成	3.2	20分	6分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温については、空調の停止により發熱に上昇する可能性があるが、作業に支障を及ぼす程の影響はなく、通常運転状態と同程度である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5mSv/7 日間以下	常用照明消灯時において LED ライト (三脚タイプ)、LED ライト (ランタンタイプ) 及びヘッドライトを配備しているため、操作可能である	周辺には支障となる設備はない	-	中央制御室での操作は、通常運転時と同程度である	1.7		
													残留熱代替除去系による格納容器除熱	残留熱代替除去系による格納容器除熱
残留熱代替除去系による格納容器除熱	残留熱代替除去系 運転開始 ・残留熱代替除去系ポンプ起動 ・格納容器スプレイ弁操作	3.2	10分	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温については、空調の停止により發熱に上昇する可能性があるが、作業に支障を及ぼす程の影響はなく、通常運転状態と同程度である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5mSv/7 日間以下	常用照明消灯時において LED ライト (三脚タイプ)、LED ライト (ランタンタイプ) 及びヘッドライトを配備しているため、操作可能である	周辺には支障となる設備はない	-	中央制御室での操作は、通常運転時と同程度である	1.7		
													残留熱代替除去系による格納容器除熱	残留熱代替除去系による格納容器除熱

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (15/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実時間	状況	作業環境				連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	照明	その他 (アセスメント等)			
原子炉格納容器内の 水素濃度及び酸素濃 度監視	水素濃度及び酸素濃度監視設備の起動 ・格納容器水素濃度 (SA) 及び格納容器酸素 濃度 (SA) 起動操作 水素濃度及び酸素濃度監視設備の起動 ・格納容器水素濃度 (SA) 及び格納容器酸素 濃度 (SA) システム起動, 監視 水素濃度及び酸素濃度監視設備の起動 ・格納容器水素濃度及び酸素濃度の監視	3.1.2 3.1.3 3.2	5分	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	-	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.9	
			40分 (通直監視) 通直監視	38分		中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある				
溶融炉心落下前の格 納容器代替スプレイ 系 (可搬型) による 水張り操作	格納容器代替スプレイ系 (可搬型) 系統構成 ・格納容器代替スプレイ系 (可搬型) 系統構成 格納容器代替スプレイ系 (可搬型) 注水操作 ・原子炉圧力容器破損時の初期注水	3.2	10分	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	-	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.8	
			2時間 10分	1時間 41分		中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LED Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある				
	格納容器代替スプレイ系 (可搬型) 準備操作 ・大量送水車による格納容器代替スプレイ系 (可搬型) 準備/系統構成 (大量送水車配置、 ホース展開・接続)		2時間 10分	1時間 41分	緊急時作業員 (現場)	- (屋外での操作)	作業に伴う被ばく線量は 28mSv以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設定 した (作業2時間10分+移動 25分=2時間35分)	車両の作業用照明・ ヘッドライト及び懐 中電灯により、夜間 における作業性を確 保している	衛星電話設備 (固 定型、携帯型)、 無線通信設備 (固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	大量送水車から のホース接続は、 汎用の結合金具 であり、容易に実 施可能である。 また、作業エリア 周辺には支障と なる設備は無く、 十分な作業スベ ースを確保して いる		



表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (16/17)

作業項目	具体的な運転操作・作業内容	事故シナリオ No. (資料 No.)	操作・作業の 想定時間	訓練等からの 実時間	状況	作業環境				連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
						温度・湿度	放射線環境	照明	その他 (アクセスルート等)			
溶融炉心管下後の原 子炉格納容器下部へ の注水操作 (崩壊熱 相当の注水)	ベデスタル代替注水系 (可搬型) 系統構成 ・ベデスタル代替注水系 (可搬型) 系統構成	3.2	10分	3分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5mSv/7 日間以下	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LED D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.8
	ベデスタル代替注水系 (可搬型) 注水操作 ・原子炉圧力容器破損後の原子炉格納容器下部 注水		6分	緊急時対策要員 (現場)	作業に伴う振ばく線量は 8mSv 以下※ ※移動に係る時間、操作時間 は技術的能力を参照して設定 した (作業 10 分+移動 50 分 =1 時間)	車内の作業用照明・ ヘッドライト及び機 中 equalizer により、夜間 における作業性を確 保している	アクセスルート上に 支障となる設備はな い	衛星電話設備 (固 定型、携帯型)、 無線通信設備 (固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対策本部との連 絡が可能である	作業エリア周辺 には支障となる 設備は無く、十分 な作業スペース を確保している			
	ベデスタル代替注水系 (可搬型) 停止操作 ・ベデスタル代替注水系 (可搬型) 停止		10分	1分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす種の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	【炉心損傷がない場合】 通常運転時と同程度 【炉心損傷がある場合】 約 5mSv/7 日間以下	常用照明消灯時にお いても LED ライト (三脚タイプ)、LED D ライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作と同様で あることから、容 易に操作できる	

表 1.3.1-1 重大事故等対策の成立性確認 (17/17)

作業項目	事故シナリオ No. (資料No.)	作業・作業の 想定時間	訓練等からの 実績時間	状況	作業環境			照明	その他 (アクセサリート等)	連絡手段	操作性	技術的 能力審査 基準 No.
					温度・湿度	放射線環境	作業環境					
燃料プールの注水	燃料プール系準備操作 ・ 大量送水車による燃料プールの注水準備 (大量送水車配置、ホース取巻・接続) ・ 原子炉建物内ホース敷設、可搬型スプレ ノズル準備	2時間50分	2時間25分	緊急時対応要員 (現場)	— (屋外での操作)	通常運転時と同程度	—	車内の作業用照明・ ヘッドライト及び懐 中電灯により、夜間 における作業性を確 保している	アクセサリート上に 支障となる設備はな い	専用電話設備(固 定型、携帯型)、 無線通信設備(固 定型、携帯型)、 電力保安通信用 電話設備、所内通 信連絡設備のう ち、使用可能な設 備により、緊急時 対応本館との連 絡が可能である	大量送水車から のホース接続は、 汎用の結合金具 であり、容易に実 施可能である。 また、作業エリア 周辺には支障と なる設備は無く、 十分な作業スペ ースを確保して いる	1.11
		通直実施										
原子炉水位回復操作	原子炉水位回復操作 ・ 残留熱除去系 (低圧注水モード) (待機側) 起動/停止操作	10分	2分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	—	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	1.4
		通直実施										
原子炉冷却材流出の 停止	原子炉水位回復操作 ・ 原子炉水位低下調査/隔離準備操作	60分	35分	運転員 (中央制御室)	中央制御室の室温について は、空調の停止により緩慢に 上昇する可能性があるが、作 業に支障を及ぼす程の影響は なく、通常運転状態と同程度 である	通常運転時と同程度	—	常用照明消灯時にお いてもLEDライト (三脚タイプ)、LE Dライト (ランタン タイプ) 及びヘッド ライトを配備してい るため、操作可能で ある	周辺には支障となる 設備はない	—	中央制御室での 操作は、通常の運 転操作で実施す る操作と同様で あることから、容 易に操作できる	—
		50分										
				運転員 (現場)	通常運転時と同程度	炉心損傷がないため、高線量 になることはない	電源内蔵型照明を 作業エリアに備 え、建物内常用照 明消灯時における 作業性を確保して いる。また、ヘッ ドライト及び懐中 電灯を携行して いる	アクセサリート上に 支障となる設備は ない	有線式通信設備、 所内通信連絡設 備、電力保安通信 用電話設備のう ち、使用可能な設 備により、中央制 御室との連絡が 可能である	定期事業者検査 時に行う電源受 入操作と同様で あり容易に操作 可能である		

有効性評価に使用している解析コード／評価手法の開発に係る  
当社の関与について

島根原子力発電所2号炉の有効性評価に使用している解析コード（SAFER, REDY, SCAT, APEX及びMAAP）は、いずれも国内BWRの設置変更許可申請の有効性評価において使用実績があるコードである。

重大事故等対策の有効性評価のうち、シビアアクシデント解析業務はプラントメーカーに委託しているものの、解析コード／評価手法の開発にあたっては、以下のとおり当社としても従前より積極的に関与している。

- ・解析コードの実機適用性に当たっては、プラントメーカーとの共同研究等により、プラントメーカーと一体となって検討を進めており、報告会等を通じて当社の意見を反映している。
- ・解析業務委託に当たっては、当社よりプラントメーカーに対して「原子力施設における許認可申請等に係る解析業務の品質向上ガイドライン」※（平成26年3月 原子力安全推進協会）に基づいて、それまでの経験等を反映した社内マニュアルに従って要員の教育、計算プログラムの検証、入力根拠の明確化等、必要な品質保証活動の実施を要求している。これに加えて、当社がプラントメーカーに赴き、上記の要求事項が適切に実施されていることを確認すると共に、解析結果については、既往の解析結果と比較すること等により妥当性を確認している。
- ・アクシデントマネジメント整備の検討を開始した当初（1990年代前半）より、シビアアクシデント現象の研究及びアクシデントマネジメント検討に当社も参画し、アクシデントマネジメント策の策定、整備に対して貢献している。（表1.4.1-1参照。MAAP）
- ・現在においても、以下【参考】及び表1.4.1-1に示すとおり、通常の業務の中でシビアアクシデント解析及び評価手法の活用及び改良に努めている。今後も不確かさを含む現象等に対する継続的な検討を進め、更なる知見の拡充に努めていく。

【参考】シビアアクシデント解析の活用例

- ・シビアアクシデント解析結果を反映した運転手順書の整備と整備した手順に基づく机上教育及び訓練の実施、さらに、有効性評価等を踏まえた改善等を行い、継続的に教育及び訓練を実施している。また重大事故等発生時の対応の要となる運転員に対しては、自社のシミュレータ又はBWR運転訓練センターにおけるシミュレータを活用し、シビアアクシデント時の挙動の把握・対応能力の向上に努めている。

・アクシデントマネジメント手順の改善及びP R A評価手法の改善のため、国内外関係機関（E P R I，B W R O G等）の活動状況を踏まえつつ、シビアアクシデント解析の知見をふまえた手順及び評価手法の最新化に努めている。

※：原子力施設の許認可申請等における解析業務の品質向上のために、発注者（事業者）と受注者（解析者）における解析業務に係る品質保証活動としての実施事項について、各社の管理プロセスとして自主的に取り組むべき内容を明確化したもの。

表 1. 4. 1-1 シビアアクシデント解析コード／評価手法の開発に係る当社の関与例

解析コード	共同研究等の実績	
	時期	件 名
S A F E R R E D Y	平成元年度	島根原子力発電所第2号機用 運転ガイドライン
	平成2～3年度	徴候ベース事故時運転マニュアルの改良に関する研究
	平成5年度	アクシデントマネジメント検討報告書
S C A T	平成12年度	過渡沸騰遷移時の被覆管温度挙動評価手法研究
A P E X	平成12～22年度	MOX 炉心の核特性データ測定評価研究（その1）
M A A P	平成4～5年度	アクシデントマネジメントにおける運転操作指針の開発研究
	平成5年度	アクシデントマネジメント検討報告書
	平成6～7年度	アクシデントマネジメントにおける運転操作指針の開発（フェーズⅡ）
	平成8～9年度	アクシデントマネジメントガイドラインの高度化に関する研究
	平成13～14年度	I V R等を考慮したAMGの高度化に関する研究
	現在継続中	E P R I M A A P U s e r s G r o u p への参画

島根原子力発電所 2 号炉の重大事故等対策の有効性評価の一般データ

1. 炉心損傷防止
2. 格納容器破損防止
3. 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用（F C I）
4. 溶融炉心・コンクリート相互作用（M C C I）

## 1. 炉心損傷防止

### (1) 解析初期条件データ

項 目	数 値	備 考
原子炉熱出力	2436 MWt (100%)	設計値
原子炉水位	気水分離器下端から +83cm (通常運転水位)	プラント仕様
炉心流量	$35.6 \times 10^3$ t/h (100%)	設計値
原子炉給水温度	215.7 °C	設計値
原子炉圧力 (圧力容器ドーム部)	6.93 MPa [gage]	設計値
主蒸気流量	$4.74 \times 10^3$ t/h	設計値
ヒートバランス	図 1 参照 (各部の圧力, 流量, エンタルピ等のデータ)	図 1 は定格運転状態の場合を提示。 設計値
燃料及び炉心	9 × 9 燃料 (A型) , MOX燃料	燃料仕様
燃料集合体数	560 体	設計値
最大線出力密度	44.0 kW/m	設計値

(2) 解析に関する情報

項 目	データ	備 考
初期MCPR	1.25	設計値
給水温度低下特性	給水加熱器出口温度，給水スパー ジャーまでの時間遅れ特性等の データ ・初期給水温度から主蒸気隔離弁 閉鎖により，60秒の一次遅れで 給水温度低下。 別添9参照。	包絡値
原子炉スクラム遅れ時間	0.05 秒	注記1 安全保護系の遅れ時間 設計値
再循環ポンプトリップ台数	7.41MPa[gage]：2 台 水位低L2：2 台	設定値
再循環ポンプトリップ遅れ時間	0.2 秒	設計値
再循環ポンプ回転数半減時間	4.5 秒	設計値
スクラム後の事象シーケンス	スクラム後の給水制御，圧力制 御，再循環制御等の事象シーケ ンスの説明  別添1参照	事象進展による

注記1：時間は，スクラム信号発生時刻を時刻0と定義する。

(3) 幾何形状データ

a. 主蒸気管，燃料棒等に関するデータ

項目	対象	データ	備考
蒸気ドーム部出口から主蒸気隔離弁までのデータ	長さ，断面積（内径），容積，エレベーション	図2参照	注記1，2 設計値
主蒸気隔離弁から主蒸気加減弁までのデータ （主蒸気ヘッドを含む）	長さ，断面積（内径），容積，エレベーション	図2参照	注記2 設計値
主蒸気ラインからタービン・バイパス弁までのデータ	長さ，断面積（内径），容積 エレベーション	図2参照	設計値
燃料集合体（9×9燃料（A型），MOX燃料）のデータ	長さ	図3-1，図3-2参照	各燃料型式ごとに記載 設計値
蒸気ドーム部のデータ	長さ，容積	図4参照	設計値
燃料棒（9×9燃料（A型），MOX燃料）のデータ	長さ，半径，ギャップ熱伝達係数（炉心平均，ホット）	図5-1，図5-2参照	各燃料型式ごとに記載 設計値
水位計のタップ位置	圧力容器底部からの高さ		設計値

注記1：蒸気ドーム部から主蒸気隔離弁までの配管長さ等のデータについては，各ライン（4本）の個別データを提示した。

注記2：配管の始点・終点の明確化のため名称を併せて記載した。

（例） 蒸気ドーム部～主蒸気隔離弁入口，長さ ××mm，断面積 ××mm<sup>2</sup>・・・

本資料のうち，枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



b. R P Vに関するデータ

項 目	対 象	寸法 (mm)	備 考
原子炉のエレベーションに関するデータ	・蒸気ドーム頂部 (ベッセル内) 高さ		設計値
	・蒸気乾燥器頂部高さ		設計値
	・蒸気出口ノズル下端高さ 及び内径		設計値
	・蒸気乾燥器底部高さ		設計値
	・気水分離器頂部高さ		設計値
	・通常運転水位		解析では狭帯域と広帯域の初期水位は同一とする。 設計値
	・シュラウドヘッド・ドーム 頂部高さ (内側)		設計値
	・シュラウドヘッド・ドーム 底部高さ		設計値
	・チャンネルボックス上端 高さ		設計値
	・燃料棒有効長頂部高さ		設計値
	・ジェットポンプ底部高さ		設計値
	・ジェットポンプ・スロート 入口高さ		設計値
	・燃料棒有効長底部高さ		設計値
	・再循環水出口ノズル下端 高さ及び内径		設計値
	・支持板上面高さ		設計値
	・制御棒案内管頂部高さ		設計値
	・制御棒案内管底部高さ		設計値
・給水スパーチャノズル高さ		設計値	

(原子炉圧力容器底部からの高さ)

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

項目	対象	体積 (m <sup>3</sup> )	ボイド率 (%)	備考
原子炉の体積に関するデータ (1) 下部プレナム	・ 下部プレナム底部から炉心支持板までの体積 (制御棒案内管体積は除く)		—	設計値
	・ 制御棒案内管体積 (制御棒全挿入時) (制御棒全引抜時)		—	設計値
(2) 炉心 (チャンネル内)	・ 下部タイプレート内部及び燃料サポート内部		—	設計値
	・ 燃料棒有効長底部から燃料棒有効長頂部までの体積及び平均ボイド率		38	設計値
	・ 燃料棒有効長頂部からチャンネルボックス上端までの体積及び平均ボイド率		64	設計値
(3) バイパス (シュラウド内)	・ 炉心支持板からチャンネルボックス上端までの体積及び平均ボイド率 (制御棒全引抜時)		0	設計値
	・ 炉心支持板からチャンネルボックス上端までの体積及び平均ボイド率 (制御棒全挿入時)		—	設計値
(4) 上部プレナム	・ チャンネルボックス上端からシュラウドヘッド・ドーム頂部までの体積及び平均ボイド率 (スパージャリング体積除く)		60	設計値
	・ 気水分離器 (全数, スタンドパイプ及び気水分離器スカート内を除く溢水レベルまで)		—	設計値
	・ スタンドパイプ (全数)		—	設計値

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

項 目	対 象	体積 (m <sup>3</sup> )	備 考
(5) 蒸気ドーム (主蒸気管体積を除く)	・ 通常水位から主蒸気管入口 までの体積		設計値
	・ 主蒸気管入口から蒸気ドーム 頂部までの体積		設計値
(6) ダウンカム (再循環配管体積及びジェ ットポンプ体積を除く)	・ ダウンカム底部からジェット ポンプサクシオンまでの体積		設計値
	・ ジェットポンプサクシオンか らシュラウドヘッド頂部まで の体積		設計値
	・ シュラウドヘッド頂部から 給水スパーージャまでの体積		設計値
	・ 給水スパーージャから通常水位 までの体積		設計値
(7) 再循環配管	・ 1 ループの再循環配管体積		設計値
	・ 再循環配管の底部から頂部 までの高さとの体積の関係		設計値
(8) ジェットポンプ	・ 体積 ・ 高さとの内径の関係	設計値	

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

(4) 核データ・熱水力関連データ

項 目	対 象	データ	備 考
ボイド反応度	炉心平均ボイド率 (%) とボイド反応度係数 ( $(\Delta k/k)/\%$ ボイド率) のデジタル値  保守係数 (設置許可申請書添付八記載の1.25倍等) についても記載	別添2 ①参照	設計値
ドップラ反応度	燃料棒平均温度 (°C) とドップラ反応度係数 ( $\Delta k/k/°C$ ) のデジタル値  保守係数 (設置許可申請書添付八記載の0.9倍等) についても記載	別添2 ②参照	設計値
ボロン反応度 (原子炉停止機能喪失シナリオ解析用)	ボロン濃度 (ppm) 及びボイド率と反応度係数 ( $\Delta k/k/ppm$ ) のデジタル値 (注) ボロン濃度 0 ~ 600ppm に対して	別添2 ③参照 (ボイド率の影響は原子炉冷却材密度の変化として考慮, 5ホウ酸ナトリウム濃度:13.4wt%)	反応度K, ボロン濃度B, ボイド率 $\alpha$ として, $K=f(B, \alpha)$ のテーブルで記載 設計値
スクラム反応度	制御棒挿入割合とスクラム反応度 (\$) のデジタル値  設計用スクラム曲線	別添2 ④参照	設計値

項目	対象	データ	備考
スクラム挿入速度 (BWRの仕様)	スクラム挿入割合 (%) とスクラム時間* (秒) のデジタル値	SOM : 0.1 秒 10%ストローク : 0.32 秒 40%ストローク : 0.91 秒 75%ストローク : 1.84 秒	* :スクラム時間はSOMを含む。 (SOM:スクラム信号を制御棒駆動系が受信してから動作開始までの時間) SOM~10%, 10%~40%, 40%~75%はそれぞれ直線近似とした。 設計値
中性子関連	中性子寿命 ( $\mu$ sec) 実効遅発中性子割合 $\beta$	別添2 ⑤参照	設計値
軸方向出力分布	SAFER, REDY, SCATの各解析コードで使用している平均チャンネルとホットテストチャンネルのデジタル値	SAFER: 別添2 ⑥参照 * <sup>1</sup> REDY: 別添3 ②参照 * <sup>1</sup> SCAT: 別添3 ①参照 * <sup>1</sup>	設計値
集合体出力	平均チャンネルとホットテストチャンネル	平均: 4.3MW ホット: 7.5MW (SCAT) * <sup>2</sup> 8.7MW (SAFER) * <sup>3</sup>	計算コード内部 計算値
集合体入口流量	平均チャンネルとホットテストチャンネル (ウォータロッド流量含まず)	平均: 58.4 t/h ホット: 51.9 t/h * <sup>4</sup> SCAT: 46.7 t/h	設計値
	バイパス流量率 (ウォータロッドを含む)	平均: 14 % ホット: 15 %	設計値

\* 1 : 中央ピーク (代表的な出力分布として設定)

\* 2 : 初期MCP RをOLMCP Rと一致するように設定。

\* 3 : 燃料棒本数, 最大線出力密度, 軸方向出力分布, 有効発熱部長さに基づいて設定し, 燃料被覆管温度を厳しめに評価した。

\* 4 : SA FERでは下記のように設定される。

(全炉心流量)  $\times$  (流量配分比) / (体数) - (バイパス流量) として設定される。

SC ATではホットテストチャンネル出力に応じた流量として設定される。

項 目	対 象	デ ー タ	備 考
出口クオリティ, 出口ボイド率	平均チャンネルとホットテストチャンネル	平均： クオリティ 14% ボイド率 64% ホット： クオリティ 23% ボイド率 73%	設計値
崩壊熱曲線	S A有効性評価（炉心損傷防止）解析で用いる崩壊熱データ（ANSI/ANS-5.1-1979燃焼度33Gwd/t）	原子炉停止機能喪失：別添4 原子炉停止機能喪失以外：別添5	原子炉停止機能喪失：計算コード内部計算値 原子炉停止機能喪失以外：崩壊熱評価式（ANSI/ANS-5.1-1979）による計算値

(5) 機器特性データ他

項 目	対 象	データ	備 考
ジェットポンプに関するデータ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジェットポンプ基数</li> <li>・ジェットポンプ駆動流量</li> <li>・ジェットポンプ吐出流量</li> </ul>	20基	設計値
インターナルポンプ又は再循環ポンプの特性データ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単相ホモログス曲線 又はポンプQ-H特性及びQ-T特性</li> <li>・トルク (Nm), 水頭 (m), 回転数 (rad/sec), 流量 (m<sup>3</sup>/s), モーメント (kg-m<sup>2</sup>) 水頭換算水密度 (kg/m<sup>3</sup>)</li> </ul>		設計値
インターナルポンプ又は再循環ポンプ逆流時の特性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・逆流時の抵抗係数</li> </ul>		設計値
再循環流量制御系	<p>REDYで使っている原子炉再循環流量制御系の運転モード (自動/手動) 及び下記制御器の特性 (伝達関数ブロック図)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主制御器</li> <li>・速度制御器</li> </ul>	再循環流量制御系は手動モード。事象発生直後に2台ともトリップするため制御系は使用していない。	

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

項目	対象	データ	備考
原子炉給水制御系	原子炉検出水位, 主蒸気流量, 給水流量を入力とし, 原子炉への給水流量を算出する3要素制御系の制御特性 (伝達関数ブロック図)	別添6-2「給水制御系ブロック図」参照	設計値
原子炉圧力制御系	制御特性 (伝達関数ブロック図)	原子炉停止機能喪失: 圧力制御は主蒸気隔離弁閉鎖による逃がし弁機能にて実施しているため圧力制御系は使用していない。	設計値
水位計	狭帯域及び広帯域水位計のタップ位置と初期水位の値	1. (3) 参照  気水分離器下端から+83cm	タップ位置  初期水位の値 設計値

逃がし弁設定値

	REDY	SAFER
開遅れ時間	0.2 秒 (包絡値)	0.1 秒
全閉-全開時間	0.2 秒	同左
閉設定値	開設定値-0.24MPa	同左

(表中の値はすべて設計値)

逃がし/安全弁

(逃がし弁)

吹出圧力 (MPa[gage])	弁個数	容量/個 (吹出圧力において) (t/h)
7.58	2	367
7.65	3	370
7.72	3	373
7.79	4	377

(表中の値はすべて設計値)

(安全弁)

吹出圧力 (MPa[gage])	弁個数	容量/個 (吹出圧力×1.03において) (t/h)
8.14	2	407
8.21	3	410
8.28	3	413
8.35	4	417

(表中の値はすべて設計値)



初期定格状態のパラメータ

(炉心出力 100 %, 炉心流量 100 %, 蒸気ドーム圧力 6.93 MPa[gage])

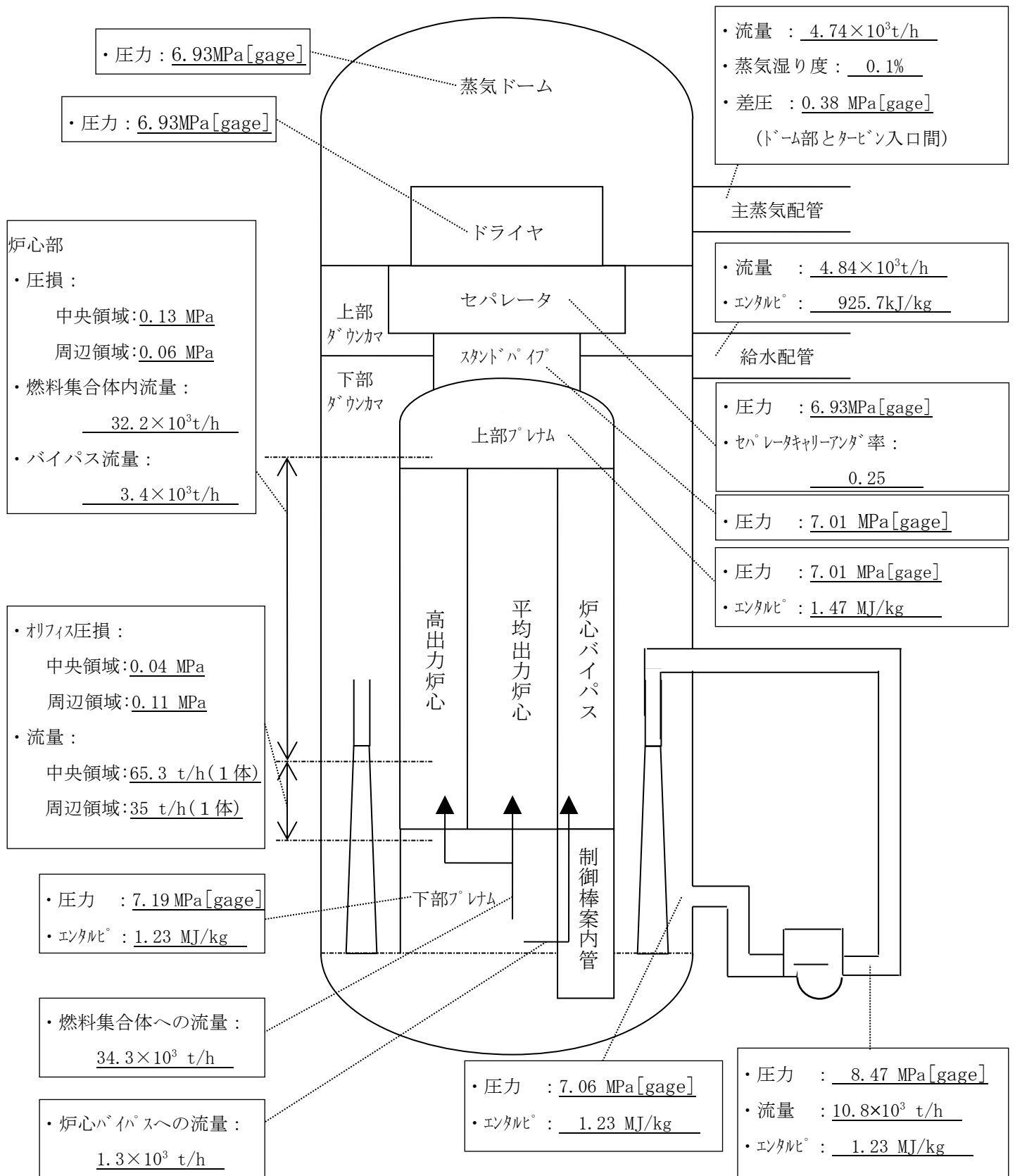
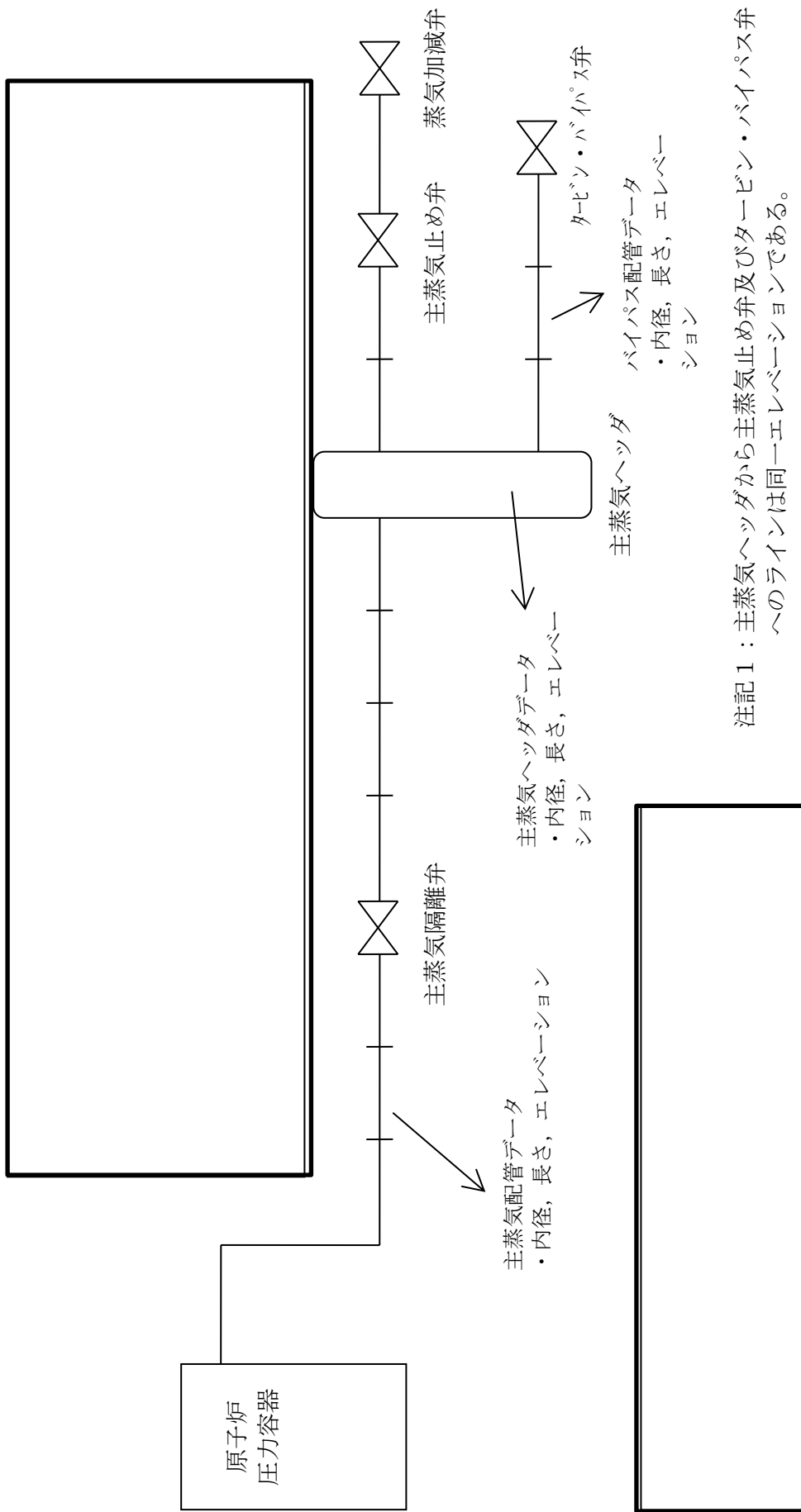


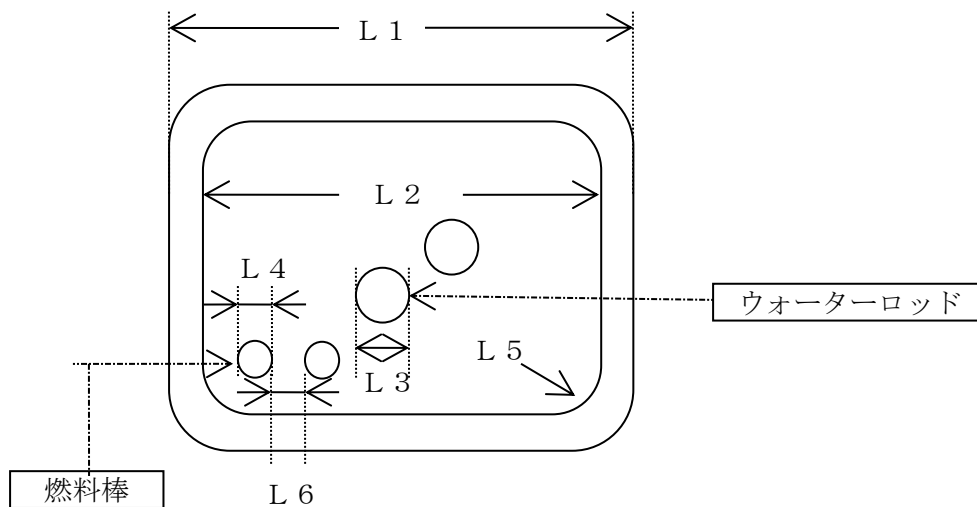
図1 原子炉圧力容器内ヒートバランスデータ



注記 1 : 主蒸気ヘッダから主蒸気止め弁及びタービン・バイパス弁へのラインは同一エレベーションである。

図 2 原子炉圧力容器から蒸気加減弁までの配管長さおよびエレベーション

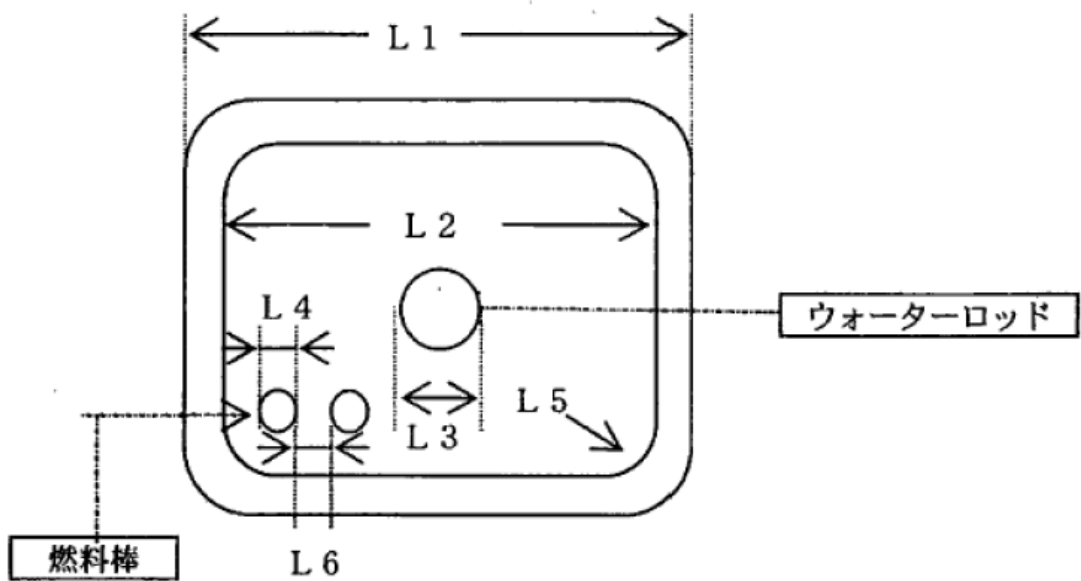
本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



項目	9×9燃料 (A型)	備考
L 1 (mm)		
L 2 (mm)		
L 3 (mm)		
L 4 (mm)		
L 5 (mm)		コーナ部曲率半径
L 6 (mm)		
ギャップ コンダクタンス (W/m <sup>2</sup> ・K)	平均： REDY * SAFER 別添2参照 ホット： SAFER 別添2参照 SCAT 別添3参照	* REDYはMOX燃料の値を参照。

図 3-1 9×9燃料 (A型) 集合体略図

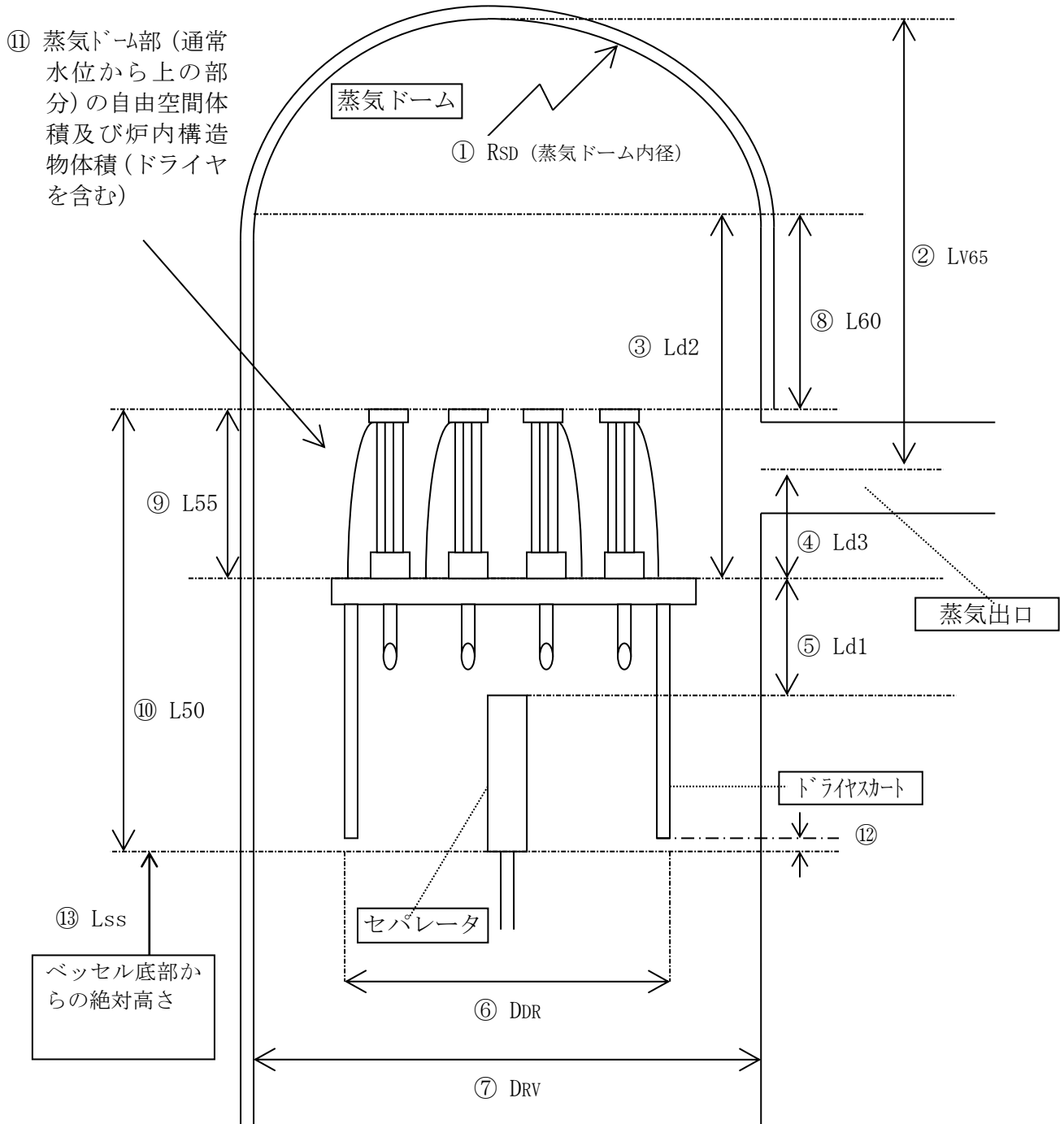
本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



項 目	MOX燃料	備 考
L 1 (mm)		
L 2 (mm)		
L 3 (mm)		
L 4 (mm)		
L 5 (mm)		コーナ部曲率半径
L 6 (mm)		
ギャップ コンダクタンス (W/m <sup>2</sup> ・K)	平均： REDY 6,250	SCAT, SAFERでは、MOX燃料は評価していない。

図 3-2 MOX燃料集合体略図

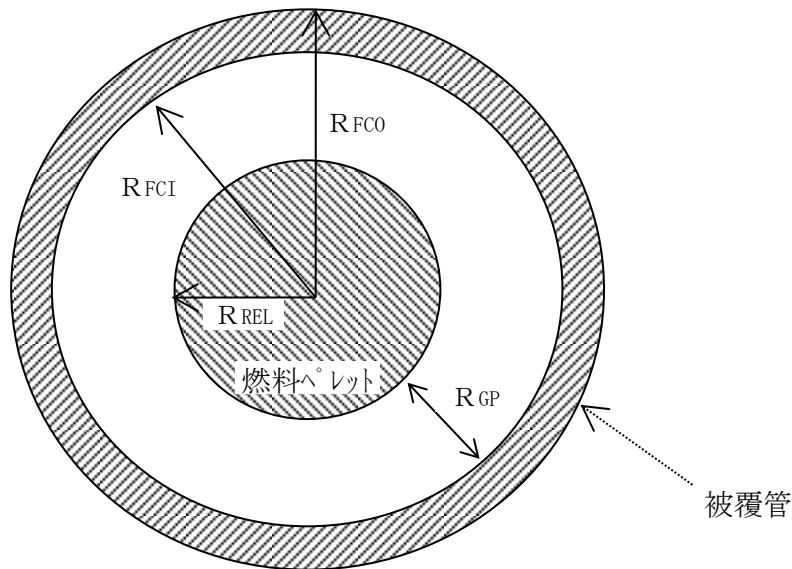
本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



①		⑧	
②		⑨	
③		⑩	
④		⑪	
⑤		⑫	
⑥		⑬	
⑦			

図4 蒸気ドーム周辺略図

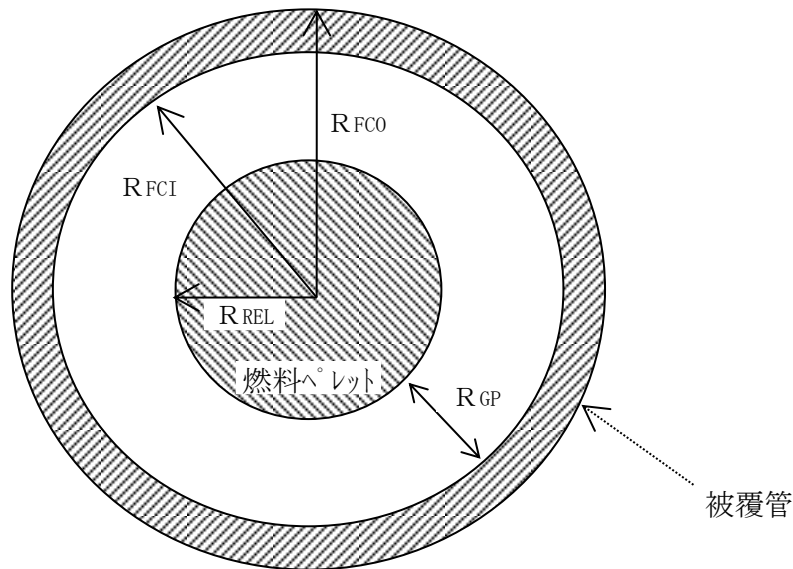
本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



項目	仕様	入力値	備考
R <sub>REL</sub> (mm)	燃料ペレット半径		
R <sub>FCI</sub> (mm)	被覆管内半径		
R <sub>GP</sub> (mm)	ギャップ幅		
R <sub>FCO</sub> (mm)	被覆管外半径		
L <sub>F</sub> (mm)	燃料棒有効長 (標準) 燃料棒有効長 (部分長) 下端位置 (部分長) 上端位置 (部分長)		部分長の下端/上端位置は標準の下端を基準 (0 mm) としたときの値とする。
ペレット 径方向発熱分布		SAFER: 平坦 SCAT: 別添3 ①参照	
ペレット密度	(kg/m <sup>3</sup> )		
ペレット物性値	温度 (K) と熱伝導率 (W/(m・K)) のテーブル 温度 (K) と比熱 (J/(kg・K)) のテーブル	表 5-1-1 参照	温度 300~3,000K の範囲
被覆管密度	(kg/m <sup>3</sup> )		
被覆管物性値	温度 (K) と熱伝導率 (W/(m・K)) のテーブル 温度 (K) と比熱 (J/(kg・K)) のテーブル	表 5-1-2 参照	温度 300~1,100K (被覆管の物性値として現実的な範囲)
ギャップ コンダクタンス (W/m <sup>2</sup> ・K)	平均: ホット:	図 3-1 9×9 燃料 (A型) 集合体 略図参照	集合体のギャップコンダクタンスのため、図 3-1 への記載とする。

図 5-1 9×9 燃料 (A型) 燃料棒略図

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



項目	仕様	入力値	備考
R <sub>REL</sub> (mm)	燃料ペレット半径		
R <sub>FCI</sub> (mm)	被覆管内半径		
R <sub>GP</sub> (mm)	ギャップ幅		
R <sub>FCO</sub> (mm)	被覆管外半径		
L <sub>F</sub> (mm)	燃料棒有効長 (MOX燃料棒) 燃料棒有効長 (ウラン燃料棒)		下端位置はウラン燃料棒と同じ。
ペレット 径方向発熱分布		—	(使用しない)
ペレット密度	(kg/m <sup>3</sup> )		
ペレット物性値	温度 (K) と熱伝導率 (W/(m·K)) のテーブル 温度 (K) と比熱 (J/(kg·K)) のテーブル	表 5-2-1 参照	温度 300~3,000K の範囲について。
被覆管密度	(kg/m <sup>3</sup> )		
被覆管物性値	温度 (K) と熱伝導率 (W/(m·K)) のテーブル 温度 (K) と比熱 (J/(kg·K)) のテーブル	表 5-1-2 参照	温度 300~1,100K (被覆管の物性値として現実的な範囲)
ギャップ コンダクタンス (W/m <sup>2</sup> ·K)	平均 : ホット :	図 3-2 MOX 燃料集合体略 図参照	集合体のギャップコンダクタンスのため、図 3-2 への記載とする。

図 5-2 MOX燃料燃料棒略図

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

表5-1-1 ペレット物性値 9×9燃料 (A型)

ペレット温度 (K)	熱伝導率 (W/(m・K))	比熱 (J/(kg・K))
300		
400		
500		
600		
700		
800		
900		
1000		
1100		
1200		
1300		
1400		
1500		
1600		
1700		
1800		
1900		
2000		
2100		
2200		
2300		
2400		
2500		
2600		
2700		
2800		
2900		
3000		

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



表5-1-2 被覆管物性値 9×9燃料（A型）及びMOX燃料

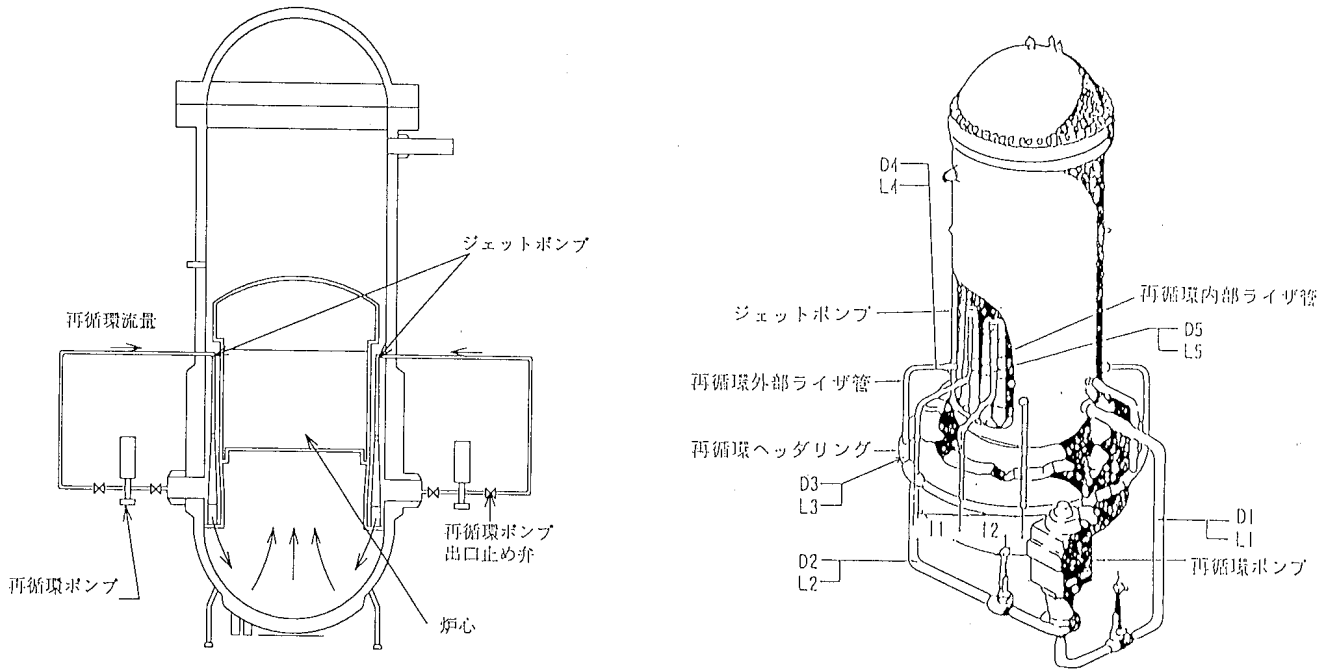
被覆管温度 (K)	熱伝導率 (W/(m・K))	比熱 (J/(kg・K))
300		
400		
500		
600		
700		
800		
900		
1000		
1100		

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

表5-2-1 ペレット物性値 MOX燃料

ペレット温度 (K)	熱伝導率 (W/(m·K))	比熱 (J/(kg·K))
300		
400		
500		
600		
700		
800		
900		
1000		
1100		
1200		
1300		
1400		
1500		
1600		
1700		
1800		
1900		
2000		
2100		
2200		
2300		
2400		
2500		
2600		
2700		
2800		
2900		
3000		

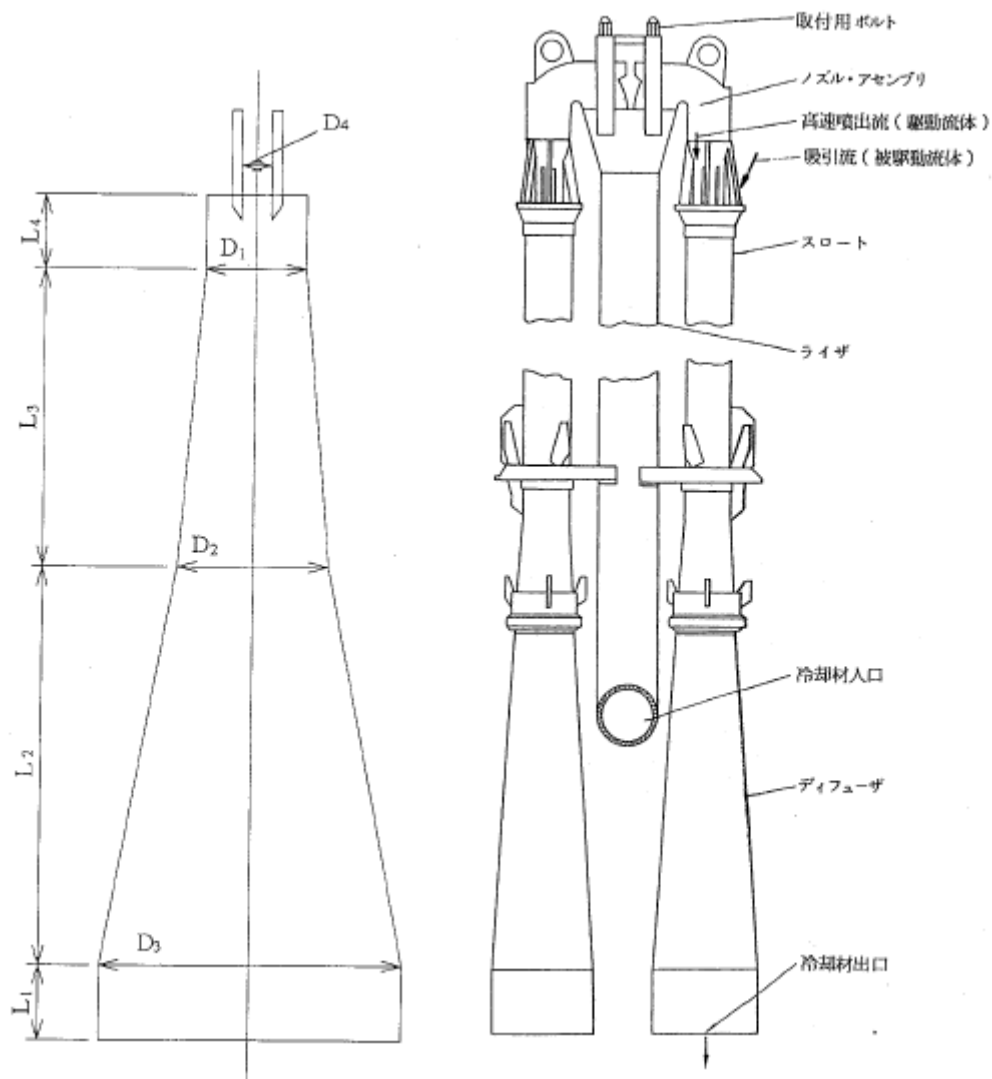
本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



項目	数値 (mm)	備考
再循環吸込側配管内径 (D 1)		設計値
再循環吐出側配管内径 (D 2)		
再循環リングヘッド内径 (D 3)		
再循環外部ライザ管内径 (D 4)		
再循環内部ライザ管内径 (D 5)		
再循環吸込側配管長さ (L 1)		
再循環吐出側配管長さ (L 2)		
再循環リングヘッド長さ (L 3)		
再循環外部ライザ管長さ (L 4)		
再循環内部ライザ管長さ (L 5)		
再循環外部ライザ管インターバル (I 1 ~ I 2)		

図6 再循環配管の底部から顶部までの高さとの関係

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



項 目	数 値 (mm)	備 考	
スロート上端 内径 (D 1)			
スロート下端 内径 (D 2)			
デフューザ下端 内径 (D 3)			
ノズル 内径 (D 4)			
テイル部 長さ (L 1)			
デフューザ 長さ (L 2)			
スロート (下部) 長さ (L 3)			
スロート (上部) 長さ (L 4)			
ノズル 個数 (N 1)			5 (個)

図7 ジェットポンプの底部から頂部までの高さとの内径の関係

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

シーケンス	原子炉側		PCV側	
	設備	動作	設備	動作
高圧・低圧注水機能喪失	給水制御	起回事象のため喪失	格納容器代替スプレイ系(可搬型)	起動:格納容器圧力384kPa[gage]到達後、384~334kPa[gage]の範囲で維持 停止:サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	原子炉水位低レベル2で全台トリップ	格納容器ベント	サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達から10分後
	原子炉減圧	30分後、逃がし安全弁6弁手動減圧		
高圧注水・減圧機能喪失	給水制御	起回事象のため喪失	残留熱除去系(サブプレッション・プール水冷却モード)	冷却開始@原子炉水位高レベル8
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	原子炉水位低レベル2で全台トリップ	残留熱除去系(原子炉停止時冷却モード)	冷却開始@12時間
	原子炉減圧	原子炉水位低レベル1+10分後、代替自動減圧機能による2弁自動減圧		
全交流動力電源喪失(長期TB)	給水制御	全交流動力電源喪失のため事故と同時に喪失	格納容器代替スプレイ系(可搬型)	起動:格納容器圧力384kPa[gage]到達後、384~334kPa[gage]の範囲で維持 停止:サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	事故と同時に全台トリップ		
	原子炉減圧	8時間後、逃がし安全弁6弁手動減圧	残留熱除去系(格納容器冷却モード)	起動:事象発生24時間30分後 停止:原子炉水位低レベル3到達後、残留熱除去系(低圧注水モード)に切り替える。
全交流動力電源喪失(TBU) / 全交流動力電源喪失(TBD)	給水制御	全交流動力電源喪失のため事故と同時に喪失	格納容器代替スプレイ系(可搬型)	起動:格納容器圧力384kPa[gage]到達後、384~334kPa[gage]の範囲で維持 停止:サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉即時閉		
	再循環流量制御	事故と同時に全台トリップ		
	原子炉減圧	約8.3時間後、逃がし安全弁6弁手動減圧	残留熱除去系(格納容器冷却モード)	起動:事象発生24時間30分後 停止:原子炉水位低レベル3到達後、残留熱除去系(低圧注水モード)に切り替える。
全交流動力電源喪失(TBP)	給水制御	全交流動力電源喪失のため事故と同時に喪失	格納容器代替スプレイ系(可搬型)	起動:格納容器圧力384kPa[gage]到達後、384~334kPa[gage]の範囲で維持 停止:サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	事故と同時に全台トリップ	残留熱除去系(格納容器冷却モード)	起動:事象発生24時間30分後 停止:原子炉水位低レベル3到達後、残留熱除去系(低圧注水モード)に切り替える。
	原子炉減圧	開閉弁1弁+逃がし安全弁5弁手動減圧@2時間20分		
原子炉停止機能喪失(取水機能が喪失した場合)	給水制御	全交流動力電源喪失のため事故と同時に喪失	原子炉種機代替冷却系を介した残留熱除去系(サブプレッション・プール水冷却モード)による冷却	冷却開始@8時間
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	原子炉水位低レベル2で全台トリップ	原子炉種機代替冷却系を介した残留熱除去系(サブプレッション・プール水冷却モード)による冷却	冷却開始@24時間
	原子炉減圧	逃がし安全弁6弁手動減圧@8時間		
原子炉停止機能喪失(残留熱除去系が故障した場合)	給水制御	起回事象のため喪失	格納容器代替スプレイ系(可搬型)	起動:格納容器圧力384kPa[gage]到達後、384~334kPa[gage]の範囲で維持 停止:サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	原子炉水位低レベル2で全台トリップ	格納容器ベント	サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達から10分後
	原子炉減圧	逃がし安全弁6弁手動減圧@8時間		
原子炉停止機能喪失	給水制御	給水流量は3要素制御。主蒸気隔離弁閉後から、5秒で68%給水流量まで低下後、復水器水位低により給水ポンプが停止する。	残留熱除去系(サブプレッション・プール水冷却モード)	起動:サブプレッション・プール水温度高から10分後
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉のため、圧力制御はSRVの開閉による。		
	再循環流量制御	主蒸気隔離弁閉に伴う原子炉圧力高で2台RPT		
	原子炉減圧	原子炉隔離時冷却系(起動:原子炉水位低レベル2 / サプレッション・プール水温度100℃で停止操作)		
LOCA時注水機能喪失	給水制御	外部電源喪失のため事故と同時に喪失	格納容器代替スプレイ系(可搬型)	起動:格納容器圧力384kPa[gage]到達後、384~334kPa[gage]の範囲で維持 停止:サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	原子炉水位低レベル2で全台トリップ	格納容器ベント	サブプレッション・プール水位通常水位+約1.3m到達から10分後
	原子炉減圧	30分後、逃がし安全弁6弁手動減圧		
格納容器バypass(インターフェースシステム)LO	給水制御	事故と同時に喪失	残留熱除去系(サブプレッション・プール水冷却モード)	40分後~1時間40分後停止
	圧力制御	主蒸気隔離弁閉@原子炉水位低レベル2 主蒸気隔離弁閉後は逃がし安全弁開閉		
	再循環流量制御	原子炉水位低レベル2で全台トリップ	残留熱除去系(原子炉停止時冷却モード)	2時間後から開始
	原子炉減圧	30分後、逃がし安全弁6弁手動減圧		

(9×9燃料(A型) + MOX燃料(228体))

①ボイド反応度

ボイド反応度(×10<sup>-4</sup>Δk/k/%ボイド)

ボイド率(%)	9×9燃料(A型)+MOX燃料
	平衡サイクル末期
0	
10	
20	
30	
40	
50	
60	
70	

保守係数: 1.25×1.02

②ドブブラ係数

ドブブラ反応度(×10<sup>-3</sup>Δk/k/°C)(減速材:286°C,ボイド率:40%)

燃料温度(°C)	9×9燃料(A型)+MOX燃料
	平衡サイクル末期
563	
750	
1,000	
1,250	
1,500	
1,750	
2,000	
2,250	
2,500	
2,750	
3,000	

保守係数: 0.9×0.99

③ボロン反応度

ボロン反応度

ボロン値(Δk/ppm)	9×9燃料(A型)+MOX燃料

④スクラム反応度

スクラム反応度(%)

挿入割合	設計用スクラム曲線 (サイクル末期)
0.00	
0.05	
0.10	
0.20	
0.30	
0.40	
0.50	
0.60	
0.70	
0.80	
0.90	
1.00	

⑤中性子関連

中性子関連

項目	9×9燃料(A型)+MOX燃料
	平衡サイクル末期
中性子寿命(μ sec)	36

項目	9×9燃料(A型)+MOX燃料
	平衡サイクル末期
トータルβ	0.0049

⑥平均/ホットチャンネル軸方向分布(SAFER)

【SAFER】

軸方向ノード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
軸方向出力分布	0.5317	0.7517	1.0342	1.2758	1.3817	1.3625	1.2208	1.0442	0.845	0.5525

ギャップコンダクタンス

ホット

9X9A

軸方向ノード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Btu/hr-ft <sup>2</sup> -F	781.56	1,126.44	1,571.76	1,938.24	2,082.96	2,063.88	1,847.88	1,585.8	1,230.12	816.84
W/(m <sup>2</sup> -K)	4.437.9	6,396.2	8,924.9	11,005.8	11,827.6	11,719.3	10,492.8	9,004.6	6,984.9	4,638.2

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

①

【SCAT】

軸方向ノード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
軸方向出力分布	0.431	0.511	0.596	0.692	0.797	0.912	1.037	1.158	1.253	1.318
軸方向ノード	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
軸方向出力分布	1.363	1.393	1.403	1.378	1.333	1.268	1.193	1.118	1.048	0.972
軸方向ノード	21	22	23	24	25					
軸方向出力分布	0.887	0.792	0.672	0.516	0.346					

【SCAT】

半径方向出力分布

9×9A燃料

No	規格化半径	相対出力
1	0.00	0.929
2	0.10	0.929
3	0.20	0.930
4	0.30	0.932
5	0.40	0.937
6	0.50	0.944
7	0.60	0.955
8	0.70	0.971
9	0.80	0.991
10	0.90	1.027
11	1.00	1.478

ギャップコンダクタンス

【SCAT】

単位換算	[Btu/hr-ft <sup>2</sup> -F]*5.678264
9×9A燃料 平均	軸方向一定値
Btu/hr-ft <sup>2</sup> -F	1,900
W/(m <sup>2</sup> -K)	10,788.7

ホットロッド

軸方向ノード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Btu/hr-ft <sup>2</sup> -F	860.5	989.7	1,126.9	1,280.3	1,527.7	1,820.3	2,108.4	2,334.3	2,576.2	2,822.8
W/(m <sup>2</sup> -K)	4,886.1	5,619.8	6,398.8	7,269.9	8,674.7	10,336.1	11,972.1	13,254.8	14,628.3	16,028.6
軸方向ノード	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
Btu/hr-ft <sup>2</sup> -F	2,990.5	3,058.4	3,081.0	3,024.5	2,879.8	2,633.1	2,418.3	2,261.4	2,131.5	1,958.6
W/(m <sup>2</sup> -K)	16,980.8	17,366.4	17,494.7	17,173.9	16,352.3	14,951.4	13,731.7	12,840.8	12,103.2	11,121.4
軸方向ノード	21	22	23	24	25					
Btu/hr-ft <sup>2</sup> -F	1,759.7	1,514.8	1,248.0	997.8	714.6					
W/(m <sup>2</sup> -K)	9,992.0	8,601.4	7,086.5	5,665.8	4,057.7					

②

【REDY】

規格化高さ	相対出力
0.000	0.00
0.042	0.54
0.167	1.17
0.292	1.37
0.500	1.34
0.625	1.10
0.708	0.89
0.792	0.71
0.917	0.52
1.000	0.40

サブクール環境計算のための分布

崩壊熱曲線(TC)

時間(s)	崩壊熱割合
0.1	0.06831
0.2	0.06746
0.3	0.06664
0.4	0.0659
0.5	0.06522
0.6	0.06459
0.7	0.06401
0.8	0.06347
0.9	0.06298
1	0.06251
2	0.0591
3	0.05692
4	0.05534
5	0.0541
6	0.05306
7	0.05216
8	0.05135
9	0.0506
10	0.04992
20	0.04488
30	0.04182
40	0.0398
50	0.03832
60	0.03715
70	0.03616
80	0.03528
90	0.03448
100	0.03374
200	0.02836
300	0.02526
400	0.02337
500	0.02215
600	0.02129
700	0.02064
800	0.0201
900	0.01964
1,000	0.01923
2,000	0.01615
3,000	0.01416
4,000	0.01282
5,000	0.0119
6,000	0.01124
7,000	0.01074
8,000	0.01035
9,000	0.01003
10,000	0.00976



崩壊熱曲線 (TC以外)

時間(s)	崩壊熱割合
0.1	0.0645
0.2	0.064
0.3	0.06352
0.4	0.06308
0.5	0.06265
0.6	0.06222
0.7	0.06185
0.8	0.06148
0.9	0.06112
1	0.06077
2	0.05783
3	0.05562
4	0.05387
5	0.05244
6	0.05123
7	0.05019
8	0.04928
9	0.04846
10	0.04773
20	0.04294
30	0.0402
40	0.03826
50	0.03677
60	0.03555
70	0.03454
80	0.03367
90	0.03291
100	0.03225
200	0.02821
300	0.02611
400	0.02468
500	0.02359
600	0.02268
700	0.02191
800	0.02123
900	0.02062
1,000	0.02008
2,000	0.01644
3,000	0.01443
4,000	0.01314
5,000	0.01224
6,000	0.01157
7,000	0.01105
8,000	0.01063
9,000	0.01028
10,000	0.009978
20,000	0.008299
30,000	0.007494
40,000	0.006969
50,000	0.006585
60,000	0.006287
70,000	0.006048
80,000	0.00585
90,000	0.005684
100,000	0.005541
200,000	0.004601
300,000	0.003998
400,000	0.003591
500,000	0.00329
600,000	0.003055
700,000	0.002865
800,000	0.002709
900,000	0.002579
1,000,000	0.002468
2,000,000	0.001834
3,000,000	0.001519
4,000,000	0.001318
5,000,000	0.00118
6,000,000	0.001075
7,000,000	0.0009941
8,000,000	0.0009256
9,000,000	0.0008686
10,000,000	0.000818

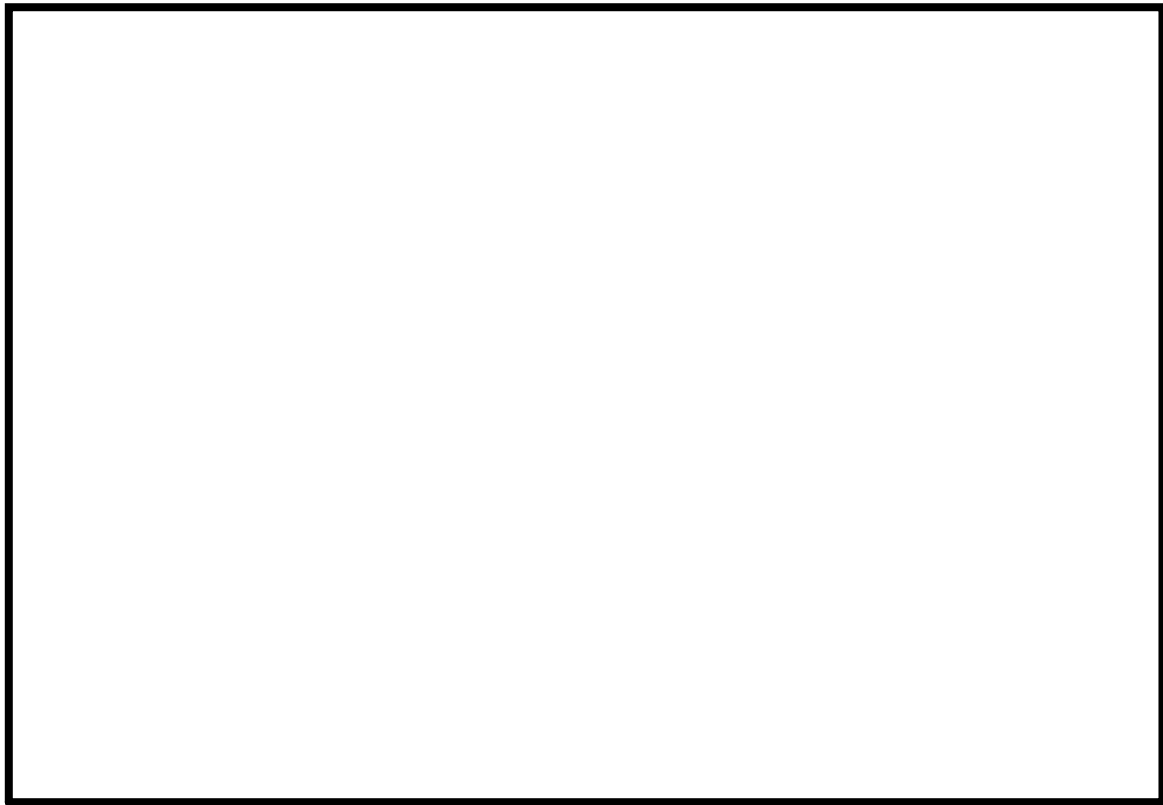


図1 P L R ポンプ特性

	ポンプ流量/台	回転速度	揚程
最大流量運転			

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

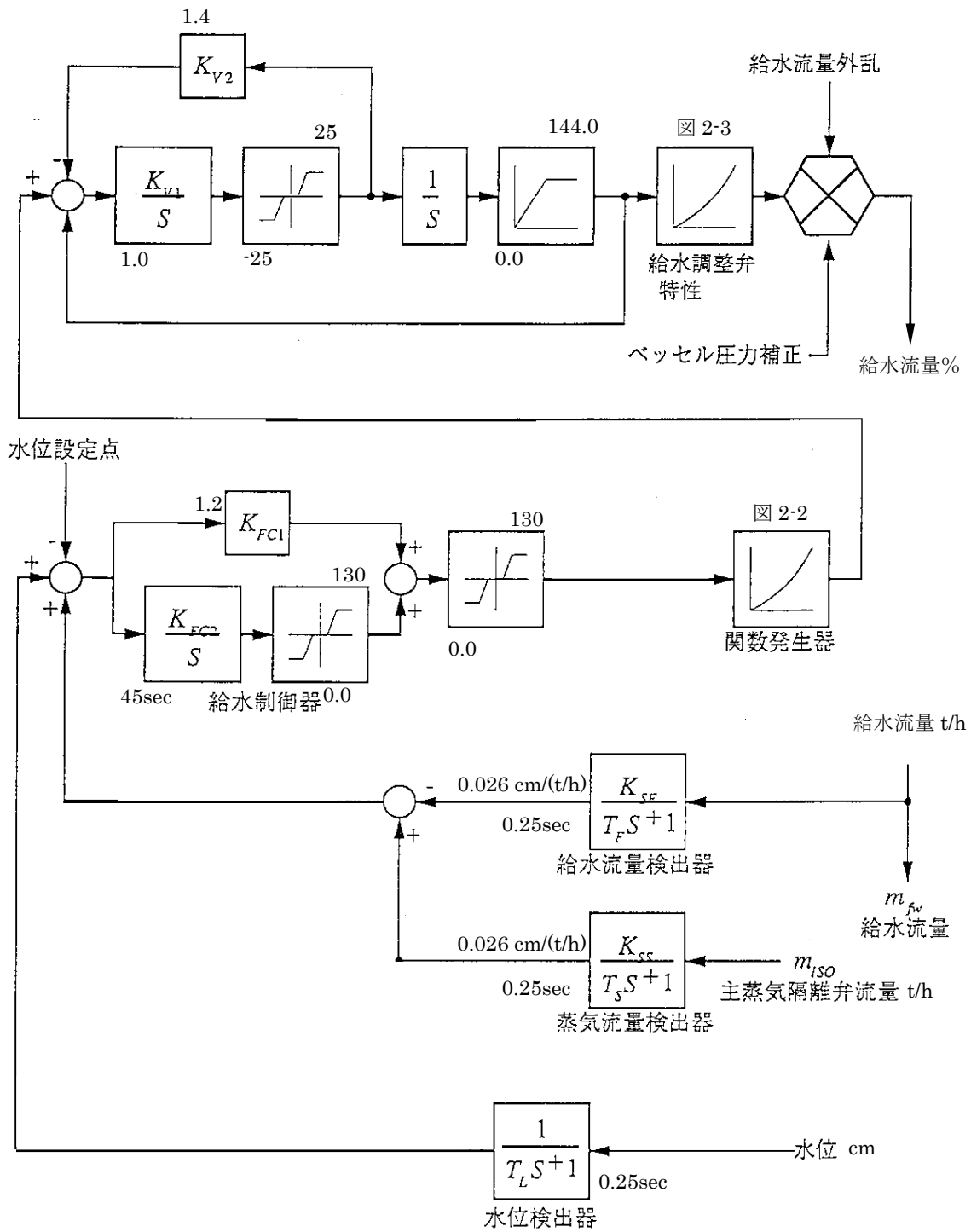


図 2-1 給水制御系ブロック図 (1 / 3)

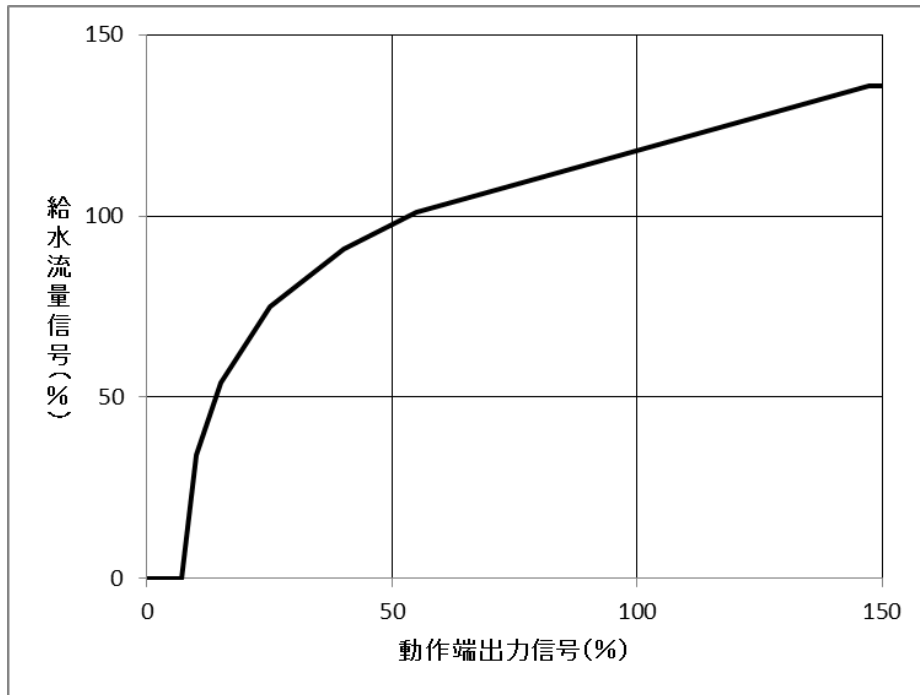
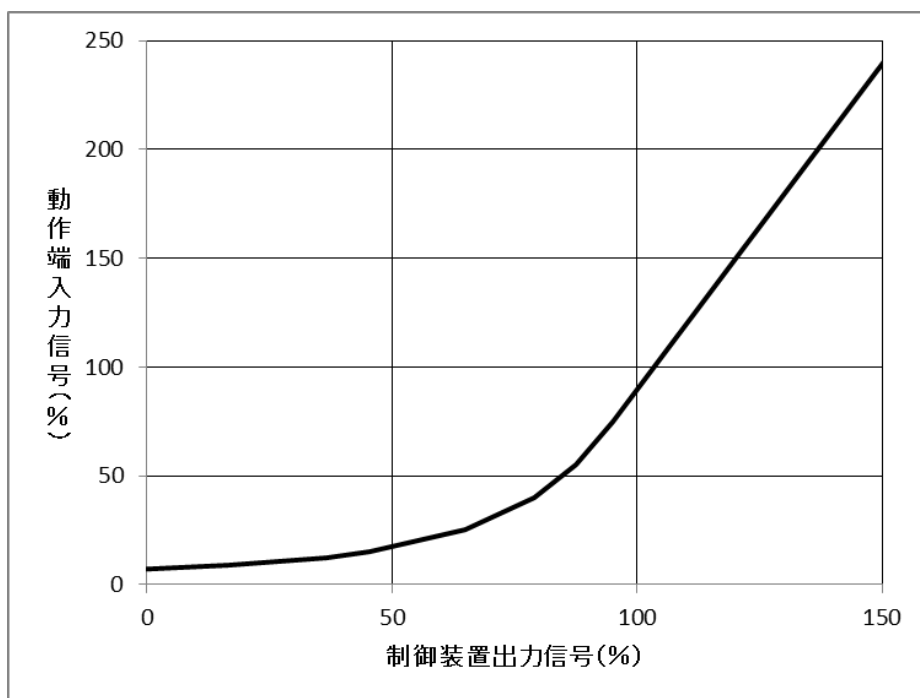


図 2-2 給水制御系ブロック図 ( 2 / 3 )



\*100%出力状態では給水流量信号が 100%になる。  
 ここでの 100%は定格給水流量に対する割合を示す。

図 2-3 給水制御系ブロック図 ( 3 / 3 )

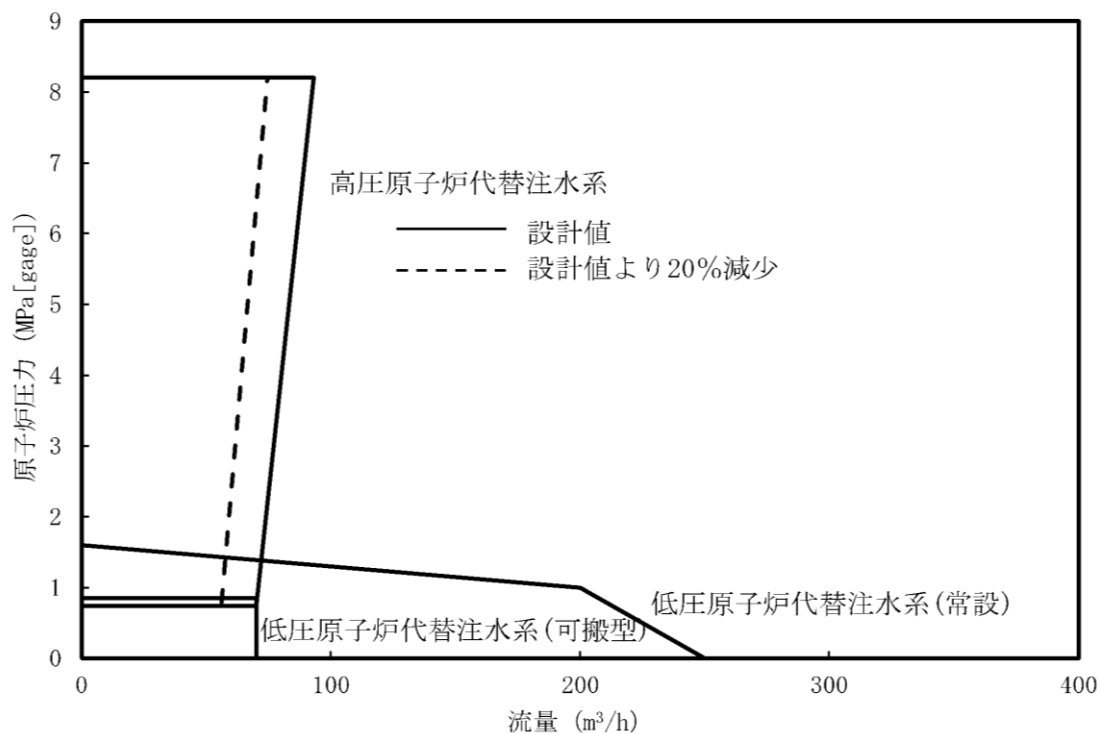


図1 注水特性図

表1 低压原子炉代替注水系(常設)

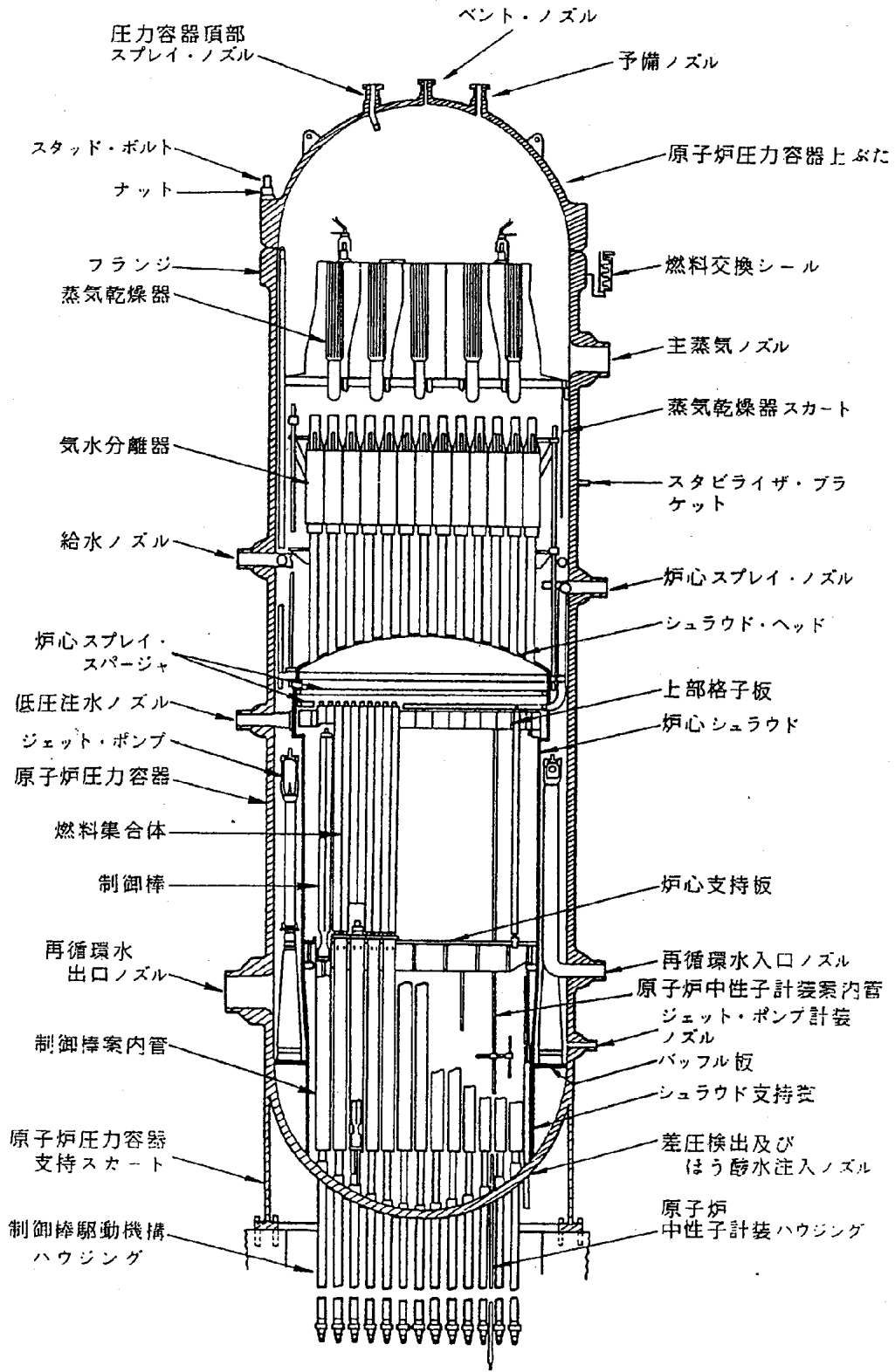
流量(m <sup>3</sup> /h)	压力(MPa[gage])
0	1.6
200	1.0
250	0.0

表2 低压原子炉代替注水系(可搬型)

流量(m <sup>3</sup> /h)	压力(MPa[gage])
0	0.853
70	0.853
70	0.0

表3 高压原子炉代替注水系

流量(m <sup>3</sup> /h)	压力(MPa[gage])
0	8.21
93	8.21
70	0.74
0	0.74



原子炉圧力容器概略図

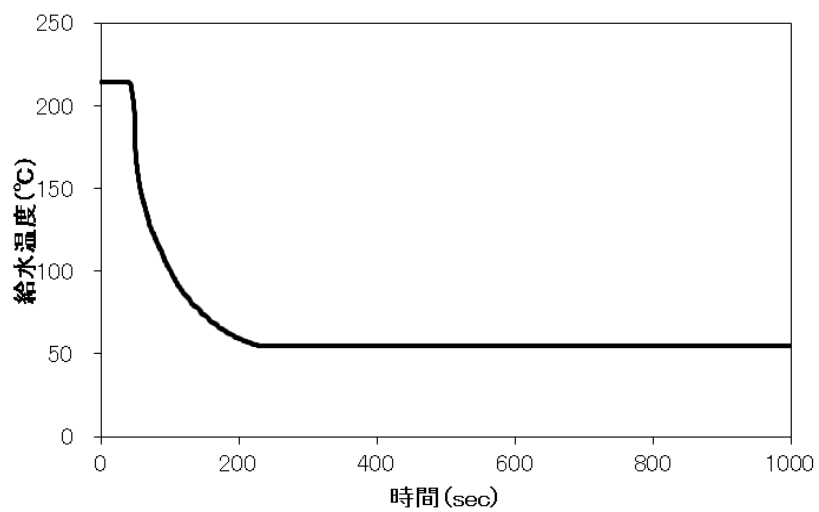
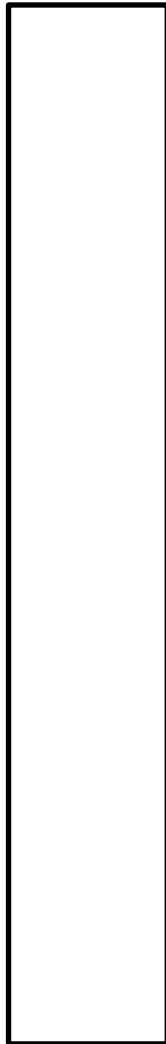


図 1 給水温度時間変化

## 2. 格納容器破損防止

### (1) 定常運転条件等に関するデータ

項 目	数 値	備 考
1. 崩壊熱曲線 (1) 崩壊熱曲線 (2) スクラム時の炉内インベントリ (同位体ごと, 非放射性物質を含む)	図 1-1 参照 	平衡炉心サイクル末期相当  X e K r I R b C s S r B a Y L a Z r N b M o T c R u S b T e C e P r N d S m N p P u

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



項 目	数 値	備 考
2. 炉内相対出力分布		設計値
(1) 径方向相対出力分布	図 1-2 参照 1. 1471 1. 2691 1. 1587 0. 9654 0. 4597	リング 1 [内側] リング 2 リング 3 リング 4 リング 5 [外側]
(2) 軸方向相対出力分布	図 1-3 参照 0. 0 0. 3854 0. 9922 1. 1851 1. 2435 1. 2943 1. 2679 1. 1970 1. 0634 0. 8855 0. 4857 0. 0 0. 0	非加熱部 ノード 10 [上端] ノード 9 ノード 8 ノード 7 ノード 6 ノード 5 ノード 4 ノード 3 ノード 2 ノード 1 [下端] 非加熱部 非加熱部

(2) 幾何形状等に関するデータ

項 目	数 値	備 考
1. 定常運転時の圧力, 温度, 湿度  (1) 格納容器圧力 (ドライウエル) (2) 格納容器温度 (ドライウエル) (3) 格納容器湿度 (ドライウエル) (4) ベント管圧力 (5) ベント管温度 (6) ベント管湿度 (7) 格納容器圧力 (ウエットウエル) (8) 格納容器温度 (ウエットウエル) (9) 格納容器湿度 (ウエットウエル) (10) サプレッション・プール水温度 (11) 原子炉建屋圧力 (12) 原子炉建屋温度 (13) 原子炉建屋湿度 (14) 格納容器気体成分比 (15) 原子炉建屋気体成分比	5 kPa [gage] 330 K 0.2 5 kPa [gage] 330 K 0.2 5 kPa [gage] 308 K 1.0 308 K 大気圧 300 K 0.5 窒素 100 % 窒素 80 % 酸素 20 %	設計値

項目	数 値	備 考
2. 容積		設計値
(1) 原子炉圧力容器 ・自由空間体積（冷却材がない場合，解析で想定される空間区分ごと）	図 2-1 参照	
(2) ドライウエル（ベント管及び原子炉キャビティを含む） ・ドライウエル自由空間体積	7,900m <sup>3</sup>	
(3) ドライウエル（ベント管及び原子炉キャビティを除く） ・ドライウエル自由空間体積 ・ドライウエル床からドライウエル頂部までの高さ と自由空間体積の関係	7,318.6m <sup>3</sup>	
	高さ   体積	
	0m   0m <sup>3</sup>	
	5.1m   61.6m <sup>3</sup>	
	34.4m   7,318.6m <sup>3</sup>	
(4) 原子炉キャビティ ・原子炉キャビティ自由空間体積 ・原子炉キャビティ底部から圧力容器ペDESTAL頂部までの高さ と自由空間体積の関係	231.4m <sup>3</sup>	
	高さ   体積	
	0m   0m <sup>3</sup>	
	6.0m   61.6m <sup>3</sup>	
	9.5m   231.4m <sup>3</sup>	
(5) ベント管 ・ベント管自由空間体積（サプレッション・プール水がない場合）	350m <sup>3</sup>	
(6) ウェットウエル ・ウェットウエル自由空間体積（サプレッション・プール水がない場合） ・ウェットウエル底部からウェットウエル頂部までの高さ と自由空間体積の関係（サプレッション・プール水がない場合） ・サプレッション・プール水量	7,500m <sup>3</sup>	
	高さ   体積	
	0m   0m <sup>3</sup>	
	9.4m   7,500m <sup>3</sup>	
	2,800m <sup>3</sup>	
(7) 原子炉建屋 ・原子炉建屋自由体積 ・原子炉建屋底部（マット）から原子炉建屋頂部（燃料交換建屋天井）までの高さ と自由空間体積の関係	101,000m <sup>3</sup>	
	高さ   体積	
	0m   0m <sup>3</sup>	
	62.2m   101,000m <sup>3</sup>	


項 目	数 値	備 考																												
<p>3. 原子炉圧力容器形状に関するデータ</p> <p>(1) 内部構造材材質及び重量</p> <table border="1" data-bbox="815 237 1099 571"> <thead> <tr> <th>(材質)</th> <th>(割合)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鉄鋼</td> <td>0.74</td> </tr> <tr> <td>クロム</td> <td>0.18</td> </tr> <tr> <td>ニッケル</td> <td>0.08</td> </tr> <tr> <td>炭素</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">753.2t</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 燃料集合体材質及び重量(ウランも含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・燃料ペレット</li> <li>・燃料被覆管</li> <li>・チャンネルボックス</li> <li>・構造材</li> </ul> <table border="1" data-bbox="815 571 1099 1086"> <thead> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">UO<sub>2</sub></th> </tr> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">Zr</th> </tr> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">Zr</th> </tr> <tr> <th>(材質)</th> <th>(割合)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鉄鋼</td> <td>0.74</td> </tr> <tr> <td>クロム</td> <td>0.18</td> </tr> <tr> <td>ニッケル</td> <td>0.08</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">178.3t</td> </tr> </tbody> </table> <p>(3) LOCAが起こりうる配管の口径及び位置</p> <p style="text-align: center;">457mm E L. 19.981m</p>	(材質)	(割合)	鉄鋼	0.74	クロム	0.18	ニッケル	0.08	炭素	0	753.2t		UO <sub>2</sub>		Zr		Zr		(材質)	(割合)	鉄鋼	0.74	クロム	0.18	ニッケル	0.08	178.3t			設計値
(材質)	(割合)																													
鉄鋼	0.74																													
クロム	0.18																													
ニッケル	0.08																													
炭素	0																													
753.2t																														
UO <sub>2</sub>																														
Zr																														
Zr																														
(材質)	(割合)																													
鉄鋼	0.74																													
クロム	0.18																													
ニッケル	0.08																													
178.3t																														
<p>4. ドライウェル形状に関するデータ</p> <p>(1) ドライウェル床高さ</p> <p>(2) 圧力容器底部高さ</p> <p>(3) 円錐フラスタム頂部高さ</p> <p>(4) ドライウェル頂部高さ</p> <p>(5) ドライウェル床内径</p> <p>(6) 円錐フラスタム頂部内径</p> <p>(7) ドライウェル・ライナ材質及び重量</p> <p>(8) ドライウェル・ライナ厚さ</p> <p>(9) ドライウェル・ライナ(円錐フラスタム部)とドライウェル遮蔽壁との間隔</p>	<p>図 2-2①参照</p> <p>図 2-2②参照</p> <p style="text-align: center;">—</p> <p>図 2-2③参照</p> <p>図 2-2④参照</p> <p>図 2-2⑤参照</p> <p style="text-align: center;">鋼材</p> <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 15px; margin: 0 auto;"></div> <p>図 2-2⑥参照</p>	設計値																												

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

項 目	数 値	備 考
5. ウェットウェル形状に関するデータ (1) トーラス大半径 小半径 (2) サプレッション・チェンバ水深さ (3) サプレッション・プール水温 (4) ウェットウェル・ライナ材質及び重量 (5) ウェットウェル・ライナ厚さ  (6) ウェットウェル・ライナとウェットウェル遮蔽壁との間隔	図 2-2⑦参照 図 2-2⑧参照 図 2-2⑨参照 35℃ 鋼材 <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 15px; margin: 5px auto;"></div> —	設計値
6. ベント管形状に関するデータ (1) ベント管頂部高さ (2) ベント管材質及び重量  (3) ベント管外径及び内径 (4) ベント管長さ (5) ベント管本数 (6) ベント管入口障壁の形状及びベント管との位置関係 (7) ベント管出口のサプレッション・プール底部からの高さ (8) 真空破壊装置の内径 (9) 真空破壊装置の個数 (10) 真空破壊装置の作動条件  (11) 真空破壊装置の位置 (高さ)	図 2-2⑩参照 鋼材 132.35t  <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 15px; margin: 5px auto;"></div> 図 2-2⑪参照 8 本 (1)と同じ 図 2-2⑫参照  <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 15px; margin: 5px auto;"></div> 8 本 3.43kPa (ドライウェル・サプレッション・チェンバ間差圧) サプレッション・チェンバ床上： 5.615m	設計値  ベント管，ベントヘッド，ダウンカマを含む全質量

本資料のうち，枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

項目	数 値	備 考
7. 格納容器フィルタベントに関するデータ		設計値
(1) ベント配管口径, 位置	ベント管口径: 363.6mm サプレッション・チェンバ床上高さ: 9.1 m	
(2) 放出高さ	MAAPモデル化無し	
8. 原子炉遮蔽壁形状に関するデータ		設計値
(1) 原子炉遮蔽壁頂部高さ	図 2-2⑬参照	
(2) 原子炉遮蔽壁長さ	図 2-2⑭参照	
(3) 原子炉遮蔽壁外径及び内径	9.163m 7.763m	
(4) 原子炉遮蔽壁と原子炉圧力容器壁との間隔	950mm	
(5) 原子炉遮蔽壁材質及び重量	モルタル重量: 554t 鋼板重量: 238t	
9. 圧力容器ペDESTAL形状に関するデータ		設計値
(1) 原子炉キャビティ床高さ	図 2-2⑮参照	
(2) 各部の長さ	図 2-2⑯⑰⑱参照	
(3) 圧力容器ペDESTAL開口部のそれぞれの個数	CRD搬出入口 : 1 個	
(4) コンクリート組成	玄武岩コンクリート	文献値 (NUREG/CR-3920)
	(組成)   (割合)	
	SiO <sub>2</sub>   0.5484	
	CaO   0.0882	
	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>   0.0832	
	K <sub>2</sub> O   0.0539	
	Na <sub>2</sub> O   0.0180	
	MgO+MnO+TiO   0.0721	
	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>   0.0626	
	Fe   0.0000	
	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>   0.0000	
	H <sub>2</sub> O   0.0586	
	CO <sub>2</sub>   0.0150	
	O <sub>2</sub>   0.0000	
(5) コンクリート密度	2,300kg/m <sup>3</sup>	文献値 (コンクリート標準示方書)
(6) コンクリート融解温度	1,380°C	文献値 (NUREG/CR-2282)

項目	数値	備考
(7) コンクリート凝固温度	1,080℃	文献値 (NUREG/CR-2282)
10. 原子炉建屋形状に関するデータ		設計値
(1) 原子炉建屋の縦, 横長さ	88m×68.6m	
(2) 原子炉建屋頂部高さ	E L. 63.5m	
(3) 燃料交換建屋床高さ	—	
(4) 原子炉建屋マット厚さ	6 m	
(5) ウェットウェル遮蔽壁厚さ	—	
(6) ドライウェル遮蔽壁厚さ	—	
(7) 原子炉建屋壁ウェットウェル部厚さ	—	
(8) 原子炉建屋壁ドライウェル部厚さ	2 m	
(9) 燃料交換建屋床厚さ	—	
(10) 燃料交換建屋壁厚さ	—	
(11) ブローアウトパネルの個数 位置 開口面積 吹出し圧力		
(12) 原子炉建屋内の開口部の個数, 位置, 開口面積	なし	

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

(3) 工学的安全施設等に関するデータ

項 目	数 値	備 考
1. 高压炉心スプレイ系		設計値
(1) ポンプ台数	1 台	
(2) 注水特性曲線	318~1,050 m <sup>3</sup> /h	8.14~1.38MPa[dif]
(3) 水源切替え条件	水源はサプレッション・チェンバ	
(4) スパージャノズル注水高さ	9,791.7 mm	R P V底部からの高さ
2. 低压炉心スプレイ系		設計値
(1) ポンプ台数	1 台	
(2) 注水特性曲線	1,050 m <sup>3</sup> /h	0.78 MPa[dif]
(3) 注水位置	9,531.3 mm	
3. 残留熱除去系（低压注水モード）		設計値
(1) ポンプ台数	3 台	
(2) 注水特性曲線	1,136 m <sup>3</sup> /h	0.14 MPa[dif]
(3) 注水位置	9,265 mm	R P V底部からの高さ
4. 低压原子炉代替注水系（常設）		設計値
(1) ポンプ台数	1 台	
(2) 注水特性曲線	別添 7	
(3) 注水位置	低压注水系:9,265 mm	R P V底部からの高さ
5. 低压原子炉代替注水系（可搬型）		設計値
(1) ポンプ台数	1 台	
(2) 注水特性曲線	別添 7	
(3) 注水位置	低压注水系:9,265 mm	R P V底部からの高さ
6. 高压原子炉代替注水系		設計値
(1) ポンプ台数	1 台	
(2) 注水特性曲線	別添 7	
(3) 注水位置	給水系:12,434 mm	R P V底部からの高さ



項目	数 値	備 考
7. 原子炉隔離時冷却系		設計値
(1) ポンプ台数	1 台	
(2) 注水特性曲線	91m <sup>3</sup> /h	8.21～0.74MPa[gage]
(3) 水源切替え条件	水源はサブプレッショ ン・チェンバ	
(4) タービン駆動蒸気量	高圧時：13,087 kg/h 低圧時：3,015 kg/h	
(5) タービン駆動蒸気凝縮水の温度	下記条件時の飽和温 度 高圧：82.6 kg/cm <sup>2</sup> g 低圧：6.4 kg/cm <sup>2</sup> g	
(6) 注水位置	給水系：12,434 mm	R P V 底部からの高 さ 設計値
8. 残留熱除去系熱交換器設計条件		
(1) 基数	2 基	
(2) 伝熱容量	7.85×10 <sup>6</sup> kcal/h	
(3) 伝熱面積	<input type="text"/>	
(4) 一次側定格流量	1,216 m <sup>3</sup> /h	
(5) 二次側定格流量	1,217 m <sup>3</sup> /h	
(6) 一次側入口温度 及び出口温度	52℃ 45.5℃	
(7) 二次側入口温度 及び出口温度	35℃ 41.5℃	
9. 復水貯蔵タンク	評価上考慮しない	
10. 原子炉補機代替冷却系	8～24 時間 24 時間以降	設計値
(1) 基数	1 基      1 基	
(2) 伝熱容量	約 16MW      約 11MW	
(3) 伝熱面積	—      —	
(4) 一次側定格流量	1,200m <sup>3</sup> /h      1,200m <sup>3</sup> /h	
(5) 二次側定格流量	427.9 m <sup>3</sup> /h      226 m <sup>3</sup> /h	
(6) 一次側入口温度 及び出口温度	100℃      100℃ 88.4℃      92.1℃	
(7) 二次側入口温度 及び出口温度	35℃      35℃ 66.7℃      76.0℃	

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

項目	数 値	備 考
11. 残留熱代替除去系	大破断 T Q U V L O C A (R P V破損)	設計値
(1) 基数	1 基 1 基	
(2) 伝熱容量	約 7 MW 約 6 MW	
(3) 伝熱面積	— —	
(4) 一次側定格流量	150m <sup>3</sup> /h 120m <sup>3</sup> /h	
(5) 二次側定格流量	226m <sup>3</sup> /h 226m <sup>3</sup> /h	
(6) 一次側入口温度 及び出口温度	100℃ 100℃ 57.8℃ 54.5℃	
(7) 二次側入口温度 及び出口温度	35℃ 35℃ 62.6℃ 58.9℃	
12. 格納容器代替スプレイ流量	120m <sup>3</sup> /h	
13. 自動減圧機能を有する逃がし安全弁の弁个数, 容量及び流路面積 (代替自動減圧機能を含む)	弁 : 6 個 容量 : 367t/h 流路面積 : 86.7cm <sup>2</sup>	設計値 7.58MPa [gage] 1 弁あたり
14. 格納容器圧力と自動減圧系閉鎖特性の関係	—	
15. 非常用ガス処理系	—	解析では使用しない
(1) 系統数		
(2) 容量		
(3) フィルタが無効 (破損時) になる限界圧力 降下		
(4) 除去率 (物質ごと)		
(5) 除去可能な粒径の下限		
(6) 作動条件		

項 目	数 値	備 考
<p>16. プラントインターロック等に関するデータ</p> <p>(1) 高圧炉心スプレイ系の作動条件 及び停止条件とその数値</p> <p>(2) 低圧注水系の作動条件 及び停止条件とその数値</p> <p>(3) 低圧炉心スプレイ系の作動条件 及び停止条件とその数値</p> <p>(4) 原子炉隔離時冷却系の作動条件 及び停止条件とその数値</p> <p>(5) 残留熱除去系の作動条件 及び停止条件とその数値</p> <p>(6) 格納容器代替スプレイ系（可搬型）の 作動条件及び停止条件とその数値</p>	<p>原子炉停止機能喪失 シーケンス以外： 作動：L1H+30 秒 停止：L8 原子炉停止機能喪失 シーケンス： 格納容器圧力高 (13.7kPa[gage]) +17 秒で自動起動</p> <p>作動：L1+40 秒 停止：なし</p> <p>作動：L1+40 秒 停止：なし</p> <p>作動：L2+30 秒 停止：L8</p> <p>別添 1 参照</p> <p>間欠運転開始条件： ・ 炉心損傷前 384kPa[gage] ・ 炉心損傷後 640kPa[gage] 間欠運転停止条件： ・ 炉心損傷前 334kPa[gage] ・ 炉心損傷後 588kPa[gage] 外部水源を用いた総 注水量の制限値： サプレッション・プ ール水位が通常水位 +約 1.3mに到達した 時点でスプレイ停止</p>	<p>設計値</p> <p>設計値</p> <p>設計値</p> <p>設計値</p>

項 目	数 値	備 考
(7) 自動減圧系の作動条件 及び停止条件とその数値	作動：格納容器圧力 高, 及び L1+120 秒 停止：なし	設定値
(8) 格納容器ベント操作の開始条件 及びベント経路とベント面積	サプレッション・プ ール水位が通常水位 +約 1.3m 到達後+10 分後 W/Wベント, 100%面積	

項目	数値	備考
17. 破損に関連する条件		
(1) 材料熔融温度		文献値 (MATPRO)
・ジルカロイ	2,125K	
・酸化ジルコニウム	2,911K	
・二酸化ウラン	3,113K	
・ステンレス鋼	1,700K	
・ステンレス鋼酸化物	1,650K	
・B <sub>4</sub> C	2,700K	
(2) 下部ヘッド破損条件	貫通部における破損モードは2種類による判定を実施している。	解析モデル
・貫通部ごとの過温破損条件	①溶接部のせん断応力が限界せん断応力を超える場合 ②溶接部のひずみ量が閾値を超えた場合	
・下部ヘッドクリープ破損条件	クリープ破損は、Larson-Millerパラメータ手法により評価している。	
・Larson-Miller 評価に用いるパラメータ	MAAPによる内部計算	
(3) 被覆管破損条件	1,000K	実験に基づく設定値
(4) コア・コンクリート反応条件	1,653K	文献値 (NUREG/CR-2282)
(5) 水素燃焼条件		
・ 燃焼開始濃度 (水素, 酸素, 水蒸気)	水蒸気 75%以下 水素 4.1%以上 酸素 5%以上	実験に基づく設定値

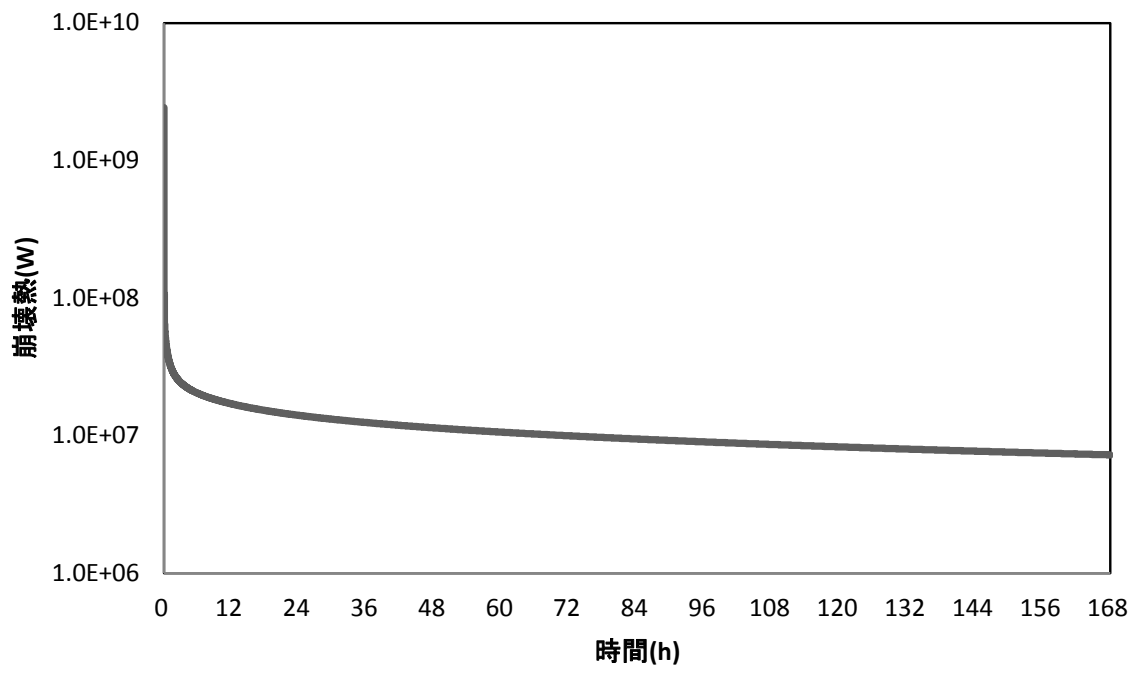


圖 1-1 崩壞熱曲線

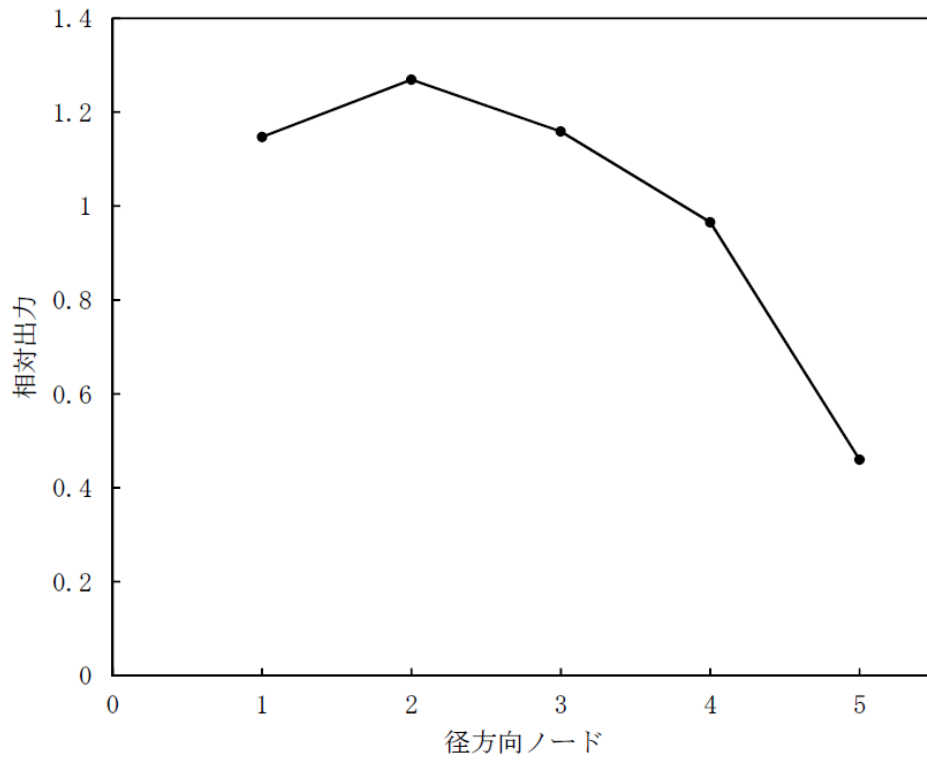


図 1-2 径方向出力分布

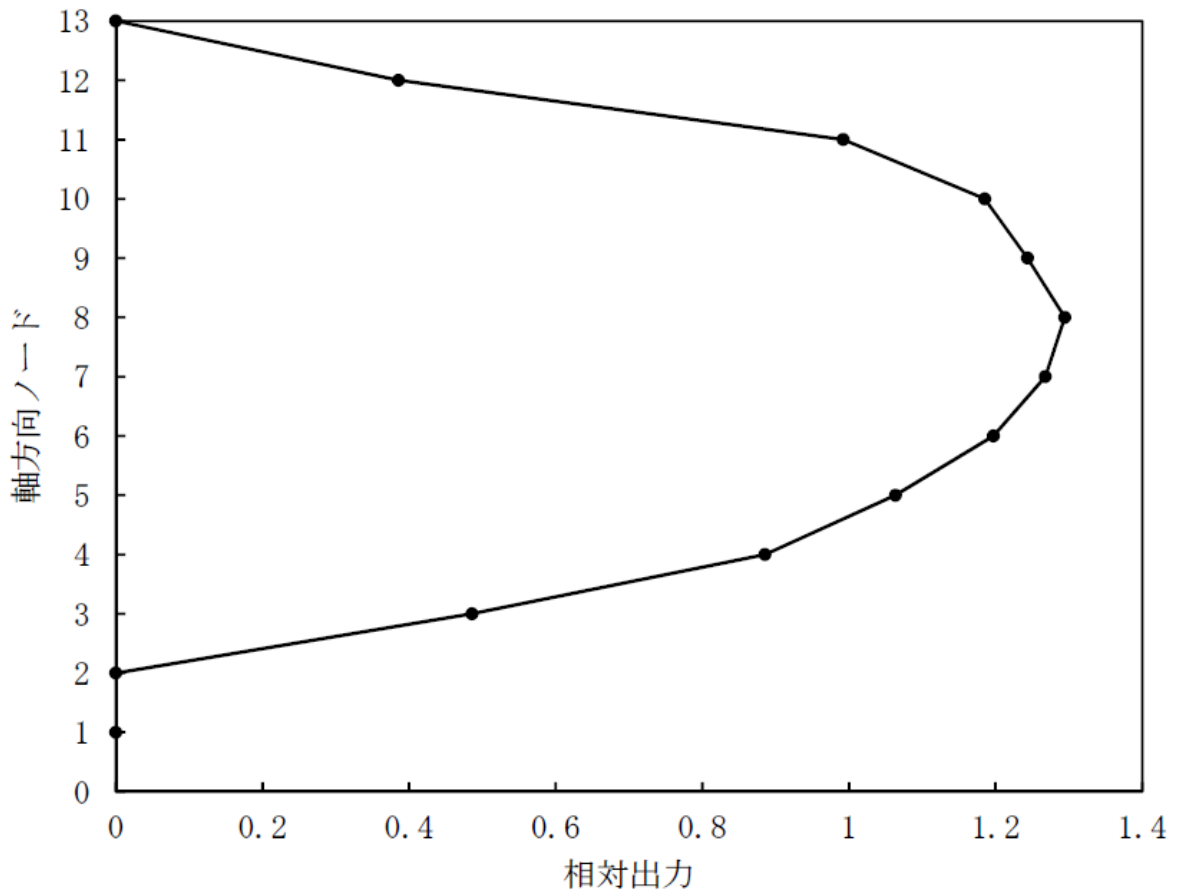


図 1-3 軸方向出力分布

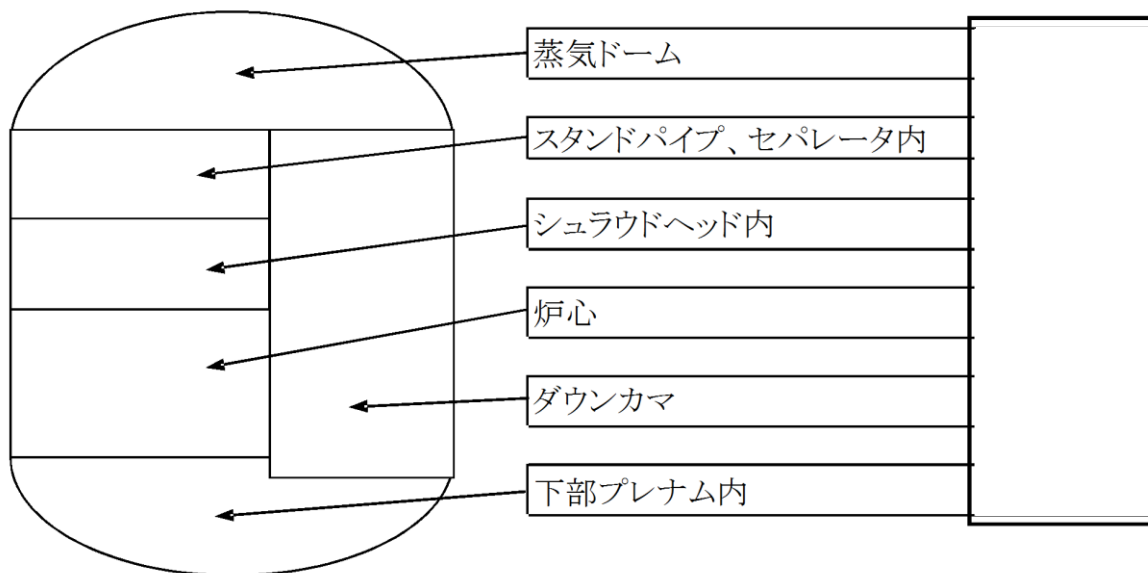


図 2-1 原子炉圧力容器内自由空間体積

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



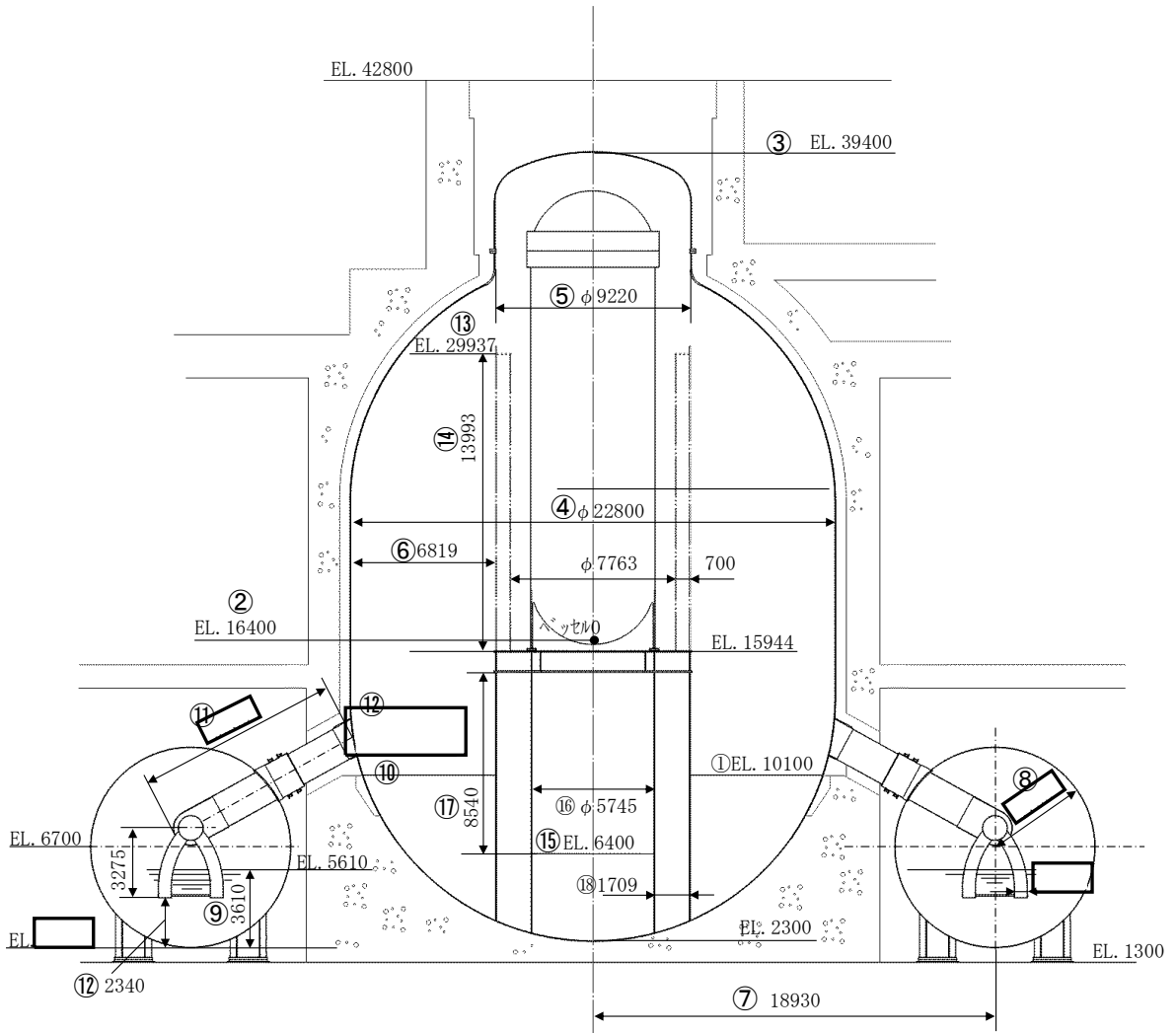
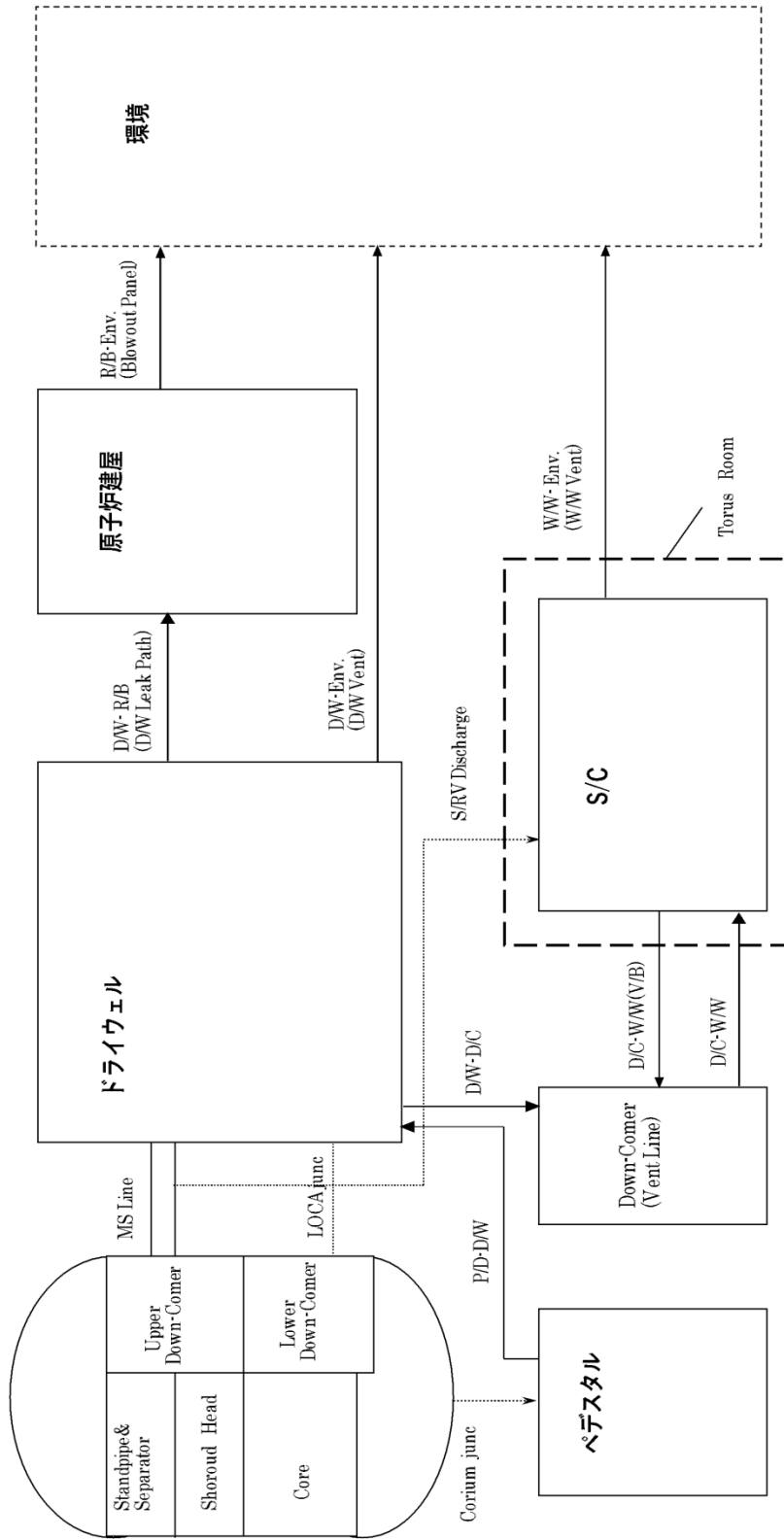


図 2-2 格納容器内概略図 (BWR/MARK-I 改良型)

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



(注)DW: Drywell, P/D: Pedestal, S/C: Suppression Chamber, W/W: Wetwell, D/C: Down-Comer, V/B: Vacuum Breaker

図 2-3 格納容器ノード分割 (BWR/Mark-I 改良型)

### 3. 原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用 (FCI)

#### (1) JASMIN E

##### 1.1 入力

##### 1.1.1 計算体系の幾何形状

原子炉圧力容器, 圧力容器ペDESTAL壁面, 床面で形成される原形状の中から, JASMIN Eの計算体系にてモデル化した部分を図1に示す。モデル化した部分は, ペDESTAL内壁及び上部に位置するベッセル下部となる。

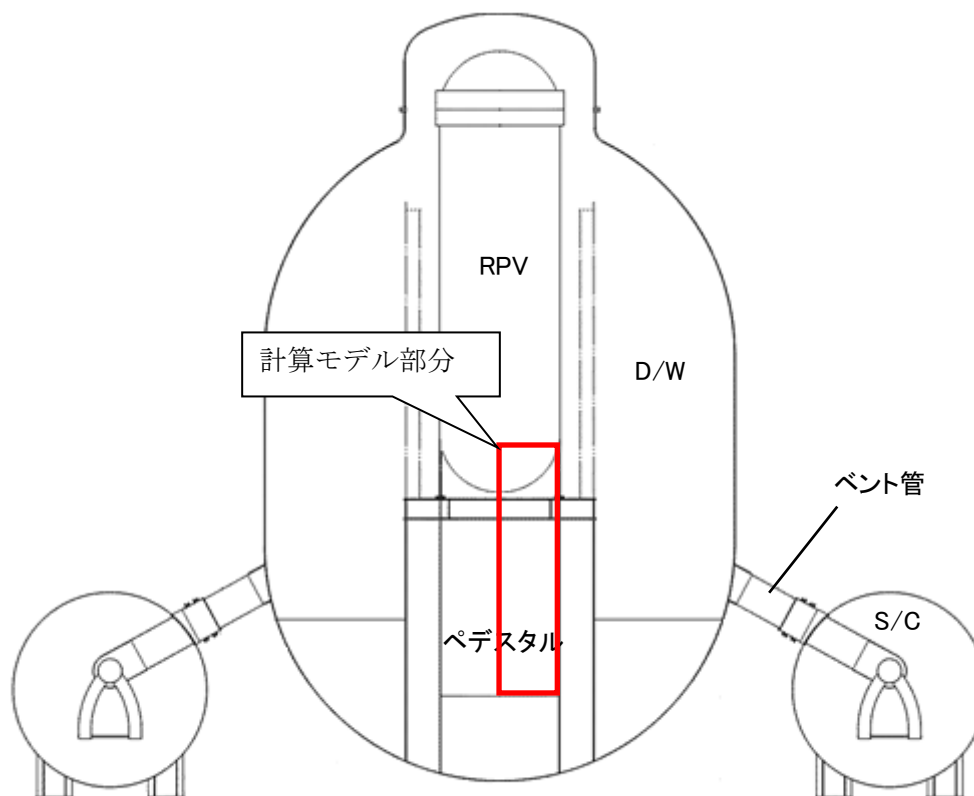
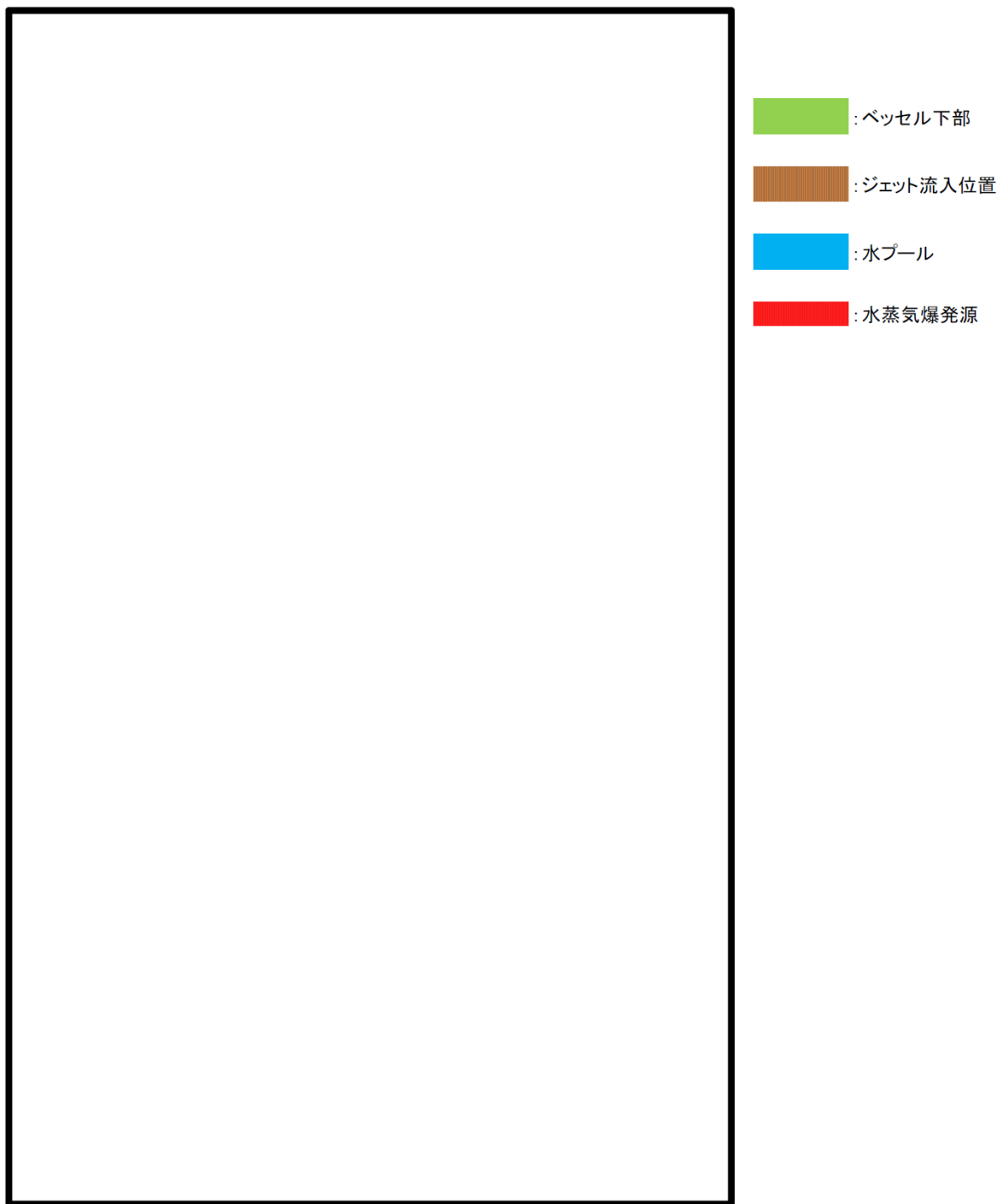


図1 JASMIN Eの計算体系にてモデル化した部分

##### 1.1.2 メッシュ分割

図1に示す原形状に対するJASMIN Eによるメッシュ分割 (メッシュ分割数及びメッシュ寸法), ベッセル, 水面, 壁面等の定義位置を図2に示す。メッシュ分割数は, JASMIN Eコードの制限値【X方向(=30), Z方向(=40)】以内で, 均等セルになるように調整した。



メッシュ分割 X方向 : 20 Z方向 : 32

図2 JASMINEの計算体系モデル

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

### 1.1.3 溶融物放出履歴

表1にジェット口径，放出速度の時刻歴を示す。

表1 ジェット口径，放出速度の時刻歴

時刻[sec]	ジェット流入速度[m/s]	ジェット流入直径[m]	備考
0			
110.0			
110.1			

### 1.1.4 溶融炉心の組成

JASMINNEでは溶融炉心の組成を入力条件とはしていない。

### 1.1.5 溶融炉心物性値

表2に溶融炉心物性値を示す。本解析では，組み込みライブラリ(jasmine.corium2)を用いている。JASMINNEコード付属の溶融コリウム模擬のライブラリ(jasmine.corium, jasmine.corium2, jasmine.corium3)のうち，デブリ物性値が実機条件に近いと考えられるjasmine.corium2を採用した。

### 1.1.6 主要入力値

表3に主要入力値を示す。

本資料のうち，枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

表2 JASMINNE解析における物性値

No.	項目	物性値		備考
		数値	単位	
1	溶融点		[K]	組み込みライブラリ (jasmine. corium2)に 基づく値
2	固相線温度		[K]	
3	液相線温度		[K]	
4	固相密度		[kg/m <sup>3</sup> ]	
5	液相密度		[kg/m <sup>3</sup> ]	
6	液相比熱		[J/(kg・K)]	
7	固相比熱		[J/(kg・K)]	
8	溶融潜熱		[J/kg]	
9	熱伝導率		[W/(m・K)]	
10	粘性係数		[Pa・s]	
11	表面張力		[N/m]	
12	輻射率		[-]	

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

表3 JASMINNE解析における主な入力

No.	入力	値 (定義)	単位	備考
1	初期圧力		[Pa]	
2	プール水温		[K]	
3	落下メルト総重量		[kg]	
4	メルトジェット温度		[K]	
5	メルト放出速度※		[m/s]	
6	自由落下距離	該当入力なし		
7	トリガリング時の先端位置	該当入力なし		
8	プール水深	2.4	[m]	手順書に基づく設定値
9	粗混合時液滴径		[m]	
10	爆発後粒子径		[m]	
11	ブレークアップ係数		[-]	
12	液滴速度ファクタ		[-]	
13	トリガリング位置	ベデスタルの中心, 底から 0.6m	[m]	プール底部
14	トリガリングタイミング		[sec]	
15	トリガ閾値		[Pa]	
16	フラグメンタルモデル		[-]	
17	フラグメンテーション条件		[-]	
18	フラグメンテーション係数		[-]	
19	フラグメンテーション時間		[sec]	
20	蒸発に用いられるエネルギー割合		[-]	
21	フラグメンテーションにおける ボイド緩和係数		[-]	
22	トリガ一点圧力		[Pa]	
23	トリガ一点ガス割合		[-]	
24	トリガ一点ガス温度		[K]	

※：MAAP解析結果に基づき設定。MAAPでは下部プレナムでのRPV-PCV間差圧、水頭圧、重力加速度により放出速度が計算されている。

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

## (2) AUTODYN

### 2.1 入力

#### 2.1.1 計算体系の幾何形状

解析モデルを図1に示す。解析は2次元軸対称モデルを用い、気相部、液相部、圧力源、鋼板部及びコンクリートをモデル化している。当該モデルは2次元軸対称体系であるため、縦リブ鋼板、開口等は模擬していない。

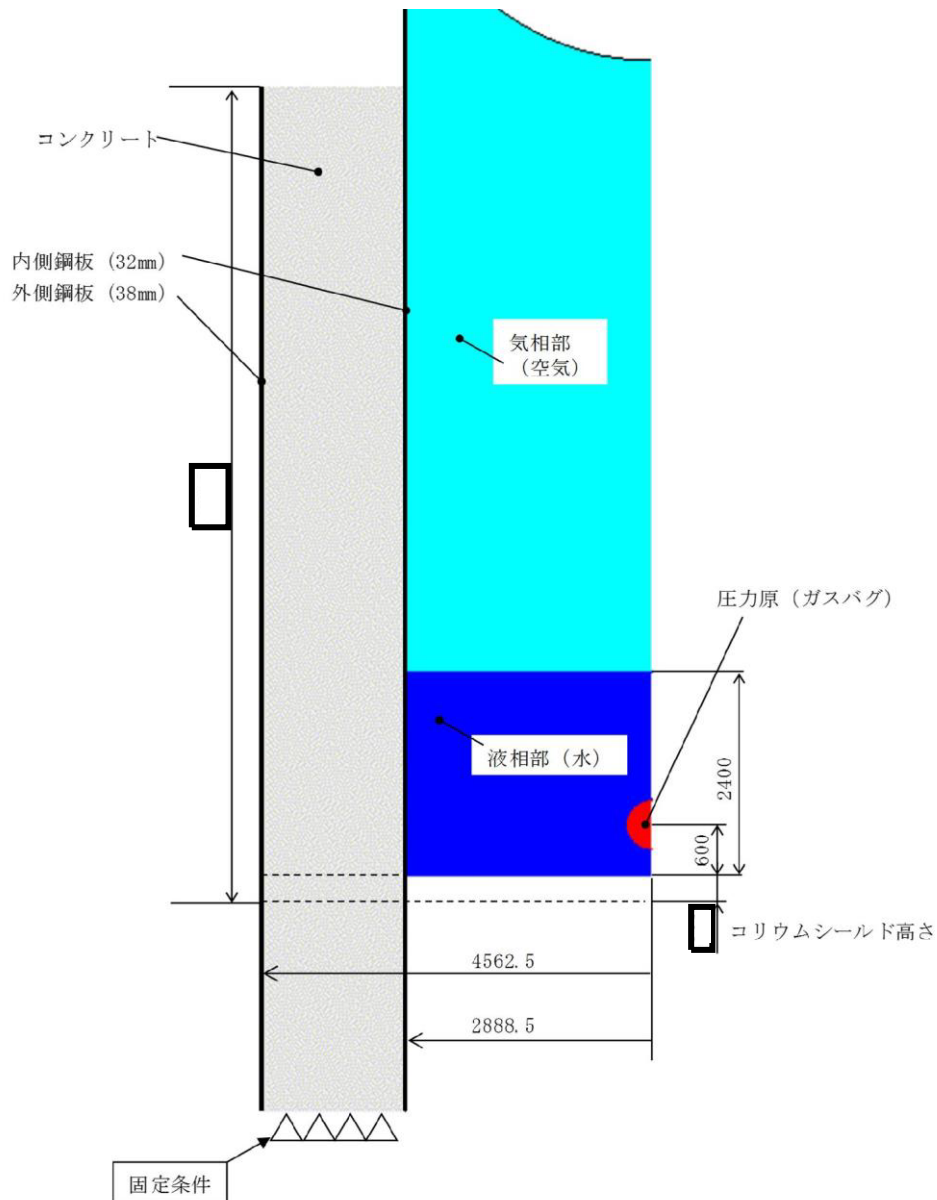


図1 解析モデル (単位: mm)

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



## 2.1.2 メッシュ分割, 拘束条件, 有限要素及び要素プロパティ

本解析で適用した要素タイプ (AUTODYNではソルバーと呼称) と材料特性の一覧を表1及び表2に示し, メッシュ図を図2に示す。

AUTODYNは複数のソルバーにより構成されるプログラムであり, モデル化の対象に応じて適切なソルバーを選択することができる。本解析では, 爆発現象に伴う液相-気相部境界が大きく変動することが想定されることから, 空間領域は複数物質の移流を考慮することが可能なMulti-material-Eulerソルバーを用いた。これにより, 圧力源からのエネルギー開放に伴う水面の変動やブレイクスルー等も模擬できる。

なお, 鋼板はコンクリート壁に比べ厚みが小さいためShellソルバーを用いる。Shellソルバーに対しては, Eulerソルバーとの相互作用を定義する境界として必要なポリゴンを設定することで流体-構造間の連成解析を実現する。

表1 要素プロパティ一覧

部位	ソルバー	要素幅	要素数
コンクリート	L a g r a n g e (S o l i d要素)	<input type="text"/>	<input type="text"/>
内外鋼板 (SPV490)	S h e l l	<input type="text"/>	<input type="text"/>
空気, 水, エネルギーソース	E u l e r (M u l t i- m a t e r i a l)	<input type="text"/>	<input type="text"/>

表2 材料特性一覧

材料	密度 <sup>※1</sup>	体積 弾性率 <sup>※2</sup>	横 弾性率 <sup>※2</sup>	降伏 応力 <sup>※1</sup>	最大引張 強さ <sup>※1</sup>	限界ひずみ <sup>※1</sup>
コンクリート	<input type="text"/>			(図3の関係式による)		
S P V 4 9 0				<input type="text"/>		

※1 ノミナル物性値

※2 ノミナル物性値であり, 下式に基づき算出したもの。

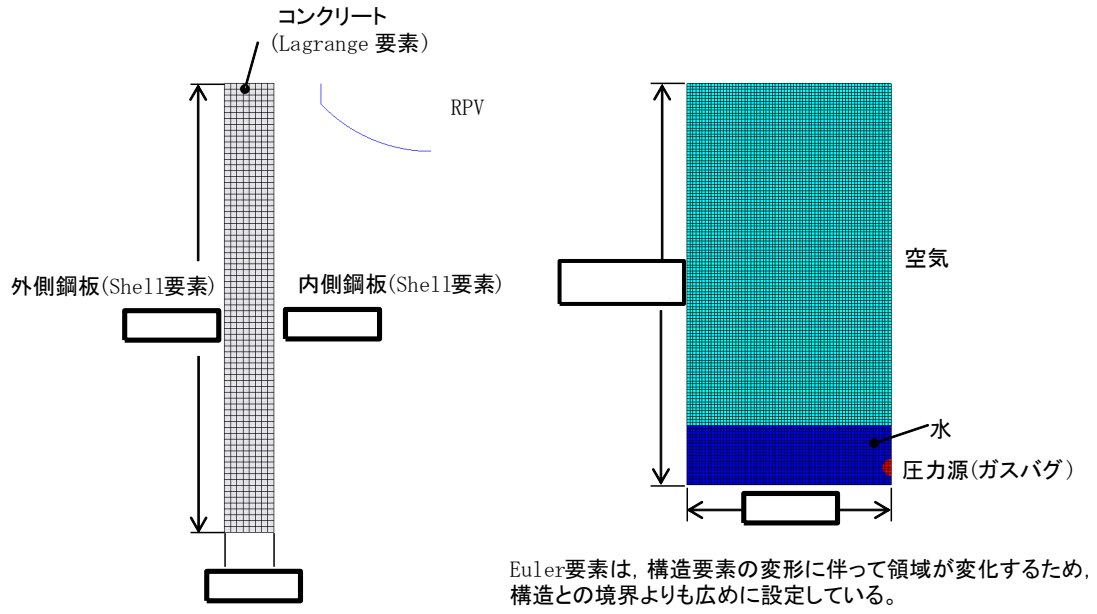
$$\text{体積弾性率 } K = E / (3 \times (1 - 2 \cdot \nu))$$

$$\text{横弾性率 } G = E / (2 \cdot (1 + \nu))$$

Eは縦弾性係数で

$\nu$ はポアソン比で

本資料のうち, 枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



Shell要素及びLagrange要素

Euler要素部

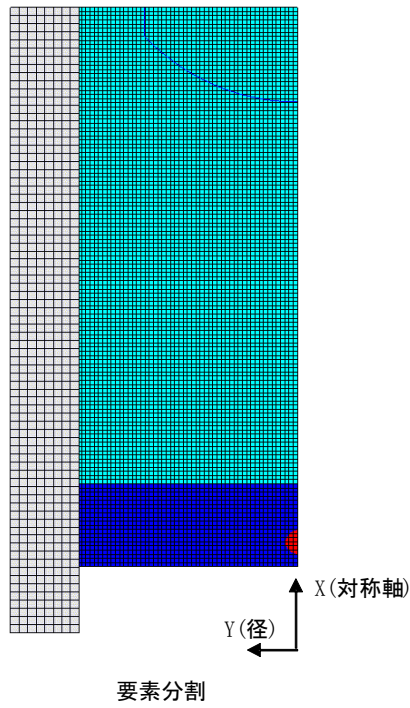


図2 メッシュ図

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。



図3 Drucker-Pragerの降伏モデルにおけるコンクリートの圧力と降伏応力の関係

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

### 2.1.3 圧力発生点及び圧力履歴

圧力源（ガスバグ）の仕様を表3に示す。また、体積変化と圧力の関係を図4に示す。

表3 ガスバグ仕様

項目	値	備考
運動エネルギー		
初期半径		
初期圧力		
体積変化		

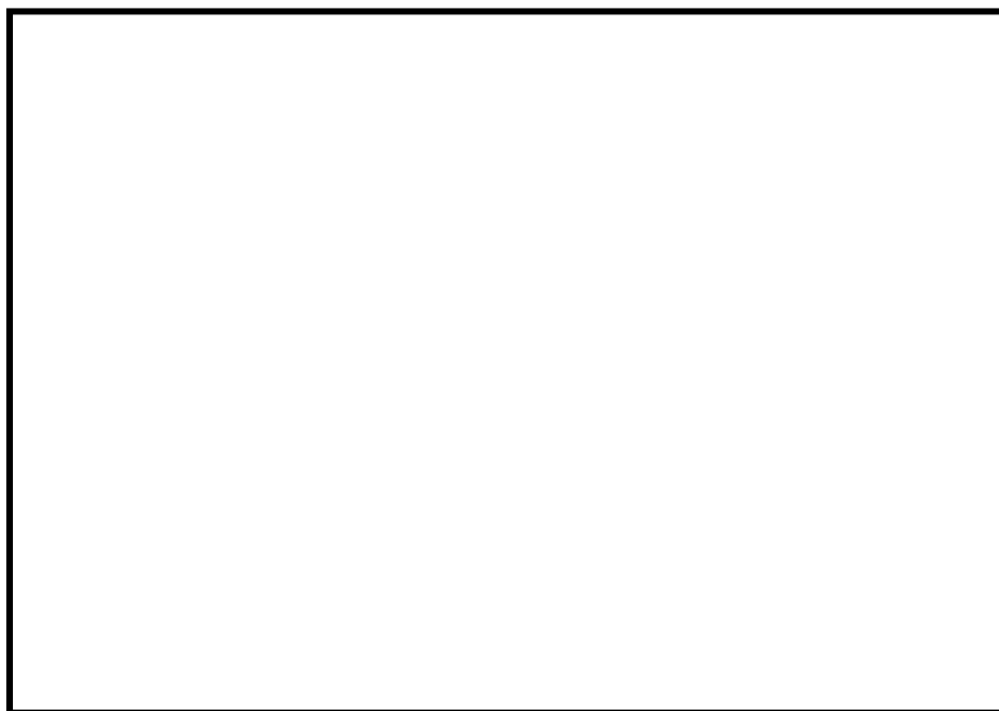


図4 体積変化と圧力の関係

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

#### 4. 溶融炉心・コンクリート相互作用（MCC I）

##### （1）計算体系の幾何形状

図1にMCC IにおけるMAAP評価モデルの概要図を示す。

モデル化において想定される各評価条件について以下にまとめる。

- ・溶融炉心は、初期条件として溶融炉心全量が圧力容器ペDESTAL床面に均一に堆積していると仮定しており、溶融炉心上部には冷却材プール（約2.4m）が形成されている。
- ・溶融炉心が落下する領域はコリウムシールド床面  が設置されており、更にその外側は圧力容器ペDESTAL床面  ，圧力容器ペDESTAL側壁  により囲まれている。
- ・局所形状のモデル化の取扱いについては、圧力容器ペDESTAL領域内の配管，構造物，サンプ，スリットについてはモデル化されていない。

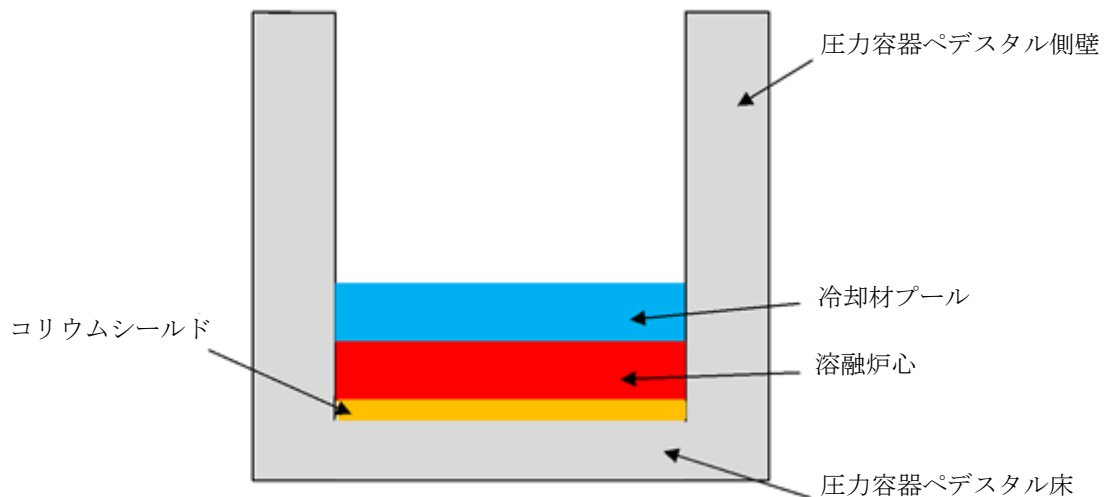


図1 MCC I解析モデル図

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

(2) 溶融炉心固相線・液相線

MAAPコードに内蔵されているものを使用している。

表1に主要入力値を示す。

表1 主要入力値

No.	入 力	入力値	備考	
1	エントレインメント係数 (Ricou-Spalding係数)			
2	溶融炉心から下部, 側面, 上部クラストへの対流熱 伝達係数	下部		
		側面		
		上部		
3	上部プール水とデブリ間熱流束 <sup>※1</sup>			
4	コンクリート組成 <sup>※2</sup> (玄武岩系コンクリート)	SiO <sub>2</sub>	0.5484	文献値 (NUREG/CR-3920)
		CaO	0.0882	
		Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.0832	
		K <sub>2</sub> O	0.0539	
		Na <sub>2</sub> O	0.0180	
		MgO+MnO+TiO <sub>2</sub>	0.0721	
		Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.0626	
		H <sub>2</sub> O	0.0586	
	CO <sub>2</sub>	0.0150		
5	コンクリート特性	コンクリート融点		
		液相温度		
		固相温度		
6	コリウムシールド特性	浸食開始温度		
		比熱		
		熱伝導率		

※1：上部プール水とデブリ間熱流束係数(Kutateladze係数)と記載しているが、Kutateladze型水平平板限界熱流束相関式が適用されている間の熱伝達係数とKutateladze係数は同じものではないため、総じて表現されている熱流束を示す。

※2：代表的な玄武岩コンクリート組成を採用。本シナリオは浸食量が小さく、コンクリート組成が異なることによる浸食時の発生ガス量及び発生ガスによる浸食挙動への影響は小さい。

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

## 有効性評価におけるLOCA時の破断位置及び口径設定の考え方について

重大事故等対策の有効性評価においてLOCA事象を想定する場合の破断位置及び口径設定の考え方については、以下のとおりである。

## 1. 運転中の原子炉における重大事故に至るおそれがある事故

## (1) LOCA時注水機能喪失

## ① 破断位置

燃料被覆管破裂が発生しない範囲の破断面積（約  $3.1\text{cm}^2$ ）を考慮し、気相部配管、シュラウド外の液相部配管及びシュラウド内の液相部配管の各配管（表1）について、流出量の観点からそれぞれ最も低い位置に存在する配管で破断が発生した場合の感度解析を実施した。

その結果、表2に示すとおり、気相部配管の破断を想定した場合は、シュラウド内外の液相部配管に破断を想定した場合と比較して、燃料被覆管最高温度が低くなる。また、液相部配管についてはシュラウド内外で燃料被覆管温度及び事象進展に有意な差はない。

したがって、「LOCA時注水機能喪失」で想定する破断位置は、格納容器破損防止対策の有効性評価（雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損））での想定との整合も考慮し、原子炉冷却材圧力バウンダリに接続する配管の中で最大口径である再循環配管（出口ノズル）を設定した。

表1 代表的な原子炉圧力容器に接続する配管

--

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

表2 破断位置の感度解析結果

破断位置	破断面積	燃料被覆管最高温度
主蒸気配管 (気相部配管)	約 3.1 cm <sup>2</sup>	約 489°C
再循環配管 (出口ノズル) (シュラウド外の液相部配管)		約 779°C
底部ドレン配管 (シュラウド内の液相部配管)		約 782°C

② 破断面積

炉心損傷防止対策の有効性を確認するうえで、燃料被覆管の破裂発生を防止可能な範囲で「LOCA時注水機能喪失」の事象進展の特徴を代表できる破断面積約 3.1cm<sup>2</sup>を設定した。

また、表3に示すとおり、破断面積の感度解析を実施し、再循環配管（シュラウド外の液相部配管）の破断について、破断面積約 4.2cm<sup>2</sup>までは燃料被覆管破裂が発生しないことを確認している。

破断面積が約 4.2cm<sup>2</sup>を超え、炉心損傷（一定以上の燃料被覆管の破裂を含む。）に至る場合については、「3.1 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）」にて確認する。

表3 破断面積の感度解析結果

破断位置	破断面積	破裂の有無
再循環配管 (出口ノズル) (シュラウド外の液相部配管)	約 4.2 cm <sup>2</sup>	無
	約 4.3 cm <sup>2</sup>	有



## (2) 格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)

### ①漏えい位置

島根原子力発電所2号炉の主要系統のうち、原子炉冷却材圧力バウンダリと接続された系統で、高圧設計部分と低圧設計部分のインターフェイスとなる配管のうち、隔離弁の故障等により低圧設計部が過圧され破断する事象を想定する。

原子炉冷却材圧力バウンダリと接続し、原子炉格納容器外に系統配管があるラインは下記のとおりである。

- ・高圧炉心スプレイ系注入ライン
- ・残留熱除去系 (低圧注水モード) 注入ライン
- ・残留熱除去系炉頂部ライン
- ・残留熱除去系 (停止時冷却モード) 戻りライン
- ・残留熱除去系 (停止時冷却モード) 拔出ライン
- ・低圧炉心スプレイ系注入ライン
- ・原子炉隔離時冷却系蒸気ライン
- ・ほう酸水注入系注入ライン
- ・原子炉浄化系系統入口ライン
- ・制御棒駆動系挿入ライン
- ・制御棒駆動系引抜ライン
- ・主蒸気系ライン
- ・給水系注入ライン
- ・試料採取系サンプリングライン
- ・圧力容器計装系ライン

高圧バウンダリのみで構成されている圧力容器計装系ラインは、ISLOCAの対象としない。影響の観点から、配管の口径が小さい制御棒駆動系挿入ライン、制御棒駆動系引抜ラインおよび試料採取系サンプリングラインは、評価の対象としない。

さらに、ISLOCA発生頻度の観点から、高圧炉心スプレイ系注入ライン、残留熱除去系炉頂部ライン、原子炉隔離時冷却系蒸気ライン、ほう酸水注入系注入ライン、原子炉浄化系系統入口ライン、主蒸気系ライン及び給水系注入ラインは低圧設計部が3弁以上の弁で隔離等されていることから評価の対象としない。

発生頻度の分析について、PRAにおいては、主に原子炉圧力容器から低圧設計配管までの弁数及び定期試験時のヒューマンエラーによる発生可能性の有無を考慮し、ISLOCAの発生確率が高いと考えられる配管 (残留熱除去系 (低圧注水モード) 注入ライン、残留熱除去系停止時冷却モード戻りライン、残留熱除去系停止時冷却モード拔出ライン、低圧炉心スプレイ系注入ライン) について、各々の箇所でのISLOCA発生確率を算出している。

(事故シーケンスグループ及び重要事故シーケンス等の選定について 別添島根原子力発電所2号炉 確率論的リスク評価(PRA)について参照)

表4の整理のとおり、PRA上は低圧設計配管までの弁数が少なく、定期試験時のヒューマンエラーによる発生が考えられる残留熱除去系 (低圧注水モード) 注入ラインでのISLOCA発生確率が最も高い。各配管におけるISLOCAの発生頻度は、定期試験のある残留熱除去系 (低圧注水モード)

注入ラインにおいては $6.0 \times 10^{-8}$  [/炉年], 低圧炉心スプレイ注入ラインにおいては $2.0 \times 10^{-8}$  [/炉年], 定期試験のない残留熱除去系停止時冷却モード戻りラインにおいては $5.8 \times 10^{-10}$  [/炉年], 残留熱除去系停止時冷却モード拔出ラインにおいては $2.1 \times 10^{-10}$  [/炉年]である。なお, 「実用発電用原子炉施設への航空機落下確率の評価基準について」(平成21・06・25 原院第1号。平成21年6月30日原子力安全・保安院制定)によると, 航空機落下の判断基準は $10^{-7}$  [/年]とされており, 残留熱除去系(低圧注水モード)注入ラインにおけるISLOCA発生頻度 $6.0 \times 10^{-8}$  [/炉年]は十分小さいと判断できると考えられる。

以上より, 評価対象の配管は, 運転中に開閉試験を実施する系統のうち, ISLOCAが発生する可能性が最も高く, ISLOCAが発生した場合の影響が最も大きい残留熱除去系(低圧注水モード)注入ラインを選定する。

表4 低圧設計配管までの弁数, 運転中定期試験の有無及びISLOCA発生頻度

系統	低圧設計配管までの弁数	運転中定期試験の有無	ISLOCA発生頻度[/炉年]
残留熱除去系(低圧注水モード)注入ライン※1	2弁	有	$6.0 \times 10^{-8}$
残留熱除去系停止時冷却モード戻りライン※2	2弁	無	$5.8 \times 10^{-10}$
残留熱除去系停止時冷却モード拔出ライン※3	2弁	無	$2.1 \times 10^{-10}$
低圧炉心スプレイ系注入ライン	2弁	有	$2.0 \times 10^{-8}$

※1: 残留熱除去系(低圧注水モード)の注入ラインは, 原子炉圧力容器から数えて2弁目までの範囲が高圧設計(8.62MPa[gage])の配管で構成され, 2弁目以降から残留熱除去ポンプの吐出までの範囲は中圧設計(3.92MPa[gage])の配管で構成されており, 3弁目は中圧設計のラインに設置されている。中圧設計の配管は低圧設計の配管よりも破断確率が低い, 3弁目までは考慮の対象とせず, 2弁目までを考慮の対象とした。

※2: 残留熱除去系停止時冷却モード戻りラインは, 原子炉圧力容器から数えて2弁目までの範囲が高圧設計(10.4MPa[gage])の配管で構成され, 2弁目以降から残留熱除去ポンプの吐出までの範囲は中圧設計(3.92MPa[gage])の配管で構成されている。

※3: 残留熱除去系停止時冷却モード拔出ラインは, 原子炉圧力容器から数えて2弁目までの範囲が高圧設計(8.62MPa[gage])の配管で構成され, 2弁目以降から残留熱除去ポンプの吸込みまでの範囲は低圧設計(1.37MPa[gage])の配管で構成されている。

## ②破断口径

残留熱除去系(低圧注水モード)注入ラインの実耐力評価結果を踏まえて設定する。

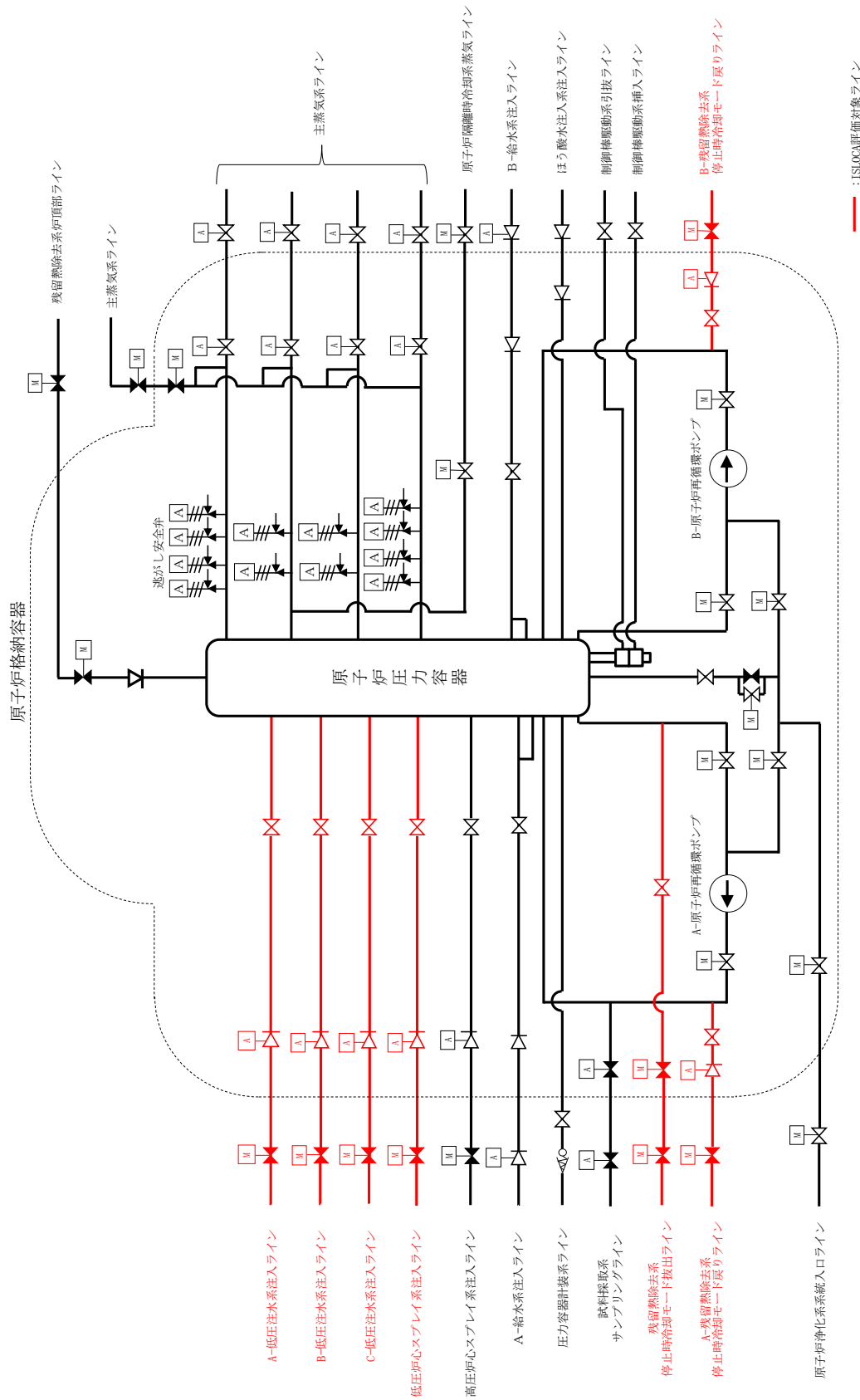


図1 原子炉冷却材圧力バウンダリ概要図

## 2. 重大事故

### (1) 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）

#### ①破断位置

破断位置は以下の理由から再循環配管（出口ノズル）を想定している。（図2参照）

- a. LOCA事象は、破断面積が大きいほど原子炉水位低下及び炉心溶融までの事故進展が早く、格納容器破損防止対策を講じるための時間余裕が厳しくなるため、配管面積が大きいものを選定する。（表1参照）  
なお、気相部配管の破断及び液相部配管（シュラウド内及びシュラウド外）の破断を原子炉水位低下及び炉心溶融までの時間で比較した場合、液相部配管の破断の方が厳しいことから、配管位置が低く、配管面積が大きい再循環配管（出口ノズル）を想定する。
- b. 再循環配管（出口ノズル）以外の配管破断を想定した場合の影響は以下のとおり。
  - (a) 再循環配管（ジェットポンプノズル）での破断を想定した場合、ジェットポンプノズルに比べて面積の大きい再循環配管（出口ノズル）から破断口に向かう流路に圧力損失を生じさせる再循環ポンプがあるため、破断流量は再循環配管（出口ノズル）より少なくなる。原子炉圧力容器内の水温は出口ノズルとジェットポンプノズルで差異はなく、また、再循環ポンプを通過する場合にはポンプ入熱により温度上昇するが、破断流量が低下する影響が大きいことから、ポンプ入熱を考慮しても格納容器内の圧力上昇及び温度上昇への影響は再循環配管（出口ノズル）よりも小さくなる。また、低圧注水系配管（注水ノズル）等のその他のシュラウド外液相配管については、再循環配管（出口ノズル）より配管口径が小さく接続部高さも高いため、破断流量は再循環配管（出口ノズル）より少なくなり、格納容器内の圧力上昇及び温度上昇への影響は再循環配管（出口ノズル）よりも小さくなる<sup>\*</sup>。そのため、格納容器内の圧力上昇及び温度上昇に対して厳しくなる再循環配管（出口ノズル）を想定する。  
※ MAA P解析上、初期状態において低圧注水系配管（注水ノズル）等が接続しているシュラウド内領域は他の領域より10℃程度水温が高いが、LOCA事象発生後初期の事象進展としては破断流量が大きくなる再循環配管（出口ノズル）の方が厳しくなる。
  - (b) 大口径配管ではないが、再循環配管（出口ノズル）より下部にほう酸水注入系配管及び底部ドレン配管があり、炉心冠水後も継続して原子炉圧力容器から格納容器内への流出が継続し、サプレッション・プールの水位上昇を早めることとなる。本影響については、③において述べる。

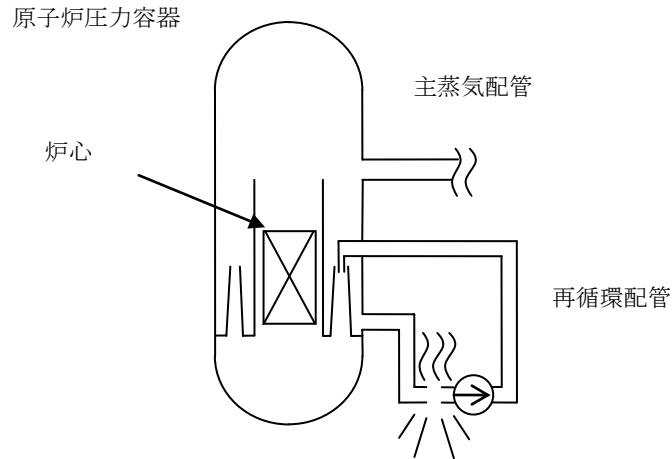


図2 再循環配管（出口ノズル）破断の概要

② 破断面積

破断面積を大きくすると，原子炉からの冷却材漏えい量が多くなり，格納容器へのエネルギー放出量が多くなることから，再循環配管（出口ノズル）の両端破断を想定する。

③ ほう酸水注入系配管及び底部ドレン配管からのLOCAについて

格納容器破損モード「雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）」における起因事象は，原子炉内の保有水量の減少及び炉心のヒートアップを厳しく見積もる観点から，再循環配管（出口ノズル）の両端破断を選定した。

一方，再循環配管のような大口径配管は存在しないが，燃料棒有効長頂部より下部に位置する配管もある。これらは原子炉圧力容器内の保有水量及び炉心のヒートアップの観点からは厳しくないが，炉水冠水過程において，破断箇所から漏えいした原子炉冷却材はペDESTAL（ドライウェル部）へ流入し続けるため，当該配管が破断した場合についても考慮する必要がある。しかしながら，全般的に静的な過圧・過温という観点では，今回選定した再循環配管の両端破断のシナリオより格納容器圧力・温度は緩慢に推移するため，ほう酸水注入系配管及び底部ドレン配管の破断は，雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）として想定した再循環配管の両端破断シナリオに包絡される事象となる。

有効性評価に用いる崩壊熱について

1. ウラン燃料（9×9燃料）とMOX燃料の崩壊熱の比較について

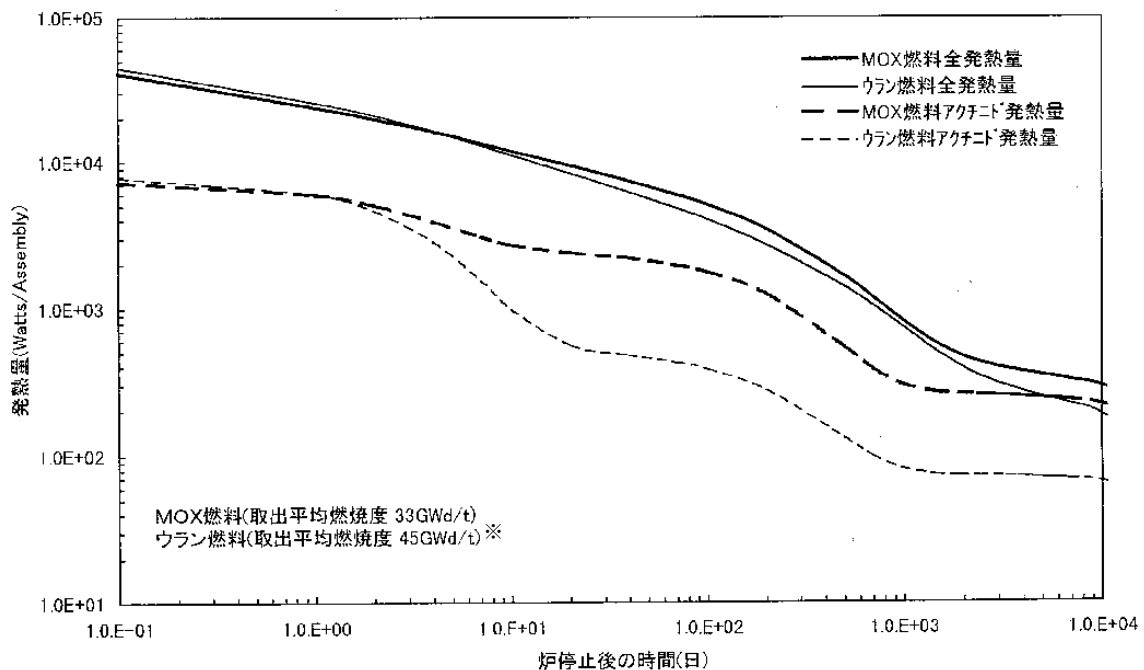
ウラン燃料（9×9燃料）とMOX燃料の燃焼度仕様を表1に、原子炉停止後の時間と崩壊熱の関係を図1に示す。

図1から分かるとおり、原子炉停止後一定期間（数日程度）までは、燃焼度の大きいウラン燃料（9×9燃料）の方が崩壊熱は大きくなるが、その後はアクチノイド核種からの崩壊熱が大きいMOX燃料の方が崩壊熱は大きくなる。

有効性評価において用いる崩壊熱は、これらの特徴を適切に考慮したものを用いた。

表1 ウラン燃料（9×9燃料）とMOX燃料の燃焼度仕様

	9×9燃料	MOX燃料
取替燃料集合体平均燃焼度	約 45GWd/t	約 33GWd/t
燃料集合体最高燃焼度	55GWd/t	40GWd/t



※9×9燃料（A型）の評価値

図1 ウラン燃料（9×9燃料）とMOX燃料の崩壊熱の比較

出展：沸騰水型原子力発電所 MOX燃料の貯蔵について（HLR-064 訂2，株式会社日立製作所 平成11年8月）

2. 炉心損傷防止，格納容器破損防止，運転停止中（反応度の誤投入を除く）評価における崩壊熱について

炉心損傷防止評価，格納容器破損防止評価は運転中を対象とした評価であり，また，運転停止中（反応度の誤投入を除く）評価においても，崩壊熱が比較的高い時点の評価時点とするため，原子炉停止後1日での事象発生を想定しているため，これらの評価では9×9燃料を装荷した炉心の特徴を適切に考慮した以下の崩壊熱を用いた。

(1) 原子炉停止機能喪失を除く評価

ANSI/ANS-5.1-1979により計算される値を用いた。なお，崩壊熱評価に用いる燃焼度は，9×9燃料を装荷した炉心のサイクル末期炉心平均燃焼度に余裕をみた燃焼度である33Gwd/tとした。

(2) 原子炉停止機能喪失評価

1979年にNUREG-1335が参照している，RELAP4/MOD5にIdaho National Engineering Laboratoryが採用した，次式で表される11群のモデルにより計算される値を用いた。

$$n_f = \left( K_p + \sum_{j=1}^{11} \frac{K_{dj}}{T_{dj}S + 1} \right) n$$

$$j=1, 2, \dots, 11$$

$$n_f: \text{原子炉出力}, K_p: \text{定数} (= 1 - \sum_{j=1}^{11} K_{dj})$$

$$K_{dj}: \text{定数}, T_{dj}: \text{崩壊熱等価時定数}, n: \text{核分裂出力}$$

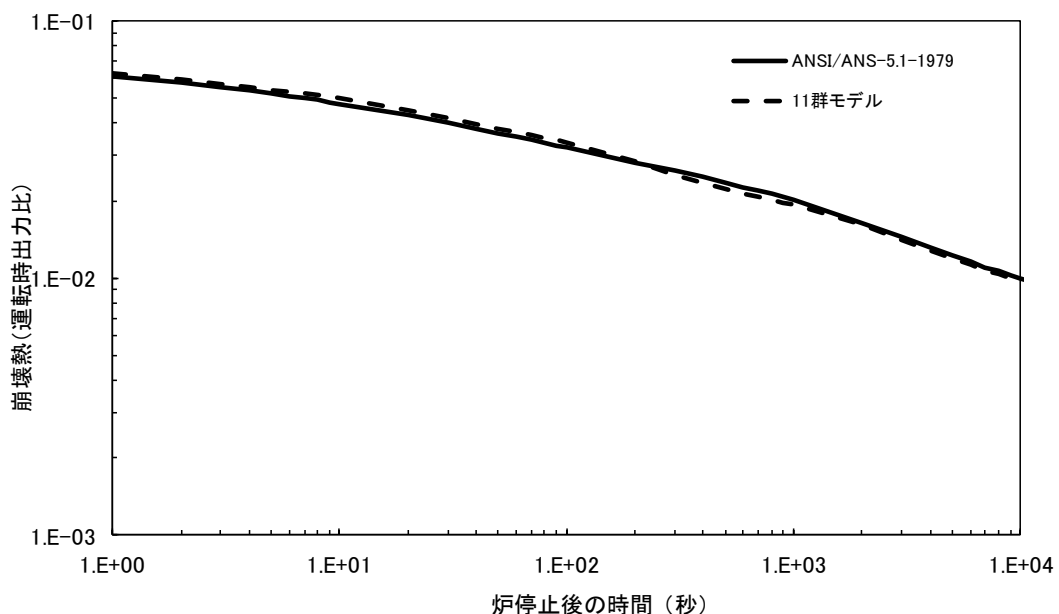


図2 炉心損傷防止，格納容器破損防止，運転停止中（反応度の誤投入を除く）評価に用いた崩壊熱

### 3. 燃料プール評価における崩壊熱について

燃料プールには燃料の種類、冷却期間が異なる燃料が混在しているため、燃料の取出しサイクルを想定し、それぞれの燃料に対して崩壊熱を計算し、それらを合計した値を有効性評価では用いた。

評価コード及び評価に用いた燃料を以下に示す。

評価コード : OR I G E N 2

取出燃料 : 2号炉 9×9燃料, MOX燃料(標準組成(Puf割合≒約67wt%))  
1号炉 9×9燃料(1号炉から運搬する燃料の冷却期間21ヶ月を考慮)

出力履歴 : 比出力一定

[参考] 燃料取り出しの想定

炉心 : 2号炉 9×9燃料及びMOX燃料228体を装荷した平衡炉心  
1号炉 9×9燃料平衡炉心

運転期間 : 13ヶ月

定期事業者検査日数 : 50日

原子炉停止からプールゲート閉まで期間 : 10日



燃料プールにおける重大事故に至るおそれがある事故  
(想定事故 1 及び 2) の有効性評価における共通評価条件について

1. 燃料プールの概要

図 1 に燃料プール等の平面図を示す。

定期事業者検査時において、多くの場合はプールゲートが開放され、燃料プールは原子炉ウェル、蒸気乾燥器・気水分離器ピット(以下「DSP」という。)、キャスク仮置ピットと繋がっているが、有効性評価においては、プールゲートを閉鎖している場合を想定し、原子炉ウェル、DSP及びキャスク仮置ピットの保有水量は考慮しない。

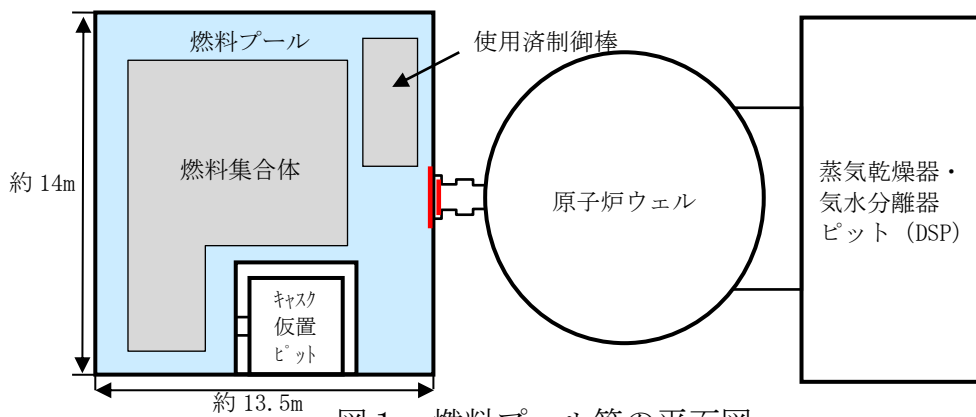


図 1 燃料プール等の平面図

2. 放射線の遮蔽の維持に必要な燃料プールの遮蔽水位について

図 2 に放射線の遮蔽の維持に必要な燃料プールの遮蔽水位について示す。

放射線の遮蔽の維持に必要な燃料プールの遮蔽水位は、その状況(必要となる現場及び操作する時間)によって異なる。重大事故等であることを考慮し、例えば 10mSv/h の場合は、通常水位から約 2.6m<sup>\*</sup>下の位置より高い遮蔽水位が必要である。

※ 放射線の遮蔽の維持に必要な燃料プール水位の算出方法については添付資料 4.1.2 に示す。

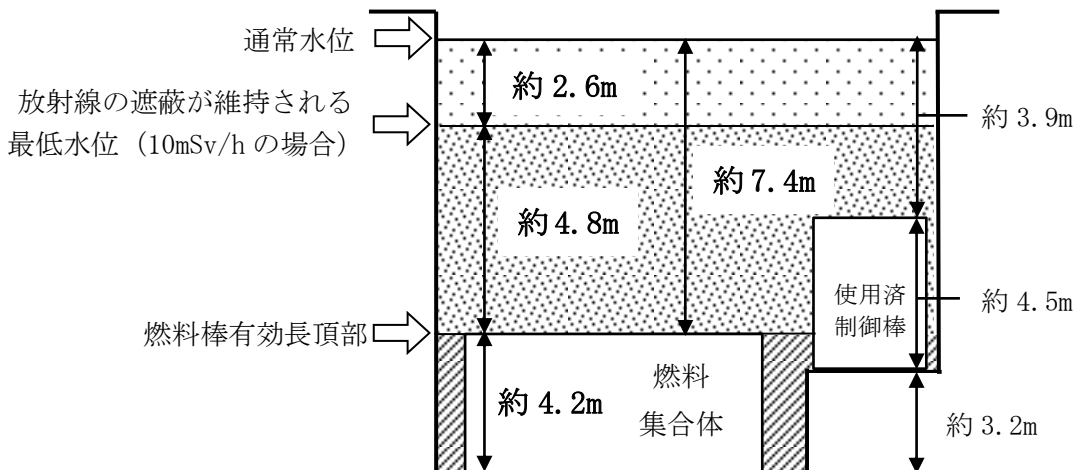


図 2 放射線の遮蔽の維持に必要な燃料プールの遮蔽水位

### 3. 燃料プールの構造高さ、断面積及び保有水の容積について

図3に燃料プールの構造高さを、表1に燃料プールの断面積及び保有水の容積を示す。

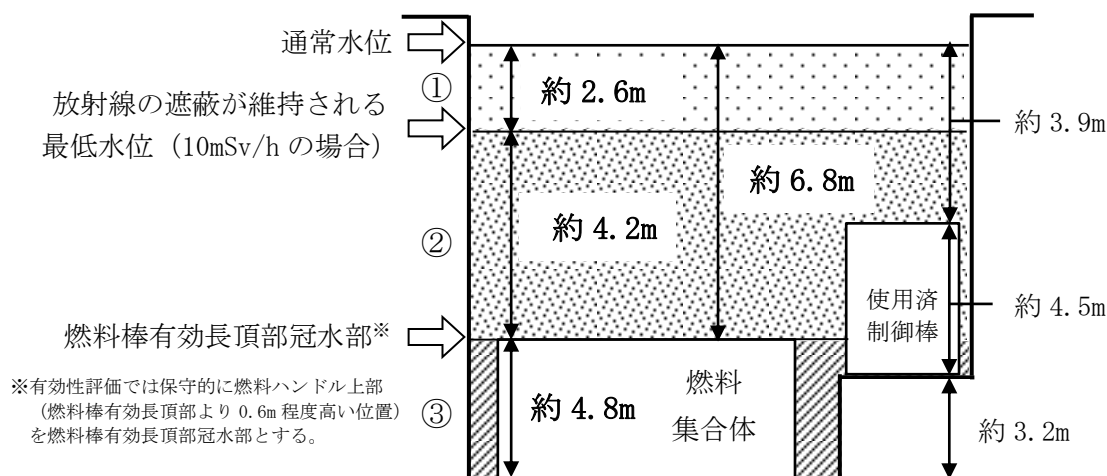


図3 島根原子力発電所2号炉の燃料プールの構造高さ

表1 燃料プールの断面積及び保有水の容積

領域	断面積[m <sup>2</sup> ]	保有水の容積[m <sup>3</sup> ]
①	約 167	約 439
②	約 167	約 704
③	約 95	約 456
合計		約 1,599

図3に示す各領域①～③の保有水の容積は、燃料プール容積から燃料プール内の機器の容積を差し引くことで算出し、各領域の断面積については、①の領域では燃料プールの寸法より求めた断面積を使用し、②、③の領域では求めた各領域の容積から高さで除して求めた。なお、燃料プールの断面積については各領域での平均的な値を示しているが、燃料プール内に設置されている機器は領域②又は領域③のプール下部であるため、保有水量に対する水位の低下という観点で保守的な評価となっている。

#### 4. 冷却機能喪失による燃料プールの水温上昇と水位低下について

燃料プールの冷却機能及び注水機能の喪失時における崩壊熱による燃料プール水位の沸騰までの時間、沸騰開始後の水位低下時間及び沸騰による水位低下平均速度について、以下の式を用いて評価を行った。事象を保守的に評価するため、燃料プールの初期水温は、運転上許容される上限値である 65℃とする。また、発生する崩壊熱はすべて燃料プールの水温上昇及び蒸発に寄与するものとし、燃料プールの水面、壁面等からの放熱は考慮しない。

##### ○評価方法及び評価条件

###### ①冷却機能喪失から沸騰（燃料プール水 100℃到達）までの時間

沸騰までの時間 (h) =

$$\frac{(100[^\circ\text{C}]-65[^\circ\text{C}]) \times \text{燃料プール保有水の比熱} [\text{kJ}/\text{kg}/^\circ\text{C}]^{*1} \times \text{燃料プール水量} [\text{m}^3] \times \text{燃料プール水密度} [\text{kg}/\text{m}^3]^{*2}}{\text{燃料崩壊熱} [\text{MW}] \times 10^3 \times 3600}$$

###### ②沸騰による蒸発量と沸騰開始から燃料棒有効長頂部冠水部まで水位が低下するまでの時間

$$1 \text{ 時間当たりの沸騰による蒸発量} [\text{m}^3/\text{h}] = \frac{\text{燃料崩壊熱} [\text{MW}] \times 10^3 \times 3600}{\text{燃料プール水密度} [\text{kg}/\text{m}^3]^{*2} \times \text{蒸発潜熱} [\text{kJ}/\text{kg}]^{*3}}$$

水位低下時間 [h] =

$$\frac{\text{通常水位から燃料棒有効長頂部冠水部までの燃料プール水量} [\text{m}^3] \times \text{燃料プール水密度} [\text{kg}/\text{m}^3]^{*2} \times \text{蒸発潜熱} [\text{kJ}/\text{kg}]^{*3}}{\text{燃料崩壊熱} [\text{MW}] \times 10^3 \times 3600}$$

###### ③沸騰による燃料プール水位の低下平均速度

$$\text{水位低下速度} [\text{m}/\text{h}] = \frac{\text{通常水位から燃料棒有効長頂部冠水部までの高低差} [\text{m}]}{\text{通常水位から燃料棒有効長頂部冠水部までの水位低下にかかる時間} [\text{h}]}$$

燃料プールの下部は機器等が設置されており、保有水が少ないため、燃料プールの下部では水位低下速度は早く、燃料プール上部では水位低下速度は遅い。燃料棒有効長頂部に水位が到達するまでの時間評価では、保守的に一律の水位低下速度を想定する。

表2 評価に使用する値

プール保有水の比熱[kJ/kg/°C] <sup>※1</sup>	プール水量 [m <sup>3</sup> ]	プール水密度 [kg/m <sup>3</sup> ] <sup>※2</sup>	燃料の崩壊熱 [MW]
4.185	約 1,599	958	約 7.8

蒸発潜熱[kJ/Kg] <sup>※3</sup>	通常水位から燃料棒有効長頂部冠水部までのプール水量[m <sup>3</sup> ] <sup>※4</sup>	通常水位から燃料棒有効長頂部冠水部までの高低差 [m]	通常水位から 2.6m 下までのプール水量 [m <sup>3</sup> ]
2,256.47	約 1,143	約 6.8	約 439

※1：65°Cから100°Cまでの飽和水の比熱のうち、最小となる65°Cの値を採用。

(1999年蒸気表より)

※2：65°Cから100°Cまでの飽和水の密度のうち、最小となる100°Cの値を採用。

(1999年蒸気表より)

※3：100°Cの飽和水のエンタルピと100°Cの飽和蒸気のエンタルピの差より算出。

(1999年蒸気表より)

※4：保有水量の算出では燃料棒有効長頂部冠水部として燃料ハンドル上部（燃料棒有効長頂部より0.6m程度高い位置）を設定

なお、①～③の式による算出については以下の保守的な仮定及び非保守的な仮定に基づく評価である。

<保守的な仮定>

- ・燃料プール水温の温度変化に対する比熱及び密度の評価にて、時間を短く評価する最も厳しくなる値を想定している。
- ・燃料プールの水面、壁面等からの放熱を考慮せず、崩壊熱がすべて燃料プール水温上昇及び蒸発に寄与するものとしている。

<非保守的な仮定>

- ・簡易的な評価とするために燃料プール水温をすべて均一の温度とし、プール全体が100°Cに到達した時間を沸騰開始としており、燃料プール水温の非一様性を考慮していない。なお、発熱源は燃料プール下方に位置する燃料集合体であり、自然対流の効果により非一様性は緩和される。

非保守的な仮定を設定することを踏まえ、事象発生直後から沸騰による燃料プール水位の低下が開始すると想定した場合の評価についても実施する。

なお、注水等の操作時間余裕は十分に大きいことからこれらの評価の仮定による影響は無視できる程度であると考えられる。

5. 燃料取り出しスキーム



本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

## 6. 水遮蔽厚に対する貯蔵中の燃料からの線量率の評価条件

燃料プール内のラックに燃料がすべて満たされた状態を仮定し、その時の燃料集合体を線源とする。

評価条件を以下に示す。

- 線源形状：燃料プール内のラックに燃料がすべて満たされた状態
- 線源材質：燃料集合体及び水を考慮（密度： g/cm<sup>3</sup>）
- ガンマ線エネルギー：評価に使用するガンマ線は、エネルギー4群とする。
- 線源強度：文献<sup>※1</sup>に記載のエネルギーあたりの線源強度を基に、9×9燃料（A型）の体積あたりの線源強度を式①で算出した。

$$\text{線源強度 (cm}^{-3} \cdot \text{s}^{-1}\text{)} = \frac{\text{文献に記載の線源強度 (MeV} \cdot \text{W}^{-1} \cdot \text{s}^{-1}\text{)} \times \text{燃料集合体あたりの熱出力 (W/体)}}{\text{各群のエネルギー (MeV)} \times \text{燃料集合体体積 (cm}^3\text{/体)}} \quad \dots \text{①}$$

このときの線源条件は以下とする。なお、本評価で使用している線源強度（文献値）に対する燃料照射期間は10<sup>6</sup>時間（約114年）であり、島根原子力発電所2号炉の燃料照射期間を十分に包絡している。

- ・燃料照射期間：10<sup>6</sup>時間（無限照射）
- ・停止後の期間<sup>※2</sup>：10日（実績を考慮した値を設定）
- ・燃料集合体あたりの熱出力：4.35MW/体（9×9燃料（A型））
- ・燃料集合体体積：約7.1×10<sup>4</sup> cm<sup>3</sup>（9×9燃料（A型））

※1 Blizard E. P. and Abbott L. S., ed., “REACTOR HANDBOOK. 2nd ed. Vol. III Part B, SHIELDING”, INTERSCIENCE PUBLISHERS, New York, London, 1962”

※2 原子炉停止後10日とは全制御棒全挿入からの時間を示している。通常停止操作において原子炉の出力は全制御棒全挿入完了及び発電機解列以前から徐々に低下させるが、線源強度評価は崩壊熱評価と同様にスクラムのような瞬時に出力を低下させる保守的な評価条件となっている。

○評価モデル：直方体線源

線量率評価はQAD-CGGP2Rコードを用いており、その評価モデルを図4に示す。また、評価により求めた線源強度を表3に示す。

なお、評価モデルにおいては、燃料棒有効長以外の構造体は評価対象に含めていないが、実際の燃料集合体では、燃料棒有効長以外の構造体（上部タイプレート等）においても、放射化等により線源を有している。しかしながら、燃料棒有効長以外の構造体の線源強度は、燃料棒有効長に比べて十分小さいと考えられる。本線量評価は、燃料プールにおいて放射線の遮蔽が維持される水位を評価するものであり、放射線の遮蔽が維持される水位（通常水位から約2.6m

下) においては、燃料集合体由来の線量率は小さく (図 10 参照) , 線量率全体の 0.1%未満の寄与であるため、評価結果に対する燃料棒有効長以外の構造体からの影響は十分に無視できる。

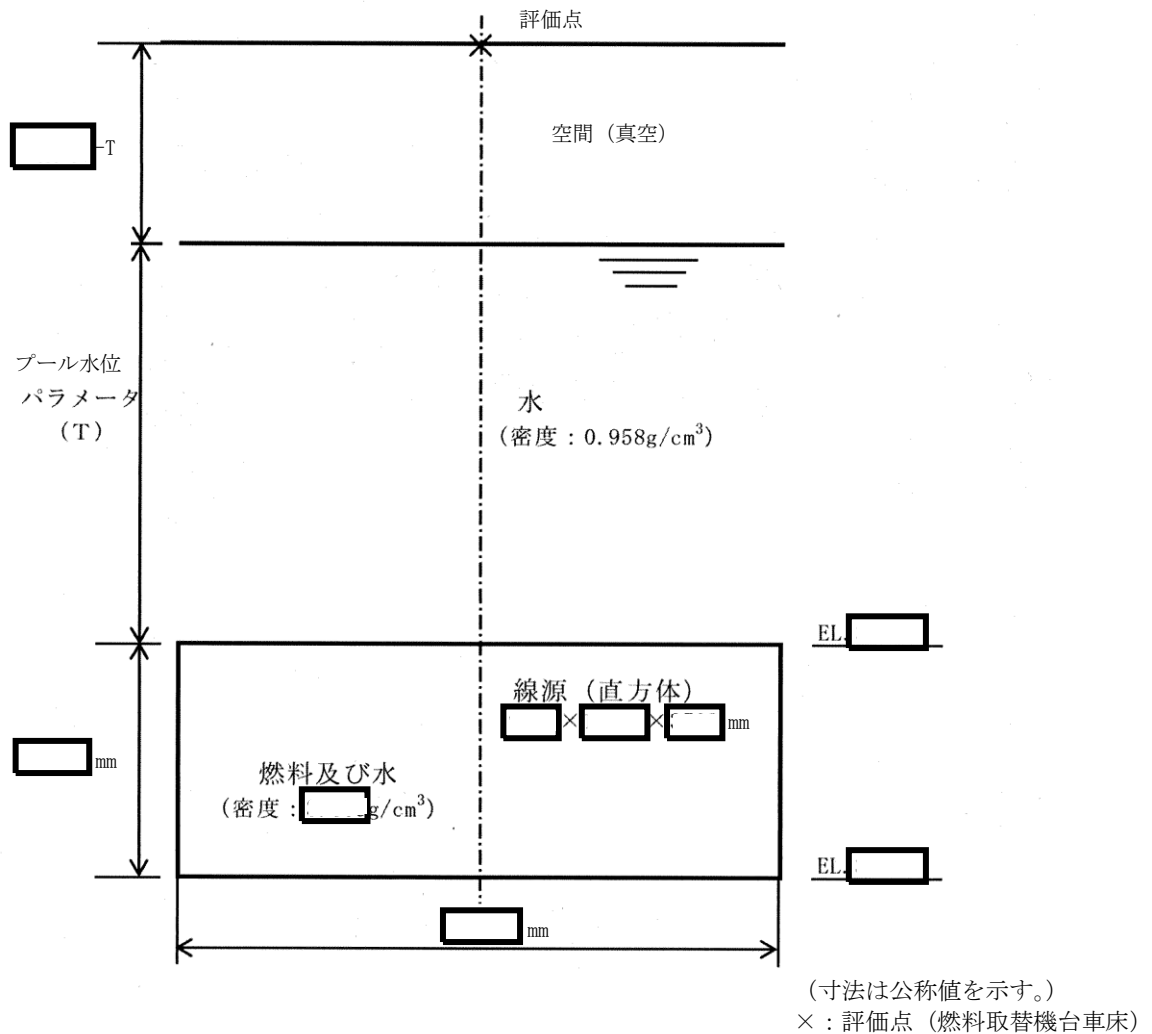


図 4 燃料集合体の線量率評価モデル

表 3 燃料集合体の線源強度

群	ガンマ線 エネルギー (MeV)	線源強度 ( $\text{cm}^{-3} \cdot \text{s}^{-1}$ )
1	1.0	$4.3 \times 10^{11}$
2	2.0	$7.3 \times 10^{10}$
3	3.0	$1.2 \times 10^9$
4	4.0	$2.6 \times 10^7$

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

## 7. 使用済制御棒の評価条件

燃料プール内の使用済制御棒を線源とする評価条件を以下に示す。

○線源形状 : 燃料プール内の制御棒貯蔵ハンガのすべてに使用済制御棒が満たされた状態

○線源材料 : 水 (密度 :  $0.958\text{g}/\text{cm}^3$  ※)

※  $65^\circ\text{C}$ から $100^\circ\text{C}$ までの飽和水の密度のうち、最小となる $100^\circ\text{C}$ の値を採用

○ガンマ線エネルギー : 評価に使用するガンマ線はエネルギー 18 群 (ORIGEN 群構造) とする。

○線源強度 : 使用済制御棒を高さ方向に 3 領域に分割し、使用済制御棒上部は上部ローラを、使用済制御棒中間部は中性子吸収材を、使用済制御棒下部は下部ローラを代表としてモデル化している。使用済制御棒中間部は制御棒を挿入時のみ、使用済制御棒上部は挿入時と引抜時の間、中性子が照射されるものとする。

照射期間については、制御棒挿入時に照射される制御棒はすべて H f 型制御棒とし、制御棒照射量制限値 (H f 型 : ) を炉中央の平均熱中性子フラックスで除した値とした。制御棒引抜時に照射される制御棒はすべて  $B_4C$  型制御棒とし、制御棒照射量制限値 ( $B_4C$  型 : ) を炉底部熱中性子フラックスで除した値とした。また、使用済制御棒下部は使用済制御棒上部と同じ線源強度とする。

また、燃料プールには、タイプ別でかつ、冷却期間の異なる使用済制御棒が混在して貯蔵されていることを想定し、貯蔵使用済制御棒全体の放射能を保存して平均した線源強度を式②により算出した。

$$\text{平均線源強度} = \frac{\sum \{ (\text{制御棒タイプ} \cdot \text{冷却期間別の線源強度}) \times (\text{制御棒タイプ} \cdot \text{冷却期間別の保管本数}) \}}{\text{全貯蔵本数}} \quad \dots \text{②}$$

制御棒タイプは H f 型、 $B_4C$  型の 2 タイプ、冷却期間は 0 ~ 10 サイクルの 11 種類、全貯蔵本数は 144 本とした。

使用済制御棒の内訳は表 4 に示すとおり、定期検査ごとに取り出された照射済制御棒の本数の実績を参考に、貯蔵数が最大となるように毎サイクル H f 型と  $B_4C$  型制御棒がそれぞれ取り出されることを想定した。

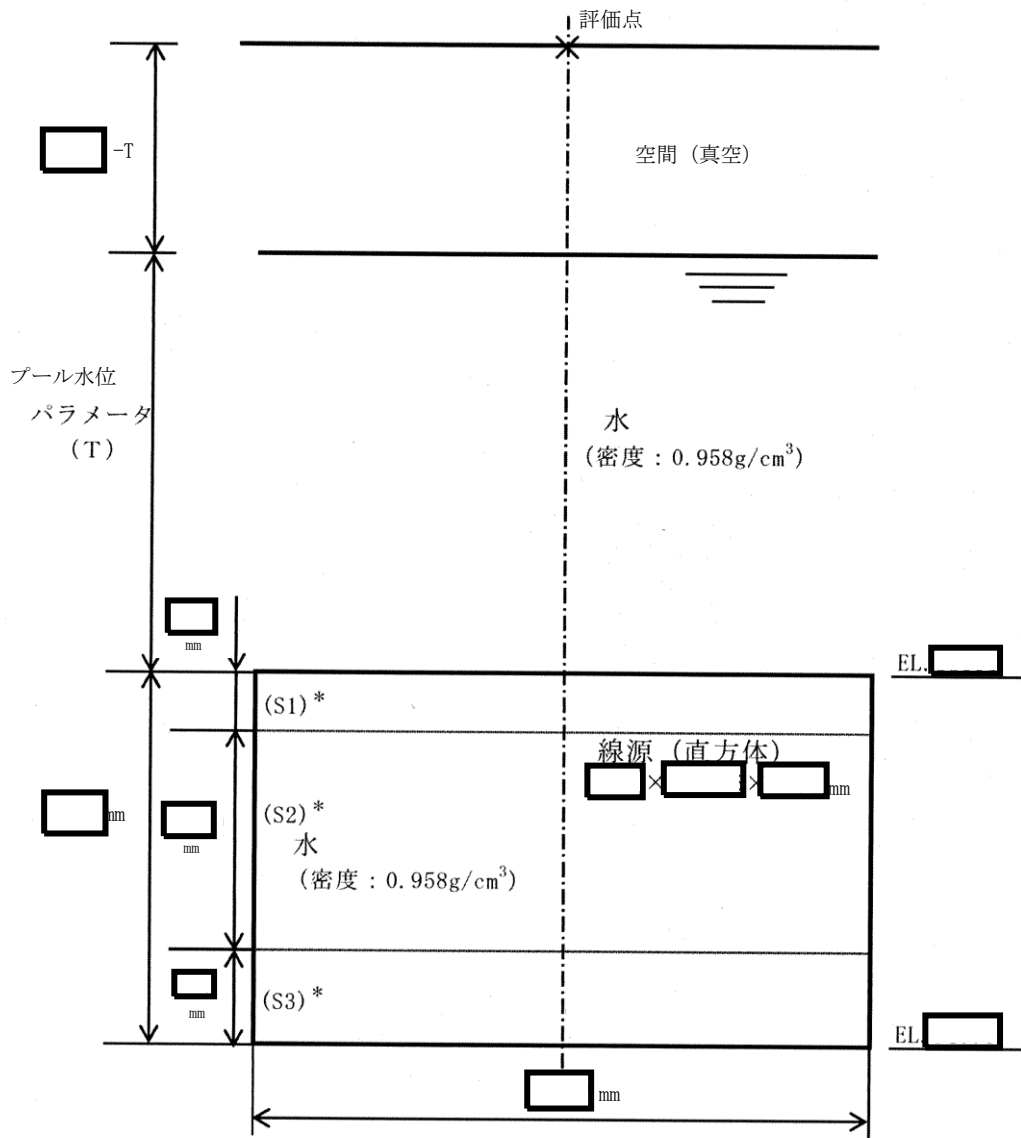
○評価モデル : 直方体線源

線量率評価は QAD-CGGP 2R コードを用いておりその評価モデルを図 5 に示す。また、評価により求めた線源強度を表 5 に示す。



表4 制御棒のタイプ別，冷却期間別の貯蔵本数

タイプ	冷却期間 (サイクル)	冷却期間 (d a y)	本数 (本)
H f 型 制御棒	0	10	9
	1	506	4
	2	1002	4
	3	1498	4
	4	1994	4
	5	2490	4
	6	2986	4
	7	3482	4
	8	3978	4
	9	4474	4
	10	4970	5
B <sub>4</sub> C型 制御棒	0	10	12
	1	506	8
	2	1002	8
	3	1498	8
	4	1994	8
	5	2490	8
	6	2986	8
	7	3482	8
	8	3978	8
	9	4474	8
	10	4970	10



(寸法は公称値を示す。)  
 ×：評価点 (燃料取替機台車床)

図5 使用済制御棒の線量率計算モデル

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

表5 使用済制御棒の線源強度

群	ガンマ線 エネルギー (MeV)	制御棒上部 線源強度 ( $\text{cm}^{-3} \cdot \text{s}^{-1}$ )	制御棒中間部 線源強度 ( $\text{cm}^{-3} \cdot \text{s}^{-1}$ )	制御棒下部 線源強度 ( $\text{cm}^{-3} \cdot \text{s}^{-1}$ )
1	$1.00 \times 10^{-2}$	$1.08 \times 10^6$	$1.03 \times 10^9$	$1.08 \times 10^6$
2	$2.50 \times 10^{-2}$	$8.86 \times 10^3$	$7.92 \times 10^6$	$8.86 \times 10^3$
3	$3.75 \times 10^{-2}$	$5.94 \times 10^3$	$9.99 \times 10^6$	$5.94 \times 10^3$
4	$5.75 \times 10^{-2}$	$6.88 \times 10^3$	$2.84 \times 10^9$	$6.88 \times 10^3$
5	$8.50 \times 10^{-2}$	$3.64 \times 10^3$	$5.66 \times 10^7$	$3.64 \times 10^3$
6	$1.25 \times 10^{-1}$	$5.18 \times 10^3$	$3.74 \times 10^9$	$5.18 \times 10^3$
7	$2.25 \times 10^{-1}$	$5.31 \times 10^3$	$1.73 \times 10^8$	$5.31 \times 10^3$
8	$3.75 \times 10^{-1}$	$2.70 \times 10^5$	$8.58 \times 10^8$	$2.70 \times 10^5$
9	$5.75 \times 10^{-1}$	$1.06 \times 10^6$	$4.83 \times 10^9$	$1.06 \times 10^6$
10	$8.50 \times 10^{-1}$	$3.81 \times 10^6$	$1.27 \times 10^7$	$3.81 \times 10^6$
11	$1.25 \times 10^0$	$1.14 \times 10^7$	$6.23 \times 10^8$	$1.14 \times 10^7$
12	$1.75 \times 10^0$	$1.97 \times 10^4$	$2.53 \times 10^3$	$1.97 \times 10^4$
13	$2.25 \times 10^0$	$6.05 \times 10^1$	$2.23 \times 10^2$	$6.05 \times 10^1$
14	$2.75 \times 10^0$	$4.30 \times 10^{-1}$	$8.88 \times 10^1$	$4.30 \times 10^{-1}$
15	$3.50 \times 10^0$	$1.66 \times 10^{-4}$	$7.86 \times 10^{-1}$	$1.66 \times 10^{-4}$
16	$5.00 \times 10^0$	$1.73 \times 10^{-6}$	$8.30 \times 10^{-6}$	$1.73 \times 10^{-6}$
17	$7.00 \times 10^0$	$0.00 \times 10^0$	$9.33 \times 10^{-7}$	$0.00 \times 10^0$
18	$9.50 \times 10^0$	$0.00 \times 10^0$	$1.07 \times 10^{-7}$	$0.00 \times 10^0$
合計		$1.77 \times 10^7$	$1.42 \times 10^{10}$	$1.77 \times 10^7$

#### ○使用済制御棒の冠水時及び露出時の線量率評価モデルについて

使用済制御棒は次に示すようにステンレスの制御棒貯蔵ハンガにハンドル部を通して格納されている。評価ではこの構造材を含めた使用済制御棒設置箇所を直方体の線源としてモデル化している（図6）。本来線源が存在しない使用済制御棒間にも線源が存在する想定をすることで、線源の体積としては約1.9倍となることから、実際よりも保守的なモデルとしている（図7）。

遮蔽評価をする際、線源材料にも密度を設定することで自己遮蔽等の評価を行う。本評価ではこちらの設定を使用済制御棒が冠水時①、一部露出時②、露出時③のいずれにおいても遮蔽性能の低い水として評価している。

実機体系では、露出時③において使用済制御棒間等は気中であるが、使用済制御棒はステンレスや炭化ホウ素（又はハフニウム）等で構成されるため、それらの自己遮蔽効果を期待できる。評価モデル上はこれらを一様に水として評価しているが、ステンレスや炭化ホウ素等の自己遮蔽効果が高いことに加え、線源以外にも制御棒貯蔵ハンガのような構造材があり、それらの遮蔽効果により保守性を確保している。

冠水時①、一部露出時②の状態においては使用済制御棒等の遮蔽効果に加えて、制御棒間の隙間等の気中であった箇所に水が入る為、遮蔽効果はさらに高まるが、評価においては露出時③と同様、水と設定して評価をすることでさらに保守的なモデルとなっている。

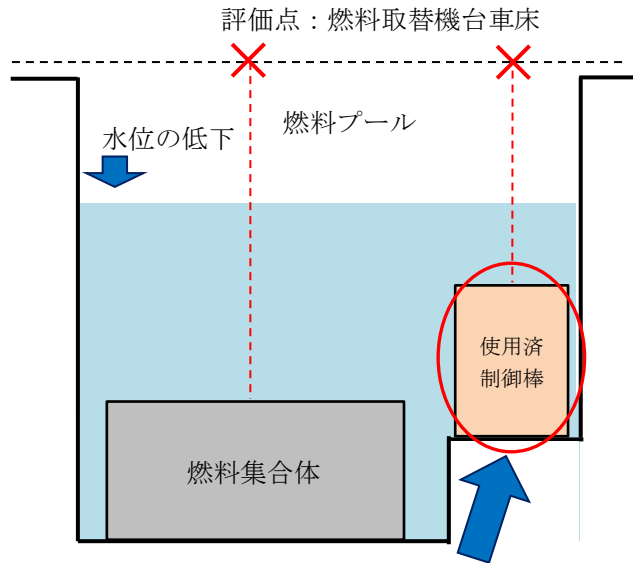
評価結果において、水位低下により使用済制御棒の露出が開始した際の現場の線量率と、完全に露出した後の現場の線量率にあまり差異がないことは、評価で上記に示すとおり冠水時①と露出時③を等しく、線源を水として評価しているためである（図8）。

#### <参考>

一例としてCo60を線源とした時のガンマ線の実効線量透過率の1/10 価層は水であると約70cmであるのに対して、鉄（密度：7.87g/cm<sup>3</sup>）であると約9cmとなり、これらの遮蔽性能が水と比べて大きいことが分かる。

参考文献：アイソトープ手帳 11 版 公益社団法人日本アイソトープ協会

各線源の真上に燃料取替機台車床があると仮定した場合の距離を設定し，各評価点での線量率を合計



水位低下時での制御棒の線源モデル方法について以降に詳細を示す

図6 燃料プール概要図

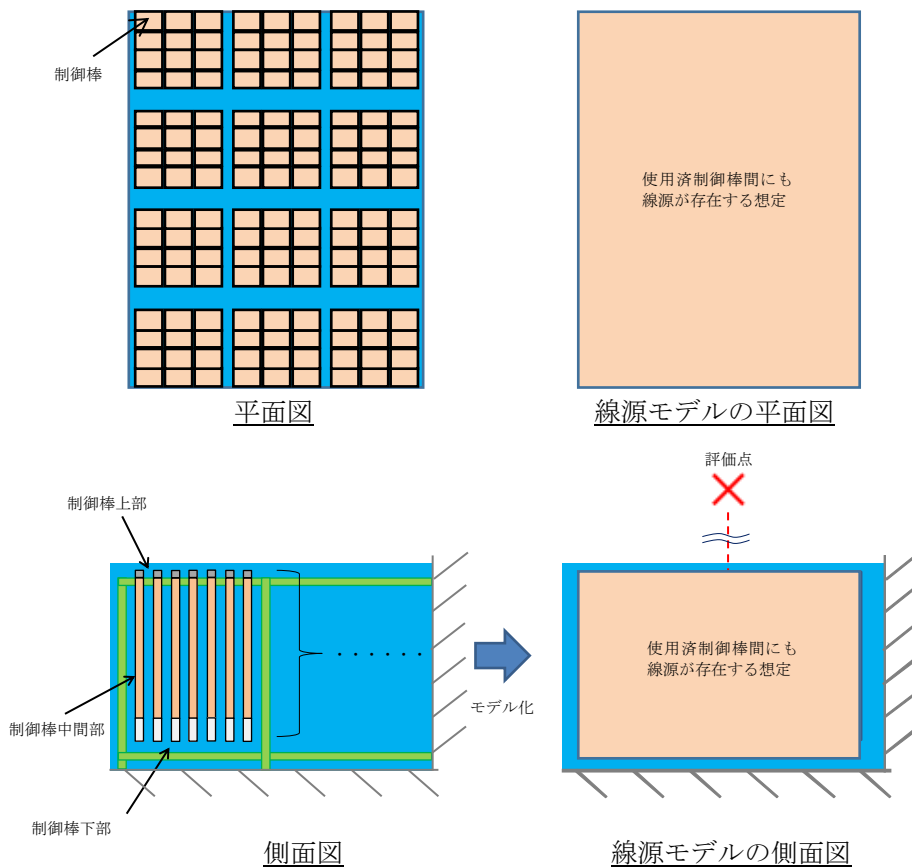
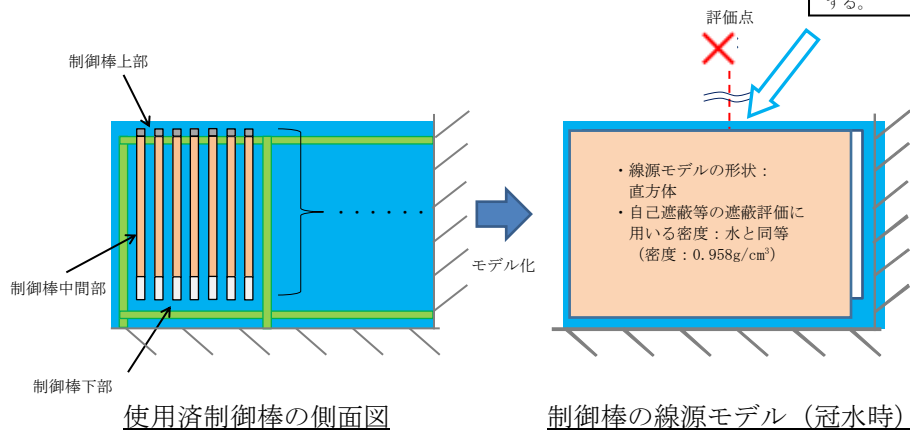
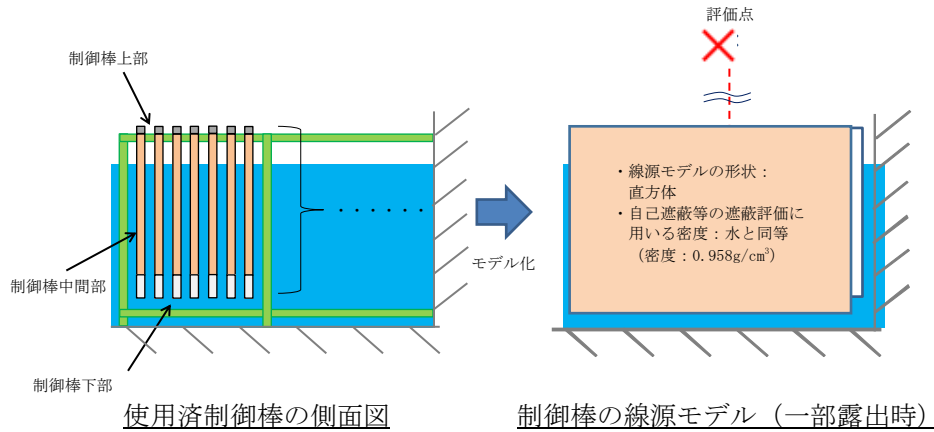


図7 使用済制御棒の線量率評価モデル

①冠水時



②一部露出時



③露出時

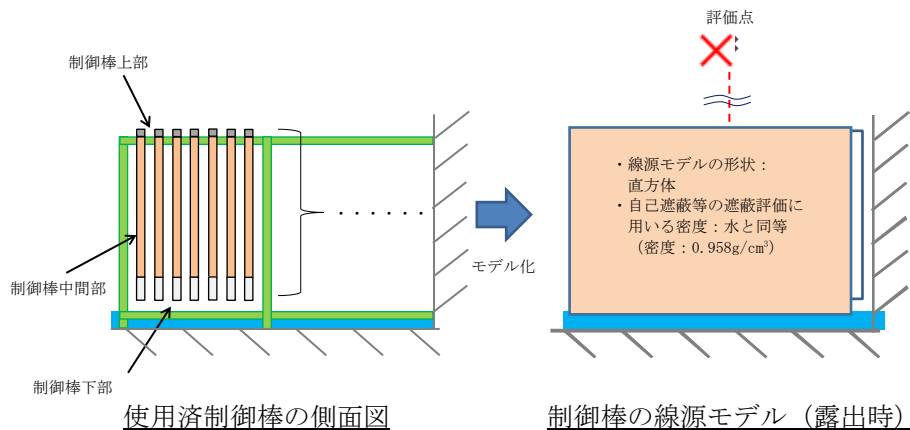


図8 使用済制御棒の冠水時及び露出時の線量率評価モデル

## 8. 線量率の評価

線量率は、QAD-CGGP 2Rコードを用いて評価している。

一般的に点減衰核積分法では、線源領域を細分化し点線源で近似を行い、各点線源から評価点までの媒質の通過距離から非散乱ガンマ線束を求める。これにビルドアップ係数を掛け、線源領域全空間で積分した後、線量率換算係数を掛けることで評価点での線量率を求める。

QAD-CGGP 2Rコードでは、式③を用い、線量率を計算している。図9にQAD-CGGP 2Rコードの計算体系を示す。

$$D_j = \sum_i F_j \cdot \frac{S_{ij}}{4 \cdot \pi \cdot R_i^2} \cdot e^{\left(-\sum_k \mu_{jk} \cdot t_k\right)} \cdot B_{ij} \dots \textcircled{3}$$

j : エネルギー群番号

i : 線源点番号

k : 領域番号 (遮蔽領域)

$F_j$  : 線量率換算係数

$S_{ij}$  : i 番目の線源点で代表される領域の体積で重みづけされたエネルギー j 群の点線源強度

$R_i$  : i 番目の線源点と計算点の距離

$B_{ij}$  : ビルドアップ係数

$\mu_{jk}$  : 領域 k におけるエネルギー j 群の  $\gamma$  線に対する線吸収係数

$t_k$  : 領域 k を  $\gamma$  線が透過する距離

これにより求められたエネルギー第 j 群の線量率  $D_j$  から、すべての線源エネルギー群について加えることによって全線量率を計算している。

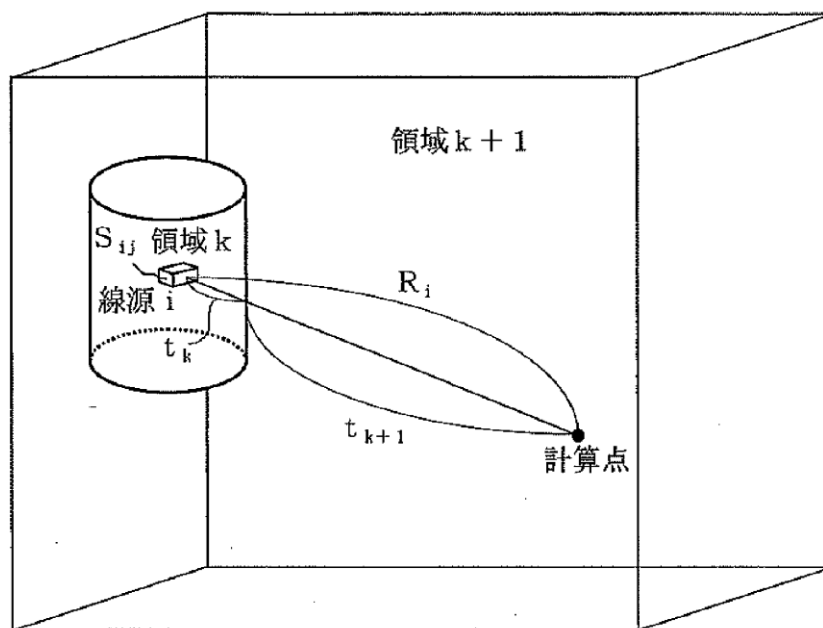


図9 QAD-CGGP 2Rコードの評価体系

## 9. 線量率を求める際の評価点と放射線遮蔽が維持される水位について

### (1) 線量率を求める際の評価点

線源からの線量率を求める際に設定する評価点は、燃料プールの上部にある燃料取替機台車床とした。なお、評価では図4及び図5の線量率評価モデルに示すようにプール躯体による遮蔽は考慮せず、線源から評価点までの距離を入力として評価している。

### (2) 放射線の遮蔽が維持される水位

想定事故1, 2及び運転停止中の各有効性評価において、原子炉建物原子炉棟4階での緊急時対策要員による作業時間並びに現場作業員の退避は2時間以内であり、必要な放射線の遮蔽の目安を10mSv/hとすると作業員の被ばく量は最大でも20mSvとなるため、緊急作業時における被ばく限度の100mSvに対して余裕のある値である。目安とした線量率は定期検査作業時での原子炉建物原子炉棟4階における現場線量率の実績値についても考慮した値である。

想定事故1, 2での必要な遮蔽水位は図10より島根原子力発電所2号炉において約4.8mとなり、開始水位から約2.6mが低下した水位である。なお、通常時であっても作業によって現場線量率が上昇することが考えられる。原子炉建物原子炉棟4階における作業の例として、蒸気乾燥器の取り外し作業において、島根原子力発電所2号炉での実績は、約1 mSv/h（設置する遮蔽体の遮蔽効果に期待した場合の値を示す、設置する遮蔽体の遮蔽効果に期待しない場合は約2.6mSv/hとなる）であった。



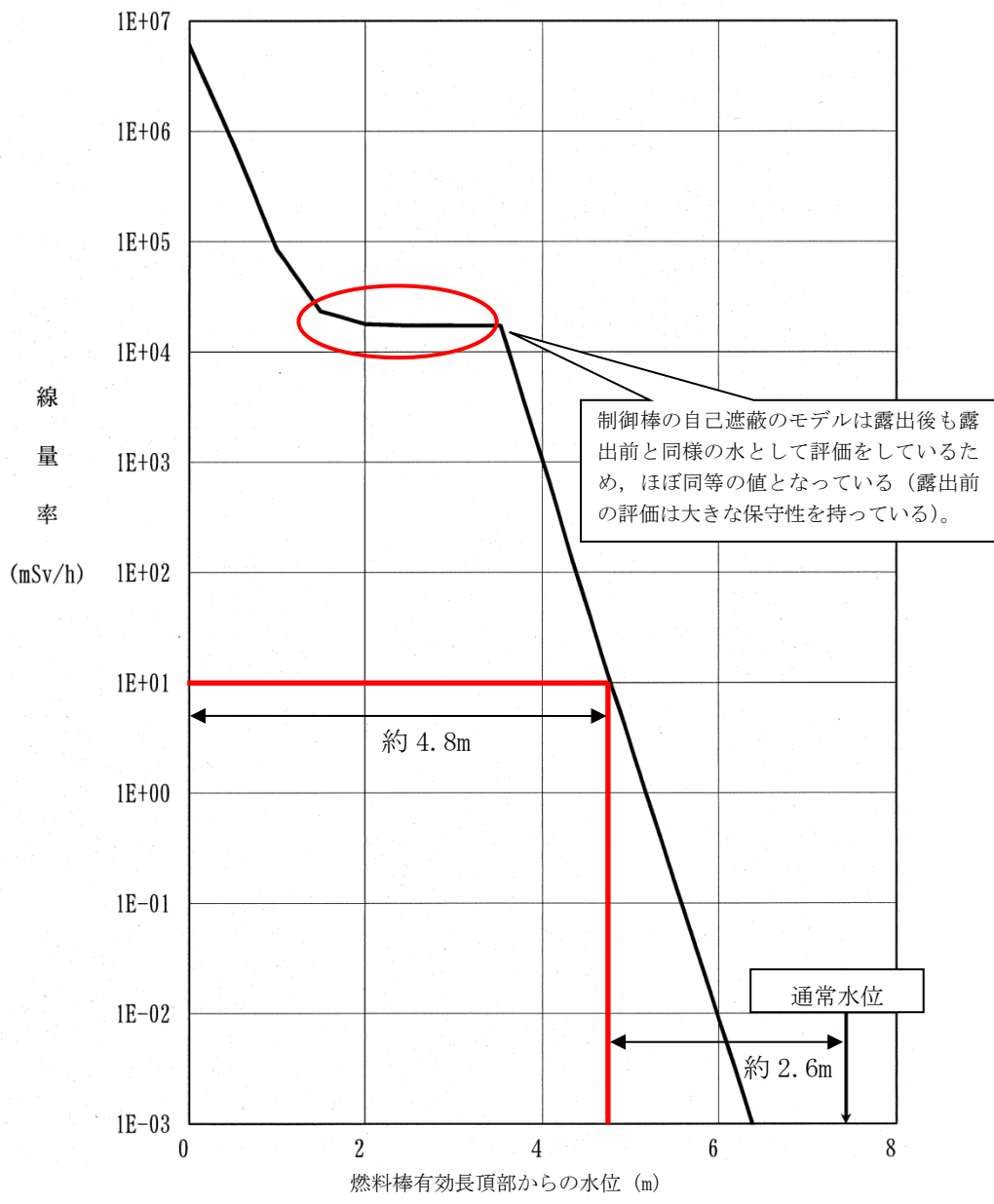
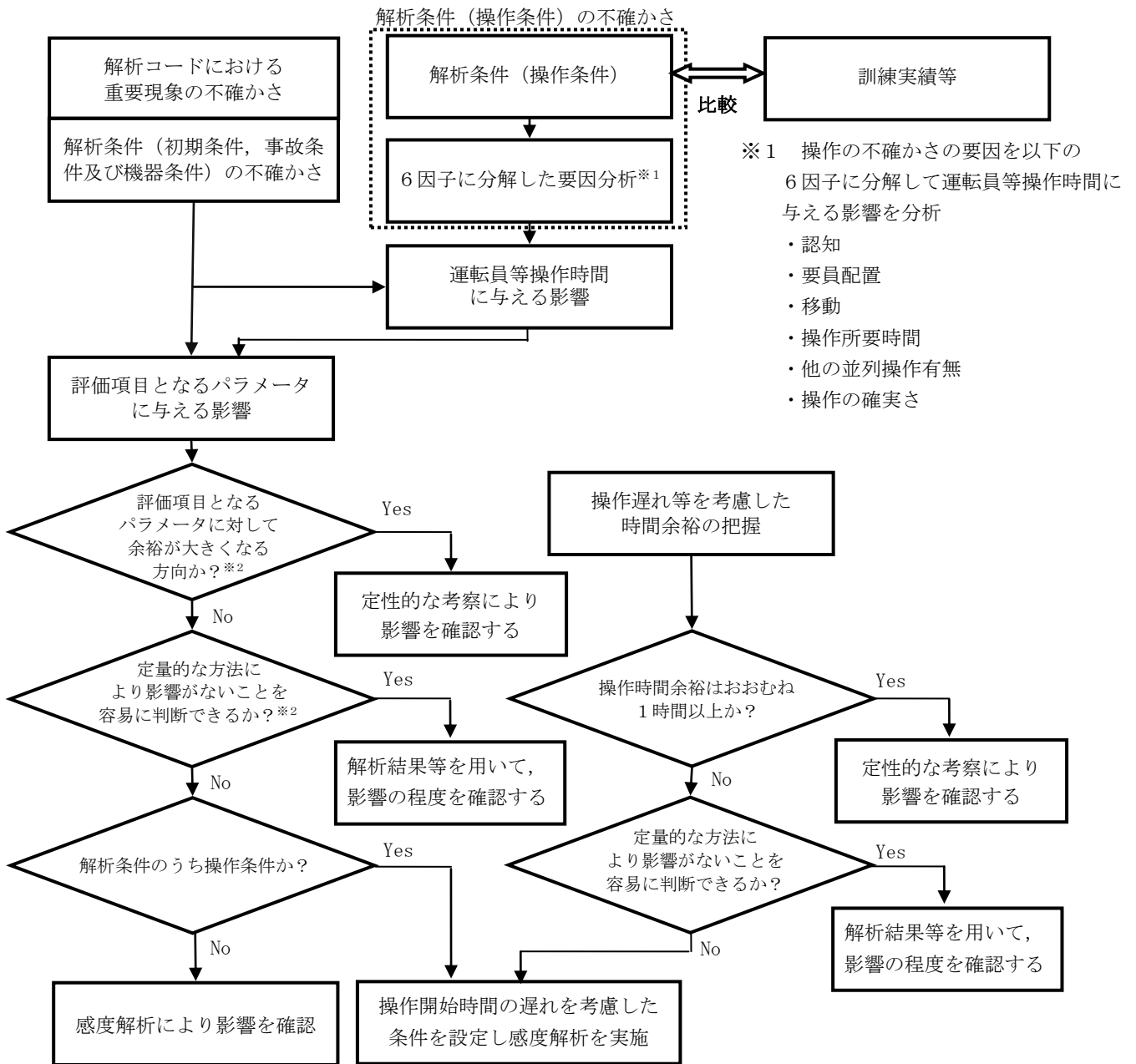


図 10 放射線の遮蔽が維持される水位

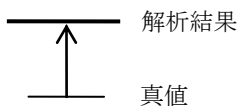
解析コード及び解析条件の不確かさの影響評価フロー



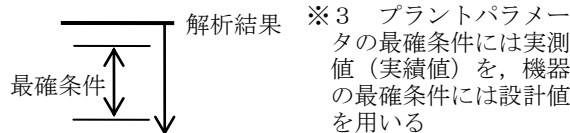
※2 評価項目となるパラメータに対する影響評価の考え方

解析コードにおける重要現象の不確かさの場合	解析条件(初期条件、事故条件)の不確かさの場合	解析条件(操作条件)の不確かさの場合
-----------------------	-------------------------	--------------------

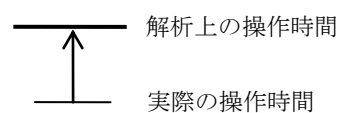
① 真値が解析結果に包含されるもの  
⇒定性的に影響がないことを確認



① 最確条件※3が解析条件に包含されるもの  
⇒定性的に影響がないことを確認



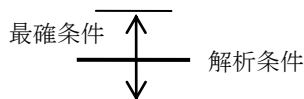
① 解析上の操作時間の余裕があるもの  
⇒定性的に影響がないことを確認



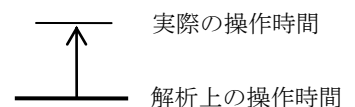
② 真値が解析結果に包含されないもの  
⇒定量的に影響を確認又は感度解析にて影響を確認



② 最確条件が解析条件に対して正負の値を取るもの  
⇒厳しい側において定量的に影響を確認又は感度解析にて影響を確認



② 解析上の操作時間の余裕がないもの  
⇒定量的に影響を確認又は感度解析にて影響を確認



事故シーケンスグループ及び  
重要事故シーケンス等の選定について

## 目 次

### はじめに

1. 炉心損傷防止対策の有効性評価の事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンス選定について
  - 1.1 事故シーケンスグループの分析について
    - 1.1.1 炉心損傷に至る事故シーケンスの抽出, 整理
    - 1.1.2 抽出した事故シーケンスの整理
      - 1.1.2.1 必ず想定する事故シーケンスグループとの対応
      - 1.1.2.2 追加すべき事故シーケンスグループの検討
      - 1.1.2.3 炉心損傷後の原子炉格納容器の機能への期待可否に基づく整理
  - 1.2 有効性評価の対象となる事故シーケンスについて
  - 1.3 重要事故シーケンスの選定について
    - 1.3.1 重要事故シーケンス選定の考え方
    - 1.3.2 重要事故シーケンスの選定結果
2. 格納容器破損防止対策の有効性評価における格納容器破損モード及び評価事故シーケンスの選定について
  - 2.1 格納容器破損モードの分析について
    - 2.1.1 格納容器破損モードの抽出, 整理
    - 2.1.2 内部事象運転時レベル 1.5 P R A の定量化結果及び影響度を踏まえた格納容器破損モードの検討
  - 2.2 評価事故シーケンスの選定について
    - 2.2.1 評価対象とするプラント損傷状態の選定
    - 2.2.2 評価事故シーケンスの選定の考え方及び選定結果
    - 2.2.3 炉心損傷防止が困難な事故シーケンス等に対する格納容器破損防止対策の有効性
    - 2.2.4 直接的に炉心損傷に至る事故シーケンスに対する対策
3. 運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策の有効性評価の運転停止中事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンスの選定について
  - 3.1 運転停止中事故シーケンスグループの分析について
    - 3.1.1 燃料損傷に至る運転停止中事故シーケンスグループの抽出・整理
  - 3.2 重要事故シーケンスの選定について
    - 3.2.1 重要事故シーケンスの選定の考え方
    - 3.2.2 重要事故シーケンスの選定結果

4. 事故シーケンスグループ及び重要事故シーケンス等の選定に活用した P R A の実施プロセスについて

## 表

第 1-1 表	P R A の対象とした主な設備・系統
第 1-2 表	内部事象運転時レベル 1 P R A における起因事象と発生頻度
第 1-3 表	地震レベル 1 P R A における起因事象と発生頻度
第 1-4 表	津波高さ別の発生頻度
第 1-5 表	イベントツリーにより抽出した事故シーケンス
第 1-6 表	P R A の結果に基づく新たな事故シーケンスグループの検討
第 1-7 表	事故シーケンスグループの主要な炉心損傷防止対策と炉心損傷頻度
第 1-8 表	重要事故シーケンス等の選定
第 2-1 表	格納容器破損モード別格納容器破損頻度
第 2-2 表	プラント損傷状態の定義
第 2-3 表	評価対象とするプラント損傷状態の選定について
第 2-4 表	格納容器破損防止対策の評価事故シーケンスの選定について
第 3-1 表	内部事象停止時レベル 1 P R A における起因事象と発生頻度
第 3-2 表	運転停止中事故シーケンスグループ別燃料損傷頻度
第 3-3 表	重要事故シーケンス（運転停止中）の選定について
第 3-4 表	燃料損傷までの余裕時間について

## 図

- 第 1-1 図 事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンス選定の全体プロセス
- 第 1-2 図 内部事象運転時レベル 1 P R A イベントツリー
- 第 1-3 図 地震レベル 1 P R A 階層イベントツリー
- 第 1-4 図 地震レベル 1 P R A イベントツリー
- 第 1-5 図 津波レベル 1 P R A 階層イベントツリー
- 第 1-6 図 プラント全体の炉心損傷頻度
- 第 1-7 図 各 P R A の結果と事故シーケンスグループごとの寄与割合
  
- 第 2-1 図 格納容器破損モード抽出及び評価事故シーケンス選定の全体プロセス
- 第 2-2 図 シビアアクシデントで想定される事象進展と格納容器破損モード
- 第 2-3 図 内部事象運転時レベル 1.5 P R A 格納容器イベントツリー
- 第 2-4 図 内部事象運転時レベル 1.5 P R A の定量化結果
  
- 第 3-1 図 運転停止中の原子炉における事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンス選定の全体プロセス
- 第 3-2 図 定期事業者検査時のプラント状態と主要パラメータの推移
- 第 3-3 図 P O S の分類及び定期事業者検査工程
- 第 3-4 図 内部事象停止時レベル 1 P R A イベントツリー
- 第 3-5 図 起因事象別の寄与割合
- 第 3-6 図 事故シーケンスグループ別の寄与割合

## 別 紙

- 1 有効性評価の事故シーケンスグループ等の選定における外部事象の考慮について
- 2 外部事象特有の事故シーケンスについて
- 3 重大事故防止に関係する設備についての諸外国の調査結果
- 4 T B Wシーケンスの炉心損傷防止対策及び着眼点に基づく評価を踏まえた重要事故シーケンスの選定及びT Wシーケンスの纏め方について
- 5 内部事象P R Aにおける主要なカットセットとF V重要度に照らした重大事故等防止対策の対応状況
- 6 地震P R A，津波P R Aから抽出される事故シーケンスと対策の有効性について
- 7 「水素燃焼」及び「格納容器直接接触（シェルアタック）」を格納容器破損モードの評価対象から除外する理由
- 8 格納容器隔離失敗の分岐確率の妥当性と隔離失敗事象への対応について
- 9 原子炉圧力容器内における水蒸気爆発を格納容器破損モードの評価対象から除外する理由について
- 10 島根原子力発電所2号炉P R Aピアレビュー実施結果について
- 11 「P R Aの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」への島根原子力発電所2号炉P R Aの対応状況

## 別 添

島根原子力発電所2号炉 確率論的リスク評価（P R A）について



はじめに

「実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則の解釈」（以下「解釈」という。）に基づき、重大事故等対策の有効性評価に係る事故シーケンスグループ等の選定に際しては、個別プラントの確率論的リスク評価（以下「P R A」という。）を活用している。当社は従来から定期安全レビュー等の機会に内部事象レベル1 P R A（出力運転時、停止時）及びレベル1.5 P R A（出力運転時）を実施してきており、これらのP R A手法を今回も適用した。また、外部事象としては、現段階でP R A手法を適用可能な事象として、一般社団法人日本原子力学会において実施基準が標準化され、試評価等の実績を有する地震レベル1 P R A及び津波レベル1 P R Aを対象とし、これらの外部事象P R Aから抽出される建物・構築物等の大規模な損傷から発生する事象についても事故シーケンスグループ等の選定に係る検討対象範囲とした。

また、P R Aが適用可能でないと判断した外部事象については、事故シーケンスの定性的な分析を行い、事故シーケンスグループ等の選定に係る検討を実施した。

今回実施するP R Aの目的が重大事故等対策の有効性評価を行う事故シーケンスグループ等の選定への活用にあることを考慮し、これまで整備してきたアクシデントマネジメント策（以下「AM策」という。）や緊急安全対策等を考慮しない仮想的なプラント状態を評価対象としてP R Aモデルを構築した。

なお、今回のP R Aの実施に際しては、原子力規制庁配布資料「P R Aの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」を参照した。

#### <今回のP R Aの対象>

対象	許認可	モデル化採否
設計基準対象施設及びプラント 運転開始時から備えている手 段・設備	対象	期待する（「設計基準事故対処設 備の機能を作動させるための手動 操作」，「常用系である復水・給水 系」※1等に期待する。）
AM策（平成4年に計画・整備）	対象外	期待しない
緊急安全対策	対象外	期待しない
重大事故等対処設備	現在申請中	期待しない

※1 手動停止時のみ期待する

## 1. 炉心損傷防止対策の有効性評価の事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンス選定について

炉心損傷防止対策の有効性評価において想定する事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンス選定の全体プロセスを第1-1図に示す。本プロセスに従い、各検討ステップにおける実施内容を整理した。

### 【概要】

- ① 内部事象P R A、外部事象P R A（適用可能なものとして地震、津波を選定）及びP R Aを適用できない外部事象等についての定性的検討から事故シーケンスの抽出を実施した。
- ② 抽出した事故シーケンスと必ず想定する事故シーケンスグループとの比較を行い、必ず想定する事故シーケンスグループ以外に抽出された外部事象特有の事故シーケンスについて、頻度、影響等を確認し、事故シーケンスグループとしての追加要否を検討した。
- ③ 抽出した事故シーケンスグループ内の事故シーケンスについて、国内外の先進的な対策を講じても炉心損傷防止が困難なものは、格納容器破損防止対策の有効性評価にて取り扱うこととした。
- ④ 炉心損傷防止対策の有効性評価において想定する事故シーケンスグループごとに、「実用発電用原子炉に係る炉心損傷防止対策及び格納容器破損防止対策の有効性評価に関する審査ガイド」（以下「審査ガイド」という。）に記載の観点（共通原因故障又は系統間の機能の依存性、余裕時間、設備容量、代表性）に基づき、有効性評価の対象とする重要事故シーケンスを選定した。

### 1.1 事故シーケンスグループの分析について

解釈には、炉心損傷防止対策の有効性評価に係る事故シーケンスグループの、個別プラント評価による抽出に関して以下のとおりに示されている。

#### 1-1

##### (a) 必ず想定する事故シーケンスグループ

###### ① BWR

- ・ 高圧・低圧注水機能喪失
- ・ 高圧注水・減圧機能喪失
- ・ 全交流動力電源喪失
- ・ 崩壊熱除去機能喪失
- ・ 原子炉停止機能喪失
- ・ LOCA時注水機能喪失
- ・ 格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）

##### (b) 個別プラント評価により抽出した事故シーケンスグループ

- ① 個別プラントの内部事象に関する確率論的リスク評価（P R A）及

び外部事象に関するPRA（適用可能なもの）又はそれに代わる方法で評価を実施すること。

- ② その結果、上記1-1(a)の事故シーケンスグループに含まれない有意な頻度又は影響をもたらす事故シーケンスグループが抽出された場合には、想定する事故シーケンスグループとして追加すること。なお、「有意な頻度又は影響をもたらす事故シーケンスグループ」については、上記1-1(a)の事故シーケンスグループと炉心損傷頻度又は影響度の観点から同程度であるか等から総合的に判断するものとする。

上記1-1(b)①に関して、PRAの適用可能な外部事象については一般社団法人日本原子力学会におけるPRA実施基準の標準化の状況、試評価実績の有無等を考慮し、地震及び津波とした。したがって、内部事象運転時レベル1PRA、地震レベル1PRA及び津波レベル1PRAを実施し、事故シーケンスグループを評価した。

また、PRAの適用が困難と判断した地震、津波以外の外部事象については定性的な検討により発生する事故シーケンスの分析を行った。

実施した事故シーケンスグループに係る分析結果を「1.1.1 炉心損傷に至る事故シーケンスの抽出、整理」に示す。

### 1.1.1 炉心損傷に至る事故シーケンスの抽出、整理

#### (1) PRAに基づく整理

内部事象運転時レベル1PRAでは、各起因事象の発生後、炉心損傷を防止するための緩和手段等の組合せを評価し、第1-2図のイベントツリーを用いて分析することで炉心損傷に至る事故シーケンスを抽出している。PRAの対象とした島根原子力発電所2号炉の主な設備システムを第1-1表に示す。また、選定した起因事象及びその発生頻度を第1-2表に示す。

外部事象に関しては、PRAが適用可能な事象として地震レベル1PRA及び津波レベル1PRAを実施し、内部事象と同様にイベントツリー分析を行い、炉心損傷に至る事故シーケンスを抽出した。第1-3図に地震レベル1PRAの階層イベントツリーを、第1-4図に地震レベル1PRAのイベントツリーを、第1-5図に津波レベル1PRAの階層イベントツリーを示す。地震によって生じる起因事象及びその発生頻度を第1-3表に、津波高さとして発生するシナリオの観点から整理した津波高さ別の発生頻度を第1-4表に示す。

地震や津波の場合、各安全機能の喪失に至るプロセスは異なるものの、起因事象が内部事象と同じであれば、炉心損傷を防止するための緩和手段も同じであるため、事故シーケンスも内部事象と同様である。また、

地震レベル1 P R A及び津波レベル1 P R Aでは、内部事象運転時レベル1 P R Aでは想定していない複数の安全機能や緩和機能を有する機器が同時に損傷する事象や、建物・構築物等の大規模な損傷の発生により直接的に炉心損傷に至る事故シーケンスも扱っている。

各P R Aにより抽出した事故シーケンスを第1-5表に、評価結果を第1-6図及び第1-7図に示す。

## (2) P R Aに代わる検討に基づく整理

P R Aの適用が困難な地震、津波以外の外部事象（以下「その他の外部事象」という。）については、その他の外部事象により誘発される起因事象について検討した。内部溢水及び内部火災では、外部電源喪失や全給水喪失等の起因事象の発生が想定される。また、洪水、風（台風）、竜巻、凍結、降水、積雪、落雷、地滑り、火山の影響、生物学的事象、森林火災及び人為事象等において想定される事象は、いずれも内部事象運転時レベル1 P R A、地震レベル1 P R A又は津波レベル1 P R Aのいずれかで想定する起因事象に包絡されるため、その他外部事象を考慮しても新たな事故シーケンスグループは抽出されないと推定した。（別紙1）

### 1.1.2 抽出した事故シーケンスの整理

今回実施したレベル1 P R Aにより抽出した各事故シーケンス（第1-5表参照）を、炉心損傷防止のための緩和機能の喪失状況、プラントの状態及び炉心損傷に至る主要因の観点で分類した結果と、解釈1-1(a)に示されている必ず想定する事故シーケンスグループとの関係及び解釈1-2に示されている要件との関係等を第1-6表に整理した。また、整理の内容を「1.1.2.1 必ず想定する事故シーケンスグループとの対応」～「1.1.2.3 炉心損傷後の原子炉格納容器の機能への期待可否に基づく整理」に示す。

#### 1.1.2.1 必ず想定する事故シーケンスグループとの対応

今回実施したレベル1 P R Aにより抽出した各事故シーケンス（第1-5表参照）について、炉心損傷防止のための緩和機能の喪失状況、プラントの状態及び炉心損傷に至る主要因の観点で分類した。具体的には次の(1)～(7)及びこれ以外の事故シーケンスに分類した。緩和機能の喪失状況、プラントの状態の観点で、(1)～(7)は、解釈1-1(a)の必ず想定する事故シーケンスグループに対応するものとして整理した。

##### (1) 高圧・低圧注水機能喪失（T Q U V）

運転時の異常な過渡変化等の発生後、高圧注水機能を喪失し、原子炉の減圧には成功するが、低圧注水機能が喪失して、炉心の著しい損傷に至る事故シーケンスを、事故シーケンスグループ「高圧・低圧注水機能

喪失」に分類する。

(2) 高圧注水・減圧機能喪失 (T Q U X)

運転時の異常な過渡変化等の発生後、高圧注水機能及び原子炉減圧機能を喪失し、炉心の著しい損傷に至る事故シーケンスを、事故シーケンスグループ「高圧注水・減圧機能喪失」に分類する。

(3) 全交流動力電源喪失 (長期T B, T B D, T B P, T B U)

外部電源喪失の発生時に区分Ⅰ及び区分Ⅱの非常用交流電源の確保に失敗するとともに区分Ⅲの高圧炉心スプレイ系ディーゼル発電機による高圧炉心スプレイ系専用の交流電源の確保に失敗することにより全交流動力電源喪失が発生し、安全機能を有する系統及び機器が機能喪失することによって、炉心の著しい損傷に至る事故シーケンスを、事故シーケンスグループ「全交流動力電源喪失」に分類する。

なお、P R Aでは電源喪失の事故シーケンスを長期T B, T B D, T B P及びT B Uに詳細化して抽出しているが、いずれも全交流動力電源喪失を伴う事故シーケンスであるため、解釈1-1(a)に記載の事故シーケンスグループでは「全交流動力電源喪失」に該当するものとして整理した。

また、高圧炉心スプレイ系ディーゼル発電機による交流電源確保失敗は高圧炉心スプレイ系のシステムモデルに含めてモデル化していることから、区分Ⅰ及び区分Ⅱの非常用交流電源の確保に失敗し、かつ、高圧炉心スプレイ系による炉心冷却に失敗する事故シーケンスを本事故シーケンスグループに分類することとする。

(4) 崩壊熱除去機能喪失 (T W)

運転時の異常な過渡変化等の発生後、原子炉圧力容器への注水等の炉心の冷却に成功するものの、原子炉格納容器からの崩壊熱除去機能が喪失し、炉心損傷前に原子炉格納容器が過圧により破損、その後、炉心の著しい損傷に至るおそれのある事故シーケンスを、事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」として分類する。

(5) 原子炉停止機能喪失 (T C)

運転時の異常な過渡変化等の発生後、原子炉停止機能を喪失し、炉心の著しい損傷に至る事故シーケンスを、事故シーケンスグループ「原子炉停止機能喪失」として分類する。

(6) L O C A時注水機能喪失 (A E, S 1 E, S 2 E)

大破断L O C Aの発生後の高圧注水機能及び低圧注水機能の喪失、又は、中小破断L O C Aの発生後の「高圧注水機能及び低圧注水機能」又は「高圧注水機能及び原子炉減圧機能」の喪失により、炉心の著しい損傷に至る事故シーケンスを、事故シーケンスグループ「L O C A時注水機能喪失」として分類する。

なお、P R AではL O C A時の注水機能喪失シーケンスを、破断口の

大きさに応じてA E（大破断L O C Aを起因とする事故シーケンス）、S 1 E（中破断L O C Aを起因とする事故シーケンス）及びS 2 E（小破断L O C Aを起因とする事故シーケンス）に詳細化して抽出しているが、いずれもL O C A時の注水機能喪失を伴う事故シーケンスであるため、解釈1－1(a)に記載の事故シーケンスグループでは「L O C A時注水機能喪失」に該当するものとして整理した。

(7) 格納容器バイパス（インターフェイスシステムL O C A）（I S L O C A）

インターフェイスシステムL O C Aの発生後、破断箇所の隔離に失敗し、非常用炉心冷却系（以下「E C C S」という。）等による原子炉水位の確保に失敗することで炉心の著しい損傷に至る事故シーケンスを、事故シーケンスグループ「格納容器バイパス（インターフェイスシステムL O C A）」に分類する。

1.1.2.2 追加すべき事故シーケンスグループの検討

今回実施したレベル1 P R Aにより抽出した各事故シーケンス（第1－5表参照）のうち、炉心損傷防止のための緩和機能の喪失状況、プラントの状態及び炉心損傷に至る主要因の観点で解釈1－1(a)の必ず想定する事故シーケンスグループに対応しない事故シーケンスとしては、地震・津波特有の事象として以下の事故シーケンスを抽出した。

(1) E x c e s s i v e L O C A

大規模な地震では、原子炉格納容器内の原子炉冷却材圧力バウンダリにおいて、大破断L O C Aを超える規模の損傷に伴う冷却材喪失（E x c e s s i v e L O C A）が発生する可能性がある。具体的には、逃がし安全弁（以下「S R V」という。）の開放失敗による原子炉圧力上昇又は地震による直接的な荷重により、原子炉格納容器内の原子炉冷却材圧力バウンダリ配管が損傷に至るシナリオを想定している。大規模な地震においてL O C Aが発生した場合であっても、破断の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、E C C Sの注水機能の全喪失や、使用可能なE C C Sの注水能力を上回る量の原子炉冷却材の漏えいが発生することにより炉心損傷に至る可能性も考えられる。さらに、使用可能な緩和設備の状況によっては原子炉格納容器の除熱に失敗する等の原因により、原子炉格納容器の破損に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震発生後の原子炉冷却材圧力バウンダリ配管の損傷の規模や緩和機能の状態には不確かさが大きく、原子炉冷却材圧力バウンダリ配管の損傷の規模や緩和機能の状態に応じて個別に事象収束の評価を実施することは困難であるため、保守的にE x c e s s i v e L O C A相当のL O C Aが発生するものとし、炉心損傷に直結す

る事象として抽出した。

なお、後述する事故シーケンス選定の結果、大破断 L O C A については国内外の先進的な対策を考慮しても炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスとして原子炉格納容器の機能に期待している。破断の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては原子炉格納容器の機能に期待できる場合も考えられる。

#### (2) 計装・制御系喪失

大規模な地震の発生により、計装・制御機能が喪失することでプラントの監視及び制御が不能な状態に陥る可能性がある。計装・制御機能を喪失した場合であっても、喪失の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、E C C S が起動不能になること等が原因で炉心損傷に至る可能性も考えられる。さらに、残留熱除去系が起動不能になること等の原因により、原子炉格納容器の破損に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震による計装・制御系の喪失の規模には不確かさが大きく、計装・制御機能が喪失した際のプラントへの影響を特定することは困難であることから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

#### (3) 格納容器バイパス

大規模な地震では、原子炉格納容器外で配管破断等が発生し、原子炉格納容器をバイパスした原子炉冷却材の流出が発生する可能性がある。格納容器バイパス事象はインターフェイスシステム L O C A とバイパス破断に細分化され、バイパス破断は通常開等の隔離弁に接続している配管が原子炉格納容器外で破損すると同時に隔離弁が閉失敗することで原子炉冷却材が流出する事象である。原子炉冷却材の流出や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、破断箇所の隔離に失敗したことで原子炉建物内の機器に悪影響が及び炉心損傷に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震発生後の格納容器バイパス事象の影響には不確かさが大きく、配管破断の程度や破断箇所の特定、影響緩和措置の成立性等に応じた網羅的な事象進展の評価が困難なことから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

#### (4) 原子炉格納容器損傷

大規模な地震では、原子炉格納容器の損傷が発生する可能性がある。また、原子炉格納容器の損傷に伴い、原子炉圧力容器が損傷する可能性も考えられる。この場合、原子炉格納容器の損傷又は原子炉格納容器と原子炉圧力容器の両方の損傷により、原子炉停止や炉心冷却が困難となる可能性が考えられる。大規模な地震において原子炉格納容器の損傷又は原子炉格納容器と原子炉圧力容器の両方の損傷が発生した場合であ

っても、損傷の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、原子炉格納容器の損傷又は原子炉格納容器と原子炉圧力容器の両方の損傷に伴いECCSの注水配管が破断し、炉心冷却が困難になる等の理由により、炉心損傷に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震発生後の原子炉格納容器の損傷の規模や緩和機能の状態には不確かさが大きく、損傷の規模や緩和機能の状態による事象収束可能性の評価が困難なことから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

#### (5) 原子炉圧力容器損傷

大規模な地震では、原子炉圧力容器の損傷が発生する可能性がある。この場合、原子炉圧力容器の損傷により、原子炉停止や炉心冷却が困難となる可能性が考えられる。大規模な地震において原子炉圧力容器の損傷が発生した場合であっても、損傷の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、原子炉圧力容器の損傷に伴いECCSの注水配管が破断し、炉心冷却が困難になる等の理由により、炉心損傷に至る可能性も考えられる。また、原子炉圧力容器の損傷後に使用可能な緩和設備の状況によっては原子炉格納容器の除熱に失敗する等の原因により、原子炉格納容器の破損に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震発生後の原子炉圧力容器の損傷の規模や緩和機能の状態には不確かさが大きく、損傷の規模や緩和機能の状態による事象収束可能性の評価が困難なことから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

#### (6) 原子炉建物損傷

大規模な地震では、原子炉建物が損傷することで、建物内の原子炉格納容器、原子炉圧力容器等の機器及び構造物が大規模な損傷を受ける可能性がある。大規模な地震において原子炉建物の損傷が発生した場合であっても、損傷の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、原子炉停止や炉心冷却が困難となり、炉心損傷に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震発生後の原子炉建物の損傷の規模や緩和機能の状態には不確かさが大きく、損傷の規模や緩和機能の状態による事象収束可能性の評価が困難なことから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

#### (7) 制御室建物損傷

大規模な地震では、制御室建物が損傷することで、建物内の中央制御盤等が損傷を受ける可能性がある。大規模な地震において制御室建物の損傷が発生した場合であっても、損傷の規模や使用可能な緩和設備の状



況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、原子炉停止や炉心冷却が困難となり、炉心損傷に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震発生後の制御室建物の損傷の規模や緩和機能の状態には不確かさが大きく、損傷の規模や緩和機能の状態による事象収束可能性の評価が困難なことから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

#### (8) 廃棄物処理建物損傷

大規模な地震では、廃棄物処理建物が損傷することで、建物内の補助盤室やバッテリー室等に設置された機器等が損傷を受ける可能性がある。大規模な地震において廃棄物処理建物の損傷が発生した場合であっても、損傷の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、原子炉停止や炉心冷却が困難となり、炉心損傷に至る可能性も考えられる。

このように、大規模な地震発生後の廃棄物処理建物の損傷の規模や緩和機能の状態には不確かさが大きく、損傷の規模や緩和機能の状態による事象収束可能性の評価が困難なことから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

#### (9) 直接炉心損傷に至る事象

津波高さE L 20m を超える大規模な津波によって建物内に浸水が発生した場合、計装・制御系、E C C S等の複数の緩和機能が広範にわたって機能喪失する可能性がある。津波高さE L 20m を超える大規模な津波によって建物内に浸水が発生した場合であっても、損傷の規模や使用可能な緩和設備の状況によっては炉心損傷を防止できる可能性も考えられるが、一方で、浸水によりE C C Sが機能喪失すること等が原因で炉心冷却が困難となり、炉心損傷に至る可能性も考えられる。さらに、浸水により残留熱除去系が機能喪失すること等の原因により、原子炉格納容器の破損に至る可能性も考えられる。

このように、津波高さE L 20m を超える大規模な津波による損傷の規模や緩和機能の状態には不確かさが大きく、損傷の規模や緩和機能の状態による事象収束可能性の評価が困難なことから、保守的に炉心損傷に直結する事象として抽出した。

上記の事故シーケンスについて、解釈に従い、有効性評価における想定の可否を炉心損傷頻度又は影響度等の観点から分析した。

##### ① 炉心損傷頻度の観点

(1)～(8)の各事故シーケンスの炉心損傷頻度には、必ずしも炉心損傷に直結する程の損傷に至らない場合も含んでいる。別紙2のとおり、これらの事故シーケンスは評価方法にかなりの保守性を有している。また、地震動に応じた詳細な損傷の程度や影響を評価することは困難なことから、現状、対象とする建物や機器等の損傷をもって炉心損傷直結事象

として整理しているが、実際には地震の程度に応じ、機能を維持した設計基準事故対処設備等が残る場合も想定される。機能を維持した設計基準事故対処設備等がある場合、それを用いた対応に期待することにより、炉心損傷を防止できる可能性もあると考える。これらを整理すると以下のようなになる。

- a. 炉心損傷直結と整理している事象が発生したが、損傷の程度が軽微であったり、機能喪失を免れた緩和機能によって炉心損傷を回避できる場合。
- b. 炉心損傷直結と整理している事象が発生したが、緩和機能による炉心損傷の防止が可能な程度の損傷であり、機能喪失を免れた緩和機能があったものの、それらのランダム故障によって炉心損傷に至る場合。
- c. 緩和機能の有無にかかわらず炉心損傷を防止できない規模の炉心損傷直結事象が発生し、炉心損傷に至る場合。

(1)～(8)の事故シーケンスについては、地震レベル1 P R Aから抽出される事故シーケンスであるが、炉心損傷頻度は $10^{-7}$ ／炉年程度と小さく、上記の整理のとおり、a. の場合は炉心損傷を防止できると考えられるため、評価を詳細化することで(1)～(8)の各事故シーケンスの炉心損傷頻度は現在の値よりも更に小さい値になると推定される。また、機能を維持した設計基準事故対処設備等に期待した上で、そのランダム故障により炉心損傷に至る場合の事故シーケンスは、内部事象運転時レベル1 P R Aの結果から抽出された既存の事故シーケンスグループに包絡されるものと考えられる。これらの事故シーケンスに対して、炉心損傷頻度の観点では、地震レベル1 P R Aの精度を上げることが望ましいと考える。

また、(9)の事故シーケンスについては、津波レベル1 P R Aから抽出される事故シーケンスであるが、炉心損傷頻度は $1.2 \times 10^{-7}$ ／炉年と小さく、また、この炉心損傷頻度は小規模な損傷の影響を含めた値であり、浸水による屋内外の施設の損傷の規模によっては、機能維持している設備により原子炉への注水を継続することで、炉心損傷が回避できる可能性があり、現実的には更に小さい値になると推定される。

## ② 影響度（事象の厳しさ）の観点

(1)～(8)の各事故シーケンスが発生した際の事象の厳しさについて、建物や機器の損傷の程度や組合せによって事象の厳しさに幅が生じると考えられ、定量的に分析することは難しいと考えるものの、地震と同時に炉心が損傷する状況は考え難い。現状、対象とする建物や機器等の損傷をもって炉心損傷直結事象として整理しているが、実際には機能を維持した設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備、可搬型の機器等で炉心損傷防止を試みるものとする。このように、事象の厳しさの観点では、高圧・低圧注水機能喪失や全交流動力電源喪失等と同等となる

場合もあると考える。また、損傷の程度が大きく、設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備に期待できない場合には、大規模損壊対策を含め、使用可能な設備によって臨機応変に影響緩和を試みる。

また、(9)の事故シーケンスが発生した際の事象の厳しさについて、敷地内及び建物内への浸水の程度によって事象の厳しさに幅が生じると考えられ、定量的に分析することは難しいと考えるものの、実際には機能を維持した設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備、可搬型の機器等で炉心損傷防止を試みるものとする。このように、事象の厳しさの観点では、全交流動力電源喪失等と同等となる場合もあると考える。また、損傷の程度が大きく、設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備に期待できない場合には、大規模損壊対策を含め、使用可能な設備によって臨機応変に影響緩和を試みる。

### ③ 炉心損傷防止対策の観点

現状、対象とする建物や機器等の損傷をもって炉心損傷直結事象と整理している(1)～(8)の各事故シーケンスについて、炉心損傷直結としておくことの保守性を踏まえて定性的に考察すると、①及び②で述べたとおり、(1)～(8)の事象が発生するものの、機能を維持した設計基準事故対処設備等が残る場合も考えられる。この場合、炉心損傷に至るか否かは地震によって機能を喪失した設備及び機能を維持した設計基準事故対処設備等のランダム故障によるため、内部事象運転時レベル1 P R Aの結果から抽出された既存の事故シーケンスグループに包絡されると考えられる。また、炉心損傷を防止できる場合も考えられるため、炉心損傷頻度は現在の値よりも低下するものと考えられる。

損傷の程度が大きく、設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備に期待できない場合には、大規模損壊対策を含め、建物以外に分散配置した設備や可搬型の機器を駆使し、臨機応変に対応することによって、炉心損傷や格納容器破損を防止することになる。

上記のように、(1)～(8)の各事故シーケンスは、実際のところプラントへの影響に不確かさが大きく、具体的な事故シーケンスを特定することが困難である。このため、外部事象に特有の事故シーケンスについては、炉心損傷防止対策の有効性評価の事故シーケンスグループとして事故シーケンスを特定して評価するのではなく、発生する事象の程度や組合せに応じて炉心損傷防止対策や格納容器破損防止対策を柔軟に活用するとともに、建物全体が崩壊し内部の安全系機器・配管のすべてが機能を喪失するような深刻な損傷の場合には可搬型のポンプ、電源、放水設備等を駆使した大規模損壊対策による影響緩和を図ることで対応すべきものとする。

また、(9)の事故シーケンスについても、敷地内及び建物内への浸水の程度によっては機能を維持した設計基準事故対処設備や重大事故等

対処設備による対応に期待できる場合も考えられ、損傷の程度が大きく設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備に期待できない場合には、大規模損壊対策を含め、使用可能な設備によって臨機応変に影響緩和を試みる。

以上の検討を踏まえ、(1)～(8)の各事故シーケンスは、一定の安全機能喪失時の対策の有効性を評価するシナリオとしては適当でない事象であり、新たに追加するシーケンスとはしないことを確認した。また、(1)～(8)の各事故シーケンスを炉心損傷頻度及び影響度の観点から総合的に判断した結果、解釈に基づき想定する事故シーケンスグループと比較して有意な頻度又は影響をもたらす事故シーケンスグループとして新たに追加するシーケンスには該当しないと判断した。

また、上記の検討及び別紙2のとおり、大規模な地震を受けた場合であっても、炉心損傷に直結する程の損傷が生じることは考えにくく、大規模な地震を受けた場合の大部分は使用可能な緩和機能によって炉心損傷防止を試みる事が可能であるものと考えられる。

(9)の事故シーケンスについても、計装・制御系、ECCS等の複数の緩和機能がすべて喪失する程の損傷が生じることは考えにくく、使用可能な設備によって炉心損傷防止を試みる事が可能であるものとする。

#### 1.1.2.3 炉心損傷後の原子炉格納容器の機能への期待可否に基づく整理

内部事象運転時レベル1 PRA、PRAが適用可能な外部事象として地震及び津波レベル1 PRAを実施し、地震、津波以外の外部事象についてはPRAに代わる方法で概略評価を実施した結果、追加すべき新たな事故シーケンスグループはないことを確認した。

したがって、島根原子力発電所2号炉の有効性評価で想定する事故シーケンスグループは、解釈1-1(a)の必ず想定する事故シーケンスグループのみとなる。これについて、以下に示す解釈1-2及び1-4の要件に基づいて整理し、各事故シーケンスグループの対策の有効性の確認における要件を整理した。

- 1-2 第1項に規定する「炉心の著しい損傷を防止するために必要な措置を講じたもの」とは、以下に掲げる要件を満たすものであること。
- (a) 想定する事故シーケンスグループのうち炉心の著しい損傷後の原子炉格納容器の機能に期待できるものにあつては、炉心の著しい損傷を防止するための十分な対策が計画されており、かつ、その対策が想定する範囲内で有効性があることを確認する。
  - (b) 想定する事故シーケンスグループのうち炉心の著しい損傷後の原子炉格納容器の機能に期待することが困難なもの（格納容器先行破損シーケンス、格納容器バイパス等）にあつては、炉心の著しい損傷を防止す

る対策に有効性があることを確認する。

1-4 上記1-2(a)の「十分な対策が計画されており」とは、国内外の先進的な対策と同等のものが講じられていることをいう。

整理の結果は以下のとおり。

○解釈1-2(a)に分類される事故シーケンスグループ

- ・ 高圧・低圧注水機能喪失
- ・ 高圧注水・減圧機能喪失
- ・ 全交流動力電源喪失
- ・ L O C A時注水機能喪失

○解釈1-2(b)に分類される事故シーケンスグループ

- ・ 崩壊熱除去機能喪失
- ・ 原子炉停止機能喪失
- ・ 格納容器バイパス（インターフェイスシステムL O C A）

## 1.2 有効性評価の対象となる事故シーケンスについて

事故シーケンスグループ別に事故シーケンス及び炉心損傷防止対策について整理した結果を第1-7表に示す。

解釈1-2(a)の事故シーケンスグループに含まれる事故シーケンスに対しては、炉心の著しい損傷を防止するための対策として、国内外の先進的な対策と同等のものを講じることが要求されている。

一方で、事故シーケンスの中には、国内外の先進的な対策を考慮しても、炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスが存在する。具体的には以下の2つの事故シーケンスが該当する。なお、国内外の先進的な対策と島根原子力発電所2号炉の対策の比較を別紙3に示す。

- ① 冷却材喪失（大破断L O C A）＋高圧炉心冷却失敗＋低圧炉心冷却失敗
- ② 全交流動力電源喪失（外部電源喪失＋交流電源・補機冷却系喪失）＋原子炉停止失敗

①の事故シーケンスは、原子炉圧力容器から多量の原子炉冷却材が短時間で失われていく事象であり、大破断L O C A後は数分以内に多量の注水を開始しなければ炉心損傷を防止することができない。今回の調査では、事象発生から極めて短時間に多量の注入が可能な対策（インターロックの追設等）は確認できなかったことから、この事故シーケンスを国内外の先進的な対策を考慮しても、炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスとして整理した。

以上より、①の事故シーケンスについては、格納容器破損防止対策の有効性評価の対象とすることとし、炉心損傷防止対策の有効性評価の対象とする事故シーケンスから除外した（重要事故シーケンス選定の対象とする

事故シーケンスから除外する)。

①の事故シーケンスについても、炉心損傷後の原子炉への注水や格納容器スプレイ等の実施により、事象の緩和に期待できる。また、今回整備した格納容器破損防止対策により原子炉格納容器の閉じ込め機能に期待できることを確認している(「2.2.3 炉心損傷防止が困難な事故シーケンス等に対する格納容器破損防止対策の有効性」参照)。

②の事故シーケンスは、原子炉スクラムの失敗と全交流動力電源の喪失が重畳する事故シーケンスである。制御棒による原子炉停止に期待できない場合の代替の原子炉停止手段としてはほう酸水注入系を設けているが、全交流動力電源の喪失によってほう酸水注入系が機能喪失に至ることから、炉心損傷を防ぐことができない。今回の調査では、原子炉停止機能について、ほう酸水注入系に期待できない場合のバックアップとなる対策は確認できなかったことから、この事故シーケンスを、国内外の先進的な対策を考慮しても、炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスとして整理した。

②の事故シーケンスは地震レベル1 P R Aから抽出された事故シーケンスである。原子炉スクラムの失敗の支配的な理由として、カットセットの分析結果(別紙6)からは、地震による炉内構造物の損傷等が抽出されている。今回の地震レベル1 P R Aでは、事象発生と同時に最大の地震加速度を受けるものとして評価しているが、事象発生と同時にどの程度の地震加速度が加えられるかについて、実際には不確かさが大きい。炉内構造物の低い損傷確率(5%損傷確率)であることが高い信頼度(95%信頼度)で推定できる地震加速度(以下「H C L P F」という。)は、「地震加速度大」のスクラム信号が発信される地震加速度よりも大幅に高い値であり、実際に大規模な地震が発生した場合には、地震による炉内構造物の損傷等が生じる前にスクラム信号が発信されると考えられる。また、地震レベル1 P R Aでは機器の損傷を完全相関としていることから、例えば1本のみの制御棒挿入に失敗する場合であってもスクラム失敗により炉心損傷するものとして評価している。評価の詳細は別紙2に示す。

以上のとおり、②の事故シーケンスの炉心損傷頻度は保守的な設定のもとに評価したものであるが、現実的に想定すると、本事故シーケンスによって炉心損傷に至る頻度は十分に小さいと判断したことから、本事故シーケンスは、炉心の著しい損傷を防止する対策の有効性を確認する事故シーケンスに該当しないと判断した。

なお、第1-7表に示すとおり、これらの事故シーケンスの全炉心損傷頻度への寄与割合は小さく、全炉心損傷頻度の約88%を占める事故シーケンスが炉心損傷防止対策の有効性評価の対象範囲に含まれることを確認している。

### 1.3 重要事故シーケンスの選定について

#### 1.3.1 重要事故シーケンス選定の考え方

##### (1) 重要事故シーケンス選定の着眼点に基づく整理

設置変更許可申請における炉心損傷防止対策の有効性評価の実施に際しては、事故シーケンスグループごとに重要事故シーケンスを選定している。重要事故シーケンスの選定に当たっては、審査ガイドに記載の4つの着眼点を考慮している。今回の重要事故シーケンスの選定に係る具体的な考え方は以下のとおりである。また、事故シーケンスグループごとに、事故シーケンスと各着眼点との関係を整理し、関係が強いと考えられるものから「高」、「中」、「低」と分類して整理した。

#### 【審査ガイドに記載されている重要事故シーケンス選定の着眼点】

- a. 共通原因故障又は系統間の機能の依存性によって複数の設備が機能喪失し、炉心の著しい損傷に至る。
- b. 炉心損傷防止対策の実施に対する余裕時間が短い。
- c. 炉心損傷防止に必要な設備容量（流量又は逃がし弁容量等）が大きい。
- d. 事故シーケンスグループ内のシーケンスの特徴を代表している。

##### a. 共通原因故障，系統間の機能の依存性の観点

本PRAでは、多重化された機器の共通原因故障を考慮しており、システム信頼性評価におけるフォールトツリーの中でモデル化している。このため、原子炉建物損傷等の炉心損傷直結事象を除き、緩和機能の喪失によって炉心損傷に至る事故シーケンスでは、共通原因故障が炉心損傷の原因の1つとして抽出され得ることから、これらの事故シーケンスについては、炉心損傷頻度への寄与が大きい場合、共通原因故障の影響ありと判断する。

系統間の機能依存性については、ある安全機能の機能喪失によって必然的に別の系統も機能喪失に至る場合を系統間の機能依存性ありと判断する。例えば、2つのフロントライン系（原子炉圧力容器への注水等、事故時の基本的な安全機能を直接果たす系統）に共通のサポート系（電源等、フロントライン系の機能維持をサポートする系統）が機能喪失し、それが炉心損傷頻度に大きく寄与する場合は機能依存性ありと判断する。

##### b. 余裕時間の観点

炉心損傷防止対策の対応操作に係る余裕時間を厳しくするため、事象が早く進展し、炉心損傷に至る時間が短い事故シーケンスを選定する。

#### 【例1：LOCA時注水機能喪失】

破断口径が大きい方が、原子炉冷却材の系外への流出量が多くなるため、炉心損傷防止対策の対応操作のための余裕時間が短くなる。

### 【例2：高圧・低圧注水機能喪失】

過渡事象（全給水喪失事象）は原子炉水位低（レベル3）が事象進展の起点となるため、通常水位から原子炉停止に至る手動停止、サポート系喪失と比較して事象進展が早い。このため、過渡事象を起因とする事故シーケンスの余裕時間が短い。

#### c. 設備容量の観点

炉心損傷防止に際して炉心の冷却に必要となる注水量等、設備容量への要求が大きくなる事故シーケンスを選定する。

### 【例：LOCA時注水機能喪失（中小破断LOCA）】

中小破断LOCA後の緩和措置としては原子炉減圧及び低圧注水があるが、減圧に用いるSRVは十分な台数が備えられている一方、低圧注水の代替となる注水設備の容量は低圧ECCSより少ない。このため、代替となる設備容量の観点で低圧ECCS失敗を含む事故シーケンスが厳しいと考える。

#### d. 事故シーケンスグループ内の代表性の観点

当該事故シーケンスグループの代表的な事故シーケンスとして、炉心損傷頻度が大きく、事象進展が事故シーケンスグループの特徴を有しているものを選定する。ただし、「高」、「中」、「低」の分類については炉心損傷頻度のみに着目して整理した。

今回の内部事象運転時レベル1PRA、地震レベル1PRA及び津波レベル1PRAの結果のうち、事故シーケンスを選定するに当たって同一に整理できると考えられるものについては、炉心損傷頻度を足し合わせて上記の分類を実施した。本来、各PRAは扱う事象が異なるため、結果の不確かさや評価の精度が異なるものであり、結果を足し合わせて用いることの可否（比較可能性）については、PRAの結果を活用する際の目的に照らして十分留意する必要がある。今回は重要事故シーケンスの選定の考え方を以下のとおりとしていることから、結果の不確かさやPRA間の評価の精度の違いを考慮しても、炉心損傷頻度を足し合わせて用いることによる問題は生じないものと考えた。

- 今回抽出された事故シーケンスについては、第1-8表に示すとおり、結果的に、事故シーケンスグループ内において選定対象としたすべての事故シーケンスに対して、おおむね同じ重大事故等対処設備で対応できるものと考えている。このため、重要事故シーケンスの選定に当たっては、その対応の厳しさに重きをおいて選定することが適切と考え、主に着眼点b及びcによって重要事故シーケンスを選定している。これは、決定論的な評価である有効性評価においては、対応が厳しい事故シーケンスを評価することで、選定対象としたすべての事故シーケンスに対しても重大事故等対策の有効性を確認できると考えたためである。



○ 着眼点 d については、対応の厳しさ等の選定理由が同等とみなせる場合にのみ重要事故シーケンスの選定の基準として用いており、結果的に崩壊熱除去機能喪失及び原子炉停止機能喪失の事故シーケンスグループについて、重要事故シーケンスの選定の理由としている。なお、崩壊熱除去機能喪失及び原子炉停止機能喪失で選定した重要事故シーケンスは内部事象運転時レベル 1 P R A 及び地震レベル 1 P R A から抽出された事故シーケンスであったが、第1-7表に示すとおり、いずれの P R A においても、事故シーケンスグループ内で最も大きい炉心損傷頻度となった事故シーケンスである。

(2) 同一のシーケンスグループ内で対策が異なる場合の整理

事故シーケンスグループは、基本的に喪失した機能あるいはその組合せによって決定されるものであり、起因事象や機能喪失の原因には依存しない。しかしながら、事故シーケンスへの対策の観点では、同じ事故シーケンスグループに分類される事故シーケンスでも、機能喪失の原因が異なる場合、有効な対策が異なることがある。

具体的には、全交流動力電源喪失がこれに該当するが、同じ炉心損傷防止対策で対応可能な事故シーケンスを 1 つの事故シーケンスグループとし、細分化した各事故シーケンスグループからそれぞれ重要事故シーケンスを選定した。

各々の事故シーケンスグループに対して考慮した内容の詳細は次の「1.3.2 重要事故シーケンスの選定結果」に示す。

### 1.3.2 重要事故シーケンスの選定結果

「1.3.1 重要事故シーケンス選定の考え方」の選定の着眼点を踏まえ、同じ事故シーケンスグループに複数の事故シーケンスが含まれる場合には、事象進展が早いもの等、より厳しい事故シーケンスを重要事故シーケンスとして以下のとおりに選定している。また、「(3) 全交流動力電源喪失」では機能喪失の状況が異なる事故シーケンスが抽出されたため、4 つの事故シーケンスを重要事故シーケンスとして選定した。選定理由及び選定結果の詳細については、第1-8表に示す。

(1) 高圧・低圧注水機能喪失

① 重要事故シーケンス

「過渡事象＋高圧炉心冷却失敗＋低圧炉心冷却失敗」

② 炉心損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）

・低圧原子炉代替注水系（常設）

③ 選定理由

本事故シーケンスグループには、事故シーケンス（第 1-8 表の本事故シーケンスグループの①～⑥）から、着眼点「高」が最も多い事故シーケンス（第 1-8 表の本事故シーケンスグループの①）を選定した。

なお、事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの①～⑥）は有効と考えられる対策に差異がない。このため、起因事象発生後の事象進展が早いと考えられる過渡事象を起因とし、減圧時に必要な減圧幅の観点で厳しいと考えられる、SRV再閉失敗を含まない事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの①）は、事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの②～⑥）に対して包絡性を有しているものとする。

## (2) 高圧注水・減圧機能喪失

### ① 重要事故シーケンス

「過渡事象＋高圧炉心冷却失敗＋原子炉減圧失敗」

### ② 炉心損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）

- ・代替自動減圧機能
- ・残留熱除去系（低圧注水モード）

### ③ 選定理由

着眼点「高」が最も多い事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの①）を選定した。

なお、本事故シーケンスグループは、各事故シーケンスに対して有効と考えられる対策に差異がない。このため、起因事象発生後の事象進展が早いと考えられる過渡事象を起因とした事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの①）は、本事故シーケンスグループの他の事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの②～③）に対して包絡性を有しているものとする。

## (3) 全交流動力電源喪失

本事故シーケンスグループからは、機能喪失の状況が異なる事故シーケンスが抽出されたため、4つの事故シーケンスを重要事故シーケンスとして選定した。4つの事故シーケンスは、PRAから抽出された電源喪失の事故シーケンスである、長期TB、TBD、TBP及びTBUと一致することから、この名称で事故シーケンスグループを詳細化した。

また、第1-4図に示すとおり、各重要事故シーケンスに対し、地震レベル1 PRAからは、全交流動力電源喪失と最終ヒートシンク喪失の重畳を伴う事故シーケンスも抽出されるが、全交流動力電源喪失時には、最終ヒートシンクの機能を有する設備も電源喪失によって機能喪失に至るため、地震による損傷の有無にかかわらず最終ヒートシンクの喪失が生じる。交流電源の復旧後については、電源供給に伴う最終ヒートシンクの復旧可否の観点で対応に違いが表れると考えられ、設備損傷によって最終ヒートシンクの機能喪失が生じている場合の方が緩和手段は少なくなる。ただし、設備損傷によって最終ヒートシンクの喪失が生じている場合においても格納容器フィルタベント系による除熱が可能であり、交流電源の復旧によって最終ヒートシンクの機能を復旧可能な場

合には、これに加えて原子炉補機代替冷却系の有効性を確認することができる。これを考慮し、重要事故シーケンスには、設備損傷による最終ヒートシンクの喪失を設定していない。

a. 長期 T B

① 重要事故シーケンス

「外部電源喪失＋交流電源（D G－A， B）失敗＋高圧炉心冷却（H P C S）失敗」

② 炉心損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）

- ・原子炉隔離時冷却系
- ・低圧原子炉代替注水系（可搬型）
- ・格納容器代替スプレイ系（可搬型）
- ・残留熱除去系（格納容器冷却モード）

③ 選定理由

事故シーケンスとしては1種類のみ（第1－8表の本事故シーケンスグループの①）抽出されたことからこれを選定した。

b. T B U

① 重要事故シーケンス

「外部電源喪失＋交流電源（D G－A， B）失敗＋高圧炉心冷却失敗」

② 炉心損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）

- ・高圧原子炉代替注水系
- ・低圧原子炉代替注水系（可搬型）
- ・格納容器代替スプレイ系（可搬型）
- ・残留熱除去系（格納容器冷却モード）

③ 選定理由

事故シーケンスとしては1種類のみ（第1－8表の本事故シーケンスグループの①）抽出されたことからこれを選定した。

c. T B P

① 重要事故シーケンス

「外部電源喪失＋交流電源（D G－A， B）失敗＋圧力バウンダリ健全性（S R V再閉）失敗＋高圧炉心冷却（H P C S）失敗」

② 炉心損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）

- ・原子炉隔離時冷却系（動作可能な範囲に原子炉圧力が保たれる間）
- ・低圧原子炉代替注水系（可搬型）
- ・格納容器代替スプレイ系（可搬型）
- ・残留熱除去系（格納容器冷却モード）

③ 選定理由

事故シーケンスとしては1種類のみ（第1－8表の本事故シーケンス

スグループの①) 抽出されたことからこれを選定した。

d. T B D

① 重要事故シーケンス

「外部電源喪失+直流電源(区分1, 2)失敗+高压炉心冷却(H P C S)失敗」

② 炉心損傷防止対策(有効性評価で主に考慮)

- ・ 高压原子炉代替注水系
- ・ 低压原子炉代替注水系(可搬型)
- ・ 格納容器代替スプレイ系(可搬型)
- ・ 残留熱除去系(格納容器冷却モード)

③ 選定理由

事故シーケンスとしては1種類のみ(第1-8表の本事故シーケンスグループの①) 抽出されたことからこれを選定した。

(4) 崩壊熱除去機能喪失

① 重要事故シーケンス

「過渡事象+崩壊熱除去失敗」(炉心損傷防止対策の有効性を確認する際の残留熱除去系の機能喪失の理由については残留熱除去系の機能喪失又は原子炉補機冷却系の機能喪失を考慮)

② 炉心損傷防止対策(有効性評価で主に考慮)

a. 残留熱除去系の機能喪失を考慮する場合

- ・ 格納容器フィルタベント系

b. 原子炉補機冷却水系の機能喪失を考慮する場合

- ・ 原子炉補機代替冷却系

③ 選定理由

本事故シーケンスグループにはL O C Aに伴う事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの⑬~⑱)が含まれており、いずれも格納容器圧力の上昇が早く、圧力上昇の抑制に必要な設備容量の観点でも厳しいことから、着眼点b及びcでは「高」に分類されるが、これらはL O C Aから派生した事故シーケンスである。L O C Aを起因とする事故シーケンスについては、崩壊熱除去機能の代替手段の有効性も含めてL O C A時注水機能喪失で評価することから、これらの事故シーケンスは重要事故シーケンスの選定対象から除外した。

また、事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの⑲~㉑)は炉心冷却に成功した後、原子炉格納容器の除熱手段を必要とする点で事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①)と類似している。格納容器フィルタベント系は系統構成に必要な弁の駆動電源を喪失した場合でも手動操作により対応可能であり、外部電源及び非常用電源が喪失しているT B Wシーケンスにおいても有効である。以上から事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグルー

プの⑱～㉑)は事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①)に包絡される。

このため、このほかの事故シーケンスから、着眼点「高」が多く、「高」の数が同じ場合は「中」の数が多い事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①)を選定した。

なお、LOCAを起因としない事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①～⑫及び⑱～㉑)は有効と考えられる対策に差異がない。このため、起因事象発生後の事象進展が早いと考えられる過渡事象を起因とし、炉心損傷頻度が高く、当該事故シーケンスグループの特徴を有していると考えられる、SRV再閉失敗を含まない事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①)は、LOCAを起因としない事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①～⑫及び⑱～㉑)に対して包絡性を有しているものとする。(別紙4)

(5) 原子炉停止機能喪失

① 重要事故シーケンス

「過渡事象+原子炉停止失敗」

② 炉心損傷防止対策(有効性評価で主に考慮)

- ・代替原子炉再循環ポンプトリップ機能
- ・ほう酸水注入系

③ 選定理由

着眼点「高」の数が最も多い事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①)を選定した。

なお、本事故シーケンスグループでは、過渡事象を起因とする事故シーケンスとLOCAを起因とする事故シーケンスが抽出されている。本事故シーケンスグループに対しては、重大事故等対処設備として代替制御棒挿入機能が整備されており、これに期待する場合、LOCAを起因とする事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの②～④)の事象進展はLOCA時注水機能喪失の事故シーケンスグループに包絡される。また、LOCAを起因とする場合、水位低下の観点では厳しいものの、水位低下及びLOCAに伴う減圧によってボイド率が上昇し、負の反応度が投入されることが考えられることから、事象発生直後の反応度投入に伴う出力抑制の観点では過渡事象を起因とする事故シーケンス(第1-8表の本事故シーケンスグループの①)の方が厳しいと考えられる。

本事故シーケンスグループでは、ECCSが確保されている事故シーケンスが抽出されていることから、水位低下に対しては一定の対応が可能と考えられるため、反応度制御の観点で厳しい事故シーケンスを選定することが妥当であるとする。さらに、LOCAと原子炉停

止機能喪失が重畳する事故シーケンスの炉心損傷頻度は  $1 \times 10^{-12}$  / 炉年未満であり、極めて小さい。これらを踏まえると、反応度制御の観点で厳しい過渡事象を起因とする事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの①）は、本事故シーケンスグループにおいて代表性を有しているものとする。

(6) L O C A時注水機能喪失

① 重要事故シーケンス

「冷却材喪失（中破断 L O C A）＋高圧炉心冷却失敗＋低圧炉心冷却失敗」

② 炉心損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）

- ・ S R Vの手動操作
- ・ 低圧原子炉代替注水系（常設）

③ 選定理由

着眼点「高」の数が最も多い事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの③）を選定した。なお、L O C Aに伴って生じる事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの①～④）は、配管破断規模の大きさ及び重畳する機能喪失が原子炉減圧機能喪失又は低圧注水機能喪失である点で異なっている。配管破断規模の大きさの観点では、中破断 L O C Aの方が水位の低下が早く、厳しい事象と考えられる。重畳する機能喪失の観点では、原子炉減圧に用いる S R Vは十分な台数が備えられている一方、低圧注水の代替となる注水設備の容量は低圧 E C C Sより少ない。このため、代替となる設備容量の観点で低圧注水機能喪失を含む事故シーケンスが厳しいと考える。これらのことから、配管破断規模が大きく、低圧注水機能喪失を含む事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループの③）は、本事故シーケンスグループの他の事故シーケンスに対しても包絡性を有しているものとする。

また、「(4) 崩壊熱除去機能喪失」においても L O C Aを含む事故シーケンス（第1-8表の本事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」の⑬～⑱）が抽出されている。これについて、重要事故シーケンスによる包絡性を考えると、重要事故シーケンスに低圧注水失敗が含まれており、低圧 E C C Sの機能喪失は残留熱除去系による原子炉格納容器からの除熱にも期待できないことをほぼ包絡していることから、本重要事故シーケンスでは、原子炉格納容器除熱機能に関する重大事故等対処設備の有効性についても評価することとなる。このことから、本重要事故シーケンスは、事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」の L O C Aを起因とする事故シーケンスに対しても包絡性を有しているものとする。

(7) 格納容器バイパス（インターフェイスシステム L O C A）

① 重要事故シーケンス  
「格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）」

② 炉心損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）

- ・SRVの手動操作
- ・高圧炉心スプレイ系

③ 選定理由

事故シーケンスとしては1種類のみ(第1-8表の本事故シーケンスグループの①)抽出されたことからこれを選定した。

なお、各事故シーケンスグループに含まれる内部事象を起因とする事故シーケンスについて、炉心損傷に至る要因をカットセットレベルまで展開し、炉心損傷頻度に対する寄与割合の観点で主要なカットセットに対する炉心損傷防止対策の整備状況等を確認した。(別紙5)

また、各事故シーケンスグループにおける地震又は津波を起因とする事故シーケンスについても、地震又は津波により直接炉心損傷に至る事故シーケンスを除いて、炉心損傷に至る要因をカットセットレベルまで展開し、主要なカットセットに対して炉心損傷防止対策がおおむね有効であることを確認した。(別紙6)

第1-1表 P R A の対象とした主な設備・系統

系統設備	概要
原子炉停止に関する機能	
原子炉停止系 制御棒及び制御棒 駆動系	制御棒 137 本
原子炉保護系	1 out of 2 × 2 論理回路
炉心冷却に関する機能	
高圧炉心スプレイ系	系列数 1 電動ポンプ 1 台 ポンプ容量約 320m <sup>3</sup> /h～約 1050m <sup>3</sup> /h
原子炉隔離時冷却系	系列数 1 タービン駆動ポンプ 1 台 ポンプ容量約 100m <sup>3</sup> /h
自動減圧系	自動減圧機能付 S R V 6 個 容量約 400t/h/個
低圧炉心スプレイ系	系列数 1 電動ポンプ 1 台 ポンプ容量約 1,050m <sup>3</sup> /h
低圧注水系	系列数 3 電動ポンプ 3 台 ポンプ容量約 1,200m <sup>3</sup> /h/台
崩壊熱除去に関する機能	
残留熱除去系	系列数 2 電動ポンプ 2 台 ポンプ容量約 1200m <sup>3</sup> /h/台
安全機能のサポートに関する機能	
原子炉補機冷却系	系列数 2 電動ポンプ 4 台 (2 台/系列) ポンプ容量約 1,700m <sup>3</sup> /h/台
原子炉補機海水系	系列数 2 電動ポンプ 4 台 (2 台/系列) ポンプ容量約 2,000m <sup>3</sup> /h/台
高圧炉心スプレイ系 補機冷却系	系列数 1 電動ポンプ 1 台 ポンプ容量約 240m <sup>3</sup> /h
高圧炉心スプレイ系 補機海水系	系列数 1 電動ポンプ 1 台 ポンプ容量約 340m <sup>3</sup> /h
非常用ディーゼル 発電機	台数 2 発電容量約 7,300kVA/台
高圧炉心スプレイ系 ディーゼル発電機	台数 1 発電容量約 4,000kVA
直流電源設備	系列数 (115V) 2 所内蓄電池 2 組 系列数 (230V) 1 所内蓄電池 1 組 系列数 (115V) 1 高圧炉心スプレイ系蓄電池 1 組



第1-2表 内部事象運転時レベル1 P R Aにおける起因事象と発生頻度

起因事象	発生頻度 (/炉年)	説明
過渡事象	非隔離事象 <sup>※1</sup>	タービントリップ等により原子炉がスクラムする事象。タービン・パイパス弁は正常に作動する事象であることから、いずれも事象初期から継続して復水・給水系 <sup>※4</sup> が利用可能。
	隔離事象 <sup>※2</sup>	主蒸気隔離弁等が閉鎖する事象であり、原子炉とタービン側が互いに隔離される事象。事象初期には復水・給水系が利用できるが、水源である復水器のホットウェルが隔離されるため、復水・給水系 <sup>※4</sup> の運転継続に支障が生じる。
	全給水喪失	タービンからの給水流量が全喪失する事象であり、原子炉水位が低下することにより原子炉スクラムに至る事象。事象初期には復水・給水系 <sup>※4</sup> が利用できない。
	水位低下事象 <sup>※3</sup>	タービンからの給水流量が減少し、原子炉水位が低下することにより原子炉スクラムに至る事象。給水流量の全喪失までは至らないため、機能は低下しているが事象の初期にも復水・給水系 <sup>※4</sup> は利用可能。
	原子炉保護系誤動作等	原子炉保護系の誤動作が起因となつている事象や、制御棒の誤引き抜きに関する事象等出力の増加が軽微な事象。事象初期で原子炉が隔離されないため、復水・給水系 <sup>※4</sup> が利用可能。
	S R V 誤開放	原子炉運転中にS R Vが誤開放する事象であり、原子炉冷却材(蒸気)の流出を伴う。原子炉水位の低下等は復水・給水系 <sup>※4</sup> により収束可能であるが、これに失敗する場合は、より厳しい過渡事象に移行する。
	外部電源喪失	外部電源が喪失する事象であり、事象の発生により非常用電源の確保が必要になる。
	手動停止	定期事業者検査等前もって計画されているプラント停止のほか、機器からの漏えい等比較的軽微な故障による計画されないプラント停止。
	交流電源喪失(非常用)	当該設備が機能喪失した場合に、広範な緩和設備が併せて機能喪失に至るサポート系故障等を、従属性を有する起因事象として抽出。
	直流電源喪失(非常用)	
サポート系喪失 (従属性を有する起因事象)	原子炉補機冷却系故障	
	タービンサポート系故障	
	大破断 L O C A	原子炉が減圧状態になる規模の L O C Aであり、S R Vによる原子炉減圧操作なしに低圧注水系による事象緩和が可能。
	中破断 L O C A	事象発生後短時間では原子炉の減圧に至らないが、長時間では減圧に至る規模の L O C A。
	小破断 L O C A	原子炉隔離時冷却系により事象緩和が可能な L O C A。
	インターフェイスシステム L O C A	隔離弁の多重故障や弁試験時の隔離失敗等により原子炉圧力が低圧設計部等にかかることでこれが破損し、原子炉冷却材が原子炉格納容器外で流出する事象。
	発電機負荷遮断等によりタービンがトリップする事象(原子炉圧力容器は隔離されない)	
	主蒸気隔離弁閉信号等により主蒸気隔離弁が閉鎖する事象(原子炉圧力容器は隔離される)	
	給水制御系の故障等により給水流量が減少し、原子炉水位が低下する事象。	
	内部事象運転時レベル1 P R Aでは復水・給水系は手動停止時のみ期待しており、過渡事象等では緩和設備として期待していない。	

※1 発電機負荷遮断等によりタービンがトリップする事象(原子炉圧力容器は隔離されない)

※2 主蒸気隔離弁閉信号等により主蒸気隔離弁が閉鎖する事象(原子炉圧力容器は隔離される)

※3 給水制御系の故障等により給水流量が減少し、原子炉水位が低下する事象。

※4 内部事象運転時レベル1 P R Aでは復水・給水系は手動停止時のみ期待しており、過渡事象等では緩和設備として期待していない。

第1-3表 地震レベル1 PRAにおける起因事象と発生頻度

起因事象	発生頻度 (／炉年)
外部電源喪失	1.5E-04
原子炉建物損傷	3.1E-08
原子炉格納容器損傷	3.4E-07
原子炉圧力容器損傷	1.7E-07
格納容器バイパス	3.5E-09
Excessive LOCA	4.2E-07
制御室建物損傷	1.4E-08
廃棄物処理建物損傷	1.8E-10
計装・制御系喪失	1.5E-07
直流電源喪失	5.8E-09
交流電源・補機冷却系喪失	3.9E-06

第1-4表 津波高さ別の発生頻度

津波高さ	発生頻度 (／炉年)	備考
E L 20m 超過	1.2E-07	原子炉建物等への浸水により、計装・制御系、ECCS等の緩和機能が喪失し、直接炉心損傷に至る。

第1-5表 イベントツリーにより抽出した事故シーケンス

起回事象	事故シーケンス	内部	地震	津波	シーケンス No.
過渡事象	高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(1)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗+低压炉心冷却失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(2)
	高压炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(3)
	崩壊熱除去失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(4)
	高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(5)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+崩壊熱除去失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(6)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗+崩壊熱除去失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(7)
	原子炉停止失敗	○	○ <sup>*1</sup>	—	(8)
外部電源喪失	交流電源 (DG-A, B) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗	○	○ <sup>*2</sup>	—	(9)
	交流電源 (DG-A, B) 失敗+圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗	○	○ <sup>*3</sup>	—	(10)
	交流電源 (DG-A, B) 失敗+高压炉心冷却失敗	○	○ <sup>*4</sup>	—	(11)
	直流電源 (区分1, 2) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗	○	○ <sup>*5</sup>	—	(12)
	交流電源 (DG-A, B) 失敗	○	—	—	(13)
	交流電源 (DG-A, B) 失敗+圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗	○	—	—	(14)
	直流電源 (区分1, 2) 失敗	○	—	—	(15)
	交流電源・補機冷却系喪失+原子炉停止失敗	—	○	—	(16)
手動停止	高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	○	—	—	(17)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗+低压炉心冷却失敗	○	—	—	(18)
	高压炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	○	—	—	(19)
	崩壊熱除去失敗	○	—	—	(20)
	高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(21)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(22)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(23)
サポート系喪失	高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	○	—	—	(24)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗+低压炉心冷却失敗	○	—	—	(25)
	高压炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	○	—	—	(26)
	崩壊熱除去失敗	○	—	—	(27)
	高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(28)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(29)
	圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗+高压炉心冷却 (HPCS) 失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(30)
冷却材喪失 (大破断LOCA)	高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	○	—	—	(31)
	崩壊熱除去失敗	○	—	—	(32)
	高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(33)
	原子炉停止失敗	○	—	—	(34)
冷却材喪失 (中破断LOCA)	高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	○	—	—	(35)
	高压炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	○	—	—	(36)
	崩壊熱除去失敗	○	—	—	(37)
	高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(38)
	原子炉停止失敗	○	—	—	(39)
冷却材喪失 (小破断LOCA)	高压炉心冷却失敗+低压炉心冷却失敗	○	—	—	(40)
	高压炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	○	—	—	(41)
	崩壊熱除去失敗	○	—	—	(42)
	高压炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	○	—	—	(43)
	原子炉停止失敗	○	—	—	(44)
インターフェイスシステムLOCA	格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)	○	—	—	(45)
地震に伴う損傷	Excessive LOCA	—	○	—	(46)
	計装・制御系喪失	—	○	—	(47)
	格納容器バイパス	—	○	—	(48)
	原子炉格納容器損傷	—	○	—	(49)
	原子炉圧力容器損傷	—	○	—	(50)
	原子炉建物損傷	—	○	—	(51)
	制御室建物損傷	—	○	—	(52)
	廃棄物処理建物損傷	—	○	—	(53)
津波に伴う損傷	直接炉心損傷に至る事象	—	—	○	(54)

※1 地震レベル1 PRAでは、過渡事象は外部電源喪失で代表。

※2 地震レベル1 PRAにおける事故シーケンス「外部電源喪失+交流電源・補機冷却系喪失」が該当。

※3 地震レベル1 PRAにおける事故シーケンス「外部電源喪失+交流電源・補機冷却系喪失+圧力バウンダリ健全性 (SRV再開) 失敗」が該当。

※4 地震レベル1 PRAにおける事故シーケンス「外部電源喪失+交流電源・補機冷却系喪失+高压炉心冷却失敗」が該当。

※5 地震レベル1 PRAにおける事故シーケンス「外部電源喪失+直流電源喪失」が該当。

第1-6表 PRAの結果に基づく新たな事故シナリオグループの検討

シナリオ No.	事故シナリオ	事故シナリオ別の炉心損傷頻度 (1/炉年)				全炉心損傷頻度に対する寄与割合 (%)	PRAにおける分類結果	解釈1-1(a)の事故シナリオグループ	事故シナリオグループ頻度 (1/炉年)	全炉心損傷頻度に対する寄与割合 (%)	解釈1-2との対応
		内部事象	地震	津波	合計						
1	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	3.0E-09	9.2E-07	-	9.2E-07	6.4	T Q U V	高圧・低圧注水機能喪失	9.4E-07	6.5	(a)
	過渡事象+圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗+高圧炉心冷却失敗	3.4E-11	1.4E-08	-	1.4E-08	<0.1					
	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	4.7E-13	-	-	4.7E-13	<0.1					
	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	1.5E-13	-	-	1.5E-13	<0.1					
	サブポート系喪失+高圧炉心冷却失敗	2.3E-10	-	-	2.3E-10	<0.1					
	サブポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	4.0E-12	-	-	4.0E-12	<0.1					
	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	4.0E-09	1.0E-07	-	1.1E-07	0.8					
	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	5.7E-13	-	-	5.7E-13	<0.1					
	サブポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	1.1E-09	-	-	1.1E-09	<0.1					
	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗	2.7E-09	2.0E-06	-	2.0E-06	14					
	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗	8.2E-12	1.5E-08	-	1.5E-08	0.1					
	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗	1.4E-06	-	-	1.4E-06	9.6					
	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗	3.8E-12	5.8E-09	-	5.8E-09	<0.1					
	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	4.5E-06	1.1E-06	-	5.7E-06	40					
	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	1.7E-11	4.2E-07	-	4.2E-07	2.9					
	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.3E-08	3.2E-09	-	3.6E-08	0.3					
過渡事象+圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗+高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗+原子炉減圧失敗	3.6E-11	4.4E-09	-	4.4E-09	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	1.2E-08	-	-	1.2E-08	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	1.1E-14	-	-	1.1E-14	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.1E-11	-	-	3.1E-11	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	1.7E-14	-	-	1.7E-14	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	1.2E-06	-	-	1.2E-06	8.3						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	1.4E-10	-	-	1.4E-10	<0.1						
サブポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.8E-09	-	-	3.8E-09	<0.1						
サブポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.7E-12	-	-	3.7E-12	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	5.4E-09	-	-	5.4E-09	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.1E-14	-	-	3.1E-14	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.6E-09	-	-	3.6E-09	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.8E-12	-	-	3.8E-12	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.6E-10	-	-	3.6E-10	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	3.7E-13	-	-	3.7E-13	<0.1						
過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	4.4E-07	-	-	4.4E-07	3.1						
外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗	1.3E-09	-	-	1.3E-09	<0.1						
外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗	6.3E-10	-	-	6.3E-10	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	6.4E-10	3.3E-07	-	3.3E-07	2.3						
過渡事象+原子炉停止失敗	8.7E-13	-	-	8.7E-13	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	5.8E-13	-	-	5.8E-13	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	5.8E-14	-	-	5.8E-14	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	5.2E-07	-	-	5.2E-07	3.6						
過渡事象+原子炉停止失敗	2.8E-15	-	-	2.8E-15	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	5.7E-15	-	-	5.7E-15	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	3.5E-13	-	-	3.5E-13	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	3.9E-14	-	-	3.9E-14	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	3.4E-14	-	-	3.4E-14	<0.1						
過渡事象+原子炉停止失敗	3.3E-09	-	-	3.3E-09	<0.1						
格納容器バイパス (インターフェイシステムLOCA)	-	-	-	-	<0.1	I S L O C A	格納容器バイパス (インターフェイシステムLOCA)	3.3E-09	<0.1	(b)	
Excessive LOCA#1	-	4.2E-07	-	4.2E-07	2.9						
計装・制御系喪失#1	-	1.5E-07	-	1.5E-07	1.0						
格納容器バイパス#1	-	3.5E-09	-	3.5E-09	<0.1						
原子炉格納容器損傷#1	-	3.4E-07	-	3.4E-07	2.4						
原子炉圧力容器損傷#1	-	1.7E-07	-	1.7E-07	1.2						
原子炉建物損傷#1	-	3.1E-08	-	3.1E-08	0.2						
原子炉建物損傷#1	-	1.4E-08	-	1.4E-08	<0.1						
廃棄物処理建物損傷#1	-	1.8E-10	-	1.8E-10	<0.1						
直接炉心損傷に至る事象#1	-	1.2E-07	-	1.2E-07	0.8						
合計	6.2E-06	7.9E-06	1.2E-07	1.4E-05	100						

※1 解釈1-1(a)の必ず想定する事故シナリオグループに該当しないが、安全機能喪失時の対策の有効性を評価するためのシナリオとしては適当でないが判断し、新たに追加する事故シナリオとしないこととした事故シナリオ。

第1-7表 事故シークエンスグループの主要な炉心損傷防止対策と炉心損傷頻度

シークエンスグループ	事故シークエンス	対応する主要な炉心損傷防止対策	事故シークエンス別の炉心損傷頻度 (ノブ年)	全炉心損傷頻度に対する寄与割合 (%)	事故シークエンスグループ別炉心損傷頻度 (ノブ年)	全炉心損傷頻度に対する寄与割合 (%)	備考*
解熱の事故シークエンスグループ	高圧・低圧注水機能喪失	過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	3.0E-09	9.2E-07	6.4	9.4E-07	6.5
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	3.4E-11	1.4E-08	<0.1		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	4.7E-13	4.7E-13	<0.1		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	1.5E-13	1.5E-13	<0.1		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	2.3E-10	2.3E-10	<0.1		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	4.0E-12	4.0E-12	<0.1		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	4.0E-09	1.0E-07	0.8		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	5.7E-13	5.7E-13	<0.1		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	1.1E-09	1.1E-09	<0.1		
		過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	2.7E-09	2.0E-06	14		
全交流動力電源喪失	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	8.2E-12	1.5E-08	0.1	3.4E-06	24
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.2E-11	1.4E-06	9.6		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.8E-12	5.8E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	4.5E-06	1.1E-06	40		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.7E-11	4.2E-07	2.9		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-08	3.2E-09	0.3		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.6E-11	4.4E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.2E-08	1.2E-08	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.1E-11	1.1E-14	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.7E-14	1.7E-14	<0.1		
加熱除去機能喪失	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.4E-10	1.4E-10	<0.1	7.8E-06	54
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.2E-06	1.2E-06	8.3		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.8E-09	3.8E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.7E-12	3.7E-12	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	5.4E-09	5.4E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.1E-14	3.1E-14	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.6E-09	3.6E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.8E-12	3.8E-12	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.6E-10	3.6E-10	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.7E-13	3.7E-13	<0.1		
原子炉停止機能喪失	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.3E-09	1.3E-09	<0.1	8.5E-07	6.0
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	6.3E-10	6.3E-10	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-07	3.3E-07	2.3		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	8.7E-13	8.7E-13	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	5.8E-13	5.8E-13	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	5.8E-14	5.8E-14	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	5.2E-07	5.2E-07	3.6		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	2.8E-15	2.8E-15	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	5.7E-15	5.7E-15	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.5E-13	3.5E-13	<0.1		
L.OCA時注水機能喪失	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.9E-14	3.9E-14	<0.1	4.3E-13	<0.1
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.4E-14	3.4E-14	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-09	3.3E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	6.2E-06	6.2E-06	91		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	1.3E-05	1.3E-05	91		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-09	3.3E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-09	3.3E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-09	3.3E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-09	3.3E-09	<0.1		
		外部電源喪失+交流電源 (DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却 (HPPCS) 失敗	3.3E-09	3.3E-09	<0.1		

\* 100%には第1-6表で除外した事故シークエンスの炉心損傷頻度も含まれる。 ※2 原子炉圧力の変化の不確かさによって炉心損傷防止の成否が変動する可能性があるシークエンス。 ※3 信号処理の余裕時間の観点から、炉心損傷防止の不確かさが発生する可能性があるシークエンス。 ※4 地震発生と同時に最大の地震加速度を受けるとして評価している地震レベル1 PRAの想定上提出されたものであるが、地震時の挙動を現実的に想定すると、基準地震動よりも十分小規模な地震でシークエンスが実行されることが考えられることから、現実的には厳しめに考慮し、炉心損傷防止対策の有効性を確認する対象に該当しない。 ※5 国内外の先進的な対策を考慮しても炉心損傷防止対策を講じているシークエンス。 ※6 有別評価の対象から除外した事故シークエンスを91%から除いたときに炉心損傷防止対策でカバーされる割合。

# 第1-8表 重要事故シナリオ等の選定 (1 / 3)

解題の事故シナリオグループ	事故シナリオ等 <sup>※1</sup>	喪失した機能	対応する主要な炉心損傷防止対策 (下線は有効性を確認する主な対策)	着眼点との関係と重要事故シナリオ選定の考え方 備考 (a: 共通原因故障 <sup>※2</sup> 又は系統間機軸依存性, b: 余裕時間, c: 設備容量, d: 代表性)							選定した重要事故シナリオと選定理由
				a	b	c	d				
				高	高	高	高				
高圧・低圧注水機能喪失	◎ ①過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高圧炉心炉代替注水系</li> <li>・低圧炉心炉代替注水系(常設)</li> <li>・SRVの手動操作</li> <li>・格納容器代替システム系(可搬型)</li> <li>・格納容器システム系</li> <li>・常設代替交流電源設備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高圧炉心炉代替注水系</li> <li>・低圧炉心炉代替注水系</li> <li>・高圧注水機能</li> <li>・低圧注水機能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高圧炉心炉代替注水系</li> <li>・SRVの手動操作</li> <li>・格納容器代替システム系</li> <li>・常設代替交流電源設備</li> </ul>	中	高	高	高	高	<p>a. 主要な事故シナリオのカットセットに共通原因故障が含まれている事故シナリオを「中」とした。その上でサブポート系喪失(1系統)は、起因事象の時点で系統間の機能の依存性によって同区分の複数の設備が機能喪失することから、「高」とした。</p> <p>b. 過渡事象(全給水喪失事象)は原子炉水位低(レベル3)が事象進展の起点となるため、通常水位から原子炉停止に至る手動停止、サブポート系喪失と比較して事象進展が早い。このため過渡事象を起因とする事故シナリオを「高」とした。手動停止に至る過渡事象より事象進展が遅いため、水位の低下後に原子炉炉心冷却停止に必要の余裕が安全弁の容量が少なく、低圧注水が可能となるまでの時間が短縮でき、対応が容易になることから「低」とし、SRV再開失敗を含まない場合を「高」とした。</p> <p>d. 事故シナリオグループの中で最も炉心損傷傾向の高い事故シナリオ(ドミナントシナリオ)を「高」とした。また、ドミナントシナリオに対して1%未満の事故シナリオを「低」とし、「高」と「低」の間の事故シナリオを「中」とした。</p>	
	—				②過渡事象+圧力バウンダリ健全性(SRV再開)失敗+高圧炉心冷却(HPCS)失敗+低圧炉心冷却失敗	中	高	低	中		<p>a. ③ではサブポート系1区分の喪失を起因としているが、他の区分は健全であるため、対応手段が著しく制限される状態ではない。</p> <p>b. c. 向着眼点について「高」と考えた事故シナリオとして①を抽出。</p> <p>d. 順位の観点では①が支配的となった。</p>
	—				③手動停止+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	中	低	高	低		
	—				④手動停止+圧力バウンダリ健全性(SRV再開)失敗+高圧炉心冷却(HPCS)失敗+低圧炉心冷却失敗	中	低	低	低		
	—				⑤サブポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	高	低	高	低		
	—				⑥サブポート系喪失+圧力バウンダリ健全性(SRV再開)失敗+高圧炉心冷却(HPCS)失敗+低圧炉心冷却失敗	高	低	低	低		
高圧注水・減圧機能喪失	◎ ①過渡事象+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	<ul style="list-style-type: none"> <li>・代替自動減圧機能</li> <li>・高圧原子炉代替注水系</li> <li>・残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>・残留熱除去系(サブプレッジョン・プール水冷却モード)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高圧注水機能</li> <li>・原子炉減圧機能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・代替自動減圧機能</li> <li>・高圧原子炉代替注水系</li> <li>・残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>・残留熱除去系(サブプレッジョン・プール水冷却モード)</li> </ul>	中	高	高	高	<p>a. ③ではサブポート系1区分の喪失を起因としているが、他の区分は健全であるため、対応手段が著しく制限される状態ではない。</p> <p>b. c. 向着眼点について「高」と考えた事故シナリオとして①を抽出。</p> <p>d. 順位の観点では①が支配的となった。</p>		
	—				②手動停止+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	中	低	低		低	
	—				③サブポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	高	低	低		中	

※1 ◎は選定した重要事故シナリオを示す

※2 地震レベルI P R Aでは多重化された機器を完全冗置としていることから、多重化された機器の損傷が生じるカットセットでは共通原因故障が生じるものとした。

第1-8表 重要事故シナリオ等の選定 (2 / 3)

解釈の事故シナリオグループ	詳細化した事故シナリオグループ	事故シナリオ*1	喪失した機能		対応する主要な炉心損傷防止対策 (下線は有効性を確認する主な対策)	着眼点との関係と重要事故シナリオ選定の考え方				選定した重要事故シナリオと選定理由					
			電源	冷却機能		a	b	c	d						
全交流動力電源喪失	長期T B	①外部電源喪失+交流電源(DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却(HPCS) 失敗	交流動力電源	原子炉隔離時冷却系(RCIC)を除く注水・除熱機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>低圧原子炉代替注水系(可搬型)</li> <li>格納容器代替スプレイス系(可搬型)</li> <li>残留熱除去系(格納容器冷却モード)</li> </ul>	-	-	-	-	①を重要事故シナリオとして選定。	各重要事故シナリオそれぞれに対し、地震レベル1 PRAからは、全交流動力電源と最終ヒートシンク喪失の重量を伴う事故シナリオも抽出されるが、全交流動力電源喪失時には、最終ヒートシンクの機能を有する設備も電源喪失によって機能喪失に至るため、地震による損傷の有無にかかわらず最終ヒートシンクの喪失に伴う最終ヒートシンクの復旧について、電源供給に違いが表れると考えられ、設備損傷によって最終ヒートシンクの機能喪失が生じている場合の方が緩和手段は少なくなる。ただし、設備損傷においても格納容器フィルタメント系による除熱が可能であり、交流電源の復旧によって最終ヒートシンクの機能を復旧可能な場合には、これに加えて原子炉補機代替冷却系の有効性を確認することができ、これを考慮し、重要事故シナリオには、設備損傷による最終ヒートシンクの喪失を設定していない。				
										①外部電源喪失+交流電源(DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却(HPCS) 失敗		交流動力電源	すべての注水・除熱機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>低圧原子炉代替注水系(可搬型)</li> <li>格納容器代替スプレイス系(可搬型)</li> <li>残留熱除去系(格納容器冷却モード)</li> </ul>	①を重要事故シナリオとして選定。
										①外部電源喪失+交流電源(DG-A, B) 失敗+高圧炉心冷却(HPCS) 失敗		交流動力電源	すべての注水・除熱機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉隔離時冷却系(動作可能な範囲に原子炉圧力が保たれる間)</li> <li>高圧原子炉代替注水系(動作可能な範囲に原子炉圧力が保たれる間)</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>低圧原子炉代替注水系(可搬型)</li> <li>格納容器代替スプレイス系(可搬型)</li> <li>残留熱除去系(格納容器冷却モード)</li> </ul>	①を重要事故シナリオとして選定。
	T B D	①外部電源喪失+直流通電源(区分1, 2) 失敗+高圧炉心冷却(HPCS) 失敗	全交流動力電源 直流通電源	すべての注水・除熱機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>低圧原子炉代替注水系(可搬型)</li> <li>格納容器代替スプレイス系(可搬型)</li> <li>常設代替直流通電源設備</li> <li>残留熱除去系(格納容器冷却モード)</li> </ul>	①を重要事故シナリオとして選定。	①を重要事故シナリオとして選定。	①を重要事故シナリオとして選定。	①を重要事故シナリオとして選定。	抽出された事故シナリオが1つであることから着眼点に照らした整理は行わず、すべての着眼点について「-」とした。					

※1 ①は選定した重要事故シナリオを示す。

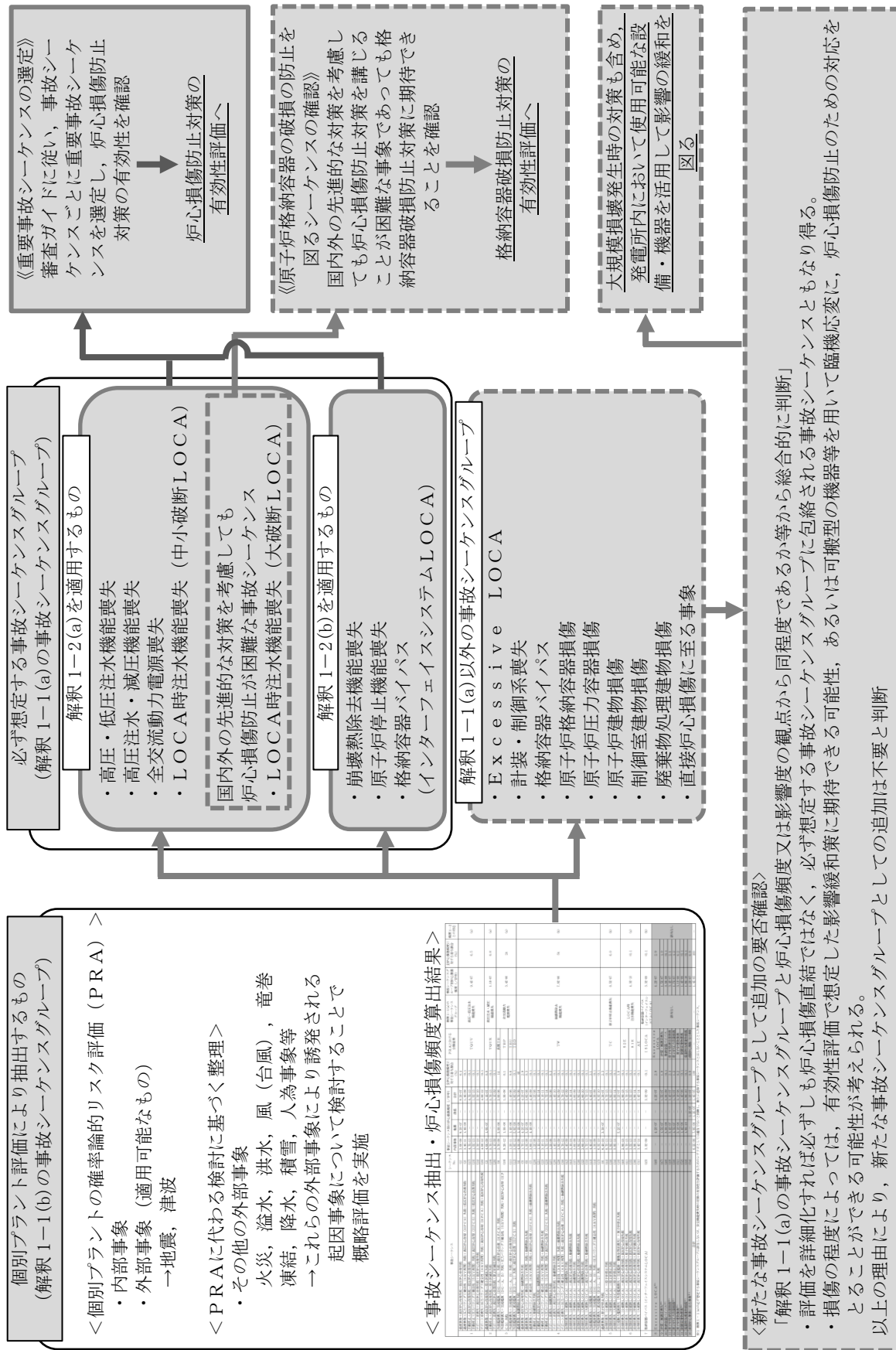
※2 地震レベル1 PRAでは多重化された機器を完全信頼としていることから、多重化された機器の損傷が生じるカットセットでは共通原因故障が生じるものとした。

※3 蒸気駆動の注水系が動作できない範囲に原子炉圧力が低下するまでは、原子炉隔離時冷却系を用いることで原子炉水位を維持することができる。

※4 すべての直流通電源喪失により非常用ディーゼル発電機を起動できなくなることから、「外部電源喪失+直流通電源(区分1, 2) 失敗+高圧炉心冷却(HPCS) 失敗」により、全交流動力電源喪失となる。







第 1-1 図 事故シナリオグループ抽出及び重要事故シナリオ選定の全体プロセス

過渡事象	原子炉停止	圧力バウンダリ健全性	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	事故シナリオ	事故シナリオグループ	シナリオ No.
							炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
							過渡事象 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(4)
							炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
							過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(5)
							過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失	(1)
							過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗	高圧注水・減圧機能喪失	(3)
							炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
							過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(6)
							炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
							過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性失敗 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(7)
							過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性失敗 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失	(2)
							過渡事象 + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失	(8)

外部電源喪失	直流電源	交流電源	圧力バウンダリ健全性	高圧炉心冷却	事故シナリオ	事故シナリオグループ	シナリオ No.
					過渡事象へ	過渡事象へ	-
					外部電源喪失 + 交流電源失敗	全交流動力電源喪失* 崩壊熱除去機能喪失	(9) (13)
					外部電源喪失 + 交流電源失敗 + 高圧炉心冷却失敗	全交流動力電源喪失	(11)
					外部電源喪失 + 交流電源失敗 + 圧力バウンダリ健全性失敗	崩壊熱除去機能喪失	(14)
					外部電源喪失 + 交流電源失敗 + 圧力バウンダリ健全性失敗 + 高圧炉心冷却失敗	全交流動力電源喪失	(10)
					外部電源喪失 + 直流電源失敗	崩壊熱除去機能喪失	(15)
					外部電源喪失 + 直流電源失敗 + 高圧炉心冷却失敗	全交流動力電源喪失	(12)

※ 高圧炉心スプレイス系が成功した事故シナリオを「崩壊熱除去機能喪失」、高圧炉心スプレイス系に失敗し原子炉隔離時冷却系が成功した事故シナリオを「全交流動力電源喪失」に分類

第1-2図 内部事象運転時レベル1 PRAイベントツリー (1/3)

手動停止 サブオート系喪失	圧力バウンダリ 健全性	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	事故シナシ	事故シナシ グループ	シナシ No.
手動停止 サブオート系喪失	圧力バウンダリ 健全性	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
						手動停止/サブオート系喪失+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(20), (27)
						炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
						手動停止/サブオート系喪失+高圧炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(21), (28)
						手動停止/サブオート系喪失+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失	(17), (24)
						手動停止/サブオート系喪失+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗	高圧注水・減圧機能喪失	(19), (26)
						炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
						手動停止/サブオート系喪失+圧力バウンダリ健全性失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(22), (29)
						炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
						手動停止/サブオート系喪失+圧力バウンダリ健全性失敗+高圧炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(23), (30)
手動停止/サブオート系喪失+圧力バウンダリ健全性失敗+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失	(18), (25)						

第1-2図 内部事象運転時レベル1 PRAイベントツリー(2/3)

冷却材喪失 (LOCA)	原子炉停止	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	事故シケケンス	事故シケケンスグループ	シケケンス No.
						炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(32)
						冷却材喪失 (中破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(37)
						冷却材喪失 (小破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(42)
						炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(33)
						冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(38)
						冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(43)
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	LOCA時注水機能喪失	(31)
						冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	LOCA時注水機能喪失	(35)
						冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	LOCA時注水機能喪失	(40)
						冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗	LOCA時注水機能喪失	(36)
						冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗	LOCA時注水機能喪失	(41)
						冷却材喪失 (大破断LOCA) + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失	(34)
						冷却材喪失 (中破断LOCA) + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失	(39)
						冷却材喪失 (小破断LOCA) + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失	(44)

インターフェイス システムLOCA	運転員による隔離操作	事故シケケンス	事故シケケンスグループ	シケケンス No.
		手動停止/サポータ系喪失へ	手動停止/サポータ系喪失へ	-
		格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)	格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)	(45)

第1-2図 内部事象運転時レベル1 PRAイベントツリー(3/3)

地震	外部電源喪失	原子炉建物損傷	原子炉格納容器損傷	原子炉圧力容器損傷	格納容器パイパス	冷却材喪失(E-LOCA <sup>※1</sup> )	制御室建物損傷	廃棄物処理建物損傷	計装・制御系喪失	直流電源喪失	交流電源・補機冷却系喪失	事故シナリオ	事故シナリオグループ	シナリオ No.
												炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
	外部電源喪失											外部電源喪失	外部電源喪失へ	-
		原子炉建物損傷										外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失	全交流動力電源喪失へ	-
			原子炉格納容器損傷									外部電源喪失 + 直流電源喪失	全交流動力電源喪失	(12)
				原子炉圧力容器損傷					計装・制御系喪失			計装・制御系喪失	※2	(47)
					格納容器パイパス			廃棄物処理建物損傷				廃棄物処理建物損傷	※2	(53)
						冷却材喪失(E-LOCA <sup>※1</sup> )		制御室建物損傷				制御室建物損傷	※2	(52)
							原子炉建物損傷					Excessive LOCA	※2	(46)
				原子炉圧力容器損傷								格納容器パイパス	※2	(48)
			原子炉格納容器損傷									原子炉圧力容器損傷	※2	(50)
												原子炉格納容器損傷	※2	(49)
												原子炉建物損傷	※2	(51)

※1 Excessive LOCA

※2 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結で整理

第1-3 図 地震レベル1 PRA階層イベントツリー

外部電源喪失	原子炉停止	S R V 開	S R V 再閉鎖	高圧炉心冷却	原子炉減圧	低圧炉心冷却	崩壊熱除去	事故シナリオ	事故シナリオグループ	シナリオ No.
								炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
								外部電源喪失 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(4)
								炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
								外部電源喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(5)
								外部電源喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失	(1)
								外部電源喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗	高圧注水・減圧機能喪失	(3)
								炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
								外部電源喪失 + S R V 再閉鎖失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(6)
								炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
								外部電源喪失 + S R V 再閉鎖失敗 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗	崩壊熱除去機能喪失	(7)
								外部電源喪失 + S R V 再閉鎖失敗 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	高圧・低圧注水機能喪失	(2)
								Excessive LOCA	※	(46)
								外部電源喪失 + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失	(8)

※ 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結で整理

第1-4図 地震レベル1 PRA イベントツリー (1/2)

全交流動力 電源喪失	原子炉停止	S R V 開	S R V 再閉鎖	高圧炉心冷却	事故シーケンス	事故シーケンス グループ	シーケンス No.
					外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失	全交流動力電源喪失	(9)
					外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + 高圧炉心冷却失敗	全交流動力電源喪失	(11)
					外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + S R V 再閉鎖失敗	全交流動力電源喪失	(10)
					Excessive LOCA	※	(46)
					外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + 原子炉停止失敗	原子炉停止機能喪失	(16)

※ 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結で整理

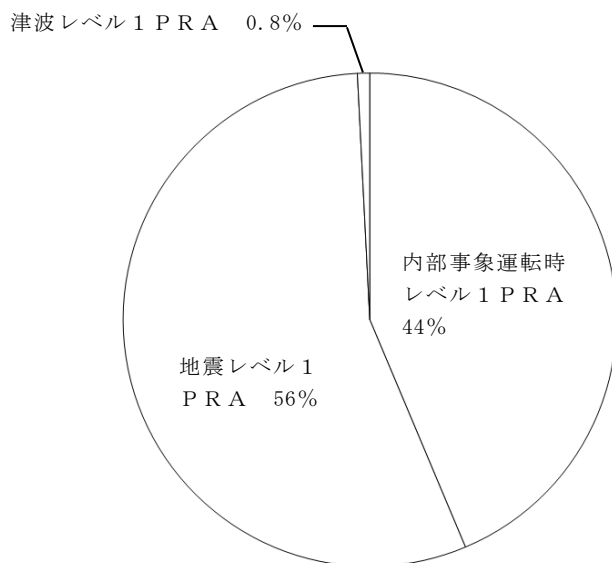
第1-4図 地震レベル1 PRAイベントツリー (2/2)

津波	直接炉心損傷に至る事象	事故シケケンス	最終状態	シケケンス No.
	津波高さ E L 20m 以下	炉心損傷なし	炉心損傷なし	-
	津波高さ E L 20m 超過	直接炉心損傷に至る事象	※	(54)

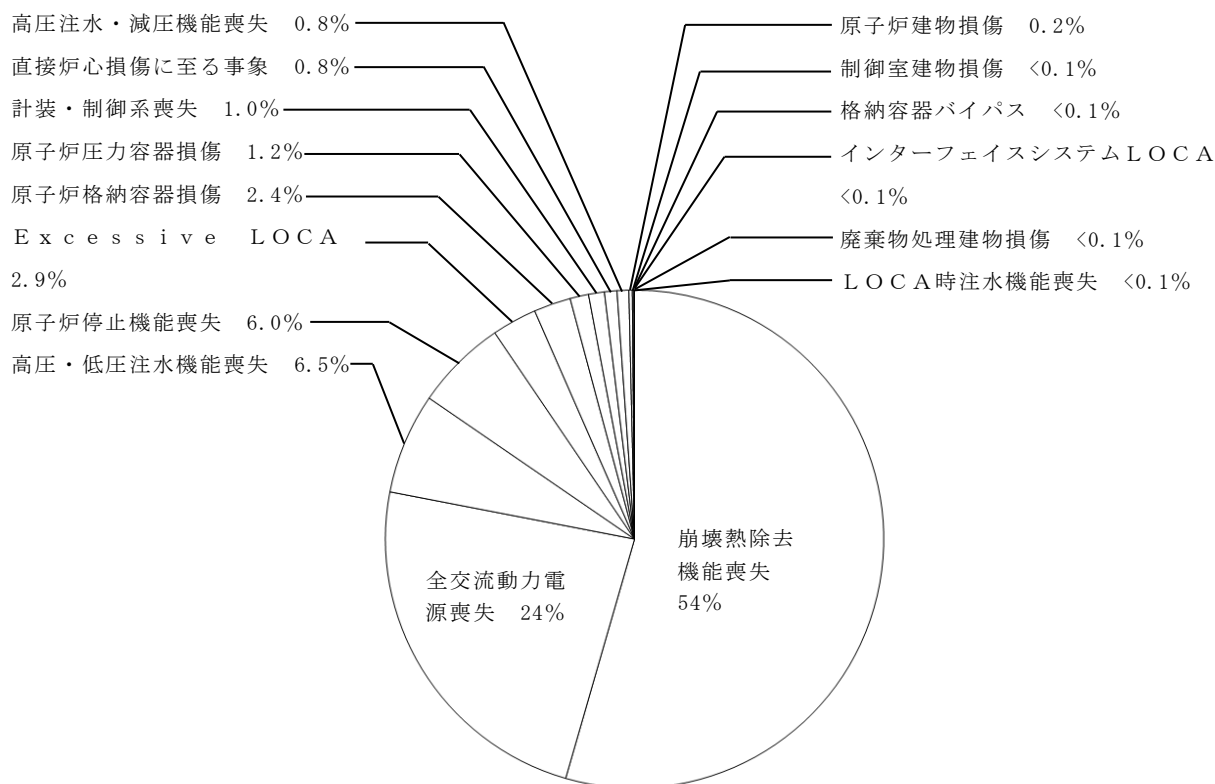
※ 緩和設備の広範な喪失につながる可能性があるため、炉心損傷直結事象として整理

第1-5 図 津波レベル1 P R A階層イベントツリー





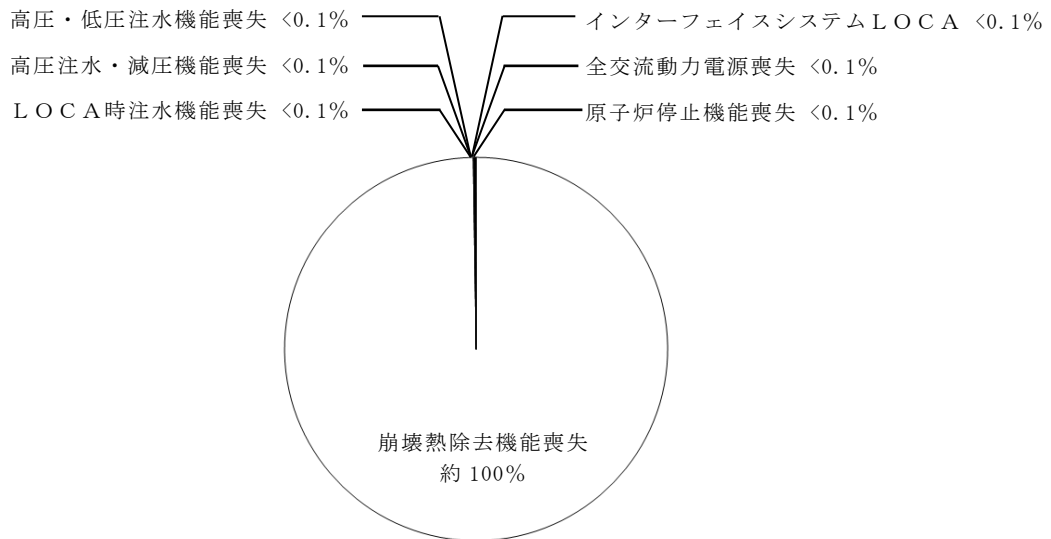
### 事象別



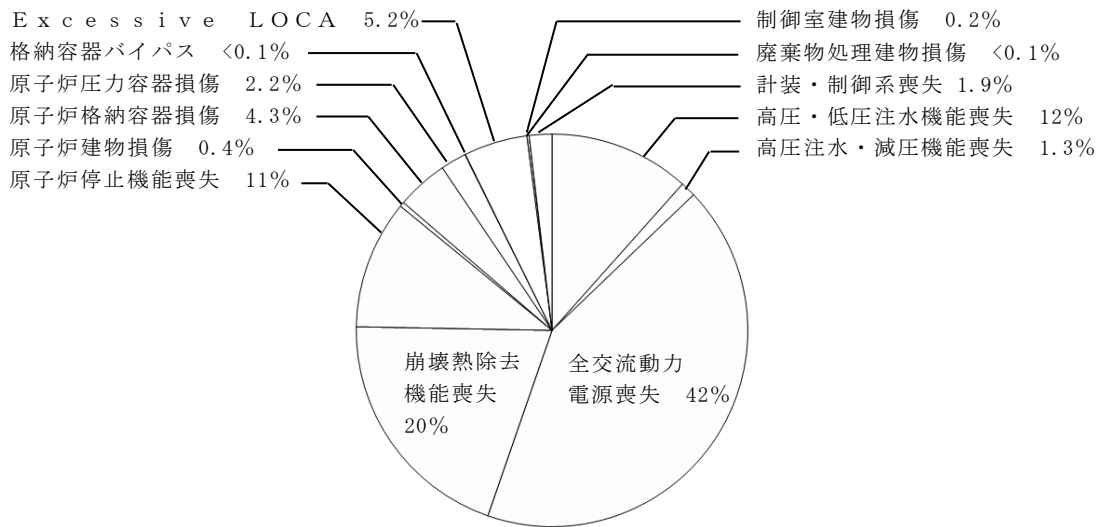
### 事故シーケンスグループ別

全炉心損傷頻度：1.4E-05／炉年

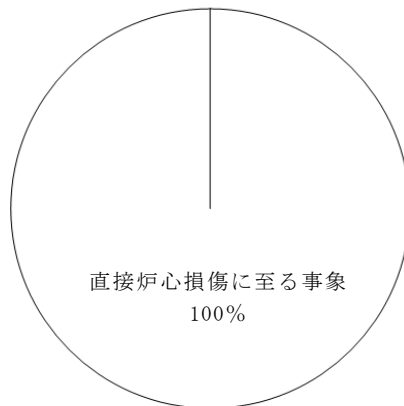
第1-6図 プラント全体の炉心損傷頻度



内部事象運転時レベル 1 P R A  
 (炉心損傷頻度：6.2E-06/炉年)



地震レベル 1 P R A  
 (炉心損傷頻度：7.9E-06/炉年)



津波レベル 1 P R A  
 (炉心損傷頻度：1.2E-07/炉年)

第1-7図 各 P R A の結果と事故シーケンスグループごとの寄与割合

## 2. 格納容器破損防止対策の有効性評価における格納容器破損モード及び評価事故シーケンスの選定について

格納容器破損防止対策の有効性評価の格納容器破損モード及び評価事故シーケンス選定の全体プロセスを第2-1図に示す。また、以下に各検討ステップにおける実施内容を整理した。

### 【概要】

- ① 内部事象運転時レベル1.5 P R A及びP R Aを適用できない外部事象に係る定性的検討から格納容器破損モードを抽出し、解釈の記載との比較検討・分類を実施した。
- ② 抽出された格納容器破損モードのうち、炉心損傷発生時点で原子炉格納容器の機能に期待できない格納容器バイパス、格納容器先行破損に該当するものは、解釈1-2(b)に基づき炉心損傷防止対策の有効性評価の対象とした。
- ③ 国内外で得られている知見や実プラントでの運用等も踏まえた検討を行い、新たに追加すべき格納容器破損モードの可否を検討した。
- ④ 格納容器破損モードごとに格納容器破損モード発生の観点で厳しいプラント損傷状態（以下「P D S」という。）を選定し、その中で厳しい事故シーケンスを検討し、格納容器破損防止対策の有効性評価の評価事故シーケンスとして選定した。

### 2.1 格納容器破損モードの分析について

解釈には、格納容器破損防止対策の有効性評価に係る格納容器破損モードの選定の個別プラント評価による抽出に関し、以下のとおりに示されている。

#### 2-1

##### (a) 必ず想定する格納容器破損モード

- ・ 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧・過温破損）
- ・ 高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱
- ・ 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用
- ・ 水素燃焼
- ・ 格納容器直接接触（シェルアタック）
- ・ 溶融炉心・コンクリート相互作用

##### (b) 個別プラント評価により抽出した格納容器破損モード

- ① 個別プラントの内部事象に関するP R A及び外部事象に関するP R A（適用可能なもの）又はそれに代わる方法で評価を実施すること。
- ② その結果、上記2-1(a)の格納容器破損モードに含まれない有意な頻度又は影響をもたらす格納容器破損モードが抽出された場合には、想定する格納容器破損モードとして追加すること。

上記2-1(b)①に基づき、内部事象運転時レベル1.5 P R Aを実施し、格納容器破損モードを評価した。

外部事象については、地震レベル1.5 P R Aは原子炉建物、原子炉格納容器等の損傷から原子炉格納容器の閉じ込め機能喪失に至る過程の不確かさが大きく、定量評価結果の活用には損傷箇所、損傷モード等の精緻化の検討が必要な段階であるため、現段階では事故シーケンス選定の検討に適用しないこととした。

また、P R Aの適用が困難と判断した外部事象については定性的な検討により発生する格納容器破損モードの分析を行った。

実施した格納容器破損モード抽出に係る分析結果を以下に示す。

### 2.1.1 格納容器破損モードの抽出、整理

#### (1) P R Aに基づく整理

内部事象運転時レベル1.5 P R Aを実施し、事故の進展に伴い生じる原子炉格納容器の健全性に影響を与える負荷の分析から、以下の①～⑫に示す格納容器破損モードの抽出を行った。

具体的には第2-2図のとおり、炉心損傷前、原子炉圧力容器破損前、原子炉圧力容器破損直後、原子炉圧力容器破損以降の各プラント状態に分類し、それぞれの状態で発生する負荷を抽出している。また、事故進展中に実施される緩和手段等を考慮し、第2-3図に示す格納容器イベントツリーを作成し、原子炉格納容器の破損に至る格納容器破損モードを整理している。内部事象運転時レベル1.5 P R Aから抽出された格納容器破損モード及び定量化結果を第2-1表に示す。また、格納容器破損モードごとの格納容器破損頻度（以下「C F F」という。）への寄与割合を第2-4図に示す。

#### ① 早期過圧破損（未臨界確保失敗時の過圧）

原子炉停止失敗時に、炉心で発生した大量の水蒸気が原子炉格納容器へ放出され、格納容器圧力が早期に上昇して、原子炉格納容器が過圧破損に至る事象として分類する。

#### ② 水蒸気（崩壊熱）による過圧破損（炉心損傷前）

炉心の冷却が達成される中で、水蒸気の蓄積による準静的加圧で原子炉格納容器が炉心損傷前に破損する事象として分類する。

#### ③ 格納容器バイパス（インターフェイスシステム L O C A）

インターフェイスシステム L O C Aの発生により、原子炉格納容器をバイパスして原子炉冷却材が原子炉建物内に放出される事象として分類する。

#### ④ 格納容器バイパス（格納容器隔離失敗）

炉心が損傷した時点で、原子炉格納容器の隔離に失敗しており、原子炉格納容器の閉じ込め機能を喪失している事象として分類する。

- ⑤ 原子炉圧力容器内の水蒸気爆発  
高温の溶融炉心が下部プレナムの水中に落下して水蒸気爆発が発生し、その際の発生エネルギーによって原子炉圧力容器の蓋がミサイルとなって原子炉格納容器に衝突し、格納容器破損に至る事象として分類する。
- ⑥ 格納容器雰囲気直接加熱  
高压状態で原子炉圧力容器が破損した場合に、溶融炉心が原子炉格納容器の雰囲気中を飛散する過程で微粒子化し、雰囲気ガスとの直接的な熱伝達等による急激な加熱・加圧の結果、格納容器圧力が上昇し原子炉格納容器の破損に至る事象として分類する。
- ⑦ 原子炉圧力容器外の水蒸気爆発  
高温の溶融炉心が原子炉格納容器下部の水中に落下し、水蒸気爆発又は水蒸気による圧力スパイクが発生する可能性がある。このときに原子炉格納容器に付加される機械的エネルギーによって原子炉格納容器の破損に至る事象として分類する。
- ⑧ 格納容器直接接触  
原子炉圧力容器破損後に原子炉格納容器下部へ落下した溶融炉心が原子炉格納容器下部の床からその外側のドライウエルの床に拡がり、高温の溶融炉心がドライウエルの壁（バウンダリ）に接触してドライウエル壁の一部が溶融貫通し、原子炉格納容器の破損に至る事象として分類する。
- ⑨ 水蒸気（崩壊熱）による過圧破損（炉心損傷後）  
炉心損傷後に溶融炉心の冷却が達成される中で、崩壊熱によって発生する水蒸気によって原子炉格納容器が過圧され、破損に至る事象、又は、溶融炉心が冷却されない場合に、溶融炉心・コンクリート相互作用による非凝縮性ガスの発生が継続し、原子炉格納容器内が過圧されて原子炉格納容器の破損に至る事象として分類する。
- ⑩ 雰囲気圧力・温度による静的負荷（過温破損）  
原子炉圧力容器破損後、原子炉格納容器内で溶融炉心が冷却できない状態が継続した場合に、溶融炉心からの輻射及び対流によって原子炉格納容器の雰囲気が加熱され、原子炉格納容器の貫通部等が熱的に損傷し、原子炉格納容器の破損に至る事象として分類する。
- ⑪ 溶融炉心・コンクリート相互作用  
原子炉圧力容器の破損後、原子炉格納容器内に放出された溶融炉心が十分に冷却できない状態が継続した場合に、圧力容器ペDESTAL壁のコンクリートが侵食され、原子炉圧力容器支持機能の喪失により原子炉格納容器の破損に至る事象として分類する。
- ⑫ 水素燃焼  
原子炉格納容器内に酸素等の反応性のガスが混在していた場合にジルコニウム-水反応等によって発生した水素と反応して激しい燃焼が

生じ、原子炉格納容器の破損に至る事象として分類する。

(2) P R Aに代わる検討に基づく整理

地震、津波及びその他の外部事象等に対する格納容器破損モードについて、内部事象運転時レベル1.5 P R Aの知見等を活用して検討した結果、地震、津波及びその他の外部事象等についても、炉心損傷後の原子炉格納容器内の事象進展は内部事象と同等であると考えられることから、格納容器破損モードは内部事象と同等であり、今回、内部事象運転時レベル1.5 P R Aから選定した格納容器破損モードに追加すべきものはないものと判断した。（別紙1）

2.1.2 内部事象運転時レベル1.5 P R Aの定量化結果及び影響度を踏まえた格納容器破損モードの検討

第2-1表に示す格納容器破損モードについて、「2.1.1 格納容器破損モードの抽出、整理」に示すレベル1.5 P R Aから抽出された格納容器破損モードと解釈2-1(a)に示されている必ず想定する以下の格納容器破損モードとの対応について検討を行った。

2-1

(a) 必ず想定する格納容器破損モード

- ・ 雰囲気圧力・温度による静的負荷(格納容器過圧・過温破損)
- ・ 高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱
- ・ 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用
- ・ 水素燃焼
- ・ 格納容器直接接触(シェルアタック)
- ・ 溶融炉心・コンクリート相互作用

確認の結果、上記の必ず想定する格納容器破損モードに分類されない以下(1)～(4)の格納容器破損モードが抽出されたため、これを新たな格納容器破損モードとして追加することの可否について検討を実施した。

なお、必ず想定する格納容器破損モードのうち、格納容器直接接触※(シェルアタック)は、原子炉格納容器下部の床面とその外側のドライウエルの床面とが同じ高さに設計されているBWR Mark-I型の原子炉格納容器に特有の格納容器破損モードであり、島根原子力発電所2号炉のMark-I改良型の原子炉格納容器では、溶融炉心が原子炉格納容器バウンダリに直接接触することはない構造であることから、格納容器破損モードとして考慮しない。（別紙7）

※ 格納容器直接接触には、原子炉圧力容器が高圧の状態での破損した場合に、溶融炉心が急激に噴出し、噴出した溶融炉心が原子炉格納容器壁に接触しこれを侵食する事象が含まれる。本事象は、原子炉圧力容器の破損までに減圧することが対策であり「高圧溶融物放出／

格納容器雰囲気直接加熱」も対策が同一であることから、この事象に含まれると整理

また、島根原子力発電所2号炉では、運転中、原子炉格納容器内を窒素で置換し、酸素濃度を低く管理しているため、水素濃度及び酸素濃度が可燃限界に至る可能性が十分小さい。このため、本格格納容器破損モードはレベル1.5 P R Aの定量化において想定する格納容器破損モードからは除外した。一方、原子炉格納容器内の窒素置換及び可搬式窒素供給装置による原子炉格納容器内への窒素封入が水素燃焼の格納容器破損防止対策であることを踏まえ、対策の有効性として炉心の著しい損傷が起こるような重大事故時においても原子炉格納容器の雰囲気が水素の可燃限界以下（水素濃度がドライ条件に換算して4 vol%以下又は酸素濃度5 vol%以下）に維持できることを確認する必要があると考える。よって、水素燃焼については、有効性評価の評価対象とする格納容器破損モードとした。（別紙7）

(1) 早期過圧破損（未臨界確保失敗時の過圧）

本格格納容器破損モードは内部事象運転時レベル1.5 P R A評価上の格納容器破損モードとして抽出されたが、解釈の要求事項に「炉心の著しい損傷後の原子炉格納容器の機能に期待することが困難なもの（格納容器先行破損シーケンス、格納容器バイパス等）にあつては、炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認する。」と記載されており、炉心損傷防止対策の事故シーケンスグループ「原子炉停止機能喪失」にて有効性評価の対象としている。なお、当該格納容器破損モードのC F F（ $6.4 \times 10^{-10}$ /炉年）の全C F Fに対する寄与割合は0.1%未満である。

したがって、当該格納容器破損モードを個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして追加する必要はないと判断した。

(2) 水蒸気（崩壊熱）による過圧破損（炉心損傷前）

本格格納容器破損モードは内部事象運転時レベル1.5 P R A上の格納容器破損モードとして抽出されたが、解釈の要求事項に「炉心の著しい損傷後の原子炉格納容器の機能に期待することが困難なもの（格納容器先行破損シーケンス、格納容器バイパス等）にあつては、炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認する。」と記載されており、炉心損傷防止対策の事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」にて有効性評価の対象としている。なお、当該格納容器破損モードのC F F（ $6.2 \times 10^{-6}$ /炉年）の全C F Fに対する寄与割合は約100%である。

したがって、当該格納容器破損モードを個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして追加する必要はないと判断した。

(3) 格納容器隔離失敗及びインターフェイスシステムL O C A

これらの格納容器破損モードは、事象の発生と同時に原子炉格納容器

の隔離機能を喪失している事象であり、解釈の要求事項における「炉心の著しい損傷後の原子炉格納容器の機能に期待することが困難なもの(格納容器先行破損シーケンス、格納容器バイパス等)にあつては、炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認する。」に該当する事故シーケンスグループである。

このため、講じるべき対策は炉心損傷防止であり、これらの格納容器破損モードを個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして追加する必要はないと判断した。

以下に、格納容器隔離失敗及びインターフェイスシステムLOCAで想定した事象及び格納容器破損モードに追加する必要はないと判断した理由を示す。

#### a. 格納容器隔離失敗

本格納容器破損モードは炉心が損傷した時点で原子炉格納容器の隔離に失敗している事象を想定したものである。

格納容器隔離失敗は炉心損傷の発生に伴う物理的な現象に由来するものではなく、炉心損傷時点で原子炉格納容器が隔離機能を喪失している事象を示している。隔離機能喪失の原因として、ランダム要因による貫通部の機器の破損や人的過誤を考慮している。

現状の運転管理として原子炉格納容器内の圧力を日常的に監視しているほか、格納容器圧力について1日1回記録を採取していることから、格納容器隔離失敗に伴う大規模な漏えいが生じた場合、速やかに検知できる可能性が高いと考える。(別紙8)

今回実施した内部事象運転時レベル1.5PRAでは、国内BWRプラントの格納容器隔離失敗の実績がないことから、NUREG/CR-4220で評価された隔離失敗確率を固定分岐確率として設定し当該格納容器破損モードの格納容器破損頻度( $5.5 \times 10^{-11}$ /炉年、全CFFに対する寄与割合0.1%未満)を定量化した。国内の運転管理実績を考慮すれば、当該格納容器破損モードのCFFは更に小さくなると推測される。(別紙8)

以上、本事象は発生と同時に原子炉格納容器が隔離機能を喪失している事象であり、原子炉格納容器内で発生する物理化学現象を重大事故等対処設備を用いて抑制し、原子炉格納容器の機能喪失を防止することが対策とはならない。通常の運転管理において原子炉格納容器の状態を確認する運用とすることが対策であり、本格納容器破損モードにより格納容器隔離機能が喪失する頻度は十分に低く、本格納容器破損モードに至る前に炉心損傷を防止することが重要と考えることから、格納容器隔離失敗を個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして追加する必要はないと判断した。

また、格納容器隔離失敗については地震レベル1PRAにおいても



抽出されており，地震レベル1 P R Aでは，地震によって原子炉格納容器を貫通する高圧及び低圧設計の配管が原子炉格納容器外で破断する事象を想定している。

破断箇所や破断の程度の組合せを特定することは困難であり，本格格納容器破損モードについては，有効性評価の対象とすべき格納容器破損モードとして単独で定義するものではなく，発生する事象の程度や組合せに応じて対応していくべきものとする。また，地震レベル1 P R Aの評価から，本格格納容器破損モードにより格納容器隔離機能が喪失する頻度は十分に低いことを確認している。

この観点から，地震レベル1 P R Aで抽出された格納容器隔離失敗についても，個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして追加する必要はないと判断した。

#### b. インターフェイスシステム L O C A

本格格納容器破損モードは，発生と同時に原子炉格納容器の隔離機能は喪失しているものの，炉心損傷までには時間余裕のある事象である。対策としては炉心損傷の防止又は炉心損傷までに原子炉格納容器の隔離機能を復旧することが挙げられる。炉心損傷防止の観点では内部事象運転時レベル1 P R Aの結果から重要事故シーケンスとして抽出し，有効性評価の対象としている。

原子炉格納容器の隔離機能を復旧したものの，炉心損傷を防止できなかった場合，その後の事象進展は原子炉圧力容器内の状況に応じて，評価対象とした評価事故シーケンスに包絡されるものとする。

したがって，当該格納容器破損モードを個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして評価事故シーケンスに追加する必要はないと判断した。なお，当該格納容器破損モードの C F F ( $3.3 \times 10^{-9}$  / 炉年) の全 C F F に対する寄与割合は0.1%未満である。

#### (4) 原子炉圧力容器内での水蒸気爆発

本格格納容器破損モードについては各種研究により得られた知見から原子炉格納容器の破損に至る可能性は極めて低いと評価されており，国内においてもリスクの観点からは大きな影響がないものと認識されている。(別紙9)

したがって，当該格納容器破損モードを個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして評価事故シーケンスに追加する必要はないと判断した。

以上から，P R Aの知見等を踏まえて，格納容器破損防止対策の有効性評価において，追加すべき新たな格納容器破損モードはないことを確認した。

## 2.2 評価事故シーケンスの選定について

設置変更許可申請における格納容器破損防止対策の有効性評価の実施に際しては、格納容器破損モードごとに評価事故シーケンスを選定している。

評価事故シーケンス選定に当たっては、審査ガイド「3.2.3 格納容器破損モードの主要解析条件等」の各格納容器破損モードの主要解析条件に示されている、当該格納容器破損モードの観点で厳しいシーケンスの選定を考慮している。

### (1) 雰囲気圧力・温度による静的負荷

P R Aに基づく格納容器破損シーケンスの中から、過圧及び過温の観点で厳しいシーケンスを選定する。また、炉心損傷防止対策における「想定する事故シーケンスグループのうち炉心の著しい損傷後の原子炉格納容器の機能に期待できるもの」を包絡するものとする。

### (2) 高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱

P R Aに基づく格納容器破損シーケンスの中から、原子炉圧力が高く維持され、原子炉圧力容器破損までの余裕時間の観点で厳しいシーケンスを選定する。

### (3) 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用

P R Aに基づく格納容器破損シーケンスの中から、原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用の観点で厳しいシーケンスを選定する。

### (4) 水素燃焼

水素燃焼の観点で厳しいシーケンスを選定する。島根原子力発電所2号炉では、運転中、原子炉格納容器内を窒素で置換し、酸素濃度を低く管理しているため、水素濃度が可燃限界に至る可能性が十分小さいことから、本格納容器破損モードは内部事象運転時レベル1.5 P R Aの定量化において想定する格納容器破損モードから除外しているが、評価事故シーケンスとしては炉心損傷後の原子炉格納容器内の酸素濃度上昇の観点で厳しいシーケンスを選定する。

### (5) 溶融炉心・コンクリート相互作用

P R Aに基づく格納容器破損シーケンスの中から、溶融炉心・コンクリート相互作用の観点から厳しいシーケンスを選定する。

上記に基づき、内部事象運転時レベル1.5 P R Aの知見を活用した格納容器破損防止対策に係る評価事故シーケンスの選定では、まず格納容器破損モードごとに原子炉格納容器の破損の際の結果が厳しくなると判断されるP D Sを選定し、その後、選定したP D Sを含むシーケンスの中から結果が厳しくなると判断されるシーケンスを評価事故シーケンスとして選定することとした。この選定プロセスにより、有効性評価に適した、厳しいシーケンスが選定されるものとする。

### 2.2.1 評価対象とするプラント損傷状態の選定

内部事象運転時レベル1.5 P R Aでは、内部事象運転時レベル1 P R Aで炉心損傷に至る可能性があるものとして抽出された事故シーケンスから、更に事象が進展して原子炉格納容器破損に至る事故シーケンスを定量化している。その際、原子炉格納容器内の事象進展の特徴を把握するために「格納容器破損時期」、「原子炉圧力容器圧力」、「炉心損傷時期」及び「電源有無」の4つの属性に着目して内部事象運転時レベル1 P R Aから抽出された事故シーケンスグループを分類し、P D Sとして定義している。P D Sの分類結果を第2-2表に示す。

ここで、A E、S 1 E及びS 2 EはL O C Aとして1つのP D Sとした。これは事故進展解析の結果、原子炉冷却材の流出口の大きさが炉心損傷後の事象の進展速度に大きな影響を及ぼすものではないと考えたためである。

このP D Sの定義に従い、格納容器破損モードごとにC F F、当該格納容器破損モードに至る可能性のあるすべてのP D Sを整理した。また、各格納容器破損モードの発生の観点で事象進展が最も厳しくなると考えられるP D Sを検討し、評価対象とするP D Sを選定した。選定結果を第2-3表に示す。

なお、第2-2表において、格納容器破損時期が炉心損傷前と分類されているT W、T C、インターフェイスシステムL O C Aについては、格納容器先行破損又は格納容器バイパスのP D Sであることから、解釈の要求事項を踏まえ、事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」、「原子炉停止機能喪失」、「格納容器バイパス（インターフェイスシステムL O C A）」にて炉心損傷防止対策の有効性評価の対象としている。したがって、これらのP D Sは、第2-3表に示す評価対象とするP D Sの選定では考慮していない。

### 2.2.2 評価事故シーケンスの選定の考え方及び選定結果

「2.2.1 評価対象とするプラント損傷状態の選定」で格納容器破損モードごとに選定したP D Sに属する事故シーケンスを比較し、格納容器破損モードの発生の観点で事象進展が最も厳しくなると考えられる事故シーケンスを検討し、評価事故シーケンスを選定した。選定結果を第2-4表に示す。

なお、重大事故等対処設備により、炉心損傷後の原子炉圧力容器底部の損傷及び原子炉格納容器下部への熔融炉心の落下を防止できるため、原子炉圧力容器の損傷が前提となる「高圧熔融物放出／格納容器雰囲気直接加熱」、「原子炉圧力容器外の熔融燃料-冷却材相互作用」、「熔融炉心・コンクリート相互作用」の有効性評価では、物理現象及びその対策の有効

性を確認する観点から、一部の重大事故等対処設備に期待せず、炉心損傷後の原子炉圧力容器底部の損傷及び原子炉格納容器下部への溶融炉心の落下に至る状況を仮定している。

また、格納容器破損モードについて、CFFが支配的となるPDSと主要なカットセットの整理を実施し、CFFの観点で支配的となるカットセットに対して今回整備した格納容器破損防止対策が有効であることを確認した。（別紙5）

### 2.2.3 炉心損傷防止が困難な事故シーケンス等に対する格納容器破損防止対策の有効性

国内外の先進的な対策を考慮しても炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスグループのうち、格納容器破損防止対策に期待できるものについては、今回整備した格納容器破損防止対策により原子炉格納容器の閉じ込め機能に期待できることを確認している。

国内外の先進的な対策を考慮しても炉心損傷防止対策を講じることが困難な事故シーケンスのうち、以下の事故シーケンスは、「炉心の著しい損傷後の原子炉格納容器の機能に期待できる」事故シーケンスである。

（「1.2 有効性評価の対象となる事故シーケンスについて」参照）

- ・冷却材喪失（大破断LOCA）＋高圧炉心冷却失敗＋低圧炉心冷却失敗

格納容器破損防止対策の有効性評価における評価事故シーケンスの選定では、上記の事故シーケンスを含めて格納容器破損モードごとに厳しいPDSを選定している。したがって、炉心損傷防止が困難な事故シーケンス等についても、今回整備した格納容器破損防止対策により、原子炉格納容器の閉じ込め機能に期待できることを確認している。

### 2.2.4 直接的に炉心損傷に至る事故シーケンスに対する対策

「1.1.2.2 追加すべき事故シーケンスグループの検討」において、炉心損傷防止に係る有効性評価において想定する事故シーケンスグループとして新たに追加する必要がないと判断した事故シーケンスグループについては、炉心損傷後の原子炉格納容器の閉じ込め機能に期待することが困難な場合が考えられる。一方で、プラントの損傷規模によっては、設計基準事故対処設備や今回整備した重大事故等対処設備により原子炉格納容器の破損の防止が可能な場合も考えられる。

原子炉格納容器の閉じ込め機能が喪失するような大規模損傷が生じた場合は、可搬型設備（大量送水車、高圧発電機車等）による対応や放射性物質の拡散を防止する対策（放水砲、シルトフェンス等）により敷地外への放射性物質の拡散抑制等を行い、事故の影響緩和を図る。

第2-1表 格納容器破損モード別格納容器破損頻度

PR Aから抽出された格納容器破損モード	主に寄与するPDS	CFF (／炉年)	全CFFに占める割合 (%)	解釈2-1(a)で想定する破損モード	備考
早期過圧破損 (未臨界確保失敗時の過圧)	T C	6. 4E-10	<0.1	解釈2-1(a)で想定する破損モード	解釈1-2(b)に基づき、「炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認」⇒ 事故シナケンスグループ「原子炉停止機能喪失」にて有効性を確認
水蒸気 (崩壊熱) による過圧破損 (炉心損傷前)	T W	6. 2E-06	約 100	静荷圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧・過温破損)	解釈1-2(b)に基づき、「炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認」⇒ 事故シナケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」にて有効性を確認
水蒸気 (崩壊熱) による過圧破損 (炉心損傷後)	T Q U X T Q U V	3. 3E-12	<0.1		
静荷圧力・温度による過温破損	長期 T B	2. 8E-09	<0.1		
格納容器雰囲気直接加熱	長期 T B	5. 9E-17	<0.1	高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱	
原子炉圧力容器内*	—	—	—	なし	各種研究により得られた知見から、原子炉圧力容器内で水蒸気爆発が発生し、格納容器破損に至る可能性は極めて低いと評価
水蒸気爆発	T Q U X T Q U V	2. 3E-13	<0.1	原子炉圧力容器外の溶融燃料—冷却材相互作用	
水素燃焼*	—	—	—	水素燃焼	島根原子力発電所2号炉では、運転中、原子炉格納容器内を窒素で置換しており、酸素濃度を低く管理しているため、水素及び酸素が可燃限界に至る可能性が十分小さいと評価し、レベル1.5PRAでは定量化する格納容器破損モードから除外しているが、有効性評価においては窒素置換及び可搬式窒素供給装置による窒素注入の有効性を確認する観点で有効性評価の対象とする
格納容器直接接触*	—	—	—	格納容器直接接触 (シエルアタック)	Mark-I改良型の原子炉格納容器である島根原子力発電所2号炉においては、溶融炉心は原子炉格納容器バウンダリには直接接触することはない構造であることから、格納容器破損モードとして考慮しない
溶融炉心・コンクリート相互作用	T Q U X T Q U V	2. 5E-09	<0.1	溶融炉心・コンクリート相互作用	
格納容器隔離失敗	長期 T B T Q U X T Q U V	5. 5E-11	<0.1	なし	格納容器隔離失敗に対する運用上の対策をとっていること及び炉心損傷防止対策が有効であることから、本格格納容器破損モードを個別プラント評価により抽出された格納容器破損モードとして追加する必要はないと判断
格納容器バイパス	インターフェイスシステムLOCA	3. 3E-09	<0.1	なし	解釈1-2(b)に基づき、「炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認」⇒ 事故シナケンスグループ「格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)」にて有効性を確認
合計		6. 2E-06	100	—	—

網掛け：格納容器破損防止対策の有効性評価で考慮しないことを意味する。

※ BWRにおいて考えられる格納容器破損モードの1つとして抽出したものの、島根原子力発電所2号炉では想定されないことから定量化の対象から除外した格納容器破損モード。

第2-2表 プラント損傷状態の定義

PDS	格納容器 破損時期	原子炉 圧力	炉心損傷 時期	プラント損傷時点で の電源有無
TQUV	炉心損傷後	低圧	早期	交流／直流 電源有
TQUX	炉心損傷後	高圧	早期	交流／直流 電源有
長期TB	炉心損傷後	高圧	後期	直流電源無 <sup>※1</sup> 交流電源無
TBU	炉心損傷後	高圧	早期	直流電源有 交流電源無
TBP	炉心損傷後	低圧	早期	直流電源有 交流電源無
TBD	炉心損傷後	高圧	早期	交流／直流 電源無
LOCA (AE, S1E, S2E)	炉心損傷後	低圧 <sup>※2</sup>	早期	交流／直流 電源有
TW	炉心損傷前	—	後期	—
TC	炉心損傷前	—	早期	—
インターフェイス システムLOCA	炉心損傷前	—	早期	—

※1 蓄電池枯渇により事象発生から8時間で原子炉隔離時冷却系が停止し、炉心損傷に至るため、プラント損傷時点では直流電源が機能喪失している。

※2 S1EやS2Eでは、高圧状態で炉心損傷に至る場合が考えられるが、LOCAは速やかな原子炉冷却材流出の影響を確認するPDSとして、大破断LOCAをその代表として扱うこととし、高圧状態かつ早期に炉心損傷に至る事象はTQUXで代表させることとした。

注：網掛けは格納容器先行破損に至る事故シーケンスであることから、解釈1-2(b)に基づき、「炉心の著しい損傷を防止する対策に有効性があることを確認」する。このため、格納容器破損防止対策の有効性評価の対象外とするPDSを示す。

第2-3表 評価対象とするプラント損傷状態の選定について (1/2)

格納容器破損モード	破損モード別 CFF (／炉年)	該当する PDS	PDS別 CFF (／炉年)	破損モード内 CFFに対する割合 (%)	最も厳しいPDS選定の考え方	評価対象と選定した PDS
雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧破損)	3.3E-12	TQUV	2.3E-13	7	<p>【事象進展 (過圧・過温) 緩和の余裕時間及び設備容量の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・TQUX, TQUV, 長期TB, TBU, TBD, TBPの各シナリオと比較し, LOCAは原子炉冷却材の流出を伴うことから水位低下が早く, 事象進展が早い。</li> <li>・過温破損については対策として原子炉格納容器の除熱が必要となる。</li> <li>・過温破損については対策として原子炉格納容器 (損傷炉心) への注水が必要となる。</li> <li>・LOCAにECCS注水機能喪失及び全交流動力電源喪失を重量させることで, 電源の復旧, 注水機能の確保等必要となる</li> </ul> <p>事故対処設備が多く, 格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとなる。また, 原子炉格納容器への注水・除熱対策の有効性を網羅的に確認可能なシナリオとなる。なお, いずれのPDSを選定しても必要な監視機能は維持される。</p> <p>以上より, LOCAに全交流動力電源喪失 (SBO) を加え, 過圧及び過温への対策の有効性を総合的に評価するためのPDSとする。</p>	LOCA + SBO
		TQUV	1.0E-10	4		
		TQUX	2.9E-11	1		
		長期TB	2.7E-09	94		
		TBU	1.2E-11	0.4		
		TBP	8.2E-12	0.3		
		TBD	3.8E-12	0.1		
		LOCA	3.9E-13	<0.1		
		TQUX	2.9E-25	<0.1		
		長期TB	5.9E-17	約100		
TBU	1.4E-29	<0.1				
TBD	1.1E-27	<0.1				
格納容器破損モード	2.8E-09	TQUV	2.9E-25	<0.1	<p>【事象進展緩和 (減圧) の余裕時間の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長期TBは事象初期において原子炉隔離時冷却系による冷却が有効なシナリオであり, 原子炉減圧までの時間余裕の観点ではTQUX, TBD, TBUの方が厳しい。</li> <li>・高圧状態で炉心損傷に至る点ではTQUX, TBD, TBUにPDS選定上の有意な違いはない。</li> </ul> <p>以上より, 最も厳しいPDSから, TQUXを代表として選定した。また, このPDSに全交流動力電源喪失を重量させることで, 電源の復旧, 注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。なお, いずれのPDSを選定しても必要な監視機能は維持される。</p>	TQUX
		TQUV	1.8E-13	76		
格納容器破損モード	2.3E-13	TQUV	5.6E-14	24	<p>【事象 (FCI) における発生エネルギーの大きさ) の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち, 原子炉圧力容器外の溶融燃料-冷却材相互作用 (FCI) の観点からは, 原子炉格納容器下部へ落下する溶融炉心の割合が多く, 原子炉圧力容器破損時の溶融炉心の保有エネルギーが大きいシナリオが厳しくなる。</li> <li>・原子炉圧力容器が過圧で破損に至る場合, 原子炉格納容器に放出される溶融炉心が分散されやすいため, 原子炉圧力容器が低圧で破損に至る場合の方が, 原子炉格納容器下部へ一体となって落下する溶融炉心の割合が多くなると考えられる。</li> <li>・また, 本格納容器破損モードに対する事象の厳しさを考慮する上では, 溶融炉心・コンクリート相互作用の緩和対策である, 原子炉格納容器下部への水張りを実施された状態を想定しているが, その一方で, 原子炉圧力容器破損が想定される状況では, 高圧溶融物放出/格納容器雰囲気直接加熱の発生を防止するため, 原子炉圧力容器の減圧が実施されている。</li> <li>・これらの状況も考慮し, 原子炉圧力容器が低圧状態で破損するPDSを選定するものとし, 高圧状態で破損するTQUXは選定対象から除外する。</li> <li>・LOCAは, 蒸気が急速に原子炉格納容器に流出するため, ジルコニウムの酸化割合が他の低圧破損シナリオより小さくなり, 酸化ジルコニウム質量割合が他の低圧破損シナリオより小さくなることで溶融炉心の内部エネルギーが小さくなると考えられる。</li> </ul> <p>以上より, 本格納容器破損モードにおいて厳しいPDSとして, 原子炉の水位低下が早く, 原子炉圧力容器破損までの時間が短いTQUVを選定する。また, このPDSに全交流動力電源喪失を重量させることで, 電源の復旧, 注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。なお, いずれのPDSを選定しても必要な監視機能は維持可能である。</p>	LOCA
		TQUX	2.0E-18	<0.1		

第2-3表 評価対象とするプラント損傷状態の選定について (2/2)

格納容器破損モード	破損モード別 CFF (／炉年)	該当する PDS	PDS別 CFF (／炉年)	破損モード内 CFFに対する割合 (%)	最も厳しいPDS選定の考え方	評価対象と選定した PDS
格納容器破損モード 溶融炉心・コンクリート相互作用 (MCCI)	2.5E-09	TQUV	1.9E-09	76	<p>【事象 (MCCI) に寄与する溶融炉心のエネルギーの大きさ) の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本格納容器破損モードに含まれるPDSのうち、溶融炉心・コンクリート相互作用の観点からは、原子炉格納容器下部に落下する溶融炉心の割合が多いシナシナが厳しくなる。</li> <li>原子炉圧力容器が高圧で破損に至る場合、原子炉格納容器に放出される溶融炉心が分散され易く、また、落下速度が大きくなることで、原子炉格納容器下部に落下した際の粒子化割合が高くなり、落下した溶融炉心が冷却され易いと考えると、原子炉圧力容器が低圧で破損に至る場合の方が、原子炉格納容器下部へ一体となって落下する溶融炉心の割合が多くなると考えられる。</li> <li>また、原子炉圧力容器破損が想定される状況では、高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱の発生を防止するため、原子炉圧力容器の減圧が実施されている。</li> <li>これらの状況も考慮し、原子炉圧力容器が低圧状態で破損するPDSを選定するものとし、高圧状態で破損するTQUVは選定対象から除外する。</li> <li>LOCAは、原子炉格納容器下部への原子炉冷却材の流入の可能性があり、溶融炉心・コンクリート相互作用の観点で厳しい事象とはならないと考えられるため、選定対象から除外する。</li> </ul> <p>以上より、本格納容器破損モードにおいて最も厳しいPDSとして、原子炉の水位低下が早く、対策実施までの余裕時間の観点から厳しいTQUVを選定する。また、このPDSに全交流動力電源喪失の重畳を考慮することで、電源の復旧、注水機能の確保等の格納容器破損防止対策を講じるための対応時間が厳しいシナリオとする。なお、いずれのPDSを選定しても必要な監視機能は維持可能である。</p>	TQUV
		LOCA	2.1E-14	<0.1		
水素燃焼	—*	—	—	—	<p>【有効性評価に関する審査ガイドの選定基準等との整合】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>島根原子力発電所2号炉では原子炉格納容器内を窒素で置換しているため、水素燃焼による格納容器破損シナシナを選定するものとする。【評価において着目するパラメータ】</li> <li>島根原子力発電所2号炉では、原子炉格納容器内が窒素置換され、初期酸素濃度が低く保たれている。また、炉心損傷に伴い、水素濃度は容易に可燃限界を超えることから、水素燃焼防止の観点からは酸素濃度が重要になる。このため、水の放射線分解に伴う酸素濃度の上昇に着目する。</li> <li>【島根原子力発電所2号炉において評価する事故シナシナ】</li> <li>本格納容器破損モードはPRAから抽出されたものではないが、評価のためにPDSを格納容器先行破損の事故シナシナ以外のPDSから選定する。酸素は水の放射線分解で発生するが、酸素濃度は他の気体の存在量の影響を受けるため、炉心損傷後の原子炉格納容器内の気体組成を考慮の上で影響が大いと考えられるシロニウム-水反応による水素発生に着目する。原子炉注水に期待しない場合のシロニウム-水反応の挙動は事象発生時の原子炉圧力容器外への原子炉冷却材の放出経路から、LOCAとその他のPDSに大別できる。LOCAでは事象発生と同時に原子炉圧力容器が大きく減圧され、原子炉冷却材が多量に原子炉圧力容器外に排出されることから、シロニウム-水反応に寄与する冷却材の量が小さくなり、これに伴う水素発生量が少なくなると考えられる。このため、LOCAでは水の放射線分解によって増加する酸素濃度が他のPDSより相対的に高くなる可能性が考えられる。さらに、原子炉圧力容器破損の有無の影響を考えると、原子炉圧力容器が破損する場合には、原子炉格納容器下部での溶融炉心・コンクリート相互作用によって生じる非凝縮性ガスが酸素濃度を低下させる方向に寄与する可能性が考えられることから、同じPDSでも原子炉圧力容器破損に至らない場合を想定することが適切と考える。</li> <li>島根原子力発電所2号炉において、炉心損傷を防止できない事故シナシナであるが、原子炉格納容器においてその事象進展を緩和できると考えられる事故シナシナとしては、大破断LOCAとECCS注水機能喪失の重畳が重畳する事故シナシナのみが抽出されている。</li> </ul> <p>以上より、PDSとしてはLOCA (大破断LOCA+ECCS注水機能喪失) を選定することが適切と考えられる。これに加え、「雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧破損)」及び「雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過温破損)」の評価事故シナシナでは、対応の厳しさを観点でSBOの重畳を設定していることを考慮し、「冷却材喪失 (大破断LOCA) +ECCS注水機能喪失+全交流動力電源喪失」をPDSとして選定する。</p>	LOCA +SBO

※ 格納容器破損モード「水素燃焼」は、島根原子力発電所2号炉が運転中、原子炉格納容器内を窒素で置換しており、酸素濃度を低く管理しているため、酸素が可燃限界に至る可能性が十分に小さいと判断し、内部事象運転時レベル1.5PRAの評価対象から除外している。このため、PRAからはPDS及び事故シナシナは抽出されない。



第2-4表 格納容器破損防止対策の評価事故シナリオの選定について (1/2)

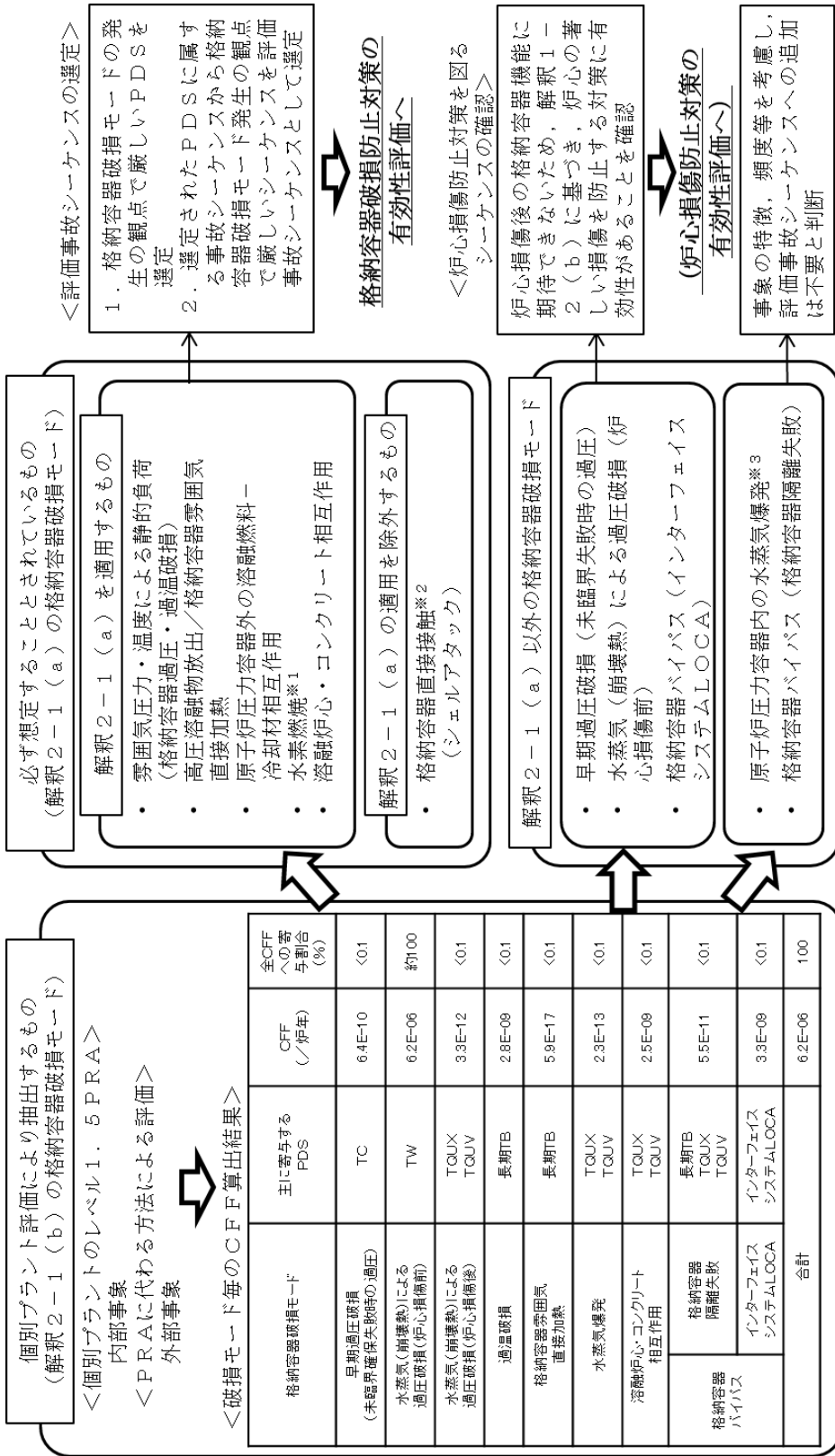
格納容器破損モード	選定した PDS	該当する事故シナリオ*	格納容器破損防止対策	評価対象事故シナリオ選定の考え方
雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過圧破損)	LOCA + SBO	◎ 冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗	<ul style="list-style-type: none"> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>格納容器代替サブレイ系 (可搬型)</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>残留熱代替除去系</li> <li>可搬式薬素供給装置</li> </ul>	<p>【事象進展 (過温・過温) 緩和の余裕時間及び設備容量の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>評価対象である LOCA に属するシナリオのうち、破断口径が大きいことから原子炉水位の低下が早く、また、水位回復に必要な流量が多いため、対応時の余裕時間、必要な設備容量の観点で厳しい冷却材喪失 (大破断 LOCA) を起因とするシナリオを選定する。</li> <li>過圧破損及び過温破損の各々において、炉心損傷後の原子炉注水失敗までは同じ事故シナリオが選定されている。また、対策は損傷炉心への注水の観点で同じことから、同様の事故シナリオを選定した。これに加え、過圧及び過温への対策の有効性を総合的に評価するため、全交流動力電源喪失の重量を考慮したシナリオ「冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 全交流動力電源喪失」を選定する。</li> </ul>
		- 冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗		
		- 冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗		
		- 冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗		
		- 冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 長期冷却失敗		
		- 冷却材喪失 (大破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗		
		- 冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗		
		- 冷却材喪失 (中破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗		
		- 冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗		
		- 冷却材喪失 (小破断 LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 格納容器注水失敗		
雰囲気圧力・温度による静的負荷 (格納容器過温破損)	LOCA + SBO	◎ 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH 発生	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉圧力容器破損までの手動減圧</li> </ul>	<p>【余裕時間の厳しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>過渡事象 (給水流量の全喪失) は原子炉水位低 (レベル 3) が事象進展の起点となるため、通常水位から原子炉停止に至る手動停止、サポート系喪失と比較して事象進展が早い。このため、対応時の余裕時間の観点で厳しい。</li> <li>以上より、原子炉圧力容器破損までの余裕時間の観点で厳しい過渡事象を起因とするシナリオ「過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH 発生」を選定する。</li> </ul>
		- 手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH 発生		
		- サポート系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + 原子炉注水失敗 + DCH 発生		
		-		
高圧溶融物放出 / 格納容器雰囲気直接加熱 (DCH)	T Q U X	-		
		-		

※ ◎は選定した重要事故シナリオを示す。また、青文字は格納容器イベントツリーで評価した炉心損傷以降のシナリオを示す。

第2-4表 格納容器破損防止対策の評価事故シナリオの選定について (2/2)

格納容器破損モード	選定した PDS	該当する事故シナリオ*	格納容器破損防止対策	評価対象事故シナリオ選定の考え方
原子炉圧力容器燃焼材料の冷却作用 (FCI)	T QUV	◎ 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生	一 力容器外燃焼材料相互作用による原子炉圧力容器破損防止対策 (原子炉圧力容器破損防止対策)	【余裕時間の厳しさ】 ・過渡事象 (給水流量の全喪失) は原子炉炉水位低 (レベル 3) が事象進展の起点となるため、通常水位から原子炉炉停止に至るまでの余裕時間が短く、対応時の余裕時間が少ない。 ・サポート系喪失と比較して事象進展が早い。このため、対応時の余裕時間が少ない。 【事象 (FCI 発生時) の厳しさ】 ・いづれのシナリオも原子炉圧力が低圧の状態であり、原子炉圧力容器破損に至ることになる。 以上より、原子炉圧力容器破損までの余裕時間の観点で厳しい過渡事象を起因とし、発生頻度の観点で大きいと考えられる過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生」を選定する。
		一 過渡事象 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		一 手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生		
		一 手動停止 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		一 サポート系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生		
		一 サポート系喪失 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		◎ 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗		
		一 過渡事象 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		一 手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生		
		一 手動停止 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
溶融炉心・コンクリート相互作用 (MCCI)	T QUV	◎ 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗	一 ベンチマーク代替注水系 (可搬型) によるペダスタル注水	【余裕時間の厳しさ】 ・過渡事象 (給水流量の全喪失) は原子炉炉水位低 (レベル 3) が事象進展の起点となるため、通常水位から原子炉炉停止に至るまでの余裕時間が短く、対応時の余裕時間が少ない。 ・サポート系喪失と比較して事象進展が早い。このため、対応時の余裕時間が少ない。 【事象 (MCCI 発生時) の厳しさ】 ・いづれのシナリオも原子炉圧力が低圧の状態であり、原子炉圧力容器破損に至ることになる。 以上より、原子炉圧力容器破損までの余裕時間の観点で厳しい過渡事象を起因とし、発生頻度の観点で大きいと考えられる過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生」を選定する。
		一 過渡事象 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		一 手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生		
		一 手動停止 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		一 サポート系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生		
		一 サポート系喪失 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		◎ 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗		
		一 過渡事象 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
		一 手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生		
		一 手動停止 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV 再開) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗		
水素燃焼	LOCA + SBO	◎ 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 + 炉心損傷後の原子炉注水失敗 + FCI 発生	・酸素濃度による格納容器素燃焼の不安定性 ・可搬型窒素供給装置による原子炉格納容器内への窒素封入	【事象 (酸素濃度上昇) の厳しさ】 ・酸素濃度が他の PDS よりも相対的に高くなる可能性が考えられ、炉心損傷を防止できない事故シナリオであるが、原子炉格納容器においてその事象進展を緩和できると考えられる事故シナリオとして抽出される「冷却材喪失 (大破断 LOCA) + E.C.C.S 機能喪失」に對しての厳しさを鑑みて全交流動方電原喪失を加えた事故シナリオ「冷却材喪失 (大破断 LOCA) + E.C.C.S 注水機能喪失 + 全交流動方電原喪失」を設定した。さらに、原子炉圧力容器破損の有無の影響を考慮し、原子炉圧力容器が破損する場合には、原子炉格納容器下部の溶融炉心・コンクリート相互作用によって生じる非凝縮性ガスが酸素濃度を低下させる方向に寄与する可能性が考えられることから、同じ PDS でも原子炉圧力容器破損に至らないシナリオを選定する。

※ ◎は選定した重要事故シナリオを示す。また、青文字は格納容器イベントツリーで評価した炉心損傷以降のシナリオを示す。

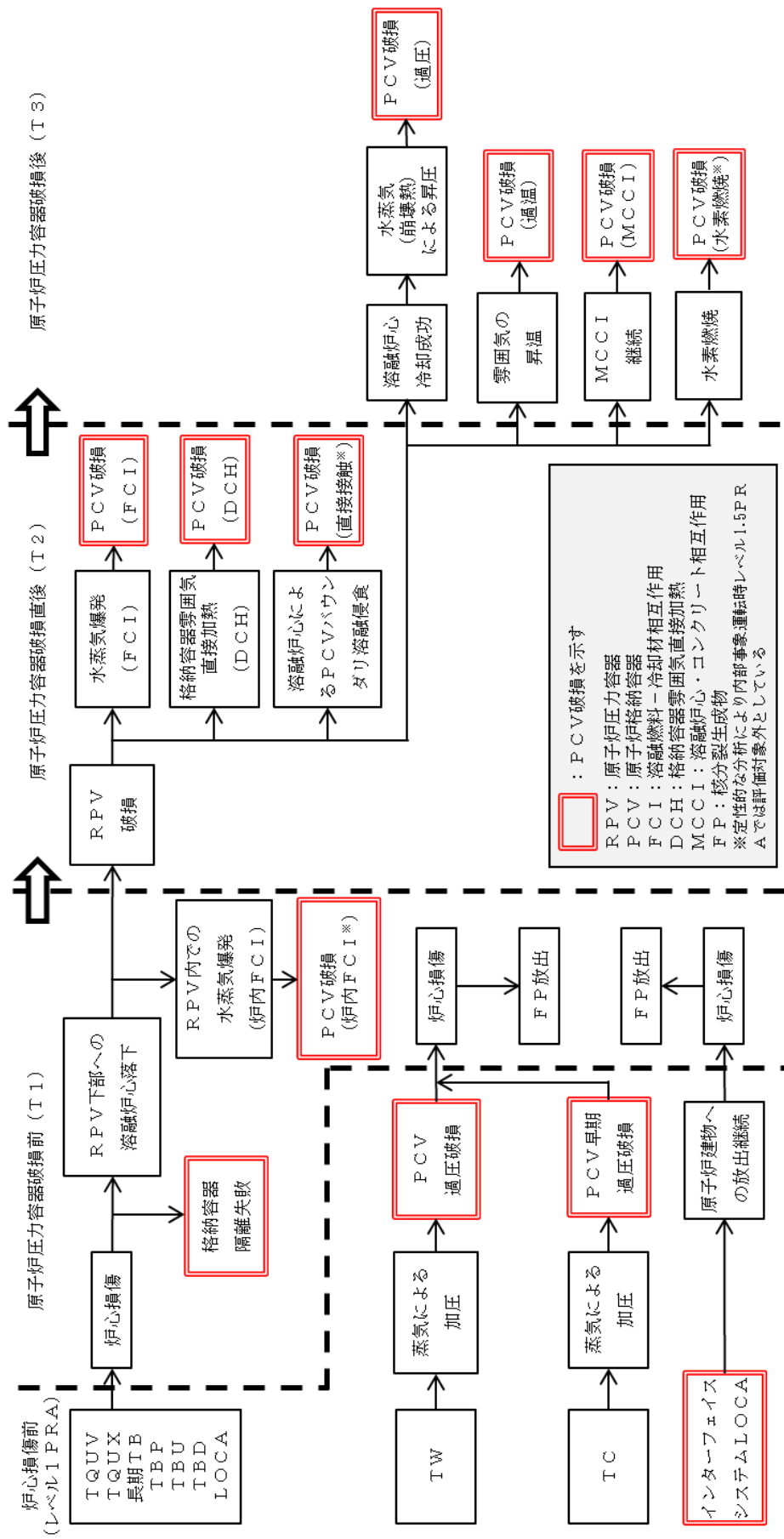


※1 BWRにおいて考えられる格納容器破損モードの1つとして抽出したものの、島根原子力発電所2号炉では、運転中、原子炉格納容器内を窒素で置換しており、酸素濃度を低く管理して  
いるため、酸素濃度及び酸素濃度が可燃限界に至る可能性が十分小さいと評価し、PRAで定量化する格納容器破損モードから除外しているが、有効性評価においては窒素置換の有効性を  
確認する観点で有効性評価の対象とする。

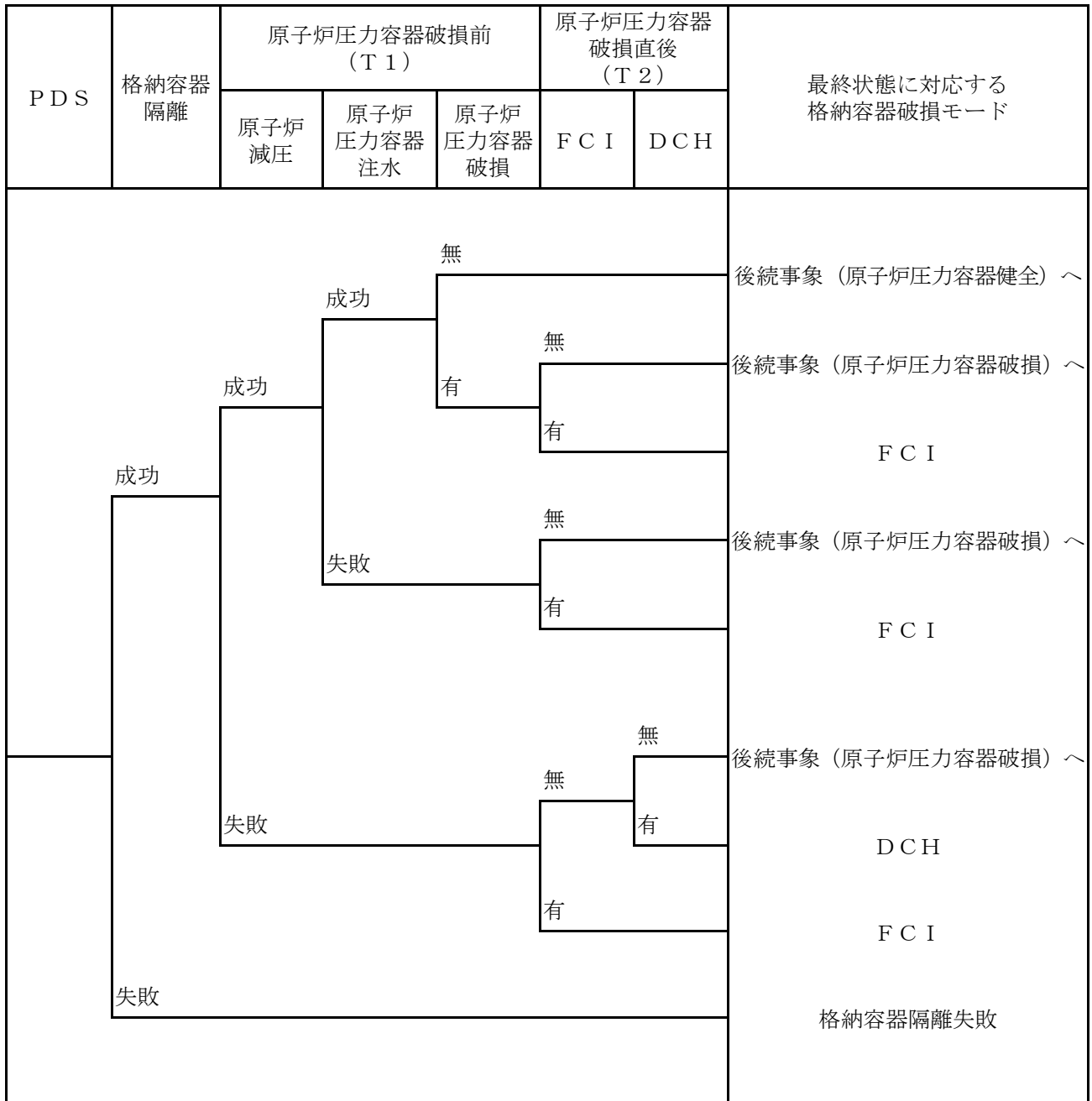
※2 BWRにおいて考えられる格納容器破損モードの1つとして抽出したものの、島根原子力発電所2号炉では、原子炉格納容器の構造上発生する可能性はない格納容器破損モードであるこ  
とから、有効性評価の対象から除外した。

※3 BWRにおいて考えられる格納容器破損モードの1つとして抽出したものの、各種研究により得られた知見から、原子炉格納容器内で水蒸気爆発が発生し、格納容器破損に至る可能性は  
十分小さいと評価し、有効性評価の対象から除外した。

第2-1図 格納容器破損モード抽出及び評価事故シケンセス選定の全体プロセス



第2-2図 シビアアクシデントで想定される事象進展と格納容器破損モード



第2-3図 内部事象運転時レベル1.5 PRA格納容器イベントツリー(1 / 3)

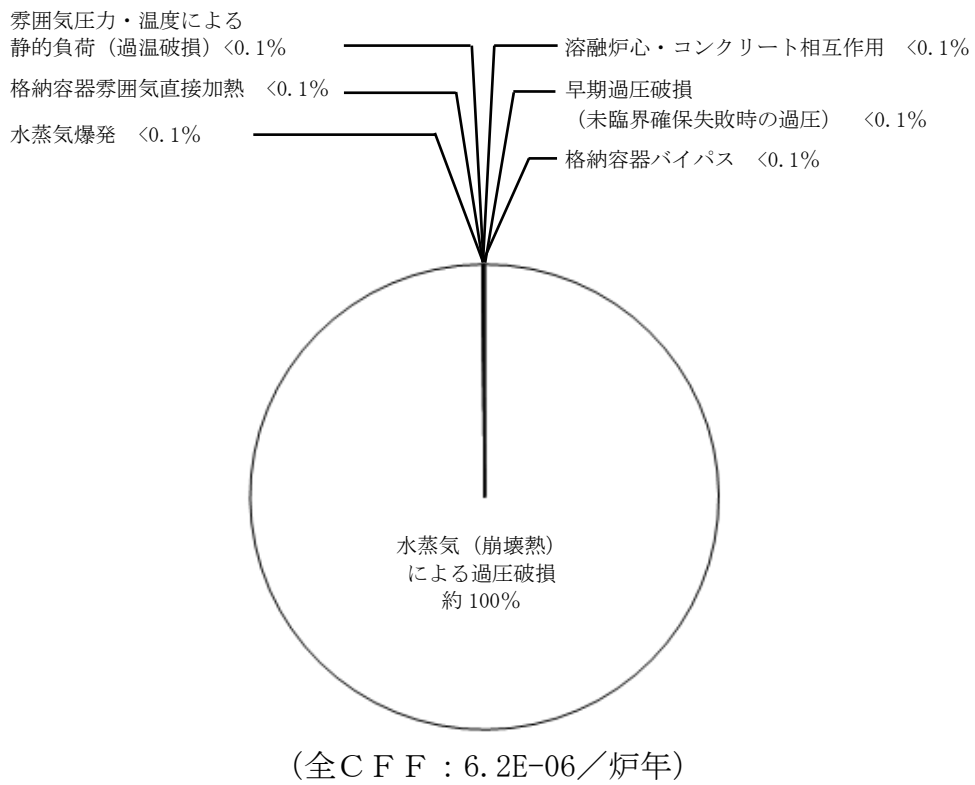
事故後期 (T3)			最終状態に対応する 格納容器破損モード
後続事象 (原子炉压力容器健全)	格納容器注水	長期冷却	
	成功	成功	原子炉压力容器内で事故収束
		失敗	
		成功	成功
	失敗	失敗	格納容器過圧・過温破損

第2-3図 内部事象運転時レベル1.5 P R A格納容器イベントツリー(2 / 3)

事故後期 (T3)					最終状態に対応する 格納容器破損モード
後続事象 (原子炉压力容器破損)	格納容器注水	F C I	デブリ冷却	長期冷却	
	成功	無	成功	成功	原子炉格納容器内で事故収束
			失敗		格納容器過圧・過温破損
	成功	有	成功	成功	格納容器過圧・過温破損
			失敗		M C C I
	失敗		成功		F C I
			失敗		格納容器過圧・過温破損

第2-3図 内部事象運転時レベル1.5 P R A格納容器イベントツリー(3 / 3)

格納容器破損モード別



第2-4図 内部事象運転時レベル1.5 P R A の定量化結果

### 3. 運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策の有効性評価の運転停止中事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンスの選定について

運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策の有効性評価の事故シーケンスグループ抽出及び重要事故シーケンス選定の全体プロセスは第3-1図に示すとおりであり、本プロセスにより各検討ステップにおける実施内容を整理した。

#### 【概要】

- ① 内部事象P R A及びP R Aを適用できない外部事象等についての定性的検討から事故シーケンスの抽出を実施した。
- ② 抽出した事故シーケンスと必ず想定する事故シーケンスグループとの比較を行い、必ず想定する事故シーケンスグループ以外に抽出された外部事象特有の事故シーケンスについて、頻度、影響等を確認し、事故シーケンスグループとしての追加要否を検討した。
- ③ 有効性評価において想定する事故シーケンスグループごとに、「実用発電用原子炉に係る運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策の有効性評価に関する審査ガイド」（以下「停止中審査ガイド」という。）に記載の観点（余裕時間、設備容量、代表性）に基づき、有効性評価の対象とする重要事故シーケンスを選定した。

#### 3.1 運転停止中事故シーケンスグループの分析について

解釈において、運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策の有効性評価に係る運転停止中事故シーケンスグループの個別プラント評価による抽出に関し、以下のとおり記載されている。

##### 4-1

##### (a) 必ず想定する運転停止中事故シーケンスグループ

- ・崩壊熱除去機能喪失（RHRの故障による停止時冷却機能喪失）
- ・全交流動力電源喪失
- ・原子炉冷却材の流出
- ・反応度の誤投入

##### (b) 個別プラント評価により抽出した運転停止中事故シーケンスグループ

- ① 個別プラントの停止時に関するP R A（適用可能なもの）又はそれに代わる方法で評価を実施すること。
- ② その結果、上記4-1(a)の運転停止中事故シーケンスグループに含まれない有意な頻度又は影響をもたらす運転停止中事故シーケンスグループが抽出された場合には、想定する運転停止中事故シーケンスグループとして追加すること。



上記4-1(b)を踏まえて、内部事象停止時レベル1 P R A評価を実施し、事故シーケンスグループの検討を行った。

なお、事故シーケンスグループの選定は、炉心損傷防止対策に係る事故シーケンスグループの分析と同様、従来の設置許可取得時の設計で考慮していた設備のみ期待できる条件<sup>※1</sup>で評価した内部事象停止時レベル1 P R Aの結果を用いた。

※1 従来から整備してきたAM策や福島第一原子力発電所事故以降に実施した各種対策、新規制基準に基づき配備する重大事故等対処設備等を含めない条件。

### 3.1.1 燃料損傷に至る運転停止中事故シーケンスグループの抽出・整理

定期事業者検査中はプラントの状態が大きく変化することから、内部事象停止時レベル1 P R Aにおいては、定期事業者検査における評価対象期間を設定し、原子炉の水位、温度、圧力等のプラントパラメータの類似性、保守点検状況等に応じた緩和設備の使用可能性、起回事象、成功基準に関する類似性によって、評価対象期間を幾つかのプラント状態（以下「P O S」という。）に分類し評価を行う。分類したP O Sを、状態ごとのプラントの主要なパラメータとともに第3-2図に示す。また、P O Sごとの期間及び系統の待機状態を示した工程表を第3-3図に示す。

内部事象停止時レベル1 P R Aにおいては、原子炉停止後の運転停止中の各P O Sにおいて燃料損傷へ波及する可能性のある起回事象について、マスターロジックダイアグラム、過去の国内プラントのトラブル事例等から選定し、ここから燃料損傷に至ることを防止するための緩和手段の組合せ等を第3-4図のイベントツリーで分析し、燃料損傷に至る各事故シーケンスを抽出している。抽出した起回事象と発生頻度を第3-1表に示す。

抽出された事故シーケンス別の燃料損傷頻度を整理し、停止中審査ガイドの「必ず想定する運転停止中事故シーケンスグループ」に含まれるか、それ以外の事故シーケンスグループであるかを確認するとともに、燃料損傷状態を分類した。その結果、今回実施したP R Aでは、必ず想定する事故シーケンスグループに含まれない事故シーケンスは抽出されなかった。そのため、解釈に基づき想定する事故シーケンスグループに追加すべき新たな事故シーケンスグループはないと判断した。事故シーケンスグループ別の燃料損傷頻度を第3-2表に示す。

起回事象別の燃料損傷頻度への寄与割合を第3-5図に、事故シーケンスグループ別の燃料損傷頻度への寄与割合を第3-6図に示す。

#### <選定した起回事象>

- a. 崩壊熱除去機能喪失（残留熱除去系機能喪失[フロントライン]、補機冷却系機能喪失）

運転中の除熱設備が弁やポンプの故障により機能喪失する事象。

b. 外部電源喪失

送電システムのトラブル等により外部電源が喪失する事象。発生した場合には、非常用交流電源設備（非常用ディーゼル発電機）が起動して交流電源を供給するが、非常用ディーゼル発電機の起動に失敗した場合に注水又は崩壊熱除去機能が喪失する可能性がある。

c. 原子炉冷却材の流出（制御棒駆動機構点検時・局部出力領域モニタ交換時及び原子炉浄化系ブロー時の冷却材流出）

配管破断や運転員の弁の誤操作、点検時の人的過誤等により原子炉冷却材が系外へ流出する事象。運転停止中には配管破断による原子炉冷却材の流出の可能性は低いため、弁の誤操作等による原子炉冷却材の流出を対象とする。

3.2 重要事故シーケンスの選定について

設置変更許可申請における運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策設備の有効性評価の実施に際しては、「3.1 運転停止中事故シーケンスグループの分析について」で抽出した3つの運転停止中事故シーケンスグループに、必ず想定する運転停止中事故シーケンスグループである「反応度の誤投入」<sup>※2</sup>を追加した4つのグループについて重要事故シーケンスの選定を実施した。

※2 運転停止中には原則として全制御棒が挿入されており、複数の人的過誤や機器故障が重畳しない限り反応度事故に至る可能性はない。万一、反応度事故が起こり臨界に至った場合でも局所的な事象で収束し、燃料の著しい損傷に至ることは考え難いことから内部事象停止時レベル1 P R Aの起因事象から除外している。

3.2.1 重要事故シーケンスの選定の考え方

重要事故シーケンス選定に当たっては、以下に示す停止中審査ガイドに記載の着眼点に沿って実施しており、具体的な検討内容を以下に示す。（第3-3表）

【停止中審査ガイドに記載の着眼点】

- a. 燃料損傷防止対策の実施に対する余裕時間が短い。
- b. 燃料損傷回避に必要な設備容量（流量等）が大きい。
- c. 運転停止中事故シーケンスグループ内のシーケンスの特徴を代表している。

a. 余裕時間

プラントの状態や起因事象等によって燃料損傷までの余裕時間は異

なるものの、いずれも緩和措置の実施までに掛かる時間に比べて十分時間がある。反応度の誤投入については、事象発生後も崩壊熱除去や注水機能は喪失しないため、それらの緩和措置実施までの余裕時間の考慮は不要である。(第3-3, 3-4表)

b. 設備容量

設備容量については、事故シーケンスグループ内での必要な設備容量の大きさに応じて「高」、「中」、「低」と3つに分類した。なお、反応度の誤投入については、事象発生後も崩壊熱除去や注水機能は喪失しないため、それらの緩和措置実施までの余裕時間の考慮は不要である。(第3-3, 3-4表)

c. 代表性

第3-2表の事故シーケンスごとの燃料損傷頻度を比較し、事故シーケンスグループ内での寄与割合が支配的なものを「高」、支配的でないが1%以上のものを「中」、1%に満たないものを「低」と3つに分類した。

3.2.2 重要事故シーケンスの選定結果

「3.2.1 重要事故シーケンスの選定の考え方」の選定の着眼点を踏まえ、同じ事故シーケンスグループに複数の事故シーケンスが含まれる場合には、事象進展が早いもの等、より厳しい事故シーケンスを重要事故シーケンスとして選定した。各事故シーケンスグループに対する重要事故シーケンスの選定理由及び選定結果について、第3-3表及び以下に示す。

(1) 崩壊熱除去機能喪失

① 重要事故シーケンス

「崩壊熱除去機能喪失（残留熱除去系機能喪失[フロントライン]）  
＋崩壊熱除去・炉心冷却失敗」

② 選定理由

余裕時間の観点からは、異常の認知や待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系（常設）による注水といった緩和措置の実施までに掛かる時間（約2時間）に比べて十分時間がある。設備容量の観点からは、待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系（常設）といった緩和設備の設備容量に比べて蒸発量は十分小さい。代表性の観点からは、崩壊熱除去機能喪失を起因事象とする事故シーケンスグループに対する寄与割合が支配的である。

有効性評価では外部電源喪失との重畳を考慮しており、外部電源喪失時に原子炉補機冷却系（海水ポンプを含む。）が故障した場合については事象進展が全交流動力電源喪失と同様となるため、「補機冷却系機能喪失」及び「外部電源喪失」を起因事象とする事故シーケンスの対策の有効性については全交流動力電源喪失の事故シーケンスにて

確認する。

以上より、①の事故シーケンスを重要事故シーケンスとして選定した。

- ③ 燃料損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）
  - ・待機中の残留熱除去系（低圧注水モード）

(2) 全交流動力電源喪失

- ① 重要事故シーケンス  
「外部電源喪失＋交流電源喪失」

② 選定理由

余裕時間の観点からは、常設代替交流電源設備の起動、低圧原子炉代替注水系（常設）による注水といった緩和措置の実施までに掛かる時間（約2時間）に比べて十分時間がある。設備容量の観点からは、待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系（常設）といった緩和設備の設備容量に比べて蒸発量は十分小さい。代表性の観点からは、外部電源喪失とともに非常用ディーゼル発電機が機能喪失し、全交流動力電源喪失に至る事故シーケンスが支配的である。

なお、「外部電源喪失＋直流電源喪失」は燃料損傷頻度が低く、常設代替交流電源設備や可搬型直流電源設備、所内常設蓄電式直流電源設備による電源供給、低圧原子炉代替注水系（可搬型）による注水等により燃料損傷が防止できることから選定しない。

以上より、①の事故シーケンスを重要事故シーケンスとして選定した。

- ③ 燃料損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）
  - ・常設代替交流電源設備
  - ・低圧原子炉代替注水系（常設）
  - ・原子炉補機代替冷却系

(3) 原子炉冷却材の流出

① 重要事故シーケンス

「原子炉冷却材の流出（残留熱除去系切替時の冷却材流出）＋流出隔離・炉心冷却失敗」

② 選定理由

余裕時間の観点からは、異常の認知、漏えい箇所の隔離や待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系（常設）の起動といった緩和措置の実施までにかかる時間（最大2時間）に比べて長い。設備容量の観点からは、待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系（常設）といった緩和設備の設備容量に比べて原子炉冷却材流出流量は十分小さいが、その中で最も大きい「残留熱除去系切替時の冷却材流出」の事故シーケンスが $94\text{m}^3/\text{h}$ と他の漏えい事象より厳しい。代表性の観点からは「原子炉浄化系ブロー時の冷却材流出」が $2.7 \times 10^{-10}$ ／定期事業者検

査と最も大きい「残留熱除去系切替時の冷却材流出」は  $8.4 \times 10^{-11}$  / 定期事業者検査となり、どちらも燃料損傷頻度としては非常に低く大きな差はない。

「制御棒駆動機構点検時の冷却材流出」等の点検作業に伴う原子炉冷却材流出事象は、運転操作に伴う原子炉冷却材流出事象と異なり、作業・操作場所と漏えい発生箇所が同一であるため、認知が容易であること、「原子炉浄化系ブロー時の冷却材流出」については、原子炉水位を低下させる操作であるため、原子炉水位は適宜監視されており、原子炉冷却材流出発生時には、ブロー水の排水先である機器ドレンタンクの水位高等によっても認知することができるため、認知は容易である。

以上より、①の事故シーケンスを重要事故シーケンスとして選定した。

- ③ 燃料損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）
  - ・待機中の残留熱除去系（低圧注水モード）
  - ・原子炉冷却材流出箇所の隔離操作

#### (4) 反応度の誤投入

- ① 重要事故シーケンス  
「反応度の誤投入」

- ② 選定理由

代表性の観点から、運転停止中に実施される検査等により、最大反応度値を有する制御棒1本が全引き抜きされている状態から、他の1本の制御棒が操作量の制限を超える誤った操作によって引き抜かれ、異常な反応度の投入を認知できずに燃料の損傷に至る事故を想定する。

- ③ 燃料損傷防止対策（有効性評価で主に考慮）
  - ・中性子束高スクラム信号によるスクラム

なお、各事故シーケンスグループに分類される事故シーケンスについて、燃料損傷に至る要因をカットセットレベルまで展開し、燃料損傷頻度の事故シーケンスに占める割合の観点で主要なカットセットに対する重大事故等対策の整備状況等を確認している（別紙5）。

第3-1表 内部事象停止レベル1 PRAにおける起因事象と発生頻度

起因事象		発生頻度		説明
崩壊熱除去機能喪失	残留熱除去系機能喪失 [フロントライン]	4. 8E-05 (／日)		運転停止中の主要な除熱設備である残留熱除去系（原子炉停止時冷却モード）が故障した場合の除熱失敗を想定。
	補機冷却系機能喪失	6. 0E-06 (／日)		補機冷却系設備が故障した場合、これらが必要としている複数の設備すべてが使用不能となり、フロントライン系の故障と比べてもその影響が大きいため、フロントライン系の故障と分けて考慮し、補機冷却系の故障による除熱失敗を想定。
	外部電源喪失	2. 2E-05 (／日)		送電系統のトラブルにより駆動電源を喪失し除熱設備が運転停止する場合を想定。
原子炉冷却材の流出	制御棒駆動機構 点検時の冷却材流出	3. 4E-08 (／本)		制御棒駆動機構の点検、局部出力領域計装の交換、残留熱除去系の切替えの際に作業又は操作誤り等により、原子炉冷却材が原子炉冷却材圧力バウンダリ外に漏えいする可能性があるため、各々を起因事象として選定。POS-Bにおいて生じる作業。
		POS-B-2 : 6. 5E-07 (／POS)		
	6. 1E-08 (／本)			
	POS-B-2 : 3. 7E-07 (／POS)			
	2. 9E-04 (／回)			
	POS-B-3 : 2. 9E-04 (／POS)			
残留熱除去系 切替時の冷却材流出	1. 3E-04 (／回)		原子炉ウエル満水状態から通常水位へ原子炉水位を下げる際には、原子炉浄化系による原子炉圧力容器の液体廃棄物処理系の機器ドレタンクに移送される。原子炉浄化系ブローを終了させることを忘れた場合、燃料が露出する可能性があるため、起因事象として選定。POS-Cにおいて生じる作業。	
	POS-C : 2. 7E-04 (／POS)			

第3-2表 運転停止中事故シナリオ別燃料損傷頻度

シナリオ No.	事故シナリオ	対応する主要な燃料損傷防止対策 (下線部は有効性評価で用いる重大事故等対処設備等を示す)		燃料損傷頻度 (/定期事業者 検査)	全燃料損傷頻度 に対する寄与割合 (%)	事故シナリオグループ	事故シナリオグループ に対する寄与割合 (%)	事故シナリオ別 燃料損傷頻度 (/定期事業者検査)	全燃料損傷頻 度に対する割合 (%)	備考
		燃料損傷防止に必要な機能	対策設備							
1	崩壊熱除去機能喪失 + 崩壊熱除去・炉心冷却失敗	崩壊熱除去機能*1	—*1							
		原子炉への注水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>待機中のE.C.C.S (残留熱除去系 (低圧注水モード)) *2</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>CWT, F.P., 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) *3</li> </ul>	2. 4E-10	<0.1		88			
		原子炉への注水に必要な交流電源の復旧	<ul style="list-style-type: none"> <li>常設代替交流電源設備</li> <li>原子炉補機代替冷却系</li> </ul>	3. 1E-11	<0.1	崩壊熱除去機能喪失	12	2. 7E-10	<0.1	
2	外部電源喪失 + 崩壊熱除去・炉心冷却失敗	崩壊熱除去機能*1	—*1							
		原子炉への注水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>上記線内の注水対策</li> <li>非常用ディーゼル発電機 (直流電源の復旧後)</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>							
		原子炉への注水に必要な交流電源の復旧 (非常用ディーゼル発電機の復旧 (非動作の為))	<ul style="list-style-type: none"> <li>所内常設蓄電式直流電源設備</li> <li>原子炉補機代替冷却系 (交流電源復旧後)</li> <li>原子炉浄化系 (交流電源復旧後)</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>CWT (交流電源復旧後), F.P., 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) *3</li> </ul>	4. 3E-08	0.7	全交流動力電源喪失	0.7	6. 0E-06	100	全燃料損傷頻度の100%を燃料損傷防止対策にてカバー
3	外部電源喪失 + 交流電源喪失	原子炉への注水に必要な交流電源の復旧	<ul style="list-style-type: none"> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>							
		崩壊熱除去機能*1	—*1							
		原子炉への注水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>待機中のE.C.C.S (残留熱除去系 (低圧注水モード)) *2</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>CWT, F.P., 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) *3</li> </ul>	6. 0E-06	99		99			
4	外部電源喪失 + 交流電源喪失	原子炉への注水に必要な交流電源の復旧	<ul style="list-style-type: none"> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>							
		崩壊熱除去機能*1	—*1							
		原子炉への注水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>待機中のE.C.C.S (残留熱除去系 (低圧注水モード)) *2</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>CWT, F.P., 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) *3</li> </ul>	1. 9E-12	<0.1		0.5			
5	原子炉冷却材の流出 (制御棒駆動機機軸点検時の冷却材流出) + 流出隔離・炉心冷却失敗	原子炉への注水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>待機中のE.C.C.S (残留熱除去系 (低圧注水モード)) *2</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>CWT, F.P., 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) *3</li> </ul>	1. 1E-12	<0.1		0.3			
		崩壊熱除去機能*1	—*1							
		原子炉への注水機能 (事象の認知を含めたもの)	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉冷却材材流出箇所の隔離操作</li> </ul>	2. 7E-10	<0.1	原子炉冷却材の流出	76	3. 5E-10	<0.1	
6	原子炉冷却材の流出 (原子炉浄化系ブロー時の冷却材流出) + 流出隔離・炉心冷却失敗	原子炉への注水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>待機中のE.C.C.S (残留熱除去系 (低圧注水モード)) *2</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>CWT, F.P., 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) *3</li> </ul>	8. 4E-11	<0.1		24			
		崩壊熱除去機能*1	—*1							
		原子炉への注水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	6. 0E-06	100		100	6. 0E-06	100	
合計										

\*1 運転停止中において崩壊熱除去機能が喪失した場合であっても、原子炉注水を実施することで炉心損傷を防止できる。(原子炉建物 (原子炉開放時) や原子炉格納容器 (原子炉未開放時) へ崩壊熱を逃すことで炉心損傷を防止し、その後長期的な安定状態の確保のために残留熱除去系等を復旧する)

\*2 P R A上、残留熱除去系の喪失も考えられるが「全交流動力電源喪失」と同様になるため、停止中審査ガイド等を参照し、対策に追加。

\*3 使用する注水ラインや設備によっては必ずしも重大事故等対処設備ではないが、事故シナリオによっては使用できる可能性のある線種設備。

第3-3表 重要事故シナリオ (運転停止中) の選定について (1 / 2)

事故シナリオ シナリオ	事故シナリオ シナリオ	事故シナリオ シナリオ	対応する主要な燃料損傷防止対策 (下線部は有効性評価で用いる重大事故等対応設備等を示す)	着眼点 (a: 余裕時間, b: 設備容量, c: 代表性)			着眼点と選定理由
				a	b	c	
崩壊熱除去 機能喪失	崩壊熱除去機能喪失 + 崩壊熱除去・炉心 冷却失敗	① 崩壊熱除去機能喪失 + 崩壊熱除去・炉心冷 却失敗	燃料損傷防止に必要な機能	対策設備			異常の認知や待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系 (常設) による注水といった 緩和措置の実施までに掛かる時間 (約2時間) に比べて十分時間があるため (最も短 いPOS-Sで約3.7時間) 「低」とした。
			崩壊熱除去機能 <sup>*3</sup>	— <sup>*3</sup>	低	低	
崩壊熱除去 機能喪失	外部電源喪失+崩壊 熱除去・炉心冷却失 敗	② 外部電源喪失+崩壊 熱除去・炉心冷却失 敗	原子炉への注水機能	・待機中のECCS (残留熱除去系 (低圧 注水モード)) <sup>*4</sup> ・低圧原子炉代替注水系 (常設) ・CWT, F P, 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) <sup>*5</sup>	低	低	a. 待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系 (常設) といった緩和設備の設備容量 (残 留熱除去系 (低圧注水モード) 約 1,200m <sup>3</sup> /h, 低圧原子炉代替注水系 (常設) 約 200m <sup>3</sup> /h) に比べて蒸発量は十分小さいため (最も崩壊熱の大きなPOS-Sにおい ても蒸発量 38m <sup>3</sup> /h) 「低」とした。 c. 事故シナリオグループに対する寄与割合が88%と支配的である①の事故シナリオ を「高」とし、寄与割合が12%である②の事故シナリオを「中」とした。 ・②の事故シナリオは非常用ディーゼル発電機に期待できるシナリオであり、「全交 流動力電源喪失」で考慮している②の事故シナリオと比べて事故進展や対策が厳し くなく選定しない。 ・以上より、①の事故シナリオを重要事故シナリオとして選定した。
			原子炉への注水に必要な交 流電源の復旧	・常設代替交流電源設備	低	低	
全交流動力 電源喪失	外部電源喪失+直流 電源喪失	① 外部電源喪失+直流 電源喪失	原子炉への注水に必要な交 流電源の復旧	・非常用ディーゼル発電機 (直交流電源の 復旧後) ・常設代替交流電源設備			a. 常設代替交流電源設備の起動, 低圧原子炉代替注水系 (常設) による注水といった緩和 措置の実施までに掛かる時間 (約2時間) に比べて十分時間があるため (最も短い POS-Sで約3.7時間) 「低」とした。 b. 待機中のECCS・低圧原子炉代替注水系 (常設) といった緩和設備の設備容量 (残 留熱除去系 (低圧注水モード) 約 1,200m <sup>3</sup> /h, 低圧原子炉代替注水系 (常設) 約 200m <sup>3</sup> /h) に比べて蒸発量は十分小さいため (最も崩壊熱の大きなPOS-Sにおい ても38m <sup>3</sup> /h) 「低」とした。 c. 事故シナリオグループに対する寄与割合が99%と支配的である②の事故シナリオ を「高」とし、寄与割合が1%未満である①の事故シナリオを「低」とした。 ・①の「外部電源喪失+直交流電源喪失」の事故シナリオは燃料損傷程度が低く、常設 代替交流電源設備や可搬型直交流電源設備, 所内常設蓄電池直交流電源設備による電源供 給, 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) による注水等により燃料損傷が防止できることか ら選定しない。 ・以上を踏まえたうえで、停止中審査ガイドの主要解析条件も参照し、外部電源喪失時 に原子炉補機冷却系の機能が喪失して至交流動力電源喪失に至るシナリオ (②の事 故シナリオ) を重要事故シナリオとして選定した。
			原子炉への注水に必要な直 流電源の復旧 (非常用ディー ゼル発電機起動等の為)	・所内常設蓄電池直交流電源設備 ・原子炉補機代替冷却系 (交流電源復旧後) ・原子炉浄化系 (交流電源復旧後)	低	低	
全交流動力 電源喪失	外部電源喪失+交流 電源喪失	② 外部電源喪失+交流 電源喪失	原子炉への注水機能	・低圧原子炉代替注水系 (常設) ・CWT (交流電源復旧後), F P, 低圧 原子炉代替注水系 (可搬型) <sup>*5</sup>	低	低	・①の「外部電源喪失+直交流電源喪失」の事故シナリオは燃料損傷程度が低く、常設 代替交流電源設備や可搬型直交流電源設備, 所内常設蓄電池直交流電源設備による電源供 給, 低圧原子炉代替注水系 (可搬型) による注水等により燃料損傷が防止できることか ら選定しない。 ・以上を踏まえたうえで、停止中審査ガイドの主要解析条件も参照し、外部電源喪失時 に原子炉補機冷却系の機能が喪失して至交流動力電源喪失に至るシナリオ (②の事 故シナリオ) を重要事故シナリオとして選定した。
			原子炉への注水に必要な交 流電源の復旧	・常設代替交流電源設備 ・原子炉補機代替冷却系 (交流電源復旧後) ・原子炉浄化系 (交流電源復旧後)	低	低	

※1 ◎は選定した重要事故シナリオを示す。  
 ※2 全交流動力電源喪失に至る事故シナリオの②にて、対策の有効性を確認。  
 ※3 運転停止中において崩壊熱除去機能が喪失した場合であっても、原子炉注水を実施することで燃料損傷を防止できる。(原子炉開放時) や原子炉格納容器 (原子炉未開放時) へ崩壊熱を逃すことで燃料損傷を防止し、その後長期的な安定状態の確  
保のために残留熱除去系等を復旧する)  
 ※4 PRA上、残留熱除去系の喪失も考えられるがその場合は事故進展や対策が「全交流動力電源喪失」と同様になるため、停止中審査ガイド等を参照し、対策を追加。  
 ※5 使用する注水ラインや設備によっては必ずしも重大事故等対応設備ではないが、事故シナリオによって使用できる可能性のある緩和設備。  
 ※6 発生の可能性が低く、発生を仮定してもその影響が限定的であるため、リスク評価上重要性が低いと判断し、PRAの評価対象から除外したものを。



第3-3表 重要事故シーケンス (運転停止中) の選定について (2/2)

事故シーケンスグループ	事故シーケンス*		燃料損傷防止に必要な機能	対策設備	着眼点 (a: 余裕時間, b: 設備容量, c: 代表性)			着眼点と選定理由
	①制御棒駆動機構点検時の冷却材流出+流出隔離・炉心冷却失敗	②局部出力領域モニタ交換時の冷却材流出+流出隔離・炉心冷却失敗			a	b	c	
原子炉冷却材の流出	-	原子炉冷却材の流出+流出隔離・炉心冷却失敗	原子炉への注水機能 (事象の認知を含めたもの)	<ul style="list-style-type: none"> <li>待機中のE.C.C.S (残留熱除去系 (低圧注水モード))</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>CW T, F P, 低圧原子炉代替注水系 (可搬型)※3</li> <li>原子炉冷却材流出箇所の隔離操作</li> </ul>	低	中	低	<p>a. 異常の認知、漏えい箇所の隔離や待機中のE.C.C.S・低圧原子炉代替注水系 (常設)の起動といった緩和措置の実施までにかかる時間 (最大2時間) に比べて長いため、(余裕時間が最も短い)③の事故シーケンスにおいても「低」とした。</p> <p>b. 待機中のE.C.C.S・低圧原子炉代替注水系 (常設) といった緩和設備の設備容量 (残留熱除去系 (低圧注水モード) 約1,200m<sup>3</sup>/h, 低圧原子炉代替注水系 (常設) 約200m<sup>3</sup>/h) に比べて原子炉冷却材流出流量は十分小さいが、その中で最も大きい④の事故シーケンスを「高」、最も小さい②の事故シーケンスを「低」、その間である①、③の事故シーケンスを「中」とした。</p> <p>c. 事故シーケンスグループに対する帯与割合が76%と支配的である③の事故シーケンスを「高」とし、帯与割合が24%である④の事故シーケンスを「中」、帯与割合が1%未満である①、②の事故シーケンスを「低」とした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「原子炉浄化系プロロープ時の冷却材流出」は2.7E-10/定期事業者検査、「残留熱除去系切替時の冷却材流出」は8.4E-11/定期事業者検査であり、どちらも燃料損傷程度が低い、「制御棒駆動機構点検時の冷却材流出」等の点検作業に伴う原子炉冷却材流出事象 (①、②)の事故シーケンスは、運転操作に伴う原子炉冷却材流出事象と異なり、作業・操作場所と漏えい発生箇所が同一であるため、認知が容易であること、「原子炉浄化系プロロープ時の冷却材流出」については、原子炉冷却材を低下させる操作であるため、原子炉水位は適宜監視されており、原子炉冷却材流出発生時には、プロロープの排水先である機器ドレンタンクの水位高等によっても認知することができると、認知は容易であること、また、④は流出流量が94m<sup>3</sup>/hと他の漏えい事象より大きいことから、事故シーケンスを重要事故シーケンスとして選定した。</li> </ul>
		原子炉冷却材の流出+流出隔離・炉心冷却失敗			低	低	高	
		原子炉浄化系プロロープ時の冷却材流出+流出隔離・炉心冷却失敗			低	中	高	
	◎	◎	◎	◎				
反応度の誤投入	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	<p>a, b. 事象発生後においても崩壊熱除去機能や注水機能は喪失しないため、それらの緩和措置実施までの余裕時間での余裕は不要であるため「-」とした。</p> <p>c. PRA評価において選定していない起因事象※5による事故シーケンスであるため、「-」とした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>代表性の観点から、運転停止中に実施される検査等により、最大反応度値を有する制御棒1本が全引き抜きされている状態から、他の1本の制御棒が操作量の制限を超える誤った操作によって引き抜きが、異常な反応度の投入を認知できずに燃料の損傷に至る事故を想定する。</li> </ul>

※1 ◎は選定した重要事故シーケンスを示す。

※2 全交流動力電源喪失に至る事故シーケンスの②にて、対策の有効性を確認。

※3 運転停止中において崩壊熱除去機能が喪失した場合であっても、原子炉注水を実施することで燃料損傷を防止できる。(原子炉建物 (原子炉開放時) や原子炉格納容器 (原子炉未開放時) への崩壊熱を逃すことで燃料損傷を防止し、その後長期的な安定状態の確保のために残留熱除去系等を復旧する)

※4 PRA上、残留熱除去系の喪失も考えられるがその場合は事象進展や対策が「全交流動力電源喪失」と同様になるため、停止中審査ガイド等を参照し、対策を追加。

※5 使用する注水ラインや設備によっては必ずしも重大事故等対処設備ではないが、事故シーケンスによって使用できる可能性のある緩和設備。

※6 発生の可能性が低く、発生を仮定してもその影響が限定的であるため、リスク評価上重要性が低いと判断し、PRAの評価対象から除外したものの。

対処する主要な燃料損傷防止対策 (下線部は有効性評価で用いる重大事故等対処設備等を示す)

燃料損傷防止に必要な機能

対策設備

原子炉東高信号によるスクラム

原子炉保護機能

原子炉建物 (原子炉開放時) や原子炉格納容器 (原子炉未開放時) への崩壊熱を逃すことで燃料損傷を防止し、その後長期的な安定状態の確保のために残留熱除去系等を復旧する

停止中審査ガイド等を参照し、対策を追加。

PRA上、残留熱除去系の喪失も考えられるがその場合は事象進展や対策が「全交流動力電源喪失」と同様になるため、停止中審査ガイド等を参照し、対策を追加。

使用する注水ラインや設備によっては必ずしも重大事故等対処設備ではないが、事故シーケンスによって使用できる可能性のある緩和設備。

発生の可能性が低く、発生を仮定してもその影響が限定的であるため、リスク評価上重要性が低いと判断し、PRAの評価対象から除外したものの。

第3-4表 燃料損傷までの余裕時間について

(a) 崩壊熱除去機能喪失及び外部電源喪失

POS	燃料損傷までの余裕時間(h)
S	3.7
A	5.3
B-1	80
B-2	110
B-3	160
B-4	190
C	26
D	27

(b) 原子炉冷却材の流出を起因事象とする場合

原子炉冷却材流出事象	制御棒駆動機構点検時	局部出力領域モニタ交換時	残留熱除去系切替時	原子炉浄化系ブロー時
POS	B-2			
燃料損傷に至る流出量(m <sup>3</sup> )	1.0E+03	1.0E+03	1.0E+03	1.2E+02
原子炉冷却材流出量(m <sup>3</sup> /h)	94			
燃料損傷までの余裕時間(h)				

※1 残留熱除去系A系からB系への切替え。

※2 シール確保失敗等による漏えい。

個別プラント評価による抽出するもの  
(解釈 4-1 (b) の事故シナシナグループ)

<個別プラントの確率論的リスク評価 (PRA) >

- ・内部事象
  - <PRAに代わる方法による評価>
  - ・地震, 津波
  - ・その他の外部事象  
火災, 溢水, 洪水, 風 (台風), 竜巻,  
凍結, 降水, 積雪, 人為事象等
- これらの外部事象により誘発される  
起因事象について検討することで

概略評価を実施

<事故シナシナ抽出・燃料損傷頻度算出結果>

シナシナ ID	シナシナ名	発生頻度 (1/a)	燃料損傷頻度 (1/a)	燃料損傷頻度 (1/a) (注)	燃料損傷頻度 (1/a) (注)
1	炉内燃料棒破断による燃料損傷	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
2	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
3	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
4	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
5	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
6	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
7	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
8	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
9	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
10	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
11	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
12	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
13	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
14	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
15	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
16	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
17	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
18	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
19	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05
20	燃料棒破断による燃料損傷 (燃料棒破断)	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05	1.0E-05

必ず想定する事故シナシナグループ  
(解釈 4-1 (a) の事故シナシナグループ)

- ・崩壊熱除去機能喪失  
(残留熱除去系の故障による停止時冷却機能喪失)
  - ・全交流動力電源喪失
  - ・原子炉冷却材の流出
  - ・反応度の誤投入\*
- ※PRA では評価対象外としている。

事故シナシナごとに  
停止中審査ガイドに従い  
重要事故シナシナを  
選定

第3-1図 運転停止中の原子炉における事故シナシナグループ抽出  
及び重要事故シナシナ選定の全体プロセス

発電機出力							
原子炉圧力	約6.9MPa (大気圧)	約6.9MPa	約6.9MPa				
原子炉冷却材温度	約280℃	約50℃	約280℃				
復水器真空度	約-95kPa	約-95kPa					
原子炉水位	通常水位	原子炉ウエル満水	原子炉圧力容器満水	通常水位			
主要操作	発電機解列 制御棒全挿入 復水器真空破壊 原子炉圧力容器開放	原子炉圧力容器閉鎖	原子炉圧力容器漏えい試験 起動準備	復水器真空度上昇 制御棒引抜開始	発電機並列		
PRA評価で設定したプラント状態	出力運転時に含まれる期間	S	A	B	C	D	出力運転時に含まれる期間

第3-2図 定期事業者検査時のプラント状態と主要パラメータの推移

プラントの状態 (POS) ※1	原子炉冷温停止状態への移行状態		原子炉格納容器/原子炉圧力容器開放及び原子炉ウエル満水への移行状態		原子炉ウエル満水状態				原子炉格納容器/原子炉圧力容器閉鎖及び起動準備への移行状態		起動準備状態
	S (1)	A (5)	B-1 (6)	B-2 (28)	B-3 (10)	B-4 (8)	C (9)	D (6)			
崩壊熱の大きさ	高			中							
PRA上考慮が必要な工程		—	全燃料取出	制御棒駆動機構点検局部出力領域モニタ交換	残留熱除去系切替え	全燃料装荷	原子炉浄化系プロロー				
	原子炉水位	通常水位		原子炉ウエル満水			通常水位				
除熱対象の燃料	炉心			炉心+燃料プール			炉心				
プールゲート	—			開放			—				
残留熱除去系 (A系)											
残留熱除去系 (B系)											
原子炉浄化系 (A系) ※2											
原子炉浄化系 (B系) ※2											
燃料プール冷却系 (A系、B系) ※2											
高圧炉心スプレイ系※2											
低圧炉心スプレイ系※2											
復水輸送系 (A系) ※3											
復水輸送系 (B系) ※3											
復水輸送系 (C系) ※3											
燃料プール補給水系											

※1 ( ) は期間 (日数) を示す

※2 今回のPRAでは期待していない設備 (残留熱除去系 (残留熱除去系 (低圧注水モード) に期待しない))

※3 定期事業者検査に先行して点検を実施

崩壊熱除去に用いている設備  
機能に期待できる設備

第3-3図 POSの分類及び定期事業者検査工程

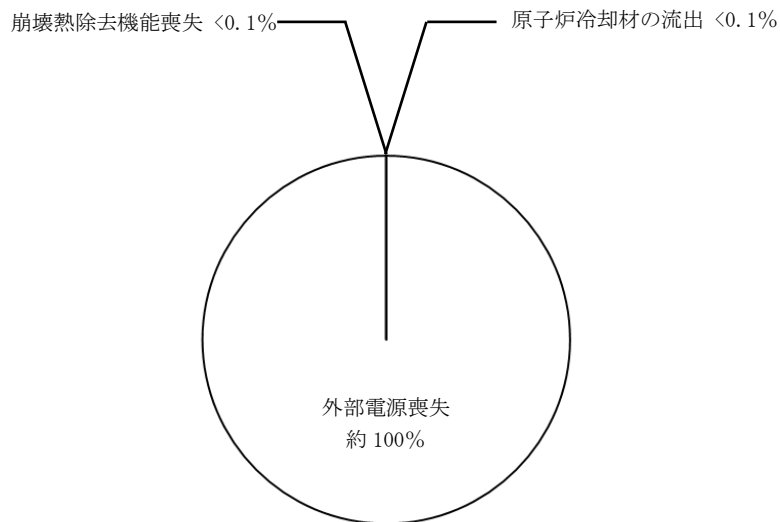
外部電源喪失	直流電源	交流電源※1	崩壊熱除去・炉心冷却※2	事故シーケンス	事故シーケンスグループ	シーケンスNo.
				燃料損傷なし	燃料損傷なし	-
				外部電源喪失+崩壊熱除去・炉心冷却失敗	崩壊熱除去機能喪失	(2)
				外部電源喪失+交流電源喪失	全交流動力電源喪失	(4)
				外部電源喪失+直流電源喪失	全交流動力電源喪失	(3)

崩壊熱除去機能喪失※3	崩壊熱除去・炉心冷却※2	事故シーケンス	事故シーケンスグループ	シーケンスNo.
		燃料損傷なし	燃料損傷なし	-
		崩壊熱除去機能喪失+崩壊熱除去・炉心冷却失敗	崩壊熱除去機能喪失	(1)

原子炉冷却材の流出※4	流出隔離・炉心冷却※5	事故シーケンス	事故シーケンスグループ	シーケンスNo.
		燃料損傷なし	燃料損傷なし	-
		原子炉冷却材の流出+流出隔離・炉心冷却失敗	原子炉冷却材の流出	(5), (6), (7), (8)

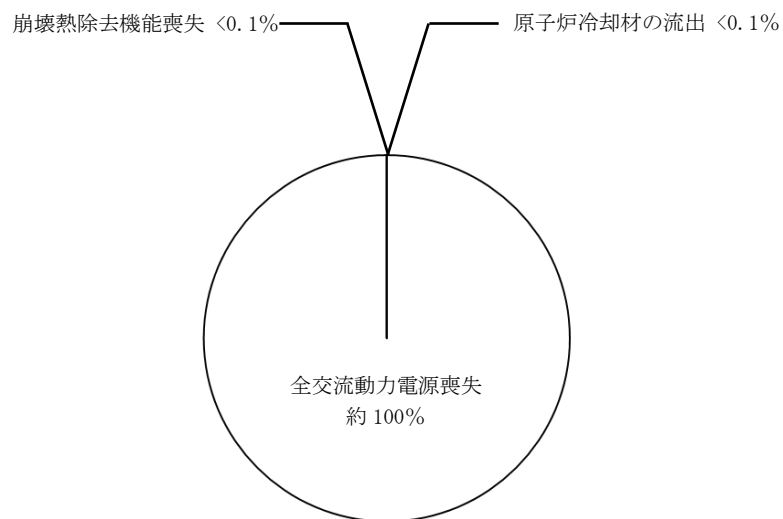
- ※1 非常用ディーゼル発電機全台が機能喪失を示すヘディング。
- ※2 崩壊熱除去機能（残留熱除去系）及び注水機能（復水輸送系，燃料プール補給水系）の確保に失敗するかどうかを示すヘディング。
- ※3 残留熱除去系機能喪失〔フロントライン〕及び補機冷却系機能喪失。
- ※4 残留熱除去系切替・制御棒駆動機構・局部出力領域計装，原子炉浄化系ブロー時における操作誤りによる原子炉冷却材流出。
- ※5 事象を認知し，注水に成功するかどうかを示すヘディング（崩壊熱除去機能（残留熱除去系）には期待しない）。漏えい箇所隔離の成功・失敗により注水機能の成功基準が異なる。

### 第3-4図 内部事象停止時レベル1 P R A イベントツリー



(燃料損傷頻度：6.0E-06／定期事業者検査)

第3-5図 起因事象別の寄与割合



(燃料損傷頻度：6.0E-06／定期事業者検査)

第3-6図 事故シーケンスグループ別の寄与割合

#### 4. 事故シーケンスグループ及び重要事故シーケンス等の選定に活用したPRAの実施プロセスについて

事故シーケンスグループ及び重要事故シーケンス等の選定に際して適用可能としたPRAは、一般社団法人日本原子力学会において標準化された実施基準を参考に実施した。

これらのPRAについて、PRA実施プロセスの確認及び更なる品質向上を目的とし、一般社団法人日本原子力学会の実施基準への対応状況及びPRAの手法の妥当性について、海外のレビューを含む専門家によるピアレビューを実施した。なお、本ピアレビューでは、第三者機関から発行されている「PSAピアレビューガイドライン」（平成21年6月 一般社団法人 日本原子力技術協会）を参考にした。ピアレビューの結果、実施したPRAにおいて、事故シーケンスグループ及び重要事故シーケンス等の選定結果に影響を及ぼすような技術的な問題点がないことを確認した。その結果を別紙10に示す。

また、各実施項目について「PRAの説明における参照事項」（平成25年9月 原子力規制庁）において参照すべき事項として挙げられているレベル1PRA（内部事象、内部事象（停止時）、外部事象（地震及び津波））、レベル1.5PRA（内部事象、外部事象（地震））の対応状況を確認した。その結果を別紙11に示す。



有効性評価の事故シーケンスグループ等の選定における  
外部事象の考慮について

重大事故等の有効性評価に係る個別プラントでの事故シーケンスグループの選定に際しては、解釈に「個別プラントの内部事象に関する確率論的リスク評価（P R A）及び外部事象に関する P R A（適用可能なもの）又はそれに代わる方法で評価を実施すること。」と記載されている。

今回の申請に当たっては、外部事象に関しては、P R A手法が適用可能な段階にあると判断した地震、津波を対象にレベル 1 P R Aを実施した。

内部溢水、内部火災及びその他の外部事象に関する運転時レベル 1 P R A、外部事象運転時レベル 1.5 P R A並びに外部事象停止時レベル 1 P R Aについては、P R A手法の確立に向けた検討を実施中の段階であること、又は現実的な定量評価の実施に向けて必要なデータ整備を進めていく段階であることから、現段階では「適用可能なもの」に含まれないものと判断し、「それに代わる方法」として、これらの外部事象に誘発される起因事象について検討することで、これらの外部事象の影響を考慮した場合の事故シーケンスグループ及び格納容器破損モード選定への影響について、以下のとおり整理した。

1. 炉心損傷防止対策の事故シーケンスグループ選定に係る検討

(1) 内部溢水、内部火災の影響

今回は P R Aの適用を見合わせたが、内部溢水、内部火災については運転時レベル 1 P R Aの手法確立・個別プラントへの展開に係る検討作業がある程度進んでいる。このことを踏まえ、P R Aを念頭にして、内部溢水、内部火災の発生によって誘発される可能性がある起因事象を、定性的な分析によって抽出した。抽出結果を第 1 表に示す。

第 1 表に示す起因事象が発生した場合、屋内に設置されている安全機器の機能喪失を経て炉心損傷に至る可能性があるが、これらを起因とする事故シーケンスは、同機器のランダム故障・誤操作を想定する内部事象運転時レベル 1 P R Aに用いた起因事象に含まれている。

また、設計基準対象施設によって、内部溢水、内部火災の影響拡大防止対策が図られることで、異なる区画等、広範囲における重畳的な安全機器の同時機能喪失発生を防止できると考える。

したがって、内部溢水、内部火災を起因とした炉心損傷頻度の定量化には上記の課題が残るものの、定性的な起因事象の抽出結果から想定される事故シーケンスは、内部事象運転時レベル 1 P R Aの検討から得られる事故シーケンスの一部として分類できるため、新たに追加が必要となる事故シーケンスグループが発生する可能性は低いと考える。

第1表 内部溢水，内部火災により誘発される起因事象の例

起因事象	起因事象を誘発する要因の例
過渡事象	内部溢水，内部火災による過渡変化
外部電源喪失	内部溢水，内部火災による常用母線の機能喪失
手動停止	内部溢水，内部火災による緩和設備の機能喪失に伴う手動停止
サポート系喪失	内部溢水，内部火災によるサポート系の機能喪失
LOCA	内部溢水，内部火災による逃がし安全弁制御回路の誤作動
インターフェイスシステムLOCA	内部溢水，内部火災による隔離弁制御回路の誤作動

(2) その他の外部事象の影響

その他の外部事象としては，解釈第六条第二項に自然現象及び第八項に発電用原子炉施設の安全性を損なわせる原因となるおそれがある事象であって人為によるもの（故意によるものを除く。）（以下「人為事象」という。）として，具体的に以下が記載されている。

第6条（外部からの衝撃による損傷の防止）

（中略）

- 2 第1項に規定する「想定される自然現象」とは、敷地の自然環境を基に、洪水、風（台風）、竜巻、凍結、降水、積雪、落雷、地滑り、火山の影響、生物学的事象又は森林火災等から適用されるものをいう。

（中略）

- 8 第3項に規定する「発電用原子炉施設の安全性を損なわせる原因となるおそれがある事象であって人為によるもの（故意によるものを除く。）」とは、敷地及び敷地周辺の状況をもとに選択されるものであり、飛来物（航空機落下等）、ダムの崩壊、爆発、近隣工場等の火災、有毒ガス、船舶の衝突又は電磁的障害等をいう。

（略）

これらの地震，津波以外の自然現象及び人為事象がプラントに与え得る影響について，設計基準及びそれを超える場合，自然現象及び人為事象の重畳も含めて定性的に分析した結果を別紙1（補足資料1）に示す。

地震，津波以外の自然現象及び人為事象について，事故シーケンスの発生可能性を検討した結果，運転時を対象として実施した内部事象，地震及び津波レベル1 PRAにて抽出した事故シーケンスグループ以外に新たに追加が必要となる事故シーケンスグループはないものと判断した。

## 2. 格納容器破損モード選定に係る検討

外部事象運転時レベル1.5 P R Aについては、地震 P R Aのみ学会標準に一部関連する記載があるものの、その他の事象については標準的な P R A手法が確立されておらず、定量評価を実施できる状況ではないことから、以下のとおり定性的な検討を実施した。

### (1) 地震の影響

地震がプラントに与え得る特有の影響について、新たに有効性評価の対象として追加すべき格納容器破損モードの観点で定性的に分析した結果を別紙1（補足資料2）に示す。

また、運転時を対象として実施した地震レベル1 P R Aの結果からは、地震特有の炉心損傷モードとして原子炉建物の損傷や原子炉格納容器の破損等の炉心損傷直結事象が抽出されている。これらの事象では原子炉格納容器も破損に至るが、この場合の原子炉格納容器の破損は事象進展によって原子炉格納容器に負荷が加えられて破損に至るものではなく、地震による直接的な原子炉格納容器の閉じ込め機能喪失である。これらについて、耐震補強等による事象の発生防止を図ること、あるいは大規模損壊対策として可搬型のポンプ、電源、放水砲等を駆使した対応により影響緩和を試みることで対応していく事象であり、有効性評価における評価事故シーケンスとしては適切でないと考える。

したがって、有効性評価の対象とすべき格納容器破損モードとして、内部事象運転時レベル1.5 P R Aにて抽出した格納容器破損モード以外に新たに追加が必要となる格納容器破損モードはないものと判断した。

### (2) 津波の影響

津波がプラントに与え得る特有の影響について、建物外部の設備が機能喪失することは想定されるものの、原子炉格納容器が津波による物理的負荷（波力・漂流物の衝撃力）によって直接破損することは想定し難い。また、炉心損傷後の原子炉格納容器内の物理化学現象についても内部事象運転レベル1.5 P R Aで想定するものと同等と考えられる。

したがって、有効性評価の対象とすべき格納容器破損モードとして、内部事象運転時レベル1.5 P R Aにて抽出した格納容器破損モード以外に新たに追加が必要となる格納容器破損モードはないものと判断した。

### (3) 内部溢水・内部火災の影響

1. (1)に示した運転時レベル1 P R Aの観点での起因事象の検討からも、炉心損傷に至る事故シーケンスグループとしては内部事象運転時レベル1 P R Aで用いた事象以外に追加すべきものは発生しないと判断しており、原子炉格納容器が直接破損することは想定し難い。また、炉心損傷後の原子炉格納容器内の

物理化学現象についても、内部事象運転時レベル1.5 P R Aで想定するものと同  
等と考えられる。

したがって、有効性評価の対象とすべき格納容器破損モードとして、内部事  
象運転時レベル1.5 P R Aにて抽出した格納容器破損モード以外に新たに追加  
が必要となる格納容器破損モードはないものと判断した。

#### (4) その他外部事象の影響

1. (2)に示したプラントに与える影響の検討からは、屋外施設の損傷によるサ  
ポート系の機能喪失が想定されるものの、炉心損傷に至る事故シーケンスグル  
ープとしては内部事象運転時レベル1 P R Aの結果抽出された事故シーケンス  
グループに追加すべきものは発生しないものと判断している。また、炉心損傷  
後の原子炉格納容器内の物理化学現象についても、内部事象運転時レベル1.5  
P R Aで想定するものと同等と考えられる。

したがって、有効性評価の対象とすべき格納容器破損モードとして、内部事  
象運転時レベル 1.5 P R Aにて抽出した格納容器破損モード以外に新たに追加  
が必要となる格納容器破損モードはないものと判断した。

### 3. 運転停止中原子炉における燃料損傷防止対策の事故シーケンスグループ選定に 係る検討

停止時レベル1 P R Aについては地震、津波、内部溢水、内部火災及びその他  
の外部事象に関するレベル1 P R Aの標準的な手法が確立されておらず、定量評  
価を実施できる状況にない。このため、運転時の地震及び津波レベル1 P R Aの  
評価結果、内部溢水、内部火災及びその他の外部事象に関する整理並びに第1図  
に示す内部事象停止時レベル1 P R Aのマスターロジックダイアグラムを参考に、  
地震、津波、内部溢水、内部火災及びその他の外部事象によって発生する起因事  
象を以下のとおり定性的に分析し、起因事象の抽出結果を第2表にまとめた。

さらに抽出した起因事象をもとに、内部事象停止時レベル1 P R Aにて抽出し  
た事故シーケンスグループ以外に、新たに追加が必要となる事故シーケンスグル  
ープの有無を確認した。

#### (1) 運転時と運転停止中のプラント状態等の差異

運転停止中における燃料損傷防止対策の事故シーケンスグループの抽出にお  
いては、運転時を対象に実施した整理を参考に評価を行ったが、評価に当たっ  
てはその前提として、運転時と運転停止中のプラント状態等の差異を把握する  
ことが重要と考え、その整理を行った。整理に当たり、一般的な運転時と運転  
停止中の違いとして以下の観点に注目し、それぞれについて事故シーケンスグル  
ープの抽出において、考慮が必要であるか確認した。

- ・崩壊熱、原子炉冷却材の温度・圧力

運転停止中の崩壊熱、原子炉冷却材の温度・圧力は運転時に比べ小さく

なるため、事象進展は緩やかになるが、事故シーケンスグループの抽出においては影響しない。

- ・燃料損傷防止に必要となる機能

運転停止中の燃料損傷防止に必要となる機能は、運転時と異なり、原子炉停止機能、高圧注水機能等が不要となる。そのため、事故シーケンスグループの抽出においてはこれらの差異について考慮する必要がある。

- ・原子炉水位、原子炉圧力容器及び原子炉格納容器の状態

原子炉水位の変化は時間余裕へ影響するものの、事故シーケンスグループの抽出には影響しない。

運転停止中は、原子炉圧力容器及び原子炉格納容器が開放されている状態も考えられるが、これらの状態によらず、必要な機能は崩壊熱除去又は注水機能であり変わらない。そのため、事故シーケンスグループの抽出において考慮不要である。

- ・緩和設備・サポート系設備の状態

運転停止中において、一部の緩和設備及びサポート系設備の点検又は試験によりその機能に期待できない状態も想定される。ただし、期待できる設備は少なくなるものの、必要な機能は原子炉施設保安規定により担保されるものであり、また、既に内部事象停止時レベル1 P R Aでこれらの設備の点検又は試験により機能に期待できないことは考慮されている。そのため、本観点は事故シーケンスグループの抽出において考慮不要である。

- ・停止時特有の作業の影響

運転停止中において、運転時と異なり、点検作業等に伴う開口箇所の発生等、現場の状態が異なることが考えられる。そのため、事故シーケンスグループの抽出においてはこれらの差異について考慮する必要がある。

以上より、運転停止中における燃料損傷防止対策の事故シーケンスグループの抽出においては、運転時を対象に実施した整理を参考にする際は、「燃料損傷防止に必要となる機能」、「停止時特有の作業の影響」について考慮する必要がある。

## (2) 地震の影響

個々の機器が地震を受けた際に損傷する可能性は運転時と運転停止中で異なるものではないが、各系統の機能喪失がプラントに与える影響の観点では運転時と運転停止中で異なり、運転停止中には燃料の崩壊熱除去に関連する系統が重要となる。

運転停止中に燃料の崩壊熱除去を継続している系統は、崩壊熱除去に関する系統及びそのサポート系であり、フロントライン系としては残留熱除去系、サポート系としては原子炉補機冷却系及び電源系が該当する。

地震により原子炉補機冷却系又は残留熱除去系が機能喪失すると「崩壊熱除去機能喪失」の起因事象が発生し、また、碍子、所内電源設備等の受電設備が損傷すると「外部電源喪失」の起因事象が発生する。これらの起因事象が発生した場合、屋内に設置されている安全機器の機能喪失を経て燃料損傷に至る可能性があるが、事故シーケンスは、同機器のランダム故障・誤操作を想定する内部事象運転停止時レベル1 P R Aにて抽出したものに含まれる。

地震特有の事象として、原子炉建物損傷、原子炉格納容器損傷、原子炉压力容器損傷、E x c e s s i v e L O C A、制御室建物損傷、廃棄物処理建物損傷、計装・制御系喪失、格納容器バイパスの発生が挙げられるが、これらについては運転時を対象とした炉心損傷に至る事故シーケンスの抽出における考え方と同様、損傷の規模に応じて、機能を維持した設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備等で炉心損傷防止を試みるものとする。一方、損傷の程度が大きく、設計基準事故対処設備又は重大事故等対処設備に期待できない場合には、大規模損壊対策を含め、建物以外に分散配置した設備や可搬型の機器を駆使し、影響緩和を図ることで対応すべきものとする。

したがって、運転停止中の地震の発生を考慮しても、内部事象停止時レベル1 P R Aにおいて抽出した事故シーケンスグループ以外に新たに追加が必要となる事故シーケンスグループはないものと判断した。

### (3) 津波の影響

運転停止中には点検等に伴い、運転時にはない開口が生じている可能性が考えられるが、運転停止中においても防波壁の機能は維持されることから、防波壁を超えて敷地に遡上する津波によるプラントへの影響は、運転時と運転停止中において相違はないものとする。各系統の機能喪失がプラントに与える影響の観点では運転時と運転停止中で異なり、運転停止中には燃料の崩壊熱除去に関連する系統が重要となる。

津波特有の事象として、直接炉心損傷に至る事象が発生すると、緩和系の機能に期待できず炉心損傷に至るが、これらについては運転時を対象とした炉心損傷に至る事故シーケンスの抽出における考え方と同様、損傷の規模に応じて、機能を維持した設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備等で炉心損傷防止を試みるものとする。一方、損傷の程度が大きく、設計基準事故対処設備又は重大事故等対処設備に期待できない場合には、大規模損壊対策を含め、建物以外に分散配置した設備や可搬型の機器を駆使し、影響緩和を図ることで対応すべきものとする。

したがって、運転停止中の津波の発生を考慮しても、内部事象停止時レベル1 P R Aにおいて抽出した事故シーケンスグループ以外に新たに追加が必要と

なる事故シーケンスグループはないものと判断した。

なお、運転停止中において、必要な浸水防止対策がすべて喪失することがないように複数の同時点検等は実施しない等、少なくとも1区分は機能維持可能な運用とする。

#### (4) 内部溢水、内部火災の影響

個々の機器が内部溢水又は内部火災の影響を受けた際に損傷する可能性は運転時と運転停止中で異なるものではないが、各系統の機能喪失がプラントに与える影響の観点では運転時と運転停止中で異なり、運転停止中には燃料の崩壊熱除去に関連する系統が重要となる。

運転停止中に燃料の崩壊熱除去を継続している系統は、崩壊熱除去に関する系統及びそのサポート系であり、フロントライン系としては残留熱除去系、サポート系としては原子炉補機冷却系及び電源系が該当する。

内部溢水又は内部火災により原子炉補機冷却系又は残留熱除去系が機能喪失すると「崩壊熱除去機能喪失」の起因事象が発生し、また、受電設備が損傷すると「外部電源喪失」の起因事象が発生するが、これらを起因とする事故シーケンスは、同機器のランダム故障・誤操作を想定する内部事象運転停止時レベル1 P R Aにて抽出したものに含まれる。

したがって、運転停止中の内部溢水又は内部火災の発生を考慮しても、内部事象停止時レベル1 P R Aにおいて抽出した事故シーケンスグループ以外に新たに追加が必要となる事故シーケンスグループはないものと判断した。

なお、運転停止中においても必要な内部溢水、内部火災の影響拡大防止対策を講じ、異なる区画等、広範囲における重畳的な安全機器の同時機能喪失の発生を防止する\*。

※内部溢水：定期事業者検査時等でのハッチ開放時の運用として異区分の安全機器の点検中に当該ハッチを開放しない等、内部溢水が複数の安全機能に影響しないよう対応を実施する。

内部火災：原子炉停止時にも必要な防護処置等は実施される。

#### (5) その他外部事象の影響

地震、津波以外の自然現象及び人為事象について、運転時の整理（別紙1（補足資料1））を参考に起因事象が発生し得るかを確認した。確認の結果、出力運転時と運転停止中を比較し、プラント状態、必要な機能の違いが評価に影響しないことを確認した。

その他の自然現象の発生に伴う起因事象は、内部事象停止時レベル1 P R Aにおいて抽出される起因事象に包含されるため、内部事象停止時レベル1 P R Aにおいて抽出した事故シーケンスグループ以外に新たに追加が必要となる事故シーケンスグループはないものと判断した。

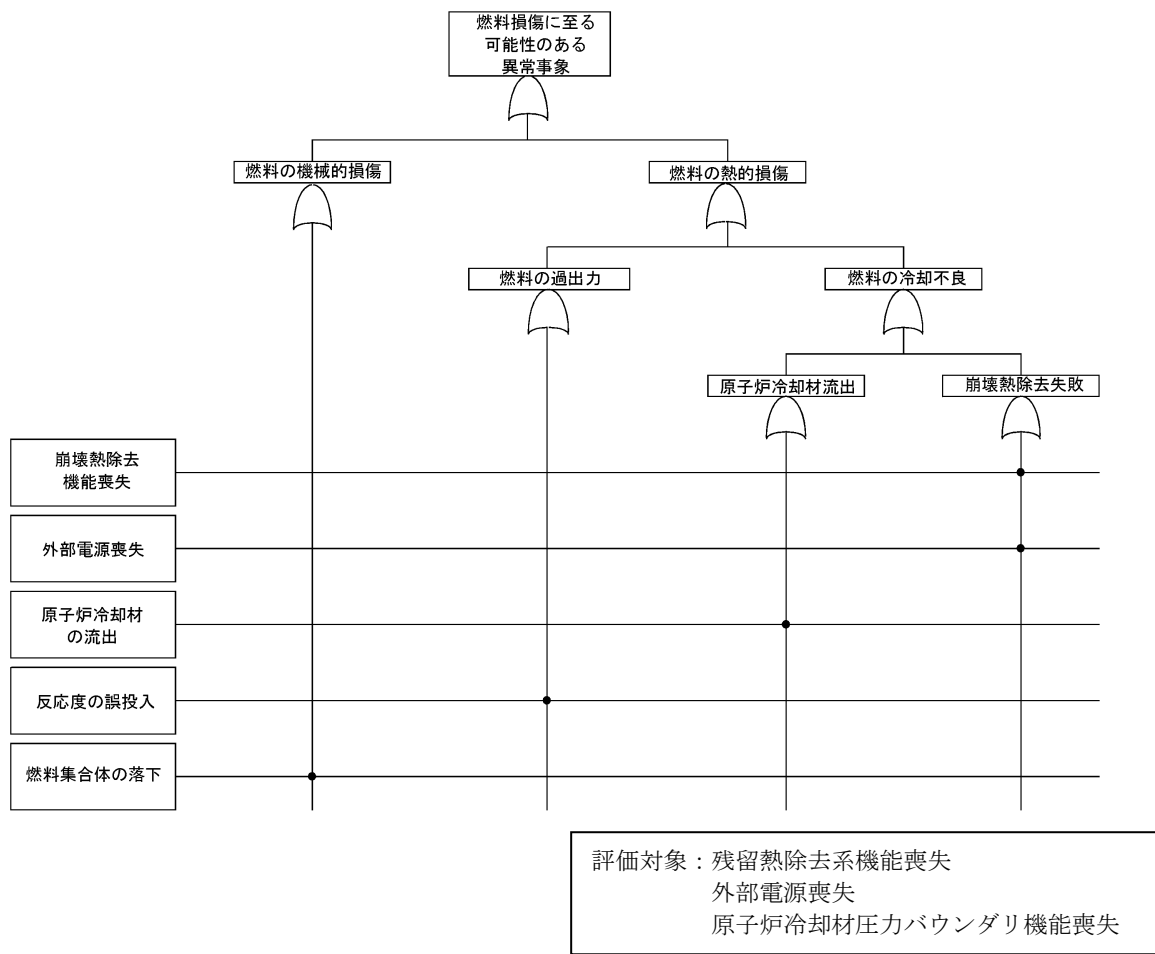
#### 4. まとめ

今回の事故シーケンスグループ等の選定に際して、現段階でP R Aが適用可能と判断した運転時地震レベル1 P R A，運転時津波レベル1 P R A以外の外部事象について、定性的な分析及び推定から新たに追加すべき事故シーケンスグループ並びに格納容器破損モードはないものと評価した。

なお、今回定性的な評価とした各P R Aや地震発生時に想定される地震随伴津波，地震随伴火災及び地震随伴溢水を対象としたP R Aについては，評価手法整備に向けた研究及び実機プラントへの適用の検討を順次進めていく予定である。

以上





第1図 燃料損傷に至る可能性のある異常事象マスターロジックダイアグラム  
(内部事象停止時レベル1 P R A)

第2表 運転停止中原子炉における各外部事象で発生する起因事象及び事故シナリオの抽出結果

地震	想定される系統・機器の損傷			起因事象	主な燃料損傷防止対策
	津波	内部火災, 内部溢水	その他の外部事象		
<ul style="list-style-type: none"> <li>受電設備の損傷</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>受電設備の没水</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>受電設備の損傷</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>受電設備の損傷 (風(台風), 竜巻, 凍結, 積雪, 落雷, 火山の影響, 森林火災)</li> </ul>	外部電源喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>ガスタービン発電機</li> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>残留熱代替除去系</li> <li>低圧原子炉代替注水系(可搬型)</li> <li>津波による浸水防止<sup>※1</sup></li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>残留熱除去系の損傷</li> <li>原子炉補機冷却系の損傷</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機海水系の没水</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>残留熱除去系の損傷</li> <li>原子炉補機冷却系の損傷</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>海水系の閉塞 (火山の影響)</li> </ul>	崩壊熱除去機能喪失	
— <sup>※2</sup>	—	—	—	原子炉冷却材パウンダリ機能喪失	—
<ul style="list-style-type: none"> <li>Excessive LOCA</li> <li>計装・制御系喪失</li> <li>格納容器バイパス</li> <li>原子炉格納容器損傷</li> <li>原子炉圧力容器損傷</li> <li>原子炉建物損傷</li> <li>制御室建物損傷</li> <li>廃棄物処理建物損傷</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>直接炉心損傷に至る事象</li> </ul>	—	—	直接炉心損傷に至る事象	<ul style="list-style-type: none"> <li>運転時の地震及び津波レベル1 PRAに基づき, 直接炉心損傷に至る可能性のある起因事象を抽出しているが, 別紙2に示すとおり, 評価方法にはかなりの保守性を有し, かつ, 大きな不確かさを有する。</li> <li>運転時の取扱いと同様, 機能を維持した設計基準事故対処設備や重大事故等対処設備等を柔軟に活用し, 影響緩和を図ることに対応すべきものと考ええる。</li> </ul>

※1: 運転停止中において, 必要な浸水防止対策がすべて喪失することがないように複数の同時点検等は実施しない等, 少なくとも1区分は機能維持可能な運用とする。

※2: 「Excessive LOCA」として直接炉心損傷に至る事象に整理する。

有効性評価の事故シーケンスグループの選定に際しての地震，津波以外の  
外部事象の考慮について

解釈第37条第1－1項では、運転時の異常な過渡変化及び設計基準事故に対して原子炉の安全性を損なうことがないように設計することを求められる構築物、系統及び機器がその安全機能を喪失した場合であって、炉心の著しい損傷に至る可能性があるとして想定する事故シーケンスグループを抽出するため、個別プラントのPRA又はそれに代わる方法で評価を実施することが求められている。

外部事象の内、日本原子力学会標準として実施基準が定められておりPRAの適用実績がある地震及び津波については、それぞれPRAを実施し事故シーケンスグループの抽出を実施している。（ただし、地震随伴火災や津波随伴火災等、随件事象の評価はまだ未確立であり、今回、評価はできていない。）

また、地震、津波以外の自然現象については現段階でのPRA評価は実施困難であるため、「それに代わる方法」として以下に示す方法にて定性的に事故シーケンスグループの抽出を行い、重大事故等の有効性評価において新たに追加が必要となる事故シーケンスグループの有無について確認を行った。

さらに人為事象についても定性的に事故シーケンスグループの抽出を行い、重大事故等の有効性評価において新たに追加が必要となる事故シーケンスグループの有無について確認を行った。

また、自然現象、人為事象が重畳することによる影響についても、定性的な評価を行い、重大事故等の有効性評価において新たに追加が必要となる事故シーケンスグループの有無について確認を行った。

## 1. 前提条件

### (1) 評価対象事象

設計基準を設定する自然現象（以下「設計基準設定事象」という。）の選定は、一般的な事象に加え、国内外の規格基準から収集した様々な自然現象に対し、そもそも島根原子力発電所において発生する可能性があるか、プラントの安全性が損なわれる可能性があるか、影響度の大きさから代表事象による評価が可能かといった観点でスクリーニングを実施している。

設計基準設定事象以外のものについては、そもそもプラントの安全性が損なわれる可能性がないか、有意な頻度では発生しないか、又は影響度の大きさが他の自然現象に包含されるものである。

したがって、事故シーケンスの有無の確認は、設計基準設定事象である以下の11事象を対象に実施するものとする。

#### <設計基準設定事象>

- ・洪水
- ・風（台風）

- ・竜巻
- ・凍結
- ・降水
- ・積雪
- ・落雷
- ・地滑り・土石流
- ・火山の影響
- ・生物学的影響
- ・森林火災

なお、設計基準設定事象以外については、上述のとおり、基本的には事故シナリオに至ることはないか、有意な頻度では発生しないか、又は影響度の大きさが他の自然現象に包含されるものであると判断しているものの、各自然現象により想定される発電所への影響（損傷・機能喪失モード）を踏まえ、考え得る起回事象について整理しており、その結果からも上記11事象に加え詳細評価が必要な事象はないことを確認している。さらに、設計基準設定事象のうち5事象については、他事象に包含される（風（台風））か、起回事象の発生はない（洪水、降水、地滑り・土石流、生物学的事象）ことを確認している。（添付資料1－1参照）

また、各人為事象により想定される発電所への影響（損傷・機能喪失モード）を踏まえ、考え得る起回事象についても整理しており、その結果から新たな起回事象がないこと、事象の影響として設計基準設定事象に包含されることを確認している。（添付資料1－2参照）

## (2) 想定範囲

上記自然現象については、それぞれ考慮すべき最も過酷と考えられる条件を設計基準として設定している。具体的には、設計基準を超える規模を仮定する。

## 2. 評価方法

### (1) 起回事象の特定

#### a. 構築物、系統及び機器（以下「設備等」という。）の損傷・機能喪失モードの抽出

1. にて示した風、積雪等の自然現象が設計基準を超える規模で発生した場合に、発電所に与える影響は地震、津波ほど十分な知見がない。そこで、ここでは国外の評価事例、国内のトラブル事例及び規格・基準にて示されている発電所の影響を収集し、対象とする自然現象が発生した場合に設備等へどのような影響を与えるか（設備等への損傷・機能喪失モード）の抽出を行う。

#### b. 評価対象設備の選定

a. 項で抽出した損傷・機能喪失モードに対し、影響を受ける可能性がある設備等の内、プラントの運転継続や安全性に影響を及ぼす可能性のある設備等を評価対象設備として選定する。

c. 起回事象になり得るシナリオの選定

a. 項で抽出した損傷・機能喪失モードに対して、b. 項で選定した評価対象設備への影響を検討のうえ、発生可能性のあるシナリオを選定する。

シナリオの選定に当たっては、事故シーケンスグループ抽出に当たって考慮すべき起回事象となり得るシナリオを選定する。

なお、起回事象の選定は、日本原子力学会標準「原子力発電所の出力運転状態を対象とした確率論的安全評価に関する実施基準（レベル1 PSA編）：2008」等に示される考え方等を参考に行う。

d. 起回事象の特定

c. 項で選定した各シナリオについて発生可能性を評価し、事故シーケンスグループ抽出に当たって考慮すべき起回事象の特定を行う。

なお、過去の観測実績等をもとに発生可能性を評価可能なものについては、影響のある事故シーケンスの要因となる可能性について考察を行う。

(2) 事故シーケンスの特定

(1)d. 項にて特定した起回事象について、内部事象レベル1 P R Aや地震、津波レベル1 P R Aにて考慮しておらず、重大事故等の有効性評価において追加すべき新たな事故シーケンスにつながる可能性のあるものの有無について確認を行う。

また、新たな事故シーケンスにつながる可能性のある起回事象が確認された場合、事故シーケンスに至る可能性について評価のうえ、有意な影響のある事故シーケンスとなり得るかについて確認を行う。

事故シーケンスに至る可能性の評価については、旧原子力安全・保安院指示に基づき実施したストレステストでの評価方法等を参考に実施するものとする。

3. 個別事象評価のまとめ

1. に示した各評価対象事象について、事故シーケンスに至る可能性のある起回事象について特定した結果（添付資料2-1～6参照）、内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aで考慮している起回事象に包含されることを確認した。また、各評価対象事象によって機能喪失する可能性のある緩和設備について確認し、起回事象が発生した場合であっても、緩和設備が機能維持すること等により、必要な機能を確保することは可能であることを確認した（添付資料2-7参照）。したがって、内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aにて抽出した事故シーケンスに対して新たに追加すべき事故シーケンスは発生しないものと判断した。

#### 4. 設計基準を超える自然現象、人為事象の重畳の考慮について

##### (1) 自然現象の重畳影響

自然現象の重畳評価においては、損傷・機能喪失モードに応じて、以下に示す影響を考慮する必要がある。

- I. 各自然現象から同じ影響がそれぞれ作用し、重ね合わさって増長するケース（例：積雪と降下火砕物による堆積荷重の重ね合わせ）
- II. ある自然現象の防護施設が他の自然現象によって機能喪失することにより、影響が増長するケース（例：地震により止水機能が喪失して浸水量が増加）
- III-1. 他の自然現象の作用により前提条件が変化し、影響が増長するケース（例：降水による降下火砕物密度の増加）
- III-2. 他の自然現象の作用により影響が及ぶようになるケース（例：斜面に降下火砕物が堆積した後に大量の降水により滑り、プラント周辺まで降下火砕物を含んだ水が押し寄せる状態。単独事象としては想定していない。）

##### (2) 自然現象の重畳によるシナリオの選定

設計基準を設定する自然現象の選定において収集した自然現象を対象に、2つの異なる事象が重畳した際の影響を、(1)に示すI～III-2に分類した（添付資料3参照）。ただし、以下の観点から明らかに事故シーケンスにはつながらないと考えられるものについては重畳の影響を考慮する必要がないものと判断し確認対象から除外した。

- 島根原子力発電所及びその周辺では発生しない（又は、発生が極めて稀）と判断した事象（No. は、添付資料1-1参照）  
No. 15：隕石，No. 19：雪崩，No. 22：カルスト，No. 23：地下水による浸食，No. 32：氷結（水面の凍結），No. 34：氷壁，No. 44：ハリケーン，No. 47：陥没，No. 51：土砂崩れ（山崩れ，崖崩れ），No. 53：水蒸気・熱湯噴出，No. 54：土壌の収縮又は膨張
- 単独事象での評価において設備等への影響がない（又は、非常に小さい）と判断した事象で、他の事象との重畳を考慮しても明らかに設備等への影響がないと判断した事象（No. は、添付資料1-1参照）  
No. 3：高温，No. 9：もや，No. 10：霜，No. 11：干ばつ，No. 12：塩害・塩雲，No. 24：海岸浸食，No. 25：湖又は河川の水位低下，No. 26：湖又は河川の水位上昇，No. 30：低水温（海水温低），No. 40：濃霧，No. 45：河川の迂回

重畳事象については、(1)に示すI～III-1の影響が考えられるものの、以下に示す理由から、単独事象での評価において抽出されたシナリオ以外のシナリオ

が生じることはなく、重畳影響Ⅲ-2についても、他事象にて抽出したシナリオであり、新たなシナリオは確認されなかった。個別自然現象の重畳影響の確認結果を添付資料3に示す。

I. 各自然現象から同じ影響がそれぞれ作用し、重ね合わさって増長するケース

重畳により影響度合いが大きくなるのみであり、単独事象で設計基準を超える事象に対してシナリオの抽出を行っていることを踏まえると、新たなシナリオは生じない。

II. ある自然現象の防護施設が他の自然現象によって機能喪失することにより、影響が増長するケース

単独の自然現象に対するシナリオの選定において、設計基準を超える事象を評価対象としていることは、つまり設備耐力や防護対策に期待していないということであり、単独事象の評価において抽出された以外の新たなシナリオは生じない。

Ⅲ-1. 他の自然現象の作用により前提条件が変化し、影響が増長するケース  
一方の自然現象の前提条件が、他方の自然現象により変化し、元の自然現象の影響度が大きくなったとしても、I.と同様、単独事象で設計基準を超える事象に対してシナリオ抽出を行っているため、新たなシナリオは生じない。

Ⅲ-2. 他の自然現象の作用により影響が及ぶようになるケース

単独事象では影響が及ばない評価であったのに対し、事象が重畳することにより影響が及ぶようになるものは、降下火砕物と降水の組合せのみであったが、屋外設備（送受電設備等）の損傷を想定しても、起回事象としては外部電源喪失であり、新しいシナリオは生じない。

(3) 人為事象の重畳影響

外部人為事象の重畳影響については、添付資料4に示すとおり自然現象の重畳影響に包含されると判断した。

(4) 重畳事象評価のまとめ

事故シーケンスの抽出という観点においては、上述のとおり、自然現象、人為事象が重畳することにより、単独事象の評価で選定されたシナリオに対し新たなものが生じることはなく、自然現象、人為事象の重畳により追加すべき新たな事故シーケンスはないと判断した。

## 5. 全体まとめ

地震、津波以外の自然現象、人為事象について、事故シーケンスに至る可能性を検討した結果、内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aにて抽出した事故シーケンスグループに対して新たに追加が必要となる事故シーケンスグループはないと判断した。

また、地震、津波を含む各自然現象の重畳影響についても確認した結果、単独事象での評価と同様に、内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aにて抽出した事故シーケンスグループに対して新たに追加が必要となる事故シーケンスグループはないと判断した。

### (添付資料)

- 添付資料1-1 各自然現象について考え得る起因事象の抽出
- 添付資料1-2 各人為事象について考え得る起因事象の抽出
- 添付資料2-1 設計基準を超える竜巻事象に対する事故シーケンス抽出
- 添付資料2-2 設計基準を超える凍結事象に対する事故シーケンス抽出
- 添付資料2-3 設計基準を超える積雪事象に対する事故シーケンス抽出
- 添付資料2-4 設計基準を超える落雷事象に対する事故シーケンス抽出
- 添付資料2-5 設計基準を超える火山事象に対する事故シーケンス抽出
- 添付資料2-6 設計基準を超える森林火災事象に対する事故シーケンス抽出
- 添付資料2-7 起因事象の発生が考えられるその他の自然現象と起因事象発生時の対応
- 添付資料3 自然現象の重畳マトリックス
- 添付資料4 外部人為事象に係る重畳の影響について

以上



各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (1/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
1	風 (台風)	①荷重 (風圧, 気圧差及び衝撃) 風荷重及び気圧差荷重による建物や設備等の損傷 ②閉塞 (取水) 台風による漂流物による取水口閉塞	<ul style="list-style-type: none"> <li>竜巻の影響に含まれる (No.2 参照)。</li> </ul>
2	竜巻 ※別途, 詳細評価	①荷重 (風圧, 気圧差及び衝撃) 風荷重及び気圧差荷重による建物や設備等の損傷	<ul style="list-style-type: none"> <li>気圧差荷重の発生に伴う原子炉建物燃料取替階ブローアウトパネルの開放による手動停止に至るシナリオ。</li> <li>想定を超える風荷重又は飛来物の衝撃荷重が原子炉建物, タービン建物又は廃棄物処理建物に作用した場合, 建物が損傷して建物内部の各設備に影響を及ぼす可能性は否定できないため, 原子炉補機冷却系サージタンクの損傷に伴う補機冷却系喪失, 可燃性ガス濃度制御系の機能喪失に伴う手動停止, タービンや発電機の損傷に伴う非隔離事象, タービン補機冷却系の損傷に伴うタービン・サポート系故障, 原子炉建物給排気隔離弁の損傷に伴う手動停止又は気体廃棄物処理設備の損傷に伴う手動停止に至るシナリオ。</li> <li>想定を超える風荷重, 気圧差荷重又は飛来物の衝撃荷重に対して屋外設備が損傷する可能性は否定できないため, 送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失, デイゼル燃料移送ポンプの損傷かつ外部電源喪失の同時発生による全交流動力電源喪失, 排気筒 (非常用ガス処理系排気管を含む。) の損傷に伴う手動停止, 復水貯蔵タンクの損傷に伴う手動停止, 原子炉補機海水ポンプの損傷に伴う補機冷却系喪失, 高圧炉心スプレイ補機海水ポンプの損傷に伴う手動停止, タービン補機海水ポンプの損傷に伴うタービン・サポート系故障又は循環水ポンプの損傷に伴う隔離事象に至るシナリオ。</li> <li>原子炉建物付属棟空調換気系は, 原子炉建物内に設置されており風荷重の影響を直接受けないが, 気圧差荷重によりダクト, ファン, ダンパ等の損傷が考えられる。それらの設備の損傷により, デイゼル発電機室の換気が困難になった場合, デイゼル発電機室温度の上昇に伴い, デイゼル発電設備が機能喪失し, さらに上記の送受電設備損傷に伴う外部電源喪失の同時発生を想定した場合, 全交流動力電源喪失に至るシナリオ。</li> <li>竜巻により資機材, 車両等が飛散して取水口周辺の海に入り取水口を閉塞させた場合, 原子炉補機海水ポンプの取水ができなくなり補機冷却系喪失に至るシナリオが考えられるが, 取水口を閉塞させるほどの資機材や車両等の飛散は考えられないことから, 考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (2/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
3	高温	①外気温度高 外気温度高による設備等の冷却能力低下	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空調設計条件を超過する可能性はあるものの、1日の中でも気温の変動があり高温状態が長時間にわたり継続しないこと、また、外気温度高により即プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シーケンスの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
4	低温 ※別途、詳細評価	①外気温度低 (凍結) 屋外タンク及び配管内流体の凍結 ②相間短絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディーゼル発電機の燃料として使用している軽油は低温時の使用環境を考慮した油種としており、また、屋外の燃料移送系配管には保温材を取り付けていることから、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>・復水貯蔵タンクは凍結しない一定以上の温度に加熱しており、また、屋外の附属配管には保温材を取り付けていることから、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>・送電線や碍子への着氷によって、相間短絡を起こし、外部電源喪失に至るシナリオ。</li> </ul>
5	極限的な気圧	①荷重 (気圧差) 気圧差による換気空調設備等への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・竜巻の影響に含まれる (No.2 参照)。</li> </ul>
6	降雨 (豪雨)	①浸水 敷地及び建物内浸水による設備の浸水 ②荷重 (堆積荷重) 建物屋上での雨水滞留	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本全国の日最大1時間降水量の最大値 (153mm/h) に対しても、敷地内の雨水は排水可能であることから、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シーケンスの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>・日本全国の日最大1時間降水量の最大値 (153mm/h) に対しても、建物屋上の雨水は排水可能であること、また、仮に建物屋上に雨水が滞留した場合においても雨水の堆積荷重により建物天井は崩落しないことから、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シーケンスの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (3/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
7	積雪(豪雪) ※別途、詳細評価	①荷重(堆積荷重) 建物及び屋外機器への堆積	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉建物等の各建物天井や屋外設備が積雪荷重により崩壊した場合に、建物最上階に設置している設備が損傷する可能性はあるが、積雪は事前の予測が十分に可能であり、また積雪事象の進展速度を踏まえると除雪管理が可能であることから、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
		②相間短絡 送受電設備の屋外設備への着氷	<ul style="list-style-type: none"> <li>送電線や碍子へ雪が着雪することによって、相間短絡を起こし外部電源喪失に至るシナリオ。</li> </ul>
		③閉塞 空調給気口、冷却口の閉塞	<ul style="list-style-type: none"> <li>中央制御室換気系の給排気口が積雪により閉塞した場合は、外気遮断による系統隔離運転が可能なた設計となっているため、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>原子炉炉補機海水ポンプ等のモータ冷却口が積雪により閉塞した場合、ポンプトリップする可能性はあるが、積雪は事前の予測が十分に可能であり、また積雪事象の進展速度を踏まえると除雪管理が可能であることから、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
8	ひょう	①荷重(衝突荷重) 建物及び屋外設備へのひょうの衝突荷重	<ul style="list-style-type: none"> <li>竜巻の影響に含まれる (No.2 参照)。</li> </ul>
		②荷重(堆積荷重) 建物及び屋外設備へのひょうの堆積荷重	<ul style="list-style-type: none"> <li>積雪の影響に含まれる (No.7 参照)。</li> </ul>
9	もや	①— もやの発生による設備等への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所敷地内でのもやの発生によるプラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
10	霜	①— 建物及び屋外設備への霜の付着	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物及び屋外設備への霜付着によるプラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
11	干ばつ	①— 干ばつによる設備への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>海水を冷却源としていることから、河川からの取水不可によるプラントへの影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
12	塩害、塩雲	①腐食 塩害による屋外設備の腐食	<ul style="list-style-type: none"> <li>腐食の進展は遅く、保守管理による不具合防止が可能であることから、塩害によるプラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (4/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
13	砂嵐	①閉塞 (空調) 空調フィルタの閉塞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発電所周辺では砂嵐は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>・なお、黄砂については、換気空調設備の外気取入口に設置されたフィルタにより大部分を捕集可能であること、また、容易に清掃又は取替が可能であることから、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
14	落雷 ※別途、詳細評価	①雷サージ、誘導電流及び直撃雷 過電圧による設備損傷	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全保護系に発生するノイズの影響により誤動作する可能性は否定できず、隔離事象又は原子炉保護系誤動作等に至るシナリオ。</li> <li>・安全保護系以外の計測制御設備に発生するノイズの影響により誤動作する可能性は否定できず、非隔離事象、全給水喪失又は水位低下事象に至るシナリオ。</li> <li>・直撃雷により屋外設備が損傷する可能性は否定できず、送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失、原子炉補機海水ポンプの損傷に伴う補機冷却系喪失、高圧炉心スプレイ補機海水ポンプの損傷に伴う手動停止、タービン補機海水ポンプの損傷に伴うタービン・サポート系故障又は循環水ポンプの損傷に伴う隔離事象に至るシナリオ。</li> </ul>
15	隕石	①荷重 (衝突) 隕石衝突に伴う建物及び屋外設備の損傷 ②荷重 (衝撃波) 発電所敷地への隕石落下に伴う衝撃波による建物及び屋外設備の損傷 ③浸水 隕石の発電所近海への落下に伴う津波による建物及び屋外設備の浸水	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全施設の機能に影響を及ぼす隕石等の衝突は、有意な発生頻度とはならない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
16	地面の隆起	①地盤安定性 地盤の隆起に伴う建物や屋外設備の傾斜等による損壊	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震の影響に含まれる (No. 21 参照)。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (5/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
17	動物	①電気的影響 動物等の侵入による電気機器接触による地絡等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生物学的事象の評価で考慮 (No. 36 参照)。</li> </ul>
18	火山 ※別途、詳細評価	①荷重 (堆積) 降下火砕物による建物天井や屋外設備に対する堆積荷重  ②閉塞 (取水) 降下火砕物による取水口及び海水系の閉塞  ③閉塞 (空調) 降下火砕物による空調給気口等の閉塞  ④電気的影響 送受電設備の地絡・短絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原子炉建物等の各建物天井や屋外設備が降下火砕物による堆積荷重により崩壊した場合に、建物最上階に設置している設備が損傷する可能性はあるが、火山事象は事前の予測が十分に可能であり、また降灰事象の進展速度を踏まえると除灰管理が可能であることから、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>・海水中の降下火砕物による海水系への影響については、降灰事象は進展速度を踏まえると、海水ストレーナの差圧が上昇した場合が切り替えて清掃することによって機能喪失することとは考えにくいことから、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>・降下火砕物によってディーゼル発電機の給気フィルタの目詰まり又は燃焼用給気口の閉塞によって、ディーゼル発電機が機能喪失する可能性はあるが、火山事象は事前の予測が十分に可能であり、また降灰事象の進展速度を踏まえると除灰管理又はフィルタ交換が可能であることから、考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>・降下火砕物が送電線や碍子へ付着し、霧や降雨の水分を吸収することによって、相间短絡を起こし外部電源喪失に至るシナリオ。</li> </ul>
19	雪崩	①荷重 (衝突) 雪崩による建物及び屋外設備への荷重	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建物周辺に急峻な斜面がないことから、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
20	地滑り	①荷重 (衝突荷重) 地滑りに伴う土砂等の建物及び屋外設備への衝突	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発電所敷地内において、地滑りが発生する可能性はあるが、安全上重要な設備とは十分な離隔距離を有しており、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
21	地震	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震の事故シナリオは、地震時レベルIPRAに示すとおり。</li> </ul>
22	カルスト	①地盤安定性 地盤沈下に伴う建物や屋外設備の損壊	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発電所敷地にはカルスト地形はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起回事象の抽出 (6 / 11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起回事象等
23	地下水による浸食	①地盤安定性 建物及び設備の地下部土壌 侵食 ②浸水 建物の地下部浸食による建物内への地下水の流入	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所敷地には地下水による浸食を受ける岩質はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> </ul>
24	海岸浸食	①冷却機能低下：海水系 海岸線の後退、海底勾配の変化による取水機能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>海岸の浸食は進展が遅く十分に管理でき、補強工事等により浸食を食い止めることができることから、プラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> <li>海水を冷却源としていることから、河川からの取水不可によるプラントへの影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> </ul>
25	湖又は河川の水位低下	①湖又は河川の水位低下による設備への影響なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>海水を冷却源としていることから、湖又は河川からの取水不可によるプラントへの影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> </ul>
26	湖又は河川の水位上昇	①浸水 発電所敷地の浸水による建物や設備への浸水影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所周辺の湖又は河川の水位が上昇しても、敷地は周囲を山で囲まれており、敷地への浸水はないため、プラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> </ul>
27	海水面低	①海水水位低（冷却機能低下：海水系） 取水口の水位低下に伴う冷却性能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>津波の影響に含まれる (No. 37 参照)。</li> </ul>
28	海水面高	①浸水 発電所敷地の浸水による建物や設備への浸水影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>津波の影響に含まれる (No. 37 参照)。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (7/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
29	高水温 (海水 高温)	①海水温度高 (冷却機能低下: 海水系) 取水温度高に伴う冷却性能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>海水温度は監視しており, 水温上昇に対しては出力低下等の措置を講じることができると判断。プラントの安全性への影響はない。したがって, 本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
30	低水温 (海水 低温)	①- 取水温度低に伴う海水系設備への影響なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>取水温度低について冷却性能の劣化につながらず, プラントの安全性への影響はない。したがって, 本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
31	海底地滑り	①浸水 発電所敷地の浸水による建物や設備への浸水影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>津波の影響に包含される (No. 37 参照)。</li> </ul>
32	氷結 (水面の 凍結)	①閉塞 (取水) 水面の凍結による取水口閉塞	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所周辺では取水源 (海水) の凍結は発生しない。したがって, 本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
33	氷晶	①荷重 (堆積荷重) 建物及び屋外設備への荷重	<ul style="list-style-type: none"> <li>積雪の影響に包含される (No. 7 参照)。</li> </ul>
34	氷壁	①- 建物及び屋外設備への氷の付着	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所周辺では氷壁は発生しない。したがって, 本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
35	水中の有機物 質	①閉塞 (冷却機能低下: 海水系) 水中の有機物質による冷却性能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>生物的事象の評価で考慮 (No. 36 参照)。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (8/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
36	生物学的事象	①閉塞（冷却機能低下：海水系）の襲来による冷却性能への影響 ②個別設備の機能喪失 小動物の侵入による電気機器接触による地絡等	<ul style="list-style-type: none"> <li>大量発生したクラゲ等の海生生物は、除じん装置により捕獲されることから海水系の冷却機能が喪失することは考えにくい。さらに除じん能力を超える大量のクラゲ等が除じん装置に流入した場合でも循環水ポンプの取水量の調整、原子炉出力の抑制等により冷却性能を維持できることから、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>貫通部のシール等の小動物侵入防止対策を実施しており、小動物の侵入は考えにくい。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
37	津波	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>津波の事故シナリオは、津波のレベルIPRAに示すとおり。</li> </ul>
38	太陽フレア、磁気嵐	①誘導電流 太陽フレア等の地磁気誘導電流による送受電設備の損傷	<ul style="list-style-type: none"> <li>落雷の影響に包含される (No. 14 参照)。</li> </ul>
39	洪水	①浸水 発電所敷地の浸水による建物や設備への浸水影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>津波以外の洪水としては、河川の氾濫等が考えられるが、発電所敷地へ影響を及ぼす範囲に河川はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
40	濃霧	①— 濃霧の発生による設備等への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所敷地内でのもやの発生によるプラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>



各自然現象について考え得る起回事象の抽出 (9/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起回事象等
41	森林火災 ※別途、詳細評価	①放射熱による建物や設備等への影響 放射熱による建物・屋外設備への熱影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>森林火災の放射熱による建物への影響について、想定し得る最大の火災影響評価において、防火帯外縁（火炎側）から十分な離隔距離があることを考慮すると、建物の許容温度を下回り、建物が損傷することはない。また、森林火災の放射熱による建物影響については、24時間駐在している自衛消防隊による早期の消火活動も可能であり、森林火災に対する影響緩和策を講じることができることから、考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> <li>森林火災の放射熱により送受電設備が損傷した場合、外部電源喪失に至るシナリオ。なお、森林火災の放射熱によるその他の屋外設備への影響については、防火帯外縁（火炎側）から十分な離隔距離があることを考慮すると、設備が受ける放射強度は低いため、設備が損傷することはない。また、森林火災の放射熱による影響について、24時間駐在している自衛消防隊による早期の消火活動も可能であり、森林火災に対する影響緩和策を講じることができることから、考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> <li>森林火災で発生するばい煙のディーゼル発電設備の給気口への吸い込みにより給気口が閉塞した場合でも、フィルタの取替え及び清掃が可能であることから、考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> <li>換気空調設備の外気取入口にはフィルタを設置しているため、一定以上の粒径のばい煙を捕集するとともに、換気空調設備の停止により建物内へのばい煙の侵入を阻止することが可能であるため、考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> <li>中央制御室換気系の外気取入口にはフィルタを設置しているため、一定以上の粒径のばい煙を捕集するとともに、給気隔離弁及び排気隔離弁を閉止し系統隔離運転モードとすることにより、長時間室内へのばい煙侵入を阻止することが可能であるため、考慮すべき起回事象の発生はないと判断。</li> </ul>
42	草原火災	①熱影響 放射熱による建物・屋外設備への熱影響 ②外気取入機器及びび人への影響 ばい煙等による閉塞（空調） 影響及びび人への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>森林火災の評価で考慮（No.41 参照）。</li> </ul>

各自然現象について考え得る起回事象の抽出 (10/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起回事象等
43	満潮	①浸水 発電所敷地の浸水による建物や設備への浸水影響	・津波の影響に包含される (No. 37 参照)。
44	ハリケーン	①荷重 (風圧, 衝突) 風圧 (又は飛来物衝突) による建物, 設備の損傷 ②閉塞 (取水) 台風による漂流物による取水口閉塞	・日本ではハリケーンは発生しない。したがって, 本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。
45	河川の迂回	①河川の迂回による設備への影響なし	・海水を冷却源としていることから, 河川からの取水不可によるプラントへの影響はない。したがって, 本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。
46	静振	①浸水 港湾内での潮位振動による建物及び屋外設備への浸水 ②冷却機能低下: 海水系 港湾内での潮位振動による取水への影響	・津波の影響に包含される (No. 37 参照)。
47	陥没	①地盤安定性 地盤沈下に伴う建物や屋外設備の損壊	・発電所敷地の地盤は硬質岩盤であり陥没は発生しない。したがって, 本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起回事象の発生はないと判断。
48	高潮	①浸水 発電所敷地の浸水による建物や設備への浸水影響	・津波の影響に包含される (No. 37 参照)。
49	波浪	①浸水 発電所敷地の浸水による建物や設備への浸水影響	・津波の影響に包含される (No. 37 参照)。

各自然現象について考え得る起因事象の抽出 (11/11)

No	自然現象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
50	土石流	①荷重 (衝突) 土石流による建物及び屋外設備への荷重	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所敷地内において、土石流が発生する可能性はあるが、安全上重要な設備とは十分な離隔距離を有しており、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
51	土砂崩れ (山崩れ, 崖崩れ)	①荷重 (衝突荷重) 土砂崩れ (山崩れ, 崖崩れ)に伴う土砂等の建物及び屋外設備への衝突	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所敷地内において、土砂崩れ (山崩れ, 崖崩れ) は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
52	泥湧出 (液状化)	①地盤安定性 地盤の脆弱化に伴う建物及び屋外設備の傾斜等による損傷	<ul style="list-style-type: none"> <li>地震の影響に含まれる (No. 21 参照)。</li> </ul>
53	水蒸気, 熱湯噴出	①浸水影響 水蒸気等による設備への浸水影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所周辺には、発電所に影響を及ぼす範囲に火山はない。</li> </ul>
54	土壌の収縮又は膨張	①地盤安定性 周辺地形の変状に伴う建物や屋外設備の損壊	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所敷地の地盤は硬質岩盤であり土壌の収縮及び膨張は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
55	毒性ガス	①— 人体への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所周辺には、発電所に影響を及ぼす範囲に火山はない。</li> </ul>

## 各人為事象について考え得る起因事象の抽出 (1 / 4)

No	人為事象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
1	船舶から放出される固体液体不純物	①冷却機能低下：海水系船舶から流出した重油等による冷却機能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>船舶の衝突（船舶事故）の影響に含まれる（No. 3 参照）。</li> </ul>
2	水中への化学物質の流出	①冷却機能低下：海水系船舶から流出した化学物質による冷却機能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>船舶の衝突（船舶事故）の影響に含まれる（No. 3 参照）。</li> </ul>
3	船舶の衝突（船舶事故）	①冷却機能低下：海水系船舶の取水設備への衝突及び船舶から流出した重油による冷却機能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所は船舶の航路まで距離が離れていることから船舶の侵入はないこと、また、取水口前面に防波堤があり、さらに深層取水していることから船舶が取水設備に衝突するとは考えられないため、プラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たっては考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>なお、船舶等が座礁し、運搬している重油等が流出するような場合についても、深層から取水していることから、また、必要に応じて、オイルフェンスを設置することから、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。</li> </ul>
4	交通機関（航空機を除く）の事故による爆発	①熱影響、爆風圧 危険物輸送車両や船舶の発電所敷地周辺における事故による火災、爆風	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部火災（近隣工場等の火災）の影響に含まれる（No. 23 参照）。</li> </ul>
5	交通機関（航空機を除く）の事故による化学物質流出	①中央制御室居住性の低下 有毒ガスが中央制御室内に取り込まれることによる運転操作への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>有毒ガスの影響に含まれる（No. 21 参照）。</li> </ul>
6	爆発（発電所外）	①熱影響、爆風圧 発電所外の産業施設の事故による火災、爆発	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部火災（近隣工場等の火災）の影響に含まれる（No. 23 参照）。</li> </ul>
7	化学物質流出（発電所外）	①中央制御室居住性の低下 有毒ガスが中央制御室内に取り込まれることによる運転操作への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>有毒ガスの影響に含まれる（No. 21 参照）。</li> </ul>

各人為事象について考え得る起因事象の抽出 (2 / 4)

No	人為事象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
8	発電所内貯蔵の化学物質流出	①冷却機能低下：海水系 発電所内で保管されている化学物質が港湾内へ放出されることによる海水系の冷却機能への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発電所内の化学薬品は適切に保管されていること、また、仮に流出した場合でもせき等により薬品の拡散防止が図られていることから港湾内への放出は考えにくく、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
9	パイプライン事故(爆発、化学物質流出)	①熱影響、爆風圧 パイプラインの損傷・破裂による火災、爆風	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発電所敷地周辺には、プラントに影響を及ぼす範囲にはパイプラインはない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
10	軍事施設からのミサイル	①衝撃力 軍事施設からのミサイル等の誤爆により建物及び屋外設備の損傷	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発電所敷地周辺には、射撃訓練区域の設定はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
11	掘削工事	①物理的損傷 発電所敷地内での掘削工事により設備の一部を損傷	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発電所敷地内で掘削工事を行う場合は、埋設物の管理図面により事前調査を行い、あらかじめ埋設物の位置を確認するため、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
12	他ユニットからの火災	①熱影響 輻射熱による建物及び屋外設備への熱影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 外部火災（近隣工場等の火災）の影響に包含される（No. 23 参照）。</li> </ul>
13	他ユニットからのタービン・ミサイル	①荷重（衝突） タービンの一部が飛来物となつて衝突	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則」第十二条（安全施設）5項の要求に従い、飛散物としてタービン・ミサイルの評価を行っている。「タービンミサイル評価について」（昭和52年7月20日原子力委員会原子炉安全専門審査会）に基づき評価した結果、基準である <math>10^{-7}</math> /年を下回っているため、有意な発生頻度とはならない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
14	他ユニットからの内部溢水	①浸水 発電用原子炉施設内の配管等の損壊による保有水の漏えいの影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 内部溢水の影響に包含される（No. 22 参照）。</li> </ul>

各人為事象について考え得る起因事象の抽出 (3 / 4)

No	人為事象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
15	人工衛星の落下	①荷重 (衝突) 人工衛星衝突に伴う建物及び屋外設備の損傷	<ul style="list-style-type: none"> <li>安全施設の機能に影響を及ぼす人工衛星の衝突は、有意な発生頻度とはならない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
16	飛来物 (航空機落下)	①荷重 (衝突) 航空機が建物及び屋外設備に衝突  ②熱影響 放射熱による建物及び屋外設備への熱影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>偶発的な事故による発電用原子炉施設への航空機落下については、設計上の考慮の要否を「実用発電用原子炉施設への航空機落下確率の評価基準について」(平成 21・06・25 原院第 1 号 (平成 21 年 6 月 30 日原子力安全・保安院制定)) 等に基づき、航空機落下確率を求めて判断している。</li> <li>その結果、設計上の考慮が必要な <math>10^{-7}</math> 回/炉・年を下回っているため、発電用原子炉施設への航空機落下の可能性は、有意な発生頻度とはならない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>航空機火災の放射熱による建物への影響については、設計基準での非常に保守的な火災影響評価において、航空機火災位置から十分な離隔距離があることを考慮すると、建物の許容温度を下回り、実際に各建物の機能が損傷するにはさらに余裕があることから、有意な頻度又は影響のある事故シナリオとはなりえないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断。</li> </ul>
17	電磁的障害	①電磁波によるノイズ 電磁波を放出する機器による計測制御設備へのノイズ発生で安全機能の誤動作、誤動作	<ul style="list-style-type: none"> <li>落雷の影響に包含される (&lt;自然現象 &gt; No. 14 参照)。</li> </ul>
18	ダムの崩壊	①浸水 ダムの崩壊に伴う洪水による建物及び屋外設備への浸水影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所敷地へ影響を及ぼす範囲にダムはない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
19	工場施設又は軍事施設事故 (爆発, 化学物質放出)	①熱影響, 爆風圧 発電所外の工場施設又は軍事施設事故による火災, 爆発	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部火災 (近隣工場等の火災) の影響に包含される (No. 23 参照)。</li> </ul>

各人為事象について考え得る起因事象の抽出 (4 / 4)

No	人為事象	設備等の損傷・機能喪失モードの抽出	考え得る起因事象等
20	タービン・ミサイル	①荷重 (衝突) タービンの一部が飛来物となつて衝突	<ul style="list-style-type: none"> <li>「実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則」第十二条 (安全施設) 5 項の要求に従い、飛散物としてタービン・ミサイルの評価を行っている。「タービン・ミサイルの評価について」(昭和 52 年 7 月 20 日原子力委員会原子炉安全専門審査会) に基づき評価した結果、基準である <math>10^{-7}</math> / 年を下回っているため、有意な発生頻度とはならない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
21	有毒ガス	①中央制御室居住性の低下 有毒ガスが中央制御室内に取り込まれることによる運転操作への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所周辺には有毒ガスの発生源となる危険物を貯蔵している石油コンビナートはない。また、発電所敷地内に貯蔵している物質が漏えいした場合であっても、中央制御室の空調を系統隔離運転へ移行することにより、有毒ガスの影響を遮断できる。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>
22	内部溢水	①浸水 発電用原子炉施設内の配管等の損壊による保有水の漏えいの影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 表のとおり。 (過渡事象, 外部電源喪失, サポート系喪失, LOCA, I S L O C A)</li> </ul>
23	外部火災 (近隣工場等の火災)	①爆風圧 近隣工場の爆発による爆風圧等 ②熱影響 輻射熱による建物及び屋外設備への熱影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>発電所周辺には石油コンビナート施設はない。また、発電所近隣の産業施設での火災及び爆発の影響は、プラントと産業施設は離隔距離を十分確保していることから、プラントの安全性への影響はない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> <li>発電所敷地内の危険物タンクで火災が発生した場合であっても原子炉建物外壁面の許容温度を下回ることを確認していることから、安全上重要な設備への影響はなく、プラントの安全性が損なわれるような影響は発生しない。したがって、本事象から事故シナリオの抽出に当たって考慮すべき起因事象の発生はないと判断。</li> </ul>

設計基準を超える竜巻事象に対する事故シーケンス抽出

1. 起回事象の特定

(1) 構築物、系統及び機器（以下「設備等」という。）の損傷・機能喪失モードの抽出

竜巻事象により設備等に発生する可能性のある事象について、国外の評価事例、国内で発生したトラブル事例も参照し、以下のとおり、損傷・機能喪失モードを抽出した。

- ①風荷重及び気圧差荷重による建物や設備等の損傷
- ②飛来物の衝撃荷重による建物や設備等の損傷
- ③風荷重，気圧差荷重及び飛来物の衝撃荷重を組み合わせた荷重による建物や設備等の損傷
- ④竜巻により取水口周辺の海に飛散した資機材等による取水口閉塞
- ⑤竜巻襲来後のがれき散乱によるアクセス性や作業性の悪化

(2) 評価対象設備の選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対し、影響を受ける可能性のある設備等のうち、プラントの運転継続や安全性に影響を及ぼす可能性のある設備等を評価対象設備として選定した。

具体的には、以下に示す建物及び屋外設置の設備等を評価対象として選定した。ただし、屋内設備については、飛来物の建物外壁貫通を考慮すると屋内設備に影響が及ぶ可能性が考えられるため、飛来物が直接衝突する壁は損傷し、その一つ内側の壁との間に設置されている設備等を対象とする。

①風荷重及び気圧差荷重による建物や設備等の損傷

<建物>

- ・原子炉建物
- ・タービン建物
- ・廃棄物処理建物
- ・制御室建物

<屋外設備>

- ・送受電設備
- ・ディーゼル燃料移送ポンプ
- ・排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）
- ・復水貯蔵タンク
- ・原子炉補機海水ポンプ
- ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ



- ・タービン補機海水ポンプ
- ・循環水ポンプ

<屋内設備>

- ・原子炉建物附属棟空調換気系
- ・中央制御室換気系

②飛来物の衝撃荷重による建物や設備等の損傷

<建物>

- ・原子炉建物
- ・タービン建物
- ・廃棄物処理建物
- ・制御室建物

<屋外設備>

- ・送受電設備
- ・ディーゼル燃料移送ポンプ
- ・排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）
- ・復水貯蔵タンク
- ・原子炉補機海水ポンプ
- ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ
- ・タービン補機海水ポンプ
- ・循環水ポンプ

<屋内設備>

- ・原子炉補機冷却系サージタンク
- ・原子炉補機冷却水ポンプ、熱交換器
- ・可燃性ガス濃度制御系
- ・原子炉建物附属棟空調換気系
- ・中央制御室
- ・中央制御室換気系
- ・原子炉建物給排気隔離弁
- ・気体廃棄物処理設備
- ・タービン補機冷却系サージタンク
- ・タービン及び発電機
- ・主蒸気管（主蒸気隔離弁以降の配管）

③風荷重、気圧差荷重及び飛来物の衝撃荷重を組み合わせた荷重による建物や設備等の損傷

・①及び②にて選定した建物や設備等

④竜巻により取水口周辺の海に飛散した資機材等による取水口閉塞  
・取水口

⑤竜巻襲来後のがれき散乱によるアクセス性や作業性の悪化  
－（アクセスルート）

(3) 起因事象になり得るシナリオの選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対して、(2)項で選定した評価対象設備への影響を検討のうえ、発生可能性のあるシナリオを選定した。

①風荷重及び気圧差荷重による建物や設備等の損傷

建物及び屋内外設備に対する風荷重及び気圧差荷重により発生可能性のあるシナリオは以下のとおり。

<建物>

○原子炉建物

原子炉建物は十分な厚さを有した鉄筋コンクリート造であり、風荷重よりも大きい地震荷重に対して設計されており、極めて発生することが稀な設計基準を超える風荷重を想定しても建物の頑健性は維持されることが考えられることからシナリオの選定は不要である。

また、風荷重に加えて気圧差荷重が作用した場合であっても、風荷重と気圧差荷重を組み合わせた荷重は、原子炉建物設計時の地震荷重よりも小さく、建物の頑健性は維持されることが考えられることからシナリオの選定は不要である。

ただし、原子炉建物燃料取替階ブローアウトパネルは、建物内外の差圧による開放に至る場合に手動停止に至るシナリオを選定する。

○タービン建物

タービン建物上層部が風荷重及び気圧差荷重により破損に至る場合は、影響としてタービンや発電機の破損が想定され、非隔離事象に至るシナリオ。

また、タービン補機冷却系サージタンクに影響が及び、タービン・サポート系故障に至るシナリオ。

○廃棄物処理建物

原子炉建物同様、廃棄物処理建物は十分な厚さを有した鉄筋コンクリート造であり、風荷重よりも大きい地震荷重に対して設計されており、極めて発生することが稀な設計基準を超える風荷重を想定しても建物の頑健性は維持されることが考えられることからシナリオの選定は不要である。また、風荷重に加えて気圧差荷重が作用した場合であっても同様と考えられることからシナリオの選定は不要である。

○制御室建物

制御室建物は周囲をより高い建物で囲まれているため、直接風荷重及び気圧差荷重が作用することは考えられないことからシナリオの選定は不要である。

<屋外設備>

○送受電設備

送受電設備が風荷重により損傷した場合に、外部電源喪失に至るシナリオ。

○ディーゼル燃料移送ポンプ

ディーゼル燃料移送ポンプが気圧差荷重により損傷し、ディーゼル発電設備が燃料枯渇により機能喪失した場合に、上記の外部電源喪失の同時発生を想定した場合、全交流動力電源喪失に至るシナリオ。

○排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）

排気筒及び非常用ガス処理系排気管が風荷重により損傷した場合に、手動停止に至るシナリオ。

○復水貯蔵タンク

復水貯蔵タンクが風荷重及び気圧差荷重により損傷した場合に、復水輸送系の喪失により、手動停止に至るシナリオ。

○原子炉補機海水ポンプ

原子炉補機海水ポンプが気圧差荷重により損傷した場合に、原子炉補機冷却系が喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオ。

○高圧炉心スプレー補機海水ポンプ

高圧炉心スプレー補機海水ポンプが気圧差荷重により損傷した場合に、高圧炉心スプレー系が喪失し、手動停止に至るシナリオ。

○タービン補機海水ポンプ

タービン補機海水ポンプが気圧差荷重により損傷した場合に、タービン補機冷却系が喪失し、タービン・サポート系故障に至るシナリオ。

○循環水ポンプ

循環水ポンプが風荷重により損傷した場合に、復水器真空度低により隔離事象に至るシナリオ。

<屋内設備>

○原子炉建物付属棟空調換気系

原子炉建物付属棟空調換気系は、原子炉建物内に設置されており風荷重の影響を直接受けないが、気圧差荷重によりダクト、ファン、ダンパ等の損傷が考えられる。それらの設備の損傷により、ディーゼル発電機室の換気が困難になった場合、ディーゼル発電機室温度の上昇に伴い、ディーゼル発電設備が機能喪失し、さらに上記の送受電設備損傷による

外部電源喪失の同時発生を想定した場合、全交流動力電源喪失に至るシナリオ。

○中央制御室換気系

中央制御室換気系は、廃棄物処理建物内に設置されており風荷重の影響を直接受けないが、気圧差荷重によりダクト、ファン、ダンパ等の損傷が考えられる。それらの設備の損傷により中央制御室の換気が困難になった場合、中央制御室内の温度が上昇するが、即、中央制御室内の機器へ影響が及ぶことはなく、また、竜巻の影響は一時的であり竜巻襲来後の対応は十分可能であるため計装・制御系喪失に至るシナリオは考慮不要とする。

②飛来物の衝撃荷重による建物や設備等の損傷

建物及び建物内外設備に対する飛来物の衝撃荷重により発生する可能性のあるシナリオは以下のとおり。

<建物>

○原子炉建物、タービン建物、廃棄物処理建物、制御室建物

飛来物が建物外壁を貫通することにより、屋内設備に波及的影響を及ぼすことが考えられるが、発生可能性のあるシナリオについては、後述の<屋内設備>で考慮することとする。

<屋外設備>

○送受電設備

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

○ディーゼル燃料移送ポンプ

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

○排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

○復水貯蔵タンク

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

○原子炉補機海水ポンプ

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

○高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

○タービン補機海水ポンプ

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

○循環水ポンプ

①の風荷重等により発生可能性のあるシナリオと同様。

<屋内設備>

○原子炉補機冷却系サージタンク

原子炉建物に設置している原子炉補機冷却系サージタンクに建物外壁を貫通した飛来物が衝突した場合に、原子炉補機冷却系が機能喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオ。

○原子炉補機冷却水ポンプ、熱交換器

原子炉建物に設置している原子炉補機冷却水ポンプ又は熱交換器に建物外壁を貫通した飛来物が衝突した場合に、原子炉補機冷却系が機能喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオが考えられるが、原子炉補機冷却水ポンプ及び熱交換器は多重化されていることに加え分散配置が図られているため、同時に2系統が機能喪失する可能性は低いことから、補機冷却系喪失に至るシナリオは考慮不要とする。

○可燃性ガス濃度制御系

原子炉建物に設置している可燃性ガス濃度制御系に建物外壁を貫通した飛来物が衝突した場合に、手動停止に至るシナリオ。

○原子炉建物付属棟空調換気系

原子炉建物付属棟空調換気系は、原子炉建物内に設置されており飛来物の影響を直接受けないが、外気取入口に飛来物が衝突して閉塞することが考えられる。それらの設備の損傷により、ディーゼル発電機室の換気が困難になった場合、ディーゼル発電機室温度の上昇に伴い、ディーゼル発電設備が機能喪失し、さらに同時に上記の送受電設備の損傷が発生した場合に全交流動力電源喪失に至るシナリオが考えられるが、ディーゼル発電機室外気取入口は多重化されていることに加え分散配置されているため、ディーゼル発電設備が全数機能喪失する可能性は低いことから、全交流動力電源喪失に至るシナリオは考慮不要とする。

○中央制御室

制御室建物は周囲をより高い建物で囲まれているため、直接飛来物が衝突することは考えられないことからシナリオの選定は不要である。

○中央制御室換気系

中央制御室換気系は、廃棄物処理建物内に設置されており飛来物の影響を直接受けないが、外気取入口に飛来物が衝突して閉塞することが考えられる。それらの設備の損傷により、中央制御室の換気が困難になった場合、中央制御室温度が上昇するが、即、中央制御室内の機器に影響が及ぶことはなく、また、竜巻の影響は一時的であり竜巻襲来後の対応は十分可能であるため計装・制御系喪失に至るシナリオは考慮不要とする。

○原子炉建物給排気隔離弁

原子炉建物に設置している原子炉建物給排気隔離弁に建物外壁を貫通した飛来物が衝突した場合に、手動停止に至るシナリオ。

○気体廃棄物処理設備

廃棄物処理建物に設置している気体廃棄物処理設備に建物外壁を貫通した飛来物が衝突して機能喪失した場合に、手動停止に至るシナリオ。

○タービン補機冷却系サージタンク

タービン建物に設置しているタービン補機冷却系サージタンクに建物外壁を貫通した飛来物が衝突した場合に、タービン補機冷却系が機能喪失し、タービン・サポート系故障に至るシナリオ。

○タービン及び発電機

タービン建物に設置しているタービン又は発電機に建物外壁を貫通した飛来物が衝突した場合に、タービン又は発電機が機能喪失し、非隔離事象に至るシナリオ。

○主蒸気管（主蒸気隔離弁以降の配管）

タービン建物に設置している主蒸気管に建物外壁を貫通した飛来物が衝突した場合に、隔離事象に至るシナリオ。

③風荷重、気圧差荷重及び飛来物の衝撃荷重を組み合わせた荷重による建物や設備等の損傷

建物及び屋内外設備に対する組合せ荷重により発生可能性のあるシナリオについては、①、②に包含される。

④竜巻により取水口周辺の海に飛散した資機材等による取水口閉塞

竜巻により資機材、車両等が飛散して取水口周辺の海に入り取水口を閉塞させた場合、原子炉補機海水ポンプの取水ができなくなり補機冷却系喪失に至るシナリオが考えられるが、取水口を閉塞させるほどの資機材や車両等の飛散は考えられないことから考慮不要とする。

⑤竜巻襲来後のがれき散乱によるアクセス性や作業性の悪化

竜巻襲来後のがれき散乱により屋外現場へのアクセス性や屋外での作業性に影響を及ぼす可能性があるものの、設計基準事故対処設備のみで対応可能なシナリオであれば基本的に屋外での現場対応はなく、仮にアクセス性や屋外での作業性へ影響が及んだ場合であっても構内の道路又はアクセスルートについては、がれき撤去を行うことから問題はない。

そのため上記①～④の影響評価の結果として、可搬型重大事故等対処設備の接続といった屋外での作業が必要になるケースが確認された場合に、別途、詳細検討するものとする。

(4) 起回事象の特定

(3)項で選定した各シナリオについて、想定を超える竜巻事象に対しての裕度評価（起回事象発生可能性評価）を実施し、事故シーケンスグループ抽出に当

たつて考慮すべき起因事象の特定を行った。

①風荷重及び気圧差荷重による建物や設備等の損傷

<建物>

○原子炉建物，廃棄物処理建物，制御室建物

建物内外差圧の発生に伴う原子炉建物燃料取替階ブローアウトパネルの開放による手動停止に至るシナリオは考えられるため，起因事象として選定する。

○タービン建物

想定を超える風荷重がタービン建物に作用した場合，建物が損傷してタービン，発電機又はタービン補機冷却系サージタンクに影響を及ぼす可能性は否定できないため，タービンや発電機の機能喪失による非隔離事象，タービン補機冷却系の機能喪失によるタービン・サポート系故障は考慮すべき起因事象として選定する。

<屋外設備>

○送受電設備

想定を超える風荷重に対して送受電設備の損傷を否定できないため，送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○ディーゼル燃料移送ポンプ

想定を超える風荷重及び気圧差荷重に対しディーゼル燃料移送ポンプの損傷，かつ外部電源喪失の同時発生を否定できないため，全交流動力電源喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）

想定を超える風荷重に対して排気筒及び非常用ガス処理系排気管の損傷を否定できないため，排気筒及び非常用ガス処理系排気管の損傷に伴う手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○復水貯蔵タンク

想定を超える風荷重に対して復水貯蔵タンクの損傷を否定できないため，復水輸送系の喪失に伴う手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○原子炉補機海水ポンプ

想定を超える気圧差荷重に対して原子炉補機海水ポンプの損傷を否定できないため，原子炉補機冷却系の機能喪失に伴う補機冷却系喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ

想定を超える気圧差荷重に対し高圧炉心スプレイ補機海水ポンプの損傷を否定できないため，高圧炉心スプレイ系の機能喪失に伴う手動停止

は考慮すべき起因事象として選定する。

○タービン補機海水ポンプ

想定を超える気圧差荷重に対しタービン補機海水ポンプの損傷を否定できないため、タービン補機冷却系の機能喪失に伴うタービン・サポート故障は考慮すべき起因事象として選定する。

○循環水ポンプ

想定を超える風荷重に対し循環水ポンプの損傷を否定できないため、復水器真空度低による隔離事象は考慮すべき起因事象として選定する。

<屋内設備>

○タービン及び発電機

先述のとおり、タービン建物損傷によりタービンや発電機に影響を及ぼす可能性は否定できないため、タービン建物損傷に伴う非隔離事象は考慮すべき起因事象として選定する。

○原子炉建物付属棟空調換気系

想定を超える気圧差荷重に対し原子炉建物付属棟空調換気系のダクト等が損傷し、かつ外部電源喪失の同時発生を否定できないため、全交流動力電源喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○中央制御室換気系

上記(3)①のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、想定するシナリオはない。

②飛来物の衝撃荷重による建物や設備等の損傷

<建物>

○原子炉建物，タービン建物，廃棄物処理建物，制御室建物

飛来物が建物外壁を貫通することにより、屋内設備に波及的影響を及ぼすことが考えられるが、発生可能性のあるシナリオについては、後述の<屋内設備>で考慮することとする。

<屋外設備>

○送受電設備

飛来物の衝撃荷重に対して送受電設備の損傷を否定できないため、送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○ディーゼル燃料移送ポンプ

飛来物の衝撃荷重に対してディーゼル燃料移送ポンプが損傷し、かつ外部電源喪失の同時発生を否定できないため、全交流動力電源喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）



飛来物の衝撃荷重に対して排気筒及び非常用ガス処理系排気管の損傷を否定できないため、排気筒及び非常用ガス処理系排気管の損傷に伴う手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○復水貯蔵タンク

飛来物の衝撃荷重に対して復水貯蔵タンクの損傷を否定できないため、復水輸送系の喪失に伴う手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○原子炉補機海水ポンプ

飛来物の衝撃荷重に対して原子炉補機海水ポンプの損傷を否定できないため、原子炉補機冷却系の機能喪失に伴う補機冷却系喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ

飛来物の衝撃荷重に対して高圧炉心スプレイ補機海水ポンプの損傷を否定できないため、高圧炉心スプレイ系の機能喪失に伴う手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○タービン補機海水ポンプ

飛来物の衝撃荷重に対してタービン補機海水ポンプの損傷を否定できないため、タービン補機冷却系の機能喪失に伴うタービン・サポート故障は考慮すべき起因事象として選定する。

○循環水ポンプ

飛来物の衝撃荷重に対して循環水ポンプの損傷を否定できないため、復水器真空度低による隔離事象は考慮すべき起因事象として選定する。

<屋内設備>

○原子炉補機冷却系サージタンク

原子炉建物外壁を飛来物が貫通することを想定すると原子炉補機冷却系サージタンクの損傷を否定できないため、原子炉補機冷却系の機能喪失に伴う補機冷却喪失は考慮すべき起因事象として選定する。

○原子炉補機冷却水ポンプ、熱交換器

上記(3)②のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、起因事象として選定しない。

○可燃性ガス濃度制御系

原子炉建物外壁を飛来物が貫通することを想定すると可燃性ガス濃度制御系の損傷を否定できないため、手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○原子炉建物付属棟空調換気系

上記(3)②のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、起因事象として選定しない。

○中央制御室

上記(3)②のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、起

因事象として選定しない。

○中央制御室換気系

上記(3)②のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、起因事象として選定しない。

○原子炉建物給排気隔離弁

原子炉建物外壁を飛来物が貫通することを想定すると原子炉建物給排気隔離弁の損傷を否定できないため、手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○気体廃棄物処理設備

廃棄物処理建物外壁を飛来物が貫通することを想定すると気体廃棄物処理設備の損傷は否定できないため、手動停止は考慮すべき起因事象として選定する。

○タービン補機冷却系サージタンク

タービン建物外壁を飛来物が貫通することを想定するとタービン補機冷却系サージタンクの損傷を否定できないため、タービン補機冷却系の機能喪失に伴うタービン・サポート系故障は考慮すべき起因事象として選定する。

○タービン及び発電機

タービン建物外壁を飛来物が貫通することを想定するとタービンや発電機の損傷を否定できないため、非隔離事象は考慮すべき起因事象として選定する。

○主蒸気管（主蒸気隔離弁以降の配管）

タービン建物を飛来物が貫通することを想定すると主蒸気管（主蒸気隔離弁以降の配管）の損傷を否定できないため、隔離事象は考慮すべき起因事象として選定する。

③風荷重、気圧差荷重及び飛来物の衝撃荷重を組み合わせた荷重による建物や設備等の損傷

上記(3)③のとおり、建物及び屋内外設備に対する組合せ荷重により発生可能性のあるシナリオについては、①、②に包含されるため、起因事象としては選定不要であると判断した。

④竜巻により取水口周辺の海に飛散した資機材等による取水口閉塞

上記(3)④のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、起因事象として選定しない。

2. 事故シーケンスの特定

1. にて設計基準を超える竜巻事象に対し発生可能性のある起因事象として以下のとおり選定した。

- ・原子炉建物燃料取替階ブローアウトパネルの開放に伴う手動停止
- ・可燃性ガス濃度制御系の機能喪失に伴う手動停止
- ・原子炉建物給排気隔離弁の損傷に伴う手動停止
- ・気体廃棄物処理設備の損傷に伴う手動停止
- ・タービン、発電機の損傷に伴う非隔離事象
- ・タービン補機海水ポンプ又はタービン補機冷却系サージタンクの損傷に伴うタービン・サポート系故障
- ・主蒸気系（主蒸気隔離弁以降の配管）の損傷に伴う隔離事象
- ・送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失
- ・排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）の損傷に伴う手動停止
- ・復水貯蔵タンクの損傷に伴う手動停止
- ・ディーゼル燃料移送ポンプの損傷又は原子炉建物付属棟空調換気系の損傷，かつ外部電源喪失の同時発生に伴う全交流動力電源喪失
- ・原子炉補機海水ポンプ又は原子炉補機冷却系サージタンクの損傷に伴う補機冷却系喪失
- ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプの損傷に伴う手動停止
- ・循環水ポンプの損傷に伴う隔離事象

上記起因事象については、いずれも運転時の内部事象，地震及び津波レベル1 P R Aにて考慮していることから，追加すべき新しい事故シーケンスではない。

よって，竜巻事象を起因とする有意な頻度又は影響のある事故シーケンスは新たに生じないと判断した。

設計基準を超える凍結事象に対する事故シーケンス抽出

1. 起回事象の特定

(1) 構築物、系統及び機器（以下「設備等」という。）の損傷・機能喪失モードの抽出

凍結事象により設備等に発生する可能性のある事象について、国外の評価事例や国内で発生したトラブル事例も参照し、以下のとおり、損傷・機能喪失モードを抽出した。

- ①屋外タンク及び配管内流体の凍結
- ②ヒートシンク（海水）の凍結
- ③着氷による送受電設備の相間短絡

(2) 評価対象設備の選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対し、影響を受ける可能性のある設備等のうち、プラントの運転継続や安全性に影響を及ぼす可能性のある設備等を評価対象設備として選定した。

具体的には、以下に示す屋外設置の設備等を評価対象設備として選定した。

- ①屋外タンク及び配管内流体の凍結
  - ・ディーゼル燃料貯蔵タンク及びディーゼル発電機燃料移送系配管（以下「燃料貯蔵タンク等」という。）
  - ・復水貯蔵タンク及び附属配管（以下「復水貯蔵タンク等」という。）
- ②ヒートシンク（海水）の凍結
  - ・取水設備（海水）
- ③着氷による送受電設備の相間短絡
  - ・送受電設備

(3) 起回事象になり得るシナリオの選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対して、(2)項で選定した評価対象設備への影響を検討のうえ、発生可能性のあるシナリオを選定した。

- ①屋外タンク及び配管内流体の凍結
  - 燃料貯蔵タンク等
 

低温によって燃料貯蔵タンク等の軽油が凍結した場合に、下記③の外部電源喪失の同時発生を想定した場合、ディーゼル発電機デイトンクの燃料枯渇により、全交流動力電源喪失に至るシナリオ。
  - 復水貯蔵タンク等
 

低温によって復水貯蔵タンク等の保有水が凍結した場合、復水輸送系の喪失により手動停止に至るシナリオ。

②ヒートシンク（海水）の凍結

○取水設備（海水）

低温によって島根原子力発電所周辺の海水が凍結することは起こり得ないと考えられるため、この損傷・機能喪失モードは考慮しない。

③着氷による送受電設備の相間短絡

○送受電設備

送電線や碍子への着氷によって、相間短絡を起こし、外部電源喪失に至るシナリオ。

(4) 起因事象の特定

(3)項で選定した各シナリオについて、想定を超える凍結事象に対しての裕度評価（起因事象発生可能性評価）を実施し、事故シーケンスグループ抽出に当たって考慮すべき起因事象の特定を行った。

①屋外タンク及び配管内流体の凍結

○燃料貯蔵タンク等の凍結

ディーゼル発電機の燃料として使用している軽油は低温時の使用環境を考慮した油種としており、また、屋外の燃料移送系配管には保温材を取り付けていることから、有意な頻度又は影響のある事故シーケンスとはなり得ないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断した。

○復水貯蔵タンク等の凍結

復水貯蔵タンクは凍結しない一定以上の温度に加温しており、また、屋外の附属配管には保温材を取り付けていることから、有意な頻度又は影響のある事故シーケンスとはなり得ないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断した。

②ヒートシンク（海水）の凍結

○取水設備（海水）

上記(3)②のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、起因事象として選定しない。

③着氷による送受電設備の相間短絡

○送受電設備

着氷に対して設計上の配慮はなされているものの、設計基準を超える凍結事象に対して発生を否定できないため、送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失については考慮すべき起因事象として選定する。

## 2. 事故シーケンスの特定

1. にて設計基準を超える低温事象に対し発生可能性のある起因事象として外部電源喪失を特定したが、運転時の内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aにて考慮していることから、追加すべき新しい事故シーケンスではない。

よって、凍結事象を起因とする有意な頻度又は影響のある事故シーケンスは新たに生じないと判断した。

設計基準を超える積雪事象に対する事故シーケンス抽出

## 1. 起回事象の特定

## (1) 構築物、系統及び機器（以下「設備等」という。）の損傷・機能喪失モードの抽出

積雪事象により設備等に発生する可能性のある事象について、国外の評価事例や国内で発生したトラブル事例も参照し、以下のとおり、損傷・機能喪失モードを抽出した。

- ①建物天井や屋外設備に対する荷重
- ②送受電設備の屋外設備への着氷
- ③空調給気口等の閉塞
- ④積雪によるアクセス性や作業性の悪化

## (2) 評価対象設備の選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対し、影響を受ける可能性のある設備等のうち、プラントの運転継続や安全性に影響を及ぼす可能性のある設備等を評価対象設備として選定する。

具体的には、以下に示す建物及び屋外設置（屋外に面した設備を含む。）の設備等を評価対象設備として選定した。

## ①建物天井や屋外設備に対する荷重

<建物>

- ・原子炉建物
- ・タービン建物
- ・廃棄物処理建物
- ・制御室建物

<屋外設備>

- ・送受電設備のうち変圧器
- ・復水貯蔵タンク
- ・ディーゼル発電機燃焼用給気口
- ・原子炉補機海水ポンプ
- ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ
- ・タービン補機海水ポンプ
- ・循環水ポンプ

## ②送受電設備の屋外設備への着氷

- ・送受電設備

③空調給気口等の閉塞

- ・中央制御室換気系
- ・ディーゼル発電機給気系
- ・原子炉補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・タービン補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・循環水ポンプのモータ冷却口

④積雪によるアクセス性や作業性の悪化

－（アクセスルート）

(3) 起因事象になり得るシナリオの選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対して、(2)項で選定した評価対象設備への影響を検討のうえ、発生可能性のあるシナリオを選定した。

①建物天井や屋外設備に対する荷重

建物及び屋外設備に対する積雪荷重により発生可能性のあるシナリオは以下のとおり。

<建物>

○原子炉建物

原子炉建物屋上が積雪荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置している原子炉補機冷却系サージタンクが機能喪失することで、原子炉補機冷却系が喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオ。

原子炉建物屋上が積雪荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置している原子炉建物給排気隔離弁の機能喪失による手動停止に至るシナリオ。

○タービン建物

タービン建物屋上が積雪荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置しているタービンや発電機に影響が及び、非隔離事象に至るシナリオ。

タービン建物屋上が積雪荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置しているタービン補機冷却系サージタンクが機能喪失することで、タービン・サポート系故障に至るシナリオ。

○廃棄物処理建物

廃棄物処理建物屋上が積雪荷重により崩壊した場合に、建物最上階に設置している気体廃棄物処理設備が機能喪失し、手動停止に至るシナリオ。

○制御室建物

制御室建物屋上が積雪荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置している中央制御室が機能喪失し、計装・制御系機能喪失に至るシナリオ



オ。

#### <屋外設備>

##### ○送受電設備のうち変圧器

変圧器が積雪荷重により損傷した場合に、外部電源喪失に至るシナリオ。

##### ○復水貯蔵タンク

復水貯蔵タンク天板が積雪荷重により崩落し、保有水が喪失した場合、復水輸送系の喪失により手動停止に至るシナリオ。

##### ○ディーゼル発電機燃焼用給気口

ディーゼル発電機の燃焼用給気口が積雪荷重により損傷しディーゼル発電機が機能喪失した場合に、上記の外部電源喪失の同時発生を想定した場合、全交流動力電源喪失に至るシナリオ。

##### ○原子炉補機海水ポンプ

原子炉補機海水ポンプが積雪荷重により損傷した場合に、原子炉補機冷却系が喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオ。

##### ○高圧炉心スプレー補機海水ポンプ

高圧炉心スプレー補機海水ポンプが積雪荷重により損傷した場合に、高圧炉心スプレー系が機能喪失することによる手動停止に至るシナリオ。

##### ○タービン補機海水ポンプ

タービン補機海水ポンプが積雪荷重により損傷した場合に、タービン補機海水系が機能喪失することでタービン・サポート系故障に至るシナリオ。

##### ○循環水ポンプ

循環水ポンプが積雪荷重により損傷した場合に、復水器真空度低により隔離事象に至るシナリオ。

#### ②送受電設備の屋外設備への着氷

##### ○送受電設備

送電線や碍子へ雪が着氷（着氷雪）することによって、相間短絡を起こし外部電源喪失に至るシナリオ。

#### ③空調給気口等の閉塞

##### ○中央制御室換気系

積雪によって中央制御室換気系の給排気口が閉塞した場合は、外気遮断による系統隔離運転が可能な設計となっているため、考慮すべきシナリオとしては抽出不要とする。

##### ○ディーゼル発電機給気系

積雪によるディーゼル発電機の燃焼用給気フィルタの目詰まり又は燃

焼用給気口の閉塞によって、ディーゼル発電機の機能が喪失した場合に、上記②の外部電源喪失の同時発生を想定した場合、全交流動力電源喪失に至るシナリオ。

○原子炉補機海水ポンプのモータ冷却口

積雪によって、原子炉補機海水ポンプのモータ冷却口が閉塞した場合、原子炉補機冷却系の機能喪失による補機冷却系喪失に至るシナリオ。

○高圧炉心スプレイ補機海水ポンプのモータ冷却口

積雪によって、高圧炉心スプレイ補機海水ポンプのモータ冷却口が閉塞した場合、高圧炉心スプレイ系が機能喪失することによる手動停止に至るシナリオ。

○タービン補機海水ポンプのモータ冷却口

積雪によって、タービン補機海水ポンプのモータ冷却口が閉塞した場合、タービン補機海水系が機能喪失することによるタービン・サポート系故障に至るシナリオ。

○循環水ポンプのモータ冷却口

積雪によって、循環水ポンプのモータ冷却口が閉塞した場合、復水器真空度低により隔離事象に至るシナリオ。

④積雪によるアクセス性や作業性の悪化

積雪により屋外現場へのアクセス性や屋外での作業性に影響を及ぼす可能性があるものの、設計基準事故対処設備のみで対応可能なシナリオであれば基本的に屋外での現場対応はなく、仮にアクセス性や屋外での作業性へ影響が及んだ場合であっても構内の道路又はアクセスルートについては、除雪を行うことから問題はない。

そのため上記①～③の影響評価の結果として、可搬型重大事故等対処設備の接続といった屋外での作業が必要になるケースが確認された場合に、別途、詳細検討するものとする。

(4) 起回事象の特定

(3)項で選定した各シナリオについて、想定を超える積雪事象に対しての裕度評価（起回事象発生可能性評価）を実施し、事故シーケンスグループ抽出に当たって考慮すべき起回事象の特定を行った。

①建物天井や屋外設備に対する荷重により発生可能性のあるシナリオ

○建物及び屋外設備

積雪荷重が各建物天井や屋外設備の許容荷重を上回った場合には、(3)項で選定した各シナリオが発生する可能性はあるが、積雪は事前の予測が十分に可能であり、また積雪事象の進展速度を踏まえると除雪管理が可能であることから、発生可能性は非常に稀であり、有意な頻度又は影

響のある事故シーケンスの要因とはなりえないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断した。

## ②送受電設備の屋外設備への着氷

### ○送受電設備

着雪に対して設計上の配慮はなされているものの、設計基準を超える積雪事象に対して発生を否定できないため、送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失については考慮すべき起因事象として選定する。

## ③空調給気口等の閉塞

### ○中央制御室換気系，ディーゼル発電機給気系，原子炉補機海水ポンプのモータ冷却口，高圧炉心スプレイ補機海水ポンプのモータ冷却口，タービン補機海水ポンプのモータ冷却口及び循環水ポンプのモータ冷却口

中央制御室換気系，ディーゼル発電機給気系，原子炉補機海水ポンプのモータ冷却口，高圧炉心スプレイ補機海水ポンプのモータ冷却口，タービン補機海水ポンプのモータ冷却口又は循環水ポンプのモータ冷却口が閉塞した場合には，(3)項で選定した各シナリオが発生する可能性はあるが，積雪は事前の予測が十分に可能であり，また積雪事象の進展速度を踏まえると除雪管理が可能であることから，発生可能性は非常に稀であり，有意な頻度又は影響のある事故シーケンスの要因にはなりえないと考えられるため，考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断した。

## 2. 事故シーケンスの特定

1. にて設計基準を超える積雪事象に対し発生可能性のある起因事象として外部電源喪失を特定したが，運転時の内部事象，地震及び津波レベル1 P R Aにて考慮していることから，追加すべき新しい事故シーケンスではない。

よって，積雪事象を起因とする有意な頻度又は影響のある事故シーケンスは新たに生じないと判断した。

設計基準を超える落雷事象に対する事故シーケンス抽出

1. 起回事象の特定

(1) 構築物，系統及び機器（以下「設備等」という。）の損傷・機能喪失モードの抽出

落雷事象により設備等に発生する可能性のある事象について，国外の評価事例や国内で発生したトラブル事例も参照し，以下のとおり，損傷・機能喪失モードを抽出した。

- ①屋内外計測制御設備に発生するノイズ
- ②直撃雷による設備損傷
- ③誘導雷サージによる電気盤内の回路損傷

(2) 評価対象設備の選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対し，影響を受ける可能性のある設備等のうち，プラントの運転継続や安全性に影響を及ぼす可能性のある設備等を評価対象設備として選定した。

- ①屋内外計測制御設備に発生するノイズ
  - ・計測制御設備
- ②直撃雷による設備損傷
  - ・送受電設備
  - ・原子炉補機海水ポンプ
  - ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ
  - ・タービン補機海水ポンプ
  - ・循環水ポンプ
- ③誘導雷サージによる電気盤内の回路損傷
  - ・計測制御設備

(3) 起回事象になり得るシナリオの選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対して，(2)項で選定した評価対象設備への影響を検討のうえ，発生可能性のあるシナリオを選定した。

- ①屋内外計測制御設備に発生するノイズ
  - 計測制御設備

ノイズにより安全保護系が誤動作した場合，隔離事象又は原子炉保護系誤動作等に至るシナリオ。

ノイズにより安全保護系以外の計測制御設備が誤動作した場合，非隔離事象，全給水喪失又は水位低下事象に至るシナリオ。

## ②直撃雷による設備損傷

### ○送受電設備

送受電設備への直撃雷により、当該設備が機能喪失し、外部電源喪失に至るシナリオ。

### ○原子炉補機海水ポンプ

原子炉補機海水ポンプへの直撃雷により、当該設備が機能喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオ。

### ○高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ

高圧炉心スプレイ補機海水ポンプへの直撃雷により、当該設備が機能喪失し、手動停止に至るシナリオ。

### ○タービン補機海水ポンプ

タービン補機海水ポンプへの直撃雷により、当該設備が機能喪失し、タービン・サポート系故障に至るシナリオ。

### ○循環水ポンプ

循環水ポンプへの直撃雷により、当該設備が機能喪失し、復水器真空度喪失により隔離事象に至るシナリオ。

## ③誘導雷サージによる電気盤内の回路損傷

### ○計測制御設備

建物避雷設備等から誘導雷サージが建物内に侵入し、電気盤内の制御回路が損傷し、計装・制御系喪失に至るシナリオ。

## (4) 起回事象の特定

(3)項で選定した各シナリオについて、想定を超える落雷事象に対しての裕度評価（起回事象発生可能性評価）を実施し、事故シーケンスグループ抽出に当たって考慮すべき起回事象の特定を行った。

### ①屋内外計測制御設備に発生するノイズ

#### ○計測制御設備

落雷によって安全保護系に発生するノイズの影響により誤動作する可能性は否定できず、隔離事象又は原子炉保護系誤動作等に至るシナリオは考えられるため、起回事象として特定する。

また、落雷によって安全保護系以外の計測制御設備に発生するノイズの影響により誤動作する可能性は否定できず、非隔離事象、全給水喪失又は水位低下事象に至るシナリオは考えられるため、起回事象として特定する。

なお、上記事象以外の誤動作（ポンプの誤起動等）については、設備の機能喪失には至らず、かつ復旧についても容易であることから、起回事象としては特定しない。

## ②直撃雷による設備損傷

### ○送受電設備

送電線、開閉所は架空地線で落雷の確率低減対策を実施しているが、受雷を否定できないため、送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失に至るシナリオは考えられるため、起因事象として特定する。

### ○原子炉補機海水ポンプ

原子炉補機海水ポンプは、避雷設備の効果を期待できるが、海水ポンプモータ部に関しては落雷によって機能喪失する可能性を否定できない。また、区分分離が実施された複数の系統に期待できるが、同時に機能喪失することを保守的に考慮し、補機冷却系喪失に至るシナリオは考えられるため起因事象として特定する。

### ○高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ

高圧炉心スプレイ補機海水ポンプは、避雷設備の効果を期待できるが、海水ポンプモータ部に関しては落雷によって機能喪失する可能性を否定できないことから、手動停止に至るシナリオは考えられるため起因事象として特定する。

### ○タービン補機海水ポンプ

タービン補機海水ポンプは、避雷設備の効果を期待できるが、海水ポンプモータ部に関しては落雷によって機能喪失する可能性を否定できないことから、タービン・サポート系故障に至るシナリオは考えられるため起因事象として特定する。

### ○循環水ポンプ

循環水ポンプモータ部に関しては、落雷によって機能喪失する可能性を否定できないため、循環水ポンプの機能喪失に伴う復水器真空度喪失による隔離事象に至るシナリオは考えられるため起因事象として特定する。

## ③誘導雷サージによる電気盤内の回路損傷

### ○計測制御設備

落雷による誘導雷サージを接地網へ効果的に導くことができない場合には、電気盤内の絶縁耐力が低い制御回路が損傷し、発電用原子炉施設の安全保護系機能が喪失する。しかしながら、安全保護系の制御回路はシールドケーブルを使用し、基本的に建物内に布設しているため、有意なサージの侵入はないこと、また屋外との取合いがある制御回路についても、避雷器や絶縁トランスによるサージ対策が講じられており、制御回路が影響を受けるような誘導雷サージの侵入はないことから、有意な頻度又は影響のある事故シーケンスとはなりえないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては特定不要であると判断される。

なお、安全保護系以外の計測制御設備は、誘導雷サージの影響により損傷し、安全保護系以外の計装・制御系喪失により制御不能に至る可能性を否定できない。制御不能となった場合は、非隔離事象、全給水喪失又は水位低下事象に至るシナリオは考えられるため、起因事象として特定する。

## 2. 事故シーケンスの特定

1. にて設計基準を超える落雷事象に対し発生可能性のある起因事象として以下を特定した。

- ・安全保護系に発生するノイズの影響に伴う隔離事象又は原子炉保護系誤動作等
- ・安全保護回路以外の計測制御設備に発生するノイズの影響に伴う非隔離事象、全給水喪失又は水位低下事象
- ・送受電設備の機能喪失による外部電源喪失
- ・原子炉補機海水ポンプの機能喪失による補機冷却系喪失
- ・高圧炉心スプレイポンプの機能喪失による手動停止
- ・タービン補機海水ポンプの機能喪失によるタービン・サポート系故障
- ・循環水ポンプの機能喪失による隔離事象
- ・安全保護回路以外の計測制御設備の損傷に伴う非隔離事象、全給水喪失又は水位低下事象

上記起因事象については、いずれも運転時の内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aにて考慮していることから、追加すべき新しい事故シーケンスではない。

よって、落雷事象を起因とする有意な頻度又は影響のある事故シーケンスは新たに生じないと判断した。

## 設計基準を超える火山事象に対する事故シーケンス抽出

### 1. 起回事象の特定

#### (1) 構築物、系統及び機器（以下「設備等」という。）の損傷・機能喪失モードの抽出

火山事象のうち、火砕流や火山弾といった原子力発電所の「火山影響評価ガイド」（制定 平成25年6月19日 原規技発第13061910号 原子力規制委員会決定）（以下「影響評価ガイド」という。）において設計対応不可能とされている事象については、「影響評価ガイド」に基づく立地評価にて原子力発電所の運用期間中に影響を及ぼす可能性がないと判断されている。よって、個々の火山事象への設計対応及び運転対応の妥当性について評価を行うため抽出した降下火砕物を対象に原子力発電所への影響を検討するものとする。

降下火砕物により設備等に発生する可能性のある事象について、影響評価ガイドも参照し、以下のとおり、損傷・機能喪失モードを抽出した。

- ①降下火砕物の堆積荷重による荷重
- ②降下火砕物による取水口及び海水系の閉塞
- ③降下火砕物による空調給気口等の閉塞及び屋外設備の摩耗
- ④降下火砕物に付着している腐食成分による化学的影響
- ⑤降下火砕物の送受電設備への付着による相間短絡
- ⑥降下火砕物によるアクセス性や作業性の悪化

#### (2) 評価対象設備の選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対し、影響を受ける可能性のある設備等のうち、プラントの運転継続や安全性に影響を及ぼす可能性のある設備等を評価対象設備として選定した。

##### ①降下火砕物の堆積荷重による静的荷重

<建物>

- ・原子炉建物
- ・タービン建物
- ・廃棄物処理建物
- ・制御室建物

<屋外設備>

- ・送受電設備のうち変圧器
- ・復水貯蔵タンク
- ・ディーゼル発電機燃焼用給気口
- ・原子炉補機海水ポンプ
- ・高圧炉心スプレー補機海水ポンプ



- ・タービン補機海水ポンプ
- ・循環水ポンプ

②降下火砕物による取水口及び海水系の閉塞

- ・取水口
- ・原子炉補機海水ポンプ
- ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ
- ・タービン補機海水ポンプ
- ・循環水ポンプ

③降下火砕物による空調給気口等の閉塞及び屋外設備の摩耗

- ・ディーゼル発電機給気系
- ・中央制御室換気系
- ・原子炉補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・高圧炉心スプレイ補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・タービン補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・循環水ポンプのモータ冷却口
- ・ディーゼル燃料移送ポンプ

④降下火砕物に付着している腐食成分による化学的影響

- ・原子炉補機海水ポンプ等の屋外設備

⑤降下火砕物の送受電設備への付着による相間短絡

- ・送受電設備

⑥降下火砕物によるアクセス性や作業性の悪化

- － (アクセスルート)

(3) 起因事象になり得るシナリオの選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対して、(2)項で選定した評価対象設備への影響を検討のうえ、発生可能性のあるシナリオを選定した。

①降下火砕物による建物天井や屋外設備に対する堆積荷重

建物及び屋外設備に対する降下火砕物堆積荷重により発生可能性のあるシナリオは以下のとおり。

<建物>

○原子炉建物

原子炉建物屋上が降下火砕物による堆積荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置している原子炉補機冷却系サージタンクが損傷するこ

とで、原子炉補機冷却系が喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオ。

原子炉建物屋上が降下火砕物による堆積荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置している原子炉建物給排気隔離弁の機能喪失により手動停止に至るシナリオ。

○タービン建物

タービン建物屋上が降下火砕物による堆積荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置しているタービンや発電機に影響が及び、非隔離事象に至るシナリオ。

また、タービン補機冷却系サージタンクが機能喪失することで、タービン・サポート系故障に至るシナリオ。

○廃棄物処理建物

廃棄物処理建物屋上が降下火砕物による堆積荷重により崩壊した場合に、建物最上階に設置している気体廃棄物処理設備が機能喪失し、手動停止に至るシナリオ。

○制御室建物

制御室建物屋上が降下火砕物による堆積荷重により崩落した場合に、建物最上階に設置している中央制御室が機能喪失し、計装・制御系機能喪失に至るシナリオ。

<屋外設備>

○送受電設備のうち変圧器

変圧器が降下火砕物による堆積荷重により損傷した場合に、外部電源喪失に至るシナリオ。

○復水貯蔵タンク

復水貯蔵タンク天板が降下火砕物による堆積荷重により崩落し、保有水が喪失した場合、復水輸送系の喪失により手動停止に至るシナリオ。

○ディーゼル発電機燃焼用給気口

ディーゼル発電機の燃焼用給気口が降下火砕物による堆積荷重によって損傷し、ディーゼル発電機が機能喪失した場合に、上記の外部電源喪失の同時発生を想定した場合、全交流動力電源喪失に至るシナリオ。

○原子炉補機海水ポンプ

原子炉補機海水ポンプが降下火砕物による堆積荷重により損傷した場合に、原子炉補機冷却系が喪失し、補機冷却系喪失に至るシナリオ。

○高圧炉心スプレー補機海水ポンプ

高圧炉心スプレー補機海水ポンプが降下火砕物による堆積荷重により損傷した場合に、高圧炉心スプレー系が機能喪失し、手動停止に至るシナリオ。

○タービン補機海水ポンプ

タービン補機海水ポンプが降下火砕物による堆積荷重により損傷した場合に、タービン補機海水系が機能喪失し、タービン・サポート系故障に至るシナリオ。

○循環水ポンプ

循環水ポンプが降下火砕物による堆積荷重により損傷した場合に、復水器真空度低により隔離事象に至るシナリオ。

②降下火砕物による取水口及び海水系の閉塞

○取水口

海水中への降下火砕物による取水口への影響については、定量的な裕度評価は困難であるが、降下火砕物に対する取水量や取水設備構造等を考慮すると、取水口閉塞の発生は考えにくく、考慮するシナリオとしては抽出不要と考えられる。

○原子炉補機海水ポンプ，高圧炉心スプレー補機海水ポンプ，タービン補機海水ポンプ及び循環水ポンプ

海水系については、海水中の降下火砕物が高濃度な場合には、熱交換器の伝熱管、海水ポンプ軸受の閉塞による異常摩耗や海水ストレーナの閉塞により、原子炉補機海水ポンプが機能喪失し補機冷却系喪失に至るシナリオ、高圧炉心スプレー補機海水ポンプが機能喪失し手動停止に至るシナリオ、タービン補機海水ポンプが機能喪失しタービン・サポート系故障に至るシナリオ及び循環水ポンプが機能喪失し隔離事象に至るシナリオ。

③降下火砕物による空調給気口等の閉塞及び屋外設備の摩耗

○ディーゼル発電機給気系

降下火砕物によるディーゼル発電機の給気フィルタの目詰まり又は燃焼用給気口の閉塞によって、ディーゼル発電機の機能が喪失した場合に、下記⑤の外部電源喪失の同時発生を想定した場合、全交流動力電源喪失に至るシナリオ。

○中央制御室換気系

降下火砕物によって中央制御室換気系の給排気口が閉塞した場合は、外気遮断による系統隔離運転が可能な設計となっているため、考慮すべきシナリオとして選定は不要である。また、降下火砕物の吸い込みにより給気口が閉塞した場合でも、フィルタの取替え及び清掃が可能であることから考慮すべきシナリオとして選定は不要である。

○原子炉補機海水ポンプ，高圧炉心スプレー補機海水ポンプ，タービン補機海水ポンプ及び循環水ポンプのモータ冷却口の閉塞

降下火砕物の吸い込み又は冷却口への堆積により、海水ポンプモータの冷却口が閉塞した場合、原子炉補機海水ポンプが機能喪失し補機冷却

系喪失に至るシナリオ，高圧炉心スプレー補機海水ポンプが機能喪失し手動停止に至るシナリオ，タービン補機海水ポンプが機能喪失しタービン・サポート系故障に至るシナリオ又は循環水ポンプが機能喪失し隔離事象に至るシナリオ。

○ディーゼル燃料移送ポンプ

降下火砕物による軸受摩耗により，ディーゼル燃料移送ポンプが損傷し，ディーゼル発電設備が燃料枯渇により機能喪失した場合に，下記⑤の外部電源喪失の同時発生を想定した場合，全交流動力電源喪失に至るシナリオ。

④降下火砕物に付着している腐食成分による化学的影響

○原子炉補機海水ポンプ等の屋外設備

降下火砕物が屋外設備に付着することによる腐食については，屋外設備表面に塗装が施されており腐食の抑制効果が考えられること，腐食の進展速度の遅さを考慮し，適切な保守管理が可能であるため考慮するシナリオとしては抽出不要とする。

⑤降下火砕物の送受電設備への付着による相間短絡

○送受電設備

降下火砕物が送電線や碍子へ付着し，霧や降雨の水分を吸収することによって，相間短絡を起こし外部電源喪失に至るシナリオ。

⑥降下火砕物によるアクセス性や作業性の悪化

降下火砕物により屋外現場へのアクセス性や屋外での作業性に影響を及ぼす可能性があるものの，設計基準事故対処設備のみで対応可能なシナリオであれば基本的に屋外での現場対応はなく，仮にアクセス性や屋外での作業性へ影響が及んだ場合であっても構内の道路又はアクセスルートについては，除灰を行うことから問題はない。

そのため上記①～⑤の影響評価の結果として，可搬型重大事故等対処設備の接続といった屋外での作業が必要になるケースが確認された場合に，別途，詳細検討するものとする。

(4) 起回事象の特定

(3)項で選定した各シナリオについて，想定を超える火山事象に対しての裕度評価（起回事象発生可能性評価）を実施し，事故シーケンスグループ抽出に当たって考慮すべき起回事象の特定を行った。

①降下火砕物による建物天井や屋外設備に対する堆積荷重により発生可能性のあるシナリオ

○ 建物及び屋外設備

降下火砕物による堆積荷重が各建物天井や屋外設備の許容荷重を上回った場合には、(3)項で選定した各シナリオが発生する可能性はあるが、火山事象は事前の予測が十分に可能であり、また降灰事象の進展速度を踏まえると除灰管理が可能であることから、発生可能性は非常に稀であり、有意な頻度又は影響のある事故シーケンスの要因にはなりえないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断した。

②降下火砕物による取水口及び海水系の閉塞

○原子炉補機海水ポンプ、高圧炉心スプレー補機海水ポンプ、タービン補機海水ポンプ及び循環水ポンプ

海水中の降下火砕物による海水系への影響については、降下火砕物の性質である硬度を考慮すると、海水中の降下火砕物によって熱交換器の伝熱管、海水ポンプ軸受の閉塞による異常摩耗は進展しにくく、また、降灰事象は進展速度を踏まえると、海水ストレーナの差圧が上昇した場合は切り替えて清掃することによって機能喪失することは考えにくいいため、考慮すべき起因事象として選定不要であると判断した。

③降下火砕物による空調給気口等の閉塞及び屋外設備の摩耗

○ディーゼル発電機給気系

降下火砕物の吸い込み又は給気口への堆積によりディーゼル発電機の給気フィルタが閉塞した場合には、(3)項で選定したシナリオが発生する可能性はあるが、火山事象は事前の予測が十分に可能であり、また降灰事象の進展速度を踏まえると除灰管理又はフィルタ交換が可能であることから、発生可能性は非常に稀であり、有意な頻度又は影響のある事故シーケンスの要因にはなりえないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断した。

また、モータ冷却口が閉塞した場合には、(3)項で選定したシナリオが発生する可能性はあるが、火山事象は事前の予測が十分に可能であり、また降灰事象の進展速度を踏まえると除灰管理が可能であることから、発生可能性は非常に稀であり、有意な頻度又は影響のある事故シーケンスの要因にはなりえないと考えられるため、考慮すべき起因事象としては選定不要であると判断した。

④降下火砕物に付着している腐食成分による化学的影響

上記(3)④のとおり、この損傷・機能喪失モードは考慮しないため、想定するシナリオはない。

⑤降下火砕物の送受電設備への付着による相間短絡

○送受電設備

降下火砕物の影響を受ける可能性がある送受電設備は、発電所内外の広範囲にわたるため、全域における管理が困難なことを踏まえると設備等の不具合による機能喪失の可能性を否定できないため、外部電源喪失については考慮すべき起因事象として選定する。

2. 事故シーケンスの特定

1. にて設計基準を超える火山事象に対し発生可能性のある起因事象として外部電源喪失を特定したが、運転時の内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aにて考慮していることから、追加すべき新しい事故シーケンスではない。

よって、火山事象を起因とする有意な頻度又は影響のある事故シーケンスは新たに生じないと判断した。

## 設計基準を超える森林火災事象に対する事故シーケンス抽出

### 1. 起回事象の特定

#### (1) 構築物，系統及び機器（以下「設備等」という。）の損傷・機能喪失モードの抽出

森林火災により設備等に発生する可能性のある事象について，国外の評価事例，国内で発生したトラブル事例も参照し，以下のとおり，損傷・機能喪失モードを抽出した。

- ① 輻射熱による建物や設備等への影響
- ② ばい煙による設備等の閉塞

#### (2) 評価対象設備の選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対し，影響を受ける可能性のある設備等のうち，プラントの運転継続や安全性に影響を及ぼす可能性のある設備等を評価対象設備として選定した。

##### ① 輻射熱による建物や設備等への影響

###### < 建物 >

- ・ 原子炉建物
- ・ タービン建物
- ・ 廃棄物処理建物
- ・ 制御室建物

###### < 屋外設備 >

- ・ 送受電設備
- ・ 復水貯蔵タンク
- ・ 排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）
- ・ 原子炉補機海水ポンプ
- ・ 高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ
- ・ タービン補機海水ポンプ
- ・ 循環水ポンプ

##### ② ばい煙による設備等の閉塞

- ・ ディーゼル発電設備の給気系
- ・ 換気空調設備
- ・ 中央制御室換気系
- ・ 原子炉補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・ 高圧炉心スプレイ補機海水ポンプのモータ冷却口

- ・タービン補機海水ポンプのモータ冷却口
- ・循環水ポンプのモータ冷却口

(3) 起因事象になり得るシナリオの選定

(1)項で抽出した各損傷・機能喪失モードに対して、(2)項で選定した評価対象設備への影響を検討のうえ、発生可能性のあるシナリオを選定した。

①輻射熱による建物や設備等への影響

<建物>

○原子炉建物，タービン建物，廃棄物処理建物及び制御室建物

森林火災の輻射熱による建物への影響について、想定し得る最大の火災影響評価において、防火帯外縁（火炎側）から十分な離隔距離があることを考慮すると、建物の許容温度を下回り、建物が損傷することはない。また、森林火災の輻射熱による建物影響について、24時間駐在している自衛消防隊による早期の消火活動も可能であり、森林火災に対する影響緩和策を講じることができることから、シナリオの選定は不要である。

<屋外設備>

○送受電設備

森林火災の輻射熱により送受電設備が損傷した場合、外部電源喪失に至るシナリオ。

なお、森林火災の輻射熱による送受電設備への影響について、想定し得る最大の火災影響評価において、防火帯外縁（火炎側）から十分な離隔距離があることを考慮すると、敷地内の送受電設備が損傷することはない。また、森林火災の輻射熱による影響について、24時間駐在している自衛消防隊による早期の消火活動も可能であり、森林火災に対する影響緩和策を講じることができる。

○復水貯蔵タンク

森林火災の輻射熱による復水貯蔵タンクへの影響について、防火帯外縁（火炎側）から十分な離隔距離があることを考慮すると、復水貯蔵タンクが受ける輻射強度は低いため、復水貯蔵タンクが損傷することはない。また、森林火災の輻射熱による影響について、24時間駐在している自衛消防隊による早期の消火活動も可能であり、森林火災に対する影響緩和策を講じることができることから、シナリオの選定は不要である。

○排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）

森林火災の輻射熱による排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）への影響について、防火帯外縁（火炎側）から十分な離隔距離があることを考慮すると、排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）が受ける輻射



強度は低いため、排気筒（非常用ガス処理系排気管を含む。）が損傷することはない。また、森林火災の輻射熱による影響について、24時間駐在している自衛消防隊による早期の消火活動も可能であり、森林火災に対する影響緩和策を講じることができることから、シナリオの選定は不要である。

- 原子炉補機海水ポンプ、高圧炉心スプレイ補機海水ポンプ、タービン補機海水ポンプ及び循環水ポンプ（以下「海水ポンプ」という。）

森林火災の輻射熱による海水ポンプへの影響について、想定し得る最大の火災影響評価において、防火帯外縁（火炎側）から十分な離隔距離があることを考慮すると、海水ポンプが受ける輻射強度は低いため、海水ポンプが損傷することはない。また、森林火災の輻射熱による影響について、24時間駐在している自衛消防隊による早期の消火活動も可能であり、森林火災に対する影響緩和策を講じることができることから、シナリオの選定は不要である。

## ②ばい煙による設備等の閉塞

- ディーゼル発電設備の給気系

森林火災で発生するばい煙のディーゼル発電設備の給気口への吸い込みにより給気口が閉塞した場合でも、フィルタの取替え及び清掃が可能であることから、シナリオの選定は不要である。

- 海水ポンプのモータ冷却口

海水ポンプモータ内部にばい煙粒子が侵入した場合でも、モータ内の通気経路の隙間は十分に大きく閉塞等の影響はないため、シナリオの選定は不要である。

- 換気空調設備

外気取入口にはフィルタを設置しているため、一定以上の粒径のばい煙を捕集するとともに、換気空調設備の停止により建物内へのばい煙の侵入を阻止することが可能であるため、シナリオの選定は不要である。

- 中央制御室換気系

外気取入口にはフィルタを設置しているため、一定以上の粒径のばい煙を捕集するとともに、給気隔離弁及び排気隔離弁を閉止し系統隔離運転モードとすることにより、長時間室内へのばい煙侵入を阻止することが可能であるため、シナリオの選定は不要である。

## (4) 起回事象の特定

(3)項で選定した各シナリオについて、想定を超える森林火災事象に対しての裕度評価（起回事象発生可能性評価）を実施し、事故シーケンスグループ抽出に当たって考慮すべき起回事象の特定を行った。

### ①輻射熱による建物や設備等への影響

#### <建物>

森林火災の輻射熱による各建物の損傷については、上記(3)①のとおり、考慮すべき起因事象として特定不要であると判断した。

#### <屋外設備>

森林火災の輻射熱により送受電設備が損傷する可能性が否定できず、送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失に至るシナリオは考えられるため、起因事象として特定する。その他の屋外設備についての損傷のシナリオについては、上記(3)①のとおり、考慮すべき起因事象として特定不要であると判断した。

### ②ばい煙による設備等の閉塞

森林火災のばい煙等による設備等の閉塞については、上記(3)②のとおり、考慮すべき起因事象として特定不要であると判断した。

## 2. 事故シーケンスの特定

1. にて森林火災に対し発生可能性のある起因事象として外部電源喪失を特定したが、運転時の内部事象、地震及び津波レベル1 P R Aにて考慮していることから、追加すべき新しい事故シーケンスではない。

よって、森林火災事象を起因とする有意な頻度又は影響のある事故シーケンスは新たに生じないと判断した。

起因事象の発生が考えられるその他の自然現象と起因事象発生時の対応 (1 / 2)

自然現象	考慮対象とした起因事象	起因事象の発生シナリオ	想定される他の緩和系設備への影響	緩和系設備の機能喪失への対応
竜巻	手動停止	風荷重、気圧差荷重、飛来物の衝撃荷重による原子炉建物燃料取替階ブローアウトパネルの開放や高圧炉心スプレイ補機海水ポンプの損傷等に伴う手動停止	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備のうち、飛来物が直接衝突する十分な厚さを有した外壁と一つ内側の頑健性のある壁との間に設置されている設備以外には影響しないものと考えられる。</li> <li>建物外の設備には風荷重や飛来物の衝撃荷重による影響が生じる可能性が考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備のうち、飛来物が直接衝突する十分な厚さを有した外壁と一つ内側の頑健性のある壁との間に設置されている設備以外には影響しないものと考えられることから、必要な緩和機能は維持できるものと考えられる。</li> <li>建物外の設備に対しても、竜巻の局所性を考慮して位置的分散を図ること及び竜巻防護設備を設置することにより建物外の設備に期待できるものと考えられる。</li> </ul>
	非隔離事象	飛来物による衝撃荷重によるタービンや発電機の損傷に伴う非隔離事象		
	タービン・サポート系故障	気圧差荷重、飛来物の衝撃荷重によるタービン補機海水ポンプやタービン補機冷却系サージタンクの損傷に伴うタービン・サポート系故障		
	隔離事象	風荷重や飛来物の衝撃荷重による主蒸気系（主蒸気隔離弁以降の配管）や循環水ポンプの損傷に伴う隔離事象		
	外部電源喪失	風荷重や飛来物の衝撃荷重による送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失		
	全交流動力電源喪失	風荷重、気圧差荷重、飛来物の衝撃荷重による原子炉建物付風棟空調換気系等の損傷及び外部電源喪失の同時喪失に伴う全交流動力電源喪失		
凍結	補機冷却系喪失	気圧差荷重や飛来物の衝撃荷重による原子炉補機海水ポンプや原子炉補機冷却系サージタンクの損傷に伴う補機冷却系喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられる。</li> <li>建物外の設備には低温による影響が生じる可能性が考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられることから、必要な緩和機能は維持できるものと考えられる。</li> <li>建物外の設備に対しても、凍結防止対策により機能を維持できるものと考えられる。</li> </ul>
	外部電源喪失	送受電設備へ着氷することによって相間短絡を起こすことによる外部電源喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられる。</li> <li>建物外の設備には積雪による影響が生じる可能性が考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられることから、必要な緩和機能は維持できるものと考えられる。</li> <li>建物外の設備に対しても、除雪等の対応により機能を維持できるものと考えられる。</li> </ul>
積雪	外部電源喪失	送受電設備へ着雪することによって相間短絡を起こすことによる外部電源喪失		

起因事象の発生が考えられるその他の自然現象と起因事象発生時の対応 (2 / 2)

自然現象	考慮対象とした起因事象	起因事象の発生シナリオ	想定される他の緩和系設備への影響	緩和系設備の機能喪失への対応
落雷	隔離事象	安全保護系に発生するノイズの影響や直撃雷による循環水ポンプの損傷に伴う隔離事象	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられる。</li> <li>建物外の設備には直撃雷による影響が生じる可能性があると考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられることから、必要な緩和機能は維持できるものと考えられる。</li> <li>建物外の設備に対して、落雷の局所性を考慮して位置的分散を図ること及び避雷設備を設置することにより建物外の設備に期待できるものと考えられる。</li> </ul>
	原子炉保護系誤動作等	安全保護系に発生するノイズの影響に伴う原子炉保護系誤動作等		
	非隔離事象	安全保護系以外の計測制御設備に発生するノイズの影響に伴う非隔離事象		
	全給水喪失	安全保護系以外の計測制御設備に発生するノイズの影響に伴う全給水喪失		
	水位低下事象	安全保護系以外の計測制御設備に発生するノイズの影響に伴う水位低下事象		
	外部電源喪失	直撃雷による送受電設備の損傷に伴う外部電源喪失		
	補機冷却系喪失	直撃雷による原子炉補機海水ポンプの損傷に伴う補機冷却系喪失		
	手動停止	直撃雷による高圧炉心スプレイ補機海水ポンプの損傷に伴う手動停止		
	タービン・サポート系故障	直撃雷によるタービン補機海水ポンプの損傷に伴うタービン・サポート系故障		
	外部電源喪失	送受電設備へ降下火砕物が付着し、水分を吸収することによって相間短絡を起こすことによる外部電源喪失		
火山の影響	外部電源喪失	送受電設備が森林火災の輻射熱によって損傷することによる外部電源喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられる。</li> <li>建物外の設備には森林火災の輻射熱による影響が生じる可能性が考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられることから、必要な緩和機能は維持できるものと考えられる。</li> <li>建物外の設備に対して、森林火災が拡大されるまでの時間的余裕が十分にあることから、あらかじめ散水する等の必要な安全処置を講じることにより機能を維持できるものと考えられる。</li> </ul>
森林火災	外部火災	送受電設備が森林火災の輻射熱によって損傷することによる外部電源喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられる。</li> <li>建物外の設備には森林火災の輻射熱による影響が生じる可能性が考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物内の設備には影響しないものと考えられることから、必要な緩和機能は維持できるものと考えられる。</li> <li>建物外の設備に対して、森林火災が拡大されるまでの時間的余裕が十分にあることから、あらかじめ散水する等の必要な安全処置を講じることにより機能を維持できるものと考えられる。</li> </ul>

自然現象の重量確認結果 (1/8)

重量事象	主事象	1 風 (台風)			2 竜巻			3 高温		4 低温		5 極限的な気圧		6 降雨 (豪雨)		7 積雪 (豪雪)		8 ひょう		9 もや		10 霜	
		荷重 (風圧)	荷重 (風正)	閉塞 (取水)	荷重 (風正)	荷重 (気圧差)	荷重 (飛来物)	閉塞 (取水)	荷重 (取水)	温度高	温度低 (凍結)	電氣的影響	荷重 (気圧差)	荷重 (堆積)	浸水	電氣的影響	閉塞 (空調)	荷重 (衝突)	荷重 (堆積)	もや	霜		
1 風 (台風)	設備等の損傷・機能喪失モード																						
	荷重 (風圧)																						
	荷重 (風正)																						
2 竜巻	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (気圧差)																						
	荷重 (飛来物)																						
	閉塞 (取水)																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (気圧差)																						
3 高温	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
4 低温	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
5 極限的な気圧	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
6 降雨 (豪雨)	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
7 積雪 (豪雪)	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
8 ひょう	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
9 もや	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
10 霜	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
11 干ばつ	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
12 地震、地震	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
13 砂嵐	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
14 落雷	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
15 閃石	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
16 地面の隆起	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
17 動物	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
18 火山	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
19 雪崩	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
20 地滑り	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
21 地震	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
22 カルスト	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						
23 地下水による隆起	建築物及び屋外設備の損傷																						
	荷重 (風正)																						
	荷重 (飛来物)																						

[凡例]

斜線：以下の理由により、重量影響考慮不要

・発震所及びその周辺では発生しない (又は、発生が極めて稀) と判断した事象

・単独事象での評価において設備等への影響がない (又は、非常に小さい) 事象で、他の事象と重量を考慮しても明らかに設備等への影響がないと判断した事象

Ⅰ：各自然現象が重複した場合でも単独事象同士の影響評価により増長しない。

Ⅱ：ある自然現象の防護施設がほかの自然現象によって機能喪失することにより、影響が増長するケース。

Ⅲ-1：ほかの自然現象の作用により前提条件が変化し、影響が増長するケース。

Ⅲ-2：ほかの自然現象の作用により影響が及ぶようになるケース。









自然現象の重量確認結果 (5/8)

重量事象	主事象	1 風 (台風)			2 竜巻			3 高温	4 低温	5 相対的気圧	6 降雨 (豪雨)	7 積雪 (豪雪)	8 ひょう	9 もや	10 霜
		荷重 (風圧)	荷重 (風圧)	閉塞 (取水)	荷重 (風圧)	荷重 (気圧形)	荷重 (気圧形)	閉塞 (取水)	温度高	温度低 (凍結)	荷重 (気圧形)	荷重 (堆積)	閉塞 (空調)	荷重 (衝突)	荷重 (堆積)
21 海中浸食	設備等の損傷・機能喪失モード (影響がない)														
22 湖又は河川の水位低下	冷却機能低下 (影響がない)														
23 湖又は河川の水位上昇	冷却機能低下 (影響がない)														
24 海水面低下	冷却機能低下														
25 海水面高	冷却機能低下														
26 高水温 (海水温)	冷却機能低下														
27 低水温 (海水温)	冷却機能低下														
28 海流停滞	冷却機能低下														
29 氷結 (氷面の凍結)	閉塞 (取水)														
30 氷晶	荷重 (堆積)														
31 氷塊	—														
32 水中の有機物質	冷却機能低下														
33 生物学的現象	閉塞 (取水)														
34 津波	電気的影響														
35 太陽フレア、磁気嵐	電気的影響														
36 津水	閉塞 (取水)														
37 森林火災	閉塞 (取水)														
38 草原火災	閉塞 (取水)														
39 油漏	閉塞 (取水)														
40 地震	閉塞 (取水)														
41 熱影響	熱影響														
42 熱影響	熱影響														
43 油漏	閉塞 (取水)														
44 ハリケー	冷却機能低下														
45 静電	冷却機能低下														
46 除雪	冷却機能低下														
47 高潮	冷却機能低下														
48 波浪	冷却機能低下														
49 土石流	冷却機能低下														
50 土砂崩れ (山崩れ、崖崩れ)	冷却機能低下														
51 泥崩れ (泥状化)	冷却機能低下														
52 水蒸気、熱湯噴出	冷却機能低下														
53 地震安定性	冷却機能低下														
54 土壌の収縮又は膨張	冷却機能低下														
55 毒性ガス	冷却機能低下														

【凡例】

斜線：以下の理由により、重量影響考慮不要

・発端原因とその周辺では発生しない (又は、発生が極めて稀) と判断した事象

・単独事象での評価において設備等への影響がない (又は、非常に小さい) 事象で、他の事象と重複を考慮しても明らかにか設備等への影響がないと判断した事象

Ⅰ：各自然現象が重複した場合でも単独事象同士の影響評価により増長しない。

Ⅱ：各自然現象から同じ影響がそれぞれに作用し、重ね合わさって増長するケース。

Ⅲ-1：ある自然現象の防護施設がほかの自然現象によって機能喪失することにより、影響が増長するケース。

Ⅲ-2：ほかの自然現象の作用により影響が及ぶようになるケース。

自然現象の重畳確認結果 (6/8)

重畳事象	主事象	11 干ばつ	12 塩害、 塩害 腐食	13 砂嵐	14 落雷		15 傾石		16 地面の 隆起	17 動物	18 火山		19 雪崩	20 地滑り	21 地震	22 カルト スト	23 地下水に よる浸食	
					電氣的 影響 (雷打つ)	電氣的 影響 (雷撃部)	電氣的 影響 (雷撃部)	電氣的 影響 (雷撃部)			荷重 (衝突)	荷重 (堆積)						閉塞 (取水)
24 海岸浸食	設備等の損傷・機能喪失モード (影響がない)	冷却機能低下																
25 湖又は河川の水位低下	冷却機能低下 (影響がない)	冷却機能低下																
26 湖又は河川の水位上昇	浸水 (影響がない)	浸水																
27 海水面低	冷却機能低下	冷却機能低下																
28 海水面高	冷却機能低下	冷却機能低下																
29 高水温 (海水温高)	冷却機能低下	冷却機能低下																
30 低水温 (海水温低)	冷却機能低下	冷却機能低下																
31 海流停滞	冷却機能低下	冷却機能低下																
32 氷結 (水面の凍結)	冷却機能低下	冷却機能低下																
33 氷結 (水面の凍結)	冷却機能低下	冷却機能低下																
34 氷害	冷却機能低下	冷却機能低下																
35 水中の有機物質	冷却機能低下	冷却機能低下																
36 生物学的現象	閉塞 (取水)	閉塞 (取水)																
37 津波	電氣的影響	電氣的影響																
	電氣的影響	電氣的影響																
38 太陽フレア、磁気嵐	電氣的影響	電氣的影響																
	電氣的影響	電氣的影響																
39 洪水	浸水	浸水																
40 濃霧	冷却機能低下	冷却機能低下																
41 森林火災	熱影響	熱影響																
42 草原火災	熱影響	熱影響																
	熱影響	熱影響																
43 油漏	浸水	浸水																
44 ハリケー	冷却機能低下	冷却機能低下																
45 河川の迂回	浸水	浸水																
46 静寂	冷却機能低下	冷却機能低下																
47 除雪	冷却機能低下	冷却機能低下																
48 高潮	地盤安定性	地盤安定性																
49 波浪	浸水	浸水																
50 土石流	荷重 (衝突)	荷重 (衝突)																
51 土砂崩れ (山崩れ、崖崩れ)	荷重 (衝突)	荷重 (衝突)																
52 泥崩出 (液状化)	地盤安定性	地盤安定性																
53 水蒸気、熱湯噴出	浸水影響	浸水影響																
54 土層の収縮又は膨張	地盤安定性	地盤安定性																
55 悪化ガス	—	—																

【丸印】

斜線：以下の理由により、重畳影響考慮不要

・発端所及びその周辺では発生しない (又は、発生が極めて稀) と判断した事象

・単独事象での評価において設備等への影響がない (又は、非常に小さい) 事象で、他の事象と重畳を考慮しても明らかにか設備等への影響がないと判断した事象

—：各自然現象が重畳した場合でも単独事象同士の影響評価により増長しない。

I：各自然現象から同じ影響がそれぞれに作用し、重ね合わさって増長するケース。

II：ある自然現象の防衛施設がほかの自然現象によって機能喪失することにより、影響が増長するケース。

III-1：ほかの自然現象の作用により前掲条件が変化し、影響が増長するケース。

III-2：ほかの自然現象の作用により影響が及ぶようになるケース。



自然現象の重畳確認結果 (8/8)

重畳事象	主事象	41 森林 火災	42 草原 火災	43 湖潮	44 ハリ ケーン	45 河川の 迂回	46 静寂	47 陥没	48 高潮	49 波浪	50 土石流	51 土砂 崩れ	52 泥湧出	53 水蒸気、 熱湯噴出	54 土層の収縮 又は膨張	55 毒性 ガス
21 海中浸食	設備等の損傷・機能喪失モード (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
22 湖又は河川の水位低下	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
23 湖又は河川の水位上昇	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
24 海水面低	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
25 海水面高	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
26 高水温 (海水温)	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
27 低水温 (海水温)	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
28 海産物腐り	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
29 氷結 (水面の凍結)	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
30 米量	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
31 米量	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
32 米量	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
33 米量	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
34 米量	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
35 水中の有機物質	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
36 生物学的現象	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
37 津波	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
38 太陽フレア、磁気嵐	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
39 洪水	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
40 濃霧	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
41 森林火災	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
42 草原火災	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
43 油潮	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
44 ハリケーン	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
45 河川の迂回	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
46 静寂	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
47 除雪	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
48 高潮	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
49 波浪	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
50 土石流	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
51 土砂崩れ (山崩れ、崖崩れ)	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
52 泥湧出 (泥状化)	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
53 水蒸気、熱湯噴出	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
54 土層の収縮又は膨張	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)
55 毒性ガス	冷却機能低下 (影響がない)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)	閉塞 (空調)

【丸印】

斜線：以下の理由により、重畳影響考慮不要

・発端原因とその周辺では発生しない (又は、発生が極めて稀) と判断した事象

・単独事象での評価において設備等への影響がない (又は、非常に小さい) 事象で、他の事象と重畳を考慮しても明らかにかに設備等への影響がないと判断した事象

一：各自然現象が重畳した場合でも単独事象同士の影響評価により増長しない。

II：各自然現象から同じ影響がそれぞれに作用し、重ね合わさって増長するケース。

III-1：ある自然現象の防護施設がほかの自然現象によって機能喪失することにより、影響が増長するケース。

III-2：ほかの自然現象の作用により影響が及ぶようになるケース。

外部人為事象に係る重畳の影響について

外部事象のうち、自然現象同士が重畳することによる影響については、添付資料 3 に示すように組合せを考慮し、単独事象とは異なる新たな影響が発生しないことを確認した。一方、外部人為事象については、以下に示す理由から個々の組合せについて確認する必要はなく、自然現象同士の重畳影響評価に包含されると考える。

<理由> 自然現象と比べて外部人為事象は影響範囲が限定的（狭い）である。

自然現象の影響は、発電用原子炉施設全体に対して同時に作用する点が特徴である。一方、外部人為事象の場合は、人工物の事故等により引き起こされるものであり、影響範囲は当該人工物の大きさや内包する危険物量等により決まる。したがって、外部人為事象の場合、低頻度事象を仮定しようとしても、実際に設置されている設備や立地状況等により制限され、際限なく事象影響範囲が広がるということはない。

以上より、各外部人為事象により生じる影響の特徴を踏まえ、それぞれの影響を包含する自然現象について重畳影響を確認しておくことで、外部人為事象についても重畳影響を確認したことと同等となる。（第 1 表参照）

第1表 自然現象と包含される外部人為事象

自然現象	特徴	包含される外部人為事象 (No. は、添付資料1－2参照)
地震	発電用原子炉施設全体に対して同時に外力が作用し、複数の機器が同時に機能喪失する可能性がある。敷地の変動等により屋外設備の基礎や地中設備を損傷させる可能性がある。	No. 11：掘削工事
津波	発電用原子炉施設への浸水により、複数の機器が同時に機能喪失する可能性がある。波力により海水系機器を損傷させる可能性がある。	No. 1：船舶から放出される固体液体不純物 No. 2：水中への化学物質の流出 No. 3：船舶の衝突（船舶事故） No. 7：化学物質流出（発電所外） No. 14：他ユニットからの内部溢水 No. 22：内部溢水
落雷	発電用原子炉施設への落雷により、広範囲の計測系、制御系を損傷させる可能性がある。	No. 17：電磁的障害
竜巻	移動しながら広範囲にわたって風圧、気圧差、飛来物による影響を与える。特に飛来物については、屋外設備だけではなく、建物内の設備を損傷させる可能性がある。	No. 4：交通機関（航空機を除く）の事故による爆発 No. 6：爆発（発電所外） No. 9：パイプライン事故（爆発，化学物質流出） No. 19：工場施設又は軍事施設事故（爆発，化学物質放出）

なお、第1表のとおり自然現象に包含される外部事象以外のその他事象については、以下のとおりである。

<その他の事象>

(1) 外部人為事象の影響の方が大きい場合

火災による熱影響については、自然現象では「森林火災」、外部人為事象では「No. 4：交通機関（航空機を除く）の事故による爆発」、「No. 6：爆発（発電所外）」、「No. 9：パイプライン事故（爆発，化学物質流出）」、「No. 12：他ユニットからの火災」、「No. 19：工場施設又は軍事施設事故（爆発，化学物質放出）」、「No. 16：飛来物（航空機落下）」及び「No. 23：外部火災（近隣工場等の火災）」

が想定されるが、発電用原子炉施設に対して最も厳しい影響がある事象は「No. 16：飛来物（航空機落下）」にて想定している航空機燃料火災である。航空機燃料火災と発電用原子炉施設周辺で発生し得る重畳事象としては、「No. 23：外部火災（近隣工場等の火災）」のガスタービン発電機用軽油タンク火災が挙げられる。偶発的に発生する航空機の落下による火災とガスタービン発電機用軽油タンク火災が組み合わせられる重畳事象については、 $10^{-7}$ /年程度の低頻度事象であるものの外部火災評価の中で許容値以下の熱影響に止まることを確認済みであることを踏まえ、事象の重畳により新たに起因事象の追加はない。

爆発による影響については、「No. 4：交通機関（航空機を除く）の事故による爆発」、「No. 6：爆発（発電所外）」、「No. 9：パイプライン事故（爆発，化学物質流出）」及び「No. 19：工場施設又は軍事施設事故（爆発，化学物質放出）」で想定されるが、それぞれの事象の特徴を踏まえれば、個別の重畳影響評価をするまでもなく、自然現象同士の重畳事象を評価することで影響が包含される。

（「No. 4：交通機関（航空機を除く）の事故による爆発」については、燃料輸送車両の爆発事故を想定した場合であっても、爆風圧の影響が発電用原子炉施設へ及ばないことを確認済みであることを踏まえ、単独事象として影響がないと判断。「No. 6：爆発（発電所外）」、「No. 9：パイプライン事故（爆発，化学物質流出）」及び「No. 19：工場施設又は軍事施設事故（爆発，化学物質放出）」については、石油コンビナートが発電所への影響が及ぶ範囲にないこと及び発電所敷地から最短距離の危険物貯蔵施設の爆発事故を想定した場合であっても、爆風圧の影響が発電用原子炉施設へ及ばないことを確認済みであることを踏まえ、単独事象として影響がないと判断。）

## (2) 事象の影響について考慮が不要な場合

以下に挙げる外部人為事象については、重畳影響を考慮するまでもなく、単独事象として発電用原子炉施設への影響を考慮する必要がないものとして整理している。

### ○単独事象として発生頻度が稀な事象（ $10^{-7}$ /年以下）

- No. 13：他ユニットからのタービン・ミサイル
- No. 15：人工衛星の落下
- No. 16：飛来物（航空機落下）
- No. 20：タービン・ミサイル

### ○発生源となる施設が発電所への影響を及ぼす範囲にない事象

- No. 10：軍事施設からのミサイル
- No. 18：ダムの崩壊

○発生しても影響が軽微な事象，影響を遮断できる事象

No. 5：交通機関（航空機を除く）の事故による化学物質流出

No. 8：発電所内貯蔵の化学物質流失

No. 21：有毒ガス

事象ごとの状況を以下の第2表にまとめる。



第2表 各外部人為事象が包含される自然現象等

No.	外部人為事象	包含される自然現象等
1	船舶から放出される固体液体不純物	【津波】 海水系機器の性能低下
2	水中への化学物質の流出	【津波】 海水系機器の性能低下
3	船舶の衝突（船舶事故）	【津波】 海水系機器の性能低下
4	交通機関（航空機を除く）の事故による爆発	【竜巻】 飛来物による影響 熱影響等の影響は、その他の事象（1）のとおり
5	交通機関（航空機を除く）の事故による化学物質流出	【－】 影響を緩和可能（その他の事象（2）のとおり）
6	爆発（発電所外）	【竜巻】 飛来物による影響 熱影響等の影響は、その他の事象（1）のとおり
7	化学物質流出（発電所外）	【津波】 海水系機器の性能低下
8	発電所内貯蔵の化学物質流出	【－】 影響を緩和可能（その他の事象（2）のとおり）
9	パイプライン事故（爆発，化学物質流出）	【竜巻】 飛来物による影響 熱影響等の影響は、その他の事象（1）のとおり
10	軍事施設からのミサイル	【－】 影響の及ぶ範囲に発生源となる施設なし（その他の事象（2）のとおり）
11	掘削工事	【地震】 敷地の変更等による屋外設備の基礎や地中設備の損傷
12	他ユニットからの火災	【－】 影響確認済み （その他の事象（1）のとおり）
13	他ユニットからのタービン・ミサイル	【－】 低頻度事象（その他の事象（2）のとおり）
14	他ユニットからの内部溢水	【津波】 広範囲の機器等の同時浸水
15	人工衛星の落下	【－】 低頻度事象（その他の事象（2）のとおり）
16	飛来物（航空機落下）	【－】 熱影響はその他の事象（1）のとおり 落下は低頻度事象（その他の事象（2）のとおり）
17	電磁的障害	【落雷】 計測系，制御系へのノイズ影響等
18	ダムの崩壊	【－】 影響の及ぶ範囲に発生源となる施設なし（その他の事象（2）のとおり）
19	工場施設又は軍事施設事故（爆発，化学物質放出）	【竜巻】 飛来物による影響 熱影響等の影響は、その他の事象（1）のとおり
20	タービン・ミサイル	【－】 低頻度事象（その他の事象（2）のとおり）
21	有毒ガス	【－】 影響を緩和可能（その他の事象（2）のとおり）
22	内部溢水	【津波】 広範囲の機器等の同時浸水
23	外部火災（近隣工場等の火災）	【－】 影響確認済み （その他の事象（1）のとおり）

凡例：【 】 包含される自然現象

地震レベル 1.5 P R A について

## 1. はじめに

「実用発電用原子炉及びその附属施設の位置，構造及び設備の基準に関する規則」第三十七条（重大事故等の拡大の防止等）にて要求されている原子炉格納容器の破損の防止に関する有効性評価に関し，必ず想定すべき格納容器破損モード以外の破損モードの有無について，内部事象についてはレベル1.5 P R Aにより確認を実施済みであるが，地震事象特有の影響について以下にて確認を実施した。

## 2. 地震事象特有の格納容器破損モードについて

炉心損傷後の原子炉格納容器の健全性に影響を与える物理現象による事象進展に関し内部事象と地震事象の差はなく，地震事象特有の影響としては，地震動により直接的に原子炉格納容器が損傷する場合，原子炉格納容器の隔離機能又は圧力抑制機能に係る設備が損傷することで原子炉格納容器の破損に至る場合が考えられる。

## (1) 原子炉格納容器本体の損傷

地震動による原子炉建物の損傷影響により原子炉格納容器が破損に至る，又は原子炉格納容器本体が直接的に破損に至るケースは，地震事象特有の格納容器破損モードであり，日本原子力学会標準「原子力発電所の地震を起因とした確率論的安全評価実施基準：2007」では，原子炉建屋破損の $\alpha$ モードとして分類されている。

このケースの場合，炉心損傷時に原子炉格納容器の放射性物質閉じ込め機能は既に喪失しており，内部事象レベル1.5 P R Aでは，格納容器隔離失敗として考慮している。

## (2) 格納容器隔離機能喪失

地震動により格納容器隔離弁が閉鎖できなくなることで，炉心損傷により発生した放射性物質が原子炉格納容器外へ直接放出される可能性がある。このケースについては，原子炉格納容器本体の損傷と同様に炉心損傷時には原子炉格納容器の放射性物質閉じ込め機能は喪失している状態であり，内部事象レベル1.5 P R Aでは格納容器隔離失敗として考慮している。

## (3) 格納容器圧力抑制機能喪失

地震動により残留熱除去系（格納容器冷却モード）や格納容器ベント管，サブレーション・チェンバの損傷により格納容器圧力が抑制できなくなり，原子炉格納容器が過圧破損に至る可能性がある。このケースについては，内部事象レベル1.5 P R Aにおいて，水蒸気（崩壊熱）蓄積等による過圧によって原子炉格納容器が破損に至る過圧破損モードとして考慮している。

以上を踏まえると，地震事象特有の影響として原子炉格納容器本体や隔離弁等

の破損が考えられるものの、地震事象特有の格納容器破損モードは無く、内部事象レベル1.5 P R Aと同様であるといえる。

### 3. 格納容器破損防止対策に係る有効性評価事故シーケンスについて

上述のとおり、地震事象特有の影響として原子炉格納容器や隔離機能等の地震動による損傷が考えられるものの、格納容器破損モードとしては内部事象レベル1.5 P R Aと同様である。

また、地震動による直接的な原子炉格納容器や隔離機能等の損傷については、重大事故の事象進展により原子炉格納容器へ圧力荷重、熱荷重といった物理的な負荷が加わった結果として放射性物質閉じ込め機能が喪失に至るものではない。そのため、格納容器破損防止対策の有効性評価の判断基準に照らすと、重大事故対策の有効性評価の観点としてではなく、対象設備の耐震性の観点から評価がなされるべきものと判断される。

加えて原子炉格納容器本体の損傷については、内部事象レベル1.5 P R Aでも想定していない機器の損傷モードであるが、原子炉格納容器が損傷に至るような大規模地震を想定した場合、その損傷の程度や緩和系設備使用可否の評価、事故シナリオを特定することは非常に困難である。したがって、そのような状況下においては、地震によるプラントの損傷の程度や事象進展に応じて、様々な原子炉格納容器の破損防止対策を臨機応変に組み合わせて影響緩和を図るとともに、大規模損壊対策として放水砲等の影響緩和措置を講じられるようにしておくことが重要であると考えられる。

### 4. 地震レベル1.5 P R Aについて

内部事象 P R Aでは、レベル1 P R Aの結果抽出された炉心損傷に至る事故シーケンスグループをレベル1.5 P R A評価の起点となるようプラント損傷状態を定義したうえで、炉心損傷に至るまでのプラント状態などの観点から原子炉格納容器の健全性に影響を与える事象（過温破損、水蒸気爆発等）を抽出しているが、地震レベル1.5 P R Aでは、地震事象特有の影響として原子炉建物、原子炉格納容器等の損傷から原子炉格納容器の閉じ込め機能喪失に至るシナリオを考慮する必要がある。

具体的には、地震レベル1 P R Aにおいて緩和系に期待することができず、炉心損傷直結事象として整理している原子炉建物損傷やE x c e s s i v e L O C Aといった事故シナリオが対象となるものの、現段階では、それら事故の起因となる設備の損傷の規模や範囲の特定を行うことは困難かつ不確実さが大きく、これらの事故シナリオが発生した場合の事象進展（炉心損傷までの時間余裕や緩和系の健全性等）を定量化することが困難な状況にある。

そのため、今後、対象設備の損傷影響評価などの精緻化を進めるとともに、実機適用へ向けた検討を進めていくところである。

## 外部事象特有の事故シーケンスについて

### 1. はじめに

外部事象のうち、地震及び津波レベル1 P R Aを実施した結果、内部事象運転時レベル1 P R Aでは抽出されていない地震による原子炉建物、原子炉圧力容器等の大型静的機器の損傷、津波による直接炉心損傷に至る事象といった事故シーケンスが抽出されている点が地震及び津波事象の特徴となっている。

また、これらの事故シーケンスに加え、計装・制御系喪失、格納容器バイパスについては、事象進展の特定、詳細な事故シーケンスの定量化が困難であるため、保守的に炉心損傷直結事象として整理している点も地震事象評価特有の扱いである。

以下では、これらの外部事象に特有の各事故シーケンス（炉心損傷直結事象）について、地震及び津波レベル1 P R Aにおけるフラジリティ評価や事故シーケンス評価における条件設定の妥当性等について再整理のうえ、炉心損傷防止対策の有効性評価の対象とする事故シーケンスグループとして取り扱うべきかの検討を実施した。

### 2. 炉心損傷に直結する事故シーケンス

炉心損傷直結事象として整理した各事故シーケンスに関連する建物・構築物・機器のフラジリティ評価や事故シーケンスの評価条件や想定シナリオ等の詳細について評価上の条件設定の妥当性等について改めて確認した。

#### 2.1 原子炉建物損傷

##### (1) 想定事故シナリオ

原子炉建物が損傷することで、原子炉建物内の原子炉格納容器、原子炉圧力容器等の構造物及び機器が広範囲にわたり損傷し、原子炉注水を行った場合においても炉心損傷を回避できないことを想定した事故シーケンスである。

実際には地震による原子炉建物の損傷程度により発生する事象の厳しさは以下のとおりの範囲を有している。

##### <小規模な損傷の場合>

地震による原子炉建物損傷として原子炉建物全損壊ではなく一部フロア程度の損傷を想定する場合には、大規模なLOCA（E x c e s s i v e L O C A）には至らない可能性があり、外部電源喪失等の過渡事象が発生した場合においても、原子炉注水機能等が健全な場合は炉心損傷に至ることはない。

##### <大規模な損傷の場合>

原子炉建物損傷時に、緩和できない大規模なLOCA（E x c e s s i v e L O C A）が発生すると同時に、建物内の原子炉注水系配管が構造

損傷して原子炉注水機能も喪失するため、炉心損傷に至る。建物損傷の二次的被害により、原子炉格納容器や原子炉格納容器の貫通配管が損傷しており、閉じ込め機能にも期待することはできない。

このように、損傷の発生程度に応じて影響程度が変化する事故シーケンスであるものの、地震による建物損傷状態及び機能喪失する機器を特定することは困難であることから、これらの様々な損傷の程度・組合せを含む事故シーケンス全体を炉心損傷防止が困難な事故シーケンスグループとして整理した。

【炉心損傷頻度】 $3.1 \times 10^{-8}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】約 0.2%

(2) フラジリティ評価

(a) 評価対象機器／評価部位

原子炉建物の支配的な損傷モード及び部位としては、建物の崩壊シーケンスを踏まえて、層崩壊を伴う耐震壁のせん断破壊を選定した。

(b) 評価方法

原子炉建物は、「現実的耐力と現実的応答による方法（応答解析に基づく方法）」によりフラジリティを評価した。評価手法は一般社団法人日本原子力学会発行の「原子力発電所の地震を起因とした確率論的安全評価実施基準：2007」に準拠した手法としている。

(c) フラジリティ曲線の保守性等

原子炉建物のフラジリティ曲線は、建物を構成する評価対象部位のうち、HCLPFが最小となる要素を対象として算出しており、建物全体の損傷を模擬したものではないため、建物全体崩壊に至るまでには余裕があると考えられる。

(3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

以上のとおり、原子炉建物の損傷シーケンスの評価は、現状のフラジリティ評価手法にかなりの保守性を有していると考えられる。

仮に原子炉建物が損傷した場合に考え得るシナリオとしては、過渡事象やLOCAが発生すると同時にECCS等の緩和系が機能喪失に至る事故シナリオが考えられるが、炉心損傷頻度は小規模な損傷の影響を含めた値であり、原子炉建物の損傷の規模によっては、ECCS等による原子炉冷却、格納容器冷却系等によって原子炉格納容器を冷却することにより、影響を緩和できる可能性がある。

以上を総合的に勘案したうえで、本事象については新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

## 2.2 原子炉格納容器損傷

(1) 想定事故シナリオ

原子炉格納容器の損傷により、原子炉格納容器内の機器及び原子炉圧力容

器等の構造物が広範囲にわたり損傷し、原子炉注水を行った場合においても炉心損傷を回避できないことを想定した事故シーケンスである。

実際には地震による原子炉格納容器の損傷程度により発生する事象の厳しさは以下のとおり範囲を有している。

<小規模な損傷の場合>

地震による原子炉格納容器損傷として、一部のみの損傷を想定する場合には、原子炉冷却材圧力バウンダリが健全で大規模なLOCA (E x c e s s i v e L O C A) が発生しない可能性があり、外部電源喪失等の過渡事象が発生した場合においても、原子炉注水機能等が健全な場合は炉心損傷に至ることはない。

<大規模な損傷の場合>

原子炉格納容器内の配管及びECCS注入配管が同時に構造損傷して、大規模なLOCA (E x c e s s i v e L O C A) が発生すると同時に、原子炉注水機能も喪失するため、炉心損傷に至る。なお、この場合、原子炉格納容器が損傷しており、閉じ込め機能にも期待することはできない。

このように損傷の発生程度に応じて影響程度が変化する事故シーケンスであるものの、地震による原子炉格納容器の損傷状態及び機能喪失する機器を特定することは困難であることから、これらの様々な損傷の程度・組合せを含む事故シーケンス全体を炉心損傷防止が困難な事故シーケンスグループとして整理した。

【炉心損傷頻度】 $3.4 \times 10^{-7}$  / 炉年 (点推定値)

【全炉心損傷頻度への寄与割合】約 2.4%

(2) フラジリティ評価

(a) 評価対象機器／評価部位

原子炉格納容器の損傷により炉心損傷に至る事故シナリオに対して、支配的な機器として、原子炉格納容器スタビライザを選定している。原子炉格納容器スタビライザの概要図を第1図に示す。

原子炉格納容器スタビライザは、ガンマ線遮蔽壁を支持するトラス状の構造物であり、ガンマ線遮蔽壁の水平方向の地震荷重を原子炉格納容器へ伝達する。

(b) 評価方法

今回のフラジリティ評価では、決定論による耐震評価結果に基づき、耐力係数と応答係数を用いた安全係数法によりフラジリティを評価した。

(c) フラジリティ曲線の保守性等

原子炉格納容器スタビライザの構造強度評価は、地震応答解析により算出した時刻歴荷重データのうち最大荷重を静的荷重として評価する。評価モデルの概要図を第2図に示す。原子炉格納容器スタビライザの地震荷重(最大ばね反力)を交番荷重ではなく、静的荷重を連続的に負荷した状態を想定して評価を行っているところに、決定論的評価の保守性がある。

最大地震荷重を受ける原子炉格納容器スタビライザが損傷した場合でも、荷重の再配分により残りの原子炉格納容器スタビライザ及び原子炉压力容器基礎でガンマ線遮蔽壁の地震荷重を受けることができることから、直ちにガンマ線遮蔽壁が転倒するには至らず、接続配管の一部の破断又は破損に留まるものと考えられる。

(3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

今回のフラジリティ評価では保守的な決定論的評価に基づいた方法により評価しており、原子炉格納容器スタビライザの支持機能が実際に失われる地震動の大きさは、耐震評価から求まる地震動の大きさよりもはるかに大きいと考えられるため、原子炉格納容器損傷シーケンスの評価は、現状のフラジリティ評価手法にかなりの保守性を有していると考えられ、現実的な耐性がPRAの結果に表れているものではない。

仮に最大地震荷重を受ける原子炉格納容器スタビライザが損傷した場合でも、荷重の再配分により残りの原子炉格納容器スタビライザ及び原子炉压力容器基礎でガンマ線遮蔽壁の地震荷重を受けることができることから、直ちにガンマ線遮蔽壁が転倒するには至らず、接続配管の一部の破断又は破損に留まるものと考えられる。この場合の事象進展は、既存のLOCAシナリオと同様の進展となることが想定される。

以上を総合的に勘案したうえで、本事象については新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

## 2.3 原子炉压力容器損傷

(1) 想定事故シナリオ

原子炉压力容器の支持機能喪失等により、原子炉压力容器に接続されている原子炉冷却材圧力バウンダリの損傷や、原子炉冷却材の流路閉塞等が発生することにより、原子炉注水を行った場合においても炉心損傷を回避できないことを想定した事故シーケンスである。

実際には地震による原子炉压力容器の損傷程度により発生する事象の厳しさは以下のとおり範囲を有している。

<小規模な損傷の場合>

地震による原子炉压力容器損傷として、原子炉压力容器の一部のみの損傷を想定する場合には、原子炉冷却材圧力バウンダリの大規模な損傷に至らず原子炉冷却材の注入が可能な場合や、炉内構造物の一部変形のみで原子炉冷却材の流路の完全な閉塞に至らない可能性があり、原子炉注水機能等が健全ならば炉心損傷を防止できる。

<大規模な損傷の場合>

原子炉压力容器の損傷により、原子炉冷却材圧力バウンダリの大規模な損傷や、炉内構造物の大規模な破損による原子炉冷却材の流路閉塞等により、炉心の除熱が困難となり炉心損傷に至る。

このように、損傷の発生程度に応じて影響程度が変化する事故シーケンスであるものの、地震による原子炉圧力容器の損傷状態を特定することは困難であることから、これらの様々な損傷の程度・組合せを含む事故シーケンス全体を、炉心損傷防止が困難な事故シーケンスグループとして整理した。

【炉心損傷頻度】 $1.7 \times 10^{-7}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】約 1.2%

(2) フラジリティ評価

(a) 評価対象機器／評価部位

原子炉圧力容器の損傷により炉心損傷に至る事故シナリオに対して、比較的大きな影響を及ぼす機器は、原子炉圧力容器スタビライザである。原子炉圧力容器スタビライザの概要図を第 1 図に示す。

原子炉圧力容器スタビライザは、原子炉圧力容器を安定的に支持する構造物であり、原子炉圧力容器の水平方向の地震荷重をガンマ線遮蔽壁へ伝達する。

(b) 評価方法

今回のフラジリティ評価では、決定論による耐震評価結果に基づき、耐力係数と応答係数を用いた安全係数法によりフラジリティを評価した。

(c) フラジリティ曲線の保守性等

原子炉圧力容器スタビライザの構造強度評価は、地震応答解析により算出した時刻歴荷重データのうち最大荷重を静的荷重として評価する。評価モデルの概要図を第 2 図に示す。原子炉圧力容器スタビライザの地震荷重（最大ばね反力）を交番荷重ではなく、静的荷重を連続的に負荷した状態を想定して評価を行っているところに、決定論的評価の保守性がある。

原子炉圧力容器スタビライザ 1 個が受け持つ最大地震荷重の算出例を第 3 図に示す。最大地震荷重を受ける原子炉圧力容器スタビライザが損傷した場合でも、荷重の再配分により残りの原子炉圧力容器スタビライザ及び支持スカートで原子炉圧力容器の地震荷重を受けることができることから、直ちに原子炉圧力容器が転倒するには至らず、一次系配管の一部の破断又は破損に留まるものと考えられる。

(3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

今回のフラジリティ評価では保守的な決定論的評価に基づいた方法により評価しており、原子炉圧力容器スタビライザの支持機能が実際に失われる地震動の大きさは、耐震評価から求まる地震動の大きさよりもはるかに大きいと考えられるため、原子炉圧力容器損傷シーケンスの評価は、現状のフラジリティ評価手法にかなりの保守性を有していると考えられ、現実的な耐性が PRA の結果に表れているものではない。

最大地震荷重を受ける原子炉圧力容器スタビライザが損傷した場合でも、荷重の再配分により残りの原子炉圧力容器スタビライザ及び支持スカートで原子炉圧力容器の地震荷重を受けることができることから、直ちに原子炉圧



力容器が転倒するには至らず、一次系配管の一部の破断又は破損に留まるものと考えられる。この場合の事象進展は、既存のLOCAシナリオと同様の進展となることが想定される。

以上を総合的に勘案したうえで、本事象については新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

## 2.4 Excessive LOCA

### (1) 想定事故シナリオ

Excessive LOCAについては、地震によるスクラム後、SRVの開放失敗による原子炉圧力上昇又は地震による直接的な荷重により原子炉格納容器内の一次系配管が損傷に至るシナリオを想定している。

実際には地震による原子炉格納容器内の一次系配管の損傷程度により発生する事象の厳しさは以下のとおりの範囲を有している。

#### <小規模な損傷の場合>

地震発生時の損傷規模を特定することは困難であるものの、原子炉格納容器内の一次系配管は、配置によって応答に差があることなどから、格納容器内配管が必ずしも大規模に損傷するとは限らず、損傷規模によっては、原子炉注水機能等が健全な場合は炉心損傷に至ることはない。

#### <大規模な損傷の場合>

SRVの開放失敗による原子炉圧力上昇又は地震による直接的な荷重により、原子炉格納容器内の原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する配管が大規模に損傷し、緩和系により事象収束ができない場合、炉心損傷に至る。

このように、一次系配管の損傷規模や緩和系による事象収束可能性の評価が困難なため、保守的にExcessive LOCAとし、炉心損傷に至る事故シナリオとして整理している。

【炉心損傷頻度】 $4.2 \times 10^{-7}$  / 炉年 (点推定値)

【全炉心損傷頻度への寄与割合】約 2.9%

### (2) フラジリティ評価

#### ① 逃がし安全弁開失敗シナリオ

##### (a) 評価対象機器／評価部位

事故シーケンスとしては、外部電源喪失、全交流動力電源喪失時の発生を想定しているが、いずれのケースにおいても、SRVの損傷に起因している。

##### (b) 評価方法

SRVの構造上、最弱部の決定論的評価結果に基づき、フラジリティ評価を実施している。SRVの構造概要を第4図に示す。

##### (c) フラジリティ曲線の保守性等

SRVは合計12個設置されているものの、フラジリティ評価上は、機器の完全相関を仮定しており、単一機器の評価を全台の評価としている

が、実際には機器配置の差等により機器の応答に差があることを踏まえ、同時破損確率は現評価より小さくなることが考えられる。

## ② 格納容器内配管損傷シナリオ

### (a) 評価対象機器／評価部位

配管が原子炉格納容器内を通る系統については、配管本体及びその支持構造物のフラジリティを評価した。

### (b) 評価方法

格納容器内配管の評価は、決定論の結果に基づき、耐震評価上厳しい原子炉再循環系配管で代表させ、延性破壊や塑性崩壊に対する応力制限である一次応力強さの評価結果から、耐力係数と応答係数を用いた安全係数法により、フラジリティを評価した。

### (c) フラジリティ曲線の保守性等

配管系の損傷様式や耐力については、既往研究により以下のことが確認されている<sup>(1)</sup>。

- ・地震によって配管に負荷される荷重は変位制御型であり、配管の破損形態は、ラチェットを伴う低サイクル疲労である。
- ・フラジリティの評価に用いている既往の設計手法は、配管の破損・崩壊限界に対して余裕が大きい。

配管系についての代表的な試験研究の結果を、以下に示す。

- ・平成 15 年に財団法人原子力発電技術機構により実施された、配管系終局強度試験<sup>(2)</sup>において、エルボ、ティ等の要素により構成された、実機配管系の特徴を有する試験体を用いた加振試験が実施されている。この試験では、試験体の発生応力が許容応力に達する入力地震レベル及びこの 1.5～4 倍以上となる入力地震レベルでの加振試験を実施した結果、配管の崩壊現象や破損による内部水の漏えいは生じておらず、許容応力を用いた現行の設計手法が保守的な手法であることが確認されている。

また、同試験において、1 回の地震波加振では損傷が確認されず、加振試験を繰り返し行った結果、エルボで亀裂貫通による内部水の漏えいが生じ、ラチェット変形を含む低サイクル疲労による破損限界が確認された。配管系終局強度試験を第 5 図に示す。

以上の結果から、フラジリティ評価に用いる現行の配管系の設計手法は、応力評価に対して十分な余裕を有しており、実機配管系における地震時の損傷は疲労によるものであると考えられる。

ここで、上記試験結果を用いた配管系の解析において、配管バウンダリは設計レベルの 12 倍程度の安全余裕が確認されている。安全余裕は以下の式により算出する。

$$\text{(安全余裕)} = \frac{\text{(1回の地震で配管が疲労破損するとしたときの入力地震レベル)}}{\text{(設計上許容される*入力地震レベル)}}$$

※ J E A G 4601 に規定される供用状態 D s の許容限界

分母は J E A G 4601 に規定される供用状態 D s の許容限界に達する入力地震レベルであり，分子は同じ地震波において加速度の大きさを係数倍することにより，1回の加振で配管が疲労損傷するときの入力地震レベルを表している。上式では，許容応力を用いた現行の設計手法に対して，実際の配管が有する安全余裕を示している。安全余裕のイメージを第 6 図に示す。

- ・配管サポート及び定着部を含めて模擬した配管系試験体の実規模加振試験では，配管及びサポートについて，設計レベルの約 9 倍の地震波による加振試験において健全性が確認されている<sup>(3)</sup>。

いずれの試験においても以下の理由により，島根原子力発電所 2 号炉におけるフラジリティ評価対象の配管系も同様の安全余裕を有すると考えられる。

- ・島根原子力発電所 2 号炉の配管系の応力評価について，現行の設計手法における許容応力は保守的であることを試験により確認している。
- ・試験体に対し，耐震評価上厳しい条件（加振方向，入力波の周波数成分）の加振を行っている。
- ・試験体は一般的な配管の構成要素（直管，エルボ，ティ等）が模擬されている。
- ・配管系終局強度試験においては，最大応力発生箇所であるエルボにおいて疲労損傷が生じている。ここで，島根原子力発電所 2 号炉における原子炉格納容器内配管のフラジリティ評価対象である原子炉再循環系配管の応答解析モデルを第 7 図に，第 7 図の赤枠内における発生応力を第 8 図に示す。第 8 図に示すとおり，実機配管においても試験と同様にエルボにおける発生応力が他の箇所に対して大きくなる結果が得られているため，実機配管においても試験体と同様にエルボの疲労損傷が生じるものと考えられる。

上述の配管系の試験・解析結果等の既往研究から，配管系の耐力には設計レベルの地震力に対して大きな安全余裕があると考えられる。この安全余裕を，原子炉再循環系配管のフラジリティ曲線上に表したものを第 9 図に示す。ここでは，配管系の耐力が設計レベルの 10 倍の余裕があると仮定して図示した。配管系の試験・解析結果等の既往研究から，配管系のフラジリティ曲線を作成するためには，配管系の疲労破損や弾塑性応答のばらつきを適切に評価する必要がある。

- (3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

### ① 逃がし安全弁開失敗シナリオ

地震レベル1 PRAでは、SRV開失敗によるLOCAシナリオとして、SRV全数破損により原子炉圧力が過剰に上昇し原子炉冷却材圧力バウンダリ配管が広範囲・大規模に破損に至ることを想定し、緩和系に期待できず炉心損傷が回避不可となるケースを考え、炉心損傷直結としている。

ただし、合計12個あるSRVが同時損傷する可能性は極めて低いことから、Excessive LOCAには至ることなく緩和系による事象収束が期待できる。そのため、炉心損傷に至る確率が十分小さいと判断し、有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

### ② 格納容器内配管損傷シナリオ

地震レベル1 PRAでは、格納容器内配管損傷によるLOCAシナリオとして、損傷程度(規模, 範囲)を特定することは困難であるものの、「(2)② 格納容器内配管損傷シナリオ」のとおり、フラジリティ評価にかなり保守的な仮定をしている。

また、一般に地震による配管破損の形態は疲労破損であり、疲労破損では全周破断のような大きな開口を伴う配管破損が発生する可能性は小さく、現実的な事故シナリオとしては、有効性評価での評価シナリオである原子炉再循環系配管の全周破断を超える配管破断が発生することは考えにくい。(別紙2 (補足資料1))

さらに、Excessive LOCAが発生した場合でも、配管損傷の規模によっては格納容器破損防止対策が有効と考えられるため、原子炉再循環系配管2本破断相当の破断によるExcessive LOCAを想定した場合について、対策の適用性の検討を行った。

Excessive LOCAでは事象発生初期のブローダウン過程で格納容器圧力が限界圧力を超える可能性があるが、破断面積が原子炉再循環系配管2本相当のExcessive LOCAを想定したSAFER解析で得られた破断流量及びエネルギーを、格納容器応答解析コードに与えることにより格納容器圧力を評価したところ、格納容器最高圧力は約330 kPa[gage]であり、格納容器最高使用圧力を超えることはなかった。また、MAAP解析によると、Excessive LOCAと大破断LOCAで、ブローダウン以降の事象進展に大きな差異はなく、原子炉への注水がない場合の原子炉圧力容器破損時間はともに約3時間となった。以上より、原子炉再循環系配管2本相当のExcessive LOCAであったとしても、格納容器破損防止対策の有効性を確認する評価事故シーケンス「冷却材喪失(大破断LOCA) + ECCS注水機能喪失 + 全交流動力電源喪失」と同等程度の格納容器破損防止対策が有効に機能することで、格納容器破損が回避できるものと考えられる。

以上を総合的に勘案したうえで、本事象については新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

## 2.5 制御室建物損傷

### (1) 想定事故シナリオ

制御室建物が損傷することで、建物内の中央制御盤等が広範囲にわたり損傷し、緩和系の制御機能が喪失することを想定した事故シーケンスである。

実際には地震による制御室建物の損傷程度により発生する事象の厳しさは以下のとおりの範囲を有している。

#### <小規模な損傷の場合>

地震による制御室建物損傷として建物全損壊ではなく一部フロア程度の損傷を想定する場合には、炉心損傷防止対策の制御機能が有効な範囲の建物損傷に留まる可能性があり、外部電源喪失等の過渡事象が発生した場合においても、原子炉注水機能等が健全な場合は炉心損傷に至ることはない。

#### <大規模な損傷の場合>

制御室建物損傷時に建物内に設置されている主要な設備のすべてが同時に損傷することを想定した場合には、中央制御室損傷による中央制御盤等の損傷により原子炉注水機能等が喪失し、炉心損傷に至る。

このように、損傷の発生程度に応じて影響程度が変化する事故シーケンスであるものの、地震による建物損傷状態及び機能喪失する機器を特定することは困難であることから、これらの様々な損傷の程度・組合せを含む事故シーケンス全体を炉心損傷防止が困難な事故シーケンスグループとして整理した。

【炉心損傷頻度】 $1.4 \times 10^{-8}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】0.1%未満

### (2) フラジリティ評価

#### (a) 評価対象機器／評価部位

制御室建物の支配的な損傷モード及び部位としては、建物の崩壊シーケンスを踏まえて、層崩壊を伴う耐震壁のせん断破壊を選定した。

#### (b) 評価方法

制御室建物は、「現実的耐力と現実的応答による方法（応答解析に基づく方法）」によりフラジリティを評価した。評価手法は一般社団法人日本原子力学会発行の「原子力発電所の地震を起因とした確率論的安全評価実施基準：2007」に準拠した手法としている。

#### (c) フラジリティ曲線の保守性等

制御室建物のフラジリティ曲線は、建物を構成する評価対象部位のうち、HCLPFが最小となる要素を対象として算出しており、建物全体の損傷を模擬したものではないため、建物全体崩壊に至るまでには余裕があると考えられる。

### (3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

以上のとおり、制御室建物の損傷シーケンスの評価は、現状のフラジリティ評価手法にかなりの保守性を有していると考えられる。

仮に制御室建物が損傷した場合に考え得るシナリオとしては、外部電源喪失が発生すると同時にECCS等の緩和系の制御機能喪失に至る事故シナリオが考えられるが、炉心損傷頻度は小規模な損傷の影響を含めた値であり、制御室建物の損傷の規模によっては、機能維持しているECCS等により原子炉への注水を継続することで、炉心損傷が回避できる可能性がある。

以上を総合的に勘案したうえで、本事象については新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

## 2.6 廃棄物処理建物損傷

### (1) 想定事故シナリオ

廃棄物処理建物が損傷することで、建物内の補助盤室やバッテリー室等に設置された機器等が広範囲にわたり損傷し、緩和系の制御機能が喪失することを想定した事故シーケンスである。

実際には地震による廃棄物処理建物の損傷程度により発生する事象の厳しさは以下のとおりの範囲を有している。

#### <小規模な損傷の場合>

地震による廃棄物処理建物損傷として建物全損壊ではなく一部フロア程度の損傷を想定する場合には、炉心損傷防止対策の制御機能が有効な範囲の建物損傷に留まる可能性があり、外部電源喪失等の過渡事象が発生した場合においても、原子炉注水機能等が健全な場合は炉心損傷に至ることはない。

#### <大規模な損傷の場合>

廃棄物処理建物損傷時に建物内に設置されている主要な設備のすべてが同時に損傷することを想定した場合には、補助盤室やバッテリー室損傷により緩和系の制御機能が喪失する。これにより原子炉注水機能等が喪失し、炉心損傷に至る。

このように、損傷の発生程度に応じて影響程度が変化する事故シーケンスであるものの、地震による建物損傷状態及び機能喪失する機器を特定することは困難であることから、これらの様々な損傷の程度・組合せを含む事故シーケンス全体を炉心損傷防止が困難な事故シーケンスグループとして整理した。

【炉心損傷頻度】 $1.8 \times 10^{-10}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】0.1%未満

### (2) フラジリティ評価

#### (a) 評価対象機器／評価部位

廃棄物処理建物の支配的な損傷モード及び部位としては、建物の崩壊シーケンスを踏まえて、層崩壊を伴う耐震壁のせん断破壊を選定した。

#### (b) 評価方法

廃棄物処理建物は、「現実的耐力と現実的応答による方法（応答解析に基

づく方法)」によりフラジリティを評価した。評価手法は一般社団法人日本原子力学会発行の「原子力発電所の地震を起因とした確率論的安全評価実施基準：2007」に準拠した手法としている。

(c) フラジリティ曲線の保守性等

廃棄物処理建物のフラジリティ曲線は、建物を構成する評価対象部位のうち、HCLPFが最小となる要素を対象として算出しており、建物全体の損傷を模擬したものではないため、建物全体崩壊に至るまでには余裕があると考えられる。

(3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

以上のとおり、廃棄物処理建物の損傷シーケンスの評価は、現状のフラジリティ評価手法にかなりの保守性を有していると考えられる。

仮に廃棄物処理建物が損傷した場合に考え得るシナリオとしては、外部電源喪失が発生すると同時にECCS等の緩和系の制御機能喪失に至る事故シナリオが考えられるが、炉心損傷頻度は小規模な損傷の影響を含めた値であり、廃棄物処理建物の損傷の規模によっては、機能維持しているECCS等により原子炉への注水を継続することで、炉心損傷が回避できる可能性がある。

以上を総合的に勘案したうえで、本事象については新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

## 2.7 計装・制御系喪失

(1) 想定事故シナリオ

計装・制御系が損傷した場合、プラントの監視及び制御が不能に陥る可能性があること、発生時のプラント挙動に対する影響が現在の知見では明確でないことから、保守的に直接炉心損傷に至る事故シナリオとして整理している。

【炉心損傷頻度】 $1.5 \times 10^{-7}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】約 1.0%

(2) フラジリティ評価

(a) 評価対象機器／評価部位

計装・制御系喪失において評価対象となる電気計装機器は、制御盤、計装ラック、計装用無停電交流電源設備、ケーブル・トレイである。

これらの電気計装機器について、基礎ボルトの構造損傷及び盤又は計装ラック全体における機能損傷について評価している。

(b) 評価方法

制御盤及び計装用無停電交流電源設備は、盤の形状がいずれも直立盤に分類されることから、水平方向の耐力評価については、過去に直立盤について機能確認済加速度値を検証している旧独立行政法人原子力安全基盤機構（以下「2.7 計装・制御系喪失」では「旧JNES」という。）の知見<sup>(4)</sup>

を用いて評価を実施した。

計装ラックについても水平方向の耐力評価については、旧 J N E S により計装ラック全体を加振して機能確認済加速度が検証されていることから、この知見を用いて評価を実施した。鉛直方向については、既往の試験結果による機能確認済加速度を適用することとした。

ケーブル・トレイについては、耐震 S クラスのケーブル・トレイのうち、決定論的耐震性評価において最も裕度が小さいケーブル・トレイについてフラジリティ評価を実施している。また、ケーブル・トレイの評価部位は、最弱部位（サポート）に対する評価結果であり、ケーブル・トレイが断線等により直接的に機能喪失に至ることを評価したものではない。

(c) フラジリティ曲線の保守性等

今回の耐力評価に使用している機能確認済加速度は、誤作動を起こすまでの結果であり、電気計装機器の機能損傷レベルに対して余裕のある機能確認済加速度値を採用している。

このため、盤及び内蔵器具類が再使用困難な状態まで検証を行った結果ではないことから、仮に地震動が機能確認済加速度値を超過した場合においても一時的な機能喪失に留まる可能性が高く、地震収束後に再起動操作等を適切に実施することにより機能回復が可能と考えられる。

また、ケーブル・トレイはじん性（ねばり）に優れた鋼材が用いられており、ケーブルは余長をもって敷設されているため、保守的な評価となっている。仮に最弱部位のサポートが損傷したとしても、すべてのサポートが同時に損傷するものではないと考えられること及びケーブル断線等の直接的な機能喪失を評価した結果を適用しているものではないことから、実際のケーブル断線等の機能損傷に至るまでには裕度があると考えられる。

(3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

今回の評価結果から炉心損傷直結事象と整理しているが、現実的に、制御盤又は計装ラックが倒壊するような復旧困難な損傷でない限り、事象収束措置が図られ、機能回復が見込めること及びケーブル断線等の機能喪失に至るまでには裕度を有していることから実態として炉心損傷に直結しないものと考えられる。

仮に制御盤又は計装ラックが倒壊するような機能回復が見込めないような場合であっても、その範囲により事象収束の可能性が残されているものの、損傷の程度や影響の程度によって変化する事故シーケンスを個別に特定していくことは困難である。

ただし、上記のとおり、現実的な事故シナリオとしては、一時的な機能喪失に留まる機器に対し、地震収束後に適切に対応することで影響緩和系による事象収束が期待できるため、炉心損傷に至る確率が十分小さいと判断し、有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。



## 2.8 格納容器バイパス

### (1) 想定事故シナリオ

格納容器バイパス事象は、常時開の隔離弁に接続している配管が原子炉格納容器外で破損すると同時に隔離弁が閉失敗することで、原子炉冷却材が流出する事象である。高温・高圧の原子炉冷却材が隔離不能な状態で原子炉格納容器外（原子炉建物）へ流出し、原子炉建物内の広範な影響緩和系に係る機器（電気品、計装品等）が機能喪失する可能性があるが、損傷の規模や影響緩和系による事象収束可能性の評価が困難なため、保守的に直接炉心損傷に至る事故シナリオとして整理している。

【炉心損傷頻度】 $3.5 \times 10^{-9}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】0.1%未満

### (2) フラジリティ評価

#### (a) 評価対象機器／評価部位

本事故シーケンスで支配的なシナリオは、主蒸気配管の破損と主蒸気隔離弁の閉失敗、原子炉浄化系配管の破損と原子炉浄化系隔離弁の閉失敗により格納容器バイパスに至るものである。

#### (b) 評価方法

主蒸気配管及び原子炉浄化系配管については、耐震Bクラスであり、地震発生時の損傷確率を1.0としている。主蒸気隔離弁及び原子炉浄化系隔離弁は弁の応答加速度と機能確認済加速度に基づきフラジリティ評価を実施している。

#### (c) フラジリティ曲線の保守性等

主蒸気配管及び原子炉浄化系配管については、耐震Bクラスであり、フラジリティ評価では地震に対する耐力を考慮していないものの、一定程度の耐力は有しているものと考えられる。

また、弁の機能維持評価に使用している既往試験における機能確認済加速度は加振設備の性能による制限を受けており、実際の弁の機能損傷レベルに対して余裕のある値となっている。また、弁については2重化されているものの、完全相関を仮定していることから、同時破損確率は、現評価より小さくなることが考えられる。

### (3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

地震レベル1 P R Aでは、格納容器バイパスシナリオについて、配管損傷の程度やその発生位置に応じて変化する溢水量や溢水（又は蒸気）の伝播経路の特定、影響緩和措置の実現性や成立性の確認を含めた詳細な事象進展の特定は不確かさも大きく定量化が困難である。

ただし、(2)のとおり、要因となる配管、弁のフラジリティ評価に保守的な仮定をおいており、損傷の程度や位置によっては、建物内で影響の及ぶ機器は限定的となることから、現実的なシナリオとしては、原子炉へ注水を継続することにより炉心損傷が回避できる可能性がある。

すなわち、損傷の程度によっては既存の有効性評価の事故シーケンスグループに含まれること、加えて本事故シーケンスにより炉心損傷に至る頻度はかなり稀な事象であるといえることから、新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないものとした。

## 2.9 原子炉停止機能喪失

### (1) 想定事故シナリオ

原子炉停止機能喪失事象は、スクラムによる原子炉停止に失敗するシナリオである。ただし、本シナリオについては炉心損傷直結事象に分類されるものではない。

地震レベル1 P R Aではヘディング「原子炉停止」において、以下の設備の地震要因損傷により、制御棒の挿入に失敗するものとして評価している。

- ・炉内支持構造物
- ・制御棒駆動系
- ・燃料集合体（過度の相対変位による制御棒挿入失敗を想定）

【炉心損傷頻度】 $5.2 \times 10^{-7}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】約 3.6%

### (2) 事故シーケンスグループとしての取扱い

原子炉停止機能喪失は内部事象運転時レベル1 P R Aにおいて既に抽出された事故シーケンスグループであるものの、地震レベル1 P R Aにおいては全交流動力電源喪失+スクラム失敗といったシナリオも評価上抽出される。

ただし、(1)で挙げた設備（炉内支持構造物、制御棒駆動系、燃料集合体）については地震要因による損傷は否定できないものの、地震発生から損傷に至るまでには時間差があると考えられる。そのため、その間に地震加速度大（水平 140gal, 鉛直 70gal）によるスクラム信号発信及び制御棒挿入<sup>※</sup>は余裕をもって完了している可能性が高い。

また、制御棒が部分的に挿入失敗するようなケースでは、必ずしも臨界とはならないが、地震による制御棒駆動系の損傷は完全相関を仮定しているため、1本の制御棒でも挿入失敗した場合は保守的にスクラム失敗により炉心損傷するものとして評価している。

以上より、現実的には本事故シーケンスにより炉心損傷に至る確率が十分小さいと判断し、地震レベル1 P R Aとしては改めて有効性評価の事故シーケンスグループとして取り扱う必要はないものとした。

※75%挿入時間：平均 1.24 秒（非加振時，平成 22 年制御棒駆動水圧系機能検査），1.35 秒（燃料集合体相対変位 41mm における正弦波加振時，島根 2 号機工事計画認可申請書（第 3 回定期検査 新型制御棒の採用）（第 10 図参照））

## 2.10 直接炉心損傷に至る事象

### (1) 想定事故シナリオ

津波高さE L20mを超える大規模な津波の遡上により、敷地内が広範囲にわたって浸水することで、屋内外の施設が広範囲にわたり機能喪失して炉心損傷に至る事象である。実際には、建物内への主要な流入経路となる建物外壁の水密扉の損傷状況に応じて、発生する事象は幅を有する。

#### <小規模な損傷の場合>

浸水箇所や浸水量の程度によっては、建物内の水密扉やせきにより、安全機能を有する設備が設置されたエリアへの浸水は一部に留まるものと考えられる。その場合、原子炉隔離時冷却系による原子炉注水等に期待できる場合がある。

#### <大規模な損傷の場合>

建物外壁水密扉が波力により破損し、複数箇所から建物内に大規模な浸水が発生する場合は、屋内外の複数の緩和系が同時に機能喪失する場合がある。

このように、損傷の発生程度に応じて影響程度が変化する事故シーケンスであるものの、津波による損傷状態及び機能喪失する機器を特定することは困難であることから、これらの様々な損傷の程度・組合せを含む事故シーケンス全体を炉心損傷防止が困難な事故シーケンスグループとして整理した。

【炉心損傷頻度】 $1.2 \times 10^{-7}$  / 炉年（点推定値）

【全炉心損傷頻度への寄与割合】約 0.8%

### (2) フラジリティ評価の保守性

今回のフラジリティ評価では、機能喪失浸水高を超えた時点で建物外壁水密扉の損傷確率を 1.0 と仮定しているが、実際には機能喪失浸水高を超えた場合であっても一定程度は建物外壁水密扉が健全であると考えられるため、保守性を有していると考えられる。

### (3) 有効性評価における事故シーケンスグループとしての取扱い

以上のとおり、直接炉心損傷に至る事象の評価は、現状のフラジリティ評価手法にかなりの保守性を有していると考えられる。

また、E L20mを超える津波発生時は、敷地内に多量の津波が流入することにより、屋内外の施設が広範囲にわたり機能喪失することが考えられるが、津波による影響の程度について不確かさが大きく、どの程度の緩和設備に期待できるか厳密に特定することは困難である。

仮に津波高さE L20mを超える津波が襲来した場合に考え得るシナリオとしては、原子炉補機冷却系の喪失やE C C S等の緩和系の制御機能喪失に至る事故シナリオが考えられるが、炉心損傷頻度は小規模な損傷の影響を含めた値であり、浸水による屋内外の施設の損傷の規模によっては、機能維持している原子炉隔離時冷却系等により原子炉への注水を継続することで、炉心損傷が回避できる可能性がある。

以上を総合的に勘案したうえで、本事象については新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないこととした。

### 3. まとめ

炉心損傷直結事象として整理した事故シーケンスについては、現実的な耐力や事故シナリオを考慮することにより、新たな有効性評価の事故シーケンスグループとしては取り扱わないものとした。

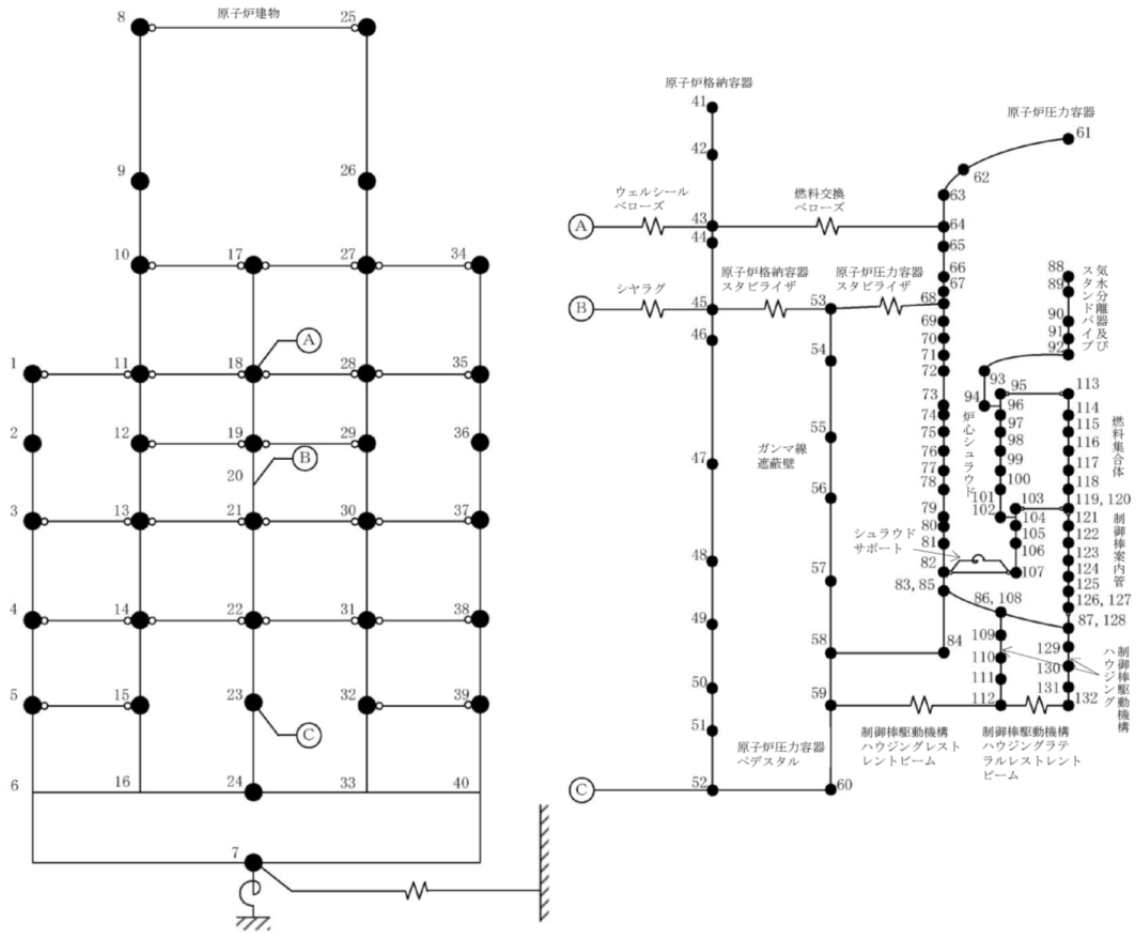
本来は地震及び津波レベル1 PRAにおいても、損傷の程度に応じて緩和系による事象収束可否を詳細に評価することが望ましいが、現段階では損傷の規模や範囲の特定は困難かつ不確かさが大きく、これら事故シーケンスが発生した場合の事象進展、具体的には、炉心損傷までの時間余裕、緩和系の健全性や炉心損傷防止への必要性能有無などについて評価を行うことは現実的ではないことから、保守的に炉心損傷直結として取り扱っている。

大規模な地震等を想定した場合の、多数の設備の機能喪失により炉心損傷回避が困難となるケースについても、炉心損傷防止対策の事故シーケンスグループとして単独で定義するのではなく、地震等による損傷の程度や事象進展に応じて、さまざまな炉心損傷防止対策を臨機応変に組み合わせて活用可能なように準備しておくことが重要である。また、原子炉建物全体が損壊し、建物内部の安全系機器が機能喪失に至ってしまうような非常に過酷な状況下においても、屋外の可搬型設備により注水、除熱、電源機能を確保するとともに、大規模損壊対策として放水砲等の影響緩和措置を講じられるようにしておくことが重要であると考えられる。

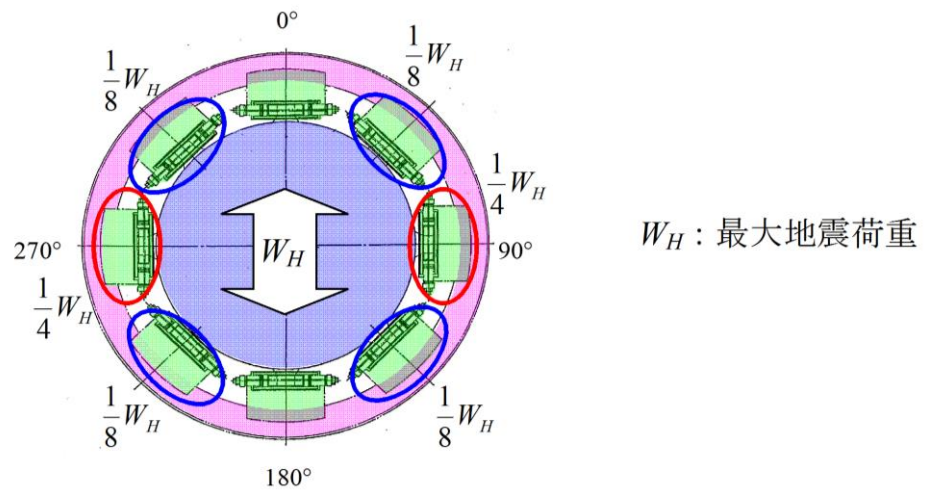
### 参考文献

- (1) 一般社団法人 日本電気協会，“原子力発電所耐震設計技術規程 J E A C 4 6 0 1 - 2 0 1 5”
- (2) 財団法人 原子力発電技術機構，“平成 15 年度原子力発電施設耐震信頼性実証に関する報告書その1 配管系終局強度”，平成 15 年 9 月
- (3) 佐藤 他，“小口径配管系の耐震安全性に関する研究”，三菱重工技報 Vol. 46 No. 4, 2009 年
- (4) 独立行政法人 原子力安全基盤機構，“平成 16 年度原子力発電施設耐震信頼性実証に関する報告書 機器耐力その1（横形ポンプ，電気品）”，平成 17 年 7 月

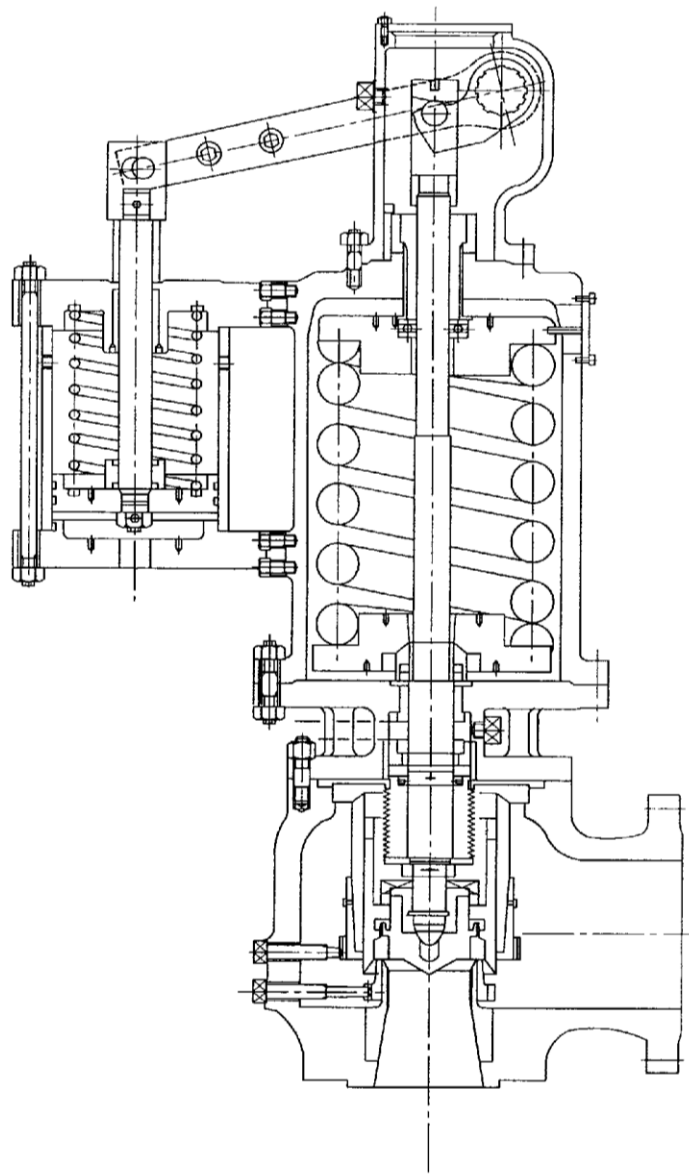




第 2 図 大型機器系地震応答解析モデル(N S 方向)



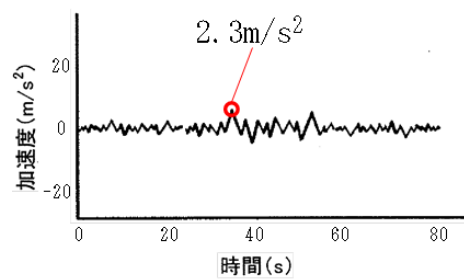
第 3 図 原子炉圧力容器スタビライザ 1 個が受け持つ最大地震荷重



第4図 SRVの構造概要図



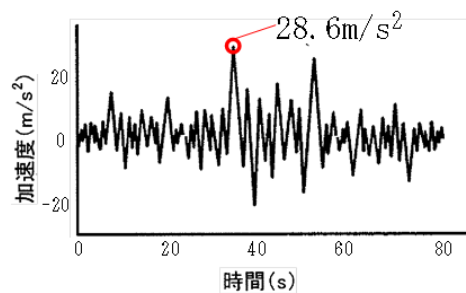
第5図 配管系終局強度試験



最大応力発生箇所：エルボ (STS410)  
 発生最大応力：411[MPa]  
 (供用状態Dsの許容限界)

設計上許容される入力地震レベル

加速度を係数倍



約12倍

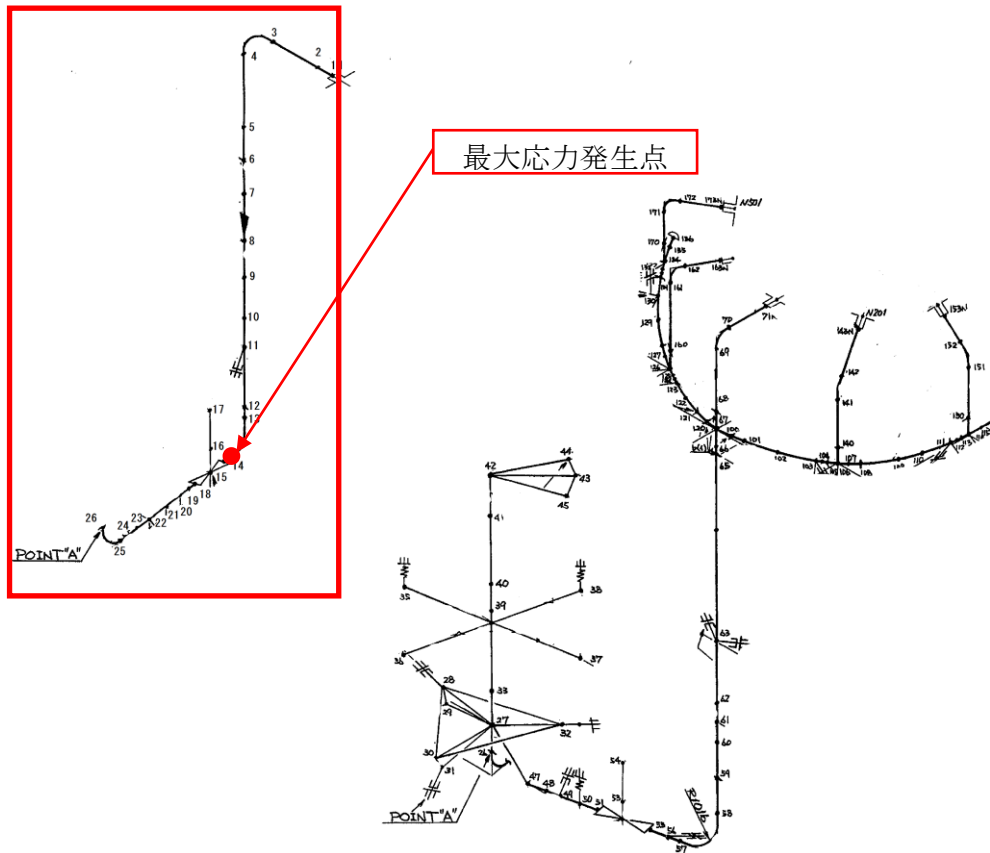
最大応力発生箇所：エルボ (STS410)  
 発生最大応力：5111[MPa]※  
 (1回の地震で疲労破損するときの応力)

※ 現行の配管設計手法である弾性解析による値

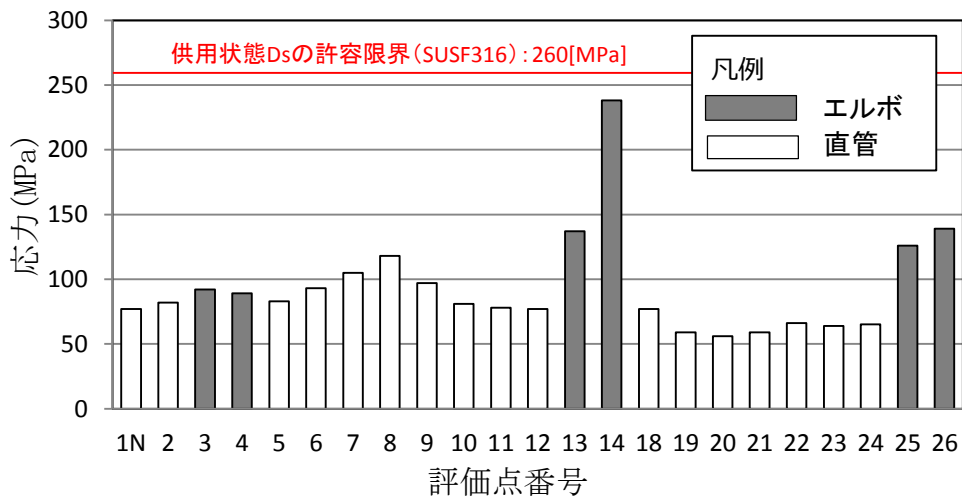
1回の地震で配管が疲労破損するときの入力地震レベル

第6図 安全余裕のイメージ

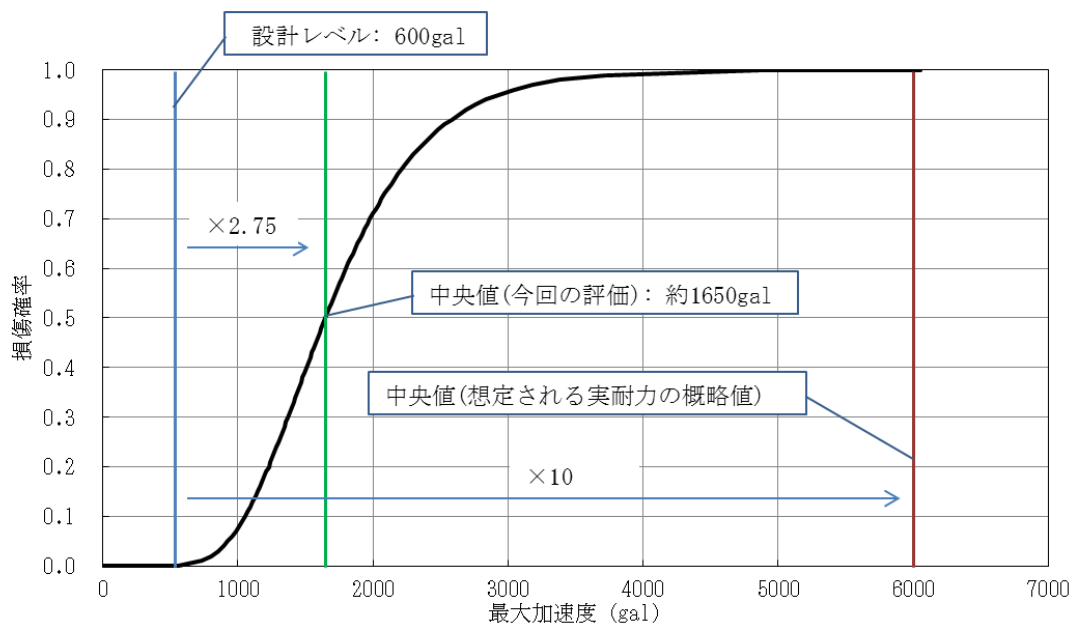




第7図 原子炉再循環系配管の解析モデル

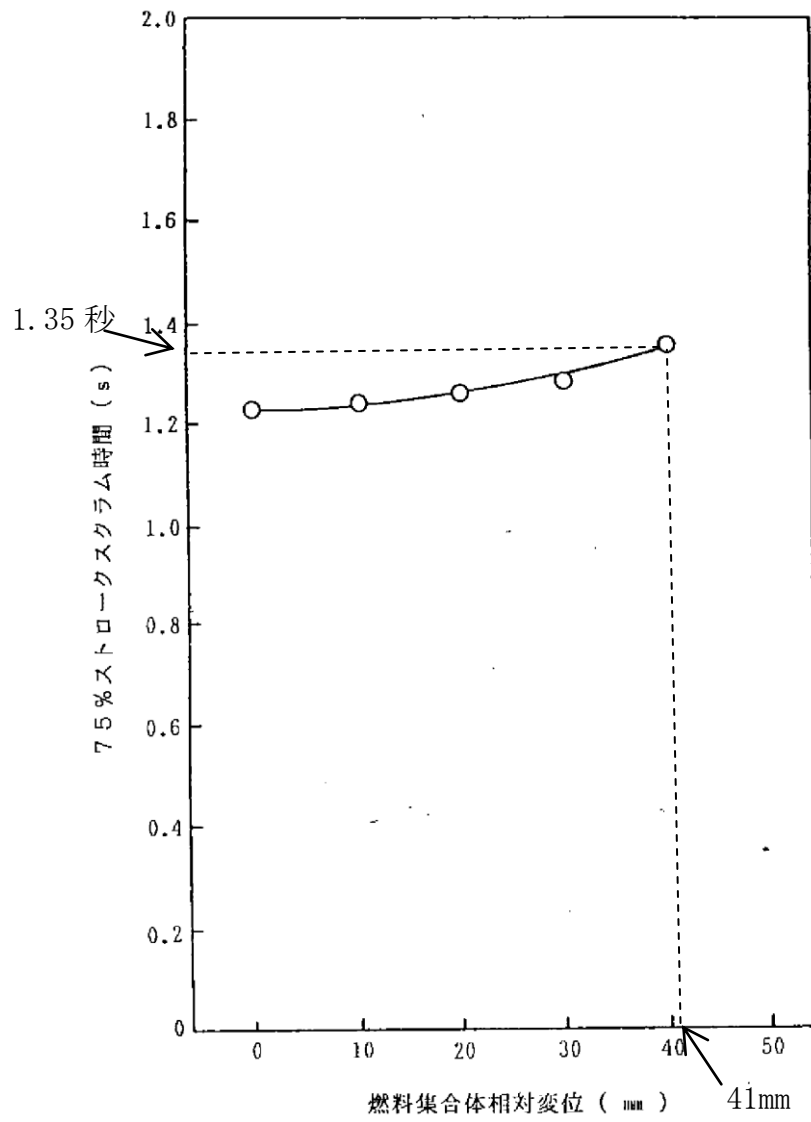


第8図 原子炉再循環系配管の各評価点応力分布



※安全余裕を 10 倍と仮定した場合を示す。

第 9 図 原子炉再循環系配管のフラジリティ評価と試験で確認された実耐力



島根 2 号機工事計画認可申請書 (第 3 回定期検査 新型制御棒の採用))  
より抜粋, 加筆

第 10 図 制御棒挿入時間 (加振時)

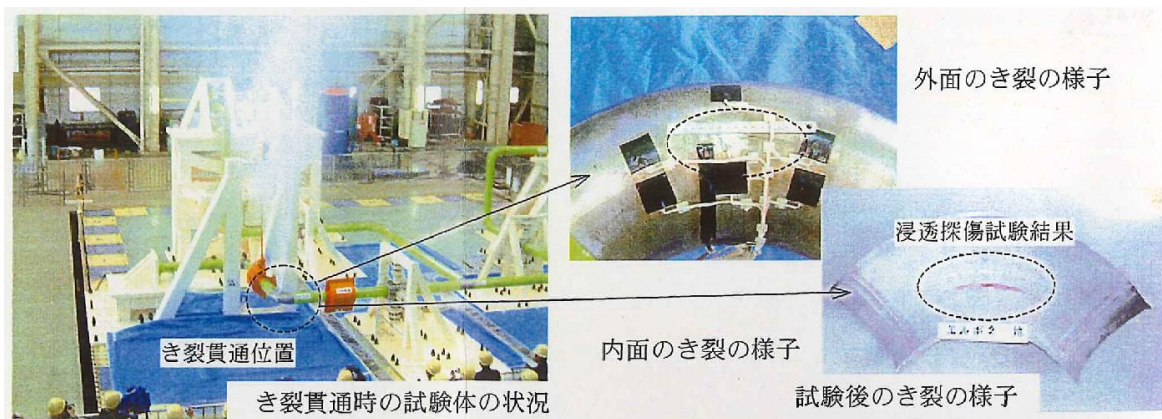
Excessive LOCAの評価における現実的な配管開口面積について

## 1. はじめに

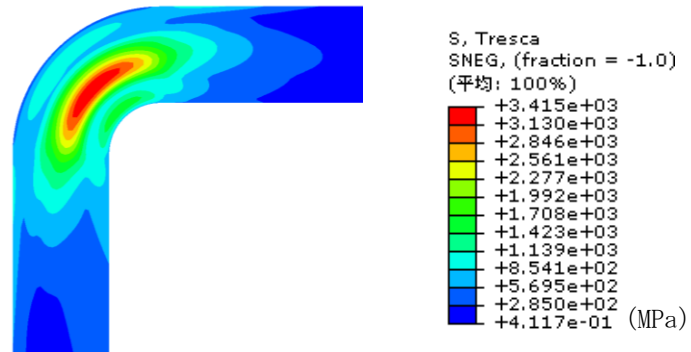
Excessive LOCAは、原子炉格納容器内の原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する配管の大規模な損傷を想定したものであるが、一般に、地震による配管の破損形態は、曲げ管やT管の応力集中部に生じる疲労破損であり、亀裂は配管軸方向に生じるため、全周破断のような大きな開口を伴う配管破損が発生する可能性は十分に小さいと考えられる。ここでは、原子炉格納容器内配管に対し、地震発生時の現実的な亀裂開口面積の概略評価を実施した。

## 2. 配管の破損形態

配管系終局強度試験<sup>(1)</sup>等の既往研究により、配管は地震によって塑性崩壊することではなく、破損形態はラチェット変形を含む低サイクル疲労による貫通亀裂であることが確認されている。配管系終局強度試験における亀裂貫通部の試験体の状況を第1図に示す。図より、亀裂貫通部は応力集中部である曲げ管の横腹部であり、配管軸方向に貫通亀裂が発生している。これは、第2図に示すように、曲げ管の面内変形により、配管断面が楕円状に変形し、曲げ管の横腹に応力集中部が生じ、配管軸方向に疲労亀裂が生じるためである。これは、T管においても同様であり、配管軸方向に疲労亀裂が生じる。



第1図 終局強度試験



第2図 面内変形による曲げ管の応力分布

### 3. 亀裂開口面積の評価

原子炉格納容器内の大口径配管に地震による亀裂の発生を想定し、内圧による亀裂開口面積を評価する。評価対象となる原子炉格納容器内の大口径配管は、原子炉冷却材圧力バウンダリを構成するため厚肉であるが（原子炉再循環系配管：500A, Sch80, 給水系配管：300A, Sch100, 低圧注水系配管：250A, Sch100等）、亀裂開口面積が大きくなるよう薄肉大口径配管（400A, Sch40）を解析対象とした。

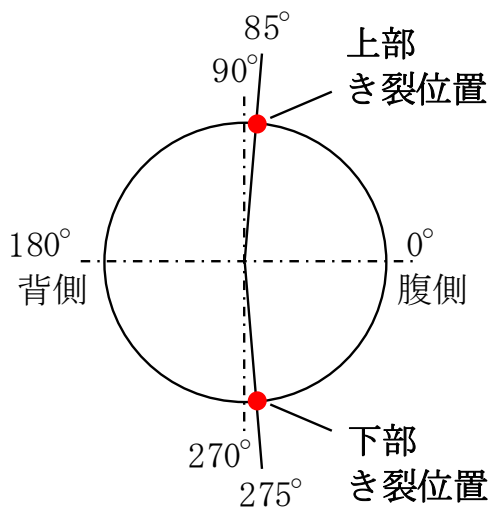
曲げ管の亀裂開口面積解析モデルを第3図に示す。曲げ管（ $0^{\circ} \sim 90^{\circ}$ ）及び前後の直管部100mmを含めた赤線部に亀裂を想定し、内圧として1MPa（通常水位を想定した時に原子炉冷却材圧力バウンダリ底部にかかる静水圧である約0.3MPaに余裕をみた値）を仮定して開口面積を評価した。評価結果を第4図に示す。亀裂長さは、約830mm、亀裂幅の最大値は約0.8mmであり、上部と下部亀裂部の開口面積の合計は約920mm<sup>2</sup>となった。これは、当該配管（400A, Sch40）の全周破断の断面積（配管両側）0.23m<sup>2</sup>の約250分の1、大破断LOCAで想定する配管破断面積0.21m<sup>2</sup>の約230分の1である。

### 4. まとめ

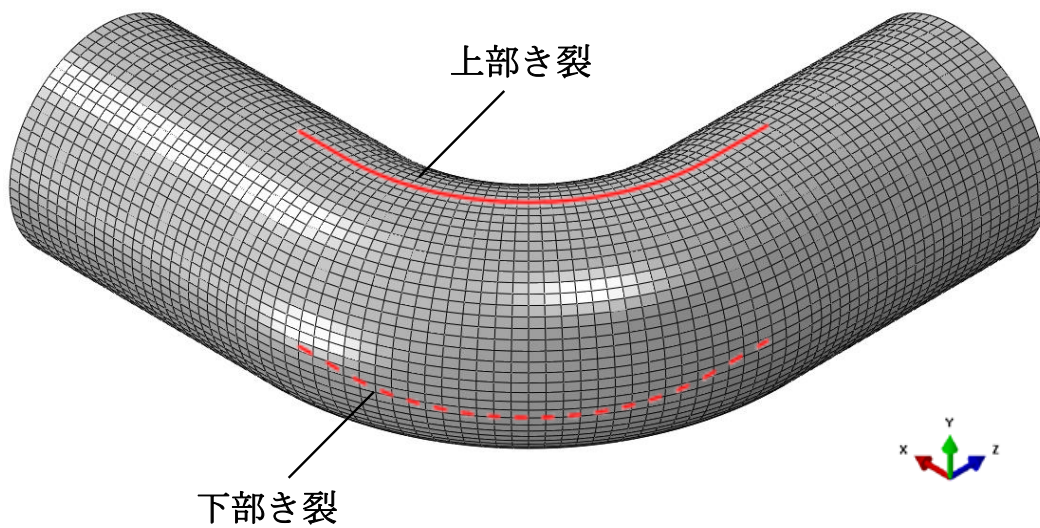
薄肉大口径配管（400A, Sch40）に対し開口面積を概略評価した結果によると、開口面積は当該配管（400A, Sch40）の全周破断の断面積の約250分の1、大破断LOCAで想定する配管破断面積の約230分の1であり、また、原子炉格納容器内配管は高圧配管のため厚肉であることから開口面積は更に小さくなるものと考えられ、原子炉格納容器内配管において複数箇所の配管破損により、大破断LOCAの配管破断面積を超える程の破損が発生し、Excessive LOCAに至る可能性は低いと考えられる。

### 参考文献

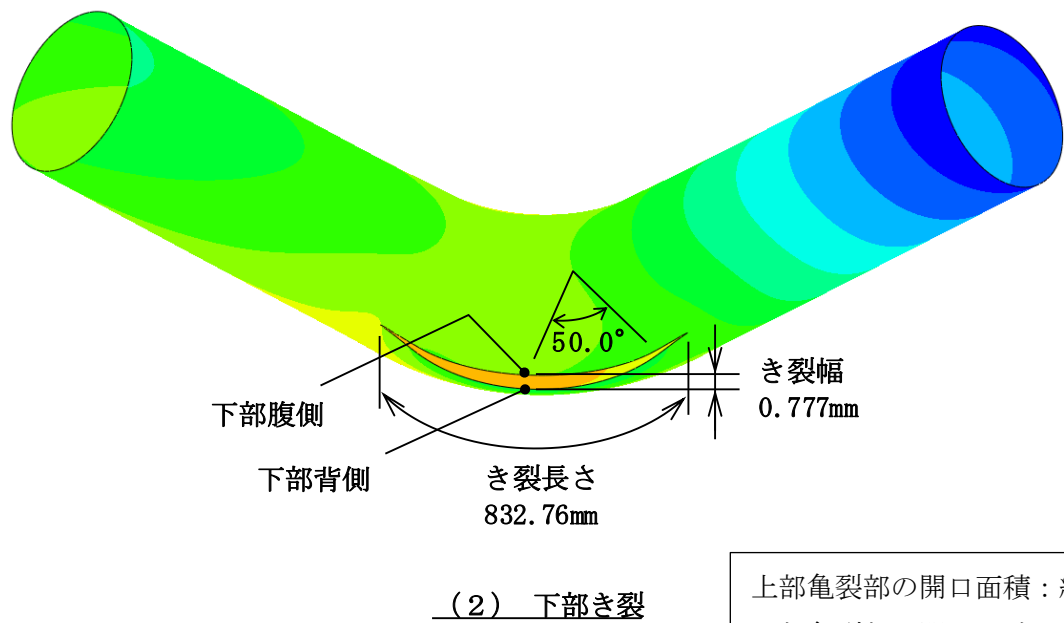
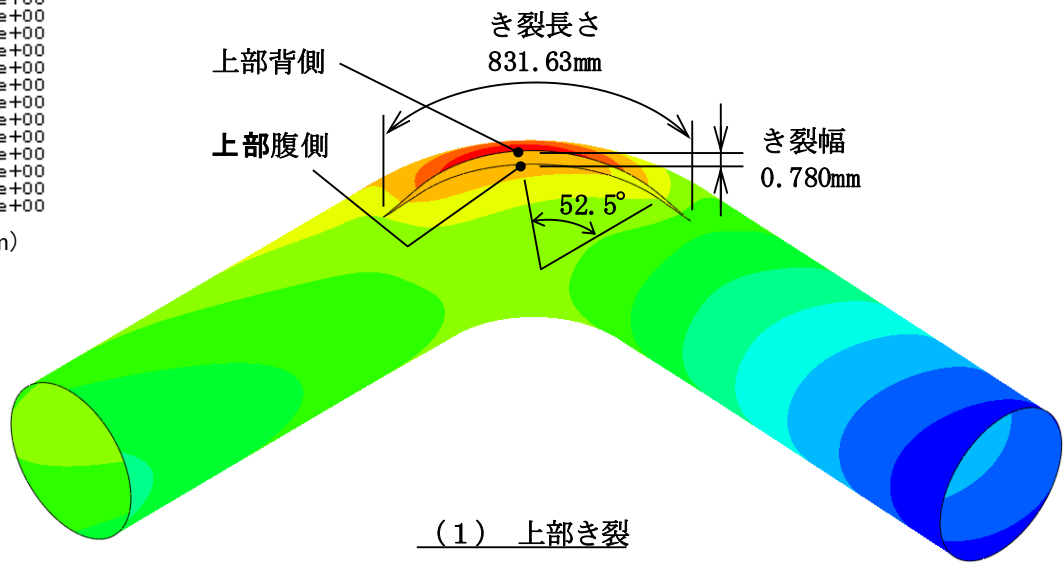
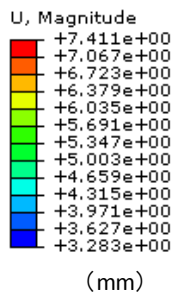
- (1) 独立行政法人 原子力安全基盤機構（平成16年6月）：平成15年度 原子力発電施設耐震信頼性実証に関する報告書 配管系終局強度



亀裂長さは約 830mm  
(上部亀裂, 下部亀裂ともに)



第3図 亀裂開口面積解析モデル (曲げ管)



上部亀裂部の開口面積：約 460mm <sup>2</sup>
下部亀裂部の開口面積：約 460mm <sup>2</sup>
合計：約 920mm <sup>2</sup>

第4図 曲げ管亀裂開口部に着目した変形図

重大事故防止に係る設備についての諸外国の調査結果

## 1. 諸外国における先進的な安全対策の調査方法

諸外国（米国及び欧州）において整備されている対策の状況については、国外の原子力規制機関である米国原子力規制委員会（NRC）等の規制文書、米国の事業者公開資料、欧州におけるストレステスト報告書等を調査した。また、原子力規制関係の調査委託会社から得られる情報等についても調査した。当社における海外情報収集の体系を第1図に示す。

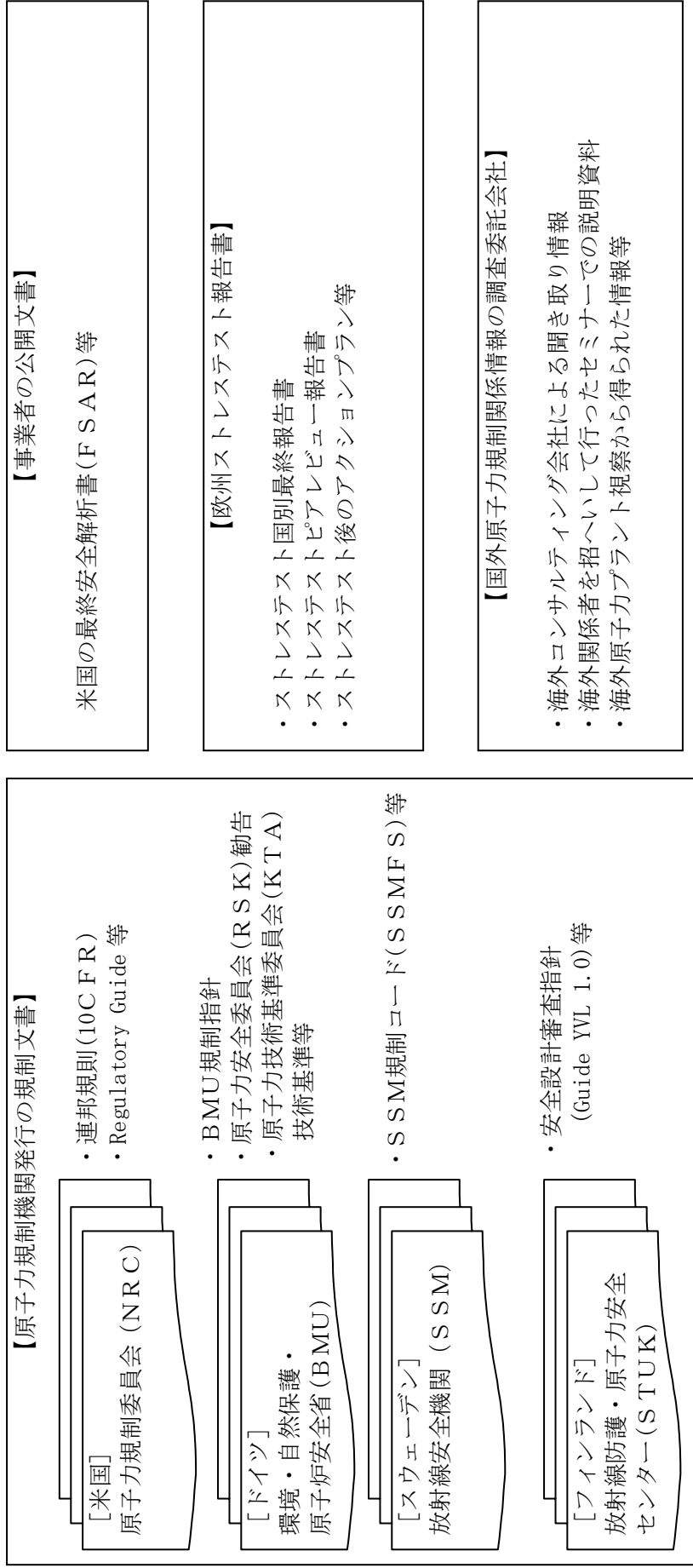
## 2. 諸外国での先進的な対策について

諸外国における重大事故防止に係る対策の情報について、島根原子力発電所2号炉で整備している対策と比較した結果を第1表に示す。

調査の結果、すべての事故シーケンスグループについて、諸外国の既設プラントで整備されている各機能の対策と同等の対策が、島根原子力発電所2号炉にも整備されていることを確認した。

なお、「LOCA時注水機能喪失」の事故シーケンスグループについては、諸外国においてもすべての破断面積に対して炉心損傷を防止できるような設備対策はとられていないことを確認した。





**【情報入手先】**

- 原子力安全推進協会(JANSI)
- 国外原子力規制関係情報の調査委託会社

第1図 当社における海外等の情報収集の仕組み

第1表 米国・欧州での重大事故等対策に係る設備例の比較 (1/5)

分類	事故シナリオグループ	想定する機能	重大事故等対策にかかる設備又は操作					対策の概要
			島根原子力発電所2号炉	米国	ドイツ	スウェーデン	フィンランド	
1	高圧・低圧注水機能喪失	炉心冷却	<ul style="list-style-type: none"> <li>低圧原子炉代替注水系 (常設)*</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (可搬型)</li> <li>高圧原子炉代替注水系</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ディーゼル駆動消火ポンプ</li> <li>高圧サービスイス水系</li> <li>制御棒駆動機構ポンプ</li> <li>復水ポンプ</li> <li>残留熱除去系サービスイス水系</li> <li>可搬式ポンプ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>独立非常用系 (中圧ポンプ)</li> <li>復水系 (給水ポンプ/バイパス)</li> <li>サービスイス水系 (河川水)</li> <li>代替注水</li> <li>制御棒駆動水系ポンプ</li> <li>インテグレーションポンプ・シール本系ポンプ</li> <li>可搬式消火ポンプ</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>火災用ポンプ、ブースターポンプ</li> <li>可搬式ポンプ</li> </ul>	<p>欧米では、注水ポンプの追加設置又は炉心注水機能を有さない既設ポンプに炉心注水機能を追加する等による炉心冷却手段を整備している。</p> <p>当社においても、既設の代替ポンプや可搬式ポンプ、また併設の低圧原子炉代替注水系を使用した炉心冷却を行う手段を整備している。また、蒸気駆動の高圧注水手段として高圧原子炉代替注水系を設置している。</p>
		格納容器除熱	<ul style="list-style-type: none"> <li>格納容器フィルタメント系*</li> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器代替スプレイ系 (可搬型)*</li> <li>残留熱代替除去系</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ウエットウエル・ペント</li> <li>原子炉冷却材浄化系によるサブプレッション・プールの除熱</li> <li>主蒸気隔離弁、タービン・バイパス弁の再開放による主復水器のヒートシンク機能回復</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>独立非常用系 (専用ヒートシンク)</li> <li>フィルタメント</li> <li>必須サービスイス水系</li> <li>原子炉浄化系</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>格納容器フィルタメント</li> <li>格納容器フィルタメント</li> <li>代替最終ヒートシンク導入</li> </ul>	<p>米国では、大気を最終ヒートシンクとする耐圧強化ラインからのベント設備を整備している。また欧州においては、河川や大気等を最終ヒートシンクとする熱交換設備やポンプ等を含む独立非常用系、フィルタメント系を整備している。</p> <p>当社においても、大気を最終ヒートシンクとする格納容器フィルタメント系、海水を最終ヒートシンクとする原子炉補機代替冷却系、残留熱代替除去系を整備している。</p>	
		交流電源設備	<ul style="list-style-type: none"> <li>常代替交流電源設備 (ガスタービン発電機)*</li> </ul>	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>独立非常用系電源 (ディーゼル発電機他)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専用発電機</li> </ul>	<p>欧州では、独立非常用系の専用電源としてディーゼル発電機等を整備している。</p> <p>当社においても、独立性のある常設のガスタービン発電機を整備している。</p>	
		給水源	<ul style="list-style-type: none"> <li>低圧原子炉代替注水槽*</li> <li>低圧原子炉代替注水槽への水補給*</li> <li>貯水槽</li> <li>海水</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>復水貯蔵タンクへの水補給</li> <li>一処理水の水源</li> <li>脱塩水貯蔵タンク、復水器ホットウエル、燃料プール、他</li> <li>ユニット貯蔵タンク</li> <li>一非処理水の水源</li> <li>消火水系、公共の消火系、水道系</li> <li>一燃料取替用水タンクからの補給</li> <li>一他ユニット復水貯蔵タンクからの補給</li> <li>一防氷用火タンク</li> <li>飲料水系</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>復水タンクへの補給</li> <li>一消火系からの補給</li> <li>一ほう酸溶液タンクへの補給</li> <li>河川水</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>脱塩水タンクへの補給</li> <li>一消火系からの補給</li> <li>一純水系からの補給</li> </ul>	<p>欧米では、淡水タンク、河川、貯水池等の代替水源からの給水が可能である。当社においては、淡水タンクや貯水池及び海水の代替水源からの給水が可能である。</p>	
		まとめ	<p>上記の調査結果より、国外の既設プラントで整備されている対策が、島根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。なお、ドイツの独立非常用系については、事故シナリオの特定が困難な航空機衝突、毒ガスの放出、テロリストの攻撃等のような破壊的事象を想定した系統であり、国内では特定重大事故等対処施設に相当する設備であり、重大事故等対処設備に相当するものではない。</p>					

\* : 有効性評価において有効性を評価した対策

第1表 米国・欧州での重大事故等対策に係る設備例の比較 (2/5)

分類	事故シナリオグループ	想定する機能	重大事故等対策にかかる設備又は操作					対策の概要	
			島根原子力発電所2号炉	米国	ドイツ	スウェーデン	フィンランド		
2	高圧注水・減圧機能喪失	炉心冷却	【・残留熱除去系（低圧注水モード）】※ ・低圧原子炉代替注水系（常設） ・低圧原子炉代替注水系（可搬型） ・高圧原子炉代替注水系	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		原子炉減圧	・代替自動減圧機能※ ・減圧機能信頼性向上策 一 予備の蓄熱ポンプ配備 一 可搬電源からの給電 一 直流電源車の配備 一 蓄熱供給圧の調整機能	・過渡時減圧自動化ロジック ・減圧機能の信頼性向上 一 追加電源（直流） 一 追加の蓄熱供給系 一 ケーブル性能確保 <sup>(注)</sup>	・多様化炉容器減圧系（逃がし安全弁駆動用電動弁） 一 手動及び原子炉保護系にて駆動	・減圧機能の信頼性向上 一 バックアップ用蓄熱ポンプ 一 消火系からの水圧による開操作	欧米においては、過渡事象時の減圧自動化ロジックを整備するとともに、逃がし安全弁駆動用の予備蓄熱ポンプや電源の整備等による減圧機能の信頼性向上手段を整備している。また、米国ではシビアアクシデント時の温度環境下に於いて、減圧機能に必要なケーブルが機能維持できることを評価している。当社においても、代替の減圧自動化整備や、逃がし安全弁駆動用の予備蓄熱ポンプや電源の整備等による減圧機能の信頼性向上手段を整備している。また、シビアアクシデント時は、逃がし安全弁と同様に過酷な条件下で機能維持が可能であることを確認する。		
	格納容器除熱	【・残留熱除去系（サブプレッショント・プール水冷却モード）】※ ・格納容器フィルタタベンタ系 ・原子炉補機代替冷却系 ・格納容器代替スプレイス系（可搬型）	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
	直流電源設備	・既設蓄電池の容量増加 ・負荷切離しによる蓄電池容量保持 ・可搬型代替直流電源設備 一 常設充電器＋高圧発電機車 一 主蒸気逃がし安全弁用蓄電池（補助装置）	・蓄電池容量の増加 ・非安全関連蓄電池設置 ・可搬型充電器による蓄電池再充電 ・原子炉圧力容器減圧及び可搬式ポンプのための直流電源 ・蓄電池負荷切離し	・蓄電池容量の増加 ・可搬型ダイオード整流機による充電	・不要負荷の切離しによる蓄電池容量保持 ・S A設備への給電蓄電池の確保	・受電用可搬型発電機 ・充電用可搬型整流器	欧米では、既設の蓄電池容量の増加や負荷の切離しによる蓄電池容量確保手段を整備している。また、可搬型発電機等による蓄電池充電手段を整備している。当社においても、蓄電池の容量増加や負荷の切離し等の手段を整備し、給電の延命対策を整備している。		
	給水源	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
	まとめ	上記の調査結果より、国外の既設プラントで整備されている対策が、島根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。							

※：有効性評価において有効性を評価した対策

【】：設計基準事故対処設備

注）本件は、米国においてNRCの要請によって実施された、内的事象に対する個別プラント評価（IPE）に関連して、NRCより出されたGeneric Letter 88-20追補1の添付2より抽出したものである。

第1表 米国・欧州での重大事故等対策に係る設備例の比較 (3/5)

分類	事故シナリオグループ	想定する機能	重大事故等対策にかかる設備又は操作					対策の概要	
			高根原子力発電所2号炉	米国	ドイツ	スウェーデン	フィンランド		
3	全交流動力電源喪失	炉心冷却	<ul style="list-style-type: none"> <li>【・原子炉隔離時冷却系】*</li> <li>【・残留熱除去系（低圧注水モード）】*</li> <li>・低圧原子炉代替注水系（常設）</li> <li>・低圧原子炉代替注水系（可搬型）*</li> <li>・高圧原子炉代替注水系</li> </ul>	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		格納容器除熱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・格納容器フィルタメント系</li> <li>・原子炉補機代替冷却系</li> <li>・格納容器代替スプレイ系（可搬型）*</li> <li>・残留熱代替除去系</li> </ul>	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		給水源	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		交流電源設備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常設代替交流電源設備（ガスタービン発電機）*</li> <li>・可搬型代替交流電源設備（高圧発電機車）</li> <li>・隣接号機からの電源融通</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非常用ディーゼル発電機の追加設置</li> <li>・ガスタービン発電機</li> <li>・可搬型ディーゼル発電機</li> <li>・ユニット間の交流電源融通</li> <li>・水力発電ユニットからの電源供給</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・独立非常用ディーゼル発電機</li> <li>・可搬型ディーゼル発電機</li> <li>・隣接ユニット間の非常用電源接続</li> <li>・第3送電線（地中埋設）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非常用ディーゼル信頼性向上</li> <li>・起動用バッテリー追加</li> <li>・燃料タンクの配備</li> <li>・除熱系設置非常用ディーゼル発電機更新に合わせて、除熱系2系統（海水、空冷）設置</li> <li>・非常用ディーゼル発電機追設</li> <li>・ガスタービン発電機</li> <li>・可搬型ディーゼル発電機</li> <li>・近隣発電所からの受電</li> <li>・地域電力会社からの受電</li> </ul>	<p>米国では、ディーゼル発電機の追加設置等を整備している。また欧州においては、非常用ディーゼル発電機とは別のディーゼル発電機等を設置するとともに、既設の非常用ディーゼル発電機の冷却系の最終ヒートシンクの多様化（水冷、空冷）を実施している。</p> <p>当社においては、常設の代替交流電源としてガスタービン発電機や高圧発電機車を整備している。</p>		
		直流電源設備	2と同様	2と同様	2と同様	2と同様	2と同様	2と同様	2と同様
		まとめ	上述の調査結果より、国内外の既設プラントで整備されている対策が、高根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。なお、「全交流動力電源喪失+交流電源（DG-A、B）失敗」+高圧炉心冷却失敗、「全交流動力電源喪失+直流電源（区分1、2）失敗」+高圧炉心冷却（HPCS）失敗、「全交流動力電源喪失+交流電源（DG-A、B）失敗」+圧力バウンダリ健全性（SRV閉閉）失敗+高圧炉心冷却（HPCS）失敗」における欧米の対策状況について、調査可能な範囲において調査を実施したが、当該シナリオに関する情報は無い。						

※：有効性評価において有効性を評価した対策  
【】：設計基準事故対処設備

第1表 米国・欧州での重大事故等対策に係る設備例の比較（4/5）

分類	事故シナリオグループ	想定する機能	重大事故等対策にかかる設備又は操作					対策の概要
			高根原子力発電所2号炉	米国	ドイツ	スウェーデン	フィンランド	
4-1	加濃熱除去機能喪失(取水機能喪失)	炉心冷却	1と同様 【・原子炉隔離時冷却系】* 【・残留熱除去系(低圧注水モード)】* ・低圧原子炉代替注水系(常設) ・低圧原子炉代替注水系(可搬型) ・高圧原子炉代替注水系	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		格納容器除熱	・格納容器フィルタベント系 ・原子炉補機代替冷却系* ・格納容器代替スプレイ系(可搬型) ・残留熱除去系(サブプレッジョン・プール水冷却モード)*	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
4-2	加濃熱除去機能喪失(残留熱除去系機能喪失)	給水源	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		交流電源設備	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様
4-2	加濃熱除去機能喪失(残留熱除去系機能喪失)	炉心冷却	1と同様 【・原子炉隔離時冷却系】* ・低圧原子炉代替注水系(常設)* ・低圧原子炉代替注水系(可搬型) ・高圧原子炉代替注水系	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		格納容器除熱	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
4-2	加濃熱除去機能喪失(残留熱除去系機能喪失)	給水源	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		交流電源設備	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様
		まとめ	上記の調査結果より、国外の既設プラントで整備されている対策が、高根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。なお、「過度事象+崩壊熱除去失敗」(残留熱除去系の機能喪失)における欧米の対策状況について、調査可能な範囲において調査を実施したが、当該シナリオを想定した対策に関する情報は無い。					
		まとめ	上記の調査結果より、国外の既設プラントで整備されている対策が、高根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。					

\* : 有効性評価において有効性を評価した対策  
【】 : 設計基準事故対処設備

第1表 米国・欧州での重大事故等対策に係る設備例の比較 (5 / 5)

分類	事故シナリオグループ	想定する機能	重大事故等対策にかかわる設備又は操作					フィンランド	対策の概要
			島根原子力発電所2号炉	米国	ドイツ	スウェーデン	フィンランド		
5	LOCA時注水機能喪失	炉心冷却	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		格納容器除熱	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		給水源	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
		交流電源設備	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様	3と同様
まとめ		<p>上記の調査結果より、国外の既設プラントで整備されている対策が、島根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。なお、「大破断LOCAを上回るLOCA (Excessive LOCA (地震起因))」、「大破断LOCA：注水機能喪失 (内部事象・地震起因)」における欧米の対策状況について、調査可能な範囲において調査を実施したが、当該シナリオに関する情報は無い。</p>							
6	原子炉停止機能喪失	原子炉停止	<ul style="list-style-type: none"> <li>代替制御棒挿入系回路 (AR I)</li> <li>S LCS ほう酸濃度の増加</li> <li>S LCS (自動)</li> <li>CRD系、原子炉浄化系によるほう酸水注入</li> <li>ATWS 原子炉再循環ポンプトリップ</li> <li>MSIV 閉後の ATWS 時の炉圧高で給水ポンプトリップロジック追加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (手動、自動)</li> <li>バックアップ・スクラム回路 (制御棒挿入、原子炉再循環ポンプ回転数減速)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (手動、自動)</li> <li>バックアップ・スクラム回路 (制御棒挿入、原子炉再循環ポンプ回転数減速)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (自動)</li> </ul>	<p>欧米においては、代替制御棒挿入回路や原子炉再循環ポンプトリップ回路を導入し、また、ほう酸水注入系を設置している。</p> <p>当社においても、欧米と同様の設備を設置している。</p> <p>米国で確認されている T A F 以下で原子炉の水位を制御する対応は、当社では採用していない。これは、原子炉停止機能喪失事象であっても冠水維持が事故対応の基本と考えためである。なお、T A F 以上で原子炉水位を制御する現状の当社の手順であっても P C T 等の判断基準を満たすことを確認している。</p>		
		まとめ	<p>上記の調査結果より、国外の既設プラントで整備されている対策が、島根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。なお、欧米の一部既設プラントにおいて S L C の自動起動を整備しているが、島根原子力発電所2号炉では、手順書等において S L C の自動起動の基準を明記することにより、S L C が必要な場合に確実な自動起動操作が行われるようにしており、自動起動と同等の手段が整備されていることを確認した。</p>						
7	インターフェイシング T A M L O C A	炉心冷却	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存設備で対応*</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存設備で対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (手動)</li> <li>原子炉再循環ポンプ自動トリップ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (手動、自動)</li> <li>バックアップ・スクラム回路 (制御棒挿入、原子炉再循環ポンプ回転数減速)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (自動)</li> </ul>	<p>米国においては、既存設備によって炉心冷却を実施することになっている。当社においても米国同様、既存設備を用いて炉心冷却を実施することになっている。</p>	<p>米国においては、既存の計装等から兆候を早期に把握し、隔離する手段を整備している。また欧州においては、格納容器隔離手段として代替隔離弁を設置している。</p> <p>当社においては、米国同様早期検出及び隔離手順を整備している。また原子炉減圧及び水位制御により、流出量を低減する手段を整備している。</p>
		格納容器バypass防止	<ul style="list-style-type: none"> <li>事象の早期検知、隔離 (既設の計装・設備から兆候を検知) *</li> <li>原子炉減圧、水位制御の手順整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事象の早期検知、隔離 (既設の計装・設備から兆候を検知)</li> <li>原子炉の減圧</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>隔離弁の自動閉止あるいは代替隔離弁の閉止による格納容器隔離の確保</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (手動、自動)</li> <li>バックアップ・スクラム回路 (制御棒挿入、原子炉再循環ポンプ回転数減速)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (手動、自動)</li> <li>バックアップ・スクラム回路 (制御棒挿入、原子炉再循環ポンプ回転数減速)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほう酸注入系 (自動)</li> </ul>	<p>米国においては、既存の計装等から兆候を早期に把握し、隔離する手段を整備している。また欧州においては、格納容器隔離手段として代替隔離弁を設置している。</p> <p>当社においては、米国同様早期検出及び隔離手順を整備している。また原子炉減圧及び水位制御により、流出量を低減する手段を整備している。</p>
まとめ		<p>上記の調査結果より、国外の既設プラントで整備されている対策が、島根原子力発電所2号炉においても整備されていることを確認した。</p>							

※：有効性評価において有効性を評価した対策

T B Wシーケンスの炉心損傷防止対策及び着眼点に基づく評価を踏まえた  
重要事故シーケンスの選定及びT Wシーケンスの纏め方について

1. T B Wシーケンスの炉心損傷防止対策及び着眼点に基づく評価を踏まえた重要事故シーケンスの選定

T B Wシーケンスは、高圧炉心スプレイ冷却系による炉心冷却に成功するが、非常用電源の喪失により崩壊熱除去機能が喪失し、炉心損傷に至るシーケンスである。島根原子力発電所2号炉の運転時レベル1 P R Aでは、T B Wシーケンスは「崩壊熱除去機能喪失 (T W)」の事故シーケンスの一部として整理している。

事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」に分類されるT B Wシーケンス（非常用電源の喪失による崩壊熱除去機能喪失）に対する炉心損傷防止対策、及び着眼点に基づく評価を踏まえた重要事故シーケンスの選定について以下に示す。

(1) T B Wシーケンスの炉心損傷頻度

T B Wシーケンスの炉心損傷頻度を第1表に示す。第1表に示すとおり、T B Wシーケンスは事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」のドミナントシーケンスとはならないが、事故シーケンスグループ別炉心損傷頻度に対して約6%の寄与を持っている。

第1表 T B Wシーケンスの炉心損傷頻度

事故シーケンス		炉心損傷頻度 (/炉年)	事故シーケンス グループに対する 寄与割合 (%)
T W	過渡事象+崩壊熱除去失敗	5.7E-06	73
T B W	外部電源喪失+ 交流電源 (D G-A, B) 失敗	4.4E-07	6
	外部電源喪失+ 交流電源 (D G-A, B) 失敗+ 圧力バウンダリ健全性 (S R V再閉) 失敗	1.3E-09	<0.1
	外部電源喪失+ 直流電源 (区分1, 2) 失敗	6.3E-10	<0.1

(2) 「崩壊熱除去機能喪失」に対応する炉心損傷防止対策

事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」に対応する炉心損傷防止対策については、「残留熱除去系が故障した場合」及び「取水機能が喪失した場合」を想定し、以下の炉心損傷防止対策の有効性を確認している。

- ・残留熱除去系が故障した場合　：格納容器フィルタベント系
- ・取水機能が喪失した場合　　：原子炉補機代替冷却系

このうち、「残留熱除去系が故障した場合」を想定して有効性を確認している格納容器フィルタベント系については、系統構成に必要な電動弁等は常設代替交流電源設備から代替所内電気設備を介して給電可能な設計としており、現場での手動開操作も可能であることから、外部電源及び非常用電源（区分Ⅰ，Ⅱ）が喪失しているTBWシーケンスにおいても有効な対策である。

「取水機能が喪失した場合」を想定して有効性を確認している原子炉補機代替冷却系については、常設代替交流電源設備からの電源供給による非常用母線の受電及び原子炉補機代替冷却系を用いた残留熱除去系による対応の有効性を確認しており、TBWシーケンスにおいても有効な対策である。

さらに、TBWシーケンスについては、常設代替交流電源設備からの電源供給による非常用母線の受電により、原子炉補機代替冷却系を用いずとも、原子炉補機冷却系を用いた残留熱除去系による対応にも期待できる。

(3) 審査ガイド記載の着眼点に基づく評価

TBWシーケンスの審査ガイド記載の着眼点に対する評価について、重要事故シーケンスとして選定したTWシーケンス（過渡事象＋崩壊熱除去失敗）と比較した結果を第2表に示す。また、TBWシーケンスの各着眼点に対する考え方について以下に示す。

a. 共通原因故障，系統間依存性の観点

主要な事故シーケンスのカットセットに共通原因故障が含まれている事故シーケンスを「中」とした。そのうえで交流電源や直流電源が喪失している事故シーケンスでは、電源を必要とする多くの設備が機能喪失することから、「高」とした。

b. 余裕時間の観点

過渡事象（全給水喪失事象及び外部電源喪失）は手動停止，サポート系喪失と比較して事象進展が早いことから「高」とした。

c. 設備容量の観点

LOCA以外の起因事象については、崩壊熱除去に関する設備容量に差異はないと考え「低」とした。

d. 代表性の観点

事故シーケンスグループの中で最も炉心損傷頻度の高い事故シーケンス



(ドミナントシーケンス)を「高」とした。ドミナントシーケンスに対して1%未満の事故シーケンスを「低」とし、「高」と「低」の間の事故シーケンスを「中」とした。

第2表 着眼点に基づく評価

事故シーケンス		対応する主要な炉心損傷防止対策 (下線は有効性を確認する主な対策)	着眼点			
			a	b	c	d
TW	過渡事象+崩壊熱除去失敗	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>S RVの手動操作</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>低圧原子炉代替注水系(常設)</li> <li>格納容器代替スプレイ系(可搬型)</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	中	高	低	高
TBW	外部電源喪失+交流電源(DG-A, B)失敗		高	高	低	中
	外部電源喪失+交流電源(DG-A, B)失敗+圧力バウンダリ健全性(SRV再閉)失敗		高	高	低	低
	外部電源喪失+直流電源(区分1, 2)失敗		高	高	低	低

第2表に示すとおり、TWとTBWを区別した場合、審査ガイドに記載の着眼点の「高」の数はTWの「過渡事象+崩壊熱除去失敗」とTBWの「外部電源喪失+交流電源(DG-A, B)失敗」で同じとなる。

ただし、(2)で示したとおり、有効性を確認する主要な炉心損傷防止対策はTBWシーケンスに対しても有効となっており、「取水機能が喪失した場合」の有効性評価では、全交流動力電源喪失を仮定した評価を行うことでTBWを包絡した評価を行っている。また、崩壊熱除去機能喪失への対策の有効性を確認する観点からは、非常用電源の喪失に伴い崩壊熱除去機能が喪失するTBWシーケンスより、崩壊熱除去機能そのものが機能喪失するTWシーケンスを想定して評価することが適切であると考えられる。

これらのことを考慮すると、崩壊熱除去機能喪失における重要事故シーケンスはTBWシーケンスに対する対策の有効性も確認可能なシーケンスを選定しており、選定した重要事故シーケンスは妥当なものと考えている。

## 2. TWシーケンスの纏め方について

運転時レベル1PRAでは「崩壊熱除去機能喪失(TW)」の事故シーケンスグループの寄与割合が大きいため、「崩壊熱除去機能喪失(TW)」の各事故シーケンスの特徴及び対策の網羅性について以下に整理する。

「崩壊熱除去機能喪失(TW)」に分類される事故シーケンスを第3表、各事故シーケンスの寄与割合を第1図、過渡事象のイベントツリーを第2図に示す。

「崩壊熱除去機能喪失(TW)」の事故シーケンスグループは、原子炉への注水に成功しているが、除熱機能が喪失した事故シーケンスを纏めている(第2図参照)。このため、各事故シーケンスでの除熱機能喪失への対策が有効であれ

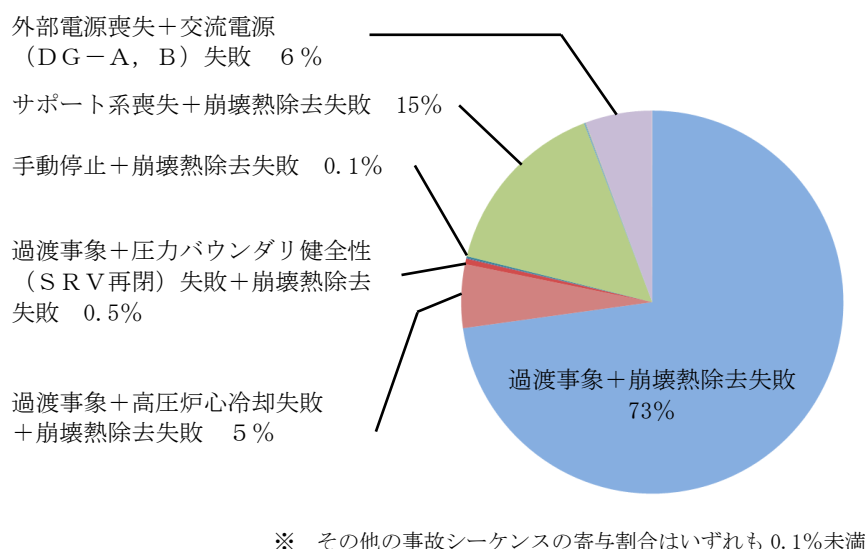
ば、当該事故シーケンスに対応できることとなる。

注水については、第3表に示すとおり、有効性評価で評価している重要事故シーケンス「過渡事象+崩壊熱除去失敗」とその他の各事故シーケンスを比較すると、原子炉への注水に関する機能喪失状態が異なることが分かる。しかしながら、例えば「過渡事象+高圧炉心冷却失敗+崩壊熱除去失敗」は、設計基準事故対処設備（低圧ECCS）による注水が確保できているシーケンスであるなど、事故シーケンスによって原子炉への注水パターンが重要事故シーケンス（原子炉隔離時冷却系により注水）とは多少異なるが、設計基準事故対処設備により注水ができていないことに変わりはない。

除熱については、いずれの事故シーケンスでも、原子炉への注水を確保した上で、重要事故シーケンスでの対策でもある「原子炉補機代替冷却系」又は「格納容器フィルタベント系」により行う点は同様である。

したがって、重要事故シーケンスの評価は、LOCAを起因とするシーケンスを除くすべての事故シーケンスに対する対策の確認となっているものと考えている。

なお、LOCAを起因とする事故シーケンスは、崩壊熱除去機能の代替手段も含めて他の事故シーケンスグループで評価している。また、高圧注水及び低圧注水の両方に失敗した場合は「崩壊熱除去機能喪失」には分類されず、「高圧・低圧注水機能喪失」の事故シーケンスグループによって対策される。



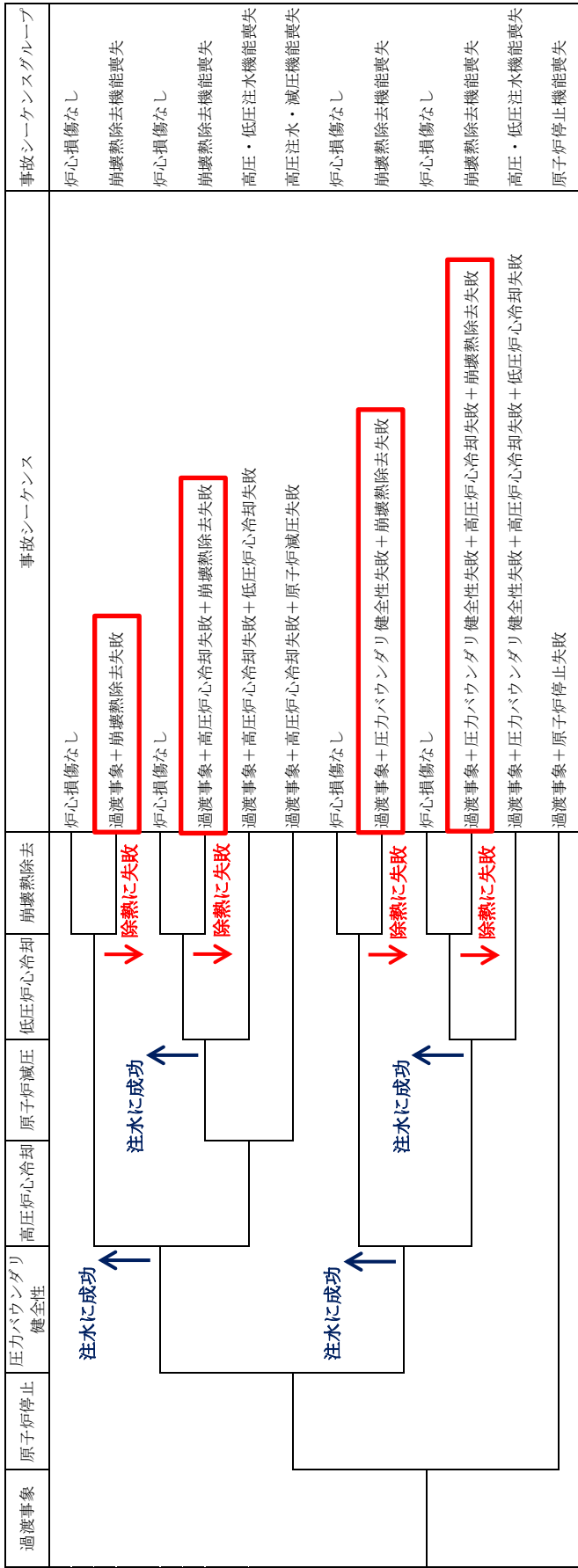
第1図 崩壊熱除去機能喪失の各事故シーケンスの寄与割合

第3表 事故シナリオの分析 (崩壊熱除去機能喪失)

事故シナリオ	喪失した機能
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 過渡事象 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 除熱機能</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 除熱機能</li> <li>• 高圧注水機能 (高圧炉心スプレイ系, 原子炉隔離時冷却系)</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 過渡事象 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 手動停止 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• サポート系喪失 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 崩壊熱除去失敗</li> <li>• 外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗</li> <li>• 外部電源喪失 + 直流電源 (区分1, 2) 失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 除熱機能</li> <li>• 高圧注水機能 (原子炉隔離時冷却系)</li> </ul>

※ LOCAを起因とする以下の事故シナリオについては崩壊熱除去機能の代替手段も含めて他の事故シナリオグループ (LOCA時注水機能喪失) で評価する。

- 冷却材喪失 (小破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗
- 冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗
- 冷却材喪失 (中破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗
- 冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗
- 冷却材喪失 (大破断LOCA) + 崩壊熱除去失敗
- 冷却材喪失 (大破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗



第2図 イベントツリー (過渡事象の例)

内部事象PRAにおける主要なカットセットとFV重要度に照らした  
重大事故等防止対策の対応状況

各事故シーケンスグループに分類される事故シーケンスについて、炉心損傷又は格納容器破損に至る要因をカットセットレベルまで展開し、炉心損傷頻度又は格納容器破損頻度への寄与割合の観点で整理し、主要なカットセットに対する重大事故防止対策の対応状況等を確認した。

また、事故シーケンスグループ別にFussell-Vesely重要度（以下「FV重要度」という。）※を評価し、FV重要度が高い基事象に対する重大事故防止対策の対応状況等を確認した。

※ FV重要度

炉心損傷の発生を仮定した時に、当該事象の発生が寄与している割合を表す指標。特定の機器の故障や人的過誤の発生確率を低減することにより、どれ程の安全性の向上が望めるかを示す指標とみることにもできる。プラントのリスクの低減を図る際に注目すべき機器等の候補を同定する際に有用な指標。

以下に、内部事象運転時レベル1PRA、内部事象運転時レベル1.5PRA、内部事象停止時レベル1PRAそれぞれのカットセットの分析結果及び内部事象運転時レベル1PRA、内部事象停止時レベル1PRAにおいてFV重要度が高い基事象に対する重大事故防止対策の対応状況の確認結果を示す。

## 1. 内部事象運転時レベル1 P R A

### 1.1 主要なカットセットに照らした重大事故等防止対策の対応状況の確認

#### (1) 選定条件

事故シーケンスの種類によっては展開されるカットセットが無数に存在するため、ここでは、各事故シーケンスについて以下の基準を基に主要なカットセットを抽出した。

- ・事故シーケンス\*のうち、上位3位までのカットセット
- ・炉心損傷頻度が $1.0 \times 10^{-8}$ /炉年以上のカットセット

各事故シーケンスにおける主要なカットセット及び炉心損傷防止対策の整備状況等を第1-1表～第1-7表に示す。

※ 事故シーケンスは、同じ事故シーケンスグループに含まれる複数のシーケンスを、シーケンス上の主な特徴に着目して分類したもの。

#### (2) 主要なカットセットの確認結果

第1-1表～第1-7表に示したとおり、一部に炉心損傷防止が困難な事故シーケンスが存在するものの、大半の事故シーケンスに対しては、主要なカットセットレベルまで展開しても、整備された重大事故等防止対策により炉心損傷を防止できることを確認した。

一方、事故シーケンスグループのうち、「LOCA時注水機能喪失」に含まれる一部の事故シーケンスにおいて、故障によっては有効性評価で考慮した対策では対応できない場合があることを確認した。

#### (3) カットセットを踏まえた事故シーケンスへの対策の対応性

今回の分析では、各事故シーケンスグループのうち、事故シーケンスそれぞれについて支配的なカットセットを確認し、対策の有効性を定性的に考察した。支配的なカットセットであっても、事故シーケンスグループ全体の炉心損傷頻度に対しては小さな割合となる場合もある。このため、今回確認したカットセットの炉心損傷頻度の合計が事故シーケンスグループの炉心損傷頻度に占める割合は事故シーケンスグループごとに異なり、約8～100%の幅が生じた。

全炉心損傷頻度から見ると、除熱機能の喪失によって原子炉格納容器が先行破損し、炉心損傷に至る事故シーケンスグループである「崩壊熱除去機能喪失」のシーケンスグループが約100%を占めている。「崩壊熱除去機能喪失」についてはその炉心損傷頻度の約86%のカットセットを確認したことから、全炉心損傷頻度に対しても、約86%のカットセットを確認し、対策の有効性を定性的に確認したものと整理できる。

さらに、「崩壊熱除去機能喪失」への対策としては、残留熱除去系に対して電源等のサポート系を含めて独立であり、遠隔操作のほか手動による開放

も可能である等、残留熱除去系と異なる動作原理を持ち、残留熱除去系と異なる最終ヒートシンクに除熱を行う系統である格納容器フィルタベント系の持つ独立性及び多様性を考慮すると、有効性評価で考慮した対策が有効に機能しない状況は考えにくい。このため、全炉心損傷頻度の約100%を占める「崩壊熱除去機能喪失」に対して、有効性評価で考慮した対策は有効に機能するものと考えられる。

(2)で述べた有効性評価で考慮した対策では対応できない場合について、「LOCA時注水機能喪失」のカットセットを確認すると、人的過誤（原子炉手動減圧操作失敗）と計測制御系の故障（計器や自動起動ロジックの故障）の重畳が抽出されている。全炉心損傷頻度から見た場合、これらのカットセットの頻度は非常に小さな値であるが、これらについては、訓練等により人的過誤の発生可能性の低減に努めるとともに、計測制御系の故障時にも、正常に動作・計測されている他の計器・パラメータによってプラントの異常を検知できるよう訓練等による対応能力の向上に努めていく。

上記のとおり、人的過誤と計測制御系の故障が重畳する非常に頻度の小さな場合において、有効性評価で考慮した対策では対応できない場合が考えられるものの、有効性評価で考慮した対策と設計基準設備の共用部分（注入弁等）の故障を伴うようなカットセットは、支配的なカットセットとしては抽出されていない。有効性評価で考慮した対策は、基本的に設計基準設備に対して多様化された、独立な系統機能の追加であることから、これらの共用部分の故障を伴うカットセットが支配的なカットセットとして抽出されていない以上、有効性評価で考慮した対策は、ほとんどのシーケンスに対して有効であると考えられる。また、全炉心損傷頻度の約100%を占める「崩壊熱除去機能喪失」についても、今回考慮した除熱機能である残留熱除去系に対して、独立かつ多様化された系統である格納容器フィルタベント系が設けられていることから、全炉心損傷頻度のほとんどの割合に対して、有効性評価で考慮した対策が有効なものであると考えられる。

第1-1表 事故シークエンスの分析(カットセットの抽出)結果(1/2)

事故シークエンス グループ	事故シークエンス	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策 有効性
			(/炉年)	事故シークエンス への寄与割合 (%)		
TQUV (高圧・低圧注水 機能喪失) (3.3E-09/炉年)	過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (3.0E-09/炉年)	非隔離事象 + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共通原因機能 喪失 + HPSWポンプ起動失敗	2.1E-10	7.0	6.4	○
		非隔離事象 + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共通原因機能 喪失 + HPCW/HPSWメンテナンス	1.9E-10	6.3	5.8	○
	過渡事象 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV再開)失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS)失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (3.4E-11/炉年)	非隔離事象 + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共通原因機能 喪失 + HPCSメンテナンス	1.2E-10	4.0	3.6	○
		逃がし安全弁誤開放 + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共通 原因機能喪失 + HPSWポンプ起動失敗	1.2E-12	3.5	<0.1	○
	手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (4.7E-13/炉年)	逃がし安全弁誤開放 + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共通 原因機能喪失 + HPCW/HPSWメンテナンス	1.1E-12	3.2	<0.1	○
		逃がし安全弁誤開放 + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共通 原因機能喪失 + HPCSメンテナンス	6.9E-13	2.0	<0.1	○
	手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (4.7E-13/炉年)	手動停止 (通常停止) + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共 通原因機能喪失 + HPSWポンプ起動失敗 + 2起動変圧器機能喪失	1.4E-14	3.0	<0.1	○
		手動停止 (通常停止) + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共 通原因機能喪失 + HPSWポンプ起動失敗 + 動力変圧器2C機能喪失	1.4E-14	3.0	<0.1	○
		手動停止 (通常停止) + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共 通原因機能喪失 + HPCW/HPSWメンテナンス + 2起動変圧器機能 喪失	1.3E-14	2.8	<0.1	○
		手動停止 (通常停止) + S1, S2水位トランスミッタLX298-1 共 通原因機能喪失 + HPCW/HPSWメンテナンス + 動力変圧器2C機 能喪失	1.3E-14	2.8	<0.1	○
高圧原子炉代替注水系 (常設)		○				
低圧原子炉代替注水系 (常設)		○				
SRVの手動操作	○					
格納容器代替スプレイ系 (可搬 型)	○					
格納容器フィルタベント系	○					
常設代替交流電源設備	○					



第1-1表 事故シナリオの抽出結果(2/2)

事故シナリオグループ	事故シナリオ	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性	
			(/炉年)	事故シナリオへの寄与割合(%)			
事故シナリオグループ (高圧・低圧注水機能喪失) (3.3E-09/炉年)	手動停止 +圧力バウナダリ健全性 (SRV再開)失敗 +高圧炉心冷却 (HPCS)失敗 +低圧炉心冷却失敗 (1.5E-13/炉年)	手動停止(通常停止)+非常用DG-A, B共通原因継続運転失敗+非常用DG-H継続運転失敗+外部電源喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗	1.3E-14	<0.1	<ul style="list-style-type: none"> <li>低圧原子炉代替注水系(常設)</li> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>格納容器代替スプレイ系(可搬型)</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○	
		手動停止(通常停止)+非常用DG-A, B共通原因継続運転失敗+非常用DG-H継続運転失敗+外部電源喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗	8.9E-15	<0.1			
		手動停止(通常停止)+非常用DG-A, B共通原因起動失敗+非常用DG-H継続運転失敗+外部電源喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗	8.9E-15	<0.1			
		直流母線A喪失+S2水位トランスミスミッタLX298-1D機能喪失+HP.S.Wポンプ起動失敗	4.1E-12	0.1			
		直流母線A喪失+S2水位トランスミスミッタLX298-1B機能喪失+HP.S.Wポンプ起動失敗	4.1E-12	0.1			
		直流母線B喪失+S1水位トランスミスミッタLX298-1A機能喪失+HP.S.Wポンプ起動失敗	4.1E-12	0.1			
	サポーター系喪失 +圧力バウナダリ健全性 (SRV再開)失敗 +高圧炉心冷却 (HPCS)失敗 +低圧炉心冷却失敗 (4.0E-12/炉年)	直流母線B喪失+S1水位トランスミスミッタLX298-1C機能喪失+HP.S.Wポンプ起動失敗	4.1E-12	1.8			0.1
		補機冷却系A喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+HP.S.Wポンプ起動失敗+S2水位トランスミスミッタLX298-1D機能喪失	3.1E-14	0.8			<0.1
		補機冷却系A喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+HP.S.Wポンプ起動失敗+S2水位トランスミスミッタLX298-1B機能喪失	3.1E-14	0.8			<0.1
		補機冷却系B喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+HP.S.Wポンプ起動失敗+S1水位トランスミスミッタLX298-1C機能喪失	3.1E-14	0.8			<0.1
		補機冷却系B喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+HP.S.Wポンプ起動失敗+S1水位トランスミスミッタLX298-1A機能喪失	3.1E-14	0.8			<0.1

【主要なカットセットに対する検討】(高圧・低圧注水機能喪失(TQUV))

- 第1-1表より、事故シーケンスグループ「高圧・低圧注水機能喪失」については炉心損傷頻度の約16%のカットセットを確認した。なお、「高圧・低圧注水機能喪失」は全炉心損傷頻度に占める炉心損傷頻度の割合が0.1%未満であり、全炉心損傷頻度に対して寄与割合の低い事故シーケンスグループである。
- 事故シーケンスのうち、「過渡事象+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗」, 「過渡事象+圧力バウンダリ健全性(SRV再閉)失敗+高圧炉心冷却(HPCS)失敗+低圧炉心冷却失敗」, 「手動停止+圧力バウンダリ健全性(SRV再閉)失敗+高圧炉心冷却(HPCS)失敗+低圧炉心冷却失敗」, 「サポート系喪失+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗」, 「サポート系喪失+圧力バウンダリ健全性(SRV再閉)失敗+高圧炉心冷却(HPCS)失敗+低圧炉心冷却失敗」では、高圧・低圧注水機能が喪失する要因として、ECCSの起動信号の機能喪失と合わせて、高圧炉心スプレイ系又は高圧炉心スプレイ補機冷却系の機能喪失が挙げられている。炉心損傷防止対策としては、機能喪失したECCSの代替となる、低圧原子炉代替注水系(常設)による注水が有効である。
- 「手動停止+圧力バウンダリ健全性(SRV再閉)失敗+高圧炉心冷却(HPCS)失敗+低圧炉心冷却失敗」については、非常用ディーゼル発電機の故障が挙げられている。炉心損傷防止対策としては、機能喪失したECCSの代替となる、低圧原子炉代替注水系(常設)による注水が有効である。
- いずれの事故シーケンスについても、注水による炉心冷却を確保した後は、原子炉補機代替冷却系又は格納容器フィルタベント系を用いて除熱を行う。なお、上位のカットセットとしては抽出されていないが、残留熱除去系が機能喪失している場合には、格納容器フィルタベント系を用いて除熱を行う。

第1-2表 事故シナリオの分析(カットセットの抽出)結果

事故シナリオグループ	事故シナリオ	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性
			(/炉年)	事故シナリオへの寄与割合(%)		
TQX (高圧注水・減圧機能喪失) (5.1E-09/炉年)	過渡事象 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 (4.0E-09/炉年)	非隔離事象+RCICトラス水入口弁開操作失敗+HPCS水源切替手動操作失敗+CSIT閉塞+手動減圧操作失敗	1.4E-10	3.5	2.7	○
		非隔離事象+RCICポンプ起動失敗+HPSWポンプ起動失敗+手動減圧操作失敗	9.6E-11	2.4	1.9	○
		非隔離事象+HPCW/HPSWメンテナンス+RCICポンプ起動失敗+手動減圧操作失敗	8.8E-11	2.2	1.7	○
	手動停止 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 (5.7E-13/炉年)	手動停止(通常停止)+RCICトラス水入口弁開操作失敗+HPCS水源切替手動操作失敗+CSIT閉塞+動力変圧器2C機能喪失+手動減圧操作失敗	9.1E-15	1.6	<0.1	<ul style="list-style-type: none"> <li>代替自動減圧機能</li> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>残留熱除去系(サブレーション・プールの冷却モード)</li> </ul>
		手動停止(通常停止)+RCICトラス水入口弁開操作失敗+HPCS水源切替手動操作失敗+CSIT閉塞+2起動変圧器機能喪失+手動減圧操作失敗	9.1E-15	1.6	<0.1	
		手動停止(通常停止)+RCICポンプ起動失敗+HPSWポンプ起動失敗+2起動変圧器機能喪失+手動減圧操作失敗	6.3E-15	1.1	<0.1	
	サボート系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 (1.1E-09/炉年)	直流母線B喪失+HPSWポンプ起動失敗+手動減圧操作失敗	1.1E-10	10	2.2	○
		直流母線B喪失+HPCW/HPSWメンテナンス+手動減圧操作失敗	9.8E-11	8.9	1.9	○
		直流母線B喪失+HPCSメンテナンス+手動減圧操作失敗	5.9E-11	5.4	1.2	○

【主要なカットセットに対する検討】(高圧注水・減圧機能喪失(TQUX))

- 第1-2表より、事故シーケンスグループ「高圧注水・減圧機能喪失」については炉心損傷頻度の約12%のカットセットを確認した。なお、「高圧注水・減圧機能喪失」は全炉心損傷頻度に占める炉心損傷頻度の割合が0.1%未満であり、全炉心損傷頻度に対して寄与割合の低い事故シーケンスグループである。
- いずれの事故シーケンスからも、高圧注水系の機器故障又は人的過誤、手動減圧操作失敗の人的過誤が抽出されている。これらのカットセットに対しては、代替自動減圧機能による低圧状態への移行により、注水による炉心冷却を確保できる。
- 注水による炉心冷却の確保に成功した後は、残留熱除去系を用いて除熱を行う。
- 全炉心損傷頻度から見た場合、炉心損傷を防止できないカットセットの頻度は非常に小さな値に抑えられていると考える。カットセットとして抽出されている手動減圧操作失敗については、訓練等によりその発生可能性の低減に努めていく。

第1-3表 事故シークエンスの分析(カットセットの抽出)結果(1/7)

事故シークエンス グループ	事故シークエンス	主要なカットセット	(／炉年)	炉心損傷頻度		主な対策	対策 有効性
				事故シークエンス への寄与 割合(%)	事故シークエンス グループへの寄 与割合(%)		
TW (崩壊熱除去 機能喪失) (6.2E-06/炉年)	過渡事象 +崩壊熱除去失敗 (4.5E-06/炉年)	非隔離事象+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	3.6E-07	8.0	5.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>残留熱除去系(サブレンジオン・プール水冷却モード)</li> <li>低圧原子炉代替注水系(常設)</li> <li>格納容器代替スプレイス(可搬型)</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○
		非隔離事象+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因閉失敗	3.6E-07	8.0	5.8		
		非隔離事象+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	3.6E-07	8.0	5.8		
		非隔離事象+RHRポンプA, B共通原因起動失敗	3.0E-07	6.7	4.8		
		非隔離事象+RHRポンプ室送風機A, B共通原因起動失敗	2.8E-07	6.2	4.5		
		RPS誤動作等+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	1.7E-07	3.8	2.7		
		RPS誤動作等+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因閉失敗	1.7E-07	3.8	2.7		
		RPS誤動作等+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	1.7E-07	3.8	2.7		
		非隔離事象+RHRポンプA, B共通原因連続運転失敗	1.6E-07	3.6	2.6		
		非隔離事象+RHRポンプ室送風機共通原因起動失敗	1.5E-07	3.3	2.4		
		RPS誤動作等+RHRポンプA, B共通原因起動失敗	1.4E-07	3.1	2.3		
		RPS誤動作等+RHRポンプ室送風機A, B共通原因起動失敗	1.3E-07	2.9	2.1		
		非隔離事象+RHRポンプ室送風機A, B共通原因連続運転失敗	9.0E-08	2.0	1.5		
		非隔離事象+RCWポンプ共通原因連続運転失敗	8.3E-08	1.8	1.3		
		RPS誤動作等+RHRポンプA, B共通原因連続運転失敗	7.4E-08	1.6	1.2		
		RPS誤動作等+RHRポンプ室送風機共通原因起動失敗	6.8E-08	1.5	1.1		
		非隔離事象+RSWポンプ共通原因連続運転失敗	6.0E-08	1.3	1.0		
		隔離事象+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	5.6E-08	1.2	0.9		
		隔離事象+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	5.6E-08	1.2	0.9		
		隔離事象+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因閉失敗	5.6E-08	1.2	0.9		
		水位低下事象+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	5.6E-08	1.2	0.9		
		水位低下事象+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因閉失敗	5.6E-08	1.2	0.9		
		水位低下事象+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	5.6E-08	1.2	0.9		
		非隔離事象+RHRポンプ出口逆止弁V222-1A, B共通原因閉失敗	5.3E-08	1.2	0.9		
		隔離事象+RHRポンプA, B共通原因起動失敗	4.7E-08	1.0	0.8		
		水位低下事象+RHRポンプA, B共通原因起動失敗	4.7E-08	1.0	0.8		
非隔離事象+空調機送風機共通原因連続運転失敗	4.7E-08	1.0	0.8				
非隔離事象+RHRポンプ室送風機共通原因連続運転失敗	4.7E-08	1.0	0.8				
非隔離事象+空調機排風機共通原因連続運転失敗	4.7E-08	1.0	0.8				
水位低下事象+RHRポンプ室送風機A, B共通原因起動失敗	4.4E-08	1.0	0.7				
隔離事象+RHRポンプ室送風機A, B共通原因起動失敗	4.4E-08	1.0	0.7				
RPS誤動作等+RHRポンプ室送風機A, B共通原因連続運転失敗	4.2E-08	0.9	0.7				
RPS誤動作等+RCWポンプ共通原因連続運転失敗	3.8E-08	0.8	0.6				
RPS誤動作等+RSWポンプ共通原因連続運転失敗	2.8E-08	0.6	0.5				
隔離事象+RHRポンプA, B共通原因連続運転失敗	2.5E-08	0.6	0.4				

第1-3表 事故シークエンスの分析(カットセットの結果(2/7))

事故シークエンスグループ	事故シークエンス	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性	
			事故シークエンスへの寄与割合 (%)	事故シークエンスグループへの寄与割合 (%)			
TW (崩壊熱除去機能喪失) (6.2E-06/炉年)	過渡事象 +崩壊熱除去失敗 (4.5E-06/炉年)	水位低下事象+RHRポンプA, B共通原因継続運転失敗 RPS誤動作等+RHRポンプ出口逆弁V222-1A, B共通原因閉失敗 水位低下事象+RHRポンプ室送風機共通原因起動失敗 隔離事象+RHRポンプ室送風機共通原因起動失敗 RPS誤動作等+空調機排風機共通原因継続運転失敗 RPS誤動作等+空調機送風機共通原因継続運転失敗 RPS誤動作等+RHRポンプ室送風機共通原因継続運転失敗 全給水喪失+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗 全給水喪失+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因閉失敗 全給水喪失+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗 全給水喪失+RHRポンプA, B共通原因起動失敗 全給水喪失+RHRポンプ室送風機A, B共通原因起動失敗 水位低下事象+RHRポンプ室送風機A, B共通原因継続運転失敗 隔離事象+RHRポンプ室送風機A, B共通原因継続運転失敗 水位低下事象+RCWポンプ共通原因継続運転失敗 隔離事象+RCWポンプ共通原因継続運転失敗 非隔離事象+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗+RCICトールラス水入口弁開操作失敗+HPCS水源切替手動操作失敗+CST閉塞 非隔離事象+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗+RCICトールラス水入口弁開操作失敗+HPCS水源切替手動操作失敗+CST閉塞 非隔離事象+RHR注入弁MV222-5A, B共通原因作動失敗+RCICトールラス水入口弁開操作失敗+HPCS水源切替手動操作失敗+CST閉塞 非隔離事象+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗+RCICトールラス水入口弁開操作失敗+HPCS水源切替手動操作失敗+CST閉塞 逃がし安全弁誤開放+RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗 逃がし安全弁誤開放+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗 逃がし安全弁誤開放+RHR注入弁MV222-5A, B共通原因作動失敗 逃がし安全弁誤開放+HPSWポンプ起動失敗+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗 逃がし安全弁誤開放+HPSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗 逃がし安全弁誤開放+HPSWポンプ起動失敗+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗 逃がし安全弁誤開放+HPSWポンプ起動失敗+RHR注入弁MV222-5A, B共通原因作動失敗	2.5E-08	0.6	0.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器フィルタータベント系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>S RVの手動操作</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>残留熱除去系(サブレンジオン・プールの水冷却モード)</li> <li>低圧原子炉代替注水系(常設)</li> <li>格納容器代替スプレイス(可搬型)</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○
			2.5E-08	0.6	0.4		
			2.3E-08	0.5	0.4		
			2.3E-08	0.5	0.4		
			2.2E-08	0.5	0.4		
			2.2E-08	0.5	0.4		
			2.2E-08	0.5	0.4		
			2.1E-08	0.5	0.3		
			2.1E-08	0.5	0.3		
			2.1E-08	0.5	0.3		
			1.8E-08	0.4	0.3		
			1.7E-08	0.4	0.3		
			1.4E-08	0.3	0.2		
1.4E-08	0.3	0.2					
1.3E-08	0.3	0.2					
1.3E-08	0.3	0.2					
7.8E-14	0.5	<0.1					
7.8E-14	0.5	<0.1					
7.8E-14	0.5	<0.1					
7.8E-14	0.5	<0.1					
2.1E-09	6.4	<0.1					
2.1E-09	6.4	<0.1					
2.1E-09	6.4	<0.1					
2.1E-09	6.4	<0.1					
2.1E-09	6.4	<0.1					
2.2E-13	0.6	<0.1					
2.2E-13	0.6	<0.1					
2.2E-13	0.6	<0.1					
2.2E-13	0.6	<0.1					

第1-3表 事故シークエンスの分析(カセットセットの抽出)結果(3/7)

事故シークエンス グループ	事故シークエンス	主要なカセットセット	炉心損傷頻度			主な対策	対策 有効性
			(/炉年)	事故シークエンス への寄与 割合(%)	事故シークエ ンス グループへの 寄与割合 (%)		
TW (崩壊熱除去 機能喪失) (6.2E-06/炉年)	外部電源喪失 +交流電源 (DG-A, B)失敗 (4.4E-07/炉年)	外部電源喪失+非常用DG-A, B共通原因継続運転失敗	1.8E-07	41	2.9	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>S R Vの手動操作</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モ ード)</li> <li>残留熱除去系(サブレンシ ョン・プールの水冷却モー ド)</li> <li>低圧原子炉代替注水系(常 設)</li> <li>格納容器代替スプレイ系 (可搬型)</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○
		外部電源喪失+非常用DG-A, B共通原因起動失敗	1.2E-07	27	1.9		
		外部電源喪失+非常用DG-A継続運転失敗+非常用DG-B継続運転失敗	2.0E-08	4.5	0.3		
		外部電源喪失+非常用DG-A継続運転失敗+非常用DG-B起動失敗	1.4E-08	3.2	0.2		
		外部電源喪失+非常用DG-A起動失敗+非常用DG-B継続運転失敗	1.4E-08	3.2	0.2		
		外部電源喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+非常用DG-A, B共通原因継続運転 失敗	5.4E-10	42	<0.1		
	外部電源喪失 +交流電源 (DG-A, B)失敗 +圧力バウンダリ健全性 (S R V再閉)失敗 (1.3E-09/炉年)	外部電源喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+非常用DG-A, B共通原因起動失敗	3.7E-10	28	<0.1	○	
		外部電源喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+非常用DG-A継続運転失敗+非常用 DG-B継続運転失敗	5.9E-11	4.5	<0.1		
		外部電源喪失+蓄電池(A, B)共通原因機能喪失	6.3E-10	100	<0.1		
		外部電源喪失+逃がし安全弁再閉鎖失敗+蓄電池(A, B)共通原因機能喪失	1.9E-12	0.3	<0.1		

第1-3表 事故シークエンスの分析(カットセットの抽出)結果(4/7)

事故シークエンスグループ	事故シークエンス	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性
			(/炉年)	事故シークエンスへの寄与割合(%)		
T W (崩壊熱除去機能喪失) (6.2E-06 /炉年)	手動停止 +崩壊熱除去失敗 (1.2E-08 /炉年)	手動停止(通常停止)+非常用D G-A, B 共通原因継続運転失敗+外部電源喪失	1.9E-09	16	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>S R Vの手動操作</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>残留熱除去系(サブレーション・プール水冷却モード)</li> <li>低圧原子炉代替注水系(常設)</li> <li>格納容器代替スプレイ系(可搬型)</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○
		手動停止(通常停止)+非常用D G-A, B 共通原因起動失敗+外部電源喪失	1.3E-09	11		○
		手動停止(通常停止)+R C W/R S W-Bメメントナンス+動力変圧器2 C機能喪失	7.5E-10	6.3		○
	手動停止 +高圧炉心冷却失敗 +崩壊熱除去失敗 (1.1E-14 /炉年)	手動停止(通常停止)+R C I C トーラス水入口弁開操作失敗+H P C S 水源切替手動操作失敗+R H R-Bメメントナンス	1.4E-16	1.3		○
		手動停止(通常停止)+R C I C トーラス水入口弁開操作失敗+H P C S 水源切替手動操作失敗+R H R-Bメメントナンス	1.1E-16	1.0		○
		手動停止(通常停止)+R C I C トーラス水入口弁開操作失敗+H P C S 水源切替手動操作失敗+R H R-Bメメントナンス	1.0E-16	0.9		○
	手動停止 +圧力バウンダリ健全性(S R V 再開)失敗 +崩壊熱除去失敗 (3.1E-11 /炉年)	手動停止(通常停止)+逃がし安全弁再開失敗+非常用D G-A, B 共通原因継続運転失敗+外部電源喪失	5.7E-12	18		○
		手動停止(通常停止)+逃がし安全弁再開失敗+非常用D G-A, B 共通原因起動失敗+外部電源喪失	3.9E-12	13		○
		手動停止(通常停止)+逃がし安全弁再開失敗+R C W/R S W-Bメメントナンス+動力変圧器2 C機能喪失	2.3E-12	7.4		○
	手動停止 +圧力バウンダリ健全性(S R V 再開)失敗 +高圧炉心冷却(H P C S)失敗 +崩壊熱除去失敗 (1.7E-14 /炉年)	手動停止(通常停止)+H P S Wポンプ起動失敗+逃がし安全弁再開失敗+動力変圧器2 C機能喪失+R H R-Bメメントナンス	2.0E-16	1.2		○
		手動停止(通常停止)+H P C W/H P S Wメメントナンス+逃がし安全弁再開失敗+動力変圧器2 C機能喪失+R H R-Bメメントナンス	1.9E-16	1.1		○
		手動停止(通常停止)+2 起動変圧器機能喪失+非常用D G-H継続運転失敗+逃がし安全弁再開失敗+R C W R H R 熱交換器出口弁M V 2 1 4-7 A, B 共通原因作動失敗	1.6E-16	0.9		○
手動停止(通常停止)+2 起動変圧器機能喪失+非常用D G-H継続運転失敗+逃がし安全弁再開失敗+R H R 熱交換器バイパス弁M V 2 2 2-2 A, B 共通原因作動失敗		1.6E-16	0.9	○		
手動停止(通常停止)+2 起動変圧器機能喪失+非常用D G-H継続運転失敗+逃がし安全弁再開失敗+R H R 注入弁M V 2 2 2-5 A, B 共通原因作動失敗		1.6E-16	0.9	○		
手動停止(通常停止)+2 起動変圧器機能喪失+非常用D G-H継続運転失敗+逃がし安全弁再開失敗+R H R ミニマムフロー弁M V 2 2 2-1 7 A, B 共通原因作動失敗		1.6E-16	0.9	○		



第1-3表 事故シークエンスの分析(カットセット)の結果(5/7)

事故シークエンス グループ	事故シークエンス	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策 有効性
			(/炉年)	事故シークエンス への寄与合 (%)		
TW (崩壊熱除去 機能喪失) (6.2E-06/炉年)	サポート系喪失 +崩壊熱除去失敗 (1.2E-06/炉年)	補機冷却系A喪失+RCW/RSW-Bメンテナンス	4.8E-08	4.0	0.8	○
		補機冷却系A喪失+RHR-Bメンテナンス	4.1E-08	3.4	0.7	
		補機冷却系B喪失+RHR-Aメンテナンス	4.1E-08	3.4	0.7	
		補機冷却系B喪失+RHR-Aポンプ起動失敗	3.2E-08	2.7	0.5	
		補機冷却系A喪失+RHR-Bポンプ起動失敗	3.2E-08	2.7	0.5	
		補機冷却系B喪失+RHR-Aポンプ室冷却機送風機起動失敗	3.0E-08	2.5	0.5	
		補機冷却系A喪失+RHR-Bポンプ室冷却機送風機起動失敗	3.0E-08	2.5	0.5	
		直流母線A喪失+RCW/RSW-Bメンテナンス	1.9E-08	1.6	0.3	
		補機冷却系A喪失+RHR-Bポンプ室冷却機熱交換器入口弁V45B開け忘れ	1.8E-08	1.5	0.3	
		補機冷却系B喪失+RHR-Aポンプ室冷却機熱交換器入口弁V45A開け忘れ	1.8E-08	1.5	0.3	
		補機冷却系A喪失+RHR-Bポンプ室冷却機熱交換器出口弁V46B開け忘れ	1.8E-08	1.5	0.3	
		補機冷却系B喪失+RHR-Aポンプ室冷却機熱交換器出口弁V46A開け忘れ	1.8E-08	1.5	0.3	
		補機冷却系A喪失+RHR-Aポンプ室冷却機熱交換器出口弁V46A開け忘れ	1.7E-08	1.4	0.3	
		補機冷却系B喪失+RHR-Bポンプ室冷却機熱交換器出口弁V46A開け忘れ	1.7E-08	1.4	0.3	
		直流母線B喪失+RHR-Aメンテナンス	1.6E-08	1.3	0.3	
		直流母線A喪失+RHR-Bメンテナンス	1.6E-08	1.3	0.3	
		直流母線B喪失+RHR-Aポンプ起動失敗	1.3E-08	1.1	0.2	
		直流母線A喪失+RHR-Bポンプ起動失敗	1.3E-08	1.1	0.2	
		直流母線B喪失+RHR-Aポンプ室冷却機送風機起動失敗	1.2E-08	1.0	0.2	
		直流母線A喪失+RHR-Bポンプ室冷却機送風機起動失敗	1.2E-08	1.0	0.2	
		補機冷却系B喪失+RHR-A熱交換器バイパス弁MV222-2A閉失敗	1.1E-08	0.9	0.2	
		補機冷却系A喪失+RCW-A RHR熱交換器出口弁MV214-7A閉失敗	1.1E-08	0.9	0.2	
		補機冷却系A喪失+RHR-B熱交換器バイパス弁MV222-2B閉失敗	1.1E-08	0.9	0.2	
		補機冷却系A喪失+RHR-B熱交換器バイパス弁MV222-17B作動失敗	1.1E-08	0.9	0.2	
		補機冷却系B喪失+RCW-B RHR熱交換器出口弁MV214-7B閉失敗	1.1E-08	0.9	0.2	
		補機冷却系A喪失+RHR-Aミニマムフロー弁MV222-17A作動失敗	1.1E-08	0.9	0.2	
		補機冷却系B喪失+RHR-B熱交換器バイパス弁MV222-2B閉制御故障	1.1E-08	0.9	0.2	
補機冷却系A喪失+RCW-B RHR熱交換器出口弁MV214-7B閉制御故障	1.1E-08	0.9	0.2			
補機冷却系A喪失+RHR-Aミニマムフロー弁MV222-17A制御部故障	1.1E-08	0.9	0.2			
補機冷却系A喪失+RHR-Bポンプ室冷却機送風機制御部故障	1.1E-08	0.9	0.2			
補機冷却系B喪失+RHR-A熱交換器バイパス弁MV222-2A閉制御故障	1.1E-08	0.9	0.2			
補機冷却系B喪失+RCW-A RHR熱交換器出口弁MV214-7A閉制御故障	1.1E-08	0.9	0.2			

第1-3表 事故シナリオの分析(カットセットの抽出)結果(6/7)

事故シナリオグループ	事故シナリオ	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性
			(/炉年)	事故シナリオへの寄与割合(%)		
T W (崩壊熱除去機能喪失) (6.2E-06/炉年)	サポーター系喪失 + 崩壊熱除去失敗 (1.2E-06/炉年)	補機冷却系B喪失+RHR-Aポンプ制御部故障 補機冷却系A喪失+RHR-Bミニマムフロー弁MV222-17B制御部故障 補機冷却系A喪失+RHR-Bポンプ制御部故障 補機冷却系B喪失+RHR-Aポンプ室冷却機送風機制御部故障	1.1E-08 1.1E-08 1.1E-08 1.1E-08	0.9 0.9 0.9 0.9	0.2 0.2 0.2 0.2	○ ○ ○ ○
	サポーター系喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 崩壊熱除去失敗 (1.4E-10/炉年)	交流母線C喪失+RCW/R SW-Bメンテナンス 直流母線B喪失+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Aメンテナンス 直流母線B喪失+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Aポンプ起動失敗 直流母線B喪失+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Aポンプ室冷却機送風機起動失敗	1.0E-08 1.7E-12 1.7E-12 1.3E-12	0.8 1.2 1.2 0.9	0.2 <0.1 <0.1 <0.1	○ ○ ○ ○
	サポーター系喪失 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV再開)失敗 + 崩壊熱除去失敗 (3.8E-09/炉年)	補機冷却系A喪失+逃がし安全弁再開失敗+RCW/R SW-Bメンテナンス 補機冷却系A喪失+逃がし安全弁再開失敗+RHR-Bメンテナンス 補機冷却系B喪失+逃がし安全弁再開失敗+RHR-Aメンテナンス 補機冷却系B喪失+逃がし安全弁再開失敗+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Aメンテナンス	1.4E-10 1.2E-10 1.2E-10 1.3E-14	3.7 3.2 3.2 0.4	<0.1 <0.1 <0.1 <0.1	○ ○ ○ ○
	サポーター系喪失 + 圧力バウナダリ健全性 (SRV再開)失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS)失敗 + 崩壊熱除去失敗 (3.7E-12/炉年)	補機冷却系A喪失+逃がし安全弁再開失敗+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Aメンテナンス 補機冷却系B喪失+逃がし安全弁再開失敗+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Bメンテナンス 補機冷却系A喪失+逃がし安全弁再開失敗 補機冷却系B喪失+逃がし安全弁再開失敗+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Aポンプ起動失敗	9.8E-15 9.8E-15	0.4 0.3	<0.1 <0.1	○ ○
		補機冷却系A喪失+逃がし安全弁再開失敗+HPSWポンプ起動失敗+RHR-Bポンプ起動失敗	9.8E-15	0.3	<0.1	○

第1-3表 事故シークエンスの分析(カセットセットの抽出)結果(7/7)

事故シークエンス グループ	事故シークエンス	主要なカセットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策 有効性	
			(/炉年)	事故シークエンスへの寄与割合(%)			
TW (崩壊熱除去 機能喪失) (6.2E-06/炉年)	冷却材喪失 (小破断LOCA) +崩壊熱除去失敗 (5.4E-09/炉年)	小破断LOCA+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	6.8E-10	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器フィルタタベント系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>残留熱除去系(サブレインジョン・プール水冷却モード)</li> <li>低圧原子炉代替注水系(常設)</li> <li>格納容器代替スプレイ系(可搬型)</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○	
		小破断LOCA+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗	6.8E-10	13			
		小破断LOCA+RHR注入弁MV222-5A, B共通原因作動失敗	6.8E-10	13			
		小破断LOCA+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	6.8E-10	13			
		小破断LOCA+RHC水源切替失敗+HPSSWポンプ起動失敗+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗	1.7E-16	0.5			
		小破断LOCA+RHC水源切替失敗+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	1.7E-16	0.5			
	冷却材喪失 (小破断LOCA) +高圧炉心冷却失敗 +崩壊熱除去失敗 (3.1E-14/炉年)	小破断LOCA+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.5E-10	13			○
		中破断LOCA+RHR注入弁MV222-5A, B共通原因作動失敗	4.5E-10	13			
		中破断LOCA+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.5E-10	13			
		中破断LOCA+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗	4.5E-10	13			
		中破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.6E-14	1.2			
		中破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.6E-14	1.2			
冷却材喪失 (中破断LOCA) +崩壊熱除去失敗 (3.6E-09/炉年)	中破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.6E-14	1.2	○			
	中破断LOCA+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2				
	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2				
冷却材喪失 (大破断LOCA) +崩壊熱除去失敗 (3.6E-10/炉年)	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器バイパス弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2		○		
	大破断LOCA+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+RHR注入弁MV222-5A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2				
	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2				
冷却材喪失 (大破断LOCA) +高圧炉心冷却失敗 +崩壊熱除去失敗 (3.7E-13/炉年)	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器バイパス弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2	○			
	大破断LOCA+RHR熱交換器バイパス弁MV222-2A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+RHR注入弁MV222-5A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.5E-11	13				
	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RHRミニマムフロー弁MV222-17A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2				
	大破断LOCA+HPSSWポンプ起動失敗+RCW RHR熱交換器出口弁MV214-7A, B共通原因作動失敗	4.6E-15	1.2				

【主要なカットセットに対する検討】（崩壊熱除去機能喪失（TW））

- 第1-3表より、事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」については約86%のカットセットを確認した。なお、「崩壊熱除去機能喪失」は全炉心損傷頻度に占める炉心損傷頻度の割合が約100%であり、全炉心損傷頻度のほとんどを占める事故シーケンスグループである。
- 事故シーケンスのカットセットからは、残留熱除去系、原子炉補機冷却系又は原子炉補機海水系の起動又は継続運転失敗の共通原因故障が抽出されている。これらの基事象に対しては、原子炉補機代替冷却系による海水への熱除去機能の代替や、格納容器フィルタベント系による大気への除熱により炉心損傷（格納容器先行破損）を防止できる。
- 事故シーケンスのうち、「過渡事象+崩壊熱除去失敗」、「過渡事象+圧力バウンダリ健全性（SRV再閉）失敗+崩壊熱除去失敗」では、残留熱除去系又は原子炉補機冷却系の電動弁等の故障が抽出されている。これらの基事象に対しては、原子炉補機代替冷却系又は格納容器フィルタベント系による大気への除熱により炉心損傷（格納容器先行破損）を防止できる。
- 事故シーケンスのうち、「手動停止+崩壊熱除去失敗」、「手動停止+圧力バウンダリ健全性（SRV再閉）失敗+崩壊熱除去失敗」、「外部電源喪失+交流電源（DG-A, B）失敗」、「外部電源喪失+交流電源（DG-A, B）失敗+圧力バウンダリ健全性（SRV再閉）失敗」では、使命時間中の外部電源喪失等、電源喪失により炉心損傷（格納容器先行破損）に至るカットセットが抽出されている。このカットセットに対しては、常設代替交流電源設備により電源を確保し、原子炉補機代替冷却系又は格納容器フィルタベント系による除熱を行うことにより炉心損傷（格納容器先行破損）を防止できる。また、「外部電源喪失+直流電源（区分1, 2）失敗」については、常設代替直流電源設備の対策により炉心損傷を防止できる。
- 事故シーケンスのうち、「サポート系+崩壊熱除去失敗」、「サポート系+圧力バウンダリ健全性（SRV）失敗+崩壊熱除去失敗」では、起因事象で喪失していない原子炉補機冷却系又は原子炉補機海水系のメンテナンス又はポンプ故障等のカットセットが抽出されている。これらカットセットに対しては、原子炉補機代替冷却系又は格納容器フィルタベント系による大気への除熱により炉心損傷（格納容器先行破損）を防止できる。
- 事故シーケンスグループ「崩壊熱除去機能喪失」に対する主要な対策と考えられる格納容器フィルタベント系は、残留熱除去系、原子炉補機冷却系及び原子炉補機海水系に対して独立な系統であり、共通原因による機能喪失のリスクを可能な限り低減している。このことから、全炉心損傷頻度の約100%を占める「崩壊熱除去機能喪失」について

は炉心損傷頻度のほとんどの割合に対して、有効性評価で考慮した対策が有効なものであると考えられる。

第1-4表 事故シナリオの分析(カセットセットの抽出)結果

事故シナリオグループ	事故シナリオ	主要なカセット	炉心損傷頻度		対策有効性
			(/炉年)	事故シナリオへの寄与割合(%)	
長期 TB	外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 (2.7E-09/炉年)	外部電源喪失+非常用DG-A, B 共通原因継続運転失敗+非常用DG-H継続運転失敗	4.1E-10	15	○
			2.8E-10	10	○
			2.8E-10	10	○
TB	外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 圧力バウンダリ健全性 (SRV再閉) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 (8.2E-12/炉年)	外部電源喪失+非常用DG-A, B 共通原因継続運転失敗+非常用DG-H継続運転失敗	1.2E-12	<0.1	○
			8.4E-13	<0.1	○
			8.4E-13	<0.1	○
TBU	外部電源喪失 + 交流電源 (DG-A, B) 失敗 + 高圧炉心冷却失敗 (1.2E-11/炉年)	外部電源喪失+非常用DG-A, B 共通原因継続運転失敗+非常用DG-H継続運転失敗+R C I Cポンプ起動失敗	6.0E-13	<0.1	○
			4.1E-13	<0.1	○
			4.1E-13	<0.1	○
TBD	外部電源喪失 + 直流電源 (区分1, 2) 失敗 + 高圧炉心冷却 (HPCS) 失敗 (3.8E-12/炉年)	外部電源喪失+蓄電池(A, B) 共通原因機能喪失+非常用DG-H継続運転失敗	1.4E-12	0.1	○
			9.7E-13	<0.1	○
			5.4E-13	<0.1	○

【主要なカットセットに対する検討】（全交流動力電源喪失（TB））

- 第1-4表より、事故シーケンスグループ「全交流動力電源喪失」については36%のカットセットを確認した。なお、「全交流動力電源喪失」は全炉心損傷頻度に占める炉心損傷頻度の割合が0.1%未満であり、全炉心損傷頻度に対して寄与割合の低い事故シーケンスグループである。
- 事故シーケンスのうち、「外部電源喪失+交流電源（DG-A, B）失敗+高圧炉心冷却（HPCS）失敗」（長期TB）では、外部電源、非常用ディーゼル発電機による給電を喪失するカットセットが抽出されている。このカットセットに対しては、原子炉隔離時冷却及び低圧原子炉代替注水系（可搬型）の運転による長時間の炉心冷却の確保と格納容器代替スプレイ系（可搬型）及び残留熱除去系（格納容器冷却モード）による格納容器除熱によってプラントを安定な状態に維持することが有効である。
- 事故シーケンスのうち、「外部電源喪失+交流電源（DG-A, B）失敗+圧力バウンダリ健全性（SRV再閉）失敗+高圧炉心冷却（HPCS）失敗」（TBP）では、全交流動力電源喪失により電動駆動のECCSが機能喪失することに加え、圧力バウンダリ健全性（SRV再閉）失敗により、長時間の原子炉隔離時冷却系には期待できない。このため、原子炉隔離時冷却系による注水停止後は低圧原子炉代替注水系（可搬型）による低圧注水に移行し炉心損傷を防止できる。
- 事故シーケンスのうち、「外部電源喪失+交流電源（DG-A, B）失敗+高圧炉心冷却失敗」（TBU）では、外部電源、非常用ディーゼル発電機による給電を喪失し、原子炉隔離時冷却系の起動に失敗するカットセットが抽出されている。このカットセットに対しては、高圧原子炉代替注水系及び低圧原子炉代替注水系（可搬型）による注水等により、炉心損傷を防止できる。
- 事故シーケンスのうち、「外部電源喪失+直流電源喪失（区分1, 2）+高圧注水（HPCS）失敗」（TBD）では、外部電源を喪失し、共通原因故障による蓄電池喪失及び高圧炉心スプレイ系ディーゼル発電機からの給電に失敗するカットセットが抽出されている。高圧原子炉代替注水系及び低圧原子炉代替注水系（可搬型）による注水等により、炉心損傷を防止できる。

第1-5表 事故シナリオの分析(カットセットの抽出)結果

事故シナリオグループ	事故シナリオ	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性
			(/炉年)	事故シナリオへの寄与割合 (%)		
事故シナリオグループ (原子炉停止機能喪失) (6.4E-10/炉年)	過渡事象 + 原子炉停止失敗 (6.4E-10/炉年)	非隔離事象+RPSスクラムコンタクト共通原因故障	4.4E-10	69	<ul style="list-style-type: none"> <li>代替制御棒挿入機能</li> <li>代替原子炉再循環ポンプトリップ機能</li> <li>ほう酸水注入系</li> <li>高圧炉心スプレイス</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>残留熱除去系(サブプレッション・プールの水冷却モード)</li> </ul>	○
	冷却材喪失 (小破断LOCA) + 原子炉停止失敗 (8.7E-13/炉年)	隔離事象+RPSスクラムコンタクト共通原因故障	6.9E-11	11		○
	冷却材喪失 (中破断LOCA) + 原子炉停止失敗 (5.8E-13/炉年)	水位低下事象+RPSスクラムコンタクト共通原因故障	6.9E-11	11		○
	冷却材喪失 (大破断LOCA) + 原子炉停止失敗 (5.8E-14/炉年)	小破断LOCA+RPSスクラムコンタクト共通原因故障	8.2E-13	94		0.1
		中破断LOCA+RPSスクラムコンタクト共通原因故障	5.5E-13	95	0.1	○
		大破断LOCA+RPSスクラムコンタクト共通原因故障	5.5E-14	95	<0.1	○



【主要なカットセットに対する検討】（原子炉停止機能喪失（TC））

- 第1-5表より、事故シーケンスグループ「原子炉停止機能喪失」については炉心損傷頻度の約91%のカットセットを確認した。なお、「原子炉停止機能喪失」は全炉心損傷頻度に占める炉心損傷頻度の割合が0.1%未満であり、全炉心損傷頻度に対して寄与割合の低い事故シーケンスグループである。
- 事故シーケンスとして、「過渡事象+原子炉停止失敗」について評価したところ、原子炉保護系スクラムコンタクタ機能喪失に関する基事象のカットセットが抽出された。このカットセットに対しては、代替制御棒挿入機能、代替原子炉再循環ポンプトリップ機能及びほう酸水注入系によって炉心損傷を防止できる。

第1-6表 事故シナリオの分析(カットセットの抽出)結果

事故シナリオグループ	事故シナリオ※2	主要なカットセット	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性		
			(/炉年)	事故シナリオへの寄与割合 (%)				
事故シナリオグループ (LOCA時注水機能喪失) (4.3E-13/炉年)	冷却材喪失 (小破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (2.8E-15/炉年)	小破断LOCA+RCIC水源切替失敗+HPSWポンプ起動失敗+RCWポンプ共通原因継続運転失敗	4.0E-17	1.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>SRVの手動操作</li> <li>代替自動減圧機能</li> <li>残留熱除去系(低圧注水モード)</li> <li>低圧原子炉代替注水系(常設)</li> <li>格納容器代替スプレイス系(可搬型)</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○		
			3.7E-17	1.3				
			3.4E-17	1.2				
			1.6E-15	28				
			1.4E-15	25				
			8.7E-16	15				
	冷却材喪失 (中破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (3.5E-13/炉年)	中破断LOCA+RCWポンプ共通原因継続運転失敗+HPSWポンプ起動失敗	1.1E-14	3.1			2.6	○
			9.8E-15	2.8			2.3	
			7.7E-15	2.2			1.8	
			1.1E-15	2.8			0.3	
			1.0E-15	2.6			0.2	
			1.0E-15	2.6			0.2	
冷却材喪失 (大破断LOCA) + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (3.4E-14/炉年)	大破断LOCA+RCWポンプ共通原因継続運転失敗+HPSWポンプ起動失敗	1.1E-15	3.2	0.3	○			
		9.8E-16	2.9	0.2				
		7.7E-16	2.3	0.2				
		1.1E-15	3.2	0.3				
		9.8E-16	2.9	0.2				
		7.7E-16	2.3	0.2				

※1 原子炉注水自動起動不能の認知失敗等の人的過誤については、訓練等の運用面の対策は、確実に当該カットセットの発生を防止するものではないが、当該カットセットの発生頻度の低下に期待できるものと考えられる。

※2 大破断LOCAについては、炉心損傷防止対策は困難であるが、格納容器破損防止対策としては、低圧原子炉代替注水系(常設)、格納容器代替スプレイス系(可搬型)、格納容器フィルタベント系等に期待できる。

【主要なカットセットに対する検討】（冷却材喪失（LOCA））

- 第1-6表より、事故シーケンスグループ「LOCA時注水機能喪失」については炉心損傷頻度の約8%のカットセットを確認した。なお、「LOCA時注水機能喪失」は全炉心損傷頻度に占める炉心損傷頻度の割合が0.1%未満であり、全炉心損傷頻度に対して寄与割合の低い事故シーケンスグループである。
- 事故シーケンスのうち、「冷却材喪失（小破断LOCA）+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗」及び「冷却材喪失（中破断LOCA）+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗」では、原子炉補機冷却系又は原子炉補機海水系の共通原因故障、並びに高圧炉心スプレイ補機冷却系又は高圧炉心スプレイ補機海水系の喪失が抽出されている。中破断LOCA又は故障により原子炉隔離時冷却系に期待できず、原子炉補機冷却系等の喪失により、駆動機構の冷却が必要な電動駆動のECCSに期待できない状況であるため、このカットセットに対しては、SRVの手動作動により原子炉を減圧し、駆動機構の冷却を必要としない低圧原子炉代替注水系（常設）により注水することで炉心損傷を防止できる。
- 事故シーケンスのうち、「冷却材喪失（大破断LOCA）+高圧炉心冷却失敗+低圧炉心冷却失敗」では、国内外の先進的な対策を考慮しても対策が困難なものであるが、全炉心損傷頻度への寄与は小さい。また、炉心損傷防止は困難であるが、低圧原子炉代替注水系（常設）による原子炉注水、格納容器フィルタベント系による除熱を実施することにより、炉心損傷の拡大を抑制する等の影響緩和に期待することができる。
- 事故シーケンスのうち、「冷却材喪失（小破断LOCA）+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗」及び「冷却材喪失（中破断LOCA）+高圧炉心冷却失敗+原子炉減圧失敗」では、手動減圧操作に失敗する人的過誤、計測器の共通原因故障、高圧炉心スプレイ補機冷却系又は高圧炉心スプレイ補機海水系の喪失が抽出されている。この場合、原子炉手動減圧操作の必要性に気付けない場合は、SRVの手動操作等の運転員操作に期待することができないため、これらの重大事故等防止対策に期待できず、炉心損傷を防止できないが、小破断LOCA又は中破断LOCAが発生しているにもかかわらず、認知に失敗したまま長時間気付かない場合や、操作に失敗したにもかかわらずその後の対応をとらないことは現実的には考えにくい。全炉心損傷頻度から見た場合、これらの炉心損傷を防止できないカットセットの頻度は非常に小さな値に抑えられているが、原子炉手動減圧操作の認知失敗等の人的過誤については、訓練等によりその発生可能性の低減に努めていく。

第1-7表 事故シケケンスの分析(カットセットの抽出)結果

事故シケケンス グループ	事故シケケンス	主要なカットセット	(/炉年)	炉心損傷頻度		主な対策	対策 有効性
				事故シケケ ンスへの 寄与割合 (%)	事故シケケケケケ グループへの 寄与割合 (%)		
格納容器バイパス (インターフェイス システムLOCA) (3.3E-09/炉年)	格納容器バイパス (インターフェイス システムLOCA) (3.3E-09/炉年)	格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)	3.3E-09	100	100	<ul style="list-style-type: none"> <li>漏えい箇所の隔離</li> <li>S RVの手動操作</li> <li>高圧炉心スブレイ系</li> <li>残留熱除去系(サブレシジョン・ブール水冷却モ-ド)</li> </ul>	○

【主要なカットセットに対する検討】（格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA））

- 第1-7表より、事故シーケンスグループ「格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）」について確認した。なお、「格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）」は全炉心損傷頻度に占める炉心損傷頻度の割合が0.1%未満であり、全炉心損傷頻度に対して寄与割合の低い事故シーケンスグループである。
- 事故シーケンス「格納容器バイパス（インターフェイスシステムLOCA）」では、低圧注水系の定期試験時の弁リークや誤開放による発生寄与が大きい。これらに対しては、高圧炉心スプレイ系による炉心の水位維持によって炉心損傷を防ぐことができる。その後は、注入隔離弁の再閉操作等、漏えい箇所の隔離、SRVによる手動操作を試みるとともに、残留熱除去系による除熱を行うことで、炉心を安定な状態とすることができる。

## 1.2 F V重要度に照らした重大事故等防止対策の対応状況の確認

### (1) 実施内容

今回は、F V重要度の高い基事象に対し、その基事象の発生に伴って生じる系統機能の喪失に重大事故等防止対策が有効か否かを定性的に考察した。

なお、今回の整理は定量的に評価したF V重要度に対し、対策の有効性の観点で定性的な考察を加えたものであり、あくまで定性的な分析結果である。対策の有効性を定量的に把握する観点では、新たに講じた対策をモデル化したうえでP R Aを実施し、その結果を比較することが望ましいが、今回はプラント運転開始時の内部事象運転時レベル1 P R Aの結果のみを定量的な検討材料として分析することとし、この確認を実施した。

### (2) 選定条件

事故シーケンスグループ別にF V重要度を分析し、その値が $1.0 \times 10^{-3}$ を超える基事象について、重大事故等防止対策の対応状況を確認することとした。F V重要度が小さい基事象は、重大事故等防止対策による対応が可能であったとしても、炉心損傷頻度の低減効果が小さいことから、事故シーケンスグループの支配的なリスク要因を網羅的に確認する範囲として、今回は $1.0 \times 10^{-3}$ を基準とすることとし、 $1.0 \times 10^{-3}$ 未満の基事象については確認対象外とした。

### (3) 確認結果

F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超える基事象を確認したところ、事故シーケンスグループ「高圧・低圧注水機能喪失(T Q U V)」、「高圧注水・減圧機能喪失(T Q U X)」、「崩壊熱除去機能喪失(T W)」、「全交流動力電源喪失」に含まれるすべての事故シーケンスグループ(長期T B, T P U, T B P, T B D)、「インターフェイスシステムL O C A ( I S L O C A )」については、抽出されたすべての基事象に対して、定性的には何らかの重大事故等防止対策が有効であることを確認した。また、「L O C A時注水機能喪失(S 1 E, S 2 E)」については、抽出された基事象の一部に対して、定性的には有効な重大事故等防止対策が確認されなかった。

今回の内部事象運転時レベル1 P R Aでは、T Wがその炉心損傷頻度のほぼ100%を占めており、T Wに対しては、F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超えるすべての基事象に重大事故等対処設備(具体的には格納容器フィルタベント系等による除熱機能の代替)が有効であることを確認した。このことから、重大事故等対処設備によって、プラント運転開始時の内部事象運転時レベル1 P R Aの全炉心損傷頻度は大幅に低減されるものと考えられる。このことから、重大事故等対処設備による、内部事象を起因とした炉心損傷リスクへの対策の網羅性があると整理できる。

事故シーケンスグループ別の確認結果は以下のとおり。

○高圧・低圧注水機能喪失（T Q U V）

F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超えるすべての基事象に何らかの重大事故等防止対策が有効であることを確認した。

支配的な基事象として、計測器の共通原因機能喪失、高圧炉心スプレイ系等が抽出されたが、これらに対しては低圧原子炉代替注水（常設）、S R Vの手動操作、格納容器フィルタベント系及び常設代替交流電源設備によって対応することが可能である。

○高圧注水・減圧機能喪失（T Q U X）

F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超えるすべての基事象に何らかの重大事故等防止対策が有効であることを確認した。

支配的な基事象として、原子炉隔離時冷却系、高圧炉心スプレイ系及び手動減圧操作の人的過誤等が抽出された。格納容器圧力高を伴わない高圧注水不能の状況下では、自動減圧系による原子炉の減圧機能に期待できないが、重大事故等対処設備として導入した代替自動減圧機能（原子炉水位低（レベル1）到達10分後及び低圧炉心スプレイポンプ又は残留熱除去ポンプ運転（低圧注水モード）の場合）によって減圧されるため、その後の低圧注水によって対応することが可能である。

○崩壊熱除去機能喪失（T W）

F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超えるすべての基事象に何らかの重大事故等防止対策が有効であることを確認した。

支配的な基事象として、残留熱除去系、原子炉補機冷却系の共通原因故障及び非常用ディーゼル発電機の共通原因故障等が抽出されたが、これらに対しては独立な系統である格納容器フィルタベント系等によって除熱機能を確保することが可能である。

○全交流動力電源喪失（長期T B，T P U，T B P，T B D）

F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超えるすべての基事象に何らかの重大事故等防止対策が有効であることを確認した。

支配的な基事象として、長期T B及びT B Pでは交流電源の喪失、T B Uではこれに加えて原子炉隔離時冷却系の機器故障、T B Dでは蓄電池の共通原因故障が抽出されたが、これらに対しては低圧原子炉代替注水系（常設）、低圧原子炉代替注水系（可搬型）、常設代替交流電源設備及び常設代替直流電源設備によって対応することが可能である。

○L O C A時注水機能喪失（S 1 E，S 2 E）

F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超える基事象のうち、重大事故等防止対策の有効性が確認できない基事象は以下のとおり。

- ・L O C A時の原子炉手動減圧操作失敗

(F V重要度：中破断LOCA (S 1 E)  $1.0 \times 10^{-1}$ ，  
小破断LOCA (S 2 E)  $6.7 \times 10^{-1}$ )

これは人的過誤による基事象であり，主要なカットセットにも含まれている。この基事象については，訓練等による発生確率の低減に努めることが，今後も継続して取り組むべき対策の1つであると考えられる。

このほかに支配的な基事象として，原子炉補機冷却系及び原子炉補機海水系の共通原因故障が抽出された。破断口径の大きさによるが，これらに対しては低圧原子炉代替注水系（常設）によって対応することが可能である。

○原子炉停止機能喪失 (T C)

F V重要度が $1.0 \times 10^{-3}$ を超える基事象のうち，支配的な基事象として，原子炉保護系の共通原因故障が抽出されたが，これらに対してはほう酸水注入系等による原子炉停止によって対応することが可能である。

○格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA)

格納容器バイパス (インターフェイスシステムLOCA) に対し重大事故等防止対策が有効であることを確認した。

支配的な事象として，低圧注水系の配管破断が抽出されたが，これに対しては漏えい箇所の隔離又はSRVの手動操作及び高圧炉心スプレイ系等によって対応することが可能である。



## 2. 内部事象運転時レベル1.5 P R A

### (1) 選定条件

事故シーケンスの種類によっては展開されるカットセットが無数に存在するため、ここでは、各事故シーケンスについて以下の基準を基に主要なカットセットを抽出した。また、格納容器先行破損シーケンスについては、炉心損傷防止対策の有効性を確認しているため、カットセットの分析対象から除外した。

- ・格納容器破損モードの中で最も炉心損傷頻度の大きな事故シーケンスについて、上位3位までのカットセット

各事故シーケンスにおける主要なカットセット及び格納容器破損防止対策の整備状況等を第2-1表に示す。

### (2) 主要なカットセットの確認結果

第2-1表に示したとおり、主要なカットセットレベルまで展開しても、整備された重大事故等防止対策により格納容器破損を防止できることを確認した。

第2-1表 事故シナリオの分析(カセットセットの抽出)結果

格納容器 破損モード	プラント 損傷状態 (PDS) ※1	主要なカセット	格納容器破損頻度		主な対策	対策 有効性
			(/炉年)	格納容器破損 モードへの寄 与割合 (%)		
雰囲気圧力・温度 による静的負荷 (格納容器過圧破損) (3.3E-12/炉年) ※2	T Q U X	直流母線B喪失+HP SWポンプ起動失敗+手動減圧操作失敗+R HIR-A長期冷却手動操作失敗 直流母線B喪失+HP CW/HP SWメンテナンス+手動減圧操作失 敗+R HR-A長期冷却手動操作失敗 直流母線B喪失+HP CSメンテナンス+手動減圧操作失敗+RH R-A長期冷却手動操作失敗	2.1E-13	6.4	・低圧原子炉代替注水系(常設) ・格納容器代替スプレイ系(可搬型) ・格納容器フイルタベント系 ・常設代替交流電源設備 ・可搬式窒素供給装置 ・残留熱代替除去系	○
			4.1E-10	15		
雰囲気圧力・温度 による静的負荷 (格納容器過温破損) (2.8E-09/炉年)	長期T B	外部電源喪失+非常用DG-H継続運転失敗+非常用DG-A, B共 通原因継続運転失敗 外部電源喪失+非常用DG-H起動失敗+非常用DG-A, B共通原 因継続運転失敗 外部電源喪失+非常用DG-H継続運転失敗+非常用DG-A, B共 通原因起動失敗	2.8E-10	10		○
			9.0E-18	15		
高圧溶融物放出/ 格納容器雰囲気直接加熱 (5.9E-17/炉年)	長期T B	外部電源喪失+非常用DG-H継続運転失敗+非常用DG-A, B共 通原因継続運転失敗+DCH発生 外部電源喪失+非常用DG-H起動失敗+非常用DG-A, B共通原 因継続運転失敗+DCH発生 外部電源喪失+非常用DG-H継続運転失敗+非常用DG-A, B共 通原因起動失敗+DCH発生	6.1E-18	10	・原子炉圧力容器破損までの手動減圧	○
			6.1E-18	10		
原子炉圧力容器外の 溶融燃料- 冷却材相互作用 (2.3E-13/炉年)	T Q U V	非隔離事象+水位トランスミスミッタLX298-1共通原因機能喪失 +HP SWポンプ起動失敗+FCI発生 非隔離事象+水位トランスミスミッタLX298-1共通原因機能喪失 +HP CW/HP SWメンテナンス+FCI発生 非隔離事象+水位トランスミスミッタLX298-1共通原因機能喪失 +HPCSメンテナンス+FCI発生	1.1E-14	4.8	(格納容器バウンダリの機能は喪失しな いことを確認)	○
			1.0E-14	4.3		
			6.3E-15	2.7		
溶融炉心・コンクリート 相互作用 (2.5E-09/炉年)	T Q U V	非隔離事象+水位トランスミスミッタLX298-1共通原因機能喪失 +HP SWポンプ起動失敗+デブリ冷却失敗 非隔離事象+水位トランスミスミッタLX298-1共通原因機能喪失 +HP CW/HP SWメンテナンス+デブリ冷却失敗 非隔離事象+水位トランスミスミッタLX298-1共通原因機能喪失 +HPCSメンテナンス+デブリ冷却失敗	1.2E-10	4.8	・ペデスタル代替注水系(可搬型)による ペデスタル注水	○
			1.1E-10	4.4		
			6.7E-11	2.7		

※1 最も格納容器破損頻度の高いシナリオを抽出しているため、有効性評価におけるPDSとは一致しない。

※2 格納容器が先行破損に至る崩壊熱除去機能喪失(TW), 原子炉停止機能喪失(TC)による格納容器破損頻度を除く。

## 【主要なカットセットに対する検討】

### ○ 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過圧破損）

支配的な事故シーケンスは、T Q U Xによって炉心損傷に至った後に過圧破損に至るシーケンスであり、主要なカットセットには過圧破損・過温破損においては、高圧炉心スプレイ系機能喪失、手動減圧操作失敗及び残留熱除去系手動操作失敗の基事象の組合せが抽出されている。これらのカットセットに対しては、格納容器フィルタベント系が有効である。また、格納容器代替スプレイ系（可搬型）によって格納容器圧力の上昇抑制を図ること、残留熱代替除去系による除熱も有効である。

### ○ 雰囲気圧力・温度による静的負荷（格納容器過温破損）

支配的な事故シーケンスは、長期T Bによって炉心損傷に至った後に過温破損に至るシーケンスであり、主要なカットセットにはすべての交流電源が失われる基事象の組合せが抽出されている。これらのカットセットに対しては、低圧原子炉代替注水系（常設）による損傷炉心への注水、格納容器代替スプレイ系（可搬型）による格納容器冷却、格納容器フィルタベント系や残留熱代替除去系による除熱が有効である。

### ○ 高圧溶融物放出／格納容器直接加熱

支配的な事故シーケンスは、長期T Bによって炉心損傷に至った後に高圧溶融物放出／格納容器雰囲気直接加熱に至るシーケンスであり、主要なカットセットにはすべての交流電源が失われる基事象の組合せが抽出されている。交流電源を喪失しても原子炉圧力容器の減圧操作は可能であることから、現状の対策である原子炉圧力容器の減圧操作によって、本モードによる格納容器破損を防止できる。

### ○ 原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用

支配的な事故シーケンスは、T Q U Vによって炉心損傷に至った後に原子炉圧力容器が損傷し、原子炉圧力容器外の溶融燃料－冷却材相互作用に至るシーケンスであり、主要なカットセットには水位トランスミッタの共通原因故障及び高圧炉心スプレイ系機能喪失が抽出されている。この事象については、仮に発生した場合であっても格納容器の破損に至らないことを確認している。

### ○ 溶融炉心・コンクリート相互作用

支配的な事故シーケンスは、T Q U Vによって炉心損傷に至った後に原子炉圧力容器が損傷し、原子炉格納容器下部床面での溶融炉心・コンクリート相互作用が継続するシーケンスであり、主要なカットセットには水位トランスミッタの共通原因故障及び高圧炉心スプレイ系機能喪失が抽出されている。炉心損傷後にはその状況を認知するとともに、炉心損傷から原子炉圧力容器の損傷までの間にペDESTAL代替注水系等を用いて、ペDESTAL水張りを行うことで、溶融炉心・コンクリート相互作用の継続を防止できる。

### 3. 停止時レベル1 P R A

#### 3.1 主要なカットセットに照らした重大事故等防止対策の対応状況の確認

##### (1) 選定条件

事故シーケンスの種類によっては展開されるカットセットが非常に多くある。ここでは、各事故シーケンスについて以下の判断基準を基に主要なカットセットを抽出した。

- ・各事故シーケンス（P O S - S ~ D）の中で上位5位までのカットセット

##### (2) 主要なカットセットの確認結果

各事故シーケンス（P O S - S ~ D）の燃料損傷頻度が上位であるカットセットの分析を実施し（第3-1表～第3-3表）、整備された燃料損傷防止対策が有効となることを確認した。

第3-1表 崩壊熱除去機能喪失の主要なカットセット  
(POS-S~Dの各事故シナシスにおける主要なカットセット)

事故シナシス	燃料損傷頻度 (/定期事業者検査)	主要なカットセット	POS	燃料損傷頻度 (/定期事業者検査)	寄与割合 (%)	対策	対策 有効性
崩壊熱除去機能喪失 +崩壊熱除去・炉心冷却失敗	2.4E-10	フロントライン系機能喪失+ FMWポンプ出口弁MV-2開失敗+ CWT起動操作失敗	B-2	1.5E-11	6.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>・常設代替交流電源設備</li> </ul>	○
		フロントライン系機能喪失+ FMWポンプ出口弁MV-2開制御故障+ CWT起動操作失敗	B-2	1.5E-11	6.2		
		フロントライン系機能喪失+ FMWポンプ出口弁MV-2開失敗+ CWT起動操作失敗	B-3	5.4E-12	2.3		
		フロントライン系機能喪失+ FMWポンプ出口弁MV-2開制御故障+ CWT起動操作失敗	B-3	5.3E-12	2.2		
		フロントライン系機能喪失+ RHRポンプ炉水戻り弁MV222-11A作動失敗+ CWT起動操作失敗	C	4.8E-12	2.0		
		外部電源喪失+ RHR炉水入口止め弁V222-5閉塞+ CWT起動操作失敗	C	4.0E-13	1.3		
		外部電源喪失+ RHRポンプ炉水戻り弁MV222-11A, B共通原因開失敗+ CWT起動操作失敗	C	2.9E-13	0.9		
		外部電源喪失+ RHRポンプ炉水入口弁MV222-8A, B共通原因作動失敗+ CWT起動操作失敗	C	2.9E-13	0.9		
		外部電源喪失+ RHR炉水入口止め弁V222-5閉塞+ CWT起動操作失敗	D	2.7E-13	0.9		
		外部電源喪失+ RHR炉水入口止め弁V222-5閉塞+ CWT起動操作失敗	A	2.2E-13	0.7		

**【主要なカットセットに対する検討】**

- POS-B-2, 3においては、取水路点検等により片系の補機冷却系に期待していないため、期待する注水機能が少ない状態である。そのため、期待できる注水機能はもう一方の系列のみとなり、主要なカットセットとして抽出された。
- 主要なカットセットに対する対策としては待機中の残留熱除去系(低圧注水モード)、注水機能の信頼性向上・多様化(低圧原子炉代替注水系(常設))であり、当社の実施している燃料損傷防止対策は有効である。

第3-2表 全交流動力電源喪失の主要なカットセット  
(POS-S~Dの各事故シーケンスにおける主要なカットセット)

事故シーケンス	燃料損傷頻度 (/定期事業者検査)	主要なカットセット	POS	燃料損傷頻度 (/定期事業者検査)	寄与割合 (%)	対策	対策 有効性
外部電源喪失 + 交流電源喪失	6.0E-06	外部電源喪失 + 非常用ディーゼル発電機A継続運転失敗	B-2	1.4E-06	24	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 常設代替交流電源設備</li> <li>• 低圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>• 原子炉補機代替冷却系</li> </ul>	○
		外部電源喪失 + 非常用ディーゼル発電機A起動失敗	B-2	9.7E-07	16		○
		外部電源喪失 + 非常用ディーゼル発電機Aメンテナンス	B-2	5.4E-07	9.0		○
		外部電源喪失 + 非常用ディーゼル発電機B継続運転失敗	B-3	5.1E-07	8.5		○
		外部電源喪失 + 非常用ディーゼル発電機B継続運転失敗	B-4	4.1E-07	6.8		○
		外部電源喪失 + 蓄電池A機能喪失	B-2	1.3E-08	30		○
		外部電源喪失 + 蓄電池A遮断器誤開	B-2	1.1E-08	24		○
		外部電源喪失 + 蓄電池B機能喪失	B-3	4.6E-09	11		○
		外部電源喪失 + 蓄電池B遮断器誤開	B-3	3.8E-09	8.6		○
		外部電源喪失 + 蓄電池B機能喪失	B-4	3.7E-09	8.4		○
外部電源喪失 + 直流電源喪失	4.3E-08						

【主要なカットセットに対する検討】

- POS-B-2においては、点検によりB系の緩和系及び非常用ディーゼル発電機に期待することができない。外部電源が喪失し、非常用ディーゼル発電機A系が起動に失敗すると全交流動力電源喪失となる。そのため、非常用ディーゼル発電機A系の運転継続失敗や起動失敗を含むカットセットが主要なカットセットとして抽出された。
- 対策として常設代替交流電源設備や注水の多様化（低圧原子炉代替注水系（常設））及び原子炉補機代替冷却系があり、当社の実施している燃料損傷防止対策は有効である。



第3-3表 原子炉冷却材の流出の主要なカットセット  
(POS-S～Dの各事故シナシスにおける主要なカットセット)

事故シナシス	燃料損傷頻度 (/定期事業者検査)	主要なカットセット	POS	燃料損傷頻度 (/定期事業者検査)	寄与割合 (%)	対策	対策 有効性
原子炉冷却材の流出 + 流出隔離・炉心冷却 失敗	3.5E-10	CUWブロー+ 水位低下認知失敗 (CUW ブロー)	C	1.9E-10	54	<ul style="list-style-type: none"> <li>待機中の残留熱除去系 (低 圧注水モード)</li> <li>冷却材流出箇所の隔離操作</li> </ul> <b>【認知失敗の場合】</b> 運転員への注意喚起等によ る発生頻度の低減	—**
		RHR切替+ 流出の隔離失敗+ CWT起動操作失敗	B-3	8.3E-11	23		
		CUWブロー+ 流出の隔離失敗+ CWT起動操作失敗	C	7.6E-11	21		
		CRD点検+ 流出の隔離失敗+ CWT起動操作失敗	B-2	1.9E-12	0.5		
		LPRM交換+ 流出の隔離失敗+ CWT起動操作失敗	B-2	1.1E-12	0.3		

※ 運転員への注意喚起等は人的過誤防止のための運用面の対策であり、確実に当該カットセットの発生を防止するものではないが、当該カットセットの発生頻度の低下には期待できるものと考ええる。

#### 【主要なカットセットに対する検討】

- 本シーケンスで主要なカットセットは定期事業者検査中の水位調整のために原子炉浄化系ブローにより目標水位まで原子炉水位を低下させた後、ブローの停止し忘れにより冷却材の流出が継続し、その後、水位低下の認知に失敗することで発生するものである。このリスクに対しては運転員の定期的な原子炉水位の監視に加え、手順書等による作業時の注意喚起が有効である。また、急激な水位の低下が継続しないようにブロー量の管理もされており十分認知のための時間があること、原子炉水位計による警報機能にも期待できることから、PRA上の想定より運転員の水位低下の認知はより容易になると考えられる。
- 原子炉冷却材の流出に対する対策としては待機中の残留熱除去系（低圧注水モード）による注水、冷却材流出箇所への隔離操作であり、当社の実施している燃料損傷防止対策は有効である。認知に対しては、運転員への注意喚起等の運用を実施していく。

### 3.2 F V重要度に照らした重大事故等防止対策の対応状況の確認

F V重要度が $1.0 \times 10^{-4}$ <sup>※1</sup>を超える基事象に対して、有効性評価で考慮している対策が有効であるかを検討し、その大部分について有効となることを確認した。

また、有効性評価中で考慮している対策が有効とならないものを以下のとおり抽出し、これらの基事象が主要なカットセットで確認したものと同様、注水機能の信頼性向上・多様化（低圧原子炉代替注水系（常設））や運転員への注意喚起等の継続的实施，区分Ⅰ～Ⅲの直流電源に期待しない常設代替交流電源設備の給電等によって燃料損傷の発生頻度を更に低下させることが可能であることを確認した。

#### (1) 低圧原子炉代替注水系（常設）による原子炉注水が有効とならない基事象

停止時レベル1 P R Aにおいては時間余裕が十分長いことから重大事故対処設備である低圧原子炉代替注水系（常設）による原子炉等への注水に期待している。そのためこの機能が喪失する基事象は有効性評価で考慮している対策が有効とならない基事象として第3-4表に抽出される。

これらの基事象の故障が発生した場合は、低圧原子炉代替注水系（常設）による注水に期待できないと考えられる。ただし、低圧原子炉代替注水系（常設）（有効性評価で期待している注水手段）以外の対策（大量送水車等）を考慮することで燃料損傷を防止できる。

#### (2) 冷却材流出事象において待機中の残留熱除去系（低圧注水モード），低圧原子炉代替注水系（常設）が有効とならない基事象

冷却材流出事象が発生して、運転員が認知に失敗した場合は考慮している対策が有効とならず、燃料損傷に至る（第3-5表）。

対策として運転員の定期的な原子炉水位の監視に加え、マニュアルや手順等による操作時の注意喚起が有効である（例：社内で実施するリスク評価の際に抽出された「水位低下の操作」等に対して注意喚起の連絡の実施）。また、急激な水位の低下が継続しないようにブロー量の管理もされており十分認知のための時間余裕があることから、P R A上の想定より運転員の水位低下の認知はより容易になると考えられる。

※1 停止時におけるF V重要度は、個々の事故シーケンスの事象進展や対策に大きな差異がないことから、全燃料損傷頻度に対する分析を実施した。その際、全燃料損傷頻度に対する個々の事故シーケンスグループの寄与割合も考慮し、内部事象運転時レベル1 P R Aより一桁小さい $1.0 \times 10^{-4}$ を基準としてそれを超える基事象について

抽出を実施した。

第3-4表 低圧原子炉代替注水系（常設）による原子炉注水が有効とならない基事象とFV重要度

基事象	FV重要度	基事象の説明
①RHR-A注水弁MV222-5A開失敗	—※	低圧原子炉代替注水系（常設）を用いた原子炉注水を行う際に使用する残留熱除去系注水ラインの電動弁の基事象
②RHR-A配管閉塞	<1.0E-04	低圧原子炉代替注水系（常設）を用いた原子炉注水を行う際に使用する残留熱除去系配管の基事象

※ 今回の停止時レベル1PRAでは、残留熱除去系の注水ラインには期待しておらず、カットセットは抽出されていない。

第3-5表 冷却材流出事象において待機中の残留熱除去系（低圧注水モード）、低圧原子炉代替注水系（常設）の原子炉注水が有効とならない基事象とFV重要度

基事象	FV重要度	基事象の説明
①水位低下認知失敗（CUWブロー）	5.4E-01	冷却材流出事象が発生して、運転員が認知に失敗した場合は考慮している対策が有効とならず、燃料損傷に至る基事象

地震 P R A，津波 P R A から抽出される事故シーケンスと対策の  
有効性について

内部事象 P R A から抽出される事故シーケンスには，一部を除いてそれぞれ有効な炉心損傷防止対策が講じられている。内部事象 P R A では，機器の故障等の発生確率をランダム要因によるものとして炉心損傷頻度等を評価しているが，外部事象 P R A では，外部事象によっても機器の故障等が発生するため，例えば，ランダム要因では壊れにくい地震に対しては脆弱な機器等が含まれる場合等，同じ事故シーケンス又はカットセットであってもその発生頻度及び寄与率には違いが現れる。このため，地震レベル 1 P R A，津波レベル 1 P R A から抽出される事故シーケンスについても，支配的な事故シーケンスに対してカットセットを分析し，炉心損傷防止対策の有効性を整理した。

## 1. 地震レベル1 P R A

### (1) 選定条件

事故シーケンスの種類によっては、展開されるカットセットが無数に存在するため、ここでは、各事故シーケンスについて以下の基準を基に主要なカットセットを抽出した。

- ・事故シーケンスのうち、上位3位までのカットセット

各事故シーケンスにおける主要なカットセット及び炉心損傷防止対策の整備状況を第1表に示す。

### (2) 主要なカットセットの確認結果

第1表に示したとおり、一部に炉心損傷防止が困難な事故シーケンスが存在するものの、大半の事故シーケンスに対しては、主要なカットセットレベルまで展開しても、整備された重大事故等対処設備により炉心損傷を防止できることを確認した。なお、地震により重大事故等対処設備の機能が失われる可能性もあるが、その際は機能喪失を免れた設備等を用いて対応することとなる。

一方、事故シーケンスのうち、「原子炉停止機能喪失」に含まれる一部の事故シーケンスにおいて、故障モードによっては有効性評価で考慮した対策では対応できない場合があることを確認した。また、原子炉建物損傷、原子炉格納容器損傷、原子炉圧力容器損傷、格納容器バイパス、E x c e s s i v e L O C A、制御室建物損傷、廃棄物処理建物損傷、計装・制御系喪失の炉心損傷直結事象についても、地震動に応じた詳細な損傷の程度や影響を評価することは困難なことから、現状、炉心損傷直結事象として整理しているものの、実際には、損傷の程度に応じて使用可能な重大事故等対処設備等を用いて対応することにより、炉心損傷を防止できる可能性があることを確認した。

## 【主要なカットセットに対する検討】

### ○ 高圧・低圧注水機能喪失

サプレッション・チェンバの構造損傷又は残留熱除去系電動弁（ゲート弁）の機能損傷を含むカットセットが抽出されている。これらのカットセットに対しては、低圧原子炉代替注水系（常設）により原子炉圧力容器に注水を行うことで炉心損傷を防止できる。

### ○ 高圧注水・減圧機能喪失

いずれのカットセットにも、地震によるSRV損傷の基事象は含まれていない。このため、対策は、内部事象レベル1PRAの結果、抽出されたカットセットに対する対策と同様のものとなる。

### ○ 全交流動力電源喪失

#### ・外部電源喪失＋交流電源・補機冷却系喪失

事故シーケンスのうち、「外部電源喪失＋交流電源・補機冷却系喪失」では、非常用ディーゼル発電機の燃料移送系配管や非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンクの構造損傷又は原子炉補機海水ポンプの機能損傷を含むカットセットが抽出されている。これらのカットセットに対しては、原子炉隔離時冷却系によって炉心を冷却し、その後、SRVの手動開操作により原子炉を減圧し、原子炉減圧後に低圧原子炉代替注水系（可搬型）により炉心冷却することによって炉心損傷の防止を図る。また、格納容器代替スプレイ系（可搬型）による格納容器圧力制御を行い、残留熱除去系による格納容器除熱によってプラントを安定な状態に維持することが有効である。

#### ・外部電源喪失＋交流電源・補機冷却系喪失＋高圧炉心冷却失敗

事故シーケンスのうち、「外部電源喪失＋交流電源・補機冷却系喪失＋高圧炉心冷却失敗」では、非常用ディーゼル発電機の燃料移送系配管や非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンクの構造損傷及びサプレッション・チェンバの構造損傷を含むカットセットが抽出されている。これらのカットセットに対しては、高圧原子炉代替注水系、低圧原子炉代替注水系（可搬型）により炉心を冷却することによって炉心損傷の防止を図る。また、格納容器代替スプレイ系（可搬型）による格納容器圧力制御を行い、残留熱除去系による格納容器除熱によってプラントを安定な状態に維持することが有効である。

#### ・外部電源喪失＋直流電源喪失

事故シーケンスのうち、「外部電源喪失＋直流電源喪失」では、地震又はランダム故障により直流電源設備が機能喪失に至るカットセットが抽出されている。これらのカットセットに対しては、高圧原子炉代替注水系及び低圧原子炉代替注水系（可搬型）による注水等により炉心を冷却することによって炉心損傷の防止を図る。また、格納容器代替スプレイ系（可搬型）による格納容器圧力制御を行い、残留熱除去系による



格納容器除熱によってプラントを安定な状態に維持することが有効である。

・外部電源喪失＋交流電源・補機冷却系喪失＋SRV再閉鎖失敗

事故シーケンスのうち、「外部電源喪失＋交流電源・補機冷却系喪失＋SRV再閉鎖失敗」では、非常用ディーゼル発電機の燃料移送系配管や非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンクの構造損傷又は原子炉補機海水ポンプの機能損傷を含むカットセットが抽出されている。これにより外部電源喪失と合わせて全交流動力電源喪失に至り、電動駆動のECCS注水設備が機能喪失する。また、SRV再閉鎖失敗により、長時間の原子炉隔離時冷却系又は高圧原子炉代替注水系による注水には期待できない。このため、原子炉隔離時冷却系又は高圧原子炉代替注水系による注水が継続している間に低圧原子炉代替注水系（可搬型）による低圧注水に移行することで炉心損傷の防止を図る。また、格納容器代替スプレイ系（可搬型）による格納容器圧力制御を行い、残留熱除去系による格納容器除熱によってプラントを安定な状態に維持することが有効である。

○ 崩壊熱除去機能喪失

いずれのカットセットにも、残留熱除去系電動弁の機能損傷又は残留熱除去系配管の構造損傷が含まれている。このカットセットに対しては、原子炉補機代替冷却系による除熱には期待できないが、格納容器フィルタベントによる大気への除熱により炉心損傷（格納容器先行破損）を防止できる。

○ 原子炉停止機能喪失

いずれのカットセットにも、炉内構造物の構造損傷が含まれている。原子炉スクラムが必要な際に制御棒が挿入できない場合、原子炉停止機能を喪失するため、炉心損傷に至る。

これらのカットセットに対しては、代替再循環ポンプトリップ機能により炉心流量を減少させ原子炉出力を低下させることに加え、ほう酸水注入系で原子炉停止することにより炉心損傷を防止できる。一方、非常用ディーゼル発電機の燃料移送系配管や非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンクの構造損傷又は原子炉補機海水ポンプを含むカットセットについては、交流電源を喪失するため、ほう酸水注入系に期待できず、炉心損傷に至る。ただし、これらの事故シーケンスは、地震発生と同時に最大加速度を受けるものとして評価している地震PRAから抽出されたものであり、基準地震動よりも十分小さな加速度でスクラム信号「地震加速度大」が発信し、炉内構造物等が損傷する前に制御棒の挿入が完了すると考えられることから、現実的にはこれらの事故シーケンスは発生し難いと考えられる。

○ その他の炉心損傷直結事象

原子炉建物損傷，原子炉格納容器損傷，原子炉圧力容器損傷，格納容器バイパス，E x c e s s i v e L O C A，制御室建物損傷，廃棄物処理建物損傷，計装・制御系喪失については，別紙2のとおり，評価方法にかなりの保守性を有しており，また，地震動に応じた詳細な損傷の程度や影響を評価することは困難なことから，現状，炉心損傷直結事象として整理しているものの，実際には損傷の程度に応じて使用可能な重大事故等対処設備等を用いて対応することにより，炉心損傷を防止できる可能性があるものとする。その場合は，損傷した機能に応じて内部事象運転時レベル1 P R Aの結果から抽出された既存の事故シーケンスグループに包絡されるものとする。

## 2. 津波レベル1 P R A

津波 P R A の結果，津波高さ E L 20m 超過の津波発生時に，建物等への浸水により計装・制御系，E C C S 等の緩和機能の喪失が発生し，直接炉心損傷に至る事故シーケンスが抽出された。

津波により直接炉心損傷に至る事象については，別紙2のとおり，評価手法に保守性を有しており，また，津波による建物内外の浸水に応じた詳細な損傷の程度や影響を評価することは困難なことから，現状，炉心損傷直結事象として整理しているものの，実際には損傷の程度に応じて使用可能な重大事故等対処設備等を用いて対応することにより，炉心損傷を防止できる可能性があるものとする。その場合は，損傷した機能に応じて内部事象運転時レベル1 P R A の結果から抽出された既存の事故シーケンスグループに包絡されるものとする。

第1表 地震PRAにおける事故シークエンスの分析 (カットセットの抽出) 結果 (1/3)

事故シークエンスグループ	主要な事故シークエンス*1	主要なカットセット**2	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性
			(/炉年)	寄与割合 (%) **3		
高圧・低圧注水機能喪失 (9. 3E-07 / 炉年)	外部電源喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 低圧炉心冷却失敗 (9. 2E-07 / 炉年)	外部電源受電設備の損傷 + サプレッション・チェンバの損傷	3. 8E-07	41	<ul style="list-style-type: none"> <li>高圧原子炉代替注水系 (常設)</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (可搬型)</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>格納容器代替スプレイス系 (可搬型)</li> <li>格納容器フィルタベント系</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○
		外部電源受電設備の損傷 + RCI C電動弁 (グループ弁) の損傷 + HPCSSディーゼルの損傷 + RHR電動弁 (ゲート弁) の損傷**4	4. 5E-09	0. 5		
		外部電源受電設備の損傷 + RCI C電動弁 (グループ弁) の損傷 + HPCSSディーゼルの損傷 + RHR電動弁 (ゲート弁) の損傷**4	4. 3E-09	0. 5		
		外部電源受電設備の損傷 + RCI C電動弁 (グループ弁) の損傷 + HPCSSディーゼルの損傷 + 燃料貯蔵タンクの損傷 + 原子炉減圧失敗 (ランダム故障)	2. 7E-09	2. 6		
高圧注水・減圧機能喪失 (1. 0E-07 / 炉年)	外部電源喪失 + 高圧炉心冷却失敗 + 原子炉減圧失敗 (1. 0E-07 / 炉年)	外部電源受電設備の損傷 + RCI C電動弁 (グループ弁) の損傷 + HPCSSディーゼルの損傷 + 原子炉減圧失敗 (ランダム故障)	2. 7E-09	2. 6	<ul style="list-style-type: none"> <li>代替自動減圧機能</li> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>残留熱除去系</li> </ul>	○
		外部電源受電設備の損傷 + RCI C電動弁 (グループ弁) の損傷 + HPCSSディーゼルの損傷 + 原子炉減圧失敗 (ランダム故障)	2. 7E-09	2. 6		
		外部電源受電設備の損傷 + RCI C電動弁 (グループ弁) の損傷 + HPCSSディーゼルの損傷 + 原子炉減圧失敗 (ランダム故障)	2. 7E-09	2. 6		
		外部電源受電設備の損傷 + 燃料移送系配管の損傷	2. 5E-07	13		
全交流動力電源喪失 (3. 4E-06 / 炉年)	外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 (2. 0E-6 / 炉年)	外部電源受電設備の損傷 + RSWポンプの損傷	2. 4E-07	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (可搬型)</li> <li>格納容器代替スプレイス系 (可搬型)</li> <li>残留熱除去系</li> </ul>	○
		外部電源受電設備の損傷 + ディーゼル燃料貯蔵タンクの損傷	2. 3E-07	12		
		外部電源受電設備の損傷 + ディーゼル燃料貯蔵タンクの損傷 + サプレッション・チェンバの損傷	6. 0E-08	4. 4		
		外部電源受電設備の損傷 + RSWポンプの損傷 + サプレッション・チェンバの損傷	5. 7E-08	4. 2		
外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + SRV再閉鎖失敗 (1. 5E-08 / 炉年)	外部電源喪失 + 交流電源・補機冷却系喪失 + SRV再閉鎖失敗 (1. 5E-08 / 炉年)	外部電源受電設備の損傷 + 燃料移送系配管の損傷 + サプレッション・チェンバの損傷	5. 1E-08	3. 7	<ul style="list-style-type: none"> <li>残留熱除去系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (可搬型)</li> <li>格納容器代替スプレイス系 (可搬型)</li> <li>残留熱除去系</li> </ul>	○
		外部電源受電設備の損傷 + 燃料移送系配管の損傷 + SRV再閉鎖失敗 (ランダム故障)	1. 9E-09	13		
		外部電源受電設備の損傷 + RSWポンプの損傷 + SRV再閉鎖失敗 (ランダム故障)	1. 8E-09	12		
		外部電源受電設備の損傷 + ディーゼル燃料貯蔵タンクの損傷 + SRV再閉鎖失敗 (ランダム故障)	1. 8E-09	12		
外部電源喪失 + 直流電源喪失 (5. 8E-09 / 炉年)	外部電源喪失 + 直流電源喪失 (5. 8E-09 / 炉年)	外部電源受電設備の損傷 + 115V系充電池の損傷	5. 1E-09	88	<ul style="list-style-type: none"> <li>高圧原子炉代替注水系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>低圧原子炉代替注水系 (可搬型)</li> <li>格納容器代替スプレイス系 (可搬型)</li> <li>常設代替直流電源設備</li> <li>残留熱除去系</li> </ul>	○
		外部電源受電設備の損傷 + 115V系直流器の損傷	6. 8E-10	12		
		外部電源受電設備の損傷 + 直流電源喪失 (ランダム故障)	8. 0E-12	0. 1		

※1 主要な事故シークエンスは、同じ事故シークエンスグループに含まれる複数のシークエンスを、シークエンス上の主な特徴に着目し、詳細化して分類したもの。括弧内は主要な事故シークエンスに含まれるシークエンスのうち、支配的なシークエンスの炉心損傷頻度を示す。

※2 地震PRAでは機器の損傷を完全相関としているため、多重化された機器が地震により損傷する場合、他の多重化された機器も全て損傷する。

※3 主要な事故シークエンスの炉心損傷頻度に対するカットセットの寄与割合を示す。

※4 残留熱除去系電動弁 (ゲート弁) は低圧原子炉代替注水系 (常設) 及び格納容器代替スプレイス系 (可搬型) の注水経路上にもあるが、当該弁は十分な耐震裕度があることを確認している。

第1表 地震PRAにおける事故シークエンスの分析（カットセットの抽出）結果（2/3）

事故シークエンスグループ	主要な事故シークエンス※1	主要なカットセット※2	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性
			(/炉年)	寄与割合 (%) ※3		
崩壊熱除去機能喪失 (1. 6E-06/炉年)	外部電源喪失 +崩壊熱除去失敗 (1. 1E-06/炉年)	外部電源受電設備の損傷+RHR電動弁（グローブ弁）の損傷※4	2. 2E-07	19	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子炉補機代替冷却系</li> <li>格納容器フィルタタレント系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>SRVの手動操作</li> <li>残留熱除去系</li> <li>低圧原子炉代替注水系（常設）</li> <li>格納容器代替スプレイス系（可搬型）</li> <li>常設代替交流電源設備</li> </ul>	○
		外部電源受電設備の損傷+RHR電動弁（ゲート弁）の損傷※4	1. 6E-07	14		
		外部電源受電設備の損傷+RHR配管の損傷※4	1. 3E-07	12		
原子炉停止機能喪失 (8. 5E-07/炉年)	外部電源喪失 +交流電源・補機冷却系喪失 +原子炉停止失敗 (5. 2E-07/炉年)	外部電源受電設備の損傷+ディーゼル燃料貯蔵タンクの損傷+シュラウドサポートの損傷	1. 5E-08	2. 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>代替制御棒挿入機能</li> <li>代替原子炉再循環ポンプトリップ機能</li> <li>ほう酸水注入系</li> <li>高圧炉心スプレイス系</li> <li>原子炉隔離時冷却系</li> <li>残留熱除去系</li> </ul>	—※5
		外部電源受電設備の損傷+RSWポンプの損傷+シュラウドサポートの損傷	1. 4E-08	2. 8		
		外部電源受電設備の損傷+ディーゼル燃料移送ポンプの損傷+シュラウドサポートの損傷	1. 3E-08	2. 5		
原子炉建物損傷 (3. 1E-08/炉年)	原子炉建物損傷 (3. 1E-08/炉年)	原子炉建物の損傷	3. 1E-08	100	—	—※6
原子炉格納容器損傷 (3. 4E-07/炉年)	原子炉格納容器損傷 (3. 4E-07/炉年)	原子炉格納容器スタビライザの損傷	2. 3E-07	68	—	—※6
		原子炉格納容器の損傷	5. 8E-08	17		
		原子炉圧力容器ベデスタルの損傷	5. 0E-08	15		
		原子炉圧力容器スタビライザの損傷	9. 7E-08	56		
原子炉圧力容器損傷 (1. 7E-07/炉年)	原子炉圧力容器損傷 (1. 7E-07/炉年)	原子炉圧力容器の損傷	7. 5E-08	44	—	—※6
		原子炉遮蔽壁の損傷	2. 8E-10	0. 2		
		主蒸気隔離弁の損傷	2. 0E-09	58		
格納容器バイパス (3. 5E-09/炉年)	格納容器バイパス (3. 5E-09/炉年)	原子炉浄化系隔離弁の損傷	1. 3E-09	37	—	—※6
		給水系逆止弁の損傷	1. 5E-10	4. 4		

- ※1 主要な事故シークエンスは、同じ事故シークエンスグループに含まれる複数のシークエンスを、シークエンス上の主な特徴に着目し、詳細化して分類したものである。括弧内は主要な事故シークエンスに含まれるシークエンスのうち、支配的なシークエンスの炉心損傷頻度を示す。
- ※2 地震PRAでは機器の損傷を完全相関としているため、多重化されたある機器が地震により損傷する場合、他の多重化された機器も全て損傷する。
- ※3 主要な事故シークエンスの炉心損傷頻度に対するカットセットの寄与割合を示す。
- ※4 残留熱除去系電動弁（グローブ弁）、残留熱除去系配管は残留熱除去系及び格納容器代替スプレイス系（可搬型）の注水経路上にもあるが、当該弁は十分な耐震裕度があることを確認している。
- ※5 地震発生と同時に最大の加速度を受けるものとして評価している地震レベル1PRAの設定上抽出されたものであるが、地震時の挙動を現実的に想定すると、基準地震動よりも十分小さな加速度でスクラム信号「地震加速度大」が発信され、炉内構造物が損傷する加速度に至る前に制御棒の挿入が完了すると考えられることから、現実的には発生し難いと考え、炉心損傷防止対策の有効性を確認する対象には該当しないと判断したシークエンス。
- ※6 損傷の規模に応じて、常設及び可搬型の低圧原子炉代替注水系による原子炉冷却、常設及び可搬型の格納容器代替スプレイス系による格納容器冷却、又は可搬型のポンプ・電源、放水砲等を駆使した大規模損傷対策により影響緩和を図る。

第1表 地震PRAにおける事故シークエンスの分析（カットセットの抽出）結果（3/3）

事故シークエンスグループ	主要な事故シークエンス※1	主要なカットセット※2	炉心損傷頻度		主な対策	対策有効性
			(/炉年)	寄与割合 (%) ※3		
Excessive LOCA (4.2E-07/炉年)	Excessive LOCA (4.2E-07/炉年)	原子炉格納容器内配管の損傷	4.2E-07	100	—	—※4
制御室建物損傷 (1.4E-08/炉年)	制御室建物損傷 (1.4E-08/炉年)	制御室建物の損傷	1.4E-08	100	—	—※4
廃棄物処理建物損傷 (1.8E-10/炉年)	廃棄物処理建物損傷 (1.8E-10/炉年)	廃棄物処理建物の損傷	1.8E-10	100	—	—※4
計装・制御系喪失 (1.5E-07/炉年)	計装・制御系喪失 (1.5E-07/炉年)	外部電源受電設備の損傷+ケーブル・トレイの損傷	1.3E-07	89	—	—※4
		外部電源受電設備の損傷+計装ラックの損傷	9.4E-09	6.4		
		外部電源受電設備の損傷+計装用無停電交流電源装置の損傷	4.9E-09	3.3		

※1 主要な事故シークエンスは、同じ事故シークエンスグループに含まれる複数のシークエンスを、シークエンス上の主要な特徴に着目し、詳細化して分類したものである。括弧内は主要な事故シークエンスに含まれるシークエンスのうち、支配的なシークエンスの炉心損傷頻度を示す。

※2 地震PRAでは機器の損傷を完全相関としているため、多重化されたある機器が地震により損傷する場合、他の多重化された機器も全て損傷する。

※3 主要な事故シークエンスの炉心損傷頻度に対するカットセットの寄与割合を示す。

※4 損傷の規模に応じて、常設及び可搬型の低圧原子炉代替注水系による原子炉冷却、常設及び可搬型の格納容器代替スプレイ系による格納容器冷却、又は可搬型のポンプ・電源、放水砲等を駆使した大規模損壊対策により影響緩和を図る。

「水素燃焼」及び「格納容器直接接触（シェルアタック）」を  
格納容器破損モードの評価対象から除外する理由

解釈の第37条 2-1 では、必ず想定する格納容器破損モードの1つとして水素燃焼及び格納容器直接接触（シェルアタック）が挙げられている。

一方、審査ガイドに基づき、格納容器破損モード抽出のための個別プラント評価として実施した、島根原子力発電所 2 号炉の内部事象運転時レベル1.5 P R A では、水素燃焼及び格納容器直接接触（シェルアタック）を格納容器破損モードの評価対象から除外している。以下に、除外理由の詳細を示す。

1. 「水素燃焼」の除外理由

審査ガイドにおける、「水素燃焼」の現象の概要は以下のとおりである。

原子炉格納容器内に酸素等の反応性のガスが混在していると、水-ジルコニウム反応等によって発生した水素と反応することによって激しい燃焼が生じ、原子炉格納容器が破損する可能性がある。

(1) 炉心損傷に伴う原子炉格納容器内の気体の組成及び存在割合の変化

島根原子力発電所 2 号炉では、運転中は原子炉格納容器内を常時窒素で置換しており、酸素濃度は 2.5vol%以下に管理される。一般に可燃限界とされている濃度は、水素濃度が 4 vol%以上かつ酸素濃度が 5 vol%以上の場合である。

ジルコニウム-水反応の程度や水蒸気等他の気体の存在割合にもよるが、燃料温度の著しい上昇に伴ってジルコニウム-水反応が生じる状況になれば、水素濃度は 4 vol%をほぼ上回る。

一方酸素は、事象発生前から原子炉格納容器内に存在している量の他には水の放射線分解によって生じるのみである。このため、炉心損傷後の原子炉格納容器内での水素燃焼の発生を考慮する際には、酸素濃度に着目する必要がある。なお、炉心損傷後の原子炉格納容器内の酸素濃度上昇の観点で厳しいシナリオで評価しても、事象発生から 7 日以内に酸素濃度が 5 vol%を超えることはない。

(2) 内部事象運転時レベル1.5 P R A の格納容器破損モードから除外する理由

内部事象運転時レベル1.5 P R Aにおいて、仮にイベントツリーに水素燃焼に関するヘディングを設けたとしても、上記のとおり、7日以内に酸素濃度が 5 vol%を超えることは無く、また、7日以上原子炉格納容器の機能を維持（破損を防止）しながら酸素濃度の上昇については何

も対応しない状況は考え難いことを考えると、水素燃焼に関するヘディングの分岐確率は0となる。

内部事象運転時レベル1.5 P R Aは、格納容器破損のシーケンスに加えてC F Fを求める評価であることから、発生する状況が想定されない水素燃焼を評価対象とすることは適切でないと考える。

上記の理由により、水素燃焼は内部事象運転時レベル1.5 P R Aの対象から除外した。ただし、有効性評価においては、炉心損傷後の原子炉格納容器内の酸素濃度上昇の観点で厳しいシナリオを考慮し、可燃限界に至らないことを示している。

なお、原子炉格納容器外部からの空気の流入によって酸素濃度が上昇する場合については、既に原子炉格納容器の隔離機能が失われている状況であるため、内部事象運転時レベル1.5 P R Aの対象外となる。

## 2. 「格納容器直接接触（シェルアタック）」の除外理由

審査ガイドにおける、「格納容器直接接触（シェルアタック）」の現象の概要は以下のとおりである。

原子炉圧力容器内の熔融炉心が原子炉格納容器内の床上へ流れ出す時に、熔融炉心が床面で拡がり原子炉格納容器の壁に接触することによって、原子炉格納容器が破損する場合がある。

### (1) 格納容器直接接触（シェルアタック）について

格納容器直接接触（シェルアタック）については、N U R E G / C R - 6025<sup>(1)</sup>において、B W R M a r k - I型格納容器に対する検討が実施されている。B W R M a r k - I型格納容器における格納容器直接接触（シェルアタック）のメカニズムは次のとおり。

炉心損傷後、原子炉圧力容器底部から流出した熔融炉心は原子炉格納容器下部に落下する。この時、B W R M A R K - I型格納容器は原子炉格納容器下部の床面とドライウエル床面が同じ高さに設計されており、圧力容器ペDESTALには切れ込み（第1図）があるため、熔融炉心が原子炉格納容器下部床面に拡がった場合、熔融炉心が切れ込みからドライウエル側に流出して原子炉格納容器の壁面（金属製のライナー部分）に接触する可能性（第2図）がある。

この事象は、原子炉格納容器の構造上、B W R M a r k - I型格納容器特有である。

### (2) 内部事象運転時レベル1.5 P R Aの格納容器破損モードから除外する理由

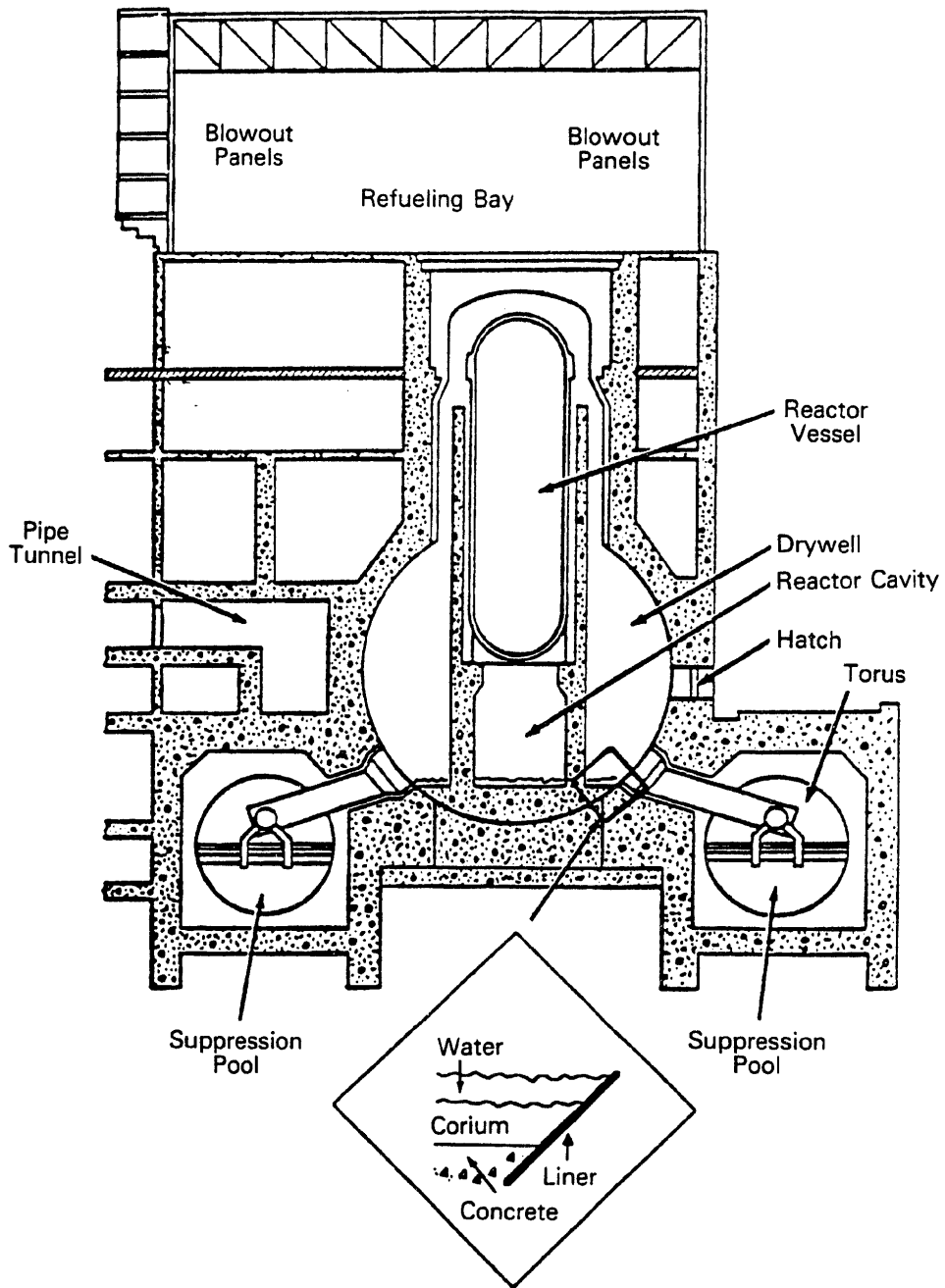
島根原子力発電所2号炉のM a r k - I改良型格納容器は、原子炉格



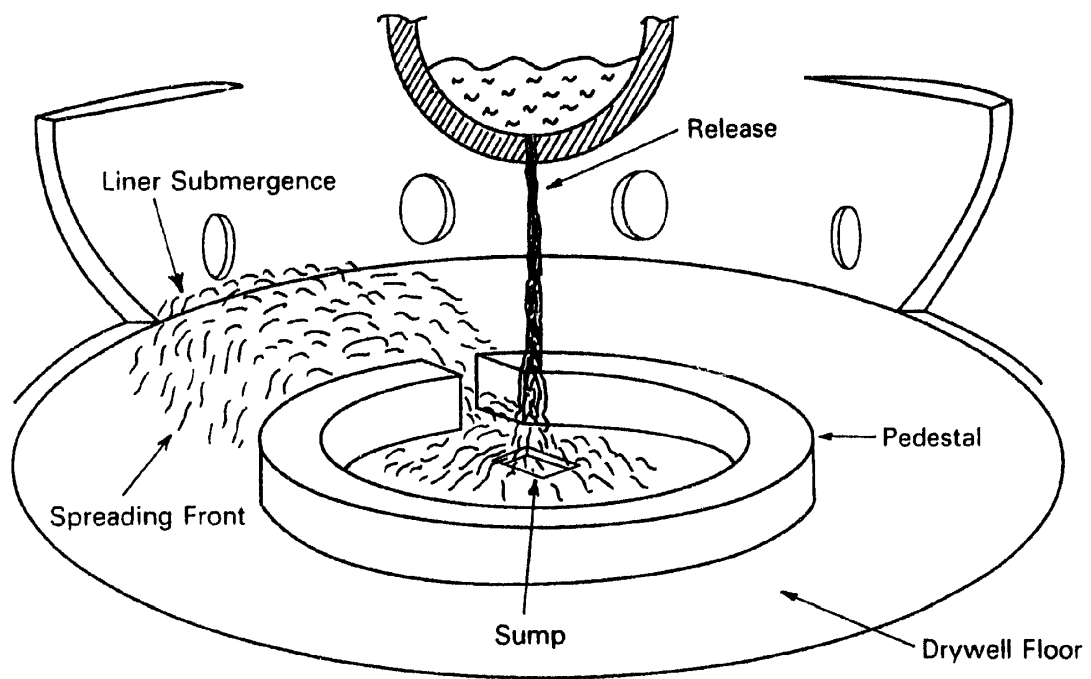
納容器の構造上、原子炉格納容器下部床に落下した溶融炉心が直接格納容器バウンダリと接触することはない（第3図）。このため、溶融炉心が床面で拡がり原子炉格納容器の壁に接触する格納容器直接接触（シェルアタック）の発生の可能性はない。このように、島根原子力発電所2号炉の原子炉格納容器では構造的に発生しない格納容器破損モードであることから、内部事象運転時レベル1.5 P R Aの対象から除外した。なお、同様の理由により有効性評価の評価対象からも除外している。

#### 参考文献

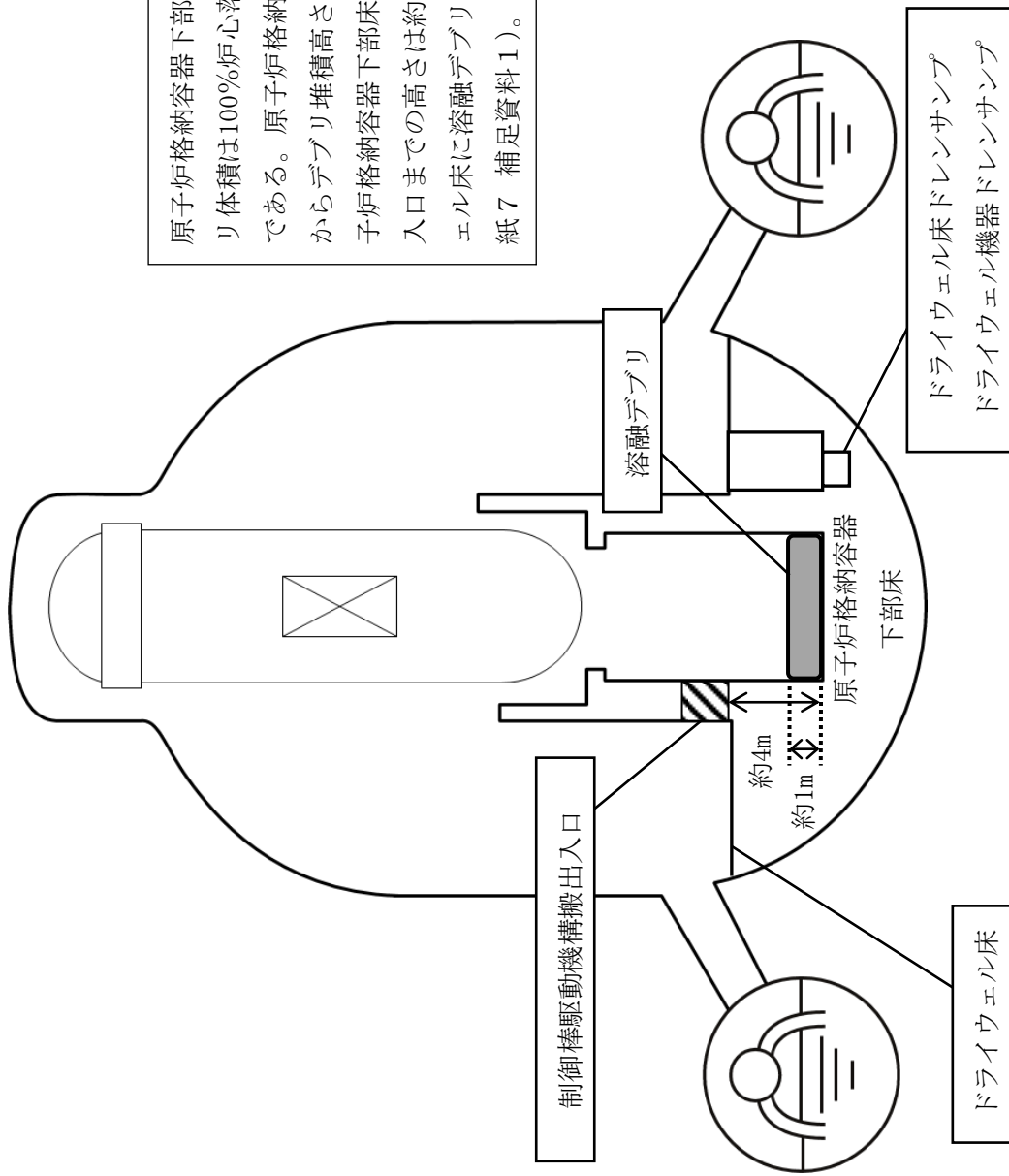
- (1) T.G. Theofanous, et al, The Probability of Mark-I Containment Failure by Melt-Attack of the liner, NUREG/CR-6025, 1993



第1図 BWR Mark-I型格納容器における  
格納容器直接接触<sup>(1)</sup>



第2図 BWR Mark-I型格納容器における  
格納容器直接接触の物理現象図<sup>(1)</sup>



原子炉格納容器下部床上に堆積する溶融デブリ体積は100%炉心落下を想定しても約  $100\text{ m}^3$  である。原子炉格納容器下部床面積約  $100\text{ m}^2$  からデブリ堆積高さは約1mにとどまるが、原子炉格納容器下部床から制御棒駆動機構搬出入口までの高さは約4mであるため、ドライウエル床に溶融デブリが拡がることはない（別紙7 補足資料1）。

第3図 島根原子力発電所2号炉（Mark-I改良型）における溶融炉心と原子炉格納容器下部の位置関係

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

原子炉格納容器下部に落下する溶融デブリ評価条件と落下後の堆積に関する  
考慮について

## 1. 評価に用いた溶融デブリの設定条件

MCC I 評価においては、全炉心に相当する量が溶融炉心として原子炉格納容器下部に落下するものとしており、この溶融炉心には炉内構造物等を考慮している（第1表参照）。

## 2. 溶融デブリの堆積高さ

MCC I 評価では、落下した溶融デブリが原子炉格納容器下部床上に一様に広がるものとしており、この場合の堆積高さは約1mとなる。原子炉格納容器下部に落下した溶融デブリと原子炉格納容器下部の構造の位置関係は別紙7の第3図に示すとおりであり、原子炉格納容器下部の側面の開口部として最も低い箇所にある制御棒駆動機構搬出入口までであっても約4mの高さがあることから、仮に溶融炉心が全量落下しても原子炉格納容器下部以外に溶融デブリが広がるおそれはないと考えられる。

## 3. 溶融デブリの堆積高さの不確かさ

## (1) 原子炉格納容器下部の構造物の影響

原子炉格納容器下部の構造物としては制御棒駆動機構（CRD）交換装置（プラットフォーム、旋回レール等含む。）があり、原子炉圧力容器下部の構造物としてCRDハウジング、中性子計装ハウジング等がある。溶融デブリへこれらの構造物を取り込まれたことを考慮すると、溶融デブリ全体の温度を低下させ、MCC Iを緩和する側に作用すると考えられることから、現在の評価ではこれらの構造物は考慮していない。これらの構造物の重量は全体の溶融デブリ量（約  t）に対して小さく、これらの構造物を考慮した場合でも、溶融デブリ堆積高さの増加分は約0.17mであることから、溶融デブリが原子炉格納容器下部以外に広がるおそれはないと考える。

## (2) 溶融デブリの粒子化に伴う影響

溶融炉心が原子炉格納容器下部に落下する場合、予め2.4mの水張りを実施する手順としていることから、溶融デブリの一部は水中で粒子化するものと考えられる。この時、粒子化した溶融デブリの密度が低いと堆積高さが高くなる。

最も厳しい条件として、デブリが粒子化割合0.38で粒子化した際の堆積高さを評価する。例えば、ポロシティが最も大きな粒子の充填状態である、単純立方格子（ポロシティ0.48）として粒子が堆積する場合を想定すると、溶融デブリの堆積高さは約1.4m、粒子化したデブリの範囲を除いた水プール水

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

深は約 2 m となるが、前述のとおり、原子炉格納容器下部の側面の開口部までは十分な高さがあることから、粒子化に伴う堆積高さの増加を考慮しても、原子炉格納容器下部以外に熔融デブリが拡がるおそれはないと考える。

なお、熔融炉心の比重は 8 程度であり、水と比べて非常に重く、粒子化した熔融デブリは水面に浮遊しないと想定される。

### (3) 熔融炉心の落下の位置及び拡がりの影響

原子炉圧力容器下部から原子炉格納容器下部への熔融炉心の落下の経路<sup>(1)</sup>については、CRDハウジングの逸出に伴う開口部からの落下等が考えられる。原子炉圧力容器の構造からは、熔融炉心は原子炉圧力容器底部の中心に流れ込むと考えられ、原子炉圧力容器底部の中心近傍に開口部が発生し、熔融炉心が原子炉格納容器下部に落下する可能性が高いと推定されるが、開口部の発生箇所については不確かさがあると考えられる。

ここで仮に熔融デブリが偏って堆積し、制御棒駆動機構搬出入口の高さ(約 4 m)に到達する条件を考えると、熔融デブリが直径約 3 m の円柱を形成する必要があるが、熔融デブリの厚さが均一化するまでの時間が 2～3 分程度であるという過去の知見<sup>(2)</sup>を踏まえると、熔融炉心は落下と同時に原子炉格納容器下部床面を拡がり、堆積高さが均一化していくと考えられることから、熔融デブリが制御棒駆動機構搬出入口の高さまで堆積する状況は考えにくい。

また、熔融炉心の落下位置及び堆積形状に係る知見として、近年、以下のものがある(第 2 表参照)。

- ・東京電力株式会社福島第一原子力発電所 2 号炉における格納容器下部の調査結果により熔融炉心が圧力容器の中心位置から偏って落下した可能性がある。
- ・PULiMS 実験<sup>(3)</sup>において確認された熔融デブリの堆積高さ及び拡がり距離のアスペクト比が確認されている。

これらの知見を踏まえ、熔融炉心が原子炉圧力容器の中心位置から偏って落下し、熔融デブリが円錐上に堆積するという仮定で堆積高さを評価した場合においても、熔融デブリ堆積の頂点位置における高さは、約 2.2 m であり、制御棒駆動機構搬出入口の高さ(約 4 m)を下回っている評価結果となった(第 2 図)。

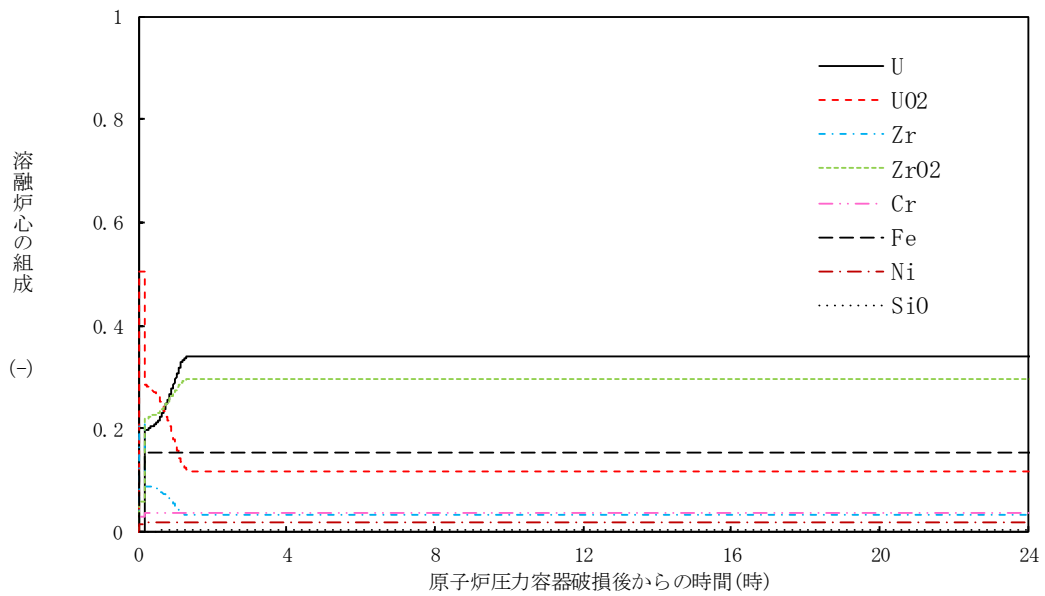
よって、熔融炉心が圧力容器下部の偏心位置から落下し円錐上に堆積した場合においても、原子炉格納容器下部以外に熔融デブリが拡がるおそれはないと考える。

第1表 溶融炉心に関する評価条件

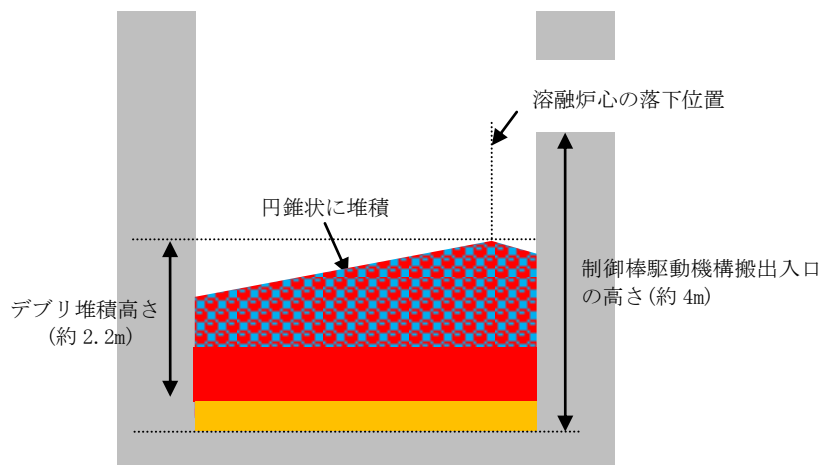
項目	設定値	設定根拠
溶融炉心落下割合	100% (約 <input type="text"/> t)	保守的に全炉心相当量が落下するものとして設定
溶融デブリの組成	第1図参照	MAAP評価結果 (炉内構造物の組成・質量等を考慮)
原子炉格納容器下部 床面積	約 <input type="text"/> m <sup>2</sup>	設計値

第2表 溶融デブリの堆積高さ評価に係る近年得られた知見について

項目	概要	今回評価上の扱い
溶融炉心の落下位置	平成29年2月の東京電力株式会社福島第一原子力発電所2号炉における格納容器下部の調査結果により、格納容器下部の中心軸から外れた位置のグレーチングの落下が確認されている。グレーチングの落下理由の1つとして、圧力容器から流出した溶融炉心が中心位置から偏った位置に落下したことが考えられる。	溶融炉心が圧力容器下部の偏心位置から落下したことを考慮した場合、格納容器壁面に近い方がより保守的な条件であるため、溶融炉心が最外周の制御棒駆動機構位置から落下すると仮定して、評価を行った。
堆積形状	PULiMS実験は溶融物を水中に落下した実験であり、溶融デブリの堆積高さと拡がり距離のアスペクト比としては1:18~1:14程度となっている。	溶融デブリの堆積形状として、保守的に、1:14の円錐状に堆積すると仮定して、評価を行った。



第1図 溶融炉心の組成の推移



第2図 デブリ堆積高さと制御棒駆動機構搬出入口の高さ関係

参考文献

- (1) 「沸騰水型原子力発電所 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コード(MAAP)について」, 東芝エネルギーシステムズ株式会社, TLR-094, 日立GEニュークリア・エナジー株式会社, HLR-123, 平成30年5月
- (2) J. D. Gabor, L. Baker, Jr., and J. C. Cassulo, (ANL), “Studies on Heat Removal and Bed Leveling of. Induction-heated Materials Simulating FuelDebris,” SAND76-9008 (1976).



(3) A. Konovalenko et al., Experimental Results on Pouring and Underwater Liquid Melt Spreading and Energetic Melt-coolant Interaction, NUTHOS-9, Kaohsiung, Taiwan, September 9-13, 2012.

## 格納容器隔離失敗の分岐確率の妥当性と隔離失敗事象への対応について

内部事象運転時レベル 1.5 P R Aにおいて、格納容器隔離失敗として参考としている N U R E G の想定及び実際の格納容器隔離失敗の想定並びに格納容器隔離失敗事象への対応について以下にまとめる。

### 1. 格納容器隔離失敗の分岐確率の設定について

#### (1) 分岐確率の設定根拠について

内部事象運転時レベル 1.5 P R A では、炉心損傷の時点で原子炉格納容器の隔離に失敗している場合を考慮しており、これを「格納容器隔離」のヘディング（分岐確率  $5.0 \times 10^{-3}$ ）として設定している。

この分岐確率は、原子炉格納容器の隔離システムの信頼性について評価している N U R E G / C R - 4220<sup>(1)</sup> を基に設定している。N U R E G / C R - 4220 では、米国の L E R (Licensee Event Report) (1965 年～1984 年分) を分析しており、原子炉格納容器からの大規模漏えいが生じた事象 4 件を抽出し、これを評価時点での運転炉年 (740 炉年) で割ることにより、格納容器隔離失敗の発生頻度 ( $5.0 \times 10^{-3}$  / 炉年) を算出している。さらに、格納容器隔離失敗の継続時間の情報がないことから、工学的判断として原子炉格納容器の隔離機能が確認される間隔を 1 年とし、上記の発生頻度に 1 年を掛けることにより、「格納容器隔離」の失敗確率としている。

本評価においても、原子炉格納容器の隔離機能は少なくとも 1 年に 1 回程度は確認されるもの (1 サイクルに 1 回程度) と考え、上記の発生頻度に 1 年を掛けることにより、「格納容器隔離」の失敗確率としている。

なお、N U R E G / C R - 4220 では、潜在的な漏えいが発生する経路として、ベント弁等の大型弁の故障や原子炉格納容器の壁に穴が空く事象等の直接的な破損を考えている。

ここで抽出された 4 件以外にもエア・ロック開放に関する事象が 75 件発生しているが、これらの事象は数時間以内と短時間であり、大規模な漏えい事象には至っていない。

第 1 表 大規模漏えいとして抽出された事象<sup>(1)</sup>

Reactor	Year	Event
Oconee 1	1973	Isolation Valves Open
San Onofre 1	1977	Holes in Containment
Palisades	1979	By-pass Valves Open
Surry 1	1980	Holes in Containment

また、上記の大規模漏えい事象はいずれも PWR で発生した事象であり、BWR においては、出力運転中は原子炉格納容器内を窒素置換し管理しているため、原子炉格納容器からの漏えいが存在する場合は、格納容器圧力の低下等により速やかに検知できる可能性が高いと考えられる。

(2) 島根原子力発電所 2 号炉において想定される格納容器隔離失敗（漏えい経路）

島根原子力発電所 2 号炉における原子炉格納容器からの漏えい経路は、機械的破損及び人的過誤による隔離機能喪失であり、以下に示すものが想定される。

a. 機械的な破損による隔離失敗

(a) アクセス部からの漏えい

ドライウェル上ぶた、機器搬入用ハッチ、所員用エア・ロック等のアクセス部のシール部又は溶接部が破損している場合には、原子炉格納容器内の雰囲気漏えいする可能性がある。

(b) 原子炉格納容器バウンダリ配管等からの漏えい

格納容器スプレイ配管、窒素ガス制御系、可燃性ガス濃度制御系等は原子炉格納容器内の雰囲気と連通しており、これらのバウンダリが破損している場合には、原子炉格納容器内の雰囲気が漏えいする可能性がある。

(c) 原子炉格納容器の貫通部からの漏えい

原子炉格納容器の電気配線貫通部や配管貫通部が破損している場合には、原子炉格納容器内の雰囲気が漏えいする可能性がある。

b. 人的過誤による弁・フランジの復旧忘れ

(a) 漏えい試験配管からの漏えい

定期事業者検査時の原子炉格納容器漏えい試験の後に、試験配管隔離弁の復旧忘れ等がある場合には、原子炉格納容器内の雰囲気が漏えいする可能性がある。

なお、上述のとおり、島根原子力発電所 2 号炉においては出力運転中に原子炉格納容器内の雰囲気を窒素置換することとしており、原子炉格納容器内の状態を日常的に監視することから、仮に今回想定したような大規模な漏えいが生じた場合、速やかに検知できる可能性が高いと考えられる。

(3) 最近の米国の格納容器隔離失敗実績に関する参考文献

今回の内部事象運転時レベル 1.5 P R A では、1984 年までのデータを用いた N U R E G / C R - 4220 に基づいた隔離失敗確率を用いている。それ以降の格納容器隔離失敗に関連する情報として、米国の漏えい率試

験間隔延長に関するリスク影響評価の報告書<sup>(2)</sup>（以下「E P R I 報告書」という。）がある。

E P R I 報告書では、2007 年までの米国における I L R T（Integrated Leak Rate Test：全体格納容器漏えい試験）の実績 217 件が整理されている。このうち、大規模漏えいに至る事象としては保守的に設計漏えい率の 35 倍を基準としているが、その発生実績は 0 件となっている。

E P R I 報告書では、大規模漏えいに至る事象実績を I L R T 試験数で除することで隔離機能喪失の確率を概算している。すなわち、大規模漏えいに至る事象発生実績 0 件（計算上 0.5 件としている）を I L R T 試験数 217 件で除すると隔離機能喪失の確率は  $2.3 \times 10^{-3}$  ( $0.5 / 217 = 0.0023$ ) となる。この値は、N U R E G / C R - 4220 で評価された格納容器隔離失敗確率の  $5.0 \times 10^{-3}$  よりも小さい値となっており、E P R I 報告書の結果を考慮しても、N U R E G / C R - 4220 の評価結果を適用することは妥当であると考えられる。

## 2. 格納容器隔離失敗事象への対応

格納容器隔離失敗事象には、炉心損傷の時点で原子炉格納容器の隔離に失敗している場合や、原子炉圧力容器に繋がる高圧配管が原子炉格納容器外で破断した後に炉心損傷に至る場合、低圧配管との接続部で破断した後に炉心損傷に至る場合（インターフェイスシステム L O C A）が含まれている。

内部事象運転時レベル 1.5 P R A では、炉心損傷の時点で原子炉格納容器の隔離に失敗している場合を考慮している。P R A 上、具体的な隔離失敗（漏えい）箇所を設定しているものではないが、万一、炉心損傷の時点で原子炉格納容器の隔離に失敗していた場合には、隔離失敗（漏えい）箇所の隔離を試みることとなる。

このため、本事象への対応としては、炉心損傷頻度の低減を図るとともに、万一の重大事故発生時に原子炉格納容器の隔離に失敗していることのないよう、原子炉格納容器の漏えいに対する検知性を向上させることが有効であり、これらについては重大事故等対処設備や日常の原子炉格納容器の圧力監視等で対応している。

また、炉心損傷の時点で原子炉格納容器の空間部に繋がる配管が原子炉格納容器外で破断した場合には、破断箇所の隔離を試みることとなる。

主蒸気系配管等、原子炉圧力容器に繋がる配管が原子炉格納容器外で破断した後に炉心損傷に至る場合については、配管破断の発生頻度が十分に低いため、インターフェイスシステム L O C A を除いて P R A 上はモデル化していない。仮に配管破断が生じた場合には、破断箇所の隔離、原子炉圧力容器の急速減圧、水位低下・維持操作等、インターフェイスシステム

LOCAの場合と同様の対応をとることとなる。

参考文献

- (1) P. J. Pelto, et al, Reliability Analysis of Containment Isolation Systems, NUREG/CR-4220, 1985
- (2) Risk Impact Assessment of Extended Integrated Leak Rate Testing Intervals: Revision 2-A of 1009325, EPRI, Palo Alto, CA: 2008.  
1018243

原子炉圧力容器内における水蒸気爆発を格納容器破損モードの  
評価対象から除外する理由について

## 1. 現象の概要

原子炉圧力容器内での水蒸気爆発による原子炉格納容器の破損は $\alpha$ モード破損と呼ばれ、WASH-1400から研究が続けられてきた。この現象は、熔融炉心が原子炉圧力容器の炉心下部プレナムに溜まっている水中に落下した時に水蒸気爆発が発生し、それにより水塊がミサイルとなって炉内構造物を破壊し、原子炉圧力容器上蓋に衝突することで上蓋を固定するボルトを破壊し、上蓋が原子炉格納容器に衝突して原子炉格納容器の破損に至るといふ現象である。

原子炉内での現象は、以下のようなメカニズムであると考えられている。

- ① 原子炉内の原子炉冷却材が喪失し、炉心が熔融して、その熔融炉心が炉心下部プレナムの水中に落下する。水と接触した熔融炉心は、その界面の不安定性により、熔融炉心の一部又は大部分が分裂し、膜沸騰を伴う水との混合状態となる（粗混合）。さらに、自発的又は外部からの圧力パルスにより、膜沸騰が不安定化し（トリガリング）、二液が直接接触する。
- ② 炉心下部プレナムにおける二液の直接接触により、急速な熱の移動が発生し、急速な蒸気発生・熔融炉心の微細化によって、更に液体どうしの接触を促進し（伝播）、蒸気発生を促進する。この蒸気発生により、圧力波が発生する。
- ③ 発生した圧力波が通過した後の高温高圧領域（元々は粗混合領域）の膨張により運動エネルギーが発生し、それにより水塊がミサイルとなって炉内構造物を破壊し、原子炉圧力容器上蓋に衝突することで上蓋を固定するボルトを破壊し、上蓋が原子炉格納容器に衝突して原子炉格納容器の破損に至る。

## 2. 専門家会議等の知見

原子炉圧力容器内における水蒸気爆発については、国際的な専門家会議において議論がなされてきた。第1表にBWR体系の原子炉圧力容器内における水蒸気爆発に関する専門家会議の知見をまとめる。

専門家の間での議論の結果として、BWR体系では下部プレナムに制御棒案内管等が密に存在しており、これらは熔融炉心落下時の粗混合を制限すると考えられるため、原子炉圧力容器

内における水蒸気爆発は格納容器破損の脅威とはならないと結論付けられている。

### 3. まとめ

これまでに実施された専門家間における議論の結果から、BWR体系では原子炉圧力容器内における水蒸気爆発（炉内FCI）発生の可能性は十分小さいと考えられる。

したがって、BWRにおける原子炉格納容器破損モードとして、原子炉圧力容器内における水蒸気爆発（炉内FCI）の考慮は不要である。

### 参考文献

- (1) T. Okkonen, et al, Safety Issues Related to Fuel-Coolant Interactions in BWR' S, NUREG/CP-0127, 1994
- (2) T.G. Theofanous, et al, Steam Explosions: Fundamentals and Energetic Behavior, NUREG/CR-5960, 1994
- (3) S. Basu, T. Ginsberg, A Reassessment of the Potential for an Alpha-Mode Containment Failure and a Review of the Current understanding of Broader Fuel-Coolant Interaction (FCI) issues, Report of the Second Steam Explosion Review Group Workshop (SERG-2), NUREG-1524, 1996
- (4) O. Zuchuat, et al, Steam Explosions-Induced Containment Failure Studies for Swiss Nuclear Power Plants, JAERI-Conf 97-011, 1998

第1表 炉内 F C I 現象の発生確率に関する議論の整理

著者	会議/文献	議論
Okkonen等 (1993)	O E C D / C S N I F C I 専門家 会議 (1993) <sup>(1)</sup>	B W R の原子炉圧力容器下部プレナムは、制御棒案内管で密に占められている。そして、炉心の広範囲でのコヒーレントなリロケーションは、炉心支持板の存在により起こりにくいと考えられる。このような特徴によって、燃料-冷却材の粗混合のポテンシャルが制限され、水蒸気爆発に起因する水-溶融物スラグの運動エネルギーを消失させる可能性がある。したがって、スラグにより破壊された原子炉圧力容器ヘッドのミサイルに伴う格納容器破損は、P W R よりも B W R の方が起こりにくいと評価される。
Theofanous等 (1994)	N U R E G / C R - 5960 (1994) <sup>(2)</sup>	B W R の下部プレナムには、密に詰められた制御棒案内管があるため、原子炉圧力容器内における水蒸気爆発問題の対象とならない。
Corradini (1996)	S E R G - 2 ワークショップ (1996) <sup>(3)</sup>	物理的なジオメトリは爆発的事象の発生に寄与しないため、B W R の $\alpha$ モードによる格納容器破損確率は、おそらく P W R より小さい。
Zuchuat等 (1997)	O E C D / C S N I F C I 専門家 会議 (1997) <sup>(4)</sup>	下部プレナム構造物の存在により、水蒸気爆発の影響を緩和する。  現在の知見は、一般に B W R では原子炉圧力容器内における水蒸気爆発は原子炉格納容器への脅威とならない。



## 島根原子力発電所 2 号炉 P R A ピアレビュー実施結果について

### 1. 目的

事故シーケンスグループ及び格納容器破損モードの選定にあたり実施した P R A の妥当性確認及び品質向上を目的として、国内外の P R A 専門家によるピアレビューを実施した。今回実施したピアレビュー結果の概要は以下のとおり。

### 2. 実施内容

今回実施した以下に示す各 P R A を対象に、日本原子力学会標準との整合性及び、国内外の知見を踏まえた P R A 手法の妥当性について確認を行った。なお、本ピアレビューでは第三者機関から発行されている「P S A ピアレビューガイドライン(一般社団法人日本原子力技術協会)」(以下「ガイドライン」という。)を参考にレビューを行った。

#### 2.1 レビュー対象となる P R A

- ・内部事象運転時レベル 1 P R A
- ・地震レベル 1 P R A
- ・津波レベル 1 P R A
- ・内部事象運転時レベル 1.5 P R A
- ・内部事象停止時レベル 1 P R A

#### 2.2 レビュー体制

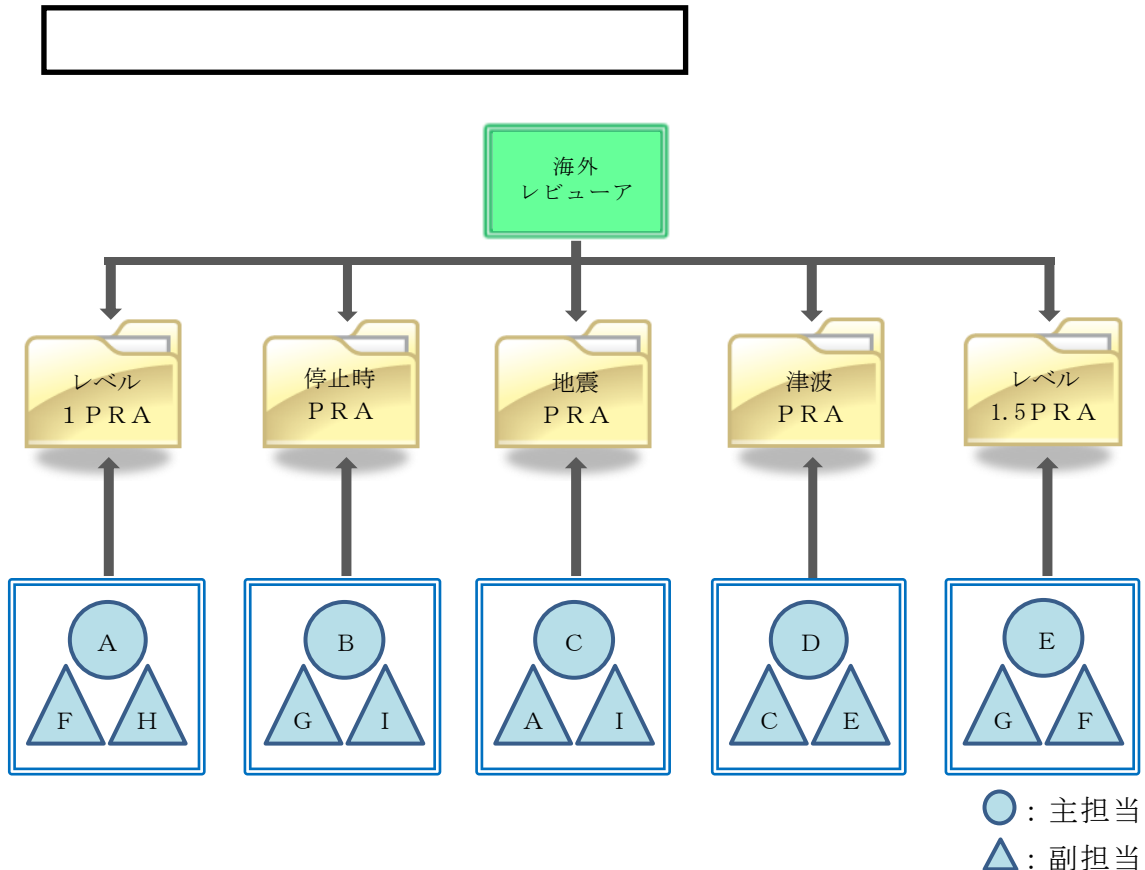
レビューアの選定に当たっては、ガイドラインに従い、専門性、経験、独立性及び公正性の 4 つの要素を考慮して以下のとおり選定した。なお、レビューの実施に当たっては多面的な視点で評価する観点から、各 P R A はレビューチームのうち複数のメンバー(主担当、副担当)がレビューを行うこととした。また、今回実施したレビュー実施方法を含め P R A 全般を俯瞰した視点から改善事項を抽出する観点で P R A の経験豊富な海外レビューアを招へいし、米国での P R A 実施状況との比較に基づく助言を得ることとした。(第 1 図)

○国内レビューア：10名



本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

○海外レビューア：1名



第1図 レビュー体制のイメージ

### 2.3 レビュー方法及び内容

(1) 事前準備（情報収集及び分析）：約1週間

オンサイトレビューを効率的かつ効果的に実施するために、各レビューアに事前にPRAの概要資料を提出し、全体の内容把握及びオンサイトレビューにおいて重点的に内容を確認する項目の抽出・整理する期間を設けた。

(2) オンサイトレビュー：1週間

国内外のレビューアにより、各PRAの文書化資料を基に学会標準適合性等についてレビューを実施した。レビューに際しては、適宜同席したPRA実施者（当社社員及びプラントメーカー技術者）と質疑応答を行い、具体的な内容・課題を共有しながら進めた。

(3) ピアレビュー結果報告書の作成：約3週間

オンサイトレビューにおけるレビューアとPRA実施者による質疑応答を文書化するとともに、レビュー結果の整理に際して発生した追加質問事項にかかる確認を行い、今回実施したピアレビューの実施結果報告書を作成した。

(4) ピアレビュー結果の確認、対応方針検討：約1ヶ月

ピアレビュー報告書に記載された推奨事項等の詳細内容を確認する

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

とともに、各項目に対する今後の方向性を検討した。

### 3. 結果の概要

#### 3.1 国内レビューアからのコメント

レビューの結果、国内レビューアからのコメントは以下に示すとおりであり、学会標準への不適合や評価手法に問題があるとされる「指摘事項」は0件であり、今回実施したPRAの評価結果に影響を及ぼすような技術的な問題点はないことが確認された。(第1表、第2図)

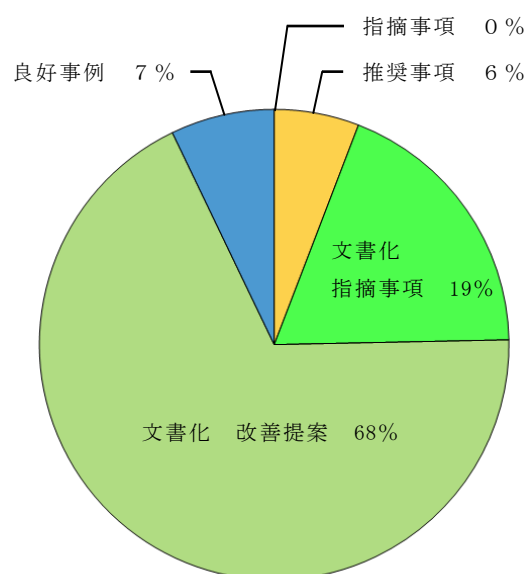
一方、PRAの更なる品質向上に資すると考えられる「推奨事項」として起因事象発生頻度の設定方法等に関するコメントを9件、また、文書化における指摘事項及び改善提案として合計134件を受けており、これらについては今後PRAを実施する際に有効活用していくこととする。

主なコメント内容について以下に示す。

第1表 国内レビューアによるコメント件数(60件)

		内部事象 運転時 レベル1 PRA	内部事象 停止時 レベル1 PRA	地震 レベル1 PRA	津波 レベル1 PRA	内部事象 運転時 レベル1.5 PRA	合計
指摘事項		0	0	0	0	0	0
推奨事項		2(3)	1(1)	2(5)	0	0	5(9)
文書化	指摘事項	5(11)	7(7)	3(10)	0	1(1)	16(29)
	改善提案	6(19)	16(35)	2(23)	4(13)	5(15)	33(105)
良好事例		4(5)	1(1)	0(4)	1(1)	0	6(11)

注) コメントのうち、内容及び趣旨が同様であるものについては複数のコメントをまとめて整理している(カッコ中の数字は、コメントの総数を示す)。



第2図 全コメントに対する各コメントの割合

### 3.1.1 指摘事項

今回実施した各P R Aはそれぞれの学会標準を参考に評価を実施したものであり、レビュー結果からも学会標準への不適合箇所やP R Aの評価結果に影響を及ぼすような技術的な問題点はないことが確認できた。

### 3.1.2 推奨事項

学会標準適合性とは別に更なる品質向上に資するものとして、5件の推奨事項が挙げられた。国内レビューアによる各P R Aに対する推奨事項を第2表～第4表に示す。具体的には「起因事象の発生頻度」及び「不確実さ解析」に関する内容であったが、これらの推奨事項は、現状の評価手法に対して更なる説明性の向上に資するものと考えられることから、評価手法改善に向けた調査・検討を実施していく。

### 3.1.3 文書化における指摘事項及び改善提案

今回のピアレビューで挙げられた文書化における指摘事項は29件、改善提案は105件であり、評価内容が詳細に文書化されていない事例が多く挙げられた。それらのうち多くは過去評価時の資料に文書化されているものを引用したことで改めて文書化しなかった事例である。文書化については実施したP R Aモデルの内容を説明するうえで重要な要素であり、引用文献の該当箇所を掲載しておくことがP R Aの品質上望ましいと考えられることから、今後、文書化の際に改善を図っていく。文書化に関するコメントの一例を以下に示す。

#### ① 文書化における指摘事項

フロントライン系及びサポート系の双方について、各システムの成功基準（要求機能達成に必要な設備の組合せ、台数等）を追記する必要がある。（内部事象運転時レベル1 P R A）

#### ② 文書化における改善提案

復旧操作のクレジットの有無、クレジットをとる場合の手順書類との整合性を示すことが望ましい。（内部事象運転時レベル1.5 P R A）

### 3.1.4 良好事例

今回のピアレビューで挙げられた良好事例は11件であり、内部事象運転時レベル1 P R Aに関する事例が多かった。主な良好事例は以下のとおりであり、今回、良好事例として挙げられた項目については、今後も引き続き継続実施していくとともに、更なる品質向上に努めていく。

〈主な良好事例〉

#### ① 事故シーケンスの定量化

計算コードの確認・検証の一環としてE P R IのC A F T Aとの比較による検証が行われている。（内部事象運転時レベル1 P R A）

## ② 不確実さ解析と感度解析

個別プラントの起因事象発生頻度及び機器故障率をベイズ更新で求めたうえで、感度解析が行われている。また、米国における最新の共通原因故障パラメータを用いた感度解析が行われている。(内部事象運転時レベル1 P R A)

### 3.2 海外レビューアからのコメント

海外レビューアからは、主に米国で実施されている P R A と日本で実施されている P R A との相違点を踏まえた提案・気づき事項が示された。海外レビューアから示されたコメントのうち、P R A の品質向上に資するものは 15 件であった。海外レビューアからの各 P R A に対するコメントを第 5 表～第 8 表に示す。今回実施した P R A は学会標準に適合した手法を用いて評価を実施しているが、海外での P R A 実施状況についても適宜参考にし、引き続き検討が必要なコメントの取扱いを含め、より品質の高い P R A の実施に向けて今後の対応を検討していく。

### 4. まとめ

島根原子力発電所 2 号炉の各 P R A を対象としたピアレビューの結果、国内レビューアからの指摘事項は無かったが、推奨事項や文書化に対する指摘事項等が複数示された。これらのコメントに対しては、P R A の更なる品質向上に資するものと考えられることから、今後対応を検討する。さらに、海外レビューアから受けたコメントについても、より品質の高い P R A となると考えられることから、併せて対応を検討する。

第2表 国内レビューアによる内部事象運転時レベル1 PRAに対するコメント

分類	コメント内容	対応方針／実施状況
人間信頼性解析	同一の事故シーケンスやカットセットに含まれる人的過誤間の依存性を確認し、その影響について検討することが望ましい。検討するに当たっては、例えばモデルで考慮されているすべての人的過誤を仮想的に1.0と設定してカットセットを導出し、そのカットセットに人的過誤が多重に含まれていないか確認したうえで、それらの依存性について検討する方法がある。(レベル1 P S A学会標準 9.7.2)	<b>【対応検討中】</b> 今回の評価では、人的過誤確率の影響としてストレスレベルを考慮し、人的過誤確率を変更することで感度を確認している。推奨された同一の事故シーケンスやカットセットに含まれる人的過誤間の依存性については、従属性の定量化について引き続き検討が必要な事項であることから、今後実施する安全性向上評価に係るPRAにおいて検討を行う。
	不確かさの伝播解析について、使用している手法の妥当性を確認するか、THERPのAppendix-Aを用いるか、モンテカルロ法により求めるか、のいずれかを推奨する。(レベル1 P S A学会標準 9.6.3)	<b>【対応済】</b> 現状エラーファクタに関してはTHERP (NUREG/CR-1278) Table20-20 から決定している。本エラーファクタはAppendix-A 記載のモーメント法による算出も実施しており、エラーファクタの算定結果に大きな差がなかったことを確認している。
成功基準の設定	本評価は設計基準ベースであるため、設計基準の評価に用いているコードで対応できる。ただし今後設計基準とは異なるアクシデントマネジメント策等の評価を行う場合には、詳細解析コードを評価に用いることが望ましい。(レベル1 P S A学会標準 6.1.4)	<b>【対応済】</b> 重要事故シーケンスの有効性評価で解析コードを用いた評価を行っている。解析コードは許認可コードであるが、入力等にて保守的な条件ではなく、詳細コードと同様な現実的な評価ができるように対応している。

第3表 国内レビューアによる内部事象停止時レベル1 PRAに対するコメント

分類	コメント内容	対応方針／実施状況
人間信頼性解析	不確かさの伝播解析について、使用している手法の妥当性を確認するか、THERPのAppendix-Aを用いるか、平均値をモンテカルロ法により求めるかのいずれかを推奨する。(停止時P S A学会標準 10.3.3.3)	<b>【対応済】</b> 内部事象運転時レベル1 PRAと同様に現状エラーファクタに関してはTHERP (NUREG/CR-1278) Table20-20 から決定している。本エラーファクタはAppendix-A 記載のモーメント法による算出も実施しており、エラーファクタの算定結果に大きな差がなかったことを確認している。

第4表 国内レビューによる地震レベル1 PRAに対するコメント

分類	コメント内容	対応方針／実施状況
建物・機器フラジリティ評価	<p>取水槽、非常用ガス処理系ダクトのフラジリティは、原子炉建物の安全係数法の結果を保守的な一般値として採用されている。一方、今回の重要事故シーケンスを求めることを目的とした解析においては、炉心損傷に直結する取水層、非常用ガス処理系ダクトのフラジリティが最終的に得られる機器等の重要度に影響を与える可能性がある。よって今後詳細に評価を行う場合には、より精度の高い詳細法により個別評価を行った結果を適用することを推奨する。(地震PSA学会標準 6.3)</p>	<p><b>【対応済】</b> 取水槽、非常用ガス処理系ダクトのフラジリティは、これまで原子炉建物の安全係数法の結果を保守的な一般値として採用していたが、安全係数法による個別評価を行うことで対応する。</p>
	<p>地盤のすべりのモデルとして保守的に2次元モデルが適用されており、そのために安全率1.00となる地震動が小さくなり、斜面崩壊が無視できない事象として取り上げられている。本来斜面は3次元的な拘束を受けており、2次元モデルで得られる安全率にくらべ大きい安全率を有しているものであると考えられる。一方、現時点で2次元モデルと同様に、シーム層にジョイント要素を適用するような詳細な3次元モデルでの評価は技術的に困難であることも事実である。将来的には、簡易な3次元モデル等の活用により、3次元的な拘束力の影響を把握し、この影響程度を考慮したすべり安全率について検討を行うことを推奨する。(地震PSA学会標準 6.4.2.3)</p>	<p><b>【対応済】</b> 現時点において、シーム層にジョイント要素を適用するような詳細な3次元モデルによる評価手法は確立していないことから、2次元モデルによる保守的な評価を行っている。</p>
事故シーケンス評価	<p>階層イベントツリーに含まれる非保守性の影響に関する定量的な確認を実施することが望ましい。(地震PSA学会標準 7.2.2 a))</p>	<p><b>【対応済】</b> 外部電源喪失を最初のヘディングとしていることに関して、外部電源が利用可能な場合のリスク評価を行い、炉心損傷頻度及び主要な事故シーケンスに有意な影響が生じないことを確認した。</p>
	<p>モデルで考慮している地震時の手動操作（手動減圧操作）については、地震時の影響を考慮した取り扱い（人的過誤確率を10倍に設定）がなされていることを確認したが、それ以外の事故後の人的過誤事象も含めて、地震時の影響を検討することが望ましい。(地震PSA学会標準 7.4.2.4 b) 2))</p>	<p><b>【対応済】</b> 地震時には耐震クラスの低い設備が使用不能になることを考慮し、人的過誤事象の再検討を行った結果、原子炉隔離時冷却系水源切替についても地震影響を考慮することとした。</p>
	<p>本評価では、同様の系統及び機器の間の損傷を完全従属とした場合をベースケースとしたうえで、感度解析としてFV重要度上位の機器についてその相関がない場合の解析を実施しているが、それ以外の条件での解析は実施していない。機器の間の相関は冗長な同様の機器の間だけではなく、特に地震時の応答は様々な機器の間に相関があることから、それが炉心損傷頻度に及ぼす影響について検討することが望ましい。(地震PSA学会標準 7.5.6)</p>	<p><b>【対応済】</b> 「機器の間の相関は冗長な同様の機器の間だけではなく、特に地震時の応答は様々な機器の間に相関がある」とあるが、これに対応して解析を実施するためには現実的な相関係数を設定して同時損傷確率を求める必要がある。しかし、現実的な相関係数の設定は十分な知見がなく、仮に実施するのであれば過度に保守的な仮定の値を用いることが考えられる。保守的な仮定の値を設定する場合のひとつの考え方が完全相関（完全従属）であり、それと完全従属との感度を確認していることから、現実的な相関を考慮した場合の影響は、その感度の中に含まれると考えられる。</p>

第5表 海外レビューアによる内部事象運転時レベル1 PRAに対するコメント

分類	コメント内容	対応方針
<p>起因事象の選定及び発生頻度の評価</p>	<p>(サポート系故障による起因事象)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本PRAでは、一つの起因事象として 原子炉補機冷却系トレイン (トレインA又はB) の故障を起因事象として考慮している。</li> <li>・ 本PRAでは、サポート系故障による起因事象の発生頻度の計算に、“Jeffery Non-Informative Prior” 法を用いている。系統・トレイン故障の起因事象発生頻度は、フォールトツリーモデルを用いて計算すべきである。</li> <li>・ 大破断LOCAの発生位置を考慮すべきである。例えば、高圧炉心スプレイ注水ラインで一つの破断が発生し大破断LOCAに至った場合、その高圧炉心スプレイは大破断LOCA事象の緩和には利用できなくなる。</li> <li>・ 大破断LOCAの発生箇所を考慮しない場合、その大破断LOCA事象を緩和するためにすべての緩和事象が利用可能であると想定したモデルは楽観的なものになる可能性がある。</li> <li>・ 大破断LOCA事象について、高圧炉心スプレイ系、低圧炉心スプレイ系、残留熱除去系 (低圧注水モード)、残留熱除去系の各注水ラインに関連する大破断LOCAを別々にモデル化することを推奨する。</li> <li>・ 原子炉冷却材再循環ラインの破断も大破断LOCAとして考慮すべきである。</li> </ul>	<p>【対応検討中】</p> <p>今回の評価では、発生実績が0件の事象については0.5件として発生頻度を求めているため、保守的な評価結果になっているが、0件の実績のものを精度良く評価する手法としてフォールトツリー法がある。フォールトツリー法の適用については、海外での取り扱いを調査するとともに今後の安全性向上評価に係るPRAへの適用を含め、検討を行う。</p> <p>【対応済】</p> <p>破断がECCS配管で生じた場合には当該ECCSの緩和に期待できないものとして、炉心損傷頻度を算出し、破断箇所を特定しない場合と炉心損傷頻度が同等であることを確認している。 (第125回審査会合資料別紙1.1.1-4に記載済。)</p>
<p>人間信頼性解析</p>	<p>人間信頼性解析は運転員からの情報を取り入れているか。PRAにおいてモデル化される運転員操作について運転員にインタビューすることによって、情報を得ることができる。</p>	<p>【対応検討中】</p> <p>今回の評価では、PRA評価担当者のほか、運転員によるイベントツリーやフォールトツリーの確認作業を実施している。人間信頼性解析モデルの妥当性について、運転員に対するインタビューは実施しておらず、今後実施する安全性向上評価に係るPRAにおいて検討を行う。</p>
<p>不確実さ解析及び感度解析</p>	<p>以下に基づいて感度解析を実施すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 内部事象運転時レベル1PRAの結果:炉心損傷頻度</li> <li>・ 緩和系の成功基準や事故シーケンスにおける仮定</li> </ul> <p>パラメータの不確実さに基づいて不確実さ解析を実施すること。つまり、起因事象発生頻度、機器のアンアベイラビリティ及び故障率、人的過誤確率等における不確実さ。</p>	<p>【対応済】</p> <p>成功基準解析においては許認可コードを用いて、現実的な解析条件にて評価しており、感度解析が必要な不確実さは見当たらない。事故シーケンスについては、TBWシーケンスの高圧炉心スプレイ系ポンプの運転継続性について検討しており、事故シーケンス分類を変更した場合の影響も確認している。したがって、新たな感度解析を実施する項目はない。</p> <p>【対応済】</p> <p>起因事象発生頻度、機器故障率、人的過誤確率等のパラメータの不確実さに基づき、不確実さ解析を実施している。</p>



第6表 海外レビューによる内部事象停止時レベル1 P R Aに対するコメント

分類	コメント内容	対応方針
<p>起因事象の選定及び発生頻度の評価</p>	<p>国内の各原子力発電所はそれぞれ異なる外部電源喪失頻度を有していると考えられることから、同様に外部電源喪失の起因事象に関しても、その発生頻度／確率は、島根原子力発電所2号炉サイト特有のものであるべきである。 外部電源喪失事象のデータベースをレビューして、島根原子力発電所2号炉サイトに適用されない外部電源喪失事象はすべて排除することを推奨する。例えば、あるBWRプラントサイトにおける、台風による外部電源喪失事象は島根原子力発電所2号炉サイトには適用されないかもしれない。</p> <p>残留熱除去系の設計は島根原子力発電所2号炉特有のものであることから、残留熱除去系喪失に関しては、起因事象の発生頻度／確率をフォールトツリー法を使用して計算すべきである。</p>	<p>【対応検討中】 外部電源喪失の発生頻度は、他の起因事象と同様に国内BWRの運転経験から算出しているが、過去実績の発生時と送電系統及び設備は大きく変化している。サイトに適用すべき実績については海外の取り扱いを調査し、今後の安全性向上に係るP R Aへの適用を含めて、検討を行う。</p> <p>【対応検討中】 今回の評価では、発生実績が0件の事象については0.5件として発生頻度を求めているため、保守的な評価結果になっているが、0件の実績のものを精度良く評価する手法としてフォールトツリー法がある。フォールトツリー法の適用については、海外での取り扱いを調査するとともに今後の安全性向上評価に係るP R Aへの適用を含め、検討を行う。</p>
<p>人間信頼性解析</p>	<p>運転員操作（復旧又は緩和）が停止時レベル1 P R Aにおいては重要であることから、運転員操作の依存性に注意しなければならない。</p>	<p>【対応済】 運転員操作の依存性については人間信頼性解析において検討している。人的過誤間の依存性については国内レビューから同様のコメントを受けており、そちらと併せて対応する。</p>
<p>成功基準の設定</p>	<p>制御棒駆動機構検査時の冷却材喪失を緩和するための復水輸送系の成功は、冷却材喪失の流量に依存する。復水輸送系によって緩和できる冷却材喪失の流量を仮定する代わりに、熱流体力学の計算に基づくより現実的な流量を推定し、P R Aで用いることを推奨する。</p>	<p>【対応済】 制御棒駆動機構取外し時の冷却材流出量について計算を行っている。本P R Aでは、その流出流量を用いて評価を行っている。</p>
<p>不確かさ解析及び感度解析</p>	<p>残留熱除去機能の喪失による炉心損傷頻度の分布におけるエラーファクタ（E F）は、たとえ最小カットセットにおける構成要素の一つ（例えば、弁の故障率）に対するE Fが大きい、あるケースではそのE Fは約8であるとしても、約3.0である。これはモンテカルロ・シミュレーションにおける試行回数が十分ではないことによるかもしれない。</p> <p>検討結果は、停止スケジュールに基づいたものであることから合理的である。停止時レベル1 P R Aのモデルが一つの燃料交換停止スケジュールに基づいていることから、P R Aで使用される燃料交換停止とは異なるであろう、停止期間、緩和システム／トレインのメンテナンススケジュール等について感度解析を行うべきである。</p>	<p>【対応済】 モンテカルロ・シミュレーションにおける試行回数は[ ]回としており、評価結果の収束性には問題ないと考えている。</p> <p>【対応済】 今回のP R Aでは以下に留意して、過去の定期検査工程を代表するものを選定している。 ・特別な工事を行っていないこと。 ・定期検査に要した日数を比較し、平均的なものを選定する。 (第125回審査会合資料別紙1.1.2-1に反映済み。)</p>

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る事項のため公開できません。

第7表 海外レビューによる地震レベル1 P R Aに対するコメント

分類	コメント内容	対応方針
プラント情報の収集・分析と事故シナリオの概括的分析	原子炉圧力容器に接続される単一システム配管の地震脆弱性が、大規模なL O C Aに至る地震事象による複数システム配管の破損を代表するのに使用された。もっとも弱いシステム配管がこの目的のために選ばれた。 単一システム配管の破損が大規模なL O C Aに至るといふモデリングが保守的であることを示す議論／説明を報告書に入れることを推奨する。何故なら、それは複数のシステムの配管の破損を代表するからである。	【対応済】 複数のシステムの配管損傷によってExcessive L O C Aに至るケースを同定し、現状のモデルとのExcessive L O C A発生確率の比較を行った。比較の結果、現状のモデルが代表性を有していることを確認した。
	L O S Pの頂上事象の成功パスにおいて（すなわち、地震事象後にオフサイト電源が利用可能）プラントのリスク評価に影響があったかどうか。もし、なかったのであれば、地震事象後にオフサイト電源が利用可能かどうかの地震リスクの評価を行わないことの正当性、すなわち、リスクの影響が大きくないことを示す必要がある。	【対応済】 外部電源喪失を最初のヘディングとしていることに関して、外部電源が利用可能な場合のリスク評価を行い、炉心損傷頻度及び主要な事故シーケンスに有意な影響が生じないことを確認した。
建物・機器脆弱性評価	システムやトレインの脆弱性を代表するのに、システムやトレインの（もっとも弱い脆弱性を有する）一つの構成要素を使用するのは楽観的である。例えば、あるポンプ及び弁から構成される一つのトレインの地震脆弱性が、そのトレイン中のもっとも弱い機器の脆弱性によって代表されることは楽観的である。トレインの脆弱性はトレインのすべての要素の脆弱性を結合して計算すべきである。	【対応済】 ポンプ、弁及び配管から構成されるラインであれば、ポンプ、弁及び配管の脆弱性を各々算出し、構成されるラインの各機器の脆弱性を考慮した評価となっている。

第8表 海外レビューによる津波レベル1 P R Aに対するコメント

分類	コメント内容	対応方針
人間信頼性解析	津波高さが15m未満のシナリオについては、通常停止が想定されている。事故シーケンスの分析では、事故シーケンスモデルにおいて考慮する運転員操作の失敗確率に対する津波の影響を考慮すべきである。特に、内部事象運転時レベル1 P R Aにおいても同様にモデル化されている運転員操作である。	【対応済】 津波P R A学会標準の付属書Nにおいて、津波P R Aでは原子炉は停止しているものとしている。近地津波では、津波の起因となる地震動により原子炉は自動停止している可能性があるため、津波到達までの手動停止操作は遠地津波に対するものと考えられる。遠地津波の場合、津波到達までに時間があるため停止操作の時間余裕は十分あり、評価の対象外としている。

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」への島根原子力発電所2号炉PRAの対応状況

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p>	<p>島根原子力発電所2号炉</p>
<p>(はじめに)</p> <p>本書は、「実用発電用原子炉及びその付属設備の位置、構造及び設備に関する規則の解釈」（平成25年6月19日）（以下、「解釈」という。）第3章第37条に基づき、原子炉設置（変更）許可申請者が、確率的リスク評価（以下、「PRA」という。）に関し、審査のための説明に際し、参照すべき事項を示すものである。なお、申請者は、本書の整理によらない構成で説明することもできるが、その際には本書の整理と異なる点について合理的とする理由についての説明とともに各項目に相当する内容について、申請者の説明責任として示す必要がある。</p> <p>1. 新規制基準適合性の審査において提示すべきPRAの実施内容に係る資料について</p> <p>新規制基準では、「解釈第3章第37条（重大事故等の拡大の防止等）「1-1(a)及び(b)」、「2-1(a)及び(b)」及び「4-1(a)及び(b)」における事故シナシナグループ等の抽出においてPRAを活用することが規定されており、その実施状況を確認する必要があるため、原子炉設置（変更）許可申請者においては、審査の過程において事故シナシナグループ等の抽出におけるPRAの実施状況を説明する必要がある。</p> <p>本解釈における(b)には、「①個別プラントの内部事象に関する確率的リスク評価(PRA)及び外部事象に関するPRA(適用可能なもの)又はそれに代わる方法で評価を実施すること。」とされており、外部事象に関しては、PRAの適用が可能なもの以外はそれに代わる方法について、評価条件や評価方法、評価のプロセスに関する説明(適切性の説明を含む)、評価の結果等評価結果を導くために必要と考えられる事項を整理し説明する必要がある。</p>	<p>従来から定期安全レビュー（PSR）等の機会に内部事象レベル1PRA（運転時、停止時）及びレベル1.5PRAの評価を実施してきており、これらのPRA手法を今回も適用した。また、現段階で適用可能な外部事象として、一般社団法人 日本原子力学会において実施基準が標準化され、試評価等の実績を有する地震レベル1PRA及び津波レベル1PRAを適用対象とし、建物、構築物、大型機器等の大規模な損傷から発生する事象についても事故シナシナグループ等の選定に係る検討対象範囲とした。</p> <p>なお、PRAが適用可能でないと判断した外部事象については定性的な検討から分析を実施した。</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>そのため、ここでは、日本原子力学会標準等を参考に基本的に想定されるPRAの実施内容を踏まえて、説明に最低限必要な項目を列記した。なお、説明に当たっては、実施したPRAの内容を踏まえてここに記載している項目に加えて説明すべき事項を抽出し、説明性の観点から再構成するなど、申請者の説明責任として自ら十分検討すべきことを付言する。</p>	
<p>2. PRAの評価対象</p> <p>今回の原子炉等規制法改正後の初回設置（変更）許可時においては、これまでの許認可実績を踏まえて、規制上の担保が得られている対策を基にPRAを実施するものであり、PRAの前提となっている設備状況等についてまず整理する必要があり、評価対象を明示すること（例：下図の(B)までの設備について、既許可ECCSの機能を作動させるための手動起動措置を評価対象とすることはできるが、許認可実績を踏まえてそれぞれ個別の評価対象についての整理が必要。）。</p>	<p>今回実施するPRAの目的が重大事故等対処設備の有効性評価を行う事故シナリオグループ等の選定への活用にあることを考慮し、これまで整備してきたAM策や福島第一原子力発電所事故以降に実施した重大事故等対処設備などを含まない、仮想的なプラント状態を評価対象としてPRAモデルを構築した。</p>
<p>3. レベル1 PRA</p> <p>3. 1 内部事象（出力運転時）</p> <p>a. 対象プラント</p> <p>① 対象とするプラントの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・設計基準事故対処設備であり、重大事故等の対処に用いる設備（以下「対処設備」という。）等、PRAの中で考慮する設備の一覧及び設備の説明</li> </ul> <p>② 停止時のプラント状態の推移（停止時PRAのみ）</p> <p>③ プラント状態分類（停止時PRAのみ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プラント状態分類の考え方</li> <li>・プラント状態の分類結果</li> </ul>	<p>① PRAの中で考慮する設備を、プラント仕様や必要となる系統ごとに整理した。</p> <p>② 停止時レベル1 PRAで記載。</p> <p>③ 停止時レベル1 PRAで記載。</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>b. 起因事象</p> <p>① 評価対象とした起因事象のリスト、説明及び発生頻度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>起因事象リスト、説明及び発生頻度</li> <li>起因事象の抽出の方法、グループ化している場合にはグループ化の考え方、発生頻度の評価方法</li> <li>対象外とした起因事象と、対象外とした理由</li> </ul>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>適用する起因事象について、以下の方法により検討し、選定した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>国内外の評価事例の分析</li> <li>原子力施設運転管理年報等による、本プラント及び他の国内原子炉のトラブル事例のレビュー</li> </ul> </li> <li>起因事象をグループ化する際には、事故シナリオの展開が類似しており、同一の緩和機能が必要とされるグループに分類し、さらに、必要とされる緩和設備等が類似しており、同一のイベントツリー及びフォールトツリーを用いることのできる範囲まで起因事象をグループ化している。</li> <li>主にプラントの運転経験から得られた起因事象の発生件数と運転実績から発生頻度を求めた。</li> <li>発生の可能性が極めて低いか、又は発生を仮定してもその影響が限定される起因事象は対象外とした。</li> </ul>
<p>c. 成功基準</p> <p>① 成功基準の一覧表</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>炉心損傷の定義</li> <li>起因事象ごとの成功基準の一覧表</li> <li>対処設備作動までの余裕時間及び使命時間</li> <li>成功基準設定のために熱水力解析等を実施した場合は使用した解析結果、及び使用した解析コードの検証性</li> </ul>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>炉心の一部の燃料被覆管表面温度が1,200℃を超えると評価される状態を炉心損傷判定条件とした。</li> <li>プラントの構成・特徴や、既往のPRA、あるいは安全解析等に基づき、それぞれの安全機能に対し、最低限必要な系統構成・作動機器台数を成功基準として設定した。成功基準の一覧表は起因事象ごとに整理した。</li> <li>過渡事象発生時、炉心の冷却に対する余裕時間としては、炉心損傷防止の観点及び運転員による操作にかかる時間から設定した。また、使命時間については喪失した設備の復旧や追加の運転員操作が期待できる時間として、24時間と設</li> </ul>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>d. 事故シケケンス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① イベントツリー <ul style="list-style-type: none"> <li>・ イベントツリー図</li> <li>・ ヘディング、事故進展及び最終状態の説明</li> <li>・ イベントツリー作成上の主要な仮定</li> </ul> </li> </ul>	<p>定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 成功基準設定のために熱水力解析を実施し、使用した解析コードについては原子炉施設の許認可審査で十分な実績を有し、検証が行われたものとした。</li> </ul> <p>① イベントツリーの構造には、小イベントツリー／大フォールツリーの手法を用いた。系統従属性や機器間従属性を適切に考慮して、島根原子力発電所2号炉の構成・特性に対応したヘディングの設定とツリーを構築し、事故シケケンスへの展開を行った。また、展開した事故シケケンスの最終状態を炉心損傷状態又は成功状態のいずれかに分類した。</p>
<p>e. システム信頼性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 評価対象としたシステムとその説明 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 評価対象システム一覧</li> <li>・ システムの概要、機能、系統図、必要とするサポート系、試験、システム信頼性評価上の主要な仮定</li> </ul> </li> <li>② システム信頼性評価手法</li> <li>③ システム信頼性評価の結果 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 起回事象ごとのシステム信頼性評価結果</li> <li>・ 主要なミニマルカットセット（FTを用いた場合）</li> </ul> </li> <li>④ システム信頼性評価を実施せずに設定した非信頼度とその根拠</li> </ul>	<p>① 評価対象としたシステムについては一覧表を作成し、それぞれのシステムごとに概要、機能、系統図、必要とするサポート系、試験及びシステム信頼性評価上の主要な仮定を整理した。</p> <p>② システム信頼性評価ではイベントツリーのヘディングに対応するフロントライン系とそのサポート系について、フォールツリーを作成し、信頼性を評価した。</p> <p>③ システム信頼性評価の結果について、起回事象ごとに結果が異なるものは起回事象ごとに評価し、主要なミニマルカットセットの評価も実施した。</p> <p>④ スケラム系の故障はシステム信頼性評価を実施せずに設定したが、非信頼度については、その根拠を明確にした。</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>f. 信頼性パラメータ</p> <p>① 非信頼度を構成する要素と評価式</p> <p>② 機器故障率パラメータの一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>機器故障率パラメータの設定方法（機器の分類、機器の境界、故障モードの分類等）</li> <li>機器故障率パラメータの一覧（故障モード、故障率等）</li> <li>機器故障率パラメータの不確かさ幅</li> </ul> <p>③ 機器復帰の取扱い方法及び機器復帰失敗確率</p> <p>④ 待機除外確率</p> <p>⑤ 共通要因故障の評価方法と共通要因故障パラメータ</p>	<p>① 非信頼度を構成する要素としては、機器故障率データ、共通原因故障パラメータ、試験による待機除外データ、保守による待機除外データ等があり、それぞれの評価式に基づき非信頼度を評価した。</p> <p>② システム信頼性評価や事故シナシケンスの定量化で使用する機器故障率データは、原則として、「故障件数の不確かさを考慮した国内一般機器故障率の推定」に記載されているデータを使用した。</p> <p>③ 今回のPRAでは故障した機器の使用時間中の復旧は考慮していない。</p> <p>④ 待機除外確率のうち、試験による待機除外は評価への影響が軽微であるためモデル化しないこととした。保守による待機除外は、異常発生率と平均修復時間から確率を算出した。</p> <p>⑤ 共通原因故障の発生要因を分析し、考慮するものについてはMGLパラメータを使用した。</p>
<p>g. 人的過誤</p> <p>① 評価対象とした人的過誤及び評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>人的過誤の評価に用いた手法</li> <li>人的過誤の分類、人的操作に対する許容時間、過誤回復の取扱い</li> <li>人的過誤評価結果</li> <li>人的過誤評価用いた主要な仮定</li> </ul>	<p>① 人的過誤ではTHERP手法を用いて人的過誤確率を評価した。人的過誤は起因事象発生前と起因事象発生後で分類し、さらに起因事象発生前は復旧エラー、起因事象発生後は診断失敗、操作失敗に分類した。診断失敗は時間的な余裕を考慮して人的過誤確率を評価した。</p> <p>人的過誤評価結果については、起因事象発生前及び起因事象発生後の人的過誤確率を一覧表で整理した。</p>
<p>h. 炉心損傷頻度</p> <p>① 炉心損傷頻度の算出に用いた方法</p> <p>② 炉心損傷頻度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全炉心損傷頻度及び主要な事故シナシケンスと分析</li> </ul>	<p>① WinNUPRAを用いて、フォールトツリー結合法による定量化を行った。</p> <p>② 全炉心損傷頻度、起因事象別の炉心損傷頻度及び主要な事故シナシケンスを整理し、結果の分析を行った。プラント損傷状態別炉心損傷頻度はレベル1PRA</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<ul style="list-style-type: none"> <li>・起因事象別の炉心損傷頻度及び主要な事故シナリオと分析</li> <li>・プラント損傷状態別炉心損傷頻度及び主要な事故シナリオの分析</li> </ul> <p>③ 重要度解析、不確かさ解析及び感度解析</p>	<p>では不要であるが、内部事象運転時レベル1.5PRAを実施するために算出した。(内部事象運転時レベル1.5PRA資料に記載)</p> <p>③ PRA結果の活用目的である事故シナリオ等々の選定に係る炉心損傷頻度の相対的な割合の確認に際しての参考として不確かさ解析を実施した。</p> <p>炉心損傷に至る支配的な要因を確認する観点で重要度解析を実施した。</p> <p>また、対象項目として評価結果に影響を及ぼす可能性のある仮定、データ等を選定し感度解析を実施した。</p>



<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p> <p>3. レベル1 PRA</p> <p>3. 1 内部事象（停止時）</p> <p>a. 対象プラント</p> <p>① 対象とするプラントの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>設計基準事故対処設備であり、重大事故等の対処に用いる設備（以下「対処設備」という。）等、PRAの中で考慮する設備の一覧及び設備の説明</li> </ul> <p>② 停止時のプラント状態の推移（停止時 PRA のみ）</p> <p>③ プラント状態分類（停止時 PRA のみ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プラント状態分類の考え方</li> <li>プラント状態の分類結果</li> </ul>	<p>島根原子力発電所2号炉</p> <p>① PRAの中で考慮する設備を、プラント仕様や必要となる系統ごとに整理した。</p> <p>② 評価対象期間における停止時のプラント状態の推移をプラント状態ごとに整理した。</p> <p>③ 原子炉冷却材のインベントリ、温度、圧力などのプラントパラメータの類似性、保守点検状況などに応じた緩和設備の使用可能性、起回事象、成功基準、時間余裕に関する類似性の観点から、評価対象期間を複数のプラント状態に分類した。</p>
<p>b. 起回事象</p> <p>① 評価対象とした起回事象のリスト、説明及び発生頻度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>起回事象リスト、説明及び発生頻度</li> <li>起回事象の抽出の方法、グループ化している場合にはグループ化の考え方、発生頻度の評価方法</li> <li>対象外とした起回事象と、対象外とした理由</li> </ul>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>燃料損傷に波及する可能性がある事象を選定した。また、その事象の説明及び発生頻度を整理した。</li> <li>適用する起回事象について、以下の方法により検討し、選定した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>国内外の既往のPRAによる知見の活用</li> <li>マスターロジックダイアグラムに基づく分析</li> <li>原子炉施設運転管理年報等による国内プラントのトラブル事例のレビュー</li> </ul> </li> <li>発生の可能性が極めて低いか、又は発生を仮定してもその影響が限定される起回事象は対象外とした。</li> </ul>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>c. 成功基準</p> <p>① 成功基準の一覧表</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・炉心損傷の定義</li> <li>・起因事象ごとの成功基準の一覧表</li> <li>・対処設備作動までの余裕時間及び使用時間</li> <li>・対処設備作動までの余裕時間及び使用した場合は使用した解析結果、成功基準設定のために熱水力解析等を実施した場合は使用した解析結果、及び使用した解析コードの検証性</li> </ul>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・燃料棒有効長頂部が露出した状態を燃料損傷の判定条件とした。</li> <li>・原子炉停止時の原子炉施設に発生した異常事象を安全に収束させるために必要な安全機能を摘出し、各安全機能の成功基準を設定し、一覧表として整理した。</li> <li>・余裕時間については、冷却材の流出の有無により、余裕時間が異なることを考慮し、プラント状態ごとの対処設備作動までの余裕時間を評価した。また、使用時間については、事故後24時間まで安定冷却が可能であれば、それ以降の時間で仮に不具合が発生したとしてもある程度崩壊熱は除去されており、機能喪失した設備の復旧や追加の運転員操作が期待できると判断し、24時間を設定した。</li> <li>・成功基準設定のために解析コードを使用した熱水力解析を実施していない。</li> </ul>
<p>d. 事故シナリオ</p> <p>① イベントツリー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イベントツリー図</li> <li>・ヘディング、事故進展及び最終状態の説明</li> <li>・イベントツリー作成上の主要な仮定</li> </ul>	<p>①各起因事象に対して、燃料損傷を防止するために必要な緩和設備や緩和操作を検討し、燃料損傷に至る事故シナリオを展開した。また、展開した事故シナリオの最終状態を、燃料損傷又は燃料損傷なしのいずれかに分類した。</p>
<p>e. システム信頼性</p> <p>① 評価対象としたシステムとその説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価対象システム一覧</li> <li>・システムの概要、機能、系統図、必要とするサポート系、試験、システム信頼性評価上の主要な仮定</li> </ul>	<p>①評価対象としたシステムについて一覧表を作成し、それぞれのシステムごとの概要、機能、系統図、必要とするサポート系、試験及びシステム信頼性評価上の主要な仮定を整理した。</p> <p>②システム信頼性評価では、イベントツリーのヘディングに対応するフロントラ</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>② システム信頼性評価手法</p> <p>③ システム信頼性評価の結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 起回事象ごとのシステム信頼性評価結果</li> <li>・ 主要なミニマルカットセット (FT を用いた場合)</li> </ul> <p>④ システム信頼性評価を実施せずに設定した非信頼度とその根拠</p>	<p>イン系とそのサポート系について、フォールトツリーを作成し、信頼性評価をした。</p> <p>③ フォールトツリー解析では、系統や機器の運転状態や待機状態を考慮して各ブランチ状態におけるシステムの非信頼度及び主要なミニマルカットセットの評価を実施した。</p> <p>④ システム信頼性評価を実施せずに設定した非信頼度はない。</p>
<p>f. 信頼性パラメータ</p> <p>① 非信頼度を構成する要素と評価式</p> <p>② 機器故障率パラメータの一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 機器故障率パラメータの設定方法（機器の分類、機器の境界、故障モードの分類等）</li> <li>・ 機器故障率パラメータの一覧（故障モード、故障率等）</li> <li>・ 機器故障率パラメータの不確かさ幅</li> </ul> <p>③ 機器復帰の取扱い方法及び機器復帰失敗故障率</p> <p>④ 待機除外確率</p> <p>⑤ 共通要因故障の評価方法と共通要因故障パラメータ</p>	<p>① 非信頼度を構成する要素としては、機器故障率データ、共通原因故障パラメータ、試験による待機除外データ、保守による待機除外データ等があり、それぞれの評価式に基づき非信頼度を評価した。</p> <p>② システム信頼性評価や事故シナシケンスの定量化で使用する機器故障率データは、原則として、原子力安全推進協会（JANSI）が管理している原子力施設情報公開ライブラリーNUCIAで公開されている国内プラントの故障実績（1982年度～2002年度21ヵ年49基データ（21ヵ年データ）を基にした「故障件数の不確かさを考慮した国内一般機器故障率の推定」に記載されているデータを）を使用した。</p> <p>③ 今回のPRAでは故障した機器の使命時間中の復旧は考慮していない。</p> <p>④ 機器の待機除外状態は、プラント状態分類の中で直接考慮している。</p> <p>⑤ 共通原因故障を考慮する機器と故障モードの同定は、同一系統内の冗長機器等について、共通原因故障が発生する可能性が比較的高いと考えられる動的機器の故障を対象とし、考慮するものについてはMGLパラメータを使用した。</p>
<p>g. 人的過誤</p> <p>① 評価対象とした人的過誤及び評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人的過誤の評価に用いた手法</li> </ul>	<p>① 人間信頼性解析ではTHERP手法を用いて人的過誤確率を評価した。人的過誤は起回事象発生前と起回事象発生後で分類し、さらに起回事象発生前は復旧</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人的過誤の分類、人的操作に対する許容時間、過誤回復の取扱い</li> <li>・ 人的過誤評価結果</li> <li>・ 人的過誤評価用いた主要な仮定</li> </ul>	<p>エラー、起因事象発生後は診断失敗、操作失敗に分類した。診断失敗は余裕時間から人的過誤確率を評価した。人的過誤評価結果については、起因事象発生前及び起因事象発生後の人的過誤確率を一覧表で整理した。</p>
<p>h. 炉心損傷頻度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 炉心損傷頻度の算出に用いた方法</li> <li>② 炉心損傷頻度 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全炉心損傷頻度及び主要な事故シナリオと分析</li> <li>・ 起因事象別の炉心損傷頻度及び主要な事故シナリオと分析</li> <li>・ プラント損傷状態別炉心損傷頻度及び主要な事故シナリオの分析</li> </ul> </li> <li>③ 重要度解析、不確かさ解析及び感度解析</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① WinNUPRAを使用し、フォールトツリー結合法による定量化を行い、燃料損傷頻度を算出した。</li> <li>② 全燃料損傷頻度、プラント状態別・起因事象別の燃料損傷頻度及び主要な事故シナリオを整理し、結果の分析を行った。</li> <li>プラント損傷状態別炉心損傷頻度は停止時レベルI P R Aでは不要であるため、評価を省略した。</li> <li>③ P R A結果の活用目的である事故シナリオグループ等の選定に係る燃料損傷頻度の相対的な割合の確認に際しての参考として、不確かさ解析を実施した。燃料損傷に至る支配的な要因を確認する観点で重要度解析を実施した。また、燃料損傷頻度を解析するモデル上の仮定について、結果への影響を把握するため、感度解析を実施した。</li> </ul>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容

3. 2 外部事象（地震）

a. 対象プラントと事故シナリオ

- ① 対象とするプラントの説明
  - ・ 地震PRAの中で考慮する設備の一覧及び設備の説明
  - ・ ウォークダウン実施の有無とウォークダウンの結果
- ② 地震により炉心損傷に至る事故シナリオと分析
  - ・ 事故シナリオの分析・選定とスクリーニングの説明
  - ・ 事故シナリオと起因事象の分析結果
  - ・ 建物・機器リストの作成結果

島根原子力発電所2号炉

①プラント構成・特性に関して内部事象運転時レベル1PRAで収集したプラントの基本的な情報（設計、運転・保守管理情報等）に加え、地震レベル1PRAを実施するために、プラントの耐震設計やプラント配置の特徴等の地震固有に考慮すべき関連情報を追加で収集・分析した。

また、机上検討では確認が難しいプラント情報の取得及び検討したシナリオの妥当性を確認するため、また、安全上重要な機器ではないが、それらの転倒・落下によって安全上重要な機器の損傷に繋がりをいうような事故シナリオの同定のため、プラントウォークダウンを実施し、地震レベル1PRAの観点で重要なスクラスの機器を対象に、以下について問題がないことを確認した。

- ・ 耐震安全性の確認
- ・ 波及的影響の確認

②収集したプラント関連情報及びプラントウォークダウンによって得られた情報をを用いて、事故シナリオを広範に分析した。事故シナリオのうち、安全機能への間接的影響、余震による地震動の安全機能への影響、経年劣化を考慮した場合の影響を考慮した事故シナリオについてはスクリーニングを行った結果、以下の起因事象を選定した。

- ・ 外部電源喪失
- ・ 原子炉建物損傷
- ・ 原子炉格納容器損傷
- ・ 原子炉圧力容器損傷
- ・ 格納容器バイパス

<p>島根原子力発電所2号炉</p> <p>Excessive LOCA</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・制御室建物損傷</li> <li>・廃棄物処理建物損傷</li> <li>・計装・制御系喪失</li> <li>・直流電源喪失</li> <li>・交流電源・補機冷却系喪失</li> </ul> <p>選定した起因事象の要因となる建物・構築物・機器及び地震時に使用可能な緩和設備に係る建物・構築物・機器を抽出し、建物・機器リストを作成した。</p>	<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p>
<p>① 基準地震動の超過確率の算出に用いた確率的地震ハザード評価を行うに当たっては、地震PSA学会標準を踏まえて実施した。</p> <p>② 震源モデルとしては、特定震源モデルと領域震源モデルを設定した。特定震源モデルでは、敷地から100km以内に位置する敷地周辺の地質調査結果に基づいて評価した活断層、地震調査研究推進本部（2016）に記載されている活断層及び「[新編]日本の活断層」に記載されている確実度Ⅰ及びⅡの活断層をモデル化し、検討用地震の「宍道断層による地震」及び「F-Ⅲ断層+F-Ⅳ断層+F-Ⅴ断層による地震」については、決定論による「敷地ごとに震源を特定して策定する地震動」の評価において基本震源モデル及び認識論的不確かさとして考慮した評価ケースに基づいてモデル化した。領域震源モデルでは、萩原（1991）及び垣見ほか（2003）の領域区分に基づき、敷地から100km以内の領域を対象にモデル化し、対象領域の最大マグニチュード（以下「M」という。）については、領域内で過去に発生した活断層と関連づけることが困難な地震の最大Mに基づいて設定した。地震動伝播モデルの設定においては、「宍道断層による地震」及び「F-Ⅲ断層+F-Ⅳ断層+F-Ⅴ断層による地震」は断層</p>	<p>b. 地震ハザード</p> <p>① 地震ハザード評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新規制基準（地震）にて策定された基準地震動の超過確率の算出に用いた地震ハザード評価に用いた手法の説明</li> </ul> <p>② 地震ハザード評価に当たっての主要な仮定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・震源モデル、地震動伝播モデルの設定と各モデルの設定根拠及び不確かさ要因の分析結果の説明</li> <li>・不確かさ要因の分析結果に基づいて作成したロジックツリーの明示とロジックツリーの各分岐において設定した重みの根拠の説明</li> </ul> <p>③ 地震ハザード評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作成したロジックツリーを用いた地震ハザード曲線群の算出と、各ハザード曲線群から求めた信頼度別ハザード曲線や平均ハザード曲線の説明</li> <li>・地震ハザード評価結果に基づくフラジリティ評価用地震動の作成方法の説明</li> </ul>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>c. 建屋・機器のフラジリティ</p> <p>① 評価対象と損傷モードの設定</p> <p>② フラジリティの評価方法の選択</p> <p>③ フラジリティ評価上の主要な仮定（不確実さの設定、応答係数等）</p> <p>④ フラジリティ評価における耐力情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価部位、損傷モード及びその耐力値と確率分布</li> <li>・評価部位の材料と温度【構造損傷の場合】</li> <li>・機能限界値の諸元【機能損傷の場合】</li> </ul> <p>⑤ フラジリティ評価における応答情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価部位、損傷モード及びその応答値と確率分布</li> <li>・基準地震動による地震力で発生する評価部位の応答とその他の荷重条件による評価部位の応答の内訳【構造損傷の場合】</li> <li>・基準地震動による地震力で発生する評価部位の応答【機能損傷の場合】</li> </ul> <p>⑥ 建物・機器のフラジリティ評価結果</p>	<p>モデルを用いた手法と距離減衰式を用いた。それ以外の震源モデルについては距離減衰式のみを用いた。ロジックツリーは、震源モデル及び地震動伝播モデルにおいて、地震ハザード評価に大きな影響を及ぼす認識論的不確実さを選定して作成した。</p> <p>③ 上記により平均地震ハザード曲線及びフラクタル地震ハザード曲線を作成した。また、基準地震動の設計用応答スペクトルと年超過確率ごとの一様ハザードスペクトルを比較した。フラジリティ評価用地震動は年超過確率 <math>10^{-4}</math> ～ <math>10^{-6}</math> の一様ハザードスペクトルを考慮して設定した形状に適合する模擬波とした。模擬波の経時特性は基準地震動の策定と同様に Noda et al. (2002) に基づき、地震規模M7.7、等価震源距離 <math>X e q = 17.3\text{km}</math> として設定した。</p> <p>①～⑥</p> <p>以下の手順でフラジリティ評価を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価対象と損傷モードの設定</li> <li>・評価手法の選択</li> <li>・評価上の主要な仮定</li> <li>・現実的耐力の評価</li> <li>・現実的応答の評価</li> <li>・フラジリティの評価</li> </ul> <p>建物は現実的耐力と現実的応答による方法（応答解析に基づく方法）、機器・構築物は耐力係数と応答係数による方法（安全係数法）を評価手法として採用した。建物・構築物・機器に対する耐震計算結果・加振試験結果・文献値等に基づき、現実的耐力・現実的応答又は耐力係数・応答係数を評価してフラジリティを算出した。なお、評価部位・損傷モードについては、建物・構築物・機器</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>d. 事故シナリオ</p> <p>(1) 起因事象</p> <p>① 評価対象とした起因事象のリスト、説明及び発生頻度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地震により誘発される起因事象の選定方法とその結果</li> <li>グループ化している場合にはグループ化の考え方、発生頻度の評価方法</li> <li>対象外とした起因事象と、対象外とした理由</li> <li>地震固有の事象とその取扱い</li> </ul> <p>② 階層イベントツリーとその説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>起因事象の階層化の考え方、イベントツリーとその説明</li> </ul> <p>(2) 成功基準</p> <p>① 成功基準の一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>起因事象ごとの成功基準</li> <li>炉心損傷の定義</li> <li>対処設備作動までの余裕時間及び使命時間</li> <li>成功基準設定のために熱水力解析等を実施した場合は使用した解析結果、及び使用した解析コードの検証性</li> </ul> <p>(3) 事故シナリオ</p> <p>① イベントツリー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>イベントツリー図</li> </ul>	<p>の損傷に対して支配的となる評価部位・損傷モードのフレンジイを出力した。</p> <p>(1)</p> <p>①事故シナリオの分析を踏まえ、地震レベル1PRAにおける起因事象は以下を評価対象とした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>外部電源喪失</li> <li>原子炉建物損傷</li> <li>原子炉格納容器損傷</li> <li>原子炉圧力容器損傷</li> <li>格納容器バイパス</li> <li>Essive LOCA</li> <li>制御室建物損傷</li> <li>廃棄物処理建物損傷</li> <li>計装・制御系喪失</li> <li>直流電源喪失</li> <li>交流電源・補機冷却系喪失</li> </ul> <p>②選定した起因事象を基に、地震により発生する起因事象の影響を考慮して階層イベントツリーを作成した。</p> <p>(2)</p> <p>①直接炉心損傷に至る事象については、緩和手段がないため成功基準を設定していない。本評価では、全交流動力電源喪失時についても、緩和手段がないため</p>



「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>・ヘディング、事故進展及び最終状態</p> <p>・イベントツリー作成上の主要な仮定</p> <p>(4) システム信頼性</p> <p>① 評価対象としたシステムとその説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価対象システム一覧</li> <li>・系統図、必要とするサポート系、試験、システム信頼性評価上の主要な仮定</li> <li>・B及びCクラス機器の取扱い</li> </ul> <p>② 機器損傷に関する機器間の相関の取扱い</p> <p>③ システム信頼性評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・起因事象ごとのシステム信頼性評価結果</li> <li>・主要なミニマルカットセット (FT) を用いた場合</li> </ul> <p>④ システム信頼性評価を実施せずに設定した非信頼度とその根拠</p> <p>(5) 人的過誤</p> <p>① 評価対象とした人的過誤及び評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人的過誤の評価に用いた手法</li> <li>・人的過誤の分類、人的操作に対する許容時間、過誤回復の取扱い</li> <li>・人的過誤評価用いた主要な仮定</li> <li>・人的過誤評価結果</li> </ul> <p>(6) 炉心損傷頻度</p> <p>① 炉心損傷頻度の算出に用いた方法</p> <p>② 炉心損傷頻度結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全炉心損傷頻度及び主要な事故シナケンスと分析</li> <li>・起因事象別の炉心損傷頻度及び主要な事故シナケンスと分析</li> </ul>	<p>成功基準を設定していない。これら以外の起因事象については、起因事象の発生原因（内的要因か外的要因か）が成功基準の設定に直接関係しないと考えられることから、内部事象運転時レベル1 PRAをもとに成功基準を設定した。</p> <p>(3)</p> <p>① 起因事象の発生要因は地震と内部事象では異なるが、起因事象発生後の緩和機能は内部事象運転時レベル1 PRAと同様の機能に期待する。</p> <p>イベントツリーの展開方法には小イベントツリー/大フォールトツリー法を用い、事故シナケンスの定量化手法にはフォールトツリー結合法を用いた。これにより、サポート系とフロントライン系間などの従属関係がフォールトツリー内で明示的に表現され、従属関係が適切に取り扱われる。</p> <p>(4)</p> <p>① 評価対象システムの各系統の情報や依存性については内部事象運転時レベル1 PRAと同等であるが、それぞれについて地震における故障の分析を行い、起因事象に係るフォールトツリー及び緩和系に係るフォールトツリーを作成した。フォールトツリーのモデル化に当たっては、内部事象運転時レベル1 PRAのフォールトツリーをもとに既に考慮されている機器故障、人的過誤に加えて、地震による動的機器や電気機器の損傷を基事象としてフォールトツリーに追加している。さらに地震時特有の建物・構築物、大型機器の損傷も基事象としてフォールトツリーに追加している。</p> <p>② 相関性が考えられるすべての構造物、系統又は機器に対する本評価モデルにおける相関性の取扱いは、同一系統での同種の機器間において損傷の完全相関（完全従属）を仮定する方法を採用した。</p> <p>③ 内部事象運転時レベル1 PRAと同様に、イベントツリーのヘディングに対応</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>・プラント損傷状態別炉心損傷頻度及び主要な事故シナリオと分析</p> <p>・地震加速度と炉心損傷頻度の関係とその分析</p> <p>③ 重要度解析、不確実さ解析及び感度解析</p>	<p>するフロントライン系とそのサポート系について、フォールトツリーを作成し、信頼性を評価し、事故シナリオごとに主要なミニマルカットセットを評価した。</p> <p>④ システム信頼性評価を実施せずに設定した非信頼度はない。</p> <p>(5)</p> <p>① 地震レベル1 PRAでは、内部事象運転時レベル1 PRAでの検討に基づいた人的過誤確率を使用した。起因事象発生前人的過誤は試験、保守作業後の復旧ミス等であり、事象発生の起因が地震であっても変わることはないため、内部事象運転時レベル1 PRAでの検討結果を用いた。起因事象発生後人的過誤は運転員操作に係る心的負荷が大ききことを考慮し、内部事象運転時レベル1 PRAでの検討結果に対して、人的過誤のストレスファクタを設定している。</p> <p>(6)</p> <p>① WinNUPRAを使用し、フォールトツリー結合法による定量化を行い、炉心損傷頻度を算出した。</p> <p>② 前述のとおりの手順でモデルを定量化し、起因事象別の炉心損傷頻度、事故シナリオ別の炉心損傷頻度及び地震加速度区別炉心損傷頻度を算出し、主要な事故シナリオを確認した。</p> <p>なお、地震レベル1.5 PRAは今回実施しないため、プラント損傷状態別の分析評価は行っていない。</p> <p>③ PRA結果の活用目的である事故シナリオグループ等の選定に係る炉心損傷頻度の相対的な割合の確認に際しての参考として、不確実さ解析を行った。炉心損傷に至る支配的な要因を確認する観点で、重要度解析を実施した。また、炉心損傷頻度を解析するモデル上の仮定について、結果への影響を把握するため、感度解析を実施した。</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容

3. 2 外部事象（津波）

a. 対象プラントと事故シナリオ

- ① 対象とするプラントの説明
  - ・津波PRAの中で考慮する設備の一覧及び設備の説明
  - ・ウォークダウン実施の有無とウォークダウンの結果
- ② 津波により炉心損傷に至る事故シナリオと分析
  - ・事故シナリオの分析・選定とスクリーニングの説明
  - ・事故シナリオと起回事象の分析結果
  - ・建物・機器リストの作成結果

島根原子力発電所2号炉

①プラント構成・特性に関して内部事象運転時レベル1PRAで収集した設計、運転・保守管理の情報に加え、津波レベル1PRAを実施するために、耐津波設計やプラント配置の特徴等の津波固有に考慮すべき関連情報を追加で収集・分析した。また、机上検討では確認が難しいプラント情報を収集及び検討したシナリオの妥当性確認のため、主に以下の観点でプラントウォークダウンを実施し、津波レベル1PRA上問題となる箇所は確認されなかった。

- ・津波影響の確認
- ・間接的な被害の可能性の確認

②津波による損傷・機能喪失要因の対象となる構築物・機器を整理した。また、今回の事故シナリオグループ等の選定を目的とした津波レベル1PRAで考慮すべき津波による損傷・機能喪失要因についてスクリーニングを検討した結果、以下の起回事象を選定した。

- ・補機冷却系喪失
- ・外部電源喪失
- ・直接炉心損傷に至る事象

津波特有の事故シナリオを広範に抽出・選定するために、屋外の構築物・機器や建物扉の設置高さから、津波高さの上昇に伴い発生する可能性のある起回事象、重要な緩和設備の機能喪失の可能性、建物内への浸水の可能性等を検討した。

選定した起回事象の要因となる構築物・機器及び起回事象が発生した場合の緩和設備に係る構築物・機器を抽出し、建物・機器リストを作成した。

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>b. 津波ハザード</p> <p>①津波ハザード評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新規制基準（津波）にて策定された基準津波の超過確率の算出に用いた津波ハザード評価に用いた手法の説明</li> </ul> <p>②津波ハザード評価に当たったの主要な仮定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・津波発生モデル、津波伝播モデルの設定と各モデルの設定根拠及び不確かさ要因の分析結果の説明</li> <li>・不確かさ要因の分析結果に基づいて作成したロジックツリーの明示とロジックツリーの各分岐において設定した重みの根拠の説明</li> </ul> <p>③津波ハザード評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作成したロジックツリーを用いた津波ハザード曲線群の算出と、各ハザード曲線群から求めた信頼度別ハザード曲線や平均ハザード曲線の説明</li> <li>・津波ハザード評価結果に基づくフラジリティ評価用津波水位変動の作成方法の説明</li> </ul>	<p>①確率論的津波ハザード評価を行うに当たっては、津波PRA学会標準、土木学会(2011)及び土木学会(2016)を踏まえて実施した。</p> <p>②津波発生モデルとしては、以下に示す波源を想定し、検討を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本海東縁部に想定される地震による津波</li> <li>・海域活断層から想定される地震による津波</li> <li>・領域震源（背景的地震）による津波</li> </ul> <p>津波伝播モデルについては、基準津波の評価で用いたモデルを用いて検討を実施した。</p> <p>また、領域震源（背景的地震）による津波の評価は、垣見ほか（2003）及び萩原（1991）に示される発電所から100km以内に位置する領域震源を対象としているが、確率論的津波ハザード評価への寄与度が低いと考えられることから評価対象外とした。</p> <p>検討対象波源に基づきロジックツリーを作成した。</p> <p>③作成したロジックツリーに基づき算出した確率論的津波ハザード曲線群から求めた信頼度別津波ハザード曲線、平均津波ハザード曲線を作成した。</p>
<p>c. 建屋・機器のフラジリティ</p> <p>① 評価対象と損傷モードの設定</p> <p>② フラジリティの評価方法の選択</p> <p>③ フラジリティ評価上の主要な仮定（不確かさの設定、応答係数等）</p> <p>④ フラジリティ評価における耐力情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価部位、損傷モード及びその耐力値と確率分布</li> <li>・評価部位の材料と温度【構造損傷の場合】</li> <li>・機能限界値の諸元【機能損傷の場合】</li> </ul>	<p>①屋外・屋内それぞれの評価対象物について考慮すべき損傷モードについて検討した結果、機器に対する「被水・没水」、「流体力」及び「波力」による機能損傷を評価対象とした。</p> <p>②～⑥</p> <p>機器に対する「被水・没水」、「流体力」及び「波力」の損傷モードに対しては、津波が機器の機能喪失津波高さに到達した時点で、当該機器が確率1.0で損傷すると仮定し、機器フラジリティ曲線はステップ状とした。本評価では、対象</p>

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p>	<p>島根原子力発電所2号炉</p>
<p>⑤ フラジリテイ評価における応答情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価部位、損傷モード及びその応答値と確率分布</li> <li>・基準津波による波力等で発生する評価部位の応答とその他の荷重条件による評価部位の応答の内訳【構造損傷の場合】</li> <li>・基準津波による津波水位変動で被水・没水する評価部位の状況【機能損傷の場合】</li> </ul> <p>⑥ 建物・機器のフラジリテイ評価結果</p> <p>d. 事故シナシエンス</p> <p>(1) 起因事象</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 評価対象とした起因事象のリスト、説明及び発生頻度</li> <li>・津波により誘発される起因事象の選定方法とその結果</li> <li>・グループ化している場合にはグループ化の考え方、発生頻度の評価方法</li> <li>・対象外とした起因事象と、対象外とした理由</li> <li>・津波固有の事象とその取扱い</li> </ul> <p>② 階層イベントツリーとその説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・起因事象の階層化の考え方、イベントツリーとその説明</li> </ul> <p>(2) 成功基準</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 成功基準の一覧</li> <li>・起因事象ごとの成功基準</li> <li>・炉心損傷の定義</li> <li>・対処設備作動までの余裕時間及び使命時間</li> <li>・成功基準設定のために熱水力解析等を実施した場合は使用した解析結果、及び使用した解析コードの検証性</li> </ul>	<p>の機器の機能喪失高さを「現実的耐力」とし、不確かさは考慮しない。</p> <p>(1)</p> <p>①事故シナリオの広範な分析を踏まえ、津波レベル1 P R Aにおける起因事象は以下を評価対象とした。「補機冷却系喪失」及び「外部電源喪失」については、発生する津波高さが同じとなる「直接炉心損傷に至る事象」で代表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・直接炉心損傷に至る事象</li> </ul> <p>②選定した起因事象を基に階層イベントツリーを作成した。</p> <p>(2)</p> <p>①本評価で考慮する設備では、評価対象とする起因事象に対して炉心損傷を防止する緩和手段がないことから、緩和設備の機能及び系統数に関する成功基準は設定していない。</p> <p>(3)</p> <p>①評価対象とする起因事象に対して炉心損傷を防止する緩和手段はなく、イベントツリーを展開できないため、本評価では緩和設備に関するイベントツリーを作成していない。</p>

島根原子力発電所 2号炉	「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容
<p>(4) ①～④</p> <p>評価対象とする起因事象に対して、炉心損傷防止の緩和に期待しないことか ら、注水や除熱に係る緩和設備のシステム信頼性評価は実施していない。</p> <p>(5)</p> <p>①津波発生後の混乱に伴う高ストレスが運転員操作を阻害することが考えられ るが、評価対象とする起因事象について炉心損傷防止の緩和に期待しないこと から、人的過誤を考慮していない。</p> <p>(6)</p> <p>①炉心損傷頻度の定量化には、内部事象と同様にWinNUPRAを用いた。 ②前述のとおりの手順でモデルを定量化し、津波高さ別の炉心損傷頻度、事故シ ーケンスグループ別の炉心損傷頻度を算出し、主要な事故シーケンスを確認し た。</p> <p>なお、津波レベル1.5PRAは今回実施しないため、プラント損傷状態別の 分析評価は行っていない。</p> <p>③確率論的津波ハザードの不確かさを考慮し、信頼度別津波ハザードを用いて、 モンテカルロ法による不確かさ解析を行った。重要度解析については、評価対 象となる津波高さ（EL20m超過）では緩和手段が無くなり必ず炉心損傷に至 ることから、重要度解析を実施しても有用な情報は得られないと判断し、実施 していない。また、本評価では、EL20mを超える津波により防波壁をはじめと した複数の浸水防止対策及び緩和機能が同時に喪失するものとしている。感度 解析で更に厳しいプラント状態を想定する、あるいは、一部の施設が復旧する 等を仮定することは本評価の想定上、現実的ではなく、新たな事故シーケンス</p>	<p>(3) 事故シーケンス</p> <p>① イベントツリー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ イベントツリー図</li> <li>・ ヘディング、事故進展及び最終状態</li> <li>・ イベントツリー作成上の主要な仮定</li> </ul> <p>(4) システム信頼性</p> <p>① 評価対象としたシステムとその説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 評価対象システム一覧</li> <li>・ 系統図、必要とするサポート系、試験、システム信頼性評価上の主要な仮定</li> <li>・ B及びCクラス機器の取扱い</li> </ul> <p>② 機器損傷に関する機器間の相関の取扱い</p> <p>③ システム信頼性評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 起因事象ごとのシステム信頼性評価結果</li> <li>・ 主要なミニマルカットセット（FTを用いた場合）</li> </ul> <p>④ システム信頼性評価を実施せずに設定した非信頼度とその根拠</p> <p>(5) 人的過誤</p> <p>① 評価対象とした人的過誤及び評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人的過誤の評価に用いた手法</li> <li>・ 人的過誤の分類、人的操作に対する許容時間、過誤回復の取扱い</li> <li>・ 人的過誤評価用いた主要な仮定</li> <li>・ 人的過誤評価結果</li> </ul> <p>(6) 炉心損傷頻度</p> <p>① 炉心損傷頻度の算出に用いた方法</p>

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p>	<p>島根原子力発電所2号炉</p>
<p>② 炉心損傷頻度結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全炉心損傷頻度及び主要な事故シナシケンスと分析</li> <li>・ 起因事象別の炉心損傷頻度及び主要な事故シナシケンスと分析</li> <li>・ プラント損傷状態別炉心損傷頻度及び主要な事故シナシケンスと分析</li> </ul> <p>③ 重要度解析、不確実さ解析及び感度解析</p>	<p>抽出の観点で有用な情報が得られないと判断したため、感度解析は実施していない。</p>

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p>	<p>島根原子力発電所2号炉</p>
<p>4. レベル1. 5 PRA</p> <p>4. 1 内部事象</p> <p>a. プラントの構成・特性</p> <p>① 対象プラントに関する説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 機器・系統配置、形状・設備容量、事故への対処操作、燃料及びデブリの移動経路など</li> </ul>	<p>① 対象プラントの機器・系統配置、形状・設備容量、事故への対処操作、燃料及び溶融炉心の移動経路などを整理した。</p>
<p>b. プラント損傷状態の分類及び発生頻度</p> <p>① プラント損傷状態の一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ プラント損傷状態の考え方</li> <li>・ プラント損傷状態の一覧</li> <li>・ レベル1の事故シナリオに対するプラント損傷状態の分類結果</li> <li>・ レベル1結果との関係（レベル1の最終状態と分類が異なる場合）</li> </ul> <p>② プラント損傷状態ごとの発生頻度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ プラント損傷状態ごとの発生頻度</li> </ul>	<p>① 内部事象運転時レベル1 PRAで得られた炉心損傷に至るすべての事故シナリオを事故の進展及び事故の緩和操作の類似性からプラント損傷状態に分類し、一覧表で示した。</p> <p>なお、内部事象運転時レベル1.5 PRAでは内部事象運転時レベル1 PRAで得られた炉心損傷に至る事故シナリオグループを上記の考え方に基き分類し、格納容器イベントツリーの初期状態とした。</p> <p>② プラント損傷状態ごとの炉心損傷頻度を表に整理した。</p>
<p>c. 格納容器破損モード</p> <p>① 格納容器破損モードの一覧と各破損モードに関する説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 格納容器破損モード分類の考え方</li> <li>・ 格納容器破損モードの一覧</li> <li>・ 各破損モードに関する説明</li> </ul>	<p>① 事故進展に伴い生じる格納容器の健全性に影響を及ぼす負荷から整理される物理的破損事象に加え、格納容器バイパス事象及び格納容器隔離失敗事象も考慮して、格納容器破損モードを分析し、概要とともに示した。</p> <p>また、分析した格納容器破損モードを、炉心損傷以前に破損する格納容器先行破損と、炉心損傷後の格納容器破損に分類し、本プラントにおいて発生する可能性があるとして選定した格納容器破損モードを整理した。</p>



「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>d. 事故シナリオ</p> <p>① 格納容器イベントツリー構築の考え方及びプロセス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・格納容器イベントツリー構築の考え方</li> <li>・格納容器イベントツリー構築のプロセスの説明</li> </ul> <p>② 格納容器イベントツリー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・格納容器イベントツリーを構築するに当たって検討した、重要な物理化学現象、対処設備の作動・不動作、運転員操作（レベル1との整合性を含む）、ヘディング間の従属性</li> <li>・格納容器イベントツリー</li> <li>・格納容器イベントツリーの最終状態への健全な場合も含めた格納容器破損モードの割り付け結果</li> </ul>	<p>①～②</p> <p>プラント損傷状態ごとに、原子炉停止系、炉心冷却系、崩壊熱除去系等の緩和設備の動作状態及び物理化学現象の発生状態から格納容器イベントツリーのヘディングを選定した。選定したヘディングについて、ヘディング間の従属性を考慮して順序付けし、格納容器イベントツリーを作成した。格納容器イベントツリーの最終状態へ格納容器破損モードを割り付けた結果を併せて示した。</p>
<p>e. 事故進展解析</p> <p>① 解析対象とした事故シナリオと対象事故シナリオの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事故シナリオ選定の考え方</li> <li>・事故進展解析の解析条件</li> <li>・解析対象とした事故シナリオ一覧</li> <li>・対象事故シナリオの説明</li> <li>・有効性評価の対象シナリオとして選定した場合はその選定理由</li> </ul> <p>② 事故シナリオの解析結果</p>	<p>① 事故進展解析の対象は、事故時緩和操作の余裕時間が厳しくなる事故進展の相対的に速いシナリオを考慮して選定を行った。選定した事故シナリオについて概要を示した。</p> <p>② 選定した事故シナリオに対し、プラントの熱水力挙動を解析した結果と併せて、各事故シナリオの解析結果における特徴的な事故進展を記載した。</p>
<p>f. 格納容器破損頻度</p> <p>① 格納容器破損頻度の評価方法</p> <p>② 格納容器イベントツリーヘディングの分岐確率</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分岐確率の算出方法</li> <li>・格納容器イベントツリーヘディングの分岐確率</li> </ul>	<p>① 格納容器破損頻度の定量化は、WinNUPRAを使用し、炉心損傷頻度、格納容器イベントツリーのヘディングに対する分岐確率を入力条件として、プラント損傷状態ごとの格納容器破損頻度を算出した。</p> <p>② 各ヘディングの分岐確率については、MAAPコードによる事故進展解析結果</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>③ 格納容器破損頻度の評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全格納容器破損頻度及び主要事故シケケンスと分析</li> <li>・ 起因事象別格納容器破損頻度及び主要事故シケケンスと分析</li> <li>・ 破損モード別格納容器破損頻度及び主要事故シケケンスと分析</li> </ul>	<p>及びシビアアクシデントの各物理化学現象に対する研究成果に関する知見等により分岐確率を設定した。</p> <p>③評価結果を整理し、全格納容器破損頻度、プラント損傷状態別格納容器破損頻度、格納容器破損モード別格納容器破損頻度を整理し、主要な事故シケケンスの分析を実施した。</p>
<p>g. 不確実さ解析及び感度解析</p> <p>① 不確実解析結果</p> <p>② 感度解析結果</p>	<p>① P R A 結果の活用目的である格納容器破損モード等の選定に係る格納容器破損頻度の寄与割合の確認に際しての参考として、不確実さ解析を実施した。プラント損傷状態の発生頻度の確率分布及び格納容器イベントツリーのヘデイングの確率分布を入力にして、モンテカルロ法を用いて格納容器破損モード別の格納容器破損頻度の不確実さ解析を実施した。</p> <p>② 格納容器破損頻度を解析するモデル上の仮定について、結果への影響を把握するため、感度解析を実施した。</p>

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p> <p>4. 2 外部事象（地震）</p> <p>a. プラントの構成・特性</p> <p>① 対象プラントに関する説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 機器・系統配置、形状・設備容量、事故への対処操作、燃料及びびデブリの移動経路など</li> <li>・ ウォークダウン実施の有無とウォークダウンの結果</li> </ul> <p>② 地震により格納容器破損に至る事故シナリオ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 格納容器損傷及びその波及的影響のシナリオの分析・選定とスクリーニングの説明</li> <li>・ 事故シナリオと起回事象の分析結果</li> <li>・ 建物・機器リストの作成結果</li> </ul> <p>b. 地震ハザード</p> <p>① 地震ハザード評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新規制基準（地震）にて策定された基準地震動の超過確率の算出に用いた地震ハザード評価に用いた手法</li> </ul> <p>② 地震ハザード評価に当たったの主要な仮定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 震源モデル、地震動伝播モデルの設定と各モデルの設定根拠及び不確実さ要因の分析結果の説明</li> <li>・ 不確実さ要因の分析結果に基づいて作成したロジックツリーの明示とロジックツリーの各分岐において設定した重みの根拠の説明</li> </ul> <p>③ 地震ハザード評価結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作成したロジックツリーを用いた地震ハザード曲線群の算出と、地震ハザード曲線群から求めた信頼度別ハザード曲線や平均ハザード曲線の説</li> </ul>	<p>島根原子力発電所2号炉</p> <p>地震レベル1.5PRAについては、以下の理由により実施は困難な段階である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学会標準に一部手順が示されているのみであり、標準的なPRA手法が確立されていない。</li> <li>・ 原子炉格納容器や原子炉建物等が地震動によって直接損傷することが考えられるが、これらの損傷評価に関して、現時点では損傷箇所、損傷モード等を詳細に評価する知見がないことから、地震レベル1.5PRAの実施に向けた検討を始めたところである。</li> </ul> <p>なお、炉心損傷後の原子炉格納容器内の物理化学現象の進展は、地震及び津波等の外部事象起因であっても内部事象と同等と考えられ、格納容器破損モードは内部事象と同等と考えている。</p>
<p>同上</p>	

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p>	<p>島根原子力発電所2号炉</p>
<p>明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地震ハザード評価結果に基づくフラジリティ評価用地震動の作成方法の説明</li> </ul> <p>c. 建屋・機器のフラジリティ</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 評価対象と損傷モードの設定</li> <li>② フラジリティの評価方法の選択</li> <li>③ フラジリティ評価上の主要な仮定（不確かさの設定、応答係数等）</li> <li>④ フラジリティ評価における耐力情報 <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価部位、損傷モード及びその耐力値と確率分布</li> <li>・評価部位の材料と温度【構造損傷の場合】</li> <li>・機能限界値の諸元【機能損傷の場合】</li> </ul> </li> <li>⑤ フラジリティ評価における応答情報 <ul style="list-style-type: none"> <li>・評価部位、損傷モード及びその応答値と確率分布</li> <li>・基準地震動による地震力で発生する評価部位の応答とその他の荷重条件による評価部位の応答の内訳【構造損傷の場合】</li> <li>・基準地震動による地震力で発生する評価部位の応答【機能損傷の場合】</li> </ul> </li> <li>⑥ 建物・機器のフラジリティ評価結果</li> </ol> <p>d. プラント損傷状態の分類及び発生頻度</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① プラント損傷状態の一覧 <ul style="list-style-type: none"> <li>・プラント損傷状態の考え方</li> <li>・プラント損傷状態の一覧</li> <li>・レベル1の事故シナリオに対するプラント損傷状態の分類結果</li> <li>・レベル1結果との関係（レベル1の最終状態と分類が異なる場合）</li> </ul> </li> <li>② プラント損傷状態ごとの発生頻度</li> </ol>	<p>同上</p>
	<p>同上</p>

「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容	島根原子力発電所2号炉
<p>e. 格納容器破損モード</p> <p>① 格納容器破損モードの一覧と各破損モードに関する説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・格納容器破損モード分類の考え方</li> <li>・格納容器破損モードの一覧</li> <li>・各破損モードに関する説明</li> </ul>	同上
<p>f. 事故シナリオ</p> <p>① 格納容器イベントツリー構築の考え方及びプロセス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・格納容器イベントツリー構築の考え方</li> <li>・格納容器イベントツリー構築のプロセスの説明</li> </ul> <p>② 格納容器イベントツリー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・格納容器イベントツリーを構築するに当たって検討した、重要な物理化学現象、対処設備の作動・不動作（レベル1との整合性を含む）、運転員操作、ヘディング間の従属性</li> <li>・格納容器イベントツリー</li> <li>・格納容器イベントツリーの最終状態への健全な場合も含めた格納容器破損モードの割り付け</li> </ul>	同上
<p>g. 事故進展解析</p> <p>① 解析対象とした事故シナリオと対象事故シナリオの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事故シナリオ選定の考え方</li> <li>・選定した事故シナリオと説明</li> <li>・事故進展解析の解析条件</li> <li>・有効性評価の対象シナリオとして選定した場合はその選定理由</li> </ul> <p>② 事故シナリオの解析結果</p>	同上

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p> <p>h. 格納容器破損頻度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 格納容器破損頻度の評価方法</li> <li>② 格納容器イベントツリーヘディングの分岐確率 <ul style="list-style-type: none"> <li>・分岐確率の算出方法</li> <li>・使用した分岐確率</li> </ul> </li> <li>③ 格納容器破損頻度の評価結果 <ul style="list-style-type: none"> <li>・全格納容器破損頻度及び主要事故シナケンスと分析</li> <li>・起因事象別格納容器破損頻度及び主要事故シナケンスと分析</li> <li>・破損モード別格納容器破損頻度及び主要事故シナケンスと分析</li> </ul> </li> </ul> <p>i. 不確かさ解析及び感度解析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 不確か解析結果</li> <li>② 感度解析結果</li> </ul>	<p>島根原子力発電所2号炉</p> <p>同上</p>
<p>同上</p>	<p>同上</p>

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p> <p>5. その他</p> <p>a. 専門家判断</p> <p>① 専門家判断を用いた事項と専門家判断の結果</p> <p>② 専門家判断の導出のプロセス</p>	<p>島根原子力発電所2号炉</p> <p>① 評価上の仮定及び計算が適切になっているかどうかを判断する場合、専門家判断を実施した。</p> <p>② 関連する分野に深い知識や経験を有するものを選任し、専門家判断を実施した。</p>
<p>b. ピアレビュー</p> <p>① ピアレビューチーム及びメンバー構成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 海外の専門家も含めたメンバーであること</li> </ul> <p>② ピアレビューの手順</p> <p>③ ピアレビューの結果</p> <p>④ ピアレビュー結果のPRAへの反映状況</p>	<p>① レビューアの選定に当たっては、専門性、経験、独立性及び公正性の4つの要素を考慮して選定している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今回実施したレビュー実施方法を含めPRA全般を俯瞰した視点から改善事項を抽出する観点でPRAの経験豊富な海外レビューアを招聘し、米国でのPRA実施状況との比較に基づく助言を得ることとした。</li> </ul> <p>② オンサイトレビューを効率的・効果的に実施するために、各レビューアに事前にPRAの概要資料を提出し、全体の内容把握及びオンサイトレビューにおいて重点的に内容を確認する項目の抽出・整理する期間を設けた。オンサイトレビューに際しては適宜PRA実施者と質疑応答を行い、具体的な内容・課題を共有しながら進めた。</p> <p>③ 学会標準への不適合や評価手法に問題があるとされる「指摘事項」は0件であり、今回実施したPRAの評価結果に影響を及ぼすような技術的な問題点がないことが確認された。また、システム解析及び文書化に関して良好事例が挙げられた。</p> <p>④ PRAの更なる品質向上に資すると考えられる「推奨事項」として起因現象発生頻度の設定方法等に関するコメントを受領しており、評価手法の見直し等を含めて今後の対応を検討していく。</p>

<p>「PRAの説明における参照事項（平成25年9月 原子力規制庁）」の記載内容</p>	<p>島根原子力発電所2号炉</p>
<p>c. 品質保証</p> <p>① PRAを実施するに当たって行った品質保証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• PRAの実施体制</li> <li>• 更新、記録管理体制</li> </ul>	<p>①品質保証活動に基づく社内基準に従ってPRAを実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 実施に当たってはPRAを含む関連分野に深い知識、経験を有する者を選定した。また、解析をメーカー委託する場合は社内基準に基づき適切に実施している。</li> <li>• 文書化、記録等の管理体制及び管理方法は社内基準に従って適切に行っている。</li> </ul>